熊本県文化財調査報告第 271 集

Nihongi Site(Kasuga Area)5
No.6 No.14

二本木遺跡群（春日地区）5
第６次・第14次調査

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（本文編）　－

2012
熊本県教育委員会

二本木遺跡群（春日地区）５

第６次・第14次調査

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　－

本文編

２０１２

熊 本 県 教 育 委 員 会

序　文

本書は、九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。この発掘調査は平成１８年度より開始し、通算２年をかけて調査を実施しました。

平成２３年３月の新幹線開業を経て、熊本駅周辺ではますます再開発が進み、景観は日々変貌を遂げています。風景が変化していくなかで、私たちが現在の礎となっている先人たちの築いた歴史に目を向け、未来に継承していくことは、魅力あるまちづくりにおいて他に替えがたい柱の一つとなることでしょう。

本書が学術のみならず、学校教育や生涯学習など、幅広く活用され、さらにそれが県土の発展、魅力ある街づくりへと繋がることを切に希望します。

最後になりましたが、本事業において埋蔵文化財発掘調査に御理解を頂きました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、熊本市教育委員会を始め、関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成２４年３月２３日

熊本県教育長　山本隆生

二本木遺跡群（春日地区）5
第６次・第14次発掘調査報告

― 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

目　次

第１章　序　言

１　調査に至る経緯 …… 1
２　事前照会と予備調査の経緯 …… 1
３　調査組織 …… 3
４　整理組織 …… 3
５　調査区内における鉛汚染土壌に関する協議 …… 6

第２章　調　査

１　調査地域 …… 9
（１）遺跡の位置 …… 9
（２）歴史的背景 …… 9
（３）既往の調査 …… 9
（４）測量 …… 9
（５）地区割り …… 11
（６）その他 …… 12
コラム１　周辺の遺跡　万日山古墳群 …… 13
２　発掘作業の経過　調査日誌 …… 16
３　第14次発掘調査日誌 …… 26
コラム２　旧熊本駅出土の遺物 …… 26

第３章　遺　構

１　遺跡の調査 …… 27
２　遺構各説 …… 27
（１）中世（方形区画内及び周辺）の遺構群 …… 27
（２）溝SD群と道路SF …… 47
（３）古代の遺構群 …… 54
３　第14次調査 …… 136
コラム３　旧熊本駅出土の遺物 …… 138

第４章　自然科学分析調査報告 …… 139

第５章　調査の結果 …… 174

報告書抄録 …… 223
奥付

図版編目次

遺物
写真

挿図目次（Fig）

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡
Fig.2　二本木遺跡群第 6 次調査区内土壌汚染地域範囲図
Fig.3　二本木遺跡群ブロック設定図
Fig.4　調査区 Grid 設定図
Fig.5　調査区位置図
Fig.6　周辺の既往の調査区
Fig.7　万日山古墳石室実測図（乙益 1969 実測図を再トレース）
Fig.8　二本木遺跡群周辺遺跡地図
Fig.9　方形区画内溝配置図、実測図
Fig.10　方形区画内 門跡 SX001 実測図
Fig.11　方形区画内遺構配置図
Fig.12　方形区画内 SA001 実測図
Fig.13　方形区画内 SA002・SA003 実測図
Fig.14　方形区画内 SA006 実測図
Fig.15　方形区画内 SA007・SA008 実測図
Fig.16　方形区画内 SB001 実測図
Fig.17　方形区画内 SB002 実測図
Fig.18　方形区画内 SB003 実測図
Fig.19　方形区画内 SB004 実測図
Fig.20　方形区画内 SB005（上）・SB012（下）実測図
Fig.21　方形区画内 SB006 実測図
Fig.22　方形区画内 SB007（上）・SB008（下）実測図
Fig.23　方形区画内 SB009・SB013（下）実測図
Fig.24　方形区画内 SB011 実測図
Fig.25　方形区画内井戸遺構配置図
Fig.26　方形区画内 SE001 実測図
Fig.27　方形区画内 SE002 実測図
Fig.28　方形区画内 SE003（上）・SE004（下）実測図
Fig.29　調査区溝遺構配置図
Fig.30　SF001、SD 遺構配置図
Fig.31　SD100・SD096・SD097 方形区画溝（推定）遺構配置図
Fig.32　SD020 ～ SD023・SD033 ～ SD036・SD099・SD101 遺構配置図
Fig.33　村落内寺院（熊本市）周辺遺構配置図
Fig.34　SD025 遺物出土状況実測図
Fig.35　古代 SA011・SA012、SB014 ～ SB018 遺構配置図
Fig.36　SB014 実測図
Fig.37　SB015 実測図
Fig.38　SB016 実測図
Fig.39　SB017 実測図
Fig.40　SB018 実測図
Fig.41　SE007 ～ SE016 遺構配置図
Fig.42　SE007（上）・SE009（下）実測図
Fig.43　SE011 実測図
Fig.44　SI003 ～ SI023 遺構配置図
Fig.45　SI003・SI004・SI005 実測図
Fig.46　SI007 実測図
Fig.47　SI012・SI013（上）、SI015(下）実測図
Fig.48　SI017・SI019 実測図
Fig.49　SI022 実測図
Fig.50　SI023 実測図
Fig.51　SB019・SB020 遺構配置図
Fig.52　SB019 実測図
Fig.53　SB020 実測図
Fig.54　SE017 ～ SE023 遺構配置図
Fig.55　SE017（上）・SE018（左下）・SE019（右下）実測図
Fig.56　SE020（左）・SE022（右）実測図
Fig.57　SI024 ～ SI034 遺構配置図
Fig.58　SI026・SI027・SI028 実測図
Fig.59　SI032 実測図
Fig.60　SA013 ～ SA016、SB021 ～ SB025 遺構配置図
Fig.61　SB021 実測図
Fig.62　SB022 実測図
Fig.63　SB023 実測図
Fig.64　SB024（上）・SB025（下）実測図
Fig.65　SE024 ～ SE034 遺構配置図
Fig.66　SE024（左）・SE026（右）実測図
Fig.67　SE027（左）・SE031（右）実測図
Fig.68　SE028・SE029 実測図
Fig.69　SE032 実測図
Fig.70　SE033 実測図
Fig.71　SI035 ～ SI060 遺構配置図
Fig.72　SI036・SI037 実測図
Fig.73　SI040 ～ SI043 実測図
Fig.74　SI045 実測図
Fig.75　SI046・SI047 実測図
Fig.76　SI048 ～ SI050 実測図
Fig.77　SA017・SA018、SB026 ～ SB029 遺構配置図
Fig.78　SB026 実測図
Fig.79　SB027 実測図
Fig.80　SB028（上）・SB029（下）実測図
Fig.81　SE035 ～ SE041 遺構配置図
Fig.82　SE035 実測図
Fig.83　SE036 実測図
Fig.84　SE037（上）・SE038（下）実測図
Fig.85　SE039（左上）・SE040（右上）・SE041（下）実測図
Fig.86　SI061 ～ SI074 遺構配置図
Fig.87　SI061（上）・SI062（下）実測図
Fig.88　SI063 実測図
Fig.89　SI064 実測図
Fig.90　SI065（上）・SI066（下）実測図
Fig.91　SA006・SA007、SB030 ～ SB033 SE042 ～ SE053 遺構配置図
Fig.92　SB030 実測図
Fig.93　SB031（上）・SB033（下）実測図
Fig.94　SB032 実測図
Fig.95　SE042 実測図
Fig.96　SE043・SE044・SE045 実測図
Fig.96　SE043・SE044・SE045 実測図
Fig.97　SE046 実測図

挿図目次（Fig）

Fig.98　SE047（上）・SE049（下）実測図
Fig.99　SE050（左）・SE051（右）実測図
Fig.100 SE052（左）・SE053（右）実測図
Fig.101 SI075 ～ SI118 遺構配置図
Fig.102 SI086 実測図
Fig.103 SI087・SI088・SI089 実測図
Fig.104 SI092 ～ SI095 実測図
Fig.105 SI101・SI102 実測図
Fig.106 SI104 実測図
Fig.107 SI111 ～ SI114 実測図
Fig.108 ST001 ～ ST006、SK020 遺構配置図
Fig.109 ST003 実測図
Fig.110 ST005・ST006（下）実測図
Fig.111 SK020 実測図
Fig.112 防空壕 SX002 実測図
Fig.113 二本木遺跡群第 14 次調査区遺構、土層実測図
Fig.114 瓦出土分布図
Fig.115 座標測点（No.1 ～ No.3) 図

表目次（Tab）

Tab.1　確認調査結果報告
Tab.2　九州新幹線新八代―博多間建設工事に伴う熊本市内埋蔵文化財発掘調査一覧
Tab.3　調査区内基準点測量成果
Tab.4　遺跡地名表
Tab.5　出土遺物観察表―①
Tab.6　出土遺物観察表―②
Tab.7　出土遺物観察表―③
Tab.8　出土遺物観察表―④
Tab.9　出土遺物観察表―⑤
Tab.10　出土遺物観察表―⑥
Tab.11　出土遺物観察表―⑦
Tab.12　出土遺物観察表―⑧
Tab.13　出土遺物観察表―⑨
Tab.14　出土遺物観察表―⑩
Tab.15　出土遺物観察表―⑪
Tab.16　出土遺物観察表―⑫
Tab.17　出土遺物観察表―⑬
Tab.18　出土遺物観察表―⑭
Tab.19　出土遺物観察表―⑮
Tab.20　出土遺物（緑釉）観察表
Tab.21　出土遺物（陶磁器）観察表 - ①
Tab.22　出土遺物（陶磁器）観察表 - ②
Tab.23　出土遺物（製塩土器）観察表
Tab.24　出土遺物（鉄製品）観察表
Tab.25　出土遺物（銅製品）観察表
Tab.26　出土遺物（鞴の羽口）観察表
Tab.27　出土遺物（土製品）観察表
Tab.28　出土遺物（縄文土器）観察表
Tab.29　出土遺物（石製品）観察表
Tab.30　出土遺物（瓦）観察表
Tab.31　出土遺物観察表（写真のみ）- ①
Tab.32　出土遺物観察表（写真のみ）- ②
Tab.33　出土遺物観察表（写真のみ）- ③
Tab.34　出土遺物観察表（写真のみ）- ④
Tab.35　出土遺物観察表（写真のみ）- ⑤
Tab.36　出土遺物観察表（写真のみ）- ⑥
Tab.37　第 14 次出土遺物観察表

二本木遺跡群（春日地区）5
第６次・第 14 次発掘調査報告

－　九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　－

第１章　序　言

本書は、九州新幹線建設工事に伴い平成 17 年 11 月７日から平成 18 年 12 月 26 日まで熊本県熊本市春日三丁目で実施した『二本木遺跡群（春日地区）5　第６次・第 14 次』での発掘調査成果をとりまとめたものである。

１　調査に至る経緯

（事業計画の概要）

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大ならびに地域の振興を図る目的で「全国新幹線鉄道整備法（昭和 45 年５月 18 日法律第 71 号　最終改正平成 14 年 12 月 18 日）に基づき計画が策定され、1972 年に告示された改正基本計画に盛り込まれた５線（整備新幹線と呼ばれるもの）のうちの一つである。同ルートでは、1991 年に八代 － 西鹿児島（現在の鹿児島中央駅）間が初めて本格着工し、2004 年３月 13 日に新八代駅 － 鹿児島中央駅間がフル規格で部分開業（博多駅 － 新八代駅間は在来線特急「リレーつばめ」で接続）、2011 年３月 12 日に博多駅 － 新八代駅間が開業し、整備計画の決定から 38 年を経て全線で営業運転を開始した。博多駅 － 鹿児島中央駅間を最高速度 260km/h、所要時間最速１時間 19 分で結んでいる。

当遺跡はこの新幹線整備計画に基づき、事業の性格上路線変更等の措置が不可能であると判断されたことから、熊本県教育委員会が JR 熊本駅（在来線）西側に新設される新幹線専用駅予定地の埋蔵文化財について記録保存を目的とし発掘調査を実施したもでのある。

２　事前照会と予備調査の経緯

熊本県内における九州新幹線建設事業への取り組みは、平成４年（1992 年）に日本鉄道建設公団　九州新幹線建設局により八代水俣間の事業計画が示された事により始まった。平成８年（1996 年）には水俣市において「長野遺跡[1]」を確認し、平成９年（1997 年）12 月より発掘調査に着手した。その後、同年、葦北郡津奈木町地内における試掘調査を皮切りに、八代市域を含む地域での新幹線事業への取り組みも本格化した。平成 12 年（2000 年）８月には起点となる八代市において「西片百田遺跡」の調査が始まり、平成 15 年８月の宮地小畑遺跡（側道）の調査をもって新八代−鹿児島中央間の調査は終了した。

その後、工事計画の中心は博多−新八代間へと移り、用地買収の進捗と共に熊本駅周辺、玉名市域へと広がった。八代の調査が最盛期を迎えている時期に、熊本駅では第一回目の確認調査が実施されており、県内で重要遺跡として知られていた二本木遺跡群が存在することを踏まえ、協議を担当していた職員の当駅周辺での取り組みの早さがその後のスムーズな協議、調査に繋がったと見られる。

新熊本駅調査の協議は、平成 16 年５月 17 日付け鉄運九建用一第 72 号で独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州鉄道建設局[2]長（以下、「鉄道・運輸機構」という。）より依頼があり、確認調査に入る準備が整い次第実施した平成 17 年８月 10 日付け教文第 1251 号で熊本県教育長名で回答した確認調査結果をきっかけに急速に進展した。同年９月 15 日には県新幹線都市整備総室の主催で、県駅周辺整備事務所、JR 九州、鉄道・運輸機構とで「新熊本駅舎建設工事他における埋蔵文化財協議」が持たれた。その結果、埋蔵文化財調査後から開業までのスケジュールをもとに逆算すると早急な着手が必要と判断された。本事業が、熊本県にとっても当時最優先施策であったことから 11 月には調査に着手することとなった。調査にかかる費用につ

1　熊本県教育委員会『長野遺跡』熊本県文化財調査報告第 189 集 2000 年

2　独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構は政府の特殊法人改革の一環として、1966 年 12 月に発足した船舶整備公団と 1991 年 10 月に発足した鉄道整備基金が 1997 年 10 月に統合されて運輸施設整備事業団となり、これに 1964 年３月に発足した日本鉄道建設公団が 2003 年 10 月１日に統合され、鉄道建設・運輸施設整備支援機構となった。鉄道交通と海上交通に関する事業を行ってきた３つの特殊法人を統合した機関である。

いては、当時の協議担当者が前年度段階で鉄道・運輸機構と協議のうえ概算で計上してあり、調査を実施した際の費用の増減についても協議が整っていたことから調査に着手する運びとなった。その後、各機関とも埋蔵文化財発掘調査を始めるにあたっての条件整備に奔走し、事務所用地の選定、設置、調査に伴う排土置場の確保、JR 営業線隣接地での近接工事関連の協議、調査員・作業員の駐車場用地選定等を経て調査に着手する条件は整い、最後に鉄道・運輸機構から新熊本駅建設に伴う埋蔵文化財調査依頼が、平成 17 年 10 月 7 日付け鉄運九建用一 239 号で鉄道・運輸機構九州新幹線建設局長名で提出された。

（確認調査の結果報告）

当該工事予定地は、平成 13 年に確認調査に着手し、最終的に５回の予備調査を実施している。期日及び担当者は以下のとおり。

	実施日	依頼文書番号・日付	回答文書番号・日付	担当者
①	H13.7.30・31	―	H13.10.31　教文第 1609 号	高谷和生
②	H16.8.23	―	―	坂口圭太郎・今村和徳
③	H17.10.13	H16.5.17　鉄運九建用一第 72 号	H17.11.11　教文第 2062 号	坂口圭太郎・今村和徳
④	H17.10.13	H17.4.12　鉄運九建用一第 34 号	H17.11.11　教文第 2063 号	坂口圭太郎・今村和徳
⑤	H17.6.6・7	H16.5.17　鉄運九建用一第 72 号	H17, 8.10　教文第 1251 号	長谷部善一・吉田徹也

Tab.1　確認調査結果報告

当該工事予定地における確認調査は、平成 13 年 10 月 31 日付け教文第 1609 号で、北岡陸橋から春日地下道の北側において実施された。３層で近世後期陶磁器に古代の土師器片が混入するとして、近世期に大規模な土地の改変が行われたとする結果を出している。また、今回調査を実施した調査区内で土師器 30 数点を確認するなどしたことから、引き続き確認調査が必要な旨を鉄道・運輸機構宛てに通知している。平成 16 年・平成 17 年に第２回・第３回の確認調査が実施され、新幹線距離程を示す BCC=0km253m から旧機関車転車台、JR 熊本運転所熊本車掌区ビル前を経て田崎陸橋手前まで実施し、田崎陸橋近くで弥生時代の集落の一角と見られる「二本木遺跡群（田崎地区）」を確認している。この時点では予備調査依頼のあった範囲の一部が JR 営業線内であったことや取り壊し前の建物が多数あったことから十分な確認調査を実施できず関係機関から結果を求められたことで、不十分な確認調査となった。熊本機関車庫の取り壊しが始まった平成 17 年には今回の調査の契機となる５回目の確認調査を実施し、これまでの確認調査結果と合わせ、北は春日陸橋から南は新幹線距離程を示す BCC=0km253m までの 12,700 ㎡を確定した。

3　調査組織

【発掘調査】

調査期間　平成 17 年（2005 年）11 月 7 日～平成 18 年（2006 年）12 月 26 日

平成 17 年度	調査責任者	文化課長		梶尾英二
	調査総括	課長補佐		倉岡　博
	調査指導	課長補佐（文化財調査第一係担当）		高木正文
	調査担当者	文化財調査第一係	主任学芸員	長谷部善一
		〃	主任主事	吉田徹也
		〃	非常勤職員	早田利宏・水上　悌
平成 18 年度	調査責任者	文化課長		梶尾英二
	調査総括	課長補佐		倉岡　博
	調査指導	課長補佐（文化財調査第一係担当）		高木正文
	調査担当者	文化財調査第一係	主任学芸員	長谷部善一
		〃	主任主事	吉田徹也
		〃	非常勤職員	早田利宏・吉井英志

4　整理組織

【整理報告作業】

整理期間　平成 22 年（2010 年）11 月 1 日～平成 23 年（2011 年）3 月 31 日

平成 23 年（2011 年）4 月 1 日～平成 24 年（2012 年）3 月 31 日

整理責任者	文化課長		小田信也
整理総括	文化財調査第一係長		村崎孝宏
整理指導	文化財資料室長		坂田和弘
整理担当者	文化財調査第一係	参事	長谷部善一
		非常勤職員	稲葉貴子・唐木ひとみ

整理作業員　石田敦子（班長）　福島典子（副班長）　小早川隆春　塩田喜美子　今崎光成
田中裕子　藤井美智子　溜淵俊子　田熊敏子（以上、一次整理）
土田みどり　岩下恵美子　築出直美（以上、二次整理）

<u>調査指導機関及び調査助言・協力者</u>

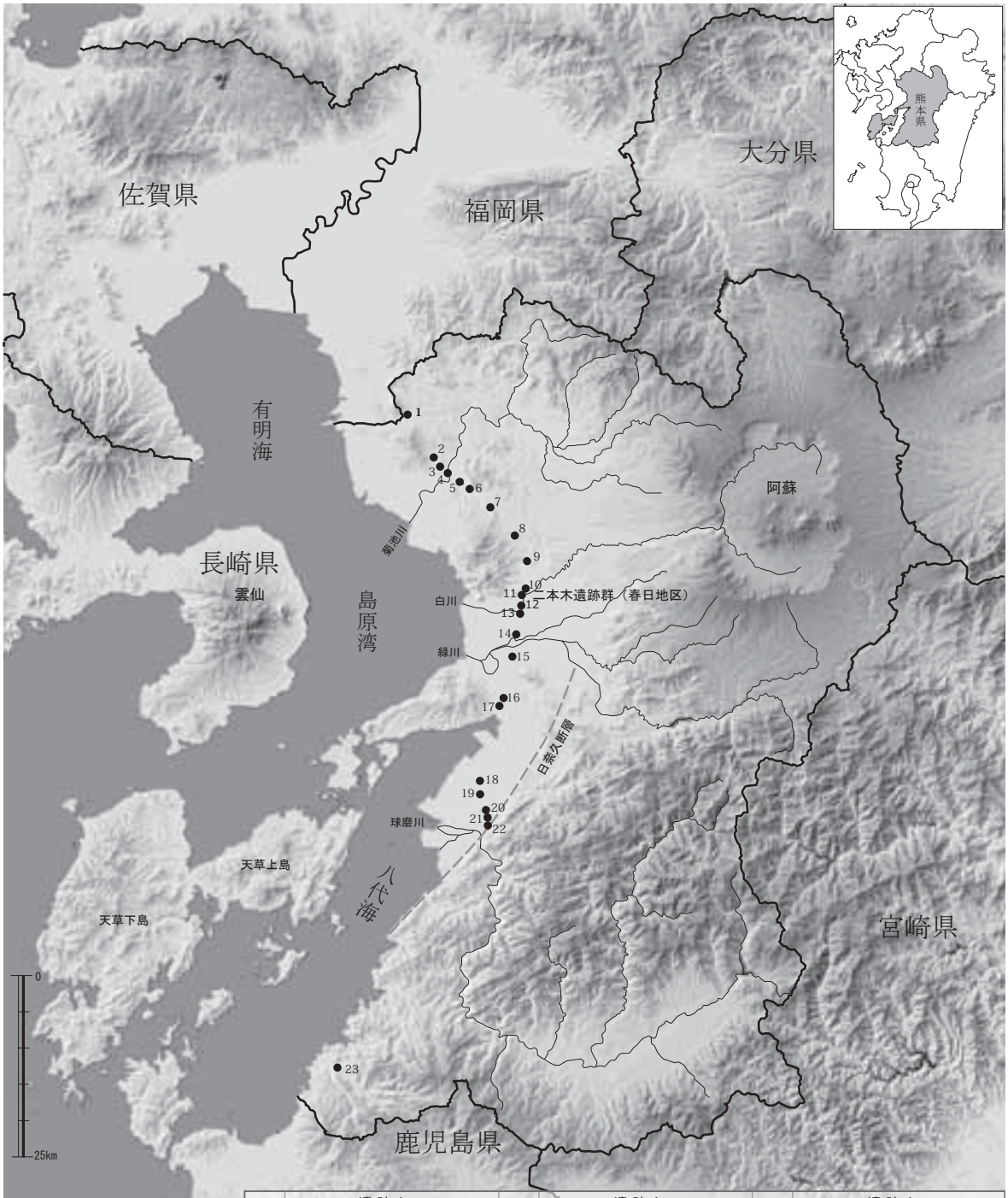
独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所
独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部 九州新幹線建設局
九州旅客鉄道株式会社 熊本鉄道事業部
下関市立土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　八代市立博物館未来の森ミュージアム
熊本県立装飾古墳館
大牟田市教育委員会　みやま市教育委員会　熊本大学
熊本市教育委員会　植木町教育委員会（現 熊本市教委）
玉名市教育委員会　宇土市教育委員会　阿蘇市教育委員会　甲佐町教育委員会

巽 淳一郎　松下孝幸　松下真実　牛嶋 茂　丸山真史　坂井義哉　猿渡真弓
中原幹彦　網田龍生　美濃口雅朗　竹田宏司　金田一精　林田和人　原田範昭
増田直人　藤本貴仁　荒木隆宏　鳥津亮二　西口貴志　西山由美子
宮本利邦　上高原 聡　本田明子　作田清恵
坂口圭太郎　吉田徹也　尾形圭子　松森由美　青木勝士　北原美和子

調査（整理）業務に伴う委託業務受託業者一覧

測量業務		十八測量設計株式会社
遺構実測測量業務		株式会社 九州文化財研究所　株式会社 埋蔵文化財サポートシステム アジア航測（㈱東海アナース）
調査委託業務		大成エンジニアリング株式会社
空中写真撮影業務		写測エンジニアリング株式会社
遺物一次整理業務		株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
遺物実測・デジタルトレース業務		株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
自然科学分析	古人骨	下関市立土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
	獣骨等	株式会社 古環境研究所
遺物撮影及び版下作成業務		写測エンジニアリング株式会社

墓 ST001 人骨調査風景（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　松下孝幸氏）



No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	長山前田遺跡	11	二本木遺跡群（春日地区）	21	西片園田遺跡
2	小園遺跡	12	八島町遺跡		西片稲村遺跡
3	西屋敷遺跡		熊本平野条里跡		中片小路遺跡
4	両迫間日渡遺跡	13	上ノ郷遺跡	22	宮地年神遺跡
5	玉名平野条里跡（古閑前地区）	14	川尻下城遺跡		キリシタン寺院跡
	太郎丸遺跡	15	下江中島遺跡		宮地池尻遺跡
	祭田下遺跡	16	小曽部西園遺跡		宮地小畑遺跡
	瀬萩遺跡		南請遺跡		宮地観行寺遺跡
6	稲佐津留遺跡	17	高良柳迫遺跡		古麓城下遺跡
7	西安寺遺跡	18	四百町開		古麓能寺遺跡
8	万楽寺出口遺跡	19	高田手永堤防		古麓城跡
9	北島遺跡・北島北遺跡	20	島田遺跡	23	長野遺跡
10	新馬借遺跡		上日置女夫木遺跡		
	花岡山・万日山遺跡		西片百田遺跡		

Fig.1　熊本県域における地形表記と九州新幹線により発掘調査を実施した遺跡

5　調査区内における鉛汚染土壌に関する協議

平成 18 年（2006 年）１月 10 日（火）

土壌汚染についての説明（JR 九州施設部工事課）

土壌汚染について、調査員及び作業員に対し JR 九州より説明がある。

来年度調査予定地内において、JR が任意に調査を実施した結果、土壌汚染法に定める基準値を超える鉛が一部で検出された。（平成 17 年 12 月 27 日公表）当課の発掘調査の前に当該土壌を除去し、同法で基準値を超えないレベルまで対策を講じるため、発掘には支障がないと説明を受け、了解する。なお、汚染土壌にについては駅敷地内で一旦仮置きし、調査終了後埋め戻す方向で検討しているとのこと。

3 月 27 日（月）

汚染土壌に関する協議について

（JR 九州施設部工事課）

汚染土壌の除去については、熊本市水保全課の指導により、地点ごとに汚染の深度を調査のうえ、当該部分まで除去することとなった。（除去しながら調査を行うと、除去し終えるまでに幾度も調査（検査）しないとならないため。）よって、調査を本日より開始。4/10 ～ 20 までに報告書として市に提出、承認後除去に入るため除去は４月末頃からとなる。

→汚染土壌の分布（位置図）１葉（1/1000）を提出依頼。当方で４月の調査範囲に支障がないか確認することとする。また、汚染土層内で文化財が検出された場合の取り扱いを事前に課内で詰めておくこととする。

５月 22 日（月）

「二本木遺跡群（春日地区）周辺部についての関係機関の業務調整会議」

上記協議の協議の場で、JR 九州施設部より「鉛汚染土除去」について説明。以前、鉄道車輛整備ピット等が存在していたことに伴う鉛汚染土壌の撤去については、現在、新幹線起業地内（当課発掘調査区内）について実施しているが、当該地より西側（熊本市土地区画整理事業地内）については実施していない。

５月 23 日（火）

Ｃ区鉛汚染土壌箇所の除去作業後の状況について

JR 九州による鉛汚染土壌の除去作業がおこなわれたところ、GL から１ｍ下までの汚染土壌の除去後の面で、竪穴建物が３軒、土坑もしくは柱穴跡と推測されるものが数基検出される。当該地が鉛汚染土壌直下であり発掘調査はおこなわない事とした上で立ち合いを実施していたため、遺構の検出状況の写真撮影及び光波による遺構の上端のみの平面取り込みを行う。明日、文化課高木課長補佐の立ち合いを経たのち、JR により埋戻し作業を行う予定。

５月 30 日（火）

鉛汚染土壌除去後の遺構検出、写真撮影及び遺構上端取り込み作業。

６月５日（月）

JR 九州における鉛汚染土壌除去完了

Ｄ区鉛汚染土壌除去（範囲 10 ｍ× 10 ｍ　Ｄ区北端）立ち合いについては、掘削深が当遺跡の平均的な遺構検出面から約 30 ㎝下位まで行われる。検出面までも含めレンガや礫が大量に含まれており完全に撹乱されている状態。遺構は確認されなかった。本日で、同除去作業（新幹線起業地内）はすべて終了した。

上記のような正式な協議の場以外に、現場では随時汚染土除去の手順等について断続的におこない調査の進捗に影響がないように協議を重ねた。

（吉田・長谷部）

Fig.2　二本木遺跡群第６次調査区内土壌汚染地域範囲図

No.	遺跡名	所在地	博多駅からの新幹線距離程	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構等	報告書
1	下江中島遺跡	熊本市富合町古閑 1287-1 ほか 5 筆	107km20m ～ 107km240m	7,107.49 ㎡	H18.12.4 ～ H19.5.31	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 手柴智晴 坂本亜矢子	古墳 古代	自然流路、堰，土坑 掘立柱建物、自然流路、堰	未
2	川尻外城遺跡	熊本市川尻 3 丁目 831 他 6 筆	103km900m ～ 104km60m	1,756.91 ㎡	H18.9.20 ～ H19.3.30	坂口圭太郎 多賀晴司 松森由美 吉留　広	中世 近世	土坑等	未
3	上ノ郷遺跡 (旧．熊本平野条里跡)	熊本市島町 1 丁目 304-1 他 5 筆	100km760m ～ 100km880m	2,000 ㎡	H15.5.21 ～ H16.1.31	今村和徳 和田敏郎 宇田員将 横田光智	弥生中期 弥生中期 古代	甕棺 12 基 土坑墓 6 基 竪穴建物 15 軒 竪穴建物 2 軒 土坑 3 基	①
4	八島町遺跡	熊本市蓮台寺 4 丁目 132-3 他 11 筆	99km400m ～ 99km840m	3,800 ㎡	H15.6.5 ～ H15.10.31	坂口圭太郎 阿南　舞 米村俊治 松野直子 横田光智	弥生後期 古代 中世	竪穴建物 (内向花文鏡 2 面) 土師器、須恵器 —	未
		熊本市蓮台寺 4 丁目 578-8	99km500m	250 ㎡	H16.2.17 ～ H16.3.31				
5	二本木遺跡群 (田崎地区)	熊本市田崎 1 丁目 117 番の 1	連立区間	700 ㎡	H8.1.29 ～ H8.3.25	帆足俊文	縄文 弥生	溝 柱穴	②
6	二本木遺跡群 (田崎地区)	熊本市田崎 1 丁目	連立区間	3,138.42 ㎡	H15.11.27 ～ H16.3.31	宮崎敬士 福永雅美	古代	竪穴建物、井戸、水田遺構、土坑、溝	未
7	二本木遺跡群 (田崎地区)	熊本市田崎 1 丁目	98km980m ～ 99km240m	2,300 ㎡	H17.11.11 ～ H18.8.31	坂口圭太郎 尾方圭子 多賀晴司	弥生 古墳 古代	竪穴建物、掘立柱建物 溝状遺構　ほか — 掘立柱建物　ほか	未
8	二本木遺跡群 (田崎市道切り替え)	熊本市田崎 1 丁目	—	48 ㎡	H19.5.7 ～ H19.6.6	松森由美 水上正孝	弥生後期 古代	— —	未
9	二本木遺跡群 (春日地区) 第 6 次調査	熊本市春日 3 丁目 1015 番地	98km40m ～ 97km280m	12,700 ㎡	H17.11.1 ～ H18.12.26	長谷部善一 吉田徹也 早田利宏 水上　悌 吉井英志	古代 中世 近世	竪穴建物、掘立柱建物 土坑墓、井戸 居館跡 旧．熊本駅遺構	本書
10	二本木遺跡群 (春日地区) 第 14 次調査	熊本市春日 3 丁目		20 ㎡	H22.7.20 ～ H22.8.2	長谷部善一	古代	整地層、柱穴	
11	花岡山・万日山遺跡群	熊本市横手 2 丁目 1183-21 ほか 8 筆	97km220m ～ 97km280m	3,263.54 ㎡	H17.1.21 ～ H18.12.18	坂口圭太郎 遠山　宏	古代	土坑	③
12	新馬借遺跡	熊本市横手 1 丁目 1142 番地ほか 6 筆	96km940m ～ 96km970m	598.83 ㎡	H18.5.30 ～ H18.6.30 H20.1.4 ～ H20.1.31	坂口圭太郎 遠山　宏 檀　佳克	中世	道路状遺構、土坑	
13	北島遺跡群	熊本市池田 4 丁目 519 ほか 11 筆	93km230m ～ 93km480m	3,450 ㎡	H18 .6.15 ～ H19.2.28	今村和徳 横田光智 遠山　宏	弥生 古代	竪穴建物、甕棺ほか 柱穴、土坑ほか	
14	万楽寺出口遺跡	熊本市太郎迫町 474-2 ほか 2 筆	89km440m	964.52 ㎡	H19.5.1 ～ H19.10.30	坂口圭太郎 檀　佳克	縄文晩期 古代	竪穴建物、土坑 掘立柱建物、溝、道路状遺構	

(上記表遺跡No.は右頁、熊本県内一覧図No.と対応しているものではありません。)

(新幹線関連調査報告書は熊本県調査分のみ掲載しています。)

熊本市内新幹線関連既刊報告書

①熊本県教育委員会『上ノ郷遺跡』熊本県文化財調査第 239 集　2007

②熊本県教育委員会『二本木遺跡群』熊本県文化財調査第 174 集　1999

③熊本県教育委員会『花岡山・万日山遺跡群　新馬借遺跡　北島遺跡群　万楽寺出口遺跡』第 266 集　2010

Tab.2　九州新幹線新八代－博多間建設工事に伴う熊本市内埋蔵文化財発掘調査一覧

第２章　調　査

1　調査地域

（1）遺跡の位置

二本木遺跡群（春日地区）は、現在のJR熊本駅を中心とする花岡山、万日山と坪井川に挟まれた扇状地上に位置し標高約８～10mを図る。また、花岡山、万日山の背後には熊本市民のメルクマールとなる腹式火山帯を形成する金峰山が控える。

古代の熊本平野には、大宰府を起点とした官道が整備され、筑後から肥後を抜け大隅に至る南北道を中心に、熊本市内においては、国府を起点に城南町（現　熊本市城南町）を抜け八代、芦北に至るルートと宇土半島を西へ向かい三角（宇城市三角町）に至る道、また阿蘇方面へと延び豊後へと辿るルートもあったことが予想されている。10世紀初頭の『延喜式』には肥後国の駅名の記載があり、その旧跡名称から「蚕養駅」→子飼（現　熊本市子飼）が推定されている。蚕養駅は近年の調査結果から、熊本大学構内にあたると想定されている。この熊本市子飼を通るルート上には所在する託麻台地の一帯に広がる大江遺跡群内で道路状遺構が調査されており、官道の一部と推定されている。この官道から二本木遺跡群は西に約３㎞に位置する。「飽田国府」に推定されている二本木遺跡群へは、大江遺跡群から枝分かれした幹線道があったことも予想される。

（2）歴史的背景

周辺には数多くの周知の埋蔵文化財を含む文化財が多数存在し、熊本市域のなかでも重要な遺跡が集まる地域である。歴史的背景については、近年熊本駅西土地区画整理事業等により熊本市教育委員会が鋭意調査を実施し、数冊に及ぶ調査報告書がまとめられている。近隣の調査を含めて実施されていることから詳細な記述がなされているため、ここでは述べることがない。詳細な歴史的背景については熊本市教育委員会の調査報告書[1]を参考にされたい。

（3）既往の調査（Fig.6）

二本木遺跡群は、過去に乙益重隆により調査が実施された「熊本県熊本駅前の遺跡」[2]がある。その後、熊本市教育委員会による数次にわたる民間調査を経て、新幹線開業に伴う熊本駅西土地区画整理事業が実施されてきた。また、近年では九州新幹線開業に伴い熊本県による熊本駅周辺整備事業が実施され、数次にわたる調査も実施されている。

（4）測量

二本木遺跡群（春日地区）発掘調査（第６次・14次）を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準測量を実施した。基準点は調査の契機となった九州新幹線建設事業に伴い鉄道・運輸機構が設置した日本測地系に基づく国土座標Ⅱ系により設置している。

2002年（平成14年）４月１日から施行された改正測量法に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、本事業における基準点がすべて日本測地系に基づいていることから、熊本県内における埋蔵文化財発掘調査で設置する基準点はすべて日本測地系に基づいている。なお、世界測地系との整合をとるために設置した基準としている杭の数値を日本測地系、世界測地系でそれぞれ示す。

点名	日本測地		世界測地	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標
座標点No.1	-23550	-28920	-23177.7726	-29141.0229
座標点No.2	-23700	-29020	-23327.7745	-29241.0227
座標点No.3	-23850	-29080	-23477.7773	-29301.0229

Tab.3　調査区内基準点測量成果

1　熊本市教育委員会　『二本木遺跡群Ⅲ』－二本木遺跡群第26次調査区発掘調査報告書－　2007年３月　ほか

2　熊本市教育委員会「春日遺跡」『熊本市中央南地区文化財調査報告書』1978

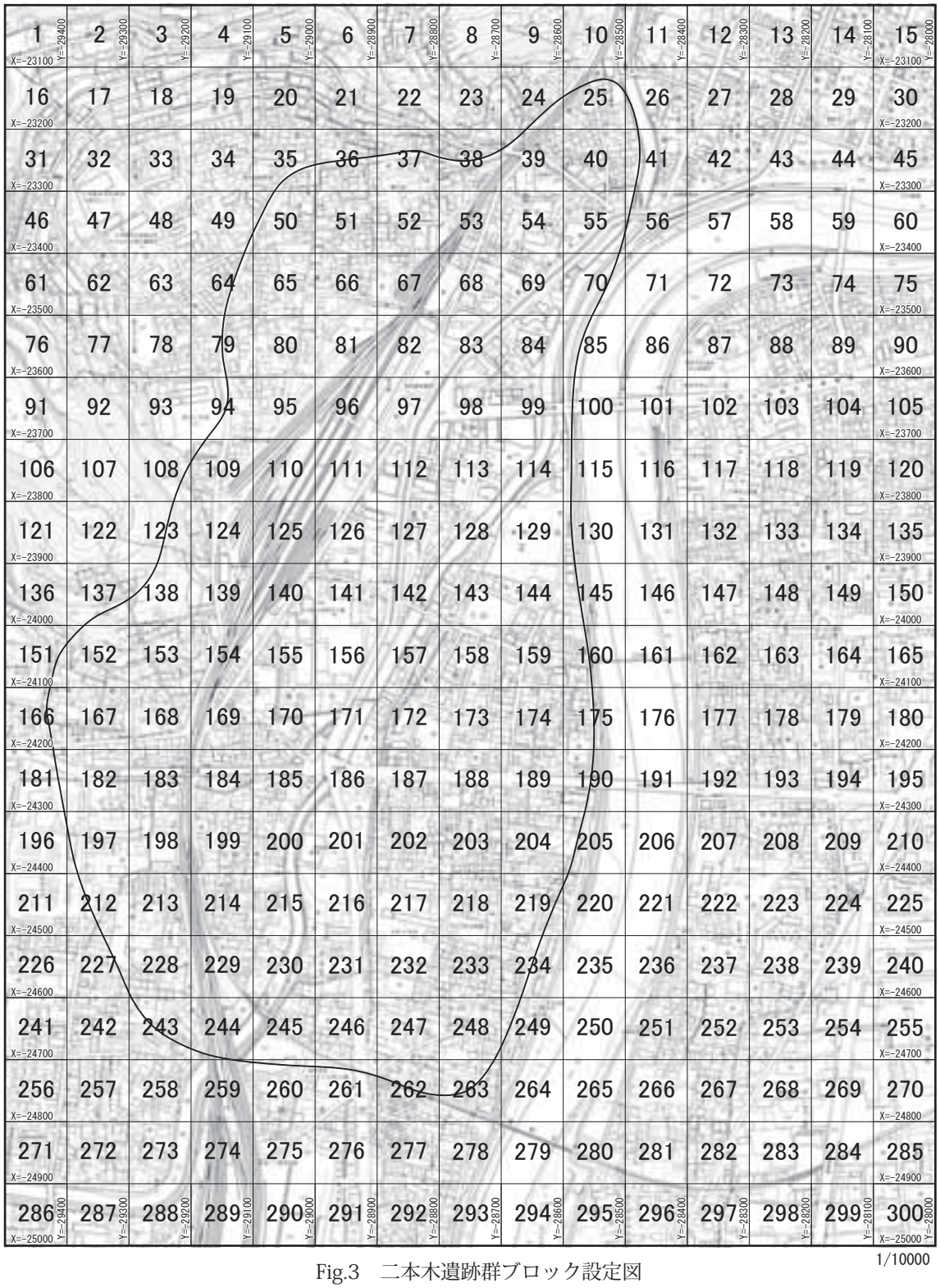


Fig.3　二本木遺跡群ブロック設定図

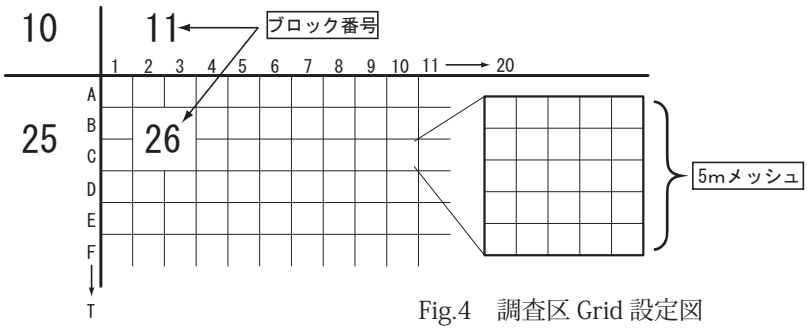


Fig.4　調査区 Grid 設定図

（5）地区割り

二本木遺跡群調査については、本調査区と隣接する熊本駅西土地区画整理事業が本格化する際に今後増大することが予想される二本木遺跡群の調査の整合性を図ることを目的とし、X=－23000、Y=－29500を基点とし、遺跡全域を包括する東西1.5㎞、南北2.0㎞の範囲を1辺100mの方形区画を区切り、これを1単位とするブロックとした。各ブロックに対しては算用数字による番号を付し、北西隅を基点とし西から東へ1～15、さらに南の一列は西から16～30とし、この繰り返しにより二本木遺跡群全域に対して1～300ブロックを配した。各ブロック内は、5m×5mのグリッド（Grid）で位置を管理する。したがって、各ブロック内は、南北20×東西20の400グリッドに細分される。グリッドについては各ブロックにおける北西隅を基点とし、北から南へA→T、西から東へ1→20とした。これによりグリッドは1A－1～300T-20で表記される。

二本木遺跡群（春日地区）第6次調査区は、66・67・81・95・96・110・111・125ブロックにかけて所在し、第14次調査区は125ブロックに所在する。

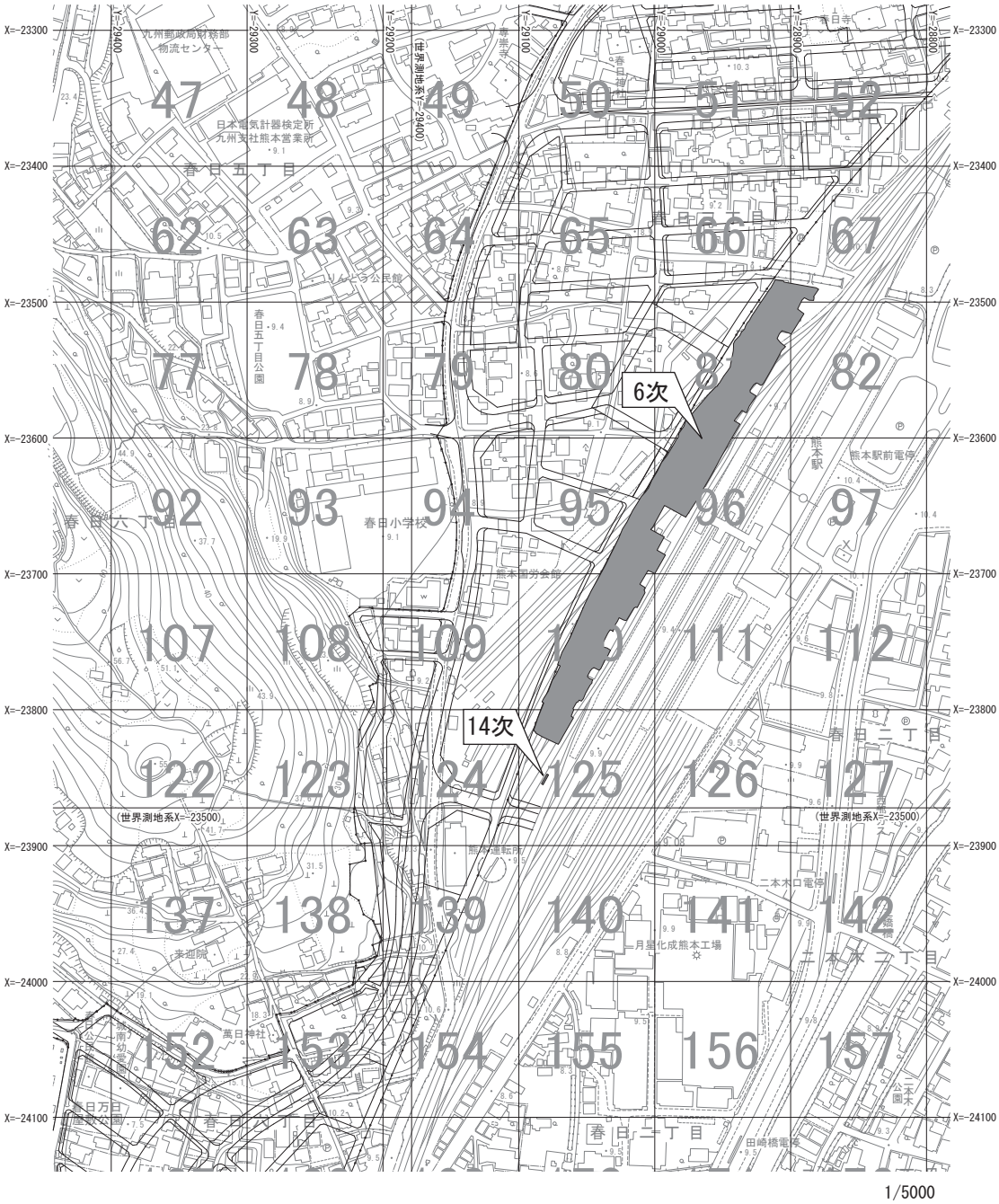


Fig.5　調査区の位置図

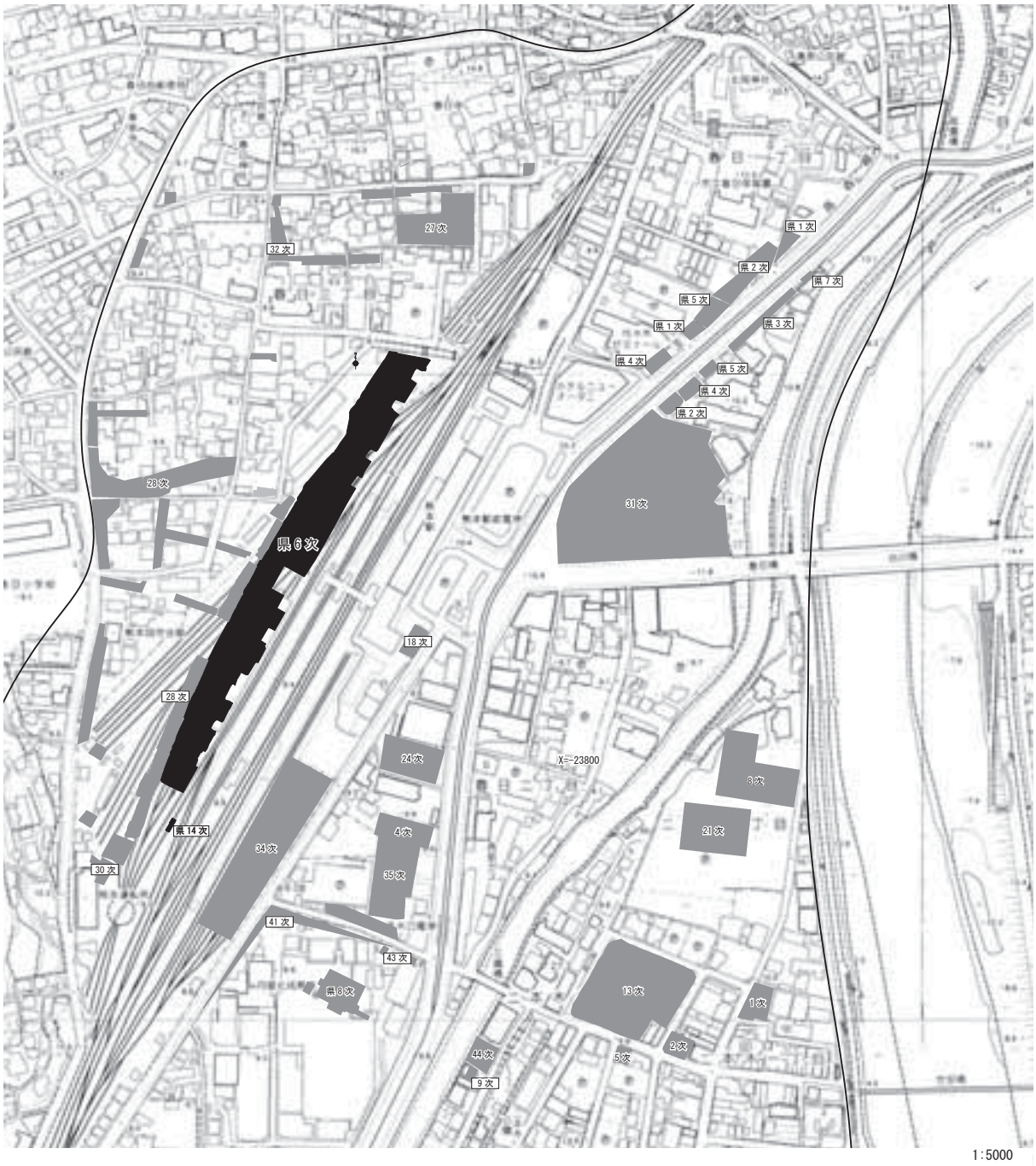


Fig.6　周辺の既往の調査区

（6）その他

発掘調査は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の三桁の数字の組み合わせにより表記した。

SA（塀．柵列） SB（掘立柱建物） SC（廊） SD（溝） SE（井戸） SF（道路） SG（池） SH（広場） SI（竪穴建物） SJ（土器埋納遺構） SK（土坑） SL（炉．竈） SN（水田．畑） SP（柱穴） SS（礎石．葺石．配石） ST（墓） SU（遺物集積） SW（石垣．防護壁） SX（その他．当遺跡では自然流路もこれに含む）

※当遺跡で使用しない記号も含む。

※下線で示している記号は当報告書で使用している。

遺物観察表に記している色調については「新版基準土色帳」（1999）、DIC カラーガイド「中国の伝統色」（第2版）、「標準色 230 ⓒ日本色研 1988」を使用した。

万日山（まんにちやま）古墳群

所在地　熊本市春日６丁目

古墳の立地　坪井川右岸、万日山山頂から東側尾根にかけて分布

古墳の年代　古墳時代後期から終末期

万日古墳…1886 年（明治 19 年）に破壊されたと新聞記事に記載あり。その記事によると主体部は横穴式石室であったこと、勾玉、須恵器が出土していることが窺える。

万日山東古墳…1917・18 年（大正６・７年）墓地建設の丘陵上開削の際に石槨が破壊されたとの記録あり。石槨の詳細な記録はないが、不知火町で出土した鴨籠古墳石棺に類似した資料であった可能性が高い。

万日山古墳…1961 年（昭和 36 年）４月に発掘調査が実施され、凝灰岩切石で作られた四室からなる横穴式石室がある。石室全長は 12.32 mを測り、最も奥の玄室には石屋形が置かれていた。石屋形は蓋・身ともくり抜き式で機内系の家形石棺と見られる。出土遺物は金環１点、鉄刀片２点、環状の鉄器２点、須恵器が数点出土しているという。出土遺物、石室の形態から７世紀前半の古墳と考えられている。

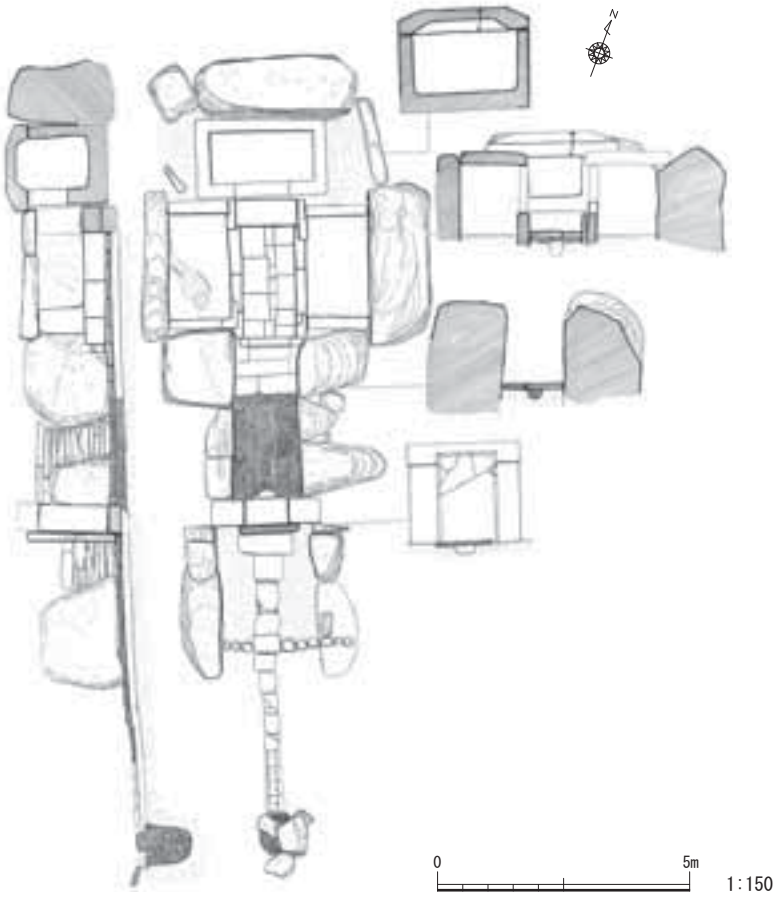


Fig.7　万日山古墳石室実測図（乙益 1969 実測図を再トレース）

参考文献

熊本市『新熊本市史』 史料編第１巻　考古資料　平成８年３月 30 日発行

熊本市教育委員会『熊本市西山地区文化財調査報告書』乙益重隆「万日古墳・万日山東古墳と山頂古墳・万日山古墳」1969

熊本日日新聞社・熊本県大百科事典編集委員会『熊本県大百科事典』昭和 57 年４月 25 日発行

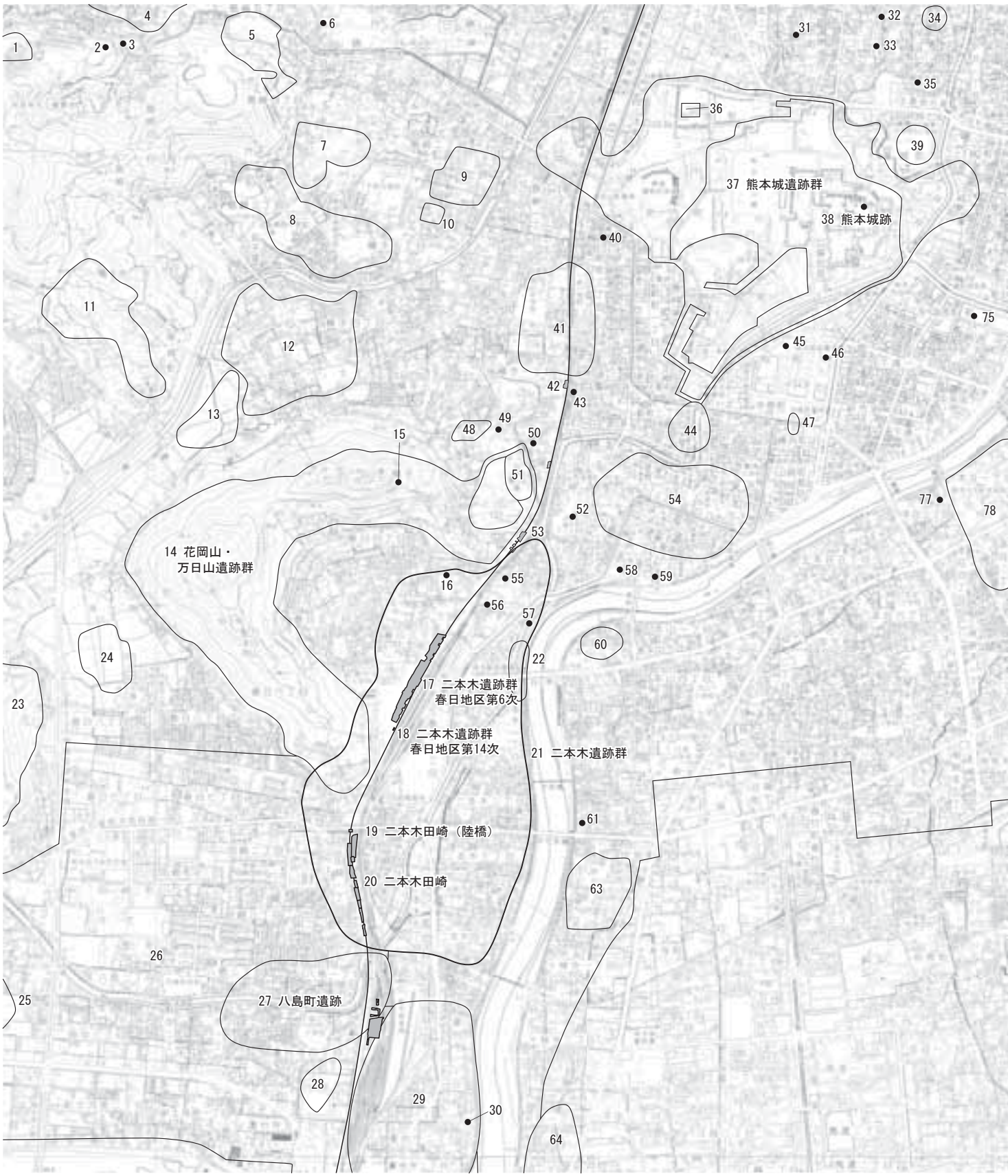

37 熊本城遺跡群
38 熊本城跡
14 花岡山・
万日山遺跡群
17 二本木遺跡群
春日地区第6次
18 二本木遺跡群
春日地区第14次
21 二本木遺跡群
19 二本木田崎（陸橋）
20 二本木田崎
27 八島町遺跡

Fig.8　二本木遺跡群周辺遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	荒尾南	縄文～中世
2	城親賢の墓	中世
3	岳林寺跡	中世
4	島崎	縄文
5	釣耕園	江戸
	叢桂園	江戸
	百梅園跡	江戸
6	鬼塚さん古墳	古墳
7	石神原	弥生～平安
8	千原台遺跡群	縄文～平安
9	迎田	縄文～平安
10	遠矢塚	中世
11	野添平	縄文～中世
12	戸坂	弥生～平安
13	戸坂御田尻	縄文～中世
14	花岡山・万日山遺跡群	古墳
15	花岡山陸軍埋葬地	明治
16	山由雲院(春日寺)	江戸
17	**二本木遺跡群 春日地区第6次**	**古代～近世**
18	**二本木遺跡群 春日地区第14次**	**古代～近世**
19	二本木田崎(陸橋)	
20	二本木田崎	
21	二本木遺跡群	弥生～中世
22	石塘（白川橋）	弥生～中世
23	独鈷山遺跡群	古墳～中世
24	清水原	縄文～中世
25	上代町遺跡群	縄文～平安
26	熊本平野条里跡	古代・中世
27	八島町	弥生
28	道城方	弥生・古代
29	南新宮	弥生～中世
30	蓮台寺桧垣塔	中世
31	円光寺跡	近世
32	金剛寺南乾山跡	中世
33	仙勝院跡	中世
34	内坪井	弥生
35	夏目漱石内坪井旧居	明治
36	旧細川刑部邸	近世
37	熊本城跡遺跡群	古墳～近世
38	熊本城跡	近世
39	藤園中学校校庭	弥生～平安
40	新町古寺跡・高麗門跡	近世
41	新馬借	古墳～平安
42	新馬借遺跡	
43	古往生院跡	近世
44	船場町	弥生
45	山崎古墳	古墳
46	花畑館跡	近世
47	辛島町	弥生・古墳
48	吉祥寺横穴群	古墳
49	横手町寺院群	近世
50	願行寺跡	近世
51	細川家菩提寺妙解寺跡	江戸
52	板屋町・細工町寺院群	近世
53	花岡山・万日山遺跡	
54	古町（旧唐人町）	弥生～明治

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
55	北岡神社境内古墳	古墳
56	北岡横穴群	古墳
57	熊本駅前の石塘	近世
58	光明寺跡	近世
59	浄信寺跡	中世
60	本山城跡(本庄城跡)	弥生～中世
61	無漏寺跡	中世
62	熊本平野条里跡	古代・中世
63	世安池田	弥生～中世
64	平田町	弥生～平安
65	安元元年笠塔婆塔身	古代
	安元元年笠塔婆	古代
66	報恩禅寺境内石造物	中世
67	子飼	縄文～中世
68	黒髪町遺跡群	縄文～中世
69	上河原	縄文～古代
70	渡鹿遺跡群	縄文・弥生
71	大江白川	縄文～平安
72	新屋敷	弥生～中世
73	渡鹿板碑	中世
74	大江遺跡群	縄文～明治
75	小泉八雲熊本旧居	明治
76	大江義塾跡(旧徳富邸)	明治
77	代継神社の層塔	中世
78	本庄(熊大病院敷地)	古墳～平安
79	不動院跡の六地蔵塔	中世
80	北水前寺	奈良・平安
81	西水前寺町	縄文～中世
82	水前寺廃寺跡	奈良・平安
83	水前寺成趣園	江戸
84	水前寺廃寺塔心礎石	奈良
85	古今伝授の間	江戸
86	出水国府跡	弥生～中世
87	国分寺跡	縄文～中世
88	肥後国分寺	奈良
89	神水	縄文～平安
90	江津湖遺跡群	縄文～中世

Tab.4　遺跡地名表

2　発掘作業の経過　調査日誌

2005 年（平成 17 年）

11.4　旧熊本駅構内取り壊し前、鉄道関連施設撮影
撮影者　大牟田市教育委員会　坂井義哉
　　熊本県教育庁文化課　長谷部善一
熊本駅構内機関車転車台、給水塔、調査予定地方向

11.7　調査予定地北側より表土剥ぎ開始。暫定的にＡ区と設定。線路路盤下は撹乱が多く遺物包含層となる暗褐色土が残っていない。

11.8　表土剥ぎ２日目。表土を剥ぐ範囲も、３層に相当する包含層は残っていない。４層中位まで削平されている可能性が高い。須恵器大甕胴部片を利用した転用硯が１点出土。

11.9　表土剥ぎ３日目。相変わらず、３層は確認できず。４層まで削平を受け柱穴を含む遺構検出面まで表土を剥いでいる状況。古代土師器片が多く出土する。

11.10　表土剥ぎ４日目。現在の熊本駅南側へ向い表土を剥ぐが、撹乱が多くなる。やや地形が落ち始めたせいか３層相当層と見られる土が一部に残る。９世紀頃の土師器が出土する。

11.11　降雨の為、表土剥ぎ休止。事務所内で 10 月まで調査を実施していた玉名市津留所在の「太郎丸遺跡、瀬萩遺跡」図面整理を行う。

11.14　午前中、文化課で民間調査委託関係協議、午後からは調査事務所で富合車輌基地試掘調査結果報告書作成、二本木遺跡群（春日地区）作業員採用通知発送業務、瀬萩遺跡実測図整理をそれぞれ行う。

11.15　長谷部は資料室（渡鹿）にて報告書作成業務、吉田は瀬萩遺跡確認調査現地協議。本調査に供する為設置した仮設プレハブ建物について、土地区画法に基づく「建物設置許可申請」が必要である旨、鉄道建設・運輸機構工事第５課より指摘あり。当該建設地は熊本市の土地区画整理事業地内に含まれる為、土地区画整理法第 76 条に基づく建築許可申請が必要とのこと。熊本市都市整備局熊本駅西土地区画整理事務所へ申請。（後日、受理した旨連絡あり）

11.21　本日より、調査作業員 33 名現場入り。Ａ区北側より清掃を開始しする。調査区壁面から調査面へと。出土遺物は古代から近世まで多彩で、多数の撹乱範囲を確認。午後から民間調査委託協議。（文化課にて）

11.22　昨日に引き続き、清掃を目的とした作業を進める。調査面には電柱を引き支えていたと見られる基礎空のビル電線や鉄くずを含む撹乱が多数あり。これら撹乱に切られるように、古代から中世期の遺構が見え始める。午後から富合車輌基地試掘調査結果判定会議を県庁にて開催。

11.24　表土剥ぎを実施している調査区絶対に範囲を広げ撹乱掘りを実施。国鉄時代の軌道敷が敷設される際、土地の改変が行われた痕跡か。なお、撹乱の中から古い時代の熊本駅を浮線で表した牛乳瓶や徳利が出土する。

11.25　太郎丸遺跡後片付けのため、当現場の調査は休止。玉名市津留梅林天満「流鏑馬」開催日。

11.28　遺構実測委託業務でアジア航測が受注したため、本日は第一回打ち合わせ。当初より下請として業者を提示してきた為、協議がまとまらず。調査区南側で遺構検出が出来る状況が出てくる。調査区北側ではいまだに撹乱除去作業を継続。

12.1　北側撹乱除去及び以降の検出が出来るようになった範囲での遺構検出。遺構実測委託に関するアジア航測との協議を継続。下請が作業を実施し、最終責任をアジア航測で担うことを確認。アジア航測での責任者を明確にする為に関係書類の提出を求める。大グリッド 66・67 付近で撹乱が激しく除去に手間取る。

12.2　始業の時間から降雨の為、午前中事務所で待機。午後は作業を中止。事務所で祭田下遺跡報告書の打ち合わせを実施。

12.3　81K ～ Q － 9 ～ 15Grid 付近の遺構検出作業。竪穴建物及び掘立柱建物等が検出される。

12.6　81K ～ N － 11 ～ 14Grid 付近で昨日に引き続き遺構検出を継続。複数の竪穴建物跡検出。切り合いが激しい為、検出作業が難航。アジア航測監督のもと、下請として㈱測技が実測に入る。調査区全体の範囲取り込み等、事前準備作業を開始。

12.7　文化課文化財資料室　野田拓治室長が現地指導の為、来跡。掘立柱建物周辺から出土する須恵器杯蓋について転用硯の可能映画あるため出土状態に注意するよう指導あり。

12.8　朝から降雨だったが、作業を実施する。調査区全域の撹乱掘り作業。81M ～ O － 13 ～ 15Grid 竪穴建物検出作業。81O-10Grid で大型の掘立柱建物を検出。調査と平行して富合車輌基地の試掘調査協議も鉄道建設・運輸機構担当者と協議を実施。

12.9　81M ～ O-13 ～ 15Grid 竪穴建物の検出状況写真撮影を実施。午後から文化課で調査係会議。

12.12　朝から降雨の為作業中止。

12.13　81I ～ O-9 ～ 18Grid の遺構検出を実施。各 Grid で掘立柱建物が検出され始める。調査事務所前 66Q ～ T-17 ～ 20Grid 付近の表土剥ぎ協議。鉄道建設・運輸機構がアスファルト舗装を撤去後、表土剥ぎ作業を実施する予定。遺構実測（撹乱上端）取り込みを開始。

12.14　大グリッド 81 の北隅と I・J-17・18Grid 付近をっ中心に遺構検出を実施。多くの掘立柱建物、竪穴建物、土坑を検出。検出写真撮影後、一部、掘方を始める。調査区の一部に黒色土が黄褐色土の上層に乗った状態で見られていたが、本日の調査により黄褐色土に掘り込まれている遺構の埋土を形成する土が上層にあたる黒色土であることを確認する。調査区北側に存在する JR 九州熊本支社の建物付近の調査について、協議を実施。

12.15　昨日に引き続き、同じ範囲をさらに精査する。多数の柱穴を確認し、並びを検証しながら調査を進める。午後は降雨のため、15 時をもって調査を休止する。玉名地域振興局用地課　青木主任主事来跡。

12.16　66R ～ T-16 ～ 20Grid 付近の表土剥ぎを開始。撹乱が多く、建築材と見られるコンクリート塊が埋められている。二本木遺跡群で見られる黒色土上面での遺構確認面は、ほとんど撹乱により残されていない。
81N ～ P-13 ～ 15Grid 付近での遺構検出は遺構の切り合いを確認するため、遺構内を一段落としながら作業を進める。表土剥ぎ２日目。

12.19　遺構実測を委託しているアジア航測の作業が進まないので、調査の進展に支障が生じ始める。アジア航測を通じて下請けで作業を実施している測技に実測要員の増員を申し入れる。表土剥ぎ３日目。

12.20　表土剥ぎ（４日目）により古代の遺構に混じり、鉄道遺構が検出される。また、駅弁に供されていたと見られる土瓶やガラス瓶等が建物廃材とともに土坑状に掘り込まれた中から出土する。

12.21　降雨のため現場作業は休止する。しかし、表土剥ぎは継続する。（５日目）表土剥ぎは、予定面積（1,650 ㎡）のうち 2/3 を終了。遺構実測は本日も継続。

12.22　降雪のため作業は中止。表土剥ぎ作業のみ継続する。本日をもって平成 17 年（2005 年）の作業員を入れての作業は終了する。

12.26　調査員のみ現場で遺構検出を実施しながら、表土剥ぎを継続する。

12.27　表土剥ぎ継続。排土の処理まで含め明日までに終了する予定。

12.28　表土剥ぎ終了。調査区周りの細かな排土まで処理を終える。本業務をもって本年の調査を終了する。非常勤職員は現場で仕事納めをし、職員は 16：00 から県庁で文化課仕事納めに出席。

平成 18 年（2006 年）

1.10　本日より新年の調査を開始する。駅ホーム側 67S・T １～４Grid 付近、82A ～ E-1.2Grid 付近の精査及び遺構実測を実施する。また、JR 九州より調査区内の土壌汚染について説明を受ける。（詳細は別途報告）

1.11　昨年末に表土剥ぎを実施した範囲のメッシュ杭打設開始。（㈱長田測量設計）その後、撹乱掘りを集中的に実施する。82A ～ E-1.2Grid では検出した柱穴の半裁作業を開始。

1.12　メッシュ杭打設２日目。81O・P-13・14Grid でも遺構検出、半裁作業を実施。

1.13　昼前からの降雨のため、午前中で調査を終了する。メッシュ杭打設は午前中で終了。調査区内大 Grid66 と 81A ～ F-15 ～ 20Grid 付近で大規模に遺構検出を実施。数条の溝状遺構、多数の柱穴等が確認される。

1.16　81A ～ F-15 ～ 20Grid 付近で遺構検出を継続し一部、遺構が確定した部分から掘り下げを開始する。午後に入り降雨のため作業を中止する。

1.17　81I・J-15 ～ 18Grid で竪穴建物 SB001 ～ SI005 の遺構完掘状況の写真撮影を実施。その他は遺構検出作業及び、81O・P-13・14Grid で遺構調査を継続。

1.18　明け方から降雨だったが、降り止みそうであったため作業員は出勤させ、10 時 30 頃に雨が上がったのを受け調査を開始する。主に 81G ～ R-16 ～ 18Grid で調査を継続した。

1.19　81G ～ R-16 ～ 18Grid で竪穴建物、井戸、掘立柱建物等の調査を継続し、実測、写真撮影を行う。81A ～ D-15 ～ 18Grid の範囲で遺構検出を行う。未だに撹乱が多数存在することから遺構検出をかけながら撹乱除去に
努める。実測委託は光波測距義による測量ではなく、手実測による委託契約をしているにも関わらず、光波を使用した実測図を作成していたため、注意し手実測による作業に切り替えるよう指示。

1.20　終日降雨のため、作業は中止する。調査区に隣接する JR 九州建物に関する撤去協議を事務所にて実施する。撤去用の工事用道路が必要であるため、一部調査区内に見調査区が存在することから協議を実施した。

1.23　81G ～ R-16 ～ 18Grid で遺構調査及び実測作業、81A ～ -15 ～ 18Grid で撹乱掘りと昨日からの作業を
継続する。昨日に引き続き、JR 建物撤去に関する協議を実施。

1.25　井戸 SE007・008・011 土層断面実測、写真撮影。81AD-15 ～ 18Grid で撹乱掘り及び遺構検出作業。
アジア航測下請けで実測業務を実施している測技の調査員は、遺構を考古学見地から観察する能力がないため実測図の線の意味を理解できず、図が成立していない。実測図のチェックに大いに手が取られる。

1.26　81G ～ R-16 ～ 18Grid 隣接で K-12 ～ 13Grid、R-9 ～ 14Grid まで遺構検出に着手。遺構密度はやや低くなるが、散在する柱穴が掘立柱建物となる可能性が非常に高い。遺構実測について連日、遺構実測の適正化を申し入れていたところであるが、改善されないことからアジア航測福岡支店長を交えての協議を申し入れていたところ、問題点の整理のための協議が相手方から申し入れられたため協議の場を持つ。当課仕様書をもとに手実測による実測の必要性、専門的見地からの実測図の作成、残っている実測図の早期終了などを説明する。

1.27　昨日に引き続き、K-12 ～ 13Grid、R-9 ～ 14Grid の遺構検出並びに調査を実施。井戸 SE007 が完掘したことから完掘状況の撮影を行う。81G ～ R-16 ～ 18Grid では遺構がほぼ掘り終っているのでアジア航測（測技）による実測を実施。しかし、相変わらずの出来栄えの実測図が提出されてくる。改善の様子なし。

1.30　土坑墓 ST001、ST002 について調査の過程で人骨が出土していたため、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸館長に専門調査員としてお越しいただき、人骨の取り上げを依頼し、本日作業の運びとなった。
81G ～ R-16 ～ 18Grid で竪穴建物の掘方を実施するため人数を割き、調査を継続する。実測図の上りが遅いことから調査員と作業員による実測を開始。

1.31　朝から降雨のため作業を始められなかったが、昼前に上がったことから作業を開始する。81G ～ N-15 ～ 20Grid で新たに遺構検出、遺構掘り下げを開始する。

2.1　県庁にアジア航測を呼び遺構実測委託について協議。（福岡支店長、技術部長、営業課長代理、担当）
問題が、考古学を理解し経験のある責任者が入っていないこと、手実測によることを理解していないことの２点を説明。２月３日までに改善策を文書化し再協議を持つことで双方了承する。

2.2　66Q ～ T-16 ～ 20Grid について主に遺構検出を実施。81G ～ L-16 ～ 19Grid の遺構調査を継続。88F 列から北に位置する溝に囲まれた遺構を方形区画を、内部に掘立柱建物を多数有すること、88F 列より南で検出する掘立柱建物と柱穴の形状が異なることから、中世の土師器を包含する遺構が多数見受けられること等から、中世居館跡ではないかと認識する。

2.3　81G ～ N-15 ～ 20Grid、66Q ～ T-16 ～ 20Grid で遺構検出、調査を継続する。
２月１日にアジア航測と県庁で協議を実施した件について、「二本木遺跡群（春日地区）遺構実測等業務」の管理体制の改善について」として改善に関する文書が、２月３日付けで福岡支店長川谷俊和から県教育長柿塚純男あて提出された。

2.6　66Q ～ T-16 ～ 20Grid、81G ～ N-15 ～ 20Grid で遺構調査を継続。アジア航測（測技）で竪穴建物の遺構実測に着手するも、相変わらずの実測図が上がってくる。午後からは降雨

のため、調査を中止する。

2.7　朝から雨が降ったり止んだりで、中断をしながらも調査を継続する。66Q ～ T-16 ～ 20Grid で近世の畑遺構、中世の井戸等を確認し、その下層に古代の多数の遺構が存在することをも確認する。本 Grid 付近は、近世、中世、古代の遺構が重複していることから、81G ～ N-15 ～ 20Grid よりも遺構密度が高いことが確認される。

2.8　66Q ～ T-16 ～ 20Grid、81G ～ N-15 ～ 20Grid での調査を継続する。在来線熊本駅構内において仮設建物を建築する際の基礎を掘削するため、県事業を所管する調査第二係の木村参事と共に工事立ち合いを実施する。今後、数回にわたり同様の工事立ち合いが実施される模様。

2.9　66Q ～ T-16 ～ 20Grid、81G ～ T-15 ～ 20Grid まで調査対象地を広げ、遺構検出及び調査を実施する。遺構実測及び写真撮影は長谷部、吉田、早田が手分けして作業員の補助を受け実施する。

2.10　66Q ～ T-16 ～ 20Grid の遺構調査を集中的に実施する。遺構が見えにくいことから数回の遺構検出を実施し、平面プランの確認に努める。

2.13　66Q ～ T-16 ～ 20Grid、81G ～ T-15 ～ 20Grid の調査を継続する。遺構実測はアジア航測(測技)が実測することとなっているが、手実測に慣れていないことから上りが遅いため調査員・作業員による実測を継続する。

また、２月３日付けで提出された文書について、アジア航測から一部内容の変更協議がある。（２回目）２月３日同様の文書が提出され、その中で現場代理人をアジア航測社内からではなく社外の民間調査機関から招聘しあてることとすることが申し出された。(㈱東海アナース藤田氏）本件について、抜本的に遺構実測環境が改善されることは当調査にとっても有用であるためこの申し出を受け入れることとした。

2.14　81L ～ R-13 ～ 15Grid（駅ホーム側)、66R ～ T-18 ～ 20 の調査を継続。併せて遺構実測も同時並行する。井戸 SE008(中世）の遺物出土状況撮影。

2.15　終日、降雨のため調査は中止。アジア航測との最終協議を県庁にて実施。『「二本木遺跡群（春日地区）遺構実測等業務」の管理体制の改善について』としてアジア航測福岡支店支店長川谷俊和で、業務管理体制の改善が示され、①業務遂行の統括・業務管理・成果品質の確保を調査員（㈱東海アナース）が責任者として現地常駐の上行うこと。②契約工期の平成 18 年３月 31 日に仕様書に定められた成果品質を保った成果品のの納入を行うこと。③現地管理体制の変更に合わせ、作業管理を強化することが申し入れられる。当課の回答として、上記①～③がおこわなわれない場合は、契約を破棄する旨を伝え、アジア航測もこれを了承した。

2.16　終日降雨のため調査は中止する。事務所にて図面整理を行う。

2.17　81L ～ R-13 ～ 15Grid（駅ホーム側)、66R ～ T-18 ～ 20 の調査を継続。また、81F ～ I-12 ～ 19Grid の遺構検出及び調査を開始する。各遺構は段階に応じて土層断面、平面の実測、写真撮影を実施する。

2.20　午前、アジア航測（㈱東海アナース）藤田氏と現状を協議し、図面の不備について把握し次第、修正及び実測作業に入ることを確認。

2.21　66R ～ T-18 ～ 20Grid、81T-21Grid ラインまで全面的に調査を広げる。遺構の密度にバラつきはあるがほぼ全面で遺構の存在を把握する。JR 九州車掌センターの移転設置に伴い営業線への車掌通路の設置について持ち込まれる。調査区を横断する案が提示されたが、調査が終了するまでは不可であることを伝える。アジア航測との協議は藤田氏（㈱東海アナース）による実測図修正及び実測が始まる。

2.22　81E-14Grid で新たに井戸 SE009 を検出。調査区北端から再度遺構検出を開始し、改めて遺構検出の漏れを確認する。それに伴い藤田氏（㈱東海アナース）に遺構ラインの指示を出し実測図の修正及び追加を行う。以下、遺構実測と表記した場合は、㈱東海アナースが実施したものである。平成 18 年度中のみ。

2.23　午前中は県庁で文化庁坂井主任調査官による埋蔵文化財講演会へ参加のため、調査は午後からの実施する。調査は 66R ～ T-18 ～ 20Grid、81T-21Grid の遺構調査を実施する。JR 九州車掌センターの通路について改めて協議を実施。営業線側からの進入は不可能であるため、改めて調査区内の横断を希望される。協議の結果、調査区北端の調査を早急に終え通路を設置することを当課から提案し、JR 側で持ち帰り協議することとなった。遺構実測作業はアジア航測（測技）職員では対応が不可能であるため、㈱東海アナースから職員を入れ対応することとなる。

2.24　81E 列から 81R 列にかけて全面的に調査を実施。井戸遺構が多数検出される。

2.27　排土置場が遠くなり、調査進捗が遅れてきたことから 81G・H- 18・19Grid 付近を排土置場とするため調査を急ぐこととなる。 66R ～ T-18 ～ 20Grid 付近の遺構実測を実施。

2.28　81E 列から 81R 列の調査を継続する。井戸 SE011、SE005 出土の獣骨について、大分市立歴史博物館館長木村幾多郎氏を専門調査員として招聘。高木・長谷部で対応する。

3.1　81K-11Grid 付近を西側（JR 九州車掌センター側）に向かい細長く調査区を拡大のため、表土剥ぎを実施。JR 九州担当者立ち合い。午後から降雨のため調査は中止。

3.2　表土剥ぎ２日目。81G・H- 18・19Grid 付近の遺構調査及び実測がほぼ終了し、排土置場として使用できる目途がたった。来週くらいから排土置場として使用する予定。

3.3　81E 列から 81R 列の調査を継続する。本日までで契約していた表土剥ぎが終了できなかったため、協議のうえ契約を延長し実施することとなる。

3.6　降雨のため調査は中止。

3.7　表土剥ぎを実施した範囲にメッシュ杭を設置。（委託先㈱十八測量設計)

大 Grid で 81Grid の調査区内について、残りの調査面数・遺構数を勘案して、今月中の終了は難しい状況となる。遺構実測の遅れが特に目立つことから、年度末に向かい実測要員の追加投入を藤田氏（㈱東海アナース）を通じアジア航測へ指示する。

3.8　81G・H- 18・19Grid の調査が終了したため、排土置場に供することとする。年度末に向かい、調査員で今後の調査工程について、協議を行う。柱穴については、平面観察後柱痕が検出できない場合は、半裁し断面観察へ移り、検出されない場合は土色を確認し完掘を行うこと。遺物が出土するもののみ遺構番号を付する。土層断面図については、外部からの支援、または委託等は不可能であると判断し内部で配置を考慮しすすめることとする。作業員の残勤務可能日数を考慮し、3/24 で，満勤の者が出始めるため、当該日を一つの目途とし

て作業を進めることとする。

3.9　81T-21Grid までの調査に断続的に入る。また、66R ～ T-18 ～ 20Grid の遺構を調査を実施。昨日、申し合わせて遺構を付る遺構を中心に調査を実施。

3.10　81M.N-14.15Grid の井戸 SE009、SE015 を完掘。81G.H-17Grid の竪穴建物 SI004、SI005 を調査。また、その周辺の遺構検出、調査も併せて実施。遺構実測は遺構実測は断続的に実施する。

3.13　調査区全域ですべての遺構について着手する。竪穴建物 SI001、井戸 SE002、SE005、掘立柱建物 SB014、SB017 について調査・半裁状況写真撮影、遺物の取り上げ等を行う。アジア航測と藤田氏（㈱東海アナース）を交え、今後の遺構実測等業務協議を実施。実測作業追加人員についてはｇン罪調整中、来週には東海アナースより入る予定。レベル入れについては㈱測技が実施することとする。また、デジタルトレースは藤田氏（㈱東海アナース）が入り協議、調整、修正等を行うことで合意。

3.14　81L.M-14.15Grid で検出してきた掘立柱建物 SB015、SB016 周辺には径が 50 ～ 60 ㎝の柱穴が撹乱等に混じり検出されることから並びそうである。㈱東海アナースでの実測もやや遅れ気味である。

3.15　昨日に引き続き、調査区全域について、調査を実施。遺構掘削、実測が交錯することとなる。

「埋蔵文化財に関する重機使用、鉄道近接工事覚書」期限延長協議を実施。鉄道・運輸機構と JR 九州とで交わしてある覚書について、現在の期限（平成 18.3 末まで）延長手続きについて、協議のみで可（新たに締結し直す必要はない）機構から JR への請書（JR から機構への工期延長を認めた回答書に機構が押印したもの）の提出をもって、同じ期限（H18.9 末まで）延長手続きを行う。（その場で覚書に必要事項を書き入れ終了）平成 18.9 末からさらに延長する場合は、しゅうせいかしょ鉄道・運輸機構から JR への再度の工事延長の協議を行い、その協議が整った後に、再度同じ手続きを踏む必要がある。併せて、高所作業車による写真撮影の実施について JR に確認。24m の高所作業車を使用するにあたり、新幹線起業地内に回転半径が入らない範囲で、電線とうに支障にならなければ特に営業線近接協議は必要ないこと。今回は、当課で使用している職員駐車場奥の春日クリニック駐車場を使用許諾のうえ使用する予定のため、特に問題はないと判断となる。

3.22　終日、降雨のため調査は中止する。遺構実測委託成果品に関し、アジア航測、藤田氏（㈱東海アナース）とで協議を実施する。デジタルトレースの成果品について、できたものから提出し、当課でチェックのうえ修正個所があれば差し戻すこととする。

3.23　81L ～ N-14 ～ 15Grid 竪穴建物 SI016、SI019、SI020 調査。81L.M-12.13Grid 掘立柱建物 SB016 は一度実測をしていたが、精査の結果平面形を修正する必要があることから再実測を実施。現時点で、㈱東海アナースから実測要員６名、㈱測技からレベル入れ要員２名が常駐。

3.27　明日、全体写真撮影のため 81Q 列まで周辺も含め清掃を実施。

土壌汚染除去及び JR 車掌通路付替え協議について（JR 九州施設部工事課 野中氏）詳細は別記。

JR 車掌津路付替について

４月下旬までに現調査区を鉄道・運輸機構に引き渡し後、機構側と JR とで協議することとする。なお、通路は車掌センターからホームへなるべく直線で結ぶ必要があるが、当方の調査の支障にならないように曲げることは全く問題ないとのこと。

3.28　高所作業車による完掘状況撮影。81Q-5Grid から 96A-11Grid を結ぶ範囲まで調査終了。全体写真撮影後、遺構実測業務は実施。

3.29　81Q-5Grid から 96A-11Grid 以南の表土剥ぎ。併せて遺構検出も実施。67R.T-2Grid で門礎らしき遺構を確認。精査を実施。本日をもって、平成 17 年度の調査を終了。

4.3 平成 18 年度の調査開始。熊本市教委原田文化財保護主事ほか５名、近接地で調査を開始する旨のあいさつあり。調査事務所も併せて近接地域に建設予定。

4.10 ～ 14　事務所にて昨年度の図面・写真整理を実施。

4.17　表土剥ぎ２日目。遺構多数を確認。本年度採用の非常勤職員 吉井氏、研修終了で本日より調査に参加。

4.18　昨年度調査分の調査区を竹田宏司玉名市教委文化財課文化財係長専門調査員として招聘。遺構のあり方について指導を仰ぐ。文化課高木課長補佐、江本課長補佐、坂口参事現地確認のため来跡。熊本市原田文化財保護主事調査協議のため来跡。

4.19　表土剥ぎ３日目。81A 列の表土剥ぎ作業。

4.20　表土剥ぎ４日目。昨年度調査分の遺構実測（補足）も併せて実施。

4.21　今回契約した表土剥ぎ終了。

4.24　鉄道・運輸機構（大林 JV）による表土排土作業開始。表土剥ぎを実施した範囲で土層の確認作業を開始。

4.25　調査区内の清掃。遺構の検出。これまでに比べ比較的規模の大きな溝状遺構を検出。

4.26　午後から降雨のため作業は午前中のみで終了。

4.27　調査範囲のなかで土層を確認しつつ、切り合う遺構の埋土の由来層を確認。

4.28　96G-5Grid 周辺で検出した並行する溝状遺構について精査し、近世の耕作痕であることを確認。下層より古代の掘立柱建物を検出。

5.1 ～ 3　調査は中止。平成 17 年度分の図面整理を実施。

5.8　今回調査対象である 80.81-R 列より 96C-2 ～ 96G-8 Grid 間の遺構検出を実施。調査区壁の土層確認も併せて実施。溝 SD042・094・095 までの調査を実施。その周辺も併せて遺構検出作業。

5.10　降雨のため作業中止。

5.11　溝 SD042・094・095 の調査を継続。併せて遺構検出作業。80.81-R 列より 96C-2 ～ 96G-8 Grid より 80H-96L-5Grid 間の表土剥ぎを開始。㈱九鉄工業

5.15　不明遺構 SX005（近世畝状遺構）実測。本年度から遺構実測委託は㈱九州文化財研究所が受託。昨年度の調査区と本年度調査区間で掘立柱建物の柱穴の延長を確認。表土剥ぎ２日目

5.16　表土剥ぎ３日目。溝 SD095、SD098 の調査を継続。ほかは遺構検出作業。

5.17　降雨のため作業中止。平成 17 年度分の図面整理。

5.18　当面の調査範囲の表土剥ぎが昨日までで終了したため、本日から前面にわたり遺構検出作業を開始。溝 SD020 等の遺構の延長が検出し始める。溝 SD042、SD095 の上端実測。

5.19　台風接近のため調査中止。

5.22　調査区内にベルトコンベアを設置。規模の大きな溝状

遺構の調査に供する。96L-3 ～ 5Grid 付近は、JR 九州が実施した鉛汚染地域のため、表土剥ぎ後に遺構を検出するも調査は実施せず。汚染地域はこれからも広がる模様。

5.23　午前中降雨のため午後から作業を実施する。調査は大 Grid の 96 に大半が移り遺構検出作業を実施。近現代の遺構から古代まで多くの遺構が重複し検出し始める。

96M-3Grid 付近を中心とする JR 鉛汚染土壌除去作業にて、除去後の面（現 GL より－１m）で遺構を確認する。汚染地域は調査を実施しないことで申し合わせがあっていることで表土剥ぎ後遺構検出を行い、遺構上端のみ光波で取り込み、写真撮影、高木補佐による遺構確認後、JR 九州による埋戻し作業を実施する予定。

5.24　昨日に引き続き、96M-3Grid を中心とする汚染土の除去作業を実施。調査は全体清掃及び溝 SD020 の調査に着手。遺構実測も併せて実施。

5.25　溝 SD095 の調査を中心に周辺の遺構検出も実施。あわせて、96M-3Grid の汚染土除去作業後の遺構検出作業を実施。本汚染地域は以前、赤レンガ建物（機関車庫）があった場所であり、地中から多数のコンクリート基礎が確認される。

5.29　今回着手した調査区は大 Grid96 にほぼあたる。国鉄から JR 期の撹乱が多数あり除去に手間取る。

5.31　本調査区の東西に延びる道路 SF001 を検出・調査することを目的とし、多数の撹乱の除去を行う。中には近現代の廃棄土坑と見受けられるものもある。

6.1　81T-8Grid を中心とする Grid の遺構検出作業を実施。撹乱掘が主体となる。

現在調査を実施している、95I-19Grid ～ 96L-5Grid を結ぶ線から南側の 1,500 ㎡について、調査工程から調査を終えることができないと判断されたことから、民間調査委託を実施することとなった。（民間調査委託範囲を今後、暫定的に「C 区」と呼称する。）本日はその入札前の現地説明会。現調査区を公開し入札参加資格を有し入札を希望している５社が参加し、質疑応答を含む説明会を実施。汚染土

6.2　降雨のため作業中止。室内にて図面整理。

6.5　溝 SD095、道路が確認された地域を中心に遺構検出作業並びに撹乱除去作業を継続実施。切り合いが激しことから慎重に調査を進める。

JR による新幹線起業地内における汚染土除去作業は本日をもって終了。遺構検出、実測、写真撮影を実施。汚染土範囲内にはレンガや礫が多数含まれており遺構はその大半が撹乱されている。排土運搬等協議を実施。

6.6　溝 SD095、道路 SF001 を中心とする範囲の調査を継続。96H-6Grid で検出した不明遺構について調査を実施。

民間調査機関が現場事務所を設置する場所を、熊本市駅西土地区画整理事業用地内に確保することとし、鉄道・運輸機構で借地していただく。

6.7　96F-1Grid 井戸 SE034 及び溝 SD095、道路 SF001 の調査を継続。SE034、溝 SD042、SD094 平面実測、柱穴 SP501 平面実測。午後から光化学スモッグ注意報が発令となったため一時作業を中断。解除後、調査を再開。

6.13　道路 SF001 付近を中心に遺構調査を継続。遺構が判別しずらい遺構については、トレンチを入れ断面確認を基本とし調査の中断がないようにする。追加で出された 110F-17Grid を中心とする範囲の JR による汚染土除去作業立ち合いを実施。溝１条、掘立柱建物１棟を検出。明日まで遺構検出を実施する予定。

6.14 溝 SD095、SD085、道路 SF001 の調査を継続。併せて周辺の遺構調査も実施。SD095 の硬化面範囲の実測。汚染土範囲除去作業を継続。遺構検出、写真撮影を実施。

6.15　降雨のため作業中止。

6.16　溝 SD095、道路 SF001、SD084、掘立柱建物 SB051 調査。排土作業に供するためベルトコンベア設置。

6.19　溝 SD095、道路 SF001 について、ほぼ完掘。溝 SD084 断面、SK084 見通断面図作成。81R-6Grid から 96F-1Grid の範囲の調査を実施。

6.20　溝 SD095、道路 SF001 の下端付近の精査。写真撮影の準備。

6.21　道路 SF001 完掘写真撮影。調査区各所遺構実測。

6.22　降雨のため調査中止。道路 SF001 東西に検出・調査を実施しているが延長で熊本市文化財課調査分で同様の遺構を調査。時期、規模を同じくする同遺構の可能性あり。

6.23　降雨のため調査中止。㈱九州文化財研究所と図面打ち合わせ。

6.26　昨日に引き続き降雨（荒天）のため調査は中止。

6.27　昨日まで降雨により調査地が水没。水中ポンプを設置し排水作業。

6.28　昨日に引き続き、排水作業。民間調査委託のため㈱大成エンジニアリング吉田氏と協議。

6.29　連日の排水作業を継続。作業員を入れての清掃作業を開始。作業員駐車場の除草作業実施。道路 SF001 東端部壁面崩落の可能性が出てきた。実測を急ぐ。

6.30　降雨のため調査は中止。排水作業は継続して実施。鉄道・運輸機構と工事用道路についての協議を実施。調査区東側（JR 在来線５番ホーム部）に仮設の工事用道路を建設予定。土壌改良、舗装工事を実施しないこと、埋蔵文化財調査が終了するまでの一時供用であることから、調査は伴なわず慎重工事で対応することとなった。同時に文化財保護法第 94 条第１項に基づく通知の提出を促す。民間調査に関し㈱大成エンジニアリングと協議を実施。

7.3　降雨のため調査は中止。夏休み現場公開会について JR 九州担当者と協議。民間調査について課内協議

7.4　96H-2Grid 検出の竪穴建物 SI054、SI055 調査。土坑 SK067 からは須恵器が大量に出土。溝 SD025 平面実測。

7.5　降雨のため調査中止。排水作業を実施。午後、㈱大成エンジニアリング早川泉氏あいさつのため来跡。

7.6　午前中、降雨のため作業中止。作業員待機。午後から排水作業及び遺構調査。玉名市教育委員会竹田氏来跡。調査指導を仰ぐ。

7.10　民間調査委託範囲の表土剥ぎを開始。表土剥ぎまでは当課で実施。午前中は、係会議のため作業員は午後から稼働。溝 SD095、SD040、SD039、竪穴建物 SI059、SI028、井戸 SE028 の調査を継続。中でも特に溝 SD020 の掘り下げを急ぐ。

7.11　竪穴建物 SI053、SI054、SI067、溝 SD039、SD040 の調査を継続。遺構実測（㈱㈱九州文化財研究所）民間調査機関発注の調査区（C 区）表土剥ぎ継続。

7.12　溝 SD082、SD083、SD041 の完掘写真撮影。96H-2Grid SI054、土坑 SK092、の遺構実測等を継続実施。天気は酷暑で作業員の健康管理に注意が必要。C 区表土剥ぎ継続。

7.13　竪穴建物 SI057、SI058 調査。96F-3. 4 Grid 遺構検出作業。SI057、SI058 遺構については遺構写真撮影まで終了。C

区表土剥ぎ継続。撹乱多数のため民間委託する面積の確定が遅れる。

7.14　96-E-3.4Grid 遺構検出及び掘削。溝 SD082、SD083 完掘。竪穴建物 SI026 ～ SI028 掘り下げ。C 区表土剥ぎ継続。

7.18　溝 SD095 実測。竪穴建物 SI054、SI055 調査。遺構実測は継続。C 区表土剥ぎ。

7.20　終日降雨のため、調査は中止。110G-7Grid から 110I-11、110F-13、110H-16 を結ぶ線上から南側の調査区に関して排土置場に関する協議を実施する。

7.21　降雨のため作業中止。調査区内冠水でベルトコンベア水没。表土下 30 ㎝まで浸る。

7.24　週末の雨により調査区冠水。作業員５名出勤し終日、排水作業。

7.25　昨日に引き続き終日、排水作業。JR 線路側から多量の雨水が流れ込んでいるため水かさが減らない。

7.26　昨日に引き続き終日、排水作業。午後からは一部で遺構検出のための清掃作業を開始。大成エンジニアリング㈱本日より調査着手予定であったが、天候不順のため調査着手が遅れる。

7.27　溝 SD030、SD089、土坑 SK143、竪穴建物 SI026、SI032 掘り下げ。夏休み現場公開会について鉄道・運輸機構と協議。

7.28　井戸 SE030、溝 SD089 掘り下げ。SE028、SE029 半裁作業。竪穴建物 SI026 ～ SI028、SI032 掘り下げ。

7.31　溝 SD095 を集中的に調査。午後、玉名平野条里跡（古閑前地区）調査について鉄道・運輸機構と協議。

8.1　井戸 SE030、溝 SD095 礫群精査。遺構実測、写真撮影は断続的に実施。

8.2　竪穴建物 SI031 ～ SI033、SI026 ～ SI028 の調査。溝 SD094、SD095 の調査。大成エンジニアリング㈱（以下「大成 EN」と言う。）と調査範囲協議。富合車両基地基地（下江中島遺跡）調査行程協議。

8.3　溝 SD100 出土獣骨の精査。大成 EN と昨日に引き続き調査面積等について協議。

8.4　夏休み合同遺跡見学会実施。二本木遺跡群(田崎地区)〔国合同庁舎〕、熊本市文化財課調査区とで合同の見学会とした。見学会中も調査は継続。溝 SD095 西側の遺構検出。遺構実測継続。

8.7　96H-19、96L-5Grid を結ぶ線上での遺構検出を実施。溝 SD100 の調査。遺構実測は断続的に実施。

8.8　96H-19、96L-5Grid 付近での遺構掘り下げ並びに実測作業を継続。現調査区の 95H-19Grid 付近で熊本市文化財課による調査の表土剥ぎ作業が始まる。

8.9　竪穴建物 SI066、SI032、SI026、SI027 調査並びに遺構実測。遺構実測業務は随時実施。植木町教委中原氏調査指導のため来跡。

8.10　竪穴建物 SI026 ～ SI028、柱穴 SP661 ～ SP682、井戸 SE023 の調査。鉄道・運輸機構と本遺跡調査行程について協議を実施。安全祈願祭を実施することから調査期間の順守を鉄道・運輸機構から、当課から調査に伴う排土置場、新調査区上に置かれている材料等の移動について協議を行う。

8.11　本遺跡で最後の調査区となる 110G-7Grid から 110I-11、110F-13、110H-16 以南の調査に着手する。しかし、調査主体は大成 EN 委託部の北側の仕上げをしていることから清掃が終わった範囲からシートを張り養生を行う。午後、富合車両基地（下江中島遺跡）の協議を実施。

8.14 ～ 15　お盆のため現場作業休み。

8.16　「熱中症」について作業員を対象とした研修を実施。道具の使い方、取り扱いの注意等も併せて実施。午後は駐車場及び調査事務所周辺の除草作業を実施。

8.17　井戸 SE023 平・断面遺構実測、竪穴建物 SI038 完掘写真撮影。午後から台風対策。

8.18　台風 13 号接近による風雨のため調査中止。排水作業は継続して行う。

8.21　96L-5Grid 竪穴建物 SI059、SI060 検出、写真撮影、調査着手。井戸 SE023 半裁作業。遺構実測随時実施。

8.22　井戸 SE083、竪穴建物 SI035、土坑 SK111・SK112、井戸 SE032（不明遺構 SX014）を検出。土師杯が大量に検出。墓 ST003 一方を削平し体部下半部のみ検出。JR との協議、鉄道・運輸機構との協議をそれぞれ実施。

16：30 頃から雷雲が接近したため、作業を急遽中止する。

8.23　井戸 SE032 の土坑部遺物検出作業。大成 EN 下請けについて協議。

8.24　96A-4 ～ 6Grid 遺構最終確認後、写真撮影。玉名平野条里跡（古閑前地区）協議。

8.25　井戸 SE032 調査。㈱九州文化財研究所委託分の実測図検査。検査の途中で遺構の掘り残しが多いことに気づき、調査を実施する。民間調査委託している大成 EN 調査区（C 区）について、調査がやや遅延気味でるため工程表の修正、提出を求める。また、写真撮影について調査に着手する段階で指示していたにも関わらず徹底されていないことから撮影準備、機材、構図等について徹底するよう指示。

8.28　溝 SD095、SD098 下端付近の礫群実測終了のため撤去。

8.29　道路 SF001 以北の遺構完掘。SD095 の完掘清掃。井戸 SE025 完掘。

8.30　道路 SF001 北側清掃。午後、降雨のため作業中止。

8.31　井戸 SE017、SE019 調査。調査区内完掘した遺構の下端入れ。

9.1　95H-19 から 96L-5Grid を結ぶラインより北側の調査を完掘撮影をもって終了する。これまでの調査成果を JR 線利用者に向け路線側フェンスに掲示。大成 EN 定期協議を実施。

9.5　96C-2 から 96F-9Grid を結ぶラインまで新幹線工事のため大林 JV により埋戻し作業開始。竪穴建物 SI057、SI058 の調査を実施。床面で柱穴を確認できなかったことから掘方まで下げ、確認作業を進める。熊本市文化財課網田氏来跡。井戸 SE032（不明遺構 SX014）について、集中して出土している土師器は９世紀中頃（第二四半期）と思われる。杯のなかでやや小さいものが含まれており、い等に注意し調査を進めるようにとの指導を受ける。大成 EN と協議。実測図の記載方法について当県での使一般的に竪穴建物等から出土する遺物とは異質な感じを覚える。周辺の遺構は８世紀後半が多いので、切り合用状況と合わせるように指示。

9.7　竪穴建物 SI035、井戸 SE032（不明遺構 SX014）、溝 SD097 の調査。その他、周辺の残りの遺構調査を継続。遺構実測は断続的に実施。

9.8　昨日に引き続き、遺構調査を継続。竪穴建物 SI078、SI035、土坑 SK105 完掘。井戸 SE027 撮影時に独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所牛嶋茂氏、杉本和樹氏来跡。深度のある遺構の撮影方法について実地にて指導を受ける。井戸撮影の際にストロボ 2400W １灯を使用し、撮影のアングル、ピントの置き方、構図等について細かく注意点を教示いただ

く。大事なことは「すべてを撮らない。欲張らないこと。」

9.11　竪穴建物 SI035 写真撮影。遺構実測は継続し実施。

9.12　井戸 SE032(不明遺構 SX014)の調査も半裁作業まで進む。遺物が多くやや遅れ気味。遺構実測を継続し実施。本日より、富合車両基地（下江中島遺跡）確認調査を開始。

9.13　午前・午後で降雨のため一時調査中断。大成 EN に調査委託している調査区をはさみ、南側の調査区の調査に着手する。本調査区が当該工事予定地最後の調査区となる。(暫定的に D 区と呼称。)

9.14　井戸 SE032（不明遺構 SX014）周辺の調査を継続し実施。井戸出土の遺物量が多く調査が遅れ気味となる。
D 区の北側より清掃、遺構検出作業を開始。機関車庫（レンガ建物）があった範囲内に当たることから多数の大型の撹乱が入る。遺構は断片的に検出。

9.15　井戸の調査を実施している調査区は本日が現場引き渡し日であったが、遺物の取り上げが終わらずに協議の結果、引き渡しは延期。

9.19　井戸 SE032（不明遺構 SX014）の土器取り上げがほぼ終了し、土器集中区の下から井戸が検出されたことから、不明遺構(SX)から井戸 SE へ変更し取り扱うこととした。(以後､「井戸 SE032」とのみ表記。）土器集中部と井戸遺構切り合いは見られなかったことから同一遺構であると判断し、土器集中は井戸廃棄の際の祭祀的意味合いをもつものと考えられる。また、土坑 SK113（井戸 SE033）として調査していた遺構の埋土中から人骨が頭部のみ２個体同レベルで出土。

9.20　昨日、調査に着手した土坑 SK113 が頭骨取り上げ後の調査で、井戸であると判断されたことから井戸 SE033 へ変更。(以下、「井戸 SE033」へ変更。)

9.21　民間調査委託している C 区内で、一部委託面積からはみ出した部分の調査に着手する。これから着手する D 区も含め広い範囲で撹乱が多数入り、また一部に油が染み出している部分もあり汚染土かどうかの状況も確認しがら調査を実施する。

9.22　D 区の表土剥ぎのため調査は休止。職員全員で表土剥ぎの対応。

9.25　墓 ST004 の調査を実施。D 区表土剥ぎを継続。

9.26　D 区の表土剥ぎ終了。墓 ST004、井戸 SE039・SE040・SE044、竪穴建物 SI072 の調査を中心に調査を実施。

9.27　井戸 SE039 の調査、竪穴建物 SI071・SI073 遺構実測。井戸 SE044 完掘。

9.28　110B-28Grid から G-16Grid にかけての残存調査区完掘。写真撮影まで実施。D 区遺構検出作業。

10.2　D 区環境整備。竪穴建物 SI066 かまど部調査。福岡県瀬高郡高田町教委　猿渡真弓氏、県玉名地域振興局　青木勝士氏来跡。

10.3　D 区撹乱除去、清掃作業。

10.4　下関市立土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松下孝幸氏ほか３名来跡。墓 ST003､SE007､SE033 実測及び取り上げ作業。熊本市文化財課　原田範昭協議のため来跡。

10.5　溝 SD104 ～ SD106 検出状況撮影及び調査、D 区遺構検出作業。

10.6　D 区遺構検出作業。出土していた「二彩托」を熊本市文化財課　美濃口雅朗氏来跡。

10.10～11　溝 SD102 調査。周辺の遺構検出も併せて実施する。

10.12　D 区４級基準点測量及びメッシュ杭設置（㈱十八測量設計）溝 SD102 完掘、SD047、SD026 調査。柱穴群検出。

10.16　110L・K- 7 Grid 土坑 SK126 調査。110O・P-9・10Grid 掘り下げ。D 区の遺構実測業務は㈱埋蔵文化財サポートシステムが受託。

10.17　井戸 SE051、土坑 SK053、溝 SD102 完掘。土坑 SK054、井戸 SE045 半裁。㈱十八測量設計とメッシュ杭設置範囲再度確認作業を実施。

10.18　土坑 SK054、井戸 SE045 土層注記及び掘削。110O・P-9・10Grid 柱穴半裁作業。同時に土層半裁が済んだものから断面図実測作業に着手。

10.19　110Q-6 ～ 8Grid、R-6 ～ 8、S-7・8、O・P- 9 ～ 10Grid 柱穴群検出及び確認作業。

10.23　110P-9 ～ 10、S-9Grid 竪穴建物 SI088、SI089 調査

10.24　竪穴建物 SI087 ～ SI089、110O ～ Q-8 ～ 10Grid 柱穴群調査。竪穴建物 SI087 ～ SI089 遺物出土状況撮影及び遺構実測図作成。

10.25　110T-5 ～ 8Grid、Ⅲ層掘り下げ。

10.26　110D-8・9、P-8 ～ 10、Q-9、R-8・9 遺構検出及び調査。富合車両基地協議（鉄道・運輸機構、文化課、大成 JV）

10.27　D 区竪穴建物 SI091、SI098、井戸 SE047、110O・P-9・10Grid 竪穴建物 SI087、SI088 調査。併せて柱穴群の平面実測図作成。

10.30　竪穴建物 SI092 ～ SI094、SI089・SI090 の調査。110P-11、Q-10.11、R-11Grid 柱穴群検出、調査。

10.31　D 区竪穴建物 SI092 ～ SI094、SI089 ～ SI090、SI098・SI102 の調査。110P ～ R-11Grid 柱穴群調査。110O ～ R8 ～ 11Grid 遺構実測。(㈱埋蔵文化財サポートシステム)

11.1　竪穴建物 SI089 完掘、SI092 ～ SI094、SI091 の調査。土坑 SK132 調査。D 区大 Grid125 地区の遺構検出。遺構実測は昨日に引き続き実施。

11.2　大 Grid125 地区の近世以降の遺物を含む包含層の掘削。昨日から実施している竪穴建物 SI092 ～ SI094、SI091 の調査を継続。SI092 ～ SI095・SI098 の平面図実測。

11.6　大 Grid125 地区全体の遺構検出作業。竪穴建物 SI102、SI095 完掘。

11.7　昨日に引き続き、大 Grid125 地区全体の遺構検出作業。

11.8　110S 列以南の遺構検出作業を実施。

11.9　昨日に引き続き、110S 列以南の遺構検出作業を実施。Grid 毎に検出が終了したところから必要に応じて検出写真の撮影を実施する。

11.10　竪穴建物 SI092 ～ SI096 の調査をほぼ終了する。125P ～ R-8 ～ 10Grid の遺構検出を実施。

11.13　125P ～ R-8 ～ 10Grid の遺構検出を継続。竪穴建物を含む柱穴群を検出。

11.14　降雨のため作業は中止。事務所にて実測を受託している㈱埋蔵文化財サポートシステムと実測図チェックを実施。

11.16　125P ～ R-9・10Grid の遺構検出作業。110S 列以南の遺構検出を再度実施。最終的に竪穴建物方形プランが 10 数基以上検出される。教育長、調査視察。

11.17　110S 列以南の遺構検出写真撮影を実施。竪穴建物、掘立柱建物等が重複し検出される。110P・Q-10・11Grid 調査区東壁土層断面実測図作成。㈱九州文化財研究所

11.20　110S 列以南、遺構検出を継続。

11.21　125D-5・6、125B ～ D・E 遺構調査開始。同時に壁面の土層分層を実施。随時、遺構実測を㈱埋蔵文化財サポート

システムにより実施。

11.22　110、125 地区全般にわたり遺構検出（切り合い確認）及び調査を実施。遺構実測も随時実施。本遺跡終了後に調査に着手する下江中島遺跡（熊本市富合町）の準備を始める。

11.24　休日の谷間のため終日、調査は休みとする。下江中島遺跡の事務関連で県庁にて事務作業。

11.27　降雨のため作業は中止。

11.28　110S 列以南、切り合いを確認しながらの遺構調査を実施。竪穴建物 SI110・SI114、土坑 SK138 の調査。

11.29　竪穴建物 SI110 ～ SI112 の調査。随時、実測作業を継続。

11.30　110S・T-4Grid、125A・B-3・4Grid の遺構調査。125C ～ E-6・7 遺構検出作業。

12.1　竪穴建物 SI100 調査。溝 SD029・SD079・SD081 調査。遺構の土層断面図も含め遺構実測を継続。

12.4　竪穴建物 SI100 調査、SI114 検出。井戸 SE053、溝 SD074 調査。SK020 埋土中より遺物多数出土しているため、遺物検出状況の写真撮影を実施。吉田は下江中島遺跡の表土剥ぎ作業を開始。

12.5　竪穴建物 SI110・SI117 の調査。SI114 の検出を実施。下江中島遺跡表土剥ぎ実施。

12.6　土坑 SK020 より炭化米出土。埋土を土嚢袋に入れて採取。竪穴建物 SI111・SI113・SI114・SI117・SI118 の調査。井戸 SE052 完掘。墓 ST005 調査。人骨が出土したため検出状況の写真撮影を実施。井戸 SE049・SI050・SI053・SI054 完掘状況撮影。下江中島遺跡表土剥ぎ継続。（後日、SK020 の埋土は篩にかけ確認作業を実施したがその後の出土はなかった。）

12.8　現在、着手している調査区すべてで継続調査。遺物を伴う遺構が多いため検出状況撮影後、断続的に実測業務を実施。土坑 SK056、竪穴建物 SI117、溝 SD025 撮影。
下江中島遺跡の調査協議を実施。表土剥ぎ継続。

12.11　溝 SD029・SD080 完掘。竪穴建物 SI110、SI106・SI108 切り合い確認作業。SI100・SI104 完掘。井戸 SE054 完掘撮影、SI120 北西隅を切る柱穴遺物出土状況撮影。

12.12　墓 ST005・ST006・ST007 人骨調査のため、下関市立人類学ミュージアム松下孝幸館長ほか２名来跡。人骨出土状況実測及び取り上げ。
竪穴建物 SI100、SI104 ～ SI106・SI109・SI118 の検出及び調査。墓 ST006、ST007 の人骨、遺物出土状況の撮影。熊本大学小畑教授来跡。昨日出土した炭化米について指導を受ける。

12.13　降雨のため調査は中止。遺構実測業務を受託している㈱埋蔵文化財サポートシステム担当者と図面のチェック作業。

12.14　本日も降雨のため調査は中止。図面チャック作業。

12.15　墓 ST006・ST008 の精査、半裁作業。ST008 より昨日の取り上げ時に掘削できていなかった位置から人骨大腿骨が出土。実測後に取り上げ人類学ミュージアムへ送付。

12.18　墓 ST006 完掘。竪穴建物 SI104 カマド検出及び遺物出土状況撮影。井戸出土動物骨実見のため大分市歴史資料館木村幾多郎館長専門調査員として来跡。

12.19　掘立柱建物 SB030 柱穴半裁作業。竪穴建物 SI125 完掘。SI112 遺構南側で切り合い確認作業。下江中島遺跡表土剥ぎ。

12.20　掘立柱建物 SB030 柱穴半裁作業継続。竪穴建物 SI111、柵列 SA020 完掘。竪穴建物 SI103 の掘方調査。下江中島遺跡表土剥ぎ継続中。

12.21　竪穴建物 SI103、柵列 SA019 完掘。掘立柱建物 SB061 柱穴調査継続。下江中島遺跡表土剥ぎ継続中。

12.22　D 区古代（９世紀初頭）面、高所作業車より完掘写真撮影実施。

12.23　竪穴建物 SI099・SI100・SI104・SI118 完掘。調査に供していたベルトコンベア取り外し作業。調査区土層断面（東壁、西壁）作成。

12.26　朝から雨のなかではあったが、本遺跡の調査を終了する。工事が差し迫っていること、次の調査開始期日が迫ってることから事務所撤収、下江中島遺跡（熊本市富合町）への引っ越しを実施。

（吉田徹也、長谷部）

大成エンジニアリング株式会社

履行期間　平成18年6月18日（調査は7月14日）から平成18年11月14日

調査区　C区　1,500㎡（調査委託範囲下表参照）

日誌記入者　主任調査員　吉田 寿、調査員　小宮山

※調査日誌は調査過程を知る上で重要と判断し、原文のまま掲載している。

※本調査区では他の県直轄調査区と遺構名の重複を防ぐ目的で、すべての遺構規模の前に調査区名C、Dをそれぞれ冠し遺構番号を付すよう指示した。（例.SA001→CSA001）

7.14　本日は現場作業なし。

7.18　明日より調査関係の予定とし、本日はその準備作業を行う。

7.19　降雨により本日開始予定の作業は中止する。

7.20　降雨により現場作業中止。

7.21　降雨により現場作業中止。

7.24　現場状況不況につき作業を中止する。

7.25　現場状況不良につき作業を中止する。

7.26　暫定調査区の精査作業を開始する。

7.27　暫定区、遺構検出作業。

7.28　暫定区、遺構検出作業。当初の範囲中、南側では複数の竪穴の切り合いと思われるプランが確認される。

7.31　暫定区、遺構検出作業。精査及び一部掘り下げ。

8.1　暫定区、遺構検出作業。

8.2　暫定区、遺構検出作業。15時40分落雷により、作業中止とする。

8.3　暫定区、遺構検出作業。

8.4　暫定区に於いて遺構検出作業を継続した。※仕様書中の面積について、最終的な考査範囲の決定をみていない。

8.7　当初調査範囲内、遺構検出作業を行う。先行調査部分（西側幅7m）を中心に精査。北側に於いて、3～5軒程度の竪穴のプランを検（ママ）する。

8.8　当初調査範囲、西側先行部分について遺構検出作業。

8.9　当初予定範囲内、先行調査部分について遺構検出作業。面積について協議が持たれ調査範囲がほぼ確定となる。

8.10　面積確定に伴い当初範囲外であったDブロック内の調査につき、遺構検出作業を開始する。

8.16　確定した調査区に、5mメッシュを基本とするグリッド杭と基準杭の打設を行う。また、北側部（Cブロック）1面につき、包含層の掘り下げを行う。Cブロック先行調査部撮影。本日、グリッドが確定したので以降、包含層
出土の遺物の取り上げについては、基本的にグリッドの属性を持たせる。尚、開始以来の貴（以降記述なし）

8.17　昨日に引き続き、C・D両ブロック内での遺構検出作業を行う。先行調査部分であるCブロック西側にて溝、竪穴状の落ち込みの精査作業を中心に行う。

8.18　台風による降雨の為、現場作業を中止する。

8.21　Cブロック遺構検出作業、先行調査部につき再度の精査作業。

8.22　精査作業を継続しているが、先ずプラン撮影の為の先行調査部分についての作業を中心に行う。

8.23　先行調査部のプラン写真撮影を試みるも、午后2時過ぎに雷雨により中止になり掘削作業も中止とした。

8.24　先行調査部分（西側北部）プラン写真撮影。Dブロック遺構検出作業。15時雷雨により作業中止→終了した。調査区北部西側検出遺構プラン撮影（小宮山）

8.25　調査中央部（Cブロック）西側南部プラン写真撮影。Dブロック遺構検出。調査区中央部西側検出遺構プラン(小宮山)

8.28　調査区中央部西側プラン写真撮影（全体、単体）Dブロック遺構検出（遺構の大半は2層目の古代のものと思われる。）調査区中央部西側遺構プラン（全、単体）

8.29　Dブロック2面を精査。Cブロック北部東側を1面目の遺構検出作業。Cブロック北部東側につき1面目（中近世）の遺物包含層中の遺構検出が予想以上に困難なため、数センチ程度の掘り下げを行い、検出を試みることとした。結果、途中だが該期と思われるピット類の検出がみられる。

8.30　昨日の作業をそのまま引き続き行い、Cブロック北東部1面目遺構検出、Dブロックは若干の掘り下げも行い遺構の検出を行った。Dブロックは北側に於いて、竪穴住居1軒のほか、総柱式と思われる掘立柱建物のピット群が検出される。なお、南方に向かい遺構の切り合いの影響なのかプランの把握がやや困難となっている。

8.31　雨で午前9時より作業を開始した。Cブロック北東部1面目、Dブロック2面目遺構検出作業。

9.1　Cブロック1面目は、ピット、溝が検出され、それら全体のプラン写真撮影を行う。またDブロック遺構検出を一旦終了し、Cブロック南側より2面目精査を開始した。Cブロック1面目検出のピットはわずかでその在り方に特徴は見られない。Cブロック1面目プランCSI001、CSP001～、Cブロック西側単体プラン撮影。（小宮山）

9.4　Cブロック1面目遺構掘削を開始する。Cブロック中央部遺構検出。Cブロック北東部CSP001、CSD001。（小宮山）

9.5　Cブロック1面目遺構半裁、実測。（吉田、小宮山)Cブロック中央部遺構検出作業。（大川）

9.6　Cブロック1面目遺構掘削。Cブロック中央南側、遺構検出作業。Cブロック北東部半裁等、溝ベルト残し掘削。（吉田・小宮山）Cブロック北東部ピット、溝。セクション実測（大川）

9.7　Cブロック1面目遺構掘削、実測。中央西部（大撹乱を挟み西部）精査。Cブロック北東部ピット、溝の完掘への掘削。（吉田・小宮山）ピット、溝セクション（大川）

9.8　調査区全体を仮称①～④とする。①1面目完掘写真撮(吉田・小宮山)
①～④図挿入

9.11　①2面目包含層掘削（吉田・小宮山）、①1面目SP001～SP005、SD001平面実測(大川)、②全体プラン写真及び単体(土坑)（小宮山）

9.12　②南北溝（SD002～004）竪穴（SI01、SI02）①区包含層掘り下げ（吉田・小宮山）、②南北溝断面①SP006～011平面（大川）

9.13　②南側SD002～SD004、SI001、包含層（Ⅳ層）掘削→精査（吉田・小宮山）、②南北溝断面（大川）

9.14　③区遺構検出、②区SD002～004調査（吉田・小宮山）、②南北溝平面実測（大川）、①区2面目検出遺構プラン全体、単体撮影（吉田・小宮山）

9.15　③区全体精査、SK02調査（吉田・小宮山）、②南北溝、土坑実測（大川）、③区検出い遺構プラン全体撮影（小宮山）

9.19　③区SI005、006、008調査（吉田・小宮山）、3区SI002平面実測（大川・山中）、②区SD005～007セクション（藤木・山中）、③区SD003セクション（大川）、③区SI008、011

プラン撮影（小宮山）

9.20 SK003 ～ 005、SD008 ～ 11、SI003 掘削（新たに遺構番号を付す）（吉田･小宮山）、SD005、006 平面実測（藤木･山中）、SI003、SK004、005 間切り合いプラン写真（小宮山）

9.21 SI003 ～ 005、SD010、011、SK003、004、SE001 掘削（吉田･小宮山）、SD006、008 平面、SD008 セクション、SK003 平面実測（大川、藤木、山中）

9.22 SI005、SK004 ～ 006 掘削（吉田・小宮山）、SD008、010、011 平面、SI001 セクション、SD011 セクション（藤木・山中・大川）

9.25 ③区 SI008 ～ 011 掘削（吉田・小宮山）、③区 SK004、006、SE002 セクション、SI005 平面（藤木・山中・大川）、③区 SD005 ～ 008 完掘状況、遺構プラン（SI013、014）撮影（小宮山）

9.26 ③ SI008 ～ 011 掘削（吉田・小宮山）、③ SI008、009 セクション、SK008 セクション、SD001 平面実測（藤木･大川･山中）、③ SK004、SE001 セクション、SI012、014 カマド部プラン撮影（小宮山・吉田）

9.27 SK004、008、SE001、ＯＯ２、SI009、008 ベルト掘削、SI003、008、SK002 平面、SI008 ～ 011 セクション、③区 SE003 セクション

9.28 SE01、02、SI001 ～ 004、SI007 実測（藤木）、SE001（礫出土状況）、SI008、009（完掘）撮影（小宮山）

9.29 C ブロック SI2、12 ～ 19（吉田・小宮山）、SI002、SB001 セクション（大川・藤木）、D ブロックプラン全景、SI001、柱穴群撮影（小宮山）

10.2 C ブロック①②区 SI002、012 ～ 019、③区 SB001、SE003、004 調査（吉田･小宮山）、C ブロック SI017、018 セクション、ピット群、SE003（大川、山中、藤木）

10.3 C ブロック SI003 清掃（吉田・小宮山）、SI017 ～ 019 カマド実測（大川・藤木）、CSI003、SI001 完掘撮影（小宮山・吉田）

10.4 ①区を開始する。SI017→SI019（吉田･小宮山）、③区ピット群（藤木・大川・山中）

10.5 SI003、009 掘方掘削、SI016、015、①区ピット群調査（吉田・小宮山）、SB01、SI03（藤木・山中）

10.6 CSI003、009、SI016, 015 調査（小宮山・吉田）、SI003、009、011、SB001P2 半裁撮影（小宮山）

10.10 CSI019、20 及びそれを中心に周囲調査（吉田）、SI006、007、010 調査（小宮山）、SI006 セクション③区ピット群（大川）、SI08.09 ピット群（藤木）、調査区壁面セクション（C 区）7（山中）

10.11 SI012 ～ 020 部分、SI004（吉田・小宮山）、SB01 完掘（吉田）、SI006、007 実測（大川）、SI008、009、010（藤木）、調査区壁面セクション（山中）

10.12 C ブロック SI002、013、14、004、007 調査（小宮山）、SI012、016、020 調査（吉田）、SI004、007 実測（大川）

10.13 本日より D ブロック調査区の遺構掘削を開始する。C ブロック SI002、013、014 調査（小宮山）、DSD001 調査（県 SD053）（吉田）、C ②区 SP 群実測（山中）

10.16 D ブロック DSD001、DSK001 調査（吉田）、C ブロック SI013、14、17、19（小宮山）、C ブロック SK001 セクション（大川）、C ブロック①区 SP、SK 群 SK004 実測（山中・藤木）

10.17 D ブロック DSD001、DSK001 サブトレ設定→掘削（吉田）、CSI013 ～ 20（小宮山）、DSK001 セクション（大川）、SI003、014（山中・藤木）

10.18 DSI001 ～ 003、007 調査（吉田）、CSI013、14、12 カマド調査（小宮山）、SI016、SK061、160、11、14 実測（山中）、SI013 床、SI012 カマド半裁（小宮山）

10.19 DSI001 ～ 003、007 サブトレ（吉田）、CSI002、012、017 調査、CSI012 カマドセクション（大川）、①区ピット群（山中・藤木）

10.20 D ブロックサブトレ掘削、SI001（吉田）、CSI002、012 清掃、013、017 掘削（小宮山）、CSI002、017 掘方、SI012 カマド完掘撮影（小宮山）

10.23 D ブロック SI002、007、003 遺構重複部調査（吉田）、CSI013 ～ 020）（小宮山）、SK026、SP182、178、SK113、100、180 実測（藤木）、SK101、103、105, 108、109、106、068（山中）、DSI002、3、7 セクション（小宮山）

10.24 DSI001、2、7、3、6、SE001、SI008、009、その他重複部（吉田）、SI13 ～ 20（小宮山）、CSI013、014（大川）、DSD001 ～ 004、008 ～ 010 実測（藤木）、CSI013 カマド半裁（小宮山）

10.25 CSI002、SI012 ～ 20 調査（小宮山）7、DSI001 ～ 3、6 ～ 9 調査（吉田）、DSI008 ～ 10 実測（藤木）

10.26 CSI013 掘方掘削（小宮山）、重複部、SI004、005（いずれも熊本市との境界線上）調査（吉田）、DSI001 セクション、DSP16、DSI002（藤木）、①区ピット群（山中・大川）

10.27 C ブロック SI037、017 調査（小宮山）、D ブロック遺構の切り合い部分調査（吉田）

10.30 D ブロック遺構重複部調査、想定プラン（SI009）を設定し、それらに切られる各面をプラン実測（藤木）

10.31 D ブロック主に SI009 掘削後の 011、015、017 の掘削を進め、掘方による把握に努める。

11.1 D ブロック重複部、SE002 調査（吉田）、サブベルトセクション SP、SI04、05、SE02 実測（大川）、D 北側柱穴群（SB001）、DSE001 撮影（小宮山）

11.2 D ブロック全面精査後、全景写真の撮影を行い発掘作業を終了した。

11.7 高所作業車より全体写真撮影を行い発掘調査を終了した。

3　第 14 次発掘調査日誌

2010 年（平成 22 年）７月 20 日

調査担当者　文化財調査第一係　長谷部善一

125J・K-4・5Grid 内に位置する。調査面積は調査区上端で 2m × 10m（20 ㎡）

遺構実測業務　㈱埋蔵文化財サポートシステム

7.20　鉄道・運輸機構により図りだされた工事範囲を重機を用い掘削する。（表土剥ぎ業務）

地表から約 1.5m は旧熊本駅造成時に背後の万日山山塊の一部を削り埋められた層を確認。客土中には近現代の陶磁器をはじめ、鉄片、ガラス等が多数含まれる。現地表から約 1.8m 下で調査の対象としている褐色土層（４b）を確認。よって、調査はその上層にあたる３層（黒色土）で止め調査を実施することとした。

7.21　３層の掘削を開始する。遺物は古代の土師器、須恵器を中に出土するが遺構は確認できない。

7.22　主な作業は３層掘削。昨日に比べやや大きめの土器片が J-4・5Grid で出土し始めるも遺構は検出できない。遺物は南側 K-4Grid にかけてやや減少する。３層中より獣脚円面硯の脚部のみが１点出土する。

7.23　３層掘削。４層直上まで掘り下げ遺構検出を試みるが、J-4・5Grid では検出できなかった。K-4Grid では柱穴と見られる遺構を検出。

7.26　３層掘削を終了し４層上面で遺構検出を実施。竪穴状遺構と見られる方形掘り込み１基、柱穴数基を検出する。

7.27　遺構検出状況撮影後、各遺構の調査に着手する。昨日検出した竪穴状遺構は掘削を開始した時点で遺構ではなく、地形の緩やかな落ちでると判断されたため遺構から除外した。この結果を受け再度、遺構検出作業を実施した。３層の堆積状況再度確認し自然堆積によるものかどうかを検討する。

7.28　午前中は天候不良のため出土遺物の整理を行う。午後から改めて遺構検出を実施し、遺構の切り合い関係を把握する。現段階では柱穴、土坑状遺構以外に遺構は確認できていない。

7.29　以前に竪穴状遺構としていた部分は柱穴の集中部であることが確認されたため、改めて遺構を見直すと本調査区検出の遺構はすべて柱穴であることが判明した。柱穴埋土は遺物包含層としているやや混入物が多い黒色土層（３層）に由来する土である。また、埋土の状況から複数時期の遺構が切り合っている状態ではないことも分かってきた。

7.30　昨日までで検出した遺構の調査を実施し終了する。S26 のみ断面で柱痕が確認された。遺構実測に着手。

8.2　朝から清掃後、完掘撮影を実施する。遺構の面は古代おおよそ８世紀後半から９世紀初頭と判断される。その後、遺構平面図及び土層断面図作成（土層注記）まですべての作業が終了。

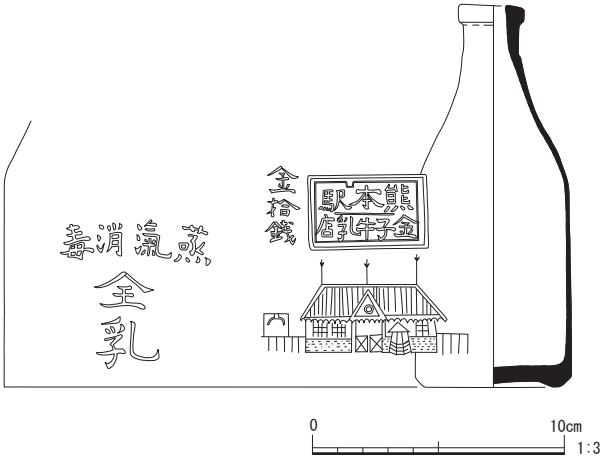
（長谷部、㈱埋蔵文化財サポートシステム 上高原 聡）

コラム２　旧熊本駅出土の遺物

熊本駅銘入　牛乳瓶

平成 16 年（第６次）調査に着手した際に表土剥ぎ時に近現代の鉄道関連出土遺物遺物がまとめて廃棄された中から出土したものです。瓶は縦 15.2 ㎝、口径 2.6 ㎝、底径 6.2 ㎝の大きさで円筒状をしています。飲み口となる口縁部では厚く作られ瓶自体のガラスの透明度はやや低く濁っています。、瓶外面には表面に二段に渡り「熊本駅 金子牛乳 金拾銭」、裏面に「蒸気消毒」その下段に縦に「全乳」と縦書きされています。

昭和 33 年３月 20 日に現在の形となる熊本駅が竣工していることから、それ以前の建物といえます。さらに、図をよく見ると正門となる中心部分の右側に小さな施設が敷設されているのを見て取れます。この建物は今では何の役割をしていたのか分かりませんが、当時の熊本駅を撮影した写真を見ると高さ約 3m 近くあり、屋根はドーム状に丸みを帯び本体建物は現在の電話ボックスを一回り大きくした建物であったのを見て取れます。さらに、この建物は明治 38 年の日露戦争での傷病兵が帰還した際に撮影されている写真にも写っているのを確認することができます。しかし、大正３年４月に解体新築され、その後、大正７年の熊本駅を写した写真の中にはこの建物はないことから、牛乳瓶が消毒を繰り返しながら使われていた時期は明治 24 年以降、大正３年以前のものと考えられます。



参考文献

『線路は続くよどこまでも』熊本鉄道管理局記念誌　製作・発行　日本国有鉄道熊本鉄道管理局　発刊昭和 62 年３月 31 日

第３章　遺　構

調査区は新幹線「新熊本駅」建設に伴い南北に全長約 375m、東西に最大幅約 37.5 mを測る細長い調査区である。調査時には最初に調査に着手した北側からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区と調査区を設定し調査を実施した。本書ではこの呼称は正式には用いないが、説明上必要な場合は用いていることがある。

総発掘調査面積は最終的に 12,700 ㎡を測り、全域で古代から近現代までの遺構を検出した。しかし、鉄道施設に関連する建物群による撹乱や、JR 九州施設に関する建物群及び営業線隣接という条件のもとでの調査となり、当初は困難を極めた。また、調査途中で鉛汚染による土壌汚染の報告があるなど、調査に際して極めてデリケートな問題も発生した。

１　遺跡の調査

律令国家の地方支配の要として地方行政官庁である国府が全国的に成立してくるのはおおよそ養老、神亀から天平期（８世紀前半）とされる。そのなかで肥後の国府についてはいまだに諸説あり確固たる場所が確認されたところはない。二本木遺跡群もそのなかの一つで江戸時代からその可能性は指摘されている。大正年間には、八木田政名により『新選事跡通考』のなかで二本木が四神相応の地であるとされ、また、二本木地内から奈良時代の古瓦が出土することから、乙益重隆氏、松本雅明氏、佐藤伸二氏により有力な国府推定地として研究され現在に至っている。1999 年から始まった熊本市教育委員会による民間開発に伴う「二本木遺跡群第 13 次調査」で、８世紀中葉の古代官衙とみられる８間×８間の総柱建物が検出されるなど国府推定地としての可能性をもった遺構が確認されている。また、当該遺跡は九州新幹線全線開業に伴う熊本駅周辺整備及び熊本駅西土地区画整理事業等により熊本県・熊本市による数次に渡る調査が行われ、なかでも熊本市による第 28 次調査区からは村落内寺院と考えられる方形区画に囲まれた掘立柱建物群やそこから出土した唐三彩陶枕片など県内では他に類例を見ない遺構・遺物が出土している。

このような周辺の調査状況の中で迎えた「二本木遺跡群（春日地区）６次調査」では、調査面積も広大であったことから多くの遺構と共に古代から近現代までの調査を実施することができた。

２　遺構各説

（１）中世（方形区画内及び周辺）の遺構群

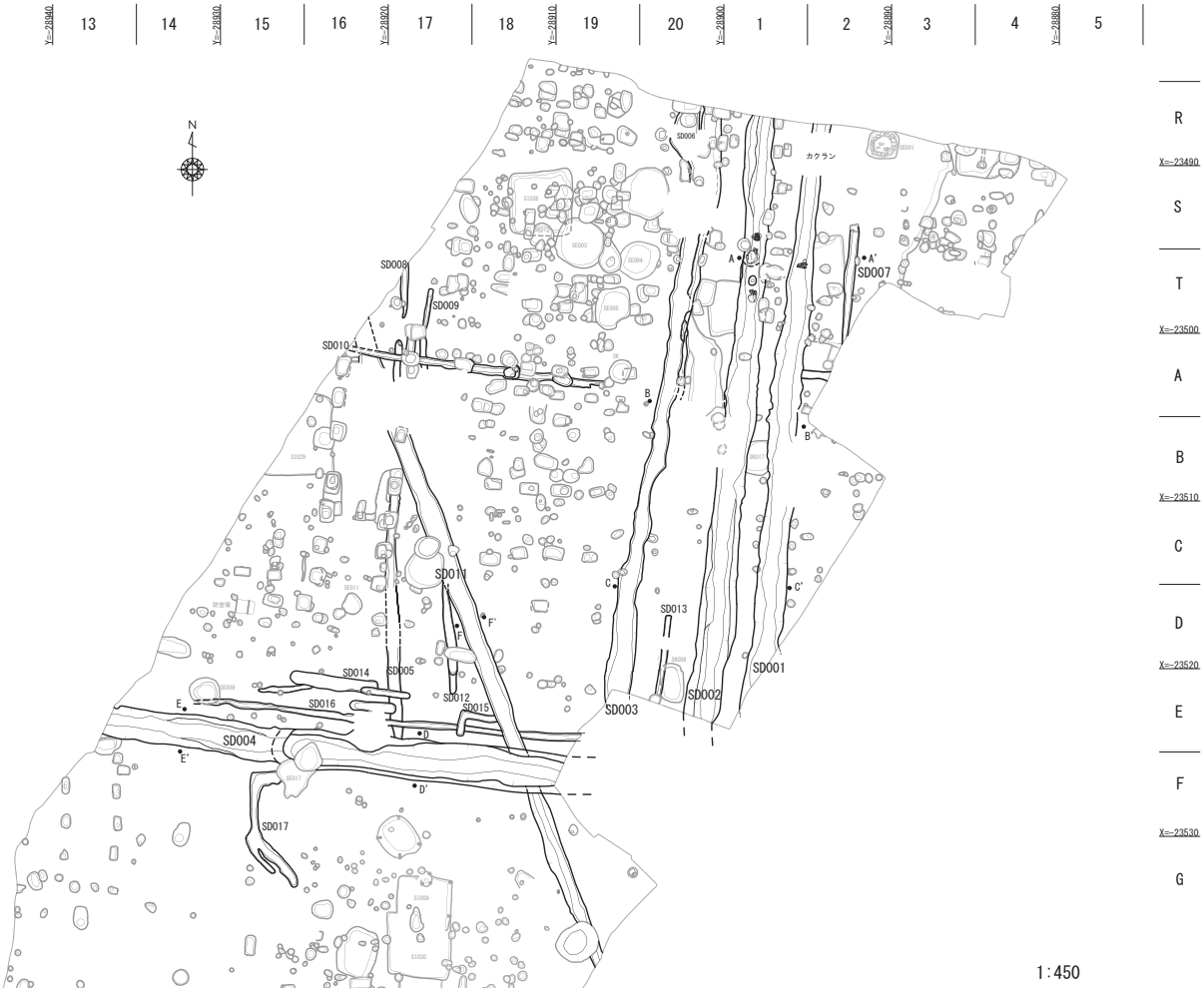
古代の遺構が多数を占める当遺跡のなかで、14 世紀から 15 世紀頃の遺構として確認した一群である。調査区のなかでは当該遺跡中、最高所にあたる。周辺に長く JR の関連施設群があったことから建物基礎による掘り込み、鉄道施設等の掘り込みが多数あり、遺構の残存度は良くない。

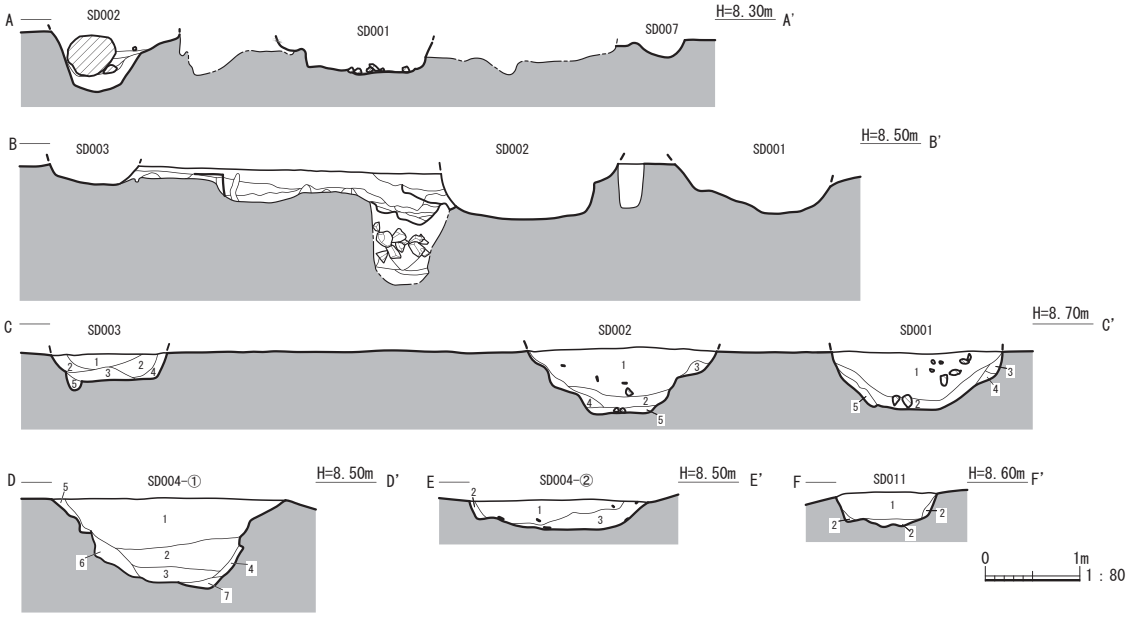
溝 SD001 ～ SD004（Fig.9）遺構は、南北方向に平行に検出した２条溝（溝 SD001・溝 SD002）と、やや軸と規模の違う１条溝（SD003）の計３条からなる溝と、東西方向に溝 SD001・溝 SD002 と直角に交わるとみられる１条溝（SD004）の溝を検出した。南北方向に検出した溝と溝 SD004 は、JR 営業線電柱部下で直角につながるものとみられる。南北溝は全長約 36m、東西溝は約 27m を測る。溝が交わる部分は、調査工程と JR の営業線切り替え工事に伴う工事の兼ね合いから今回は、発掘調査を実施することはできていない。

主軸方向は、溝 SD001 から溝 SD003 はほぼ南北軸で N-6°-E を測り、溝 SD004 は東西に軸をおき N-96°-E と、直角に東西方向に軸をおく。遺構断面はいずれの遺構とも逆台形の掘形を持つが、溝 SD002 と溝 SD004 では掘形中段に１段の平坦面を有し、底部近くで更に深く掘り遺構込むことから類似性を持つ。幅、深度とも規模が同等なのは溝 SD001・溝 SD002 及び溝 SD004 であるが、先にあげた掘形の形状から溝 SD001 と溝 SD004 が同一の遺構であるとみられる。

両遺構は古代の遺構群と切り合っていることから９世紀代の遺物と混在しながら、在地系の土師器等とともに龍泉窯系雷文帯蓮弁文椀（Fig.116、Fig.118）、備前の大甕、擂鉢（Fig.117）が出土している。溝からの出土遺物の年代がこれら 14 ～ 15 世紀前後の遺物が最も新しいことから、これらの遺物が当該遺構の時期を表しているものと考えている。

また、断面図を作成した A-A’付近からは、掘立柱建物群を検出している方形区画内部（西側）への入り口と想定する礎石の一部及び礎石を据えていたと考えられる根石を検出していることから門跡の可能性が高い





SD001
1. 黒褐色土（7.5YR2/2）
2. 黒褐色土（7.5YR2/2）
3. 暗褐色土（7.5YR3/3）
4. 暗褐色土（7.5YR3/4）
5. 黒褐色土（7.5YR2/2）

SD002
1. 黒褐色土（7.5YR3/2）
2. 黒褐色土（7.5YR2/2）
3. 暗褐色土（7.5YR3/3）
4. 暗褐色土（7.5YR3/3）
5. 暗褐色土（7.5YR3/4）

SD003
1. 黒褐色土（7.5YR2/2）
2. 黒褐色土（7.5YR2/2）
3. 暗褐色土（7.5YR3/3）
4. 暗褐色土（7.5YR3/3）
5. 暗褐色土（7.5YR3/2）

SD004①
1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色砂質土
5. 黒褐色土
6. オリーブ褐色砂質土
7. オリーブ褐色砂質土

SD004②
1. 暗褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土

SD011
1. 黒褐色土（7.5YR3/1）
2. 黒褐色土（7.5YR3/2）

Fig.9　方形区画内溝配置図、実測図

Fig.10　方形区画内門跡 SX001 実測図

と判断し、以下に門跡 SX001 として報告する。

門跡 SX001（Fig.10.11）溝 SD001、溝 SD002 及び柵列 SA003 周辺にある門跡とみられる遺構を検出している。この遺構には先に記述した礎石根石を溝 SD002 底面に２ヶ所残し、根石上に置かれていたとみられる転石と化した石と根石上に置かれている石を検出している。また、礎石が移動され根石のみの状態で溝 SD001 基底部に１ヵ所、溝 SD002 基底部に１ヵ所、さらに同遺構南側に１ヵ所検出している。周辺には柵列に伴う柱穴列があるため、断定はできないが出入り口としての門であった可能性は高いと考える。上層が大幅に削平されていると見られることから当初の形状は確認されないが、溝 SD001 から溝 SD003 にかけ溝を直角に横断する橋の存在も考えられる。

Fig.11　方形区画内遺構配置図

柵列 SA001（Fig.12）　調査区の北端で検出し、溝 SD003 と並行に確認した柱穴列。途中１基は撹乱により消滅しているが、方形掘形による柱穴が溝に沿い並ぶ。のちに報告する柵列 SA002 に柱穴の掘形が類似すること、溝 SD003 の上端に沿って掘り込まれていることから柵列と判断した。検出した柱穴列は５基(途中１ヶ所は消滅)、検出長約 12m を測る。

柵列 SA002・SA003（Fig.13）　溝 SD001 と溝 SD002 とに挟まれた範囲で検出したが、溝 SD002 上端に近い位置で沿っていることから溝 SD002 に対して構築されているとみられる。柱穴平面形は長軸に沿い方形掘形が主で、近隣で見られる掘立柱建物と同じ形態をしている。

柵列 SA006（Fig.14）溝状の遺構に沿い掘り込まれている柱穴列。当初は溝と柱穴列は別とも考えられたが、調査を実施した中で並列する周囲に柱穴がないことから溝を伴う柱穴列であると判断した。柱穴列は方形掘形のみは４基・３間（溝長 16m 以上、柱穴列約 9m）からなる。柱穴の掘形は周辺で確認している掘立柱建物と同規模であり、基本的に隅丸方形の掘形を有し、下端まで同一レベルの深度を持つ柵列と確認した。

柵列 SA007・SA008（Fig.15）　溝 SD001 の南端近くで検出した柱穴列。SA008 は溝の東側、SA009 は溝の西側に存在する。それぞれの柵列を構成する遺構が溝を挟んで相対することから１間×２間の掘立柱建物であるとも考えられた。しかし、それぞれ逆方向に更なる柱穴の並びを検出したため、溝を挟んで相対する柵列であると判断した。柱穴平面形は円形の小柱穴で掘立柱建物を構成するほどの掘形ではない。SA007 は５基・４間（全校約 10.5m）とも考えられるが、間隔を置いて１基が南に位置するため軸線上には乗るが間が空き

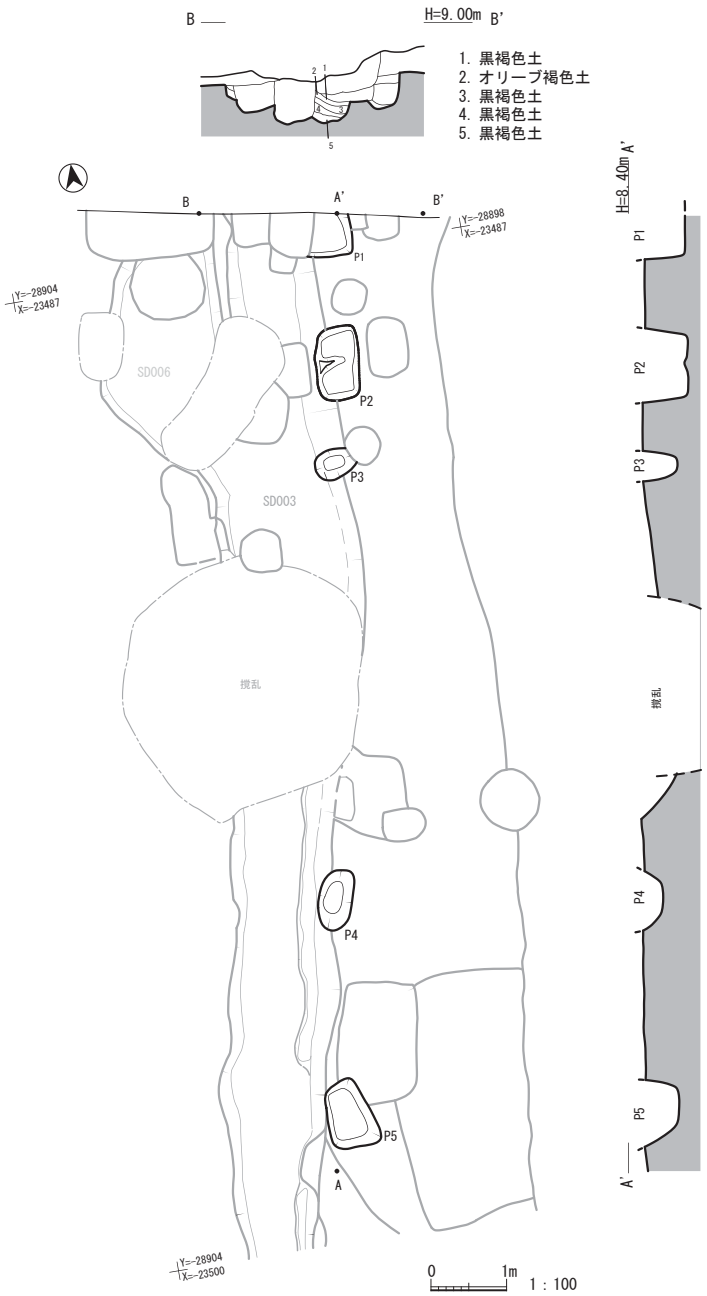


Fig.12　方形区画内柵列 SA001 実測図

すぎ、同一遺構とするにはいかがなものかと考えられる。SA008 は SA007 よりやや大きな柱穴列で並びも４基・３間（全長約 5m）で間隔もほぼ等しいものとなる。

柵列 SA009（Fig.11）　溝 SD011 により一部を切られた状態で検出している。他の柵列と同じ規模であるが、他に比べやや小さな柱穴により構成されている。柱穴列は４基・３間（約 7m）からなる。どの遺構に対応している柵列かは確認できない。

柵列 SA010（Fig.11）　溝 SD004 と溝 SD016 に挟まれているが溝と並列する柱穴列。小柱穴４基からなりやや列を乱すものもあるが柱穴列と判断した。隣接する溝 SD004 の遺構下端深度が変化する地点にあたる。柱穴列は４基・３間（全長約 6m）からなる。溝と並列することにより効果をあげる目的で付設された柵列であろう。

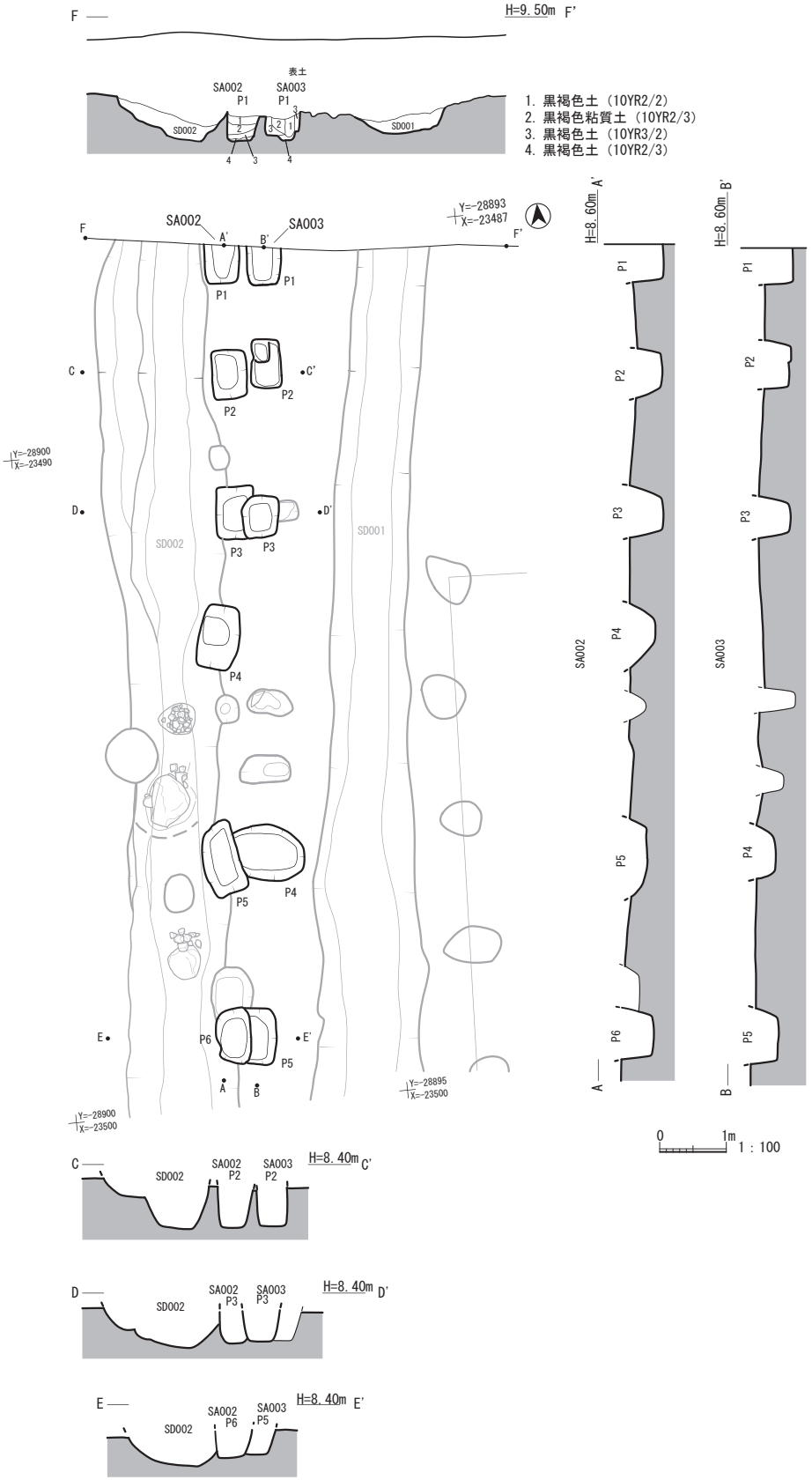


Fig.13　方形区画内柵列 SA002・SA003 実測図

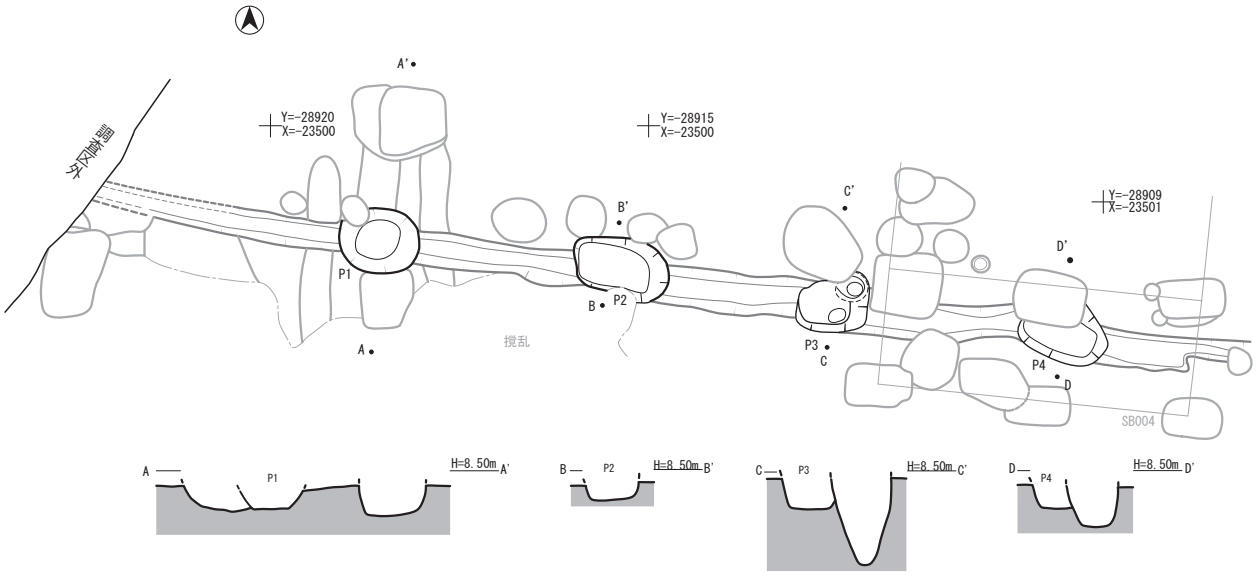


Fig.14　方形区画内柵列 SA006 実測図

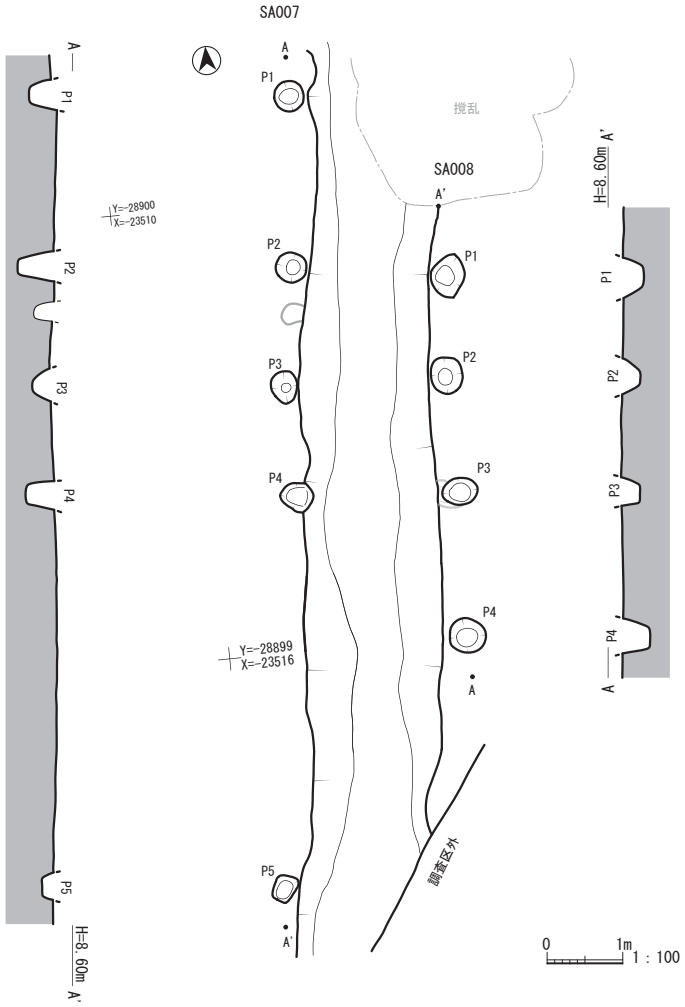


Fig.15　方形区画内柵列 SA007・SA008 実測図

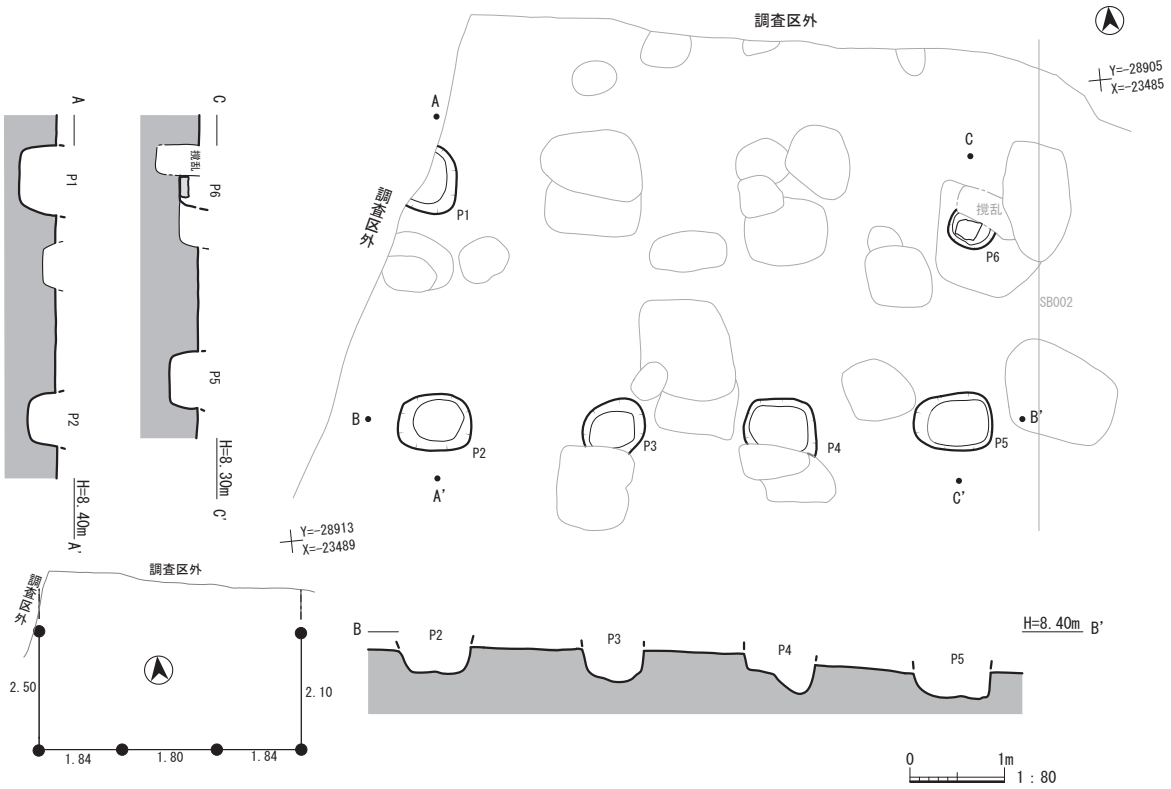


Fig.16　方形区画内掘立柱建物 SB001 実測図

掘立柱建物 SB001（Fig.16）建物の規模は確認できた範囲で桁行総長 5.48m、梁行総長 2.50m を測る。梁行側は調査区外に伸びるため全体形（規模）は不明。検出した遺構規模は梁行１間×桁行３間だが、検出できた柱穴列の規模から推測すると、おそらくは梁行２間、桁行３間からなる掘立柱建物と考えられる。柱間寸法は桁行柱間は 1.84m〔６尺〕、南北方向梁行はやや広く 2m〔７尺〕を超える。建物は柱穴掘形は隅丸方形を基本とし主軸方向に長軸をおく。P6 のみは円形で柱穴下端に板状の石を利用した礎盤をおく。

掘立柱建物 SB002（Fig.17）掘立柱建物 SB001 同様に梁行１間×桁行３間で検出した掘立柱建物。桁行総長 6.2m、梁行は残る柱から推定して 3.7m を測る。柱穴掘り込み形状はやや不定形な部分もあるが、おおよそ建物方向に沿った隅丸方形となる。柱穴の間隔は 1.80m〔６尺〕と 2.20m〔７尺〕を測る。P3 にのみ柱を据えたであろう礎盤（板状石）が残る。周辺には後世に掘り込まれた遺構も多く切り合いも多いことから、後世に掘削された柱穴もあるが、埋土の状態、遺構深度がほぼ均一などの要件を備えていることから同一遺構として捉えた。

掘立柱建物 SB003（Fig.18）溝 SD001 の東側、方形区画溝外側に位置し検出した大型の掘立柱建物。主軸は N- １°-W を示しほぼ南北に沿い、規模は梁行 9.2m、桁行 9.4m を測る。梁行・桁行とも調査区外に伸びる可能性もある。ほかの隅丸方形の掘形を有する掘立柱建物の柱穴よりやや径が小さくなり、小不定形柱穴により構成される。規模は梁行２間×桁行５間の総柱方式で、柱間寸法は梁行東西方向に平均 4.50m〔15 尺〕、桁行 1.75 mから 1.95m を測り平均して 1.90m〔６尺〕を測る。同建物に類似する遺構としてのちに報告する掘立柱建物 SB010 がある。

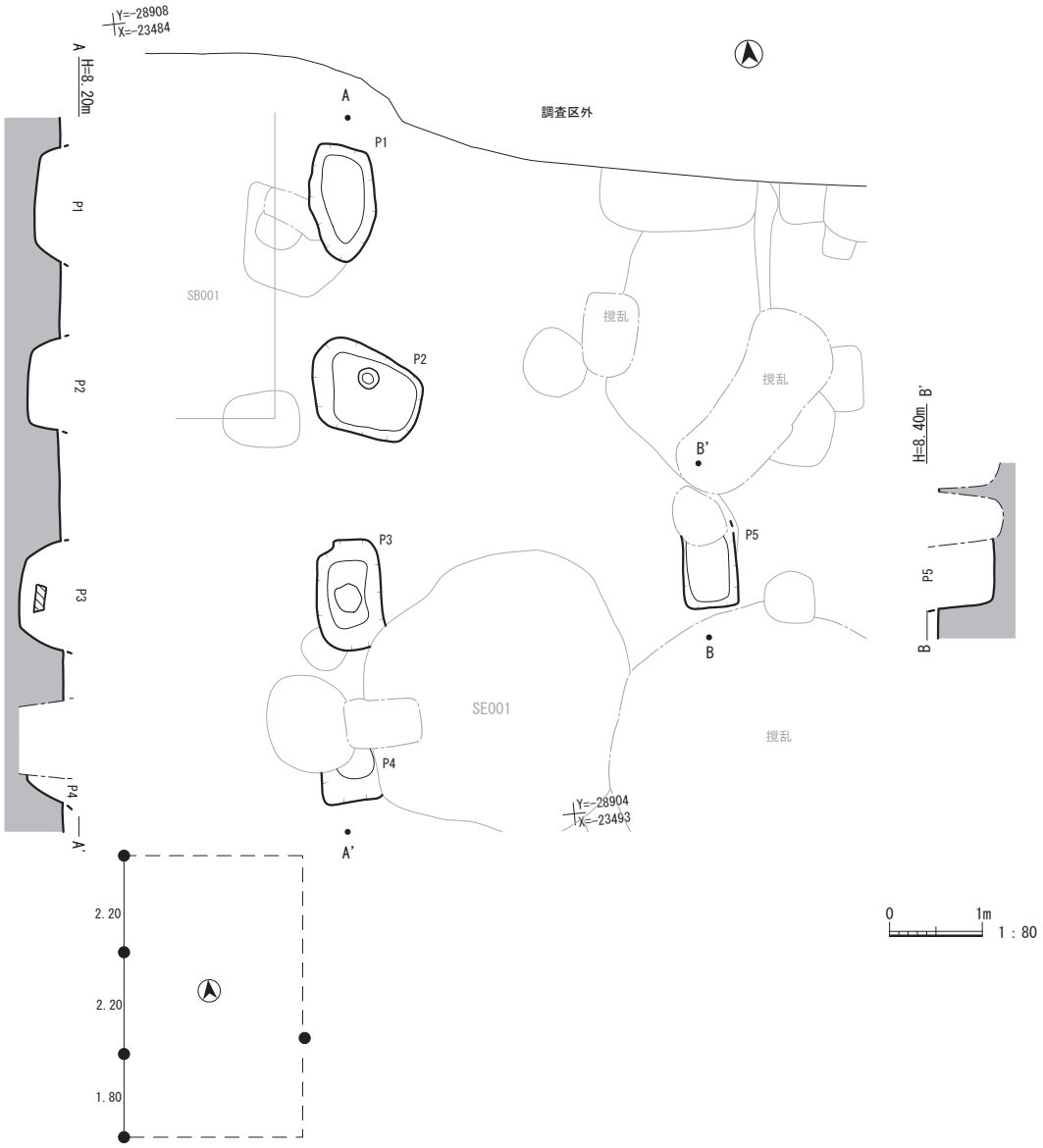


Fig.17　方形区画内掘立柱建物 SB002 実測図

掘立柱建物 SB004（Fig.19）掘立柱建物 SB005 に先行して建てられた掘立柱建物。主軸は N-4°-E を測る。桁行総長は 5.2m、梁行総長は 4.0 mを測る。変則的な２間×２間の建物だが、他の掘立柱建物規模からすると２間×３間と同規模である。北西隅を基点とし桁行で柱間が南に寄り１間分抜ける。柱間寸法は桁行柱穴間で 3.70m〔約 12 尺〕、1.50m〔５尺〕間を示し、梁行間は 2.00m〔約７尺〕の間隔を有する。柱穴掘形は建物に沿った方向は示さず、東西方向に長軸をおく。P5、P7 に柱座と見られる小柱穴が下端に残る。

掘立柱建物 SB005（Fig.20）掘立柱建物 SB004 を切り検出された掘立柱建物。平面形はほぼ同規模であるが、主軸は N-1°-W とやや西に軸を振る。桁行総長は 5.70m、梁行総長は 4.38m を測る。梁行２間×桁行３間であるが、梁行では中間の柱を検出していない。相対する柱間は梁行 2.10m〔７尺〕、桁行は平均 1.90m〔約６尺〕を測る。このことから、この妻部に扉口等の柱間装置が設けられていた可能性も考えられる。柱穴平面は掘立柱建物 SB004 が長方形掘形であったのに対してややいびつな円形である。

掘立柱建物 SB006（Fig.21）調査区西端に接し検出した掘立柱建物。建物主軸は N-6°-E を図る。撹乱により一部の柱穴が失われているが１間×３間により構成される建物である。桁行総長は 6.20m、梁行総長は 4.10m

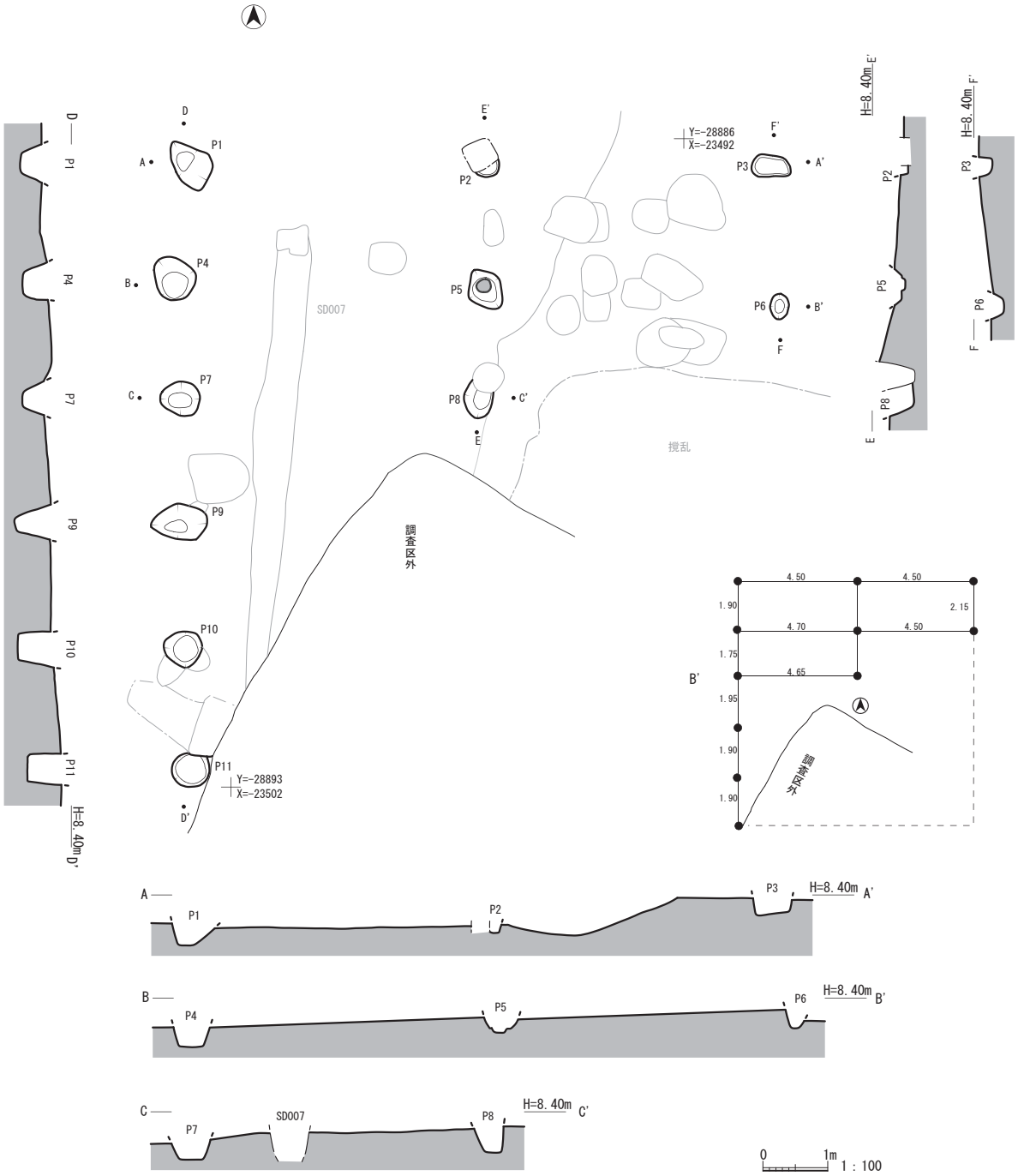


Fig.18　方形区画内掘立柱建物 SB003 実測図

を測る。桁行で 2.20m〔７尺〕、梁行で 4.10m〔14 尺〕の間隔を持つ。柱穴は建物主軸方向に長軸を持ち隅丸方形に掘り込まれる。P1 には柱痕が明確に残り、P3 には柱座をわずかなくぼみを持ち検出した。

掘立柱建物 SB007(Fig.22)掘立柱建物 SB008 廃絶後に建てられた掘立柱建物。主軸方向はおおよそ 90 度振り、主軸を東西に有し、N-88°　-W を図る。梁行総長は東側で 4.00m、西側で 4.40m 桁行総長は 6.20m を測る。柱穴は主軸方向に長軸を持つ隅丸方形を呈し並び、梁行２間×桁行３間で東側梁行側では中間に柱を配置しておらず、4.0m〔13 尺〕、西側梁行では中間柱を配置することから、1.60m〔５尺〕、2.80m〔９尺〕となる。このことから、この妻部に扉口等の柱間装置が設けられていた可能性も考えられる。

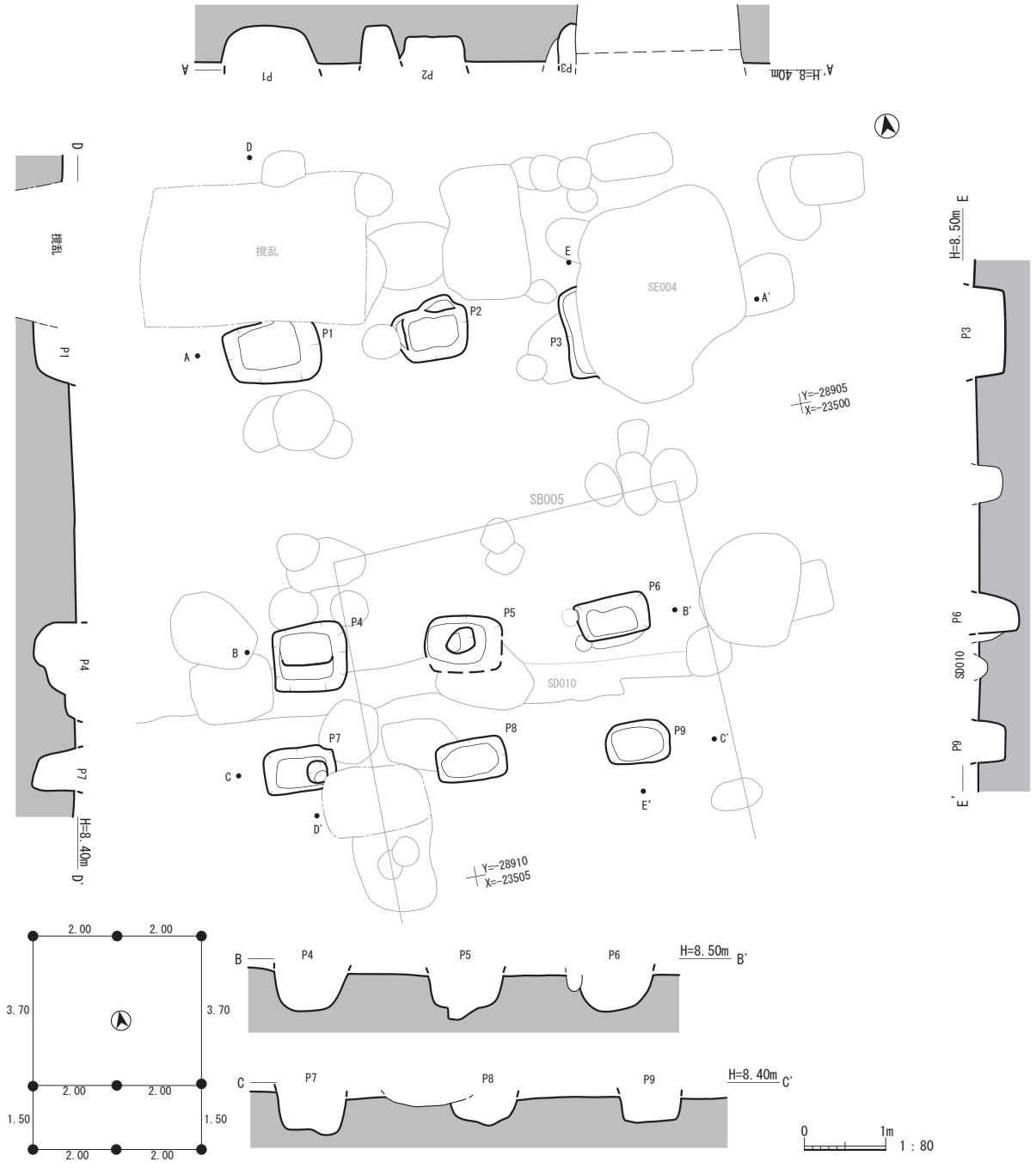


Fig.19　方形区画内掘立柱建物 SB004 実測図

掘立柱建物 SB008(Fig.22)掘立柱建物 SB007 に先行する掘立柱建物。主軸を N-10°-W にとる。桁行総長 4.94m、梁行 4.3m を測る。柱間寸法は梁行北側で 2.30m〔８尺〕、2.00m〔７尺〕、梁行方向 2.70m〔９尺〕、2.24m〔7.5 尺〕を測る。梁行北側に柱間柱を置くことから、この妻部に扉口等の柱間装置が設けられていた可能性も考えられる。柱掘形は主軸に合わせた長軸を意識したものもあるが、大半は楕円形の小規模な掘形である。

掘立柱建物 SB009（Fig.23）掘立柱建物 SB010・SB011 の廃絶後に建てられた掘立柱建物。主軸は N-10°-E に有し掘立柱建物 SB011 に比べ約 90 度主軸を南北方向に振る。桁行総長は 5.9 m、梁行総長は 3.60m を測る。柱穴は主軸方向に長軸を持つ隅丸方形を呈し並ぶ。規模は梁行１間×桁行３間で掘立柱建物 SB006 と同じ柱穴の配置となり、梁行 3.60m〔12 尺〕、桁行平均 1.90m〔６尺〕を測る。桁行東側柱穴列では他の建物と比べ柱痕がよく残っており P5、P6、P8 で根固めの様子を見ることができる。桁行西側柱穴列においても P4 でよく柱痕及び根固めの状況がよく残る。

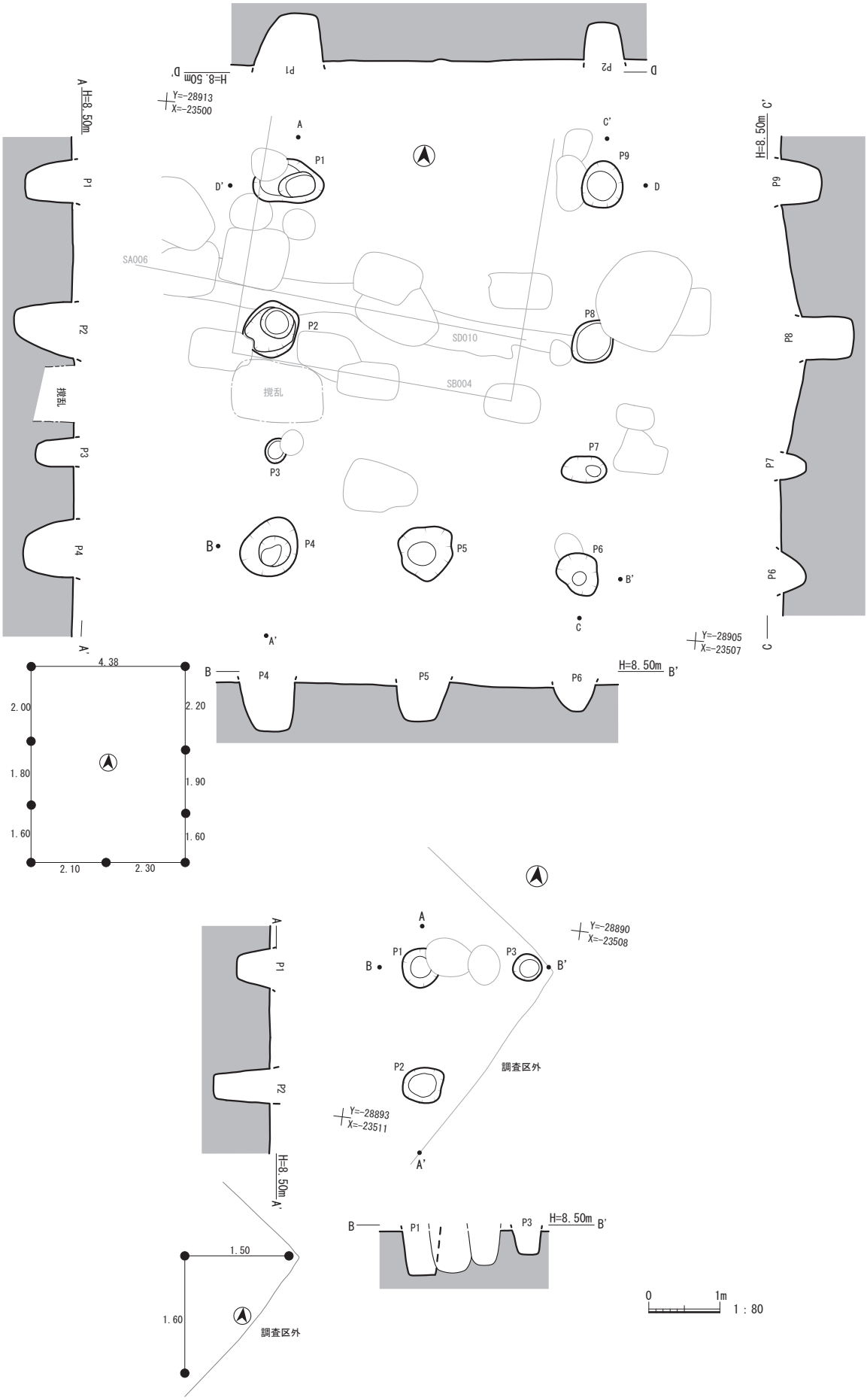


Fig.20　方形区画内掘立柱建物 SB005（上）・SB012（下）実測図

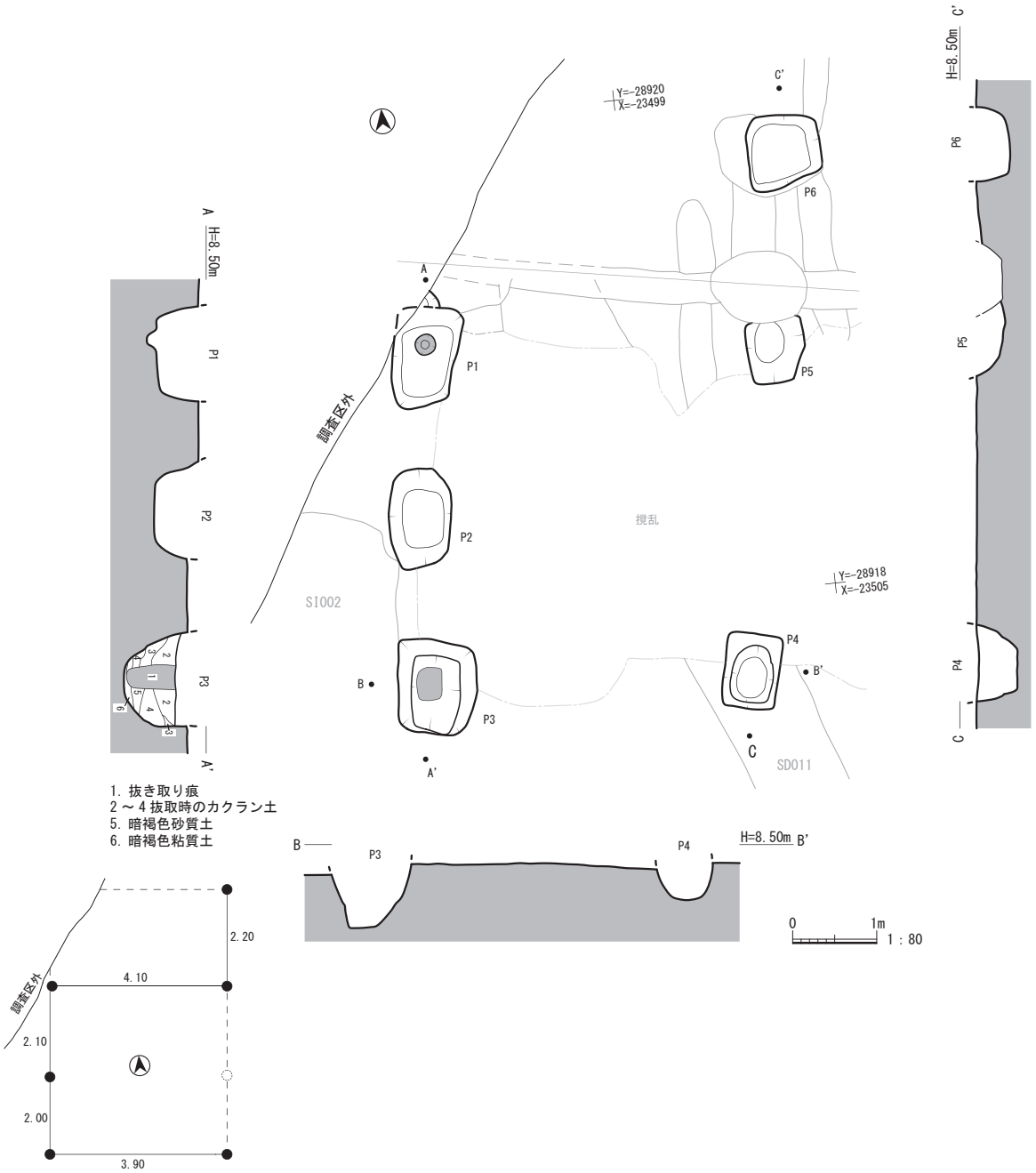


Fig.21　方形区画内掘立柱建物 SB006 実測図

掘立柱建物 SB011（Fig.24）掘立柱建物 SB009・SB010 に切られ検出した掘立柱建物。最も小規模な柱穴列を配するが、総柱による構造をなす。柱間の検討から桁行側に４間、梁行側に３間となる。桁行総長は 9.45m、梁行総長 6.35m を測る。また、南側に 1.2m の距離をおき４間（推定）からなる側柱を検出する。建物を構成する柱をすべて検出できたわけではないが、柱穴列の状況から復元を試みた。

掘立柱建物 SB010 は、調査時に平面図は作成しているが断面図及びレベル未記入であったため、図化できなかった。よって、平面図のみ掘立柱建物 SB011 中に梁行２間×桁行３間（推定）であったと報告する。

掘立柱建物 SB012（Fig.20）掘立柱建物 SB003 の南に位置し遺構の大半が調査区外にあたる。おそらく、遺構の北西隅の一角が検出されているものであろう。検出した規模は１間×１間で桁行、梁行の区分は不明。

掘立柱建物 SB013（Fig.23）溝 SD004 の南に位置し、方形区画の外に当たる位置で検出した掘立柱建物。主軸を N-3°　-E を測る。桁行総長は 5.64m、梁行 3.02m、桁行３間、梁行１間での規模である。柱間寸法は梁行間は平均 2.0m〔約７尺〕、桁行間は 3.02m〔10 尺〕を測る。掘形は主軸方向に長軸を有する隅丸方形で径 12 ㎝の柱痕を残すものもある。

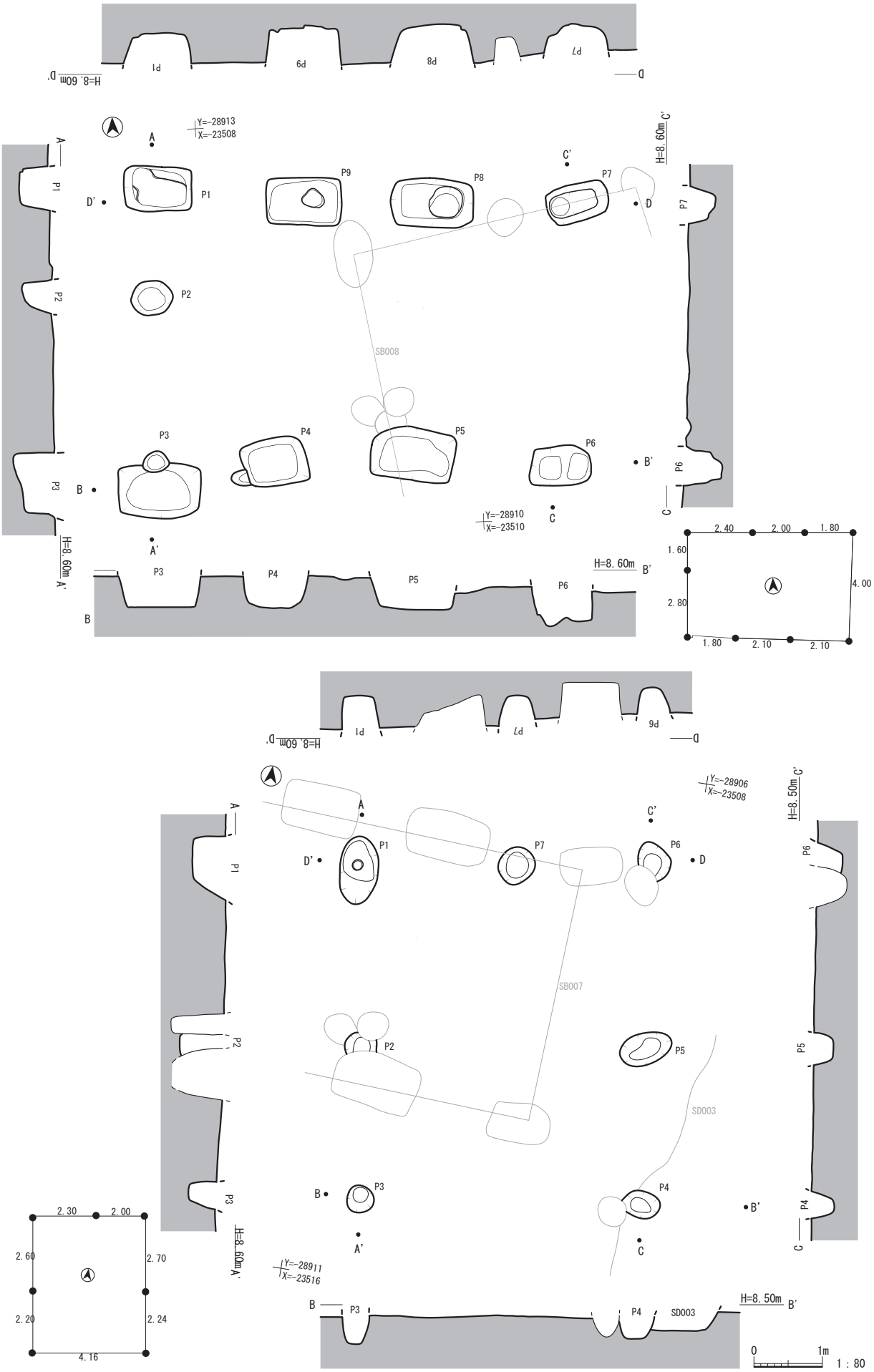


Fig.22　方形区画内掘立柱建物 SB007（上）・SB008（下）実測図

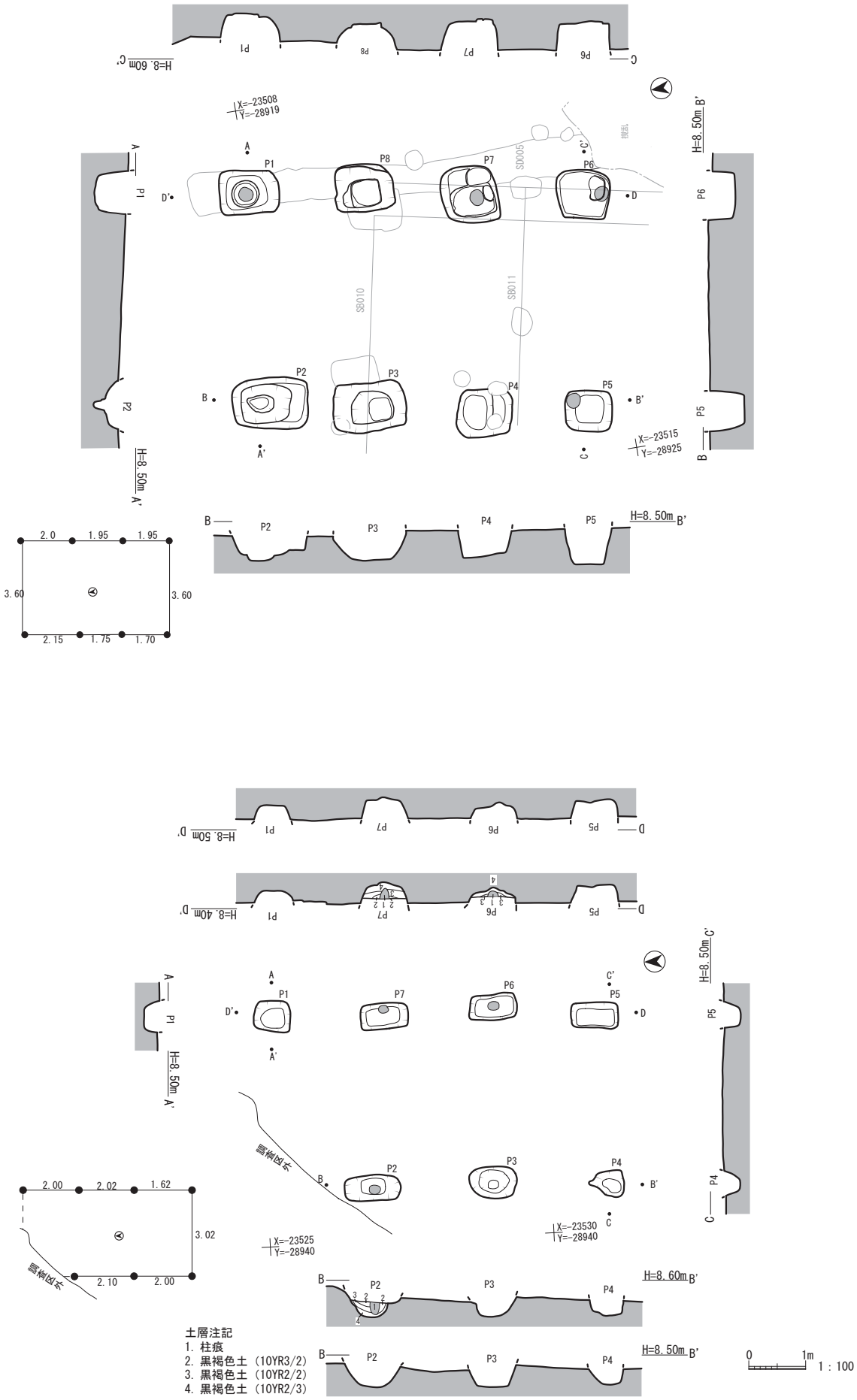


Fig.23　方形区画内掘立柱建物 SB009（上）・SB013（下）実測図

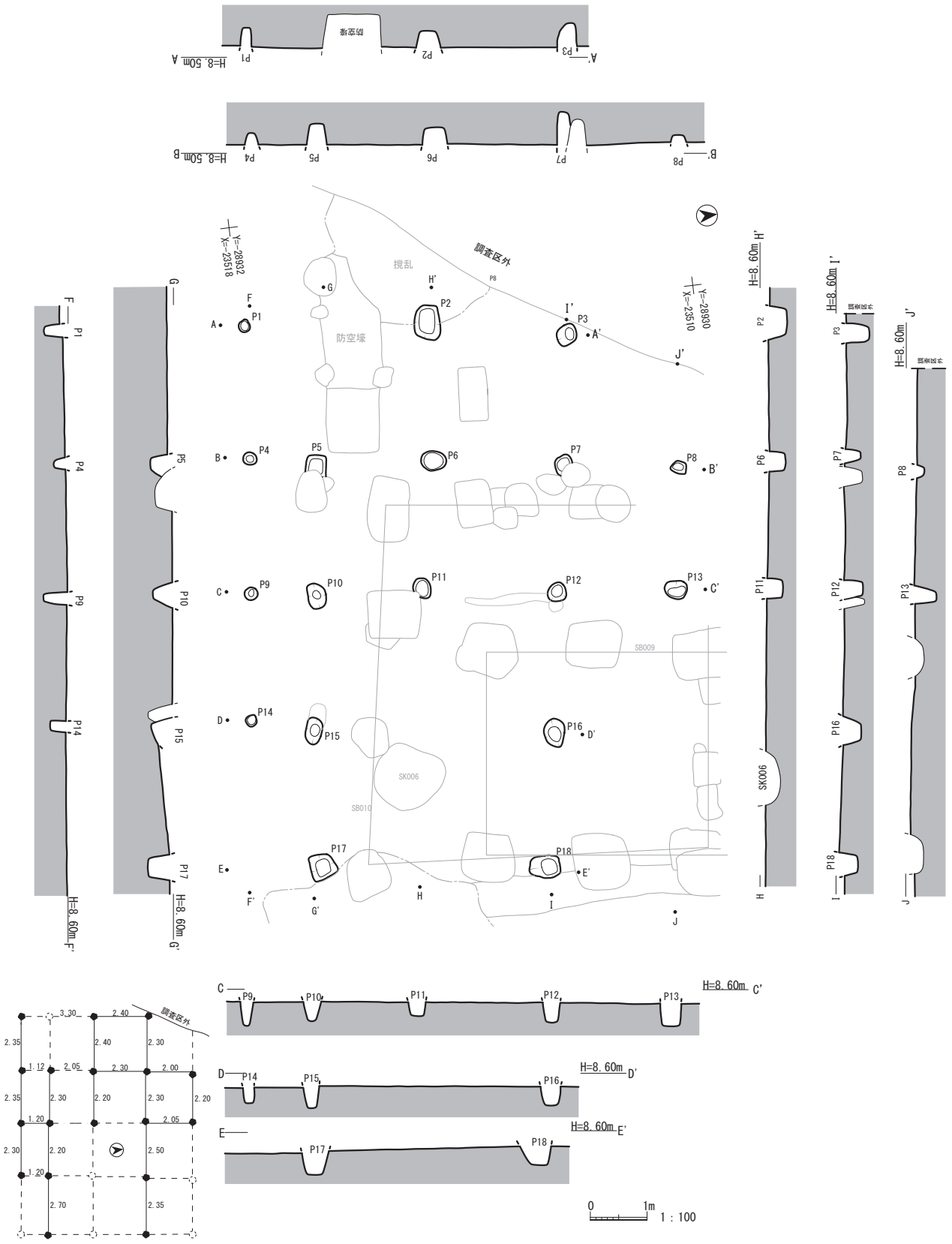


Fig.24　方形区画内掘立柱建物 SB011 実測図

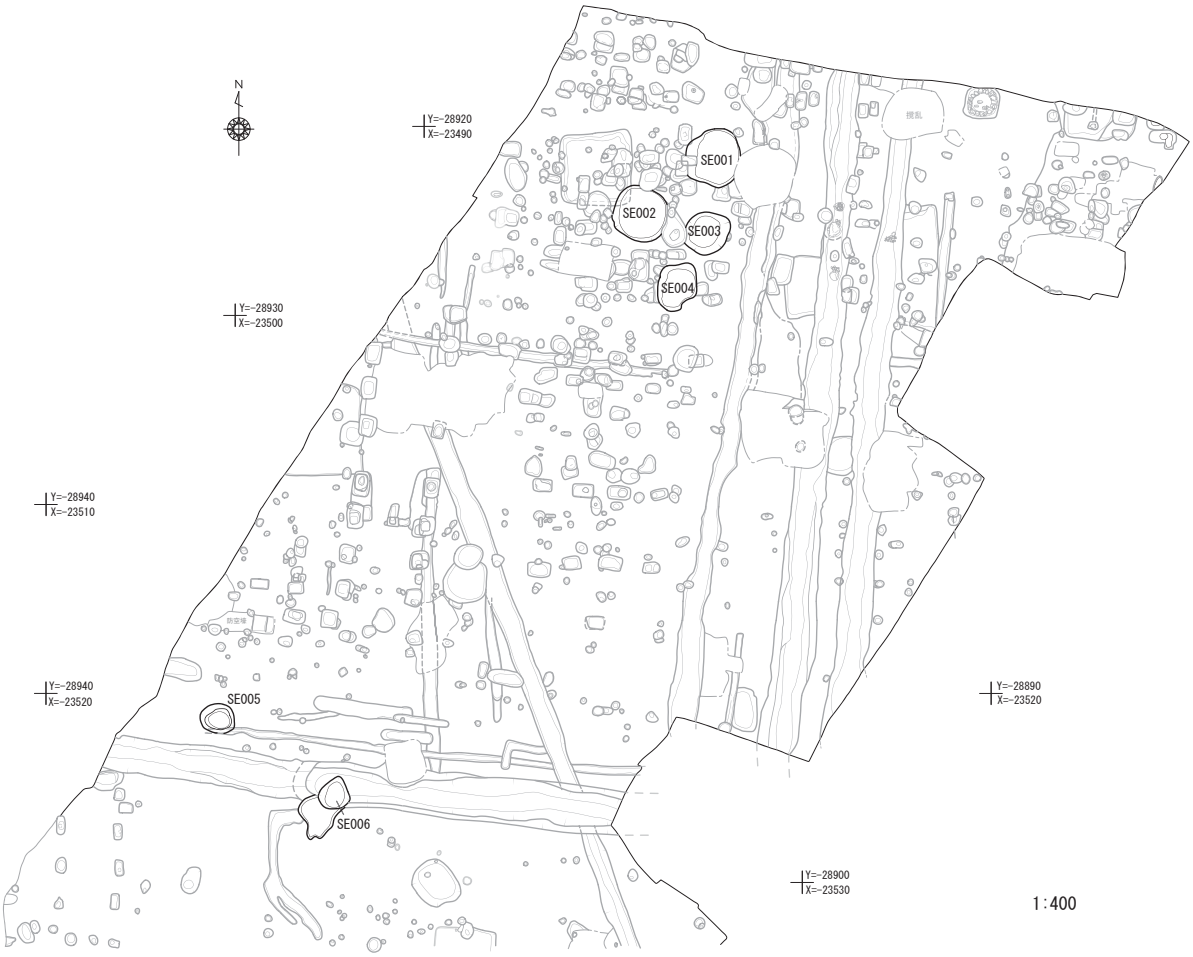


Fig.25　方形区画内井戸遺構配置図

井戸 SE001（Fig.26）周辺で検出している他の遺構に比べ、やや規模の大きな掘形を持つ。土層断面の観察からは、やや複雑ではあるが南側からの流れ込みが見られ、自然堆積ではなくブロック状に投げ込まれた状態を示しているように窺える。上層にあたる 1 ～ 10 層では灰層が堆積しており他の遺構同様にシルト状に潰れた状態で検出している。埋土中からは糸切り底土師皿、ヘラ切り底土師皿、白磁椀が出土していることから 13 世紀から 14 世紀頃と想定される。

井戸 SE002（Fig.27）周辺の土坑を切り円形に掘り込まれた遺構。掘形は上端から垂直に掘削後に、西側で平坦面を 1 段もち、その後緩やかに弧を描きながら下端へと向かう。底面は平面をなさず円弧状のままである。埋没過程は土層を見る限り、自然堆積による埋没とみることができる。13 層にあたる埋土中では砂岩質のブロックが転がり落ちる状態で含まれていた。本遺構でも検出した時点で設定した土層の最上層部に炭化物を粒状に含む灰層を 3 層に渡り見ることができた。この灰層は中世の遺物を含む井戸遺構では見られる層である。灰層は土壌化せずシルト状に潰れかかった状態で確認した。土坑の可能性もあるが、この深度でも掘削後には水が染み出し、数日後には溜まっていたことから井戸の可能性もあるため井戸として報告している。埋土中からは糸切り底土師皿、板状圧痕土師皿、研磨土師器椀等が出土していることから 13 世紀以降の時期を想定できる。

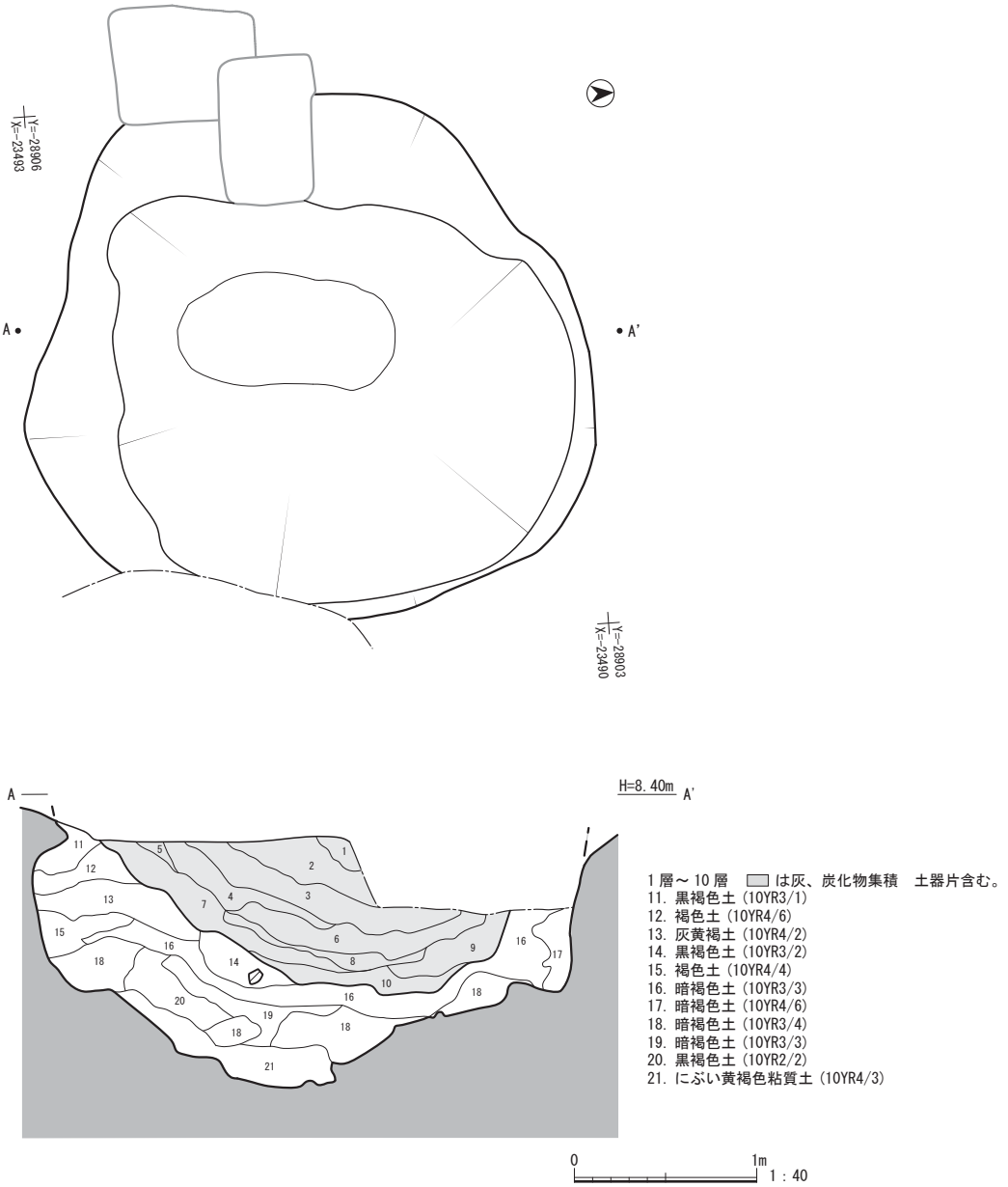


Fig.26　方形区画内井戸 SE001 実測図

井戸 SE003（Fig.28）掘形は検出した上端から垂直に掘り進めたあと、中央に向かい狭まり更に中心部のみ深度をまし底面を形成する。1 ～ 4 層で灰が土壌化して堆積しシルト状に潰れている。この灰層下面で土層が安定している状況から、埋没が一時的に止まるか緩やかになっていたものと見られる。本遺構完掘後、底面付近では掘削翌日に水の染み出しが見られ、その後常に水が溜まった状態となった。後述するが、古代の井戸とは深度が明らかに違うため井戸ではない可能性もある。

井戸 SE004（Fig.28）掘形平面はこれまでになくいびつで、併せて下端も上端と同じく不定形である。下端は南側でフラットな面を持ち北側に寄った位置で掘形が垂直に落ち始める。土層断面を見ると北側の井戸部へ向かい落ち込む土層が見られることから、自然堆積による埋没であることが想定される。埋土中からは、糸切り底土師皿、ヘラ切り後板状圧痕底皿・杯等が出土していることから 13 世紀から 14 世紀頃と想定される。

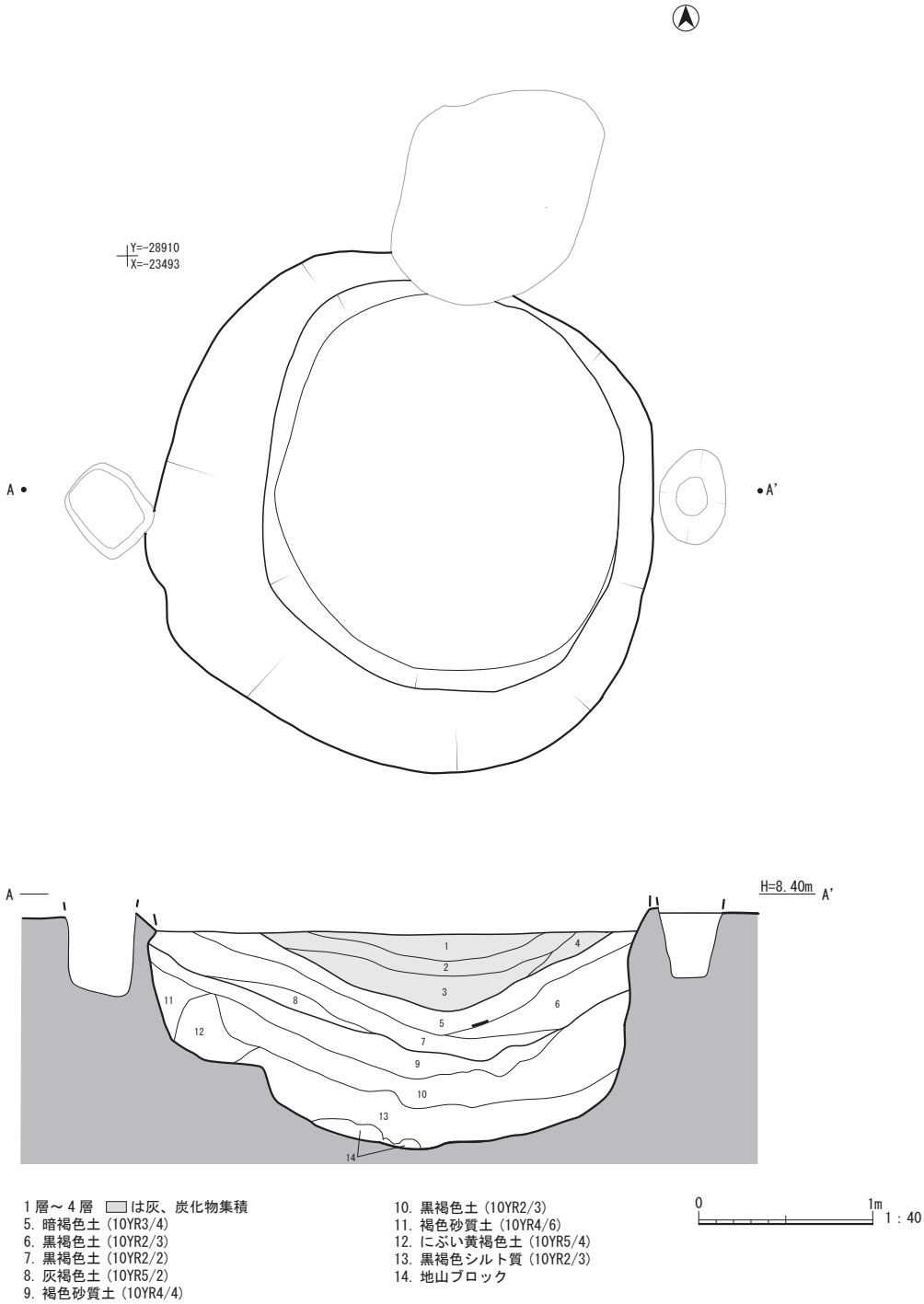
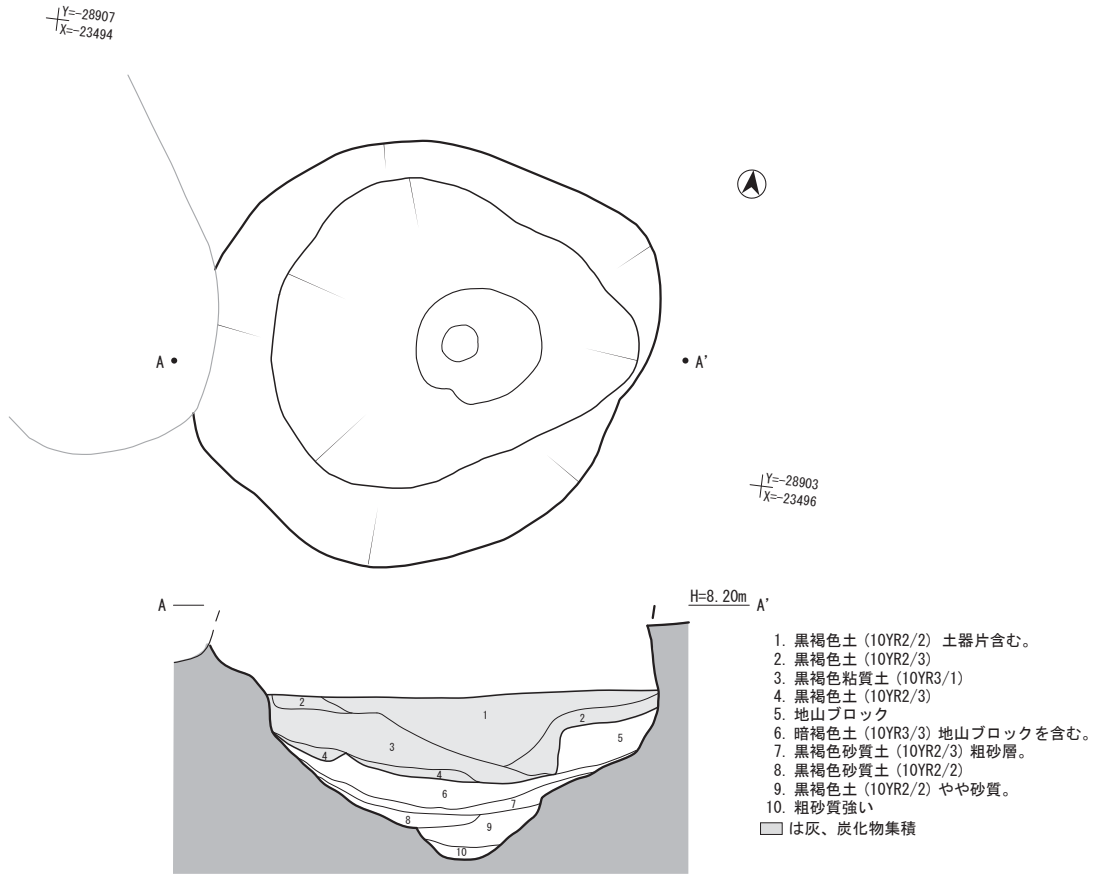


Fig.27　方形区画内井戸 SE002 実測図



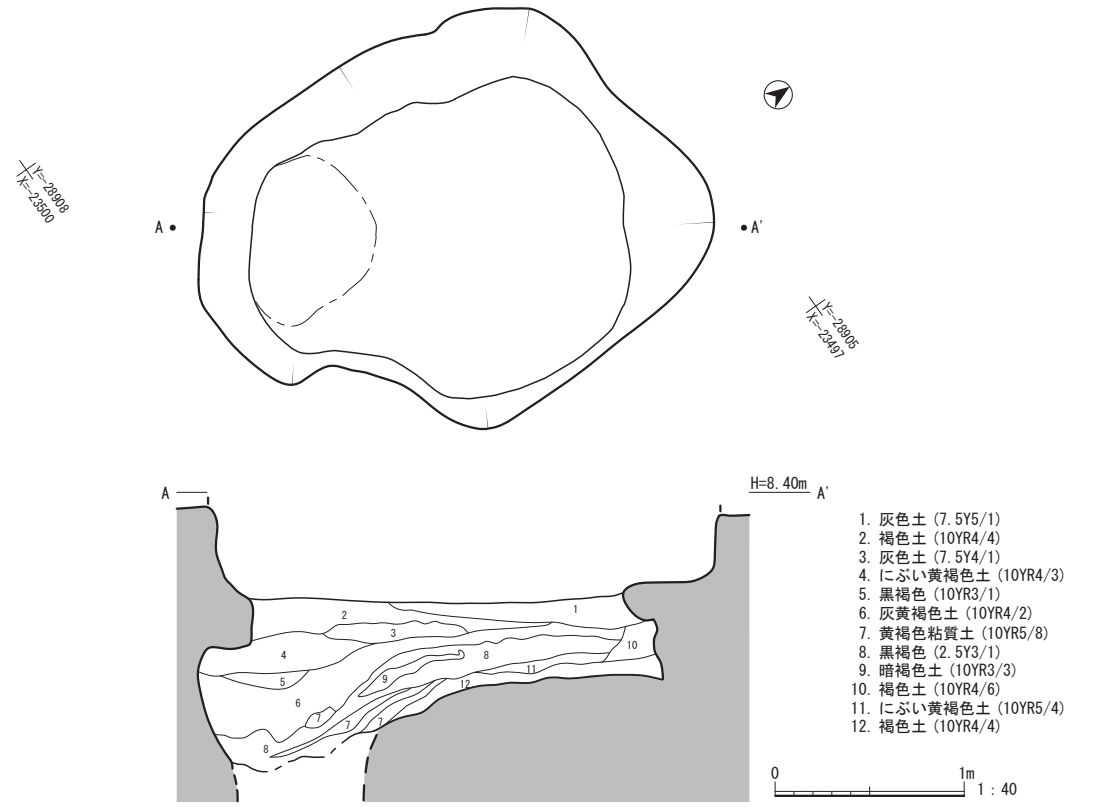


Fig.28　方形区画内井戸 SE003（上）・SE004（下）実測図

（２）溝 SD 群と道路 SF

道路 SF001（Fig.30）本遺構は調査区をおよそ東西に横断し検出した大規模な掘形を有する道路跡。遺構幅は中心付近の上端で約 5.1m、北側に平行に検出している溝 SD085 を側溝とみると 5.9m を測る。道路面は逆台形状をなし、遺構下端で轍状に２本の帯状の凹部を伴い連続する硬化面を確認してる。

底面のわだち状遺構を轍として報告すると、幅は両端間で約 3.2m、凹部中心間で幅約 2.9m、中央部の凸部と凹部の比高差は最大約 20 ㎝を測る。凸部の上面は硬化しており軸線方向に対して踏み固められた状況が確認できた。底面内部は硬化しているなかに粘性の強い砂質土を主体とする小礫が多数混じる。この硬化面を確認した面上で景徳鎮系の染付椀片が出土していることから、14 世紀から 15 世紀頃の遺構と想定される。この溝は調査区両端（東西方向）へ伸び、現在の市道直下へと続き、道路としての区画が現在まで踏襲されていることが見て取れる。熊本市教育委員会による発掘調査[1]で確認されている SD50 が本遺構と同様の性格を持つ。

溝 SD095（Fig.30）道路 SF001 に調査区中央部付近で T 字状に接し、その後南へと伸び調査区端でやや東向きへ方向を変える溝。道路 SF001 と遺構底面と同じレベルで調査面から約 60 ㎝を測る。遺構断面は逆台形状で下端はフラットな面であった。部分的にやや硬化した部分もあるが道路状遺構とは積極的に判断することはできない。

溝 SD085・SD086・SD087・SD089（Fig.30）道路 SF001 に平行し軸を同じとする溝群。小規模な溝が道路 SF001 を切りながら数回に分かれ掘り返された状況を示す。溝 SD086・SD087 は道路 SF001 の側溝的意味あいをもつ。幅は最大部で約 40 ㎝、狭部で約 20 ㎝を測る。

溝 SD082・SD083（Fig.30）道路 SF001 及びそこに接し検出された溝群から北へ 5m から 7m 離れた場所で検出した溝。遺構主軸は、前述の溝群と同じく調査区を横断するなど遺構全長は道路 SF001 と関係がある様相を見せる。

溝 SD091・SD098（Fig.30）溝 SD095 に対し東から T 字状に接する溝。遺構同士が近接するが平行に検出されていることから、区画をなしていたものとも考えられる。

溝 SD031・SD032・SD030・SD090（Fig.30）道路 SF001 を中心とするこの周辺の溝で、切り合いの関係からもっとも新しい溝の方向を示している。ほぼ南北に主軸を置きやや湾曲する溝の一群である。規模は幅約 20cm から 1m までで、全長は最も長いもので約 30m を超える。遺構からの遺物の出土はないが、周辺の遺構のあり方と、道路 SF001 が中世後期とみられることからすると近世にまでは至らない時期の遺構と考えられる。

溝 SD100・SD096・SD097（Fig.31）道路状遺構として報告した道路 SF001 の南に位置し、３本の溝から推定される方形区画。

南北約 26m、東西不明（調査区西へ伸びるため）の方形区画を有するとみられる遺構。積極的な設定ではないが遺構埋土の土質が類似していること、遺構の軸が同一または直角となると想定されることから、一辺が 25m 四方の方形区画を想定した。西に向かう溝 SD100 先端部の埋土中からはほぼ一体分の獣骨が出土している。（自然科学分析結果を参照）

溝 SD020・SD022・SD101・SD023・SD036・SD099（Fig.32）溝 SD020・SD022 は軸をほぼ南北にその他は、東西に延びる遺構群である。溝 SD101 は（市）SD05 もしくは SD06 と軸を同じとすることからいずれかの溝が延びてきているものとみられる。溝 SD023・SD035・SD099・SD036 はこの溝 SD101 と方向を同じとすることから、おおよそ同じ時期の遺構であると考えられよう。また、溝 SD023 の埋土からは二彩托が出土しており注目される。

溝 SD021・SD033・SD034（Fig.33）隣接する熊本市教育委員会による調査で F・K 地点として調査され「村落内寺院[2]」と称される（市）SB01 とその建物の周囲を囲む溝に隣接する遺構で、（市）SD02・SD04 の延長上に位置する溝。県調査区内において（市）SD02 は直角に折れその先端がわずかに残り、そこからさらに切り合いながら３条の溝を検出している。しかし、遺構の大半は鉄道施設に伴う工事により以前に掘削が行われており消滅している。県調査分は溝 SD092・SD021・SD034 である。遺構は大成 En. が実測した際には単純な３

1　熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅷ』熊本駅西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告（４）2009

2　熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅴ』熊本駅西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告（２）2008

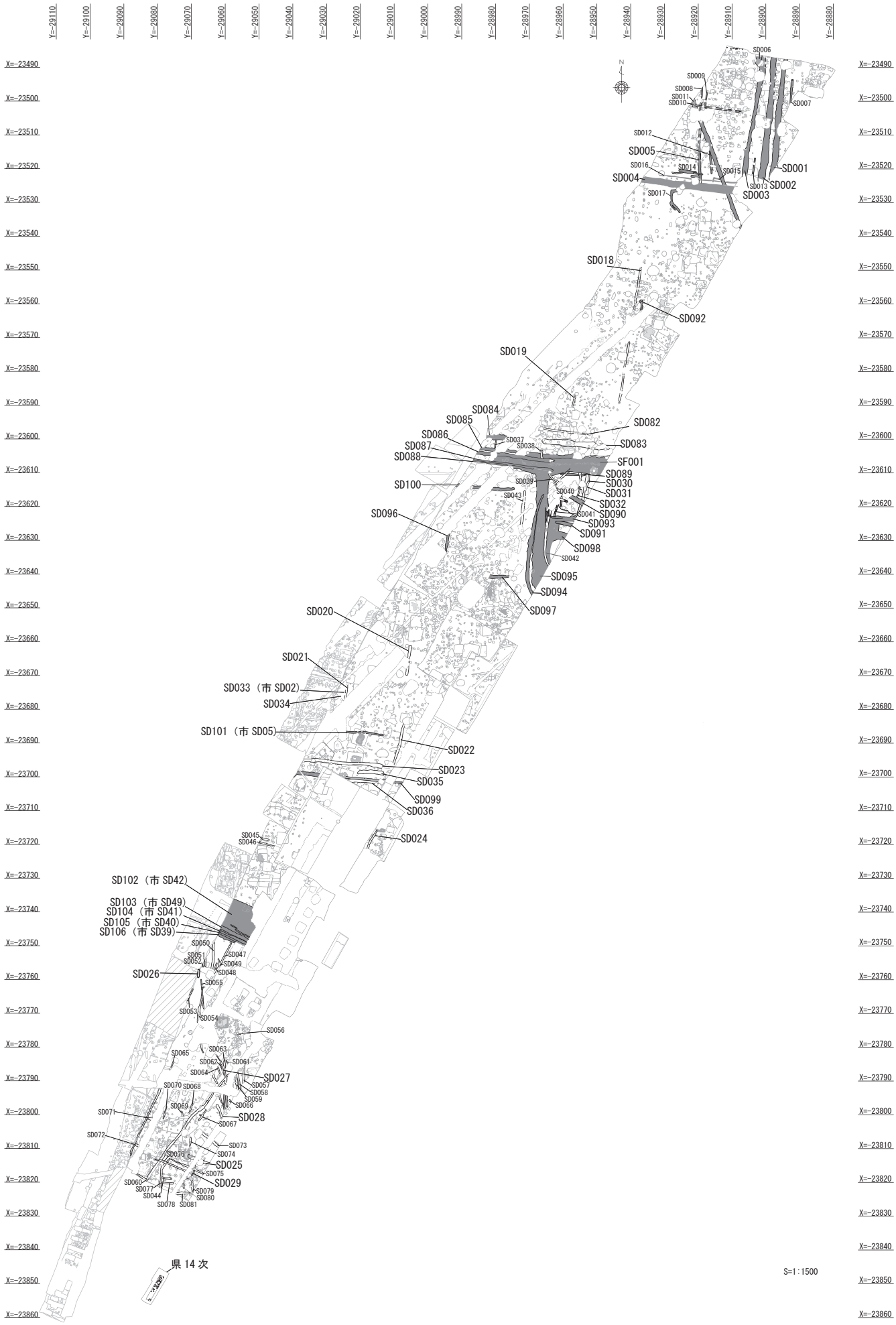


Fig.29　調査区溝遺構配置図

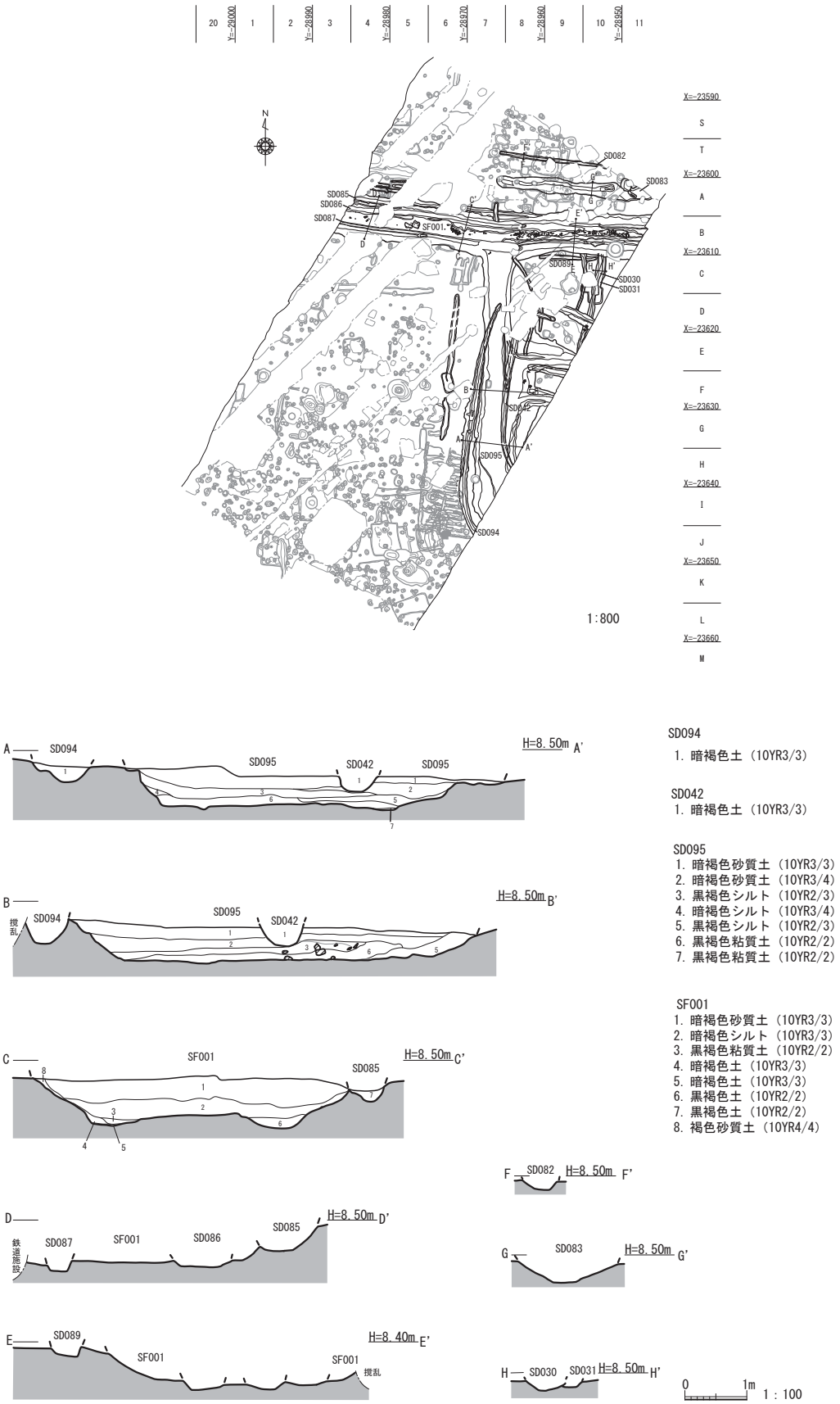


Fig.30　道路 SF001、溝 SD 遺構配置図

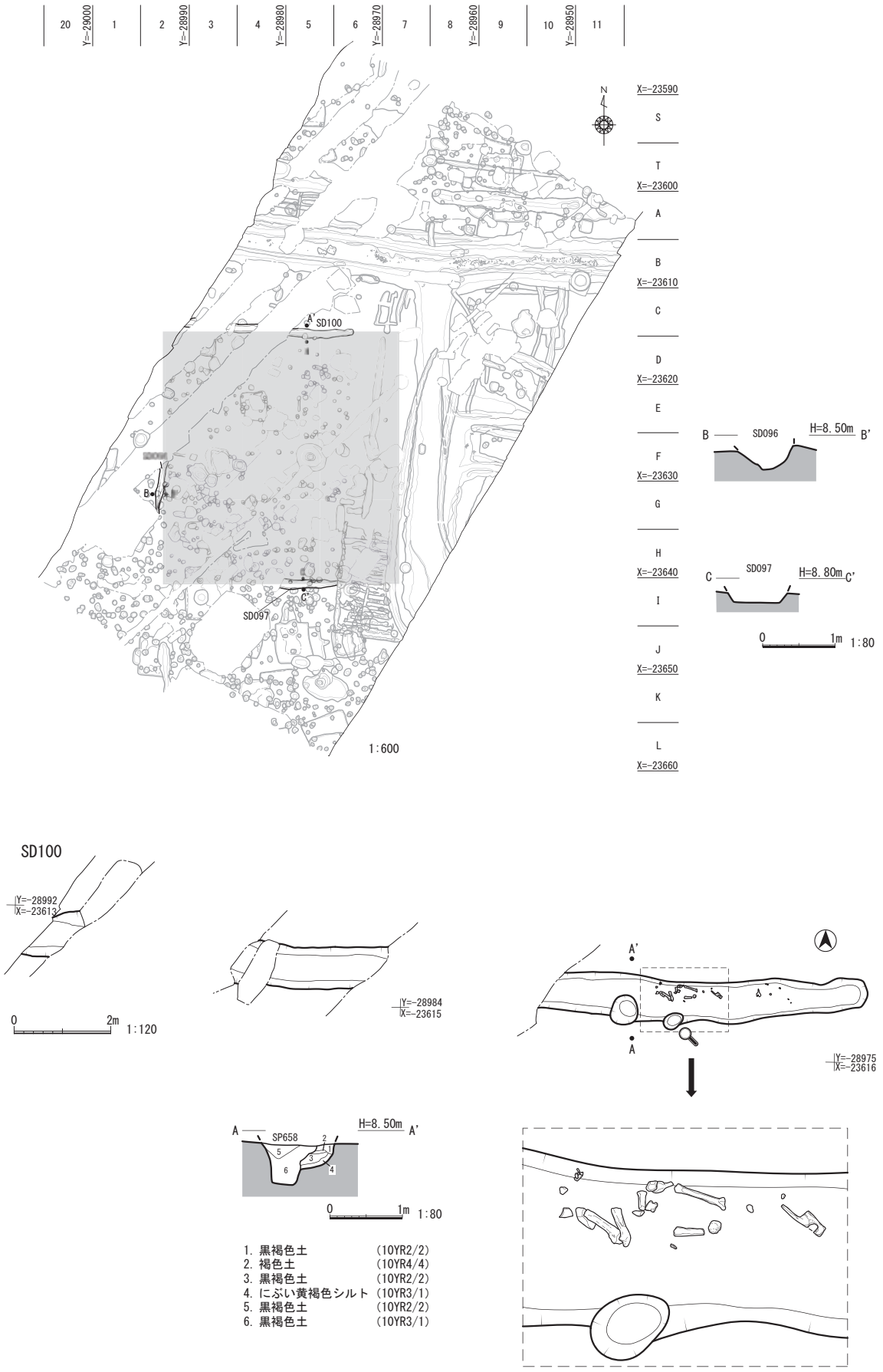


Fig.31　溝 SD100・SD096・SD097 方形区画溝（推定）遺構配置図

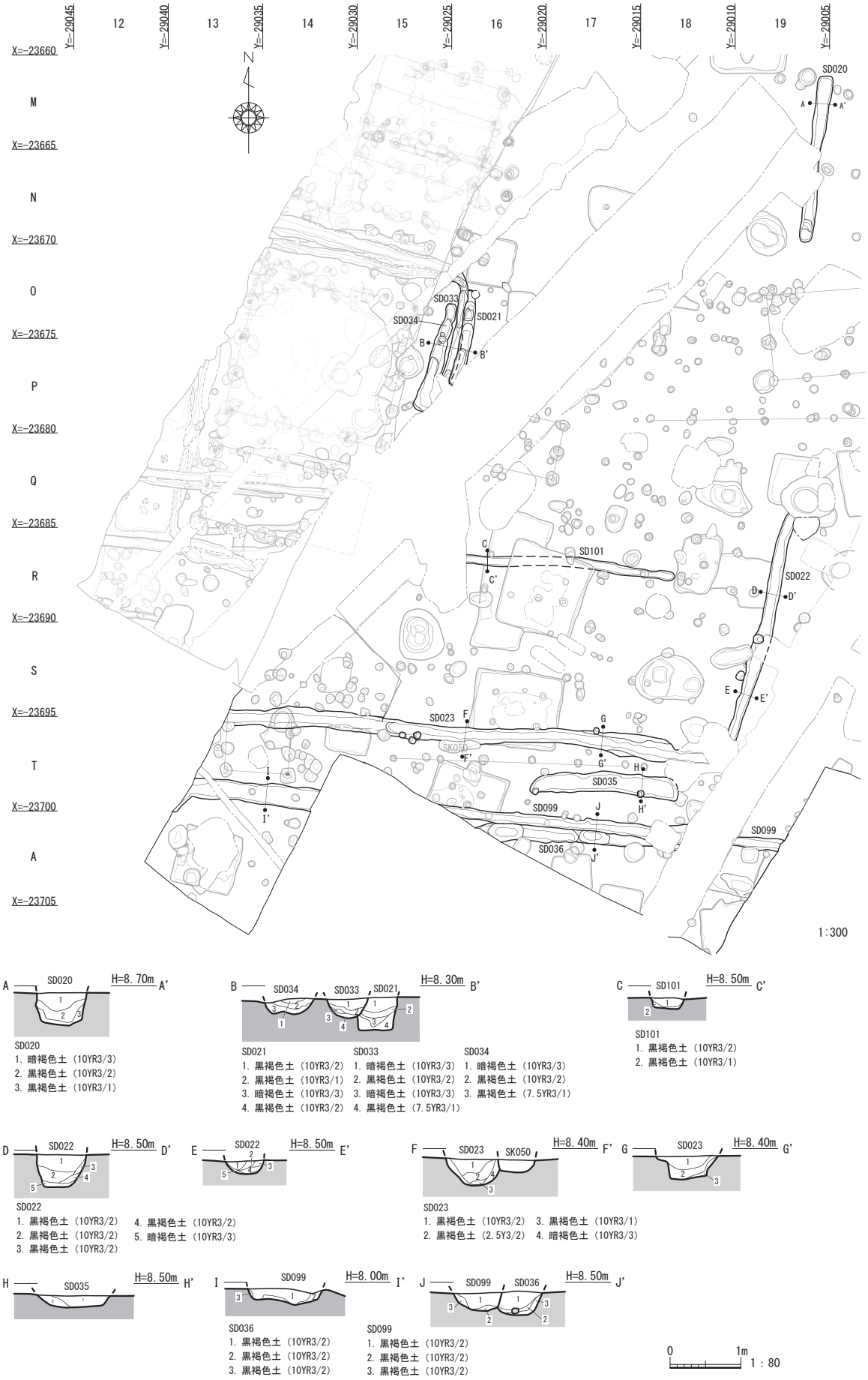


Fig.32　溝 SD020 ～ SD023・SD033 ～ SD036・SD099・SD101 遺構配置図

Fig.33　村落内寺院（熊本市）周辺遺構配置図

条の遺構として捉えていたようだが、図面確認の際に遺構と実測図を実見し検討した結果、南に向かい緩やかな傾斜をもち、３段の掘形からなる溝であることが判明している。検出した溝は（市）SB01 の東区画にあたり、南側前面で検出されている（市）SD06 と接続するものと判断される。埋土中からの遺物の出土はなかった。

溝 SD025（Fig.34）調査区内で止まり調査区東に向け延伸する溝。先端部には埋土よりやや浮いた状態で多数の遺物が出土しており、遺構掘り込みは現検出面よりやや上であるが本遺構の埋土中にあたることから本遺構埋土出土遺物として報告する。遺構先端部は他と比べやや深くなり、土坑状の掘形を見せる。途中には上部から井戸が掘り込まれ分断されている。

溝遺構（Fig.29）この地域では多数の溝を検出しているが大まかに３つの流れがある。まず最も規模が大きく規則性を持ち、比較的新しい時期の遺物を持つ溝 SD018、溝 SD082 などの一群である。市調査区でも同規模のまま西へ伸びている溝である。

溝 SD102（市 SD042）を始めとする溝は周辺の小規模な溝も入れると 10 数状に近い遺構群である。遺構底面は砂岩質の硬い層にあたっており掘削当時の掘削痕がよく残っている。埋土中には古代の遺物も含むが近世の肥前系染付磁器片なども出土することから近世以降であると考えられる。

数は少ないが溝 SD060 に見られる北東⇔南西に伸びる溝がある。溝 SD071 なども近いものであろう。埋土からは古代の遺物が主に出土するが数が少なく、小片であることから時代を決定する決め手にはならなかった。また、途中で切れながら蛇行し、調査区南端近くから北にかけて伸びる小規模な溝 SD027 を始めとする、一群も溝も概観するうえで目を引く。本遺構群でも埋土中に土師器、須恵器の小片を含むが小片であることから遺構の年代を決定するまでには至らなかった。しかし、南北方向に蛇行する溝は一部において竪穴建物 SI087,SI088,SI089 を避けるように蛇行していることから、９世紀後半期の遺構である可能性もある。

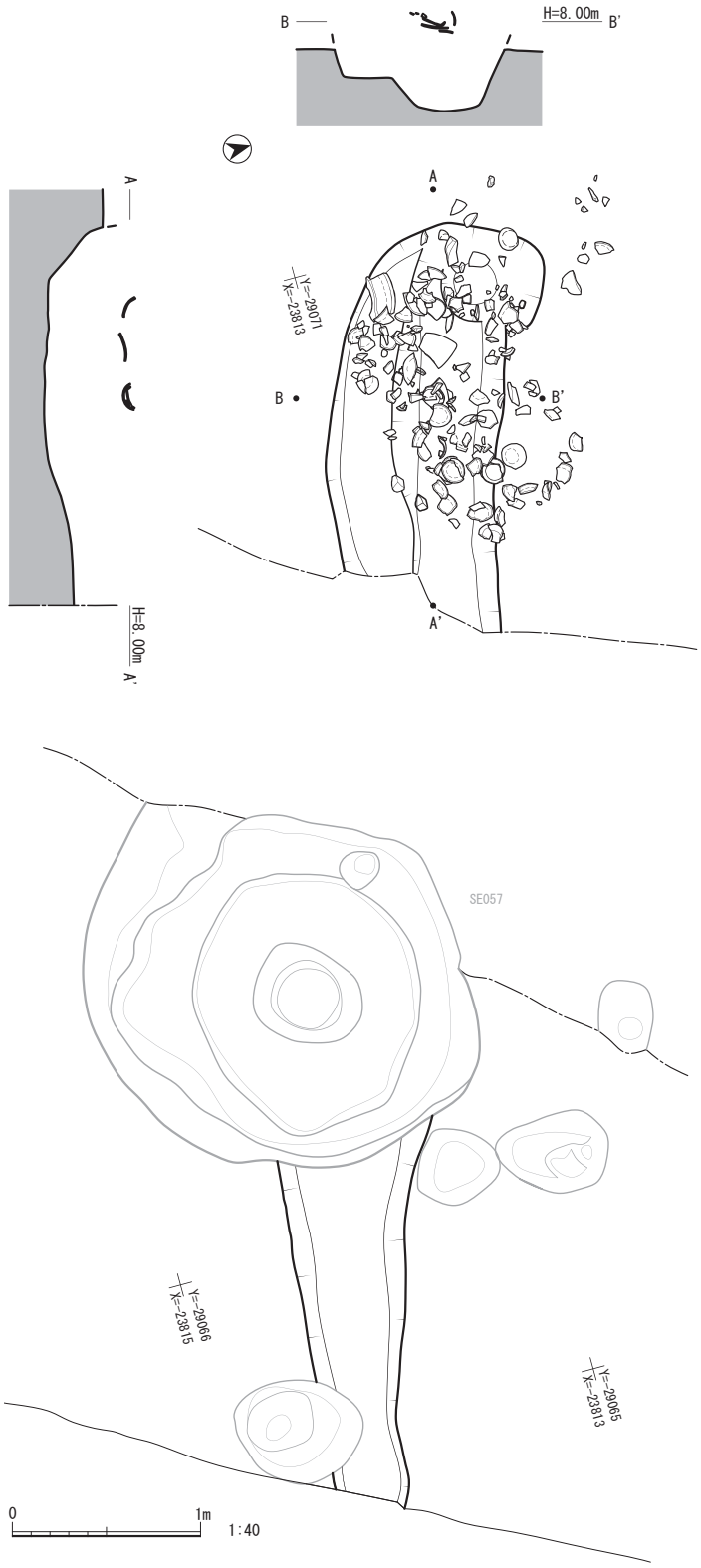


Fig.34　溝 SD025 遺物出土状況実測図

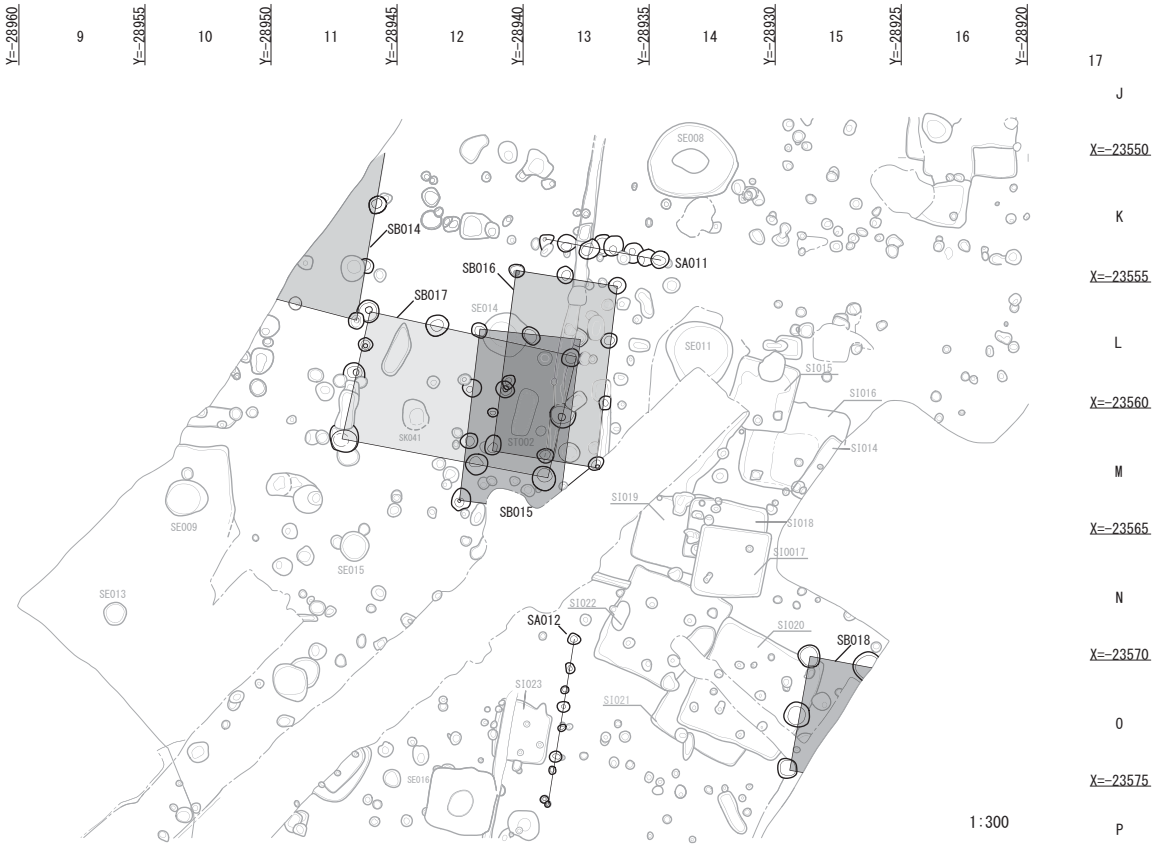


Fig.35　古代 柵列 SA011・SA012、掘立柱建物 SB014~SB018 遺構配置図

(3)　古代の遺構群

当該地域では、方形区画に囲まれた建物群が示す時代以外に、古代（８世紀後半から９世紀後半）にかけての遺構群が多数検出されている。二本木遺跡群はこれまで研究史的にも古代を中心に注目されてきており、いわばこの時期の遺構が遺跡の中心である。

本調査区では包含層の遺物も含め多くの遺物が出土し、遺構の年代を示している。この資料をもとに掘立柱建物、柵列、井戸、竪穴建物を中心に報告している。さらに、これらの遺構以外に出土遺物が著しい遺構などは遺構各説のなかで掲載している。掲載順序は、調査区の北側から南側にかけブロックごとに遺構配置図を掲載しそこに含まれる遺構を柵列 SA から竪穴建物 SI, 墓 ST へと紹介している。しかし、柵列 SA と掘立柱建物 SB に関しては検出状況が近接し関係性を想定できる場合には同時に掲載している部分もある。

柵列 SA012(Fig.35)溝 SD018 と平行し検出した柵列。全長 6.8m で８基の柱穴が直線に並ぶ。柱穴間は 0.80m から 1.1m と統一性はない。柱穴直径は円形で 20 ㎝から 30 ㎝を測る。遺構下端までの掘削深度はほぼ同じで、そこにのみ統一した基準が窺える。

掘立柱建物 SB014（Fig.36）掘立柱建物 SB017 に隣接し検出した掘立柱建物。P2 が掘立柱建物 SB017 北西隅柱穴と切り合っており、掘立柱建物 SB014 → SB017 の関係をもつ。検出した柱穴は１間×２間であり桁行か梁行かは判断できていない。柱穴間距離は 2.2m ～ 2.5m であることから７尺から８尺の間隔に柱穴を有するものと見られる。南東隅に位置する P2 にのみ柱痕を確認し根固めのあとも確認している。

掘立柱建物 SB015（Fig.37）掘立柱建物 SB016 と重複し検出した掘立柱建物。桁行総長 6.80m、梁行総長 4.0m を測る。主軸 N-6°　-E を測り先行し切り合う掘立柱建物 SB017 とはほぼ直角に方向を変える。柱穴は径約 30 ～ 40 ㎝の円形掘り込みが主であるが、P7 にのみ方形掘り込みを有する。主軸を南北に有する桁行方向では、柱穴間７尺から８尺、梁行で７尺ほどの間隔を有する。長軸の方向が建物とはあっていないが周囲に他の同様の柱穴が存在しないことから同遺構に伴う柱穴列の一つと判断した。柱痕を確認した柱穴もあるが、いずれも径約 10 ～ 20 ㎝程度の柱痕であった。同遺構を検出した地域は複数の掘立柱建物以外、溝、井戸等を検出しており掘立柱建物の確認がしづらい範囲の一つである。

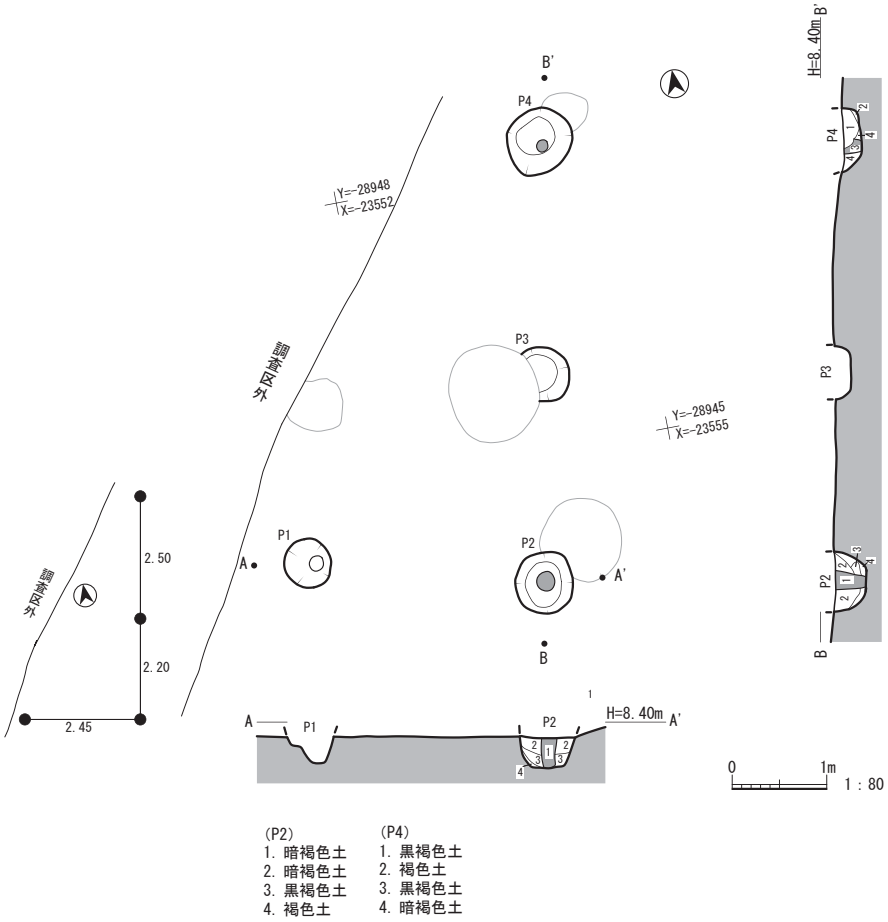
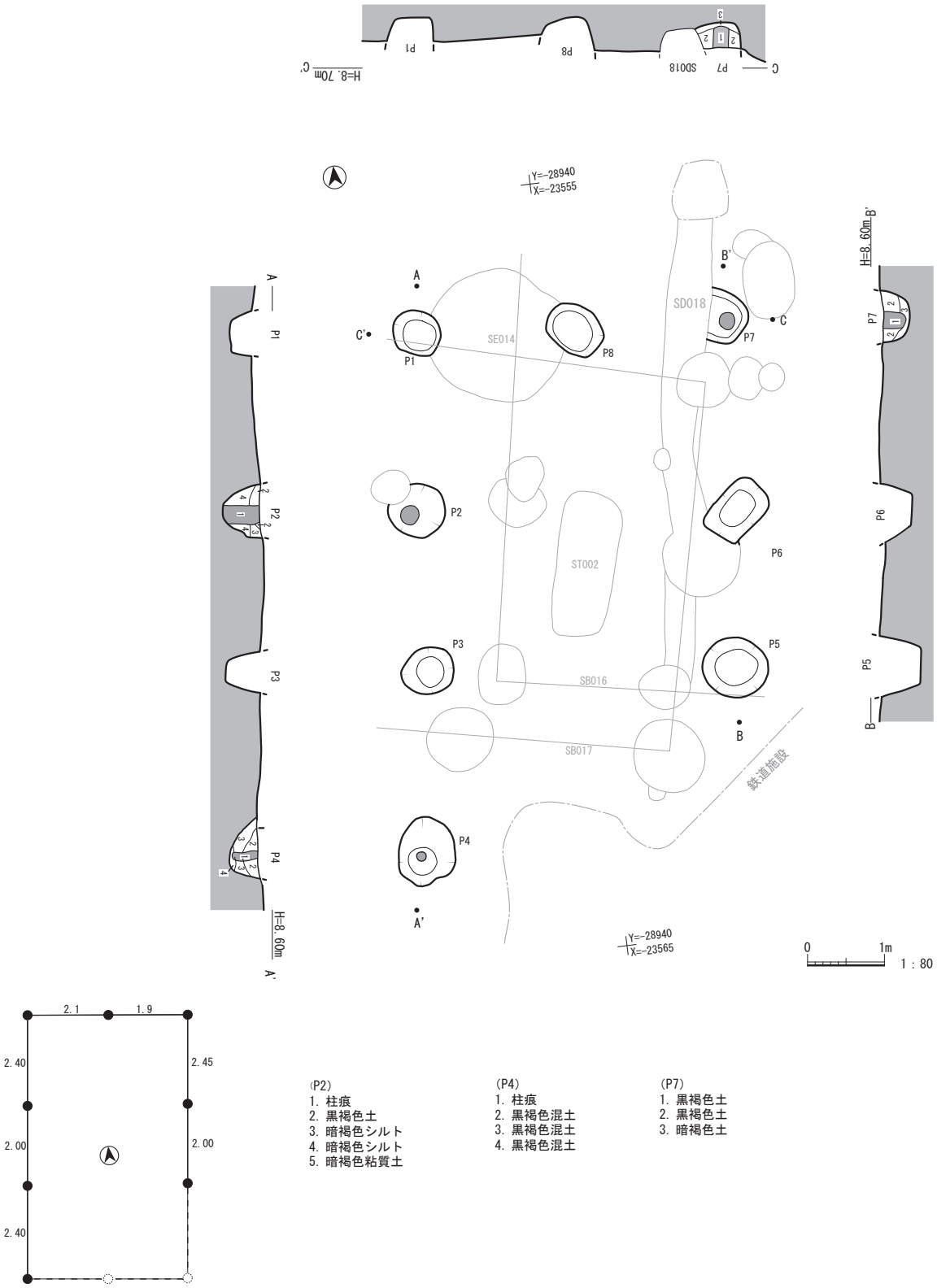


Fig.36　掘立柱建物 SB014 実測図

掘立柱建物 SB016 と柵列 SA011（Fig.38）両遺構は掘立柱建物梁行側と柵を平行に検出していること、埋土の状況が同じであることから調査段階から相並び検出した遺構。柵列は径が 20 ㎝弱の柱穴列と、径 40 ㎝強の柱穴列が切り合いつつ残る。小柱穴の並びは比較的簡単に理解できるがもう一方の柱穴列に関しては切り合いを考慮すると容易には並びを理解するには至らなかった。

掘立柱建物 SB016 は前述した柵列の南にて検出した掘立柱建物。主軸を N-7°　-E におき、桁行総長 7.15m、梁行 4.0m の３間×２間を測る。柱間寸法は桁行は平均して 2.20m〔7.5 尺〕、梁行平均 2.0m〔約７尺〕となる。柱穴掘形は円形で径約 15 ㎝の柱痕を残す。

掘立柱建物 SB017（Fig.39）梁行２間×桁行３間規模で検出した掘立柱建物。主軸はおおよそ東西におき、切り合う掘立柱建物群とは約 90°主軸を異にする。北辺に本来は位置していたであろう P6 に対する柱穴は井戸 SE014 との重複で消滅していると考えられる。しかし、南辺に位置し、本来は P2 と相対する柱穴は同じ検出面上では検出することができなかった。もとから本柱穴のみは遺構になかったものと考えられる。遺構規模は梁行 4.85m（約 16 尺）、桁行 8.3m（約 28 尺）を測る。各柱穴では土層断面で径 15 ㎝から 20 ㎝の柱痕を残し周囲を根固めの埋土が良好な状態で残る。遺構平面形は上端、下端とも円形をなしている。本遺構は隣接する掘立柱建物 SB014 との建替えに伴う切り合いがある。



(P2)
1. 柱痕
2. 黒褐色土
3. 暗褐色シルト
4. 暗褐色シルト
5. 暗褐色粘質土

(P4)
1. 柱痕
2. 黒褐色混土
3. 黒褐色混土
4. 黒褐色混土

(P7)
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土

Fig.37　掘立柱建物 SB015 実測図

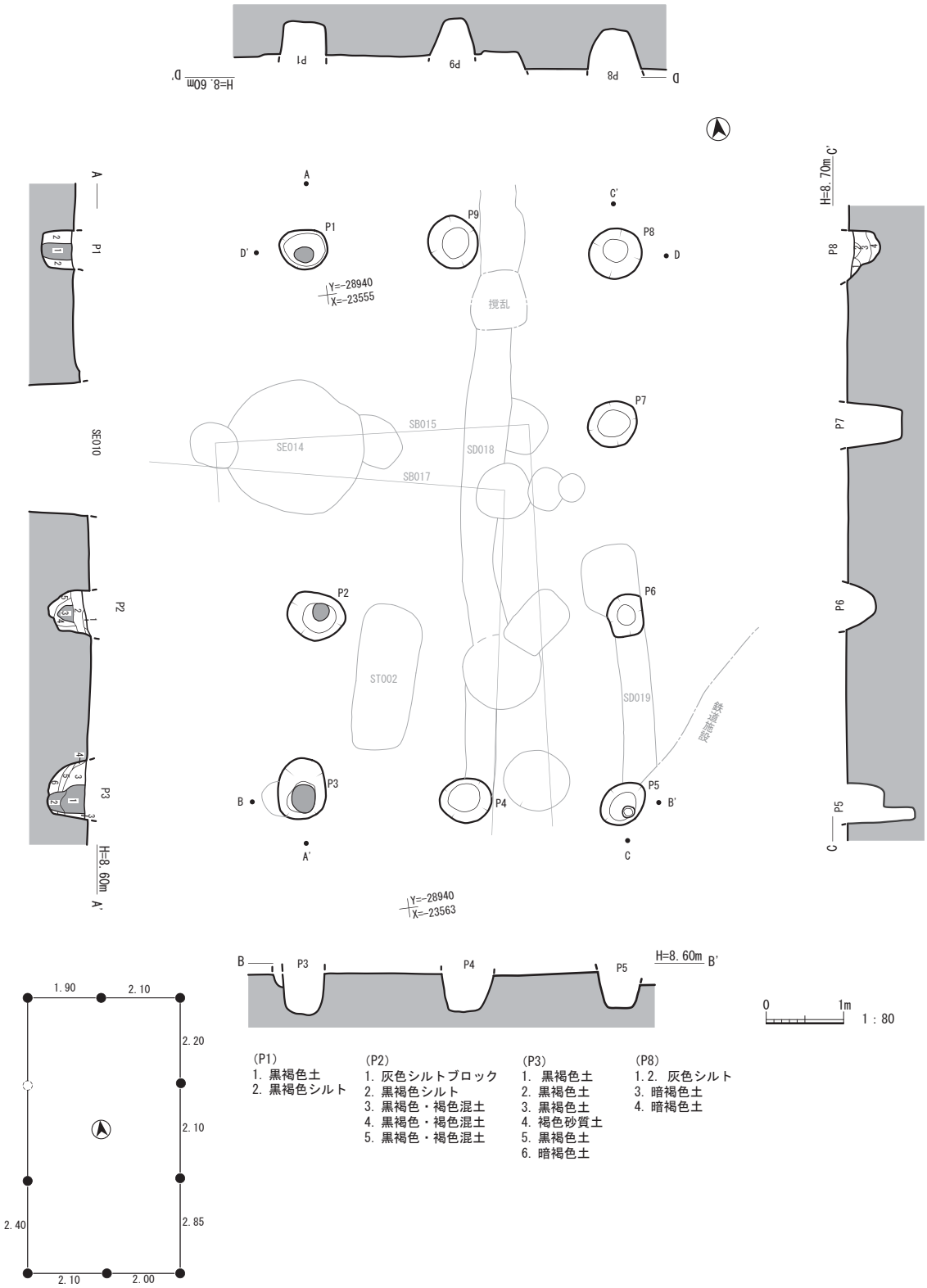
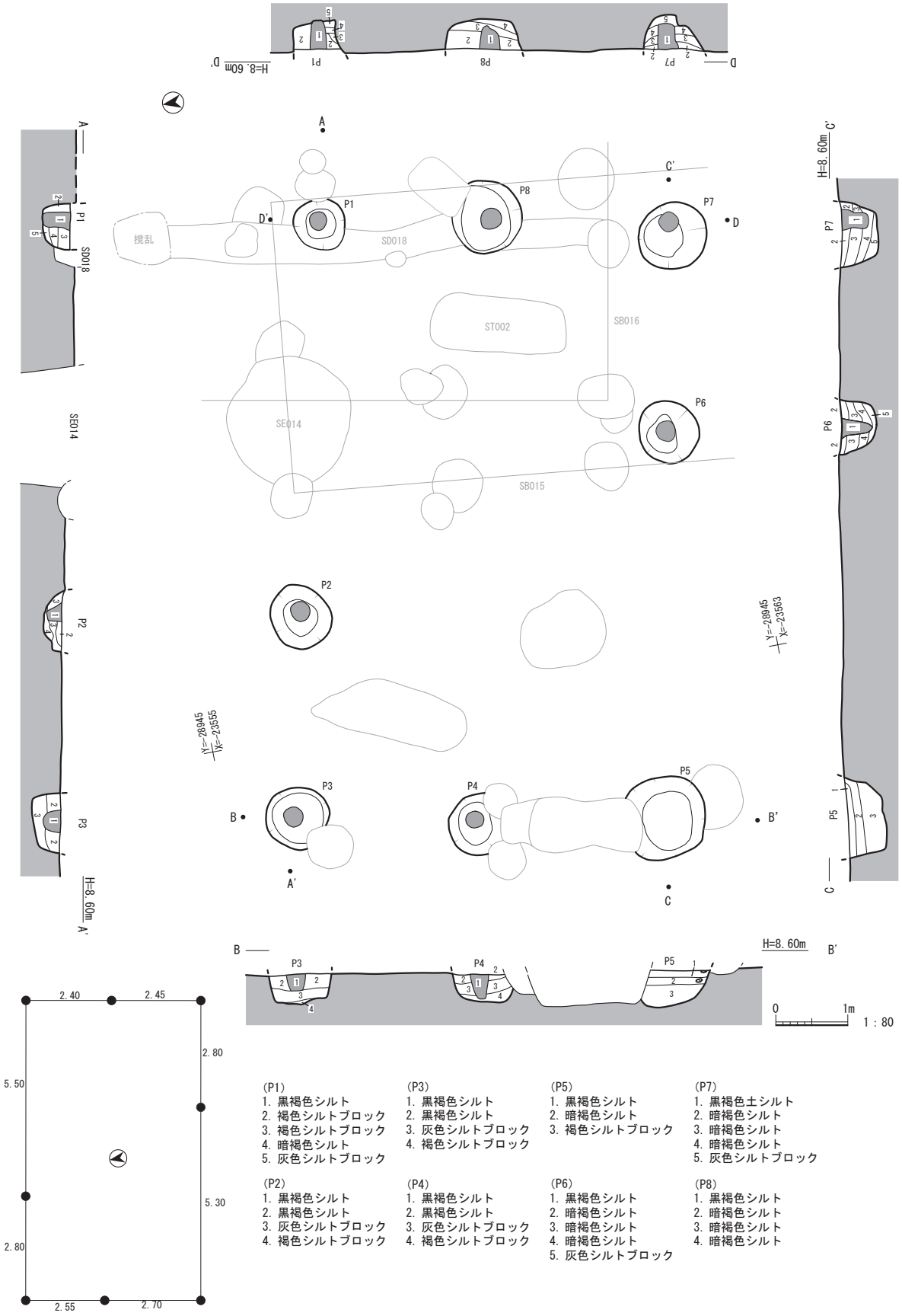


Fig.38　掘立柱建物 SB016 実測図



(P1)
1. 黒褐色シルト
2. 褐色シルトブロック
3. 褐色シルトブロック
4. 暗褐色シルト
5. 灰色シルトブロック

(P2)
1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 灰色シルトブロック
4. 褐色シルトブロック

(P3)
1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 灰色シルトブロック
4. 褐色シルトブロック

(P4)
1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト
3. 灰色シルトブロック
4. 褐色シルトブロック

(P5)
1. 黒褐色シルト
2. 暗褐色シルト
3. 褐色シルトブロック

(P6)
1. 黒褐色シルト
2. 暗褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 暗褐色シルト
5. 灰色シルトブロック

(P7)
1. 黒褐色土シルト
2. 暗褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 暗褐色シルト
5. 灰色シルトブロック

(P8)
1. 黒褐色シルト
2. 暗褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 暗褐色シルト

Fig.39　掘立柱建物 SB017 実測図

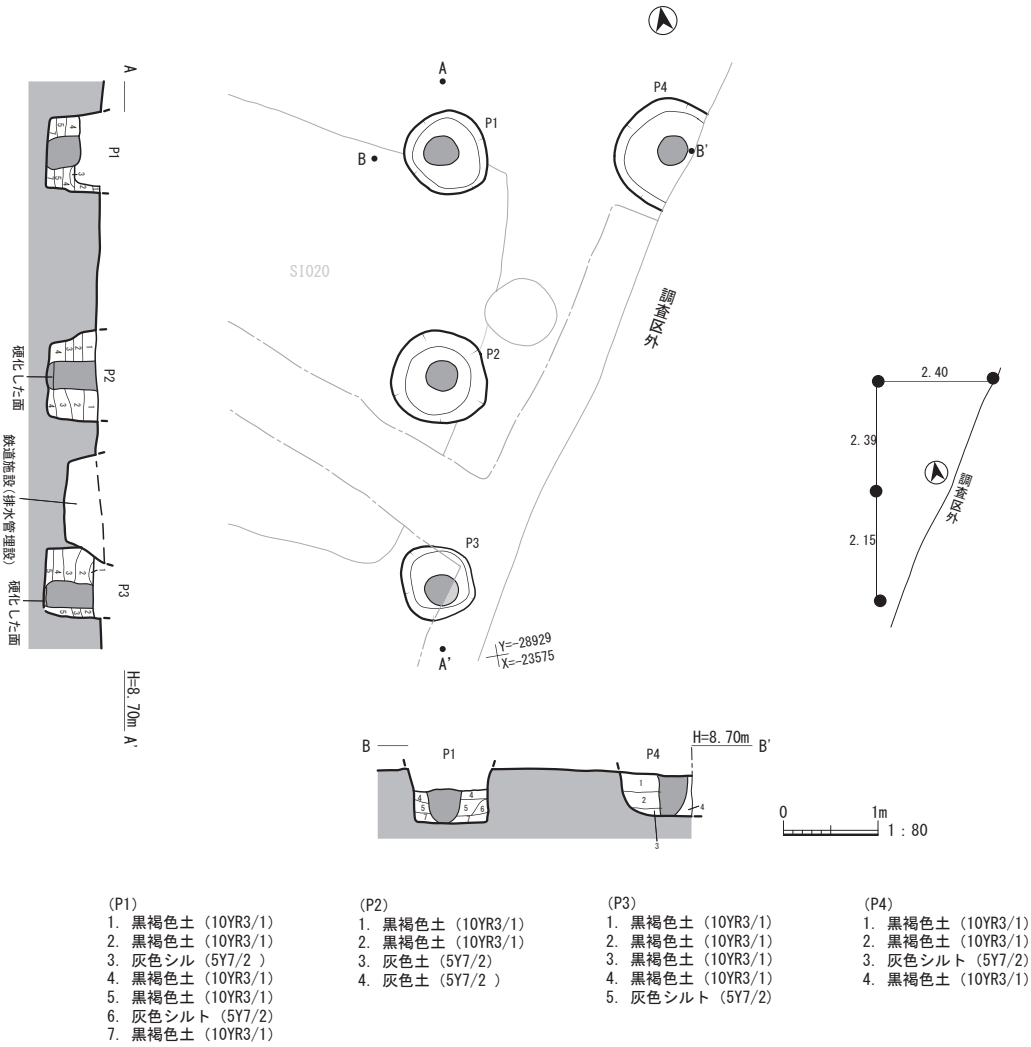


Fig.40　掘立柱建物 SB018 実測図

掘立柱建物 SB018（Fig.40）竪穴建物 SI020 の上から掘り込まれる柱穴径が１ｍ弱を測る大型掘立柱建物。遺構の大半が調査区外に延び、検出できた範囲は１間×２間で４基の柱穴があり、主軸は N-10°-E を測る。桁行か梁行かは判断できないが総長 4.54m と 2.40m を測る。柱穴はいずれも柱痕が残っており、おおよそ 25 cmから 30 cmの痕跡がみられた。掘形は径が 80 cmから１ｍで垂直に掘り込まれ、下端はほぼ水平である。柱穴間は平均８尺を測る。

Fig.41　井戸遺構配置図

井戸 SE007（Fig.42）古代の竪穴建物上から掘り込まれている井戸。調査時には隣接する不定形土坑と別遺構であるとしていたが、検討の結果、井戸に伴う掘り込みであると判断した。土坑も含めた全体長は約 3.9m で井戸本体の掘形が 1.2m、調査深度は 2m とした。この井戸でも調査段階に壁面の崩落があったことから下端までの完掘は至っていない。埋土は 1、2 層まで一度埋没が止まったか、または再度掘り返されたのか不明だが、3 ～ 5 層へ掘り込むように層の落ち込みが見られる。遺構深度 2m までしか掘削していないが、宇城産の高台付杯や荒尾産の凸帯付長頸壺等多くの遺物が出土している。また、製塩土器の出土も見られている。

井戸 SE008　柵列 SA001 の北側にて検出した井戸。掘形は東西に約 3.6m、南北に 3m で約 15 ～ 20 ㎝の楕円形の掘形を有する。井戸は東西に 1.6m、南北に 1.0m の長楕円形で掘形に比べ極端に狭い。半裁をかけたが内部が狭いため完掘までは至らなかった。埋土中からは土師器杯、椀が出土している。小片ではあったが、須恵器の底部を利用した転用硯が出土している。

井戸 SE009（Fig.42）調査区の際で確認した方形掘形を有する井戸。掘形は大半が削平を受けており本来の高さは保っておらず、南側には残らない。復元長一辺が約 3.2m ほどであったとみられる。井戸本体の横には径 30 ㎝の柱穴を 1 基検出しているが、これに対する柱穴は確認していない。井戸本体は掘形上部で径 1.4m を測り垂直に落ち始める部分で 1.2m の幅となる。掘削が進むにつれ周囲からの湧水が増え掘削深度 1.7m のところで掘り下げを断念した。埋土中からは土師器杯、高台付皿、椀等が出土している。

井戸 SE010　溝 SD018 の東に位置し、墓 ST001 の北側で検出した井戸。調査の初期段階で検出した遺構であるため、井戸と土坑が切り合っていると判断し調査を実施していたが、調査途中で土坑部が井戸に伴う施設であると判断した。周囲には柱穴が散在するが井戸屋形を構成するとみられる柱穴は確認できていない。規

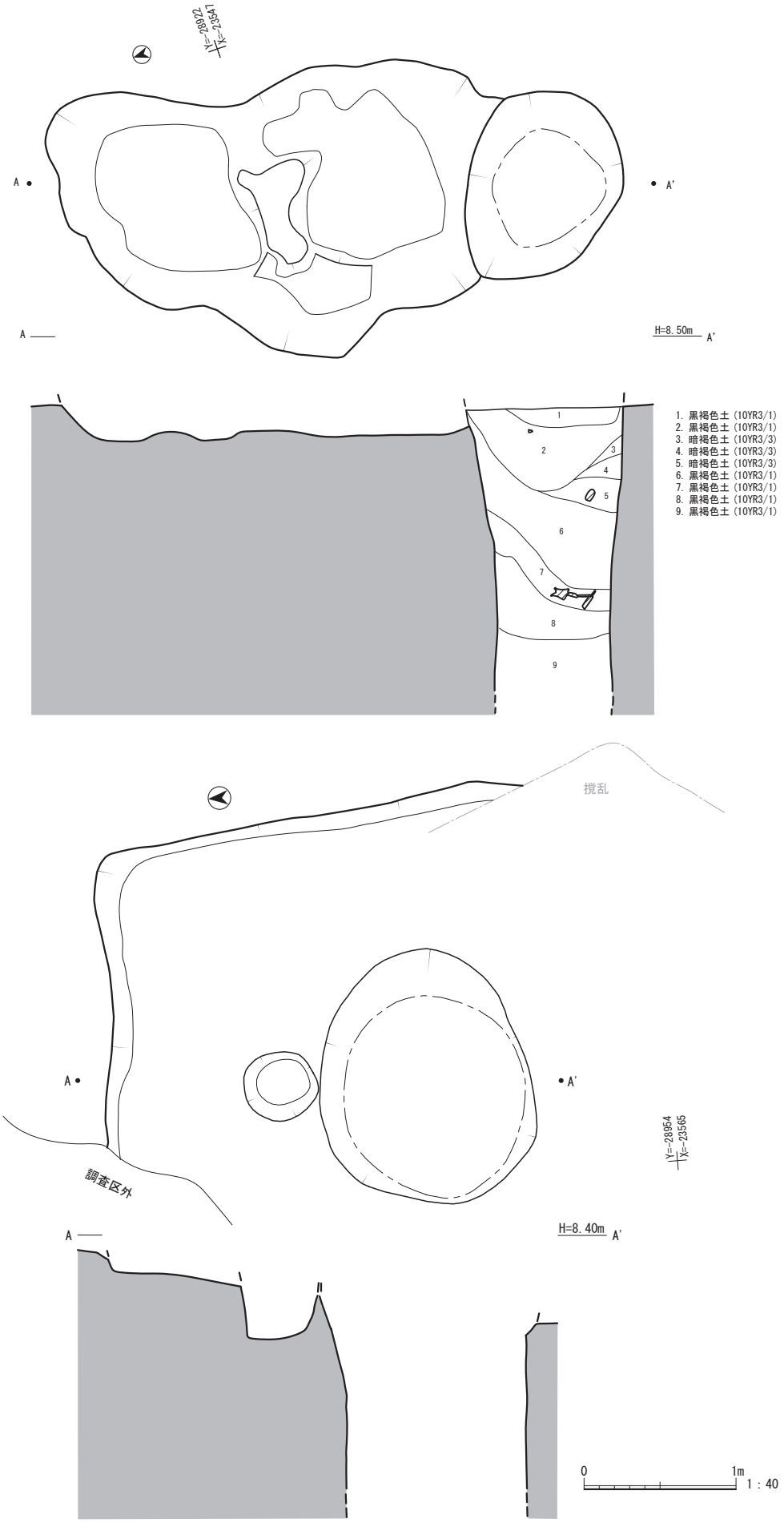


Fig.42　井戸 SE007（上）・SE009（下）実測図

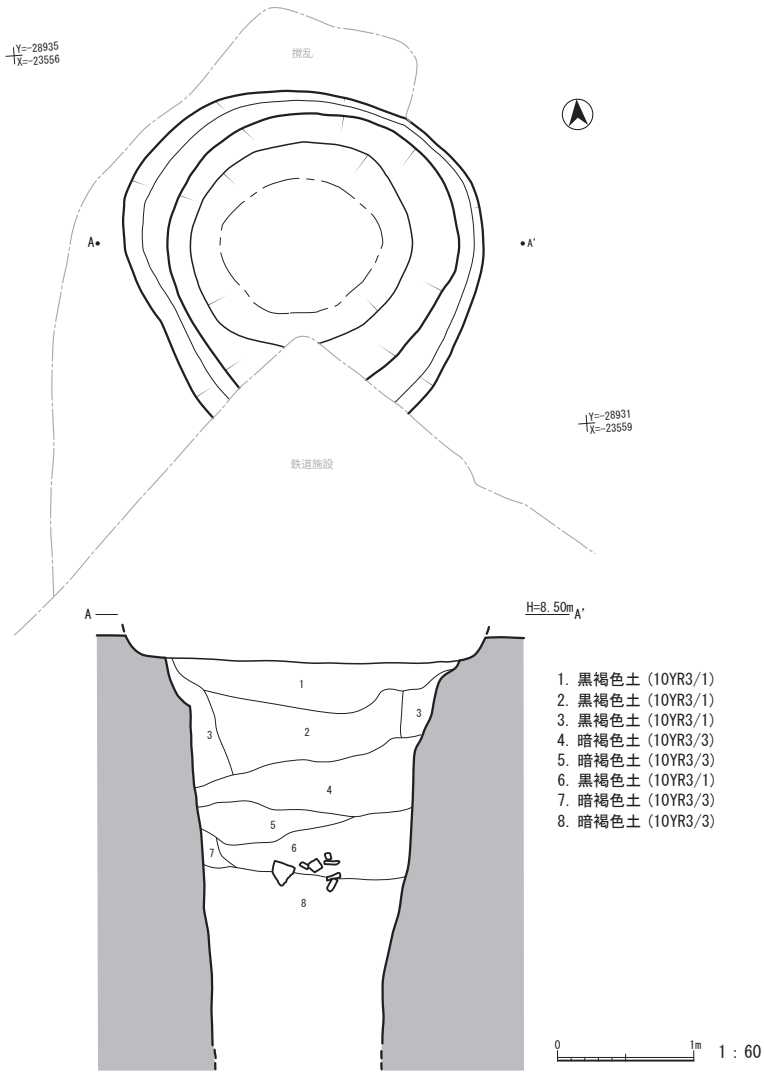


Fig.43　井戸 SE011 実測図

模は土坑部も含め直径約 2.95m、横幅約 1.0m の長楕円形で、井戸部で径１m の円形を測る。深度は掘形上端から 1.2m まで調査を実施した。出土遺物は埋土中から古代の杯（土師器）が１点出土している。

井戸 SE011（Fig.43）鉄道施設に一部を切られ検出した井戸。井戸周囲に浅い掘形を有し中央に井戸本体を持つ。掘形直径は約 2.65 m、井戸本体の上端での径は 2.1m を測る。井戸本体は下端に向かい垂直に落ち始める時点で径は 1.4m となる。ここでは慎重に掘削を進め壁面の状態を見ながら掘削し、3.6m まで掘り下げを実施した。しかし、下端までは至らずに調査を終えることとなった。調査を実施した季節もあろうが、壁面からの湧水が多く水中ポンプを入れて調査を実施した。

井戸 SE012（Fig.41）井戸 SE016 の南に位置し検出した井戸。掘形は 2.9m の円形で掘形上端から井戸上端まで 0.40m の比高差を有し緩やかな傾斜を持つ。SE020 同様に井戸上端付近では平坦面を有していない。井戸本体は径 1.5m で楕円形をしている。遺構掘削深度は井戸上端から 1.4m（掘形上端より 1.9m）まで調査を実施し、周壁からの湧水が沁み出してきたことから掘削を中止した。井戸掘形は掘削を中止した付近で径 1.2m の円形となる。出土遺物は埋土中から杯（土師器）が出土している。

井戸 SE014（Fig.41）掘立柱建物 SB016 の柱穴を切り検出した井戸。掘形は直径約 1.65m で垂直に落ち始める中位で約 1.0m を測る。下端は壁面が脆弱で崩落する可能性があったことから現地表面から２m の深度で調査を中止した。井戸に接し直径 50 ㎝の柱穴があるが、切り合う掘立柱建物の柱穴列の一部であり井戸屋形の痕跡ではない。埋土の状況から古代の井戸であると考えられる。

井戸 SE015（Fig.41）掘立柱建物 SB017 の南に隣接し検出した井戸。掘形は検出面で 1.15m、垂直に落ち始める部分で 0.98m の円形である。深さは 1.7m まで掘削したが周囲の壁からの湧水が多く掘削を断念した。土層は大まかに上下２層を確認した。

井戸 SE016（Fig.41）溝 SD018 の上部から掘り込まれた井戸。掘形は 2.6m の正方形で井戸掘形上端に向かい緩やかに傾斜する。掘形径は 0.90m でそのまま垂直に掘り込まれる。井戸上端から約 1.5m まで掘削したが、壁面の崩落が見られたことから下端までの掘削を断念した。周囲には井戸屋形を構成していたと目される柱穴等はみられない。

Fig.44　竪穴建物群遺構配置図

竪穴建物 SI003 ～ SI005（Fig.45）３軒切り合った状態で検出した竪穴建物。もっとも切り合いの古い竪穴建物 SI005 は東西に 2.54m、南北に 1.97m（残存部のみ）、竪穴建物 SI004 で東西に 3.77m、南北 3.65m（残存部のみ）、竪穴建物 SI003 で東西 3.20m、南北に 3.20m（カマド部は除く）主軸はカマドが残る竪穴建物 SI003 で N-4°-E を測る。おそらく、切り合いの下位に位置する竪穴建物でも出土遺物の時期からカマドを有していたと見られるが、北に向かい切り合いが重なるため残されていない。床面積は竪穴建物 SI003 で 12.8 ㎡、竪穴建物 SI004 で 13.8 ㎡である。床面となる硬化面は本遺構では明確には確認できなかった。また、主柱穴も生活面相当層の調査後に貼床を剥がしたのち確認したが、検出することができなかった。

竪穴建物 SI007（Fig.46）竪穴建物 SI008 の上部より掘り込まれた竪穴建物。東西に 2.63m、南北に 2.7m（カマド煙道部まで含め 3.45m）で主軸は N-9°-E を測る。床面積は約 7 ㎡である。平面形は正方形に近く住居隅は角が立つ。遺構掘り込みもほぼ垂直でカマド周辺では硬化面の発達が著しい。カマドは住居北辺中央に位置し燃焼部を住居内におき、煙道部が住居外に約 70 ㎝伸びる。貼床を剥いだのち主柱穴を確認したが検出しきれていない。出土遺物はカマド近くの床面直上より須恵器蓋、杯が出土している。

竪穴建物 SI012・SI013（Fig.47）これまでに記述してきた竪穴建物とは平面形、カマド煙道部の作りなどがやや単純な作りの竪穴建物。竪穴建物 SI013 → SI012 へと建て替えが行われたとみえ遺構の一部を接し建て替えられている。竪穴建物 SI013 は東西に約 2.5m（平均）、南北約 2.4m で床面積は約 6 ㎡、竪穴建物 SI012 が南北に 2.4m、東西方向は調査区外にあたり全長は不明である。主軸はカマド煙道部中心をとおるラインを主軸とするとそれぞれ、N-86°-W、N-92°-W とほぼ直角に西へ向く。カマド部は燃焼面は確認されていないが、煙道部のみ約 1m の長さを検出している。煙道部にも焼締まるほどの硬い燃焼部に準ずる部分や、被熱し焼けたあとはみられない。遺構掘形も通常の竪穴建物と比べやや稚拙であり、掘形縁辺部にも丁寧さはみられない。

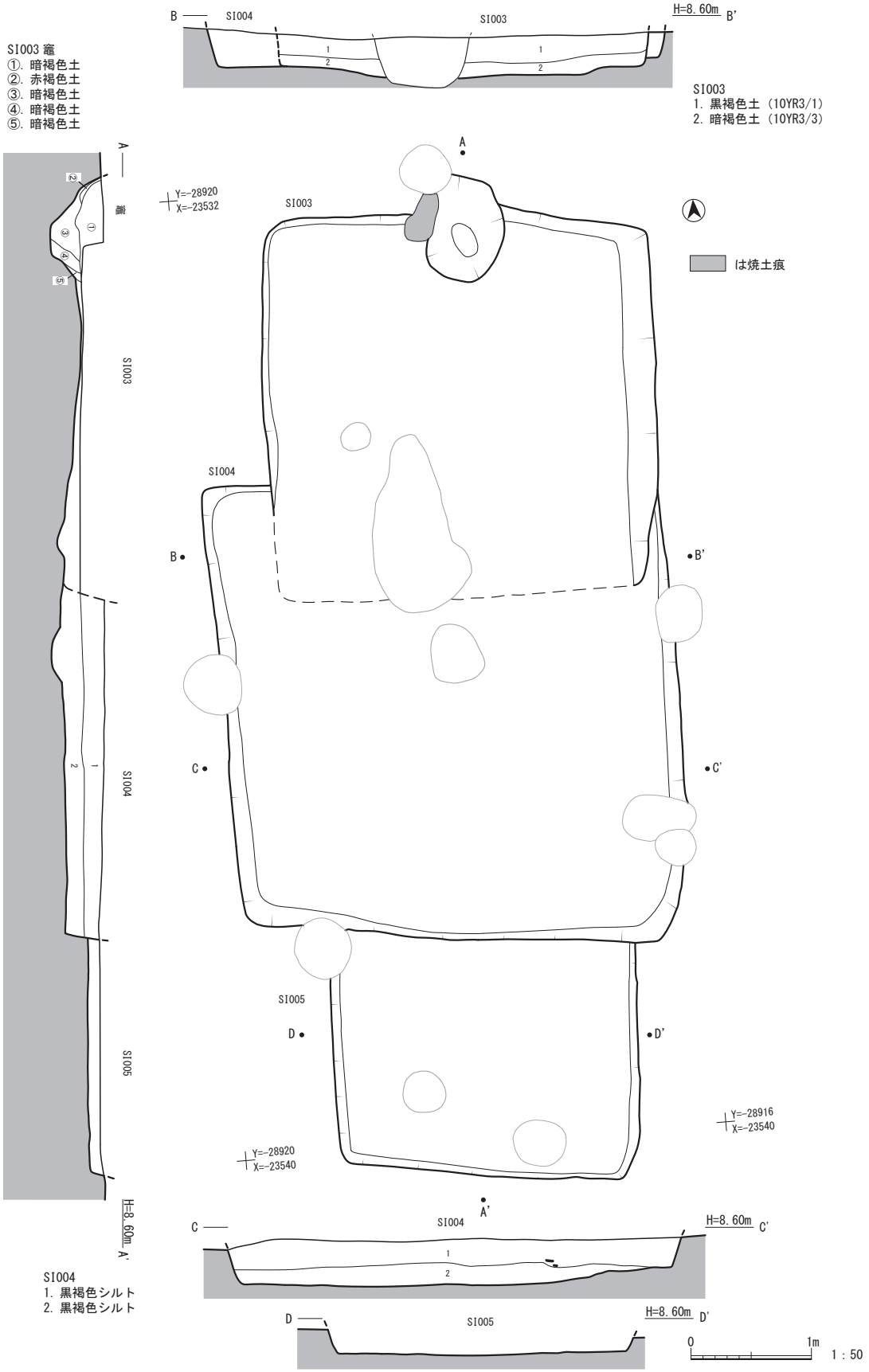


Fig.45　竪穴建物 SI003・SI004・SI005 実測図

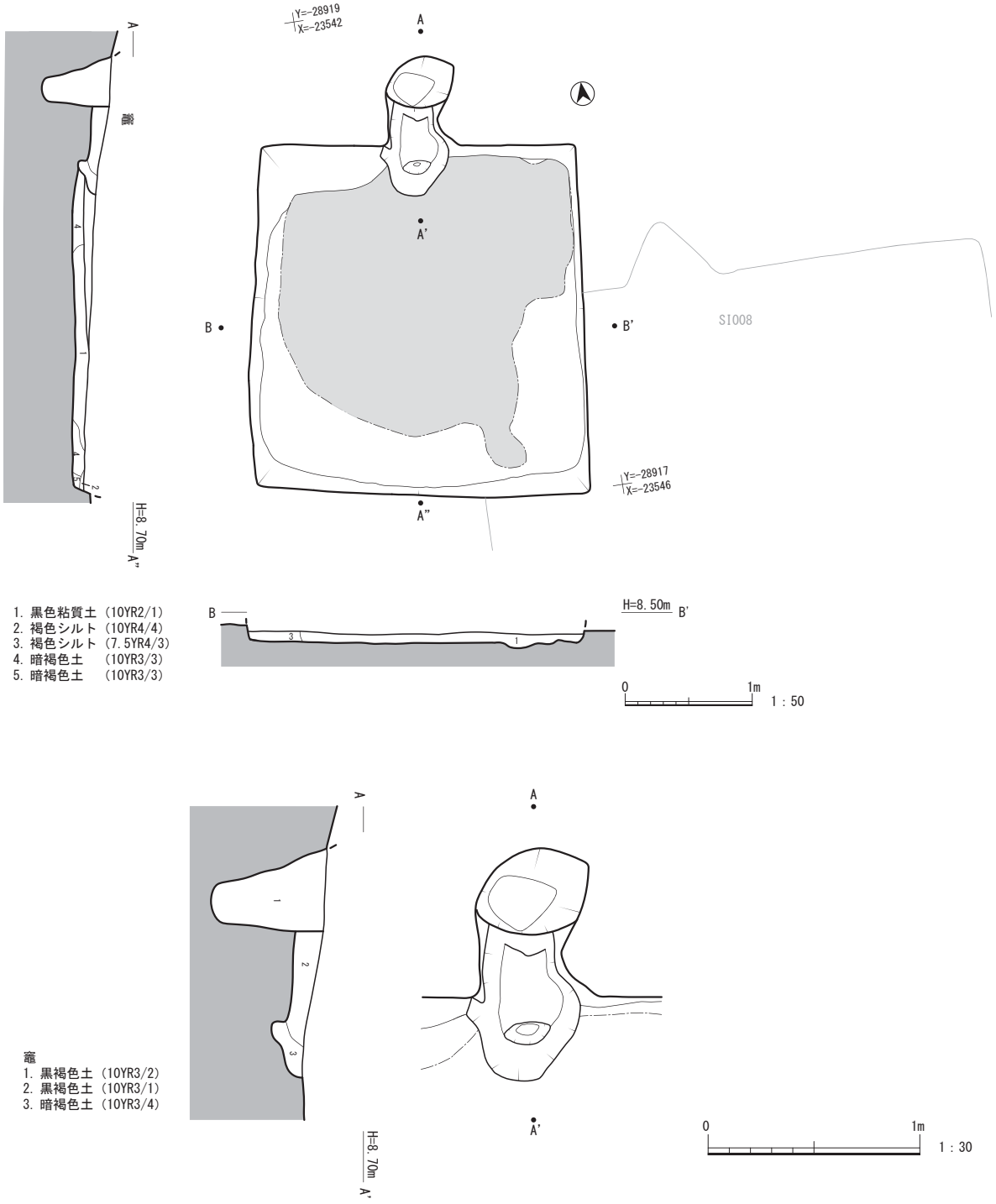


Fig.46　竪穴建物 SI007 実測図

竪穴建物 SI015（Fig.47）竪穴建物 SI003 から SI013 までの竪穴建物の一群から離れ竪穴建物 SI014 までの一群を構成するなかで、最も北に位置している竪穴建物。南西隅を鉄道遺構により削平されているが、わずかに主柱穴の下端を検出している。南北に約 2.6m、東西 2.8m を測り床面積は約 7.3 ㎡である。主軸は N-11°-E を測る。カマドは北辺のやや東よりに位置すると思われ、煙道部掘り込みをわずかに確認することができた。

硬化面は主柱穴に囲まれた内側に広く確認できている。主柱穴は遺構隅に各１基の計４本を検出している。西壁下に貯蔵穴と見られる掘り込みを床面で検出、確認した。遺物は土師器杯が出土している。

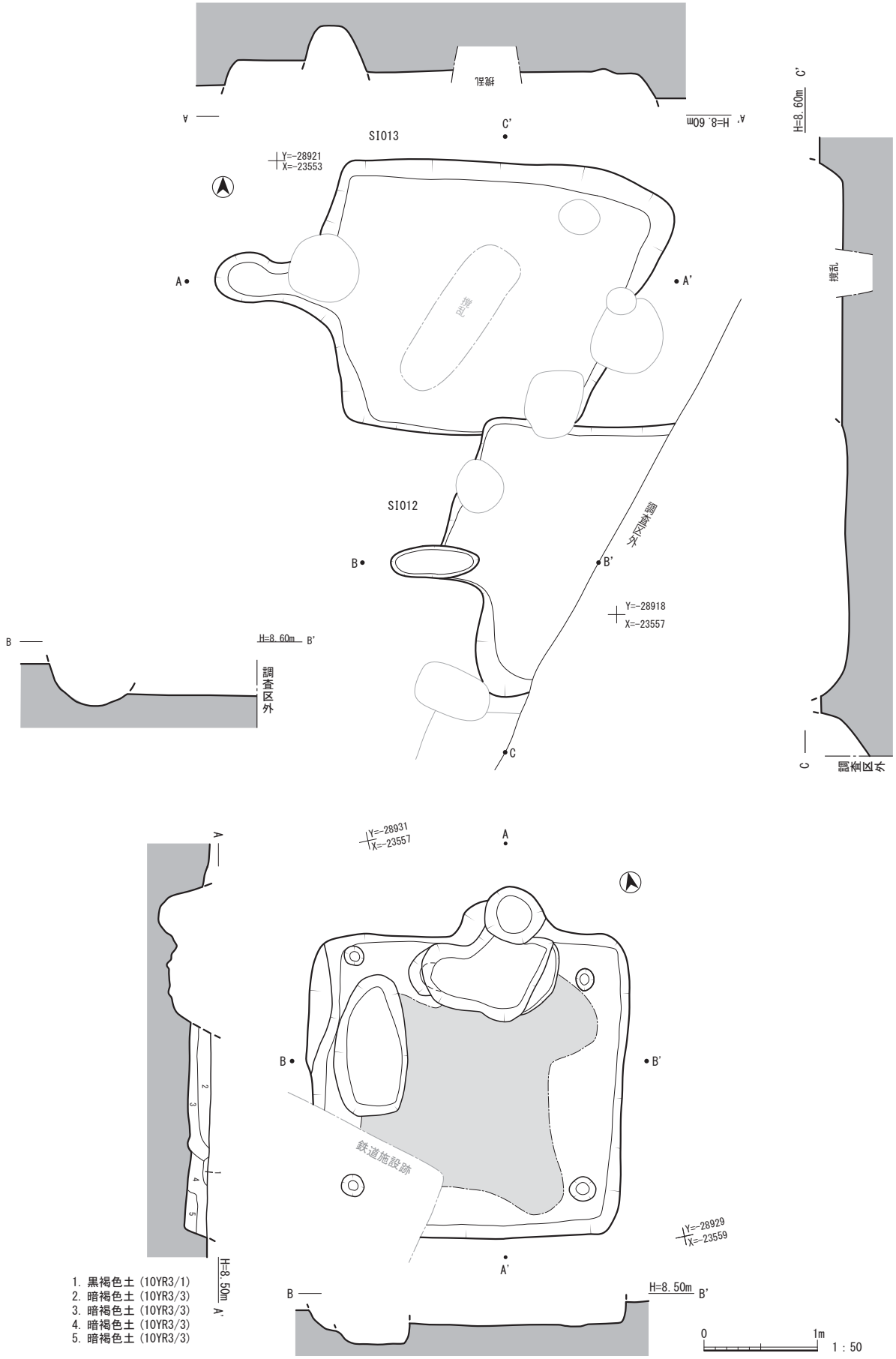


Fig.47　竪穴建物 SI012・SI013（上）SI015（下）実測図

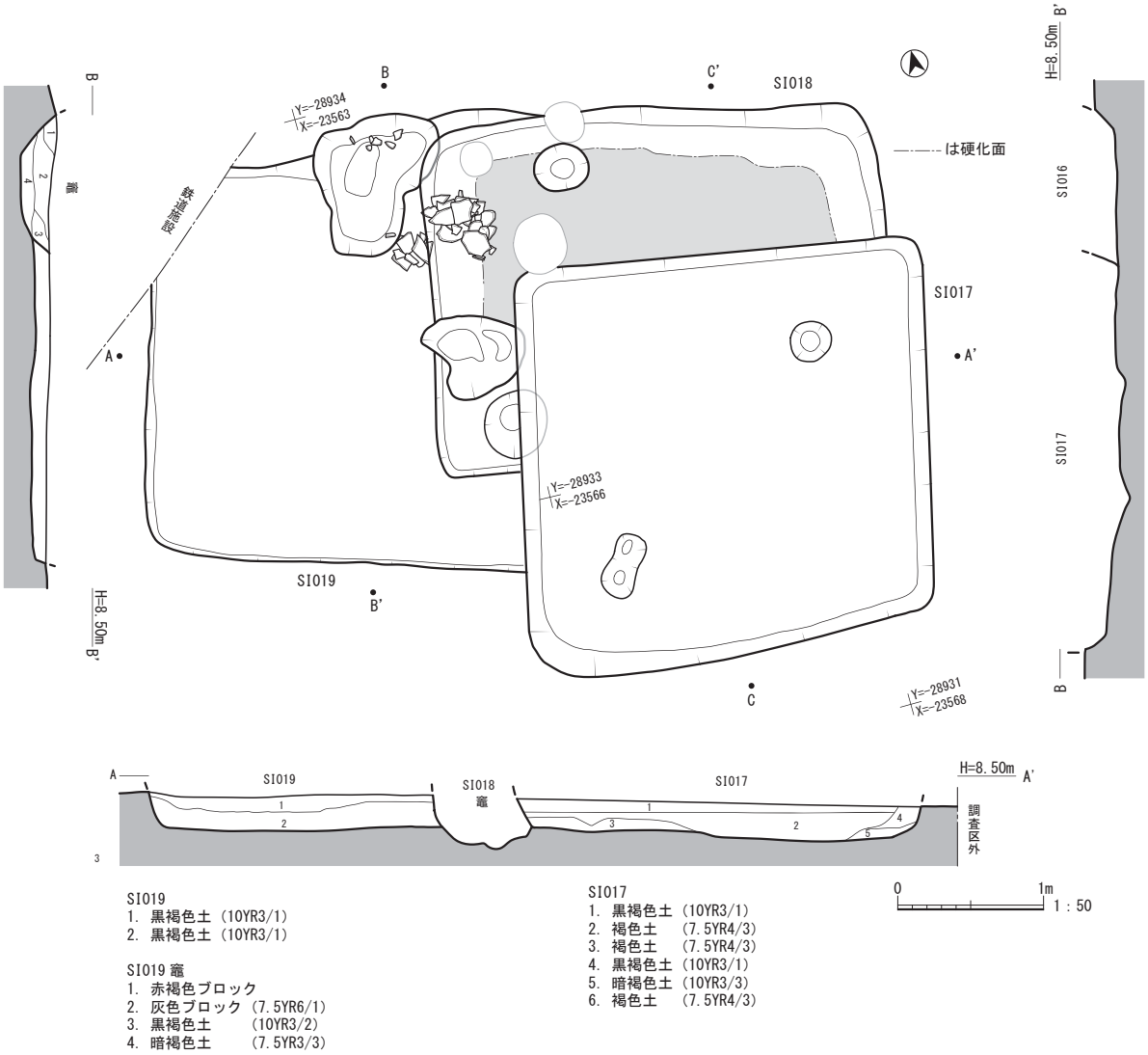
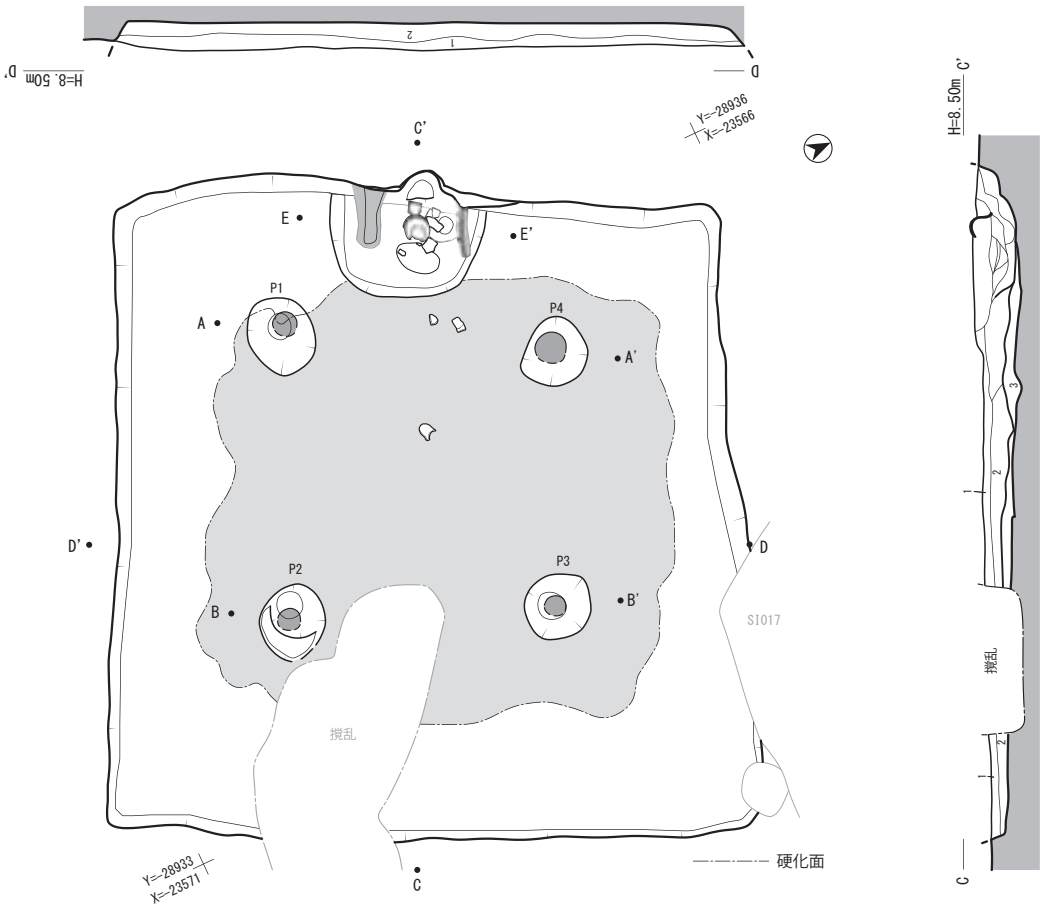


Fig.48　竪穴建物 SI017~SI019 実測図

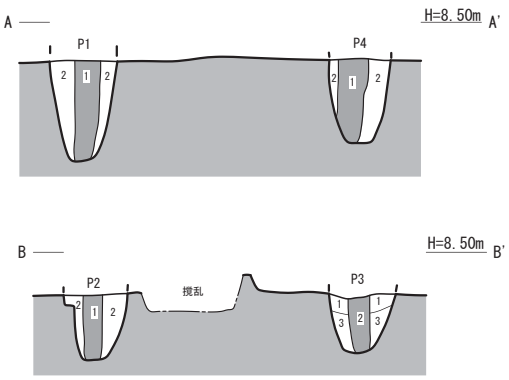
竪穴建物 SI017 ～ SI019（Fig.48）３軒の竪穴建物が切り合う状態で検出した。竪穴建物 SI017 は南北、東西等も約 2.8m で床面積は約 8㎡を測る。南辺でやや歪みがあるが、ほぼ正方形である。対角線上に小柱穴を１基づつ検出したが、主柱穴となりうるかは不明。作り付けのカマドはなく、床面では硬化面も確認していない。

竪穴建物 SI018 は遺構の大半を竪穴建物 SI017 に切られている。北西隅に遺物の出土がまとまって見られ、主に須恵器把手付甕が土圧により押しつぶされた状態で出土している。切り合いの最下段にあたる住居のカマド横に位置しているようにも判断されたが、調査の結果、本遺構に伴うものと判断した。現状では作り付けカマドは確認できないが、遺構中央に硬く発達した硬化面を確認することができた。しかし、主柱穴等の遺構は確認できていない。

竪穴建物 SI019 は、切り合いの最下段に位置する竪穴建物。北辺にカマドを敷設するが燃焼面や煙道、窯体を構成する粘土等の痕跡は残されていなかった。土坑状の掘り込みは、おそらくカマドを設置する際の掘形であると見られる。主柱穴、硬化面等は確認できなかった。

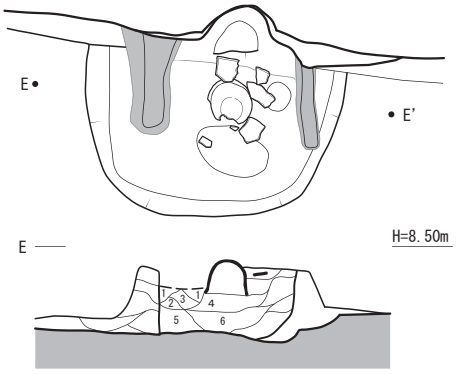


1. 暗褐色土（7.5YR2/1）
2. 暗褐色土（7.5YR3/1）
3. にぶい黄褐色土（7.5YR5/4）



(P1)
1. 暗褐色土（7.5YR3/3）
2. 暗褐色土（7.5YR3/3）
(P2)
1. 暗褐色土（7.5YR3/3）
2. 暗褐色土（7.5YR3/3）
(P3)
1. 暗褐色土（7.5YR3/3）
2. 暗褐色土（7.5YR3/3）
3. 暗褐色土（7.5YR3/3）
(P4)
1. 暗褐色土（7.5YR3/3）
2. 暗褐色土（7.5YR3/3）

0　1m　1：50



竈
1. 暗褐色土　天井部崩落土。
2. 灰色粘土ブロック（7.5YR3/4）
3. 黒褐色土（7.5YR3/2）　焼土含むしまり弱い。天井部崩落土
4. 暗褐色土（7.5YR3/2）　焼土粒多くしまりあり、天井部崩落土
5. 暗褐色土（7.5YR3/2）　白色、褐色ブロック含む。壁面崩落土
6. 暗褐色土（7.5YR3/2）　褐色・黒褐色土、焼土粒含む

0　1m　1：30

Fig.49　竪穴建物 SI022 実測図

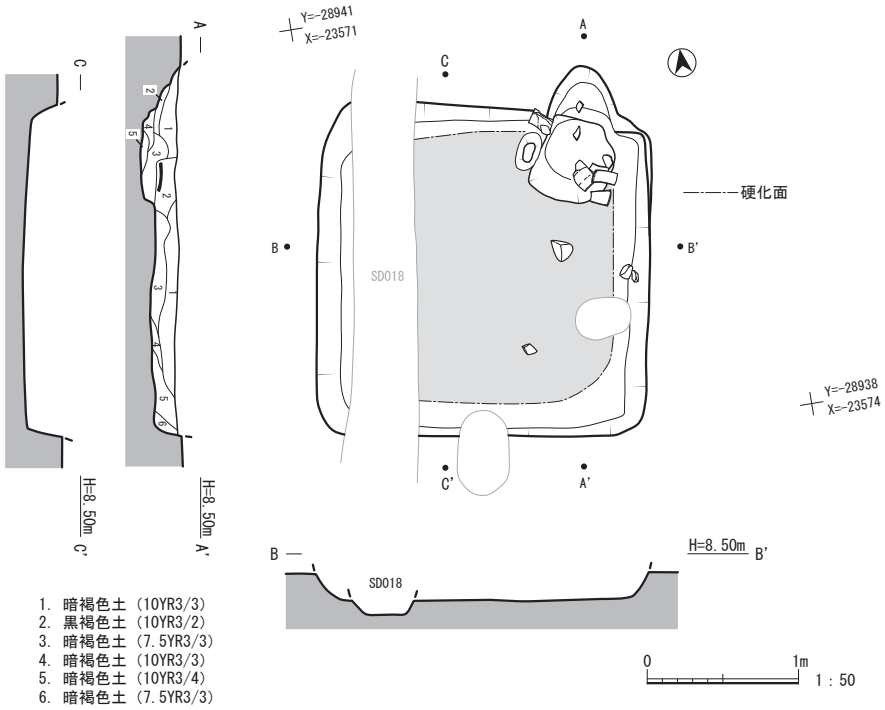


Fig.50　竪穴建物 SI023 実測図

竪穴建物 SI022（Fig.49）これまでに報告してきた竪穴建物のなかで最も残りが良い遺構であった。規模は南北に約 4.2m、東西 4.17m で床面積は約 18 ㎡を測る。主柱穴は遺構のほぼ中央に４本バランスよく配置され、硬化面は主柱穴を取り込みながら壁際にまで広がっている。カマド中心を主軸とすると N-63°-W を測りやや東へと煙道部が向く。作り付けカマドは依存度がよく燃焼面、窯体粘土裾部とも観察することができた。燃焼部には窯体をつぶした後に土師器甕が伏せられた状態で出土しており、カマド（住居）廃棄の祭祀に用いられた可能性もある。

竪穴建物 SI023（Fig.50）調査区内を南北に伸びる溝 SD018 に切られ検出した竪穴建物。検出時にカマドが東に寄った位置に存在することから周辺の精査を実施し遺構の広がりを確認したが状況は変わらず、このような形態の竪穴建物と理解し調査を実施した。規模は南北、東西ともに約 2.2m で約５㎡を測る。主軸はカマド中心をとおる線を中心に考えると N-11°-E を測る。カマドは北東隅に接し外に向かい煙道部の張り出しがある。燃焼部は確認できなかったが掘り込み部の土層中から須恵器甕が横倒しに出土している。窯体を構成していたであろう白粘土のブックが、一部に残り天井部の崩落若しくは袖部である可能性もある。主柱穴等は確認できていない。

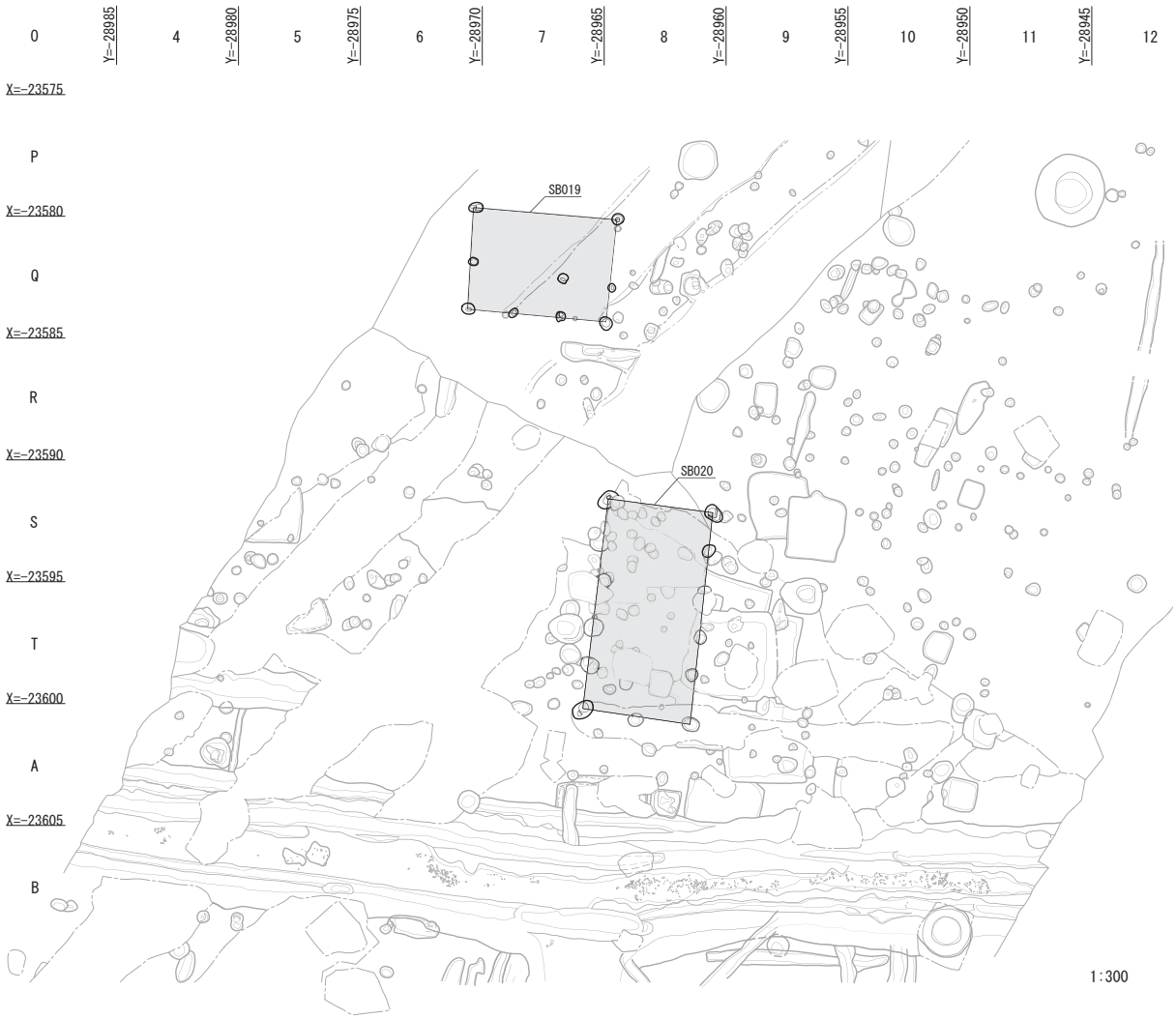
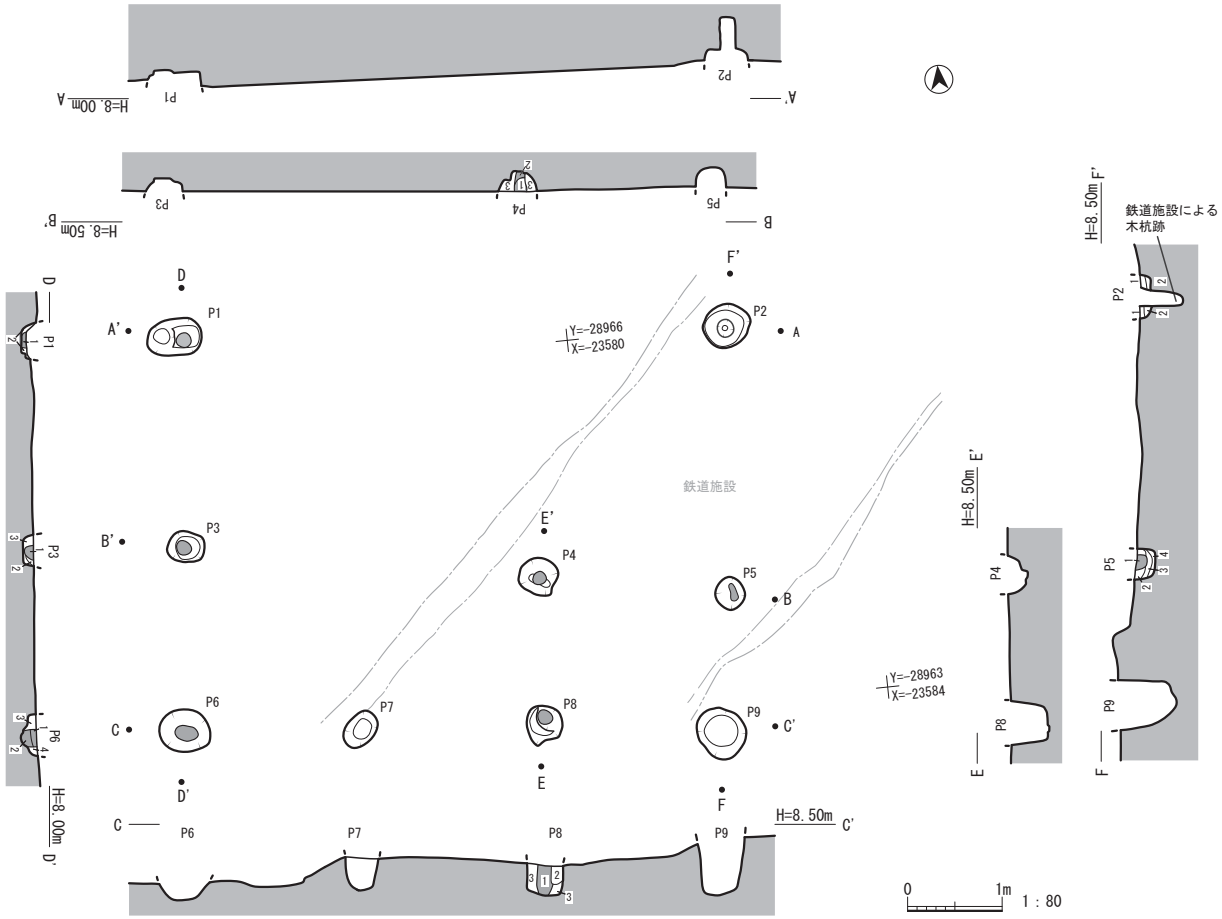


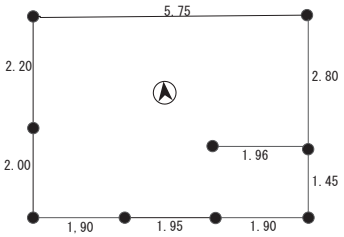
Fig.51　掘立柱建物 SB019・SB020 遺構配置図

掘立柱建物 SB019（Fig.52）調査区西壁近くで検出した掘立柱建物。検出した周辺は井戸 SE009・SE012・SE013 などと同様に、鉄道関連施設の建設に伴い大幅に削平を受けた範囲にあたる。

よって本遺構で検出した柱穴は、基底部に近い部分でのみの検出となった。規模は東西方向に主軸を有する２間×３間で桁行総長 5.75m、梁行 4.20m で主軸 N-5°-E におく。側柱のみで構成される建物が一般的であるが、本遺構では内部に P4 を配置する。柱間寸法は桁行で６～８尺、梁行でも同様の尺を示している。掘形はすべて不定形ながら円形で、断面で柱痕を残すものもある。

掘立柱建物 SB020（Fig.53）これまでに見られないほどの規模を有し検出した掘立柱建物。梁行２間×桁行５間、約 4.4m ×約 8.8m（15 尺× 30 尺）を測り、床面積は約 38 ㎡である。主軸は N-7°-E を示す。柱穴平面形はほぼ円形から楕円形で素掘りである。削平が激しく特に南辺ではかろうじて下端付近の検出できた状態である。





(P1)
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
3. 緑灰シルト (5G5/1)
4. 暗褐色シルト (10YR3/4)

(P2)
1. 暗褐色土 (10YR3/4)
2. 褐色シルト (10YR4/4)

(P3)
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 褐色土 (10YR4/6)
3. 緑灰シルト (5G5/1)

(P4)
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
2. 褐灰色土 (10YR4/1)
3. 黒褐色土 (10YR3/1)

(P5)
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 暗褐色土 (10YR3/4)
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2)

(P6)
1. 黒褐色土 (10YR3/4)
2. 緑灰シルト (5G5/1)

(P7)
1. 黒褐色土 (10YR2/2)
2. 褐灰色土 (10YR4/1)

(P8)
1. 黒褐色土 (2.5YR3/2)
2. 褐灰色土 (10YR4/1)
3. 黒褐色土 (10YR3/1)

Fig.52　掘立柱建物 SB019 実測図

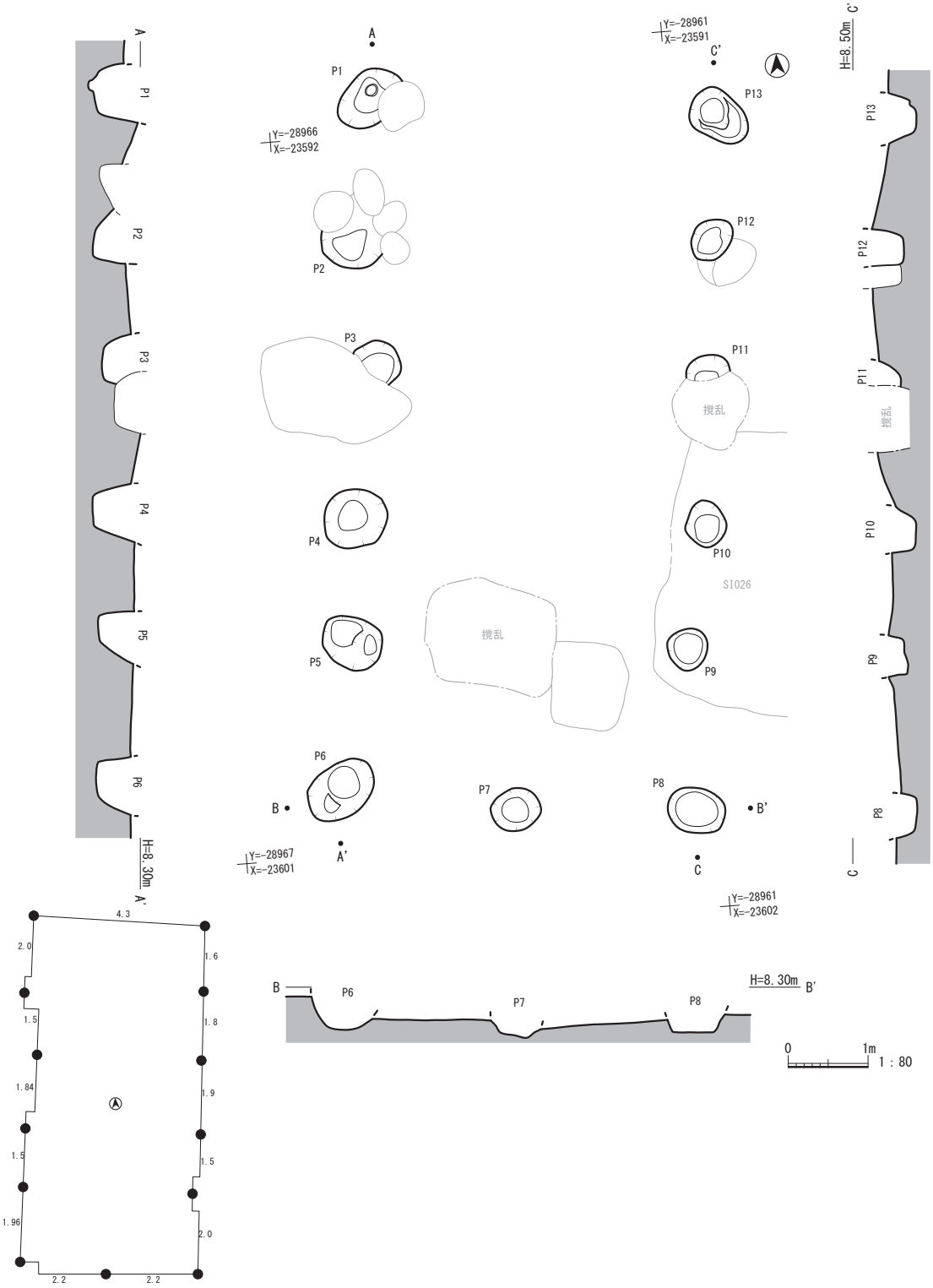


Fig.53　掘立柱建物 SB020 実測図

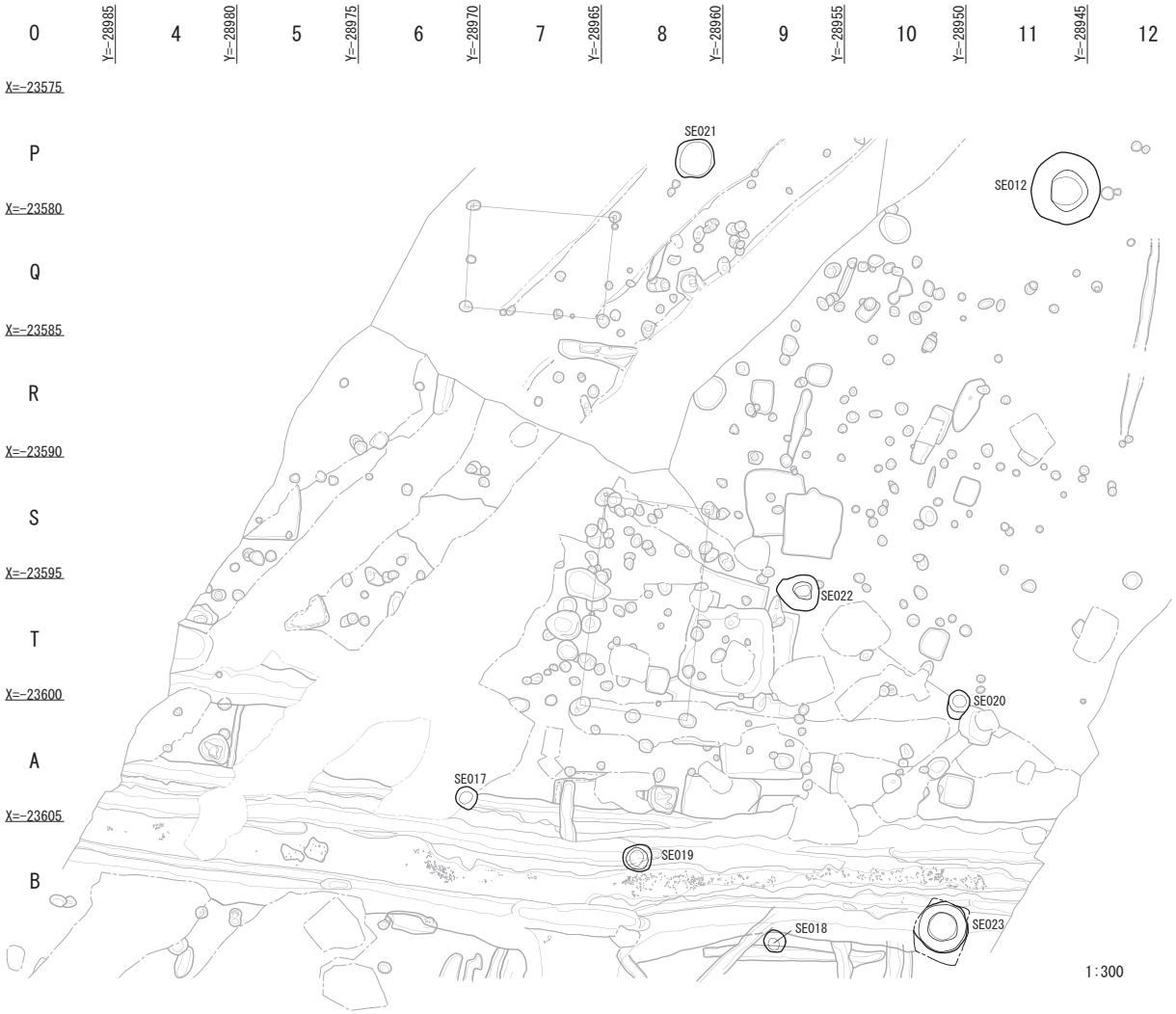


Fig.54　井戸 SE017~SE023 遺構配置図

井戸 SE017（Fig.55）溝 SD085 に切られ検出した井戸。上端は検出した面でやや外に広がり、その後垂直に下端にまで至る。井戸 SE019 に見られる段状の掘形はみられない。検出面で直径 90 ㎝、中位で 70 ㎝、下端 50 ㎝、検出面から下端までの深度は 2.3m を測る。周囲からは井戸屋形を示す柱穴等は検出されていない。

井戸 SE018（Fig.55）溝 SD095 に一部を切られながら検出した井戸。上端直下にやや張り出しがみられ、やや角度を変えることから上部に向かって開き、中間端もしくは段状等の施設があったのかもしれない。中世遺構に近接することから削平された可能性もある。平面直径は 90 ㎝で下端は約 50 ㎝、深度は 2.2m を測る。埋土からは古代の遺物が出土している。

井戸 SE019（Fig.55）道路 SF001 の上端から下端へ向かう傾斜面上で検出した井戸。井戸は上端から下端近くまで垂直に掘削され、下端付近で段を有し狭くなり下端へと向かう。平面形は円形で径約 1.2m、掘形は途中でやや中が膨らみながら、段を示し約 90 ㎝に狭まりながら下端へと向かう。下端では 60 ㎝となる。遺構深度は 1 段目まで 1.6m、下端までの部分で 50 ㎝で総計 2.1m となる。遺物は埋土中から古代の風字硯が出土している。

井戸 SE021　井戸 SE009 付近から広がる削平が酷いなかで検出した遺構。南側に掘立柱建物 SB019 を検出している。検出した面で径約 1.7m、掘削を中止した部分で深度 1.3m を測る。周囲には井戸屋形を構成すると見られる柱穴は確認していない。

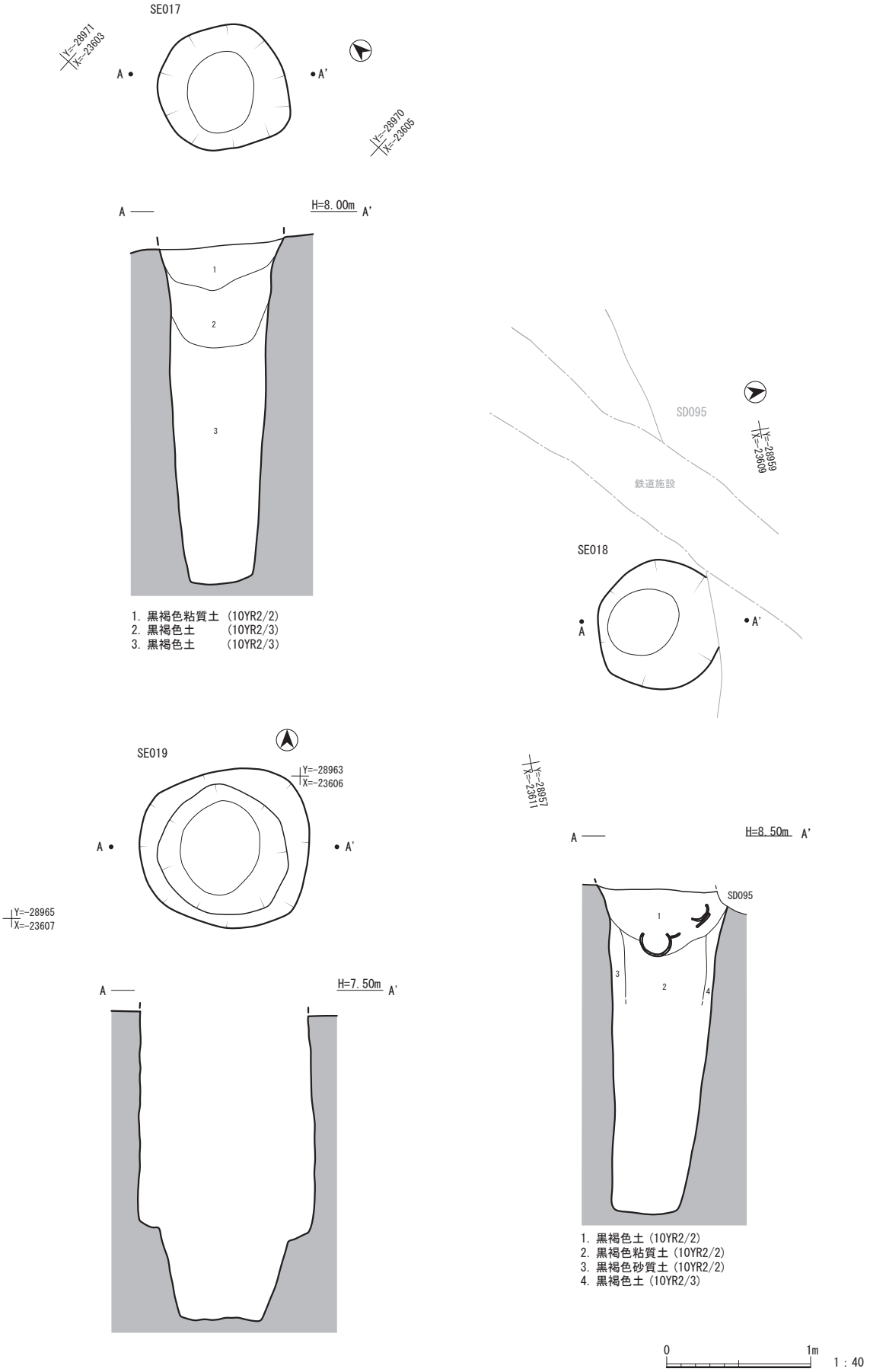


Fig.55　井戸 SE017（上）・SE018（左下）・SE019（右下）実測図

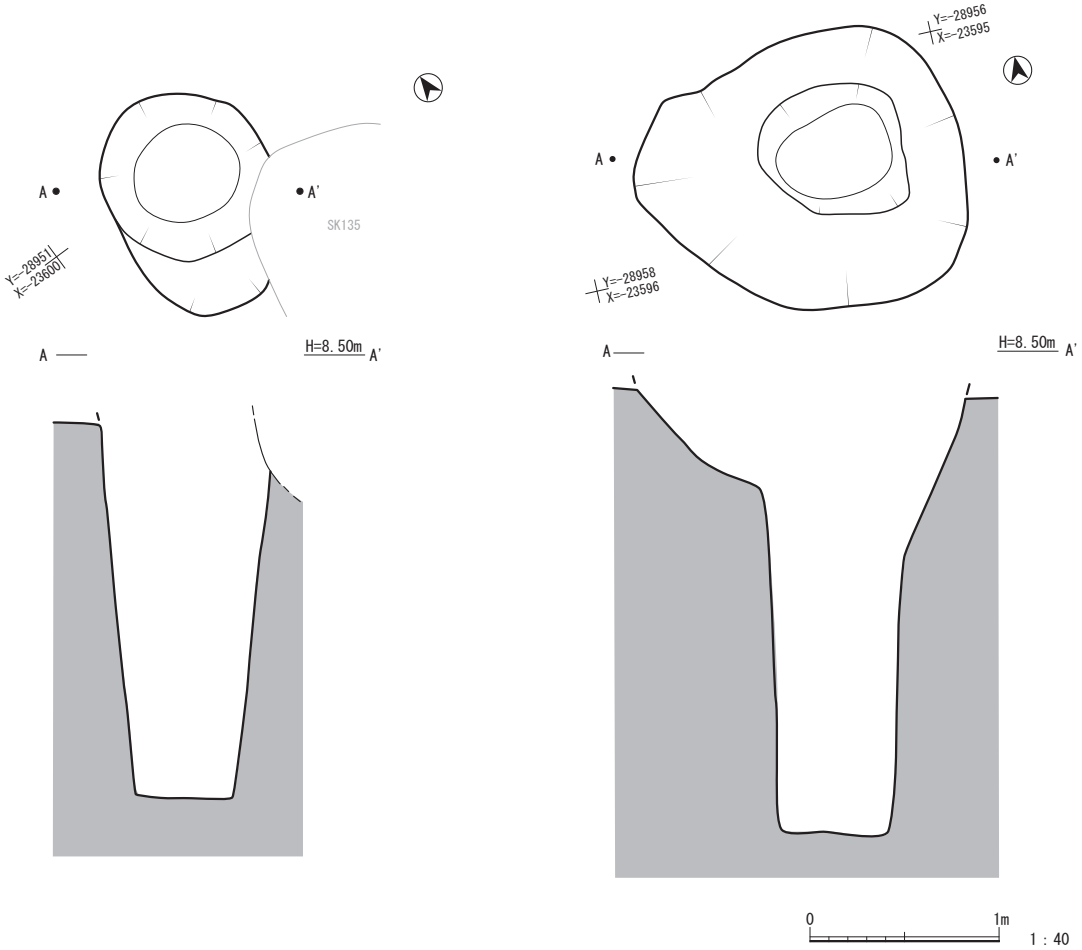


Fig.56　井戸 SE020（左）・SE022（右）実測図

井戸 SE020（Fig.56）土坑 SK135 に一部を切られながら検出した井戸。平面形は円形で南に向かい傾斜を有する掘形を持つ。遺構は途中に段を持たず垂直に下端に向かう。井戸本体の直径は 90 ㎝、掘形部も含め 1.2m、下端は 50 ㎝、遺構深度は 2m を測る。埋土からは 9 世紀後半の土師器が出土している。

井戸 SE022（Fig.56）掘立柱建物 SB020 の東側で検出した井戸。平面形は楕円形で西側に緩い勾配を持つ。中間端から下端にかけては垂直に掘削されており下端へ至る。上端長径では約 1.7m 中間端付近で約 90 ㎝、下端で 60 ㎝を測る。

井戸 SE023(Fig.54)道路 SF001 の掘形傾斜部上にで検出した井戸。上層からブロック状に混土した土が詰まっており撹乱と見まがうほどの様相を示していたが、掘削中に礫群が出土し始め井戸であることを認識した。礫中には方形に切りだされ石垣状に組まれた部分をみることができ、当初は上部にまで切石が積まれていたものと見られる。掘形は切石を設置する範囲まで広く、木枠が設置されている深度では狭くなる。検出面（礫検出面も同じ）で径は 2.1m、木枠が置かれ狭くなる部分で径 1.1m 下端も 1.1m で、木枠部は径 90 ㎝、高さ 1.0m、遺構深度は最終的に 2.6m を測る。出土遺物はないが周辺の調査事例から判断すると近世の遺構であるとみられる。よって、木枠部は調査終了後廃棄処分とした。

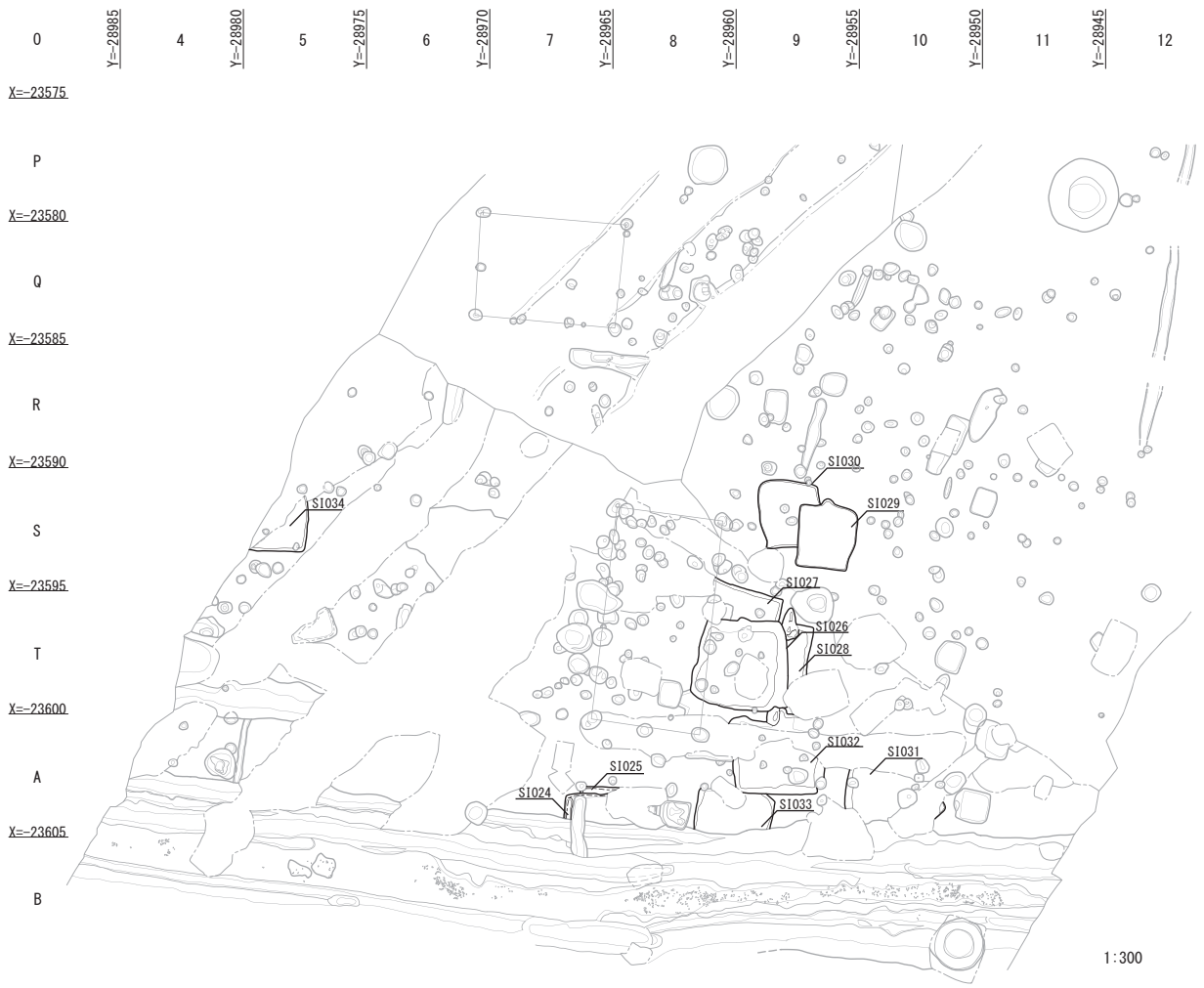


Fig.57　竪穴建物 SI024~SI034 遺構配置図

先に記述した竪穴建物 SI 群の間には竪穴建物群の検出はなく、空白区間となっている。最多数の切り合いは竪穴建物 SI062 付近で見られる３基の切り合いで他は２基もしくは切り合いはない。後世の掘り込み等で詳細な形を残していないものが多いが総数 11 基を検出している。

竪穴建物 SI026・SI027・SI028（Fig. 58）本竪穴建物群のなかで最も多い３基の切り合いからなる竪穴建物群である。竪穴建物 SI026 は切り合いが最も新しく検出している。隅丸方形で下端は上端に比べ内に入り緩やかな傾斜面を持つ。北辺中央には作り付けカマド燃焼部掘形が残るが煙道部の残りはない。床面では硬化面等の確認はできていない。主柱穴となる柱穴は西側で２基小柱穴を確認したが、東側では対となる柱穴は確認していない。また、床面調査後に掘形まで進めたが主柱穴となるものは確認できていない。竪穴建物 SI027 は方形建物として確認し、竪穴建物としての施設等は何もなかったため、規模から竪穴建物と判断した。掘形の形状は竪穴建物 SI026 と違い、角は直角に掘られ上端と下端の間隔は狭く整っている。得られた情報は少なく、床面には硬化面はなく、主柱穴等も確認されていない。規模は不明。竪穴建物 SI028 は切り合いの最下段にあたると判断し調査を実施した。平面形は方形で遺構の形状は、角の掘形が直角で上端と下端の間隔が近いことなどから竪穴建物 SI027 の掘形と類似する。南側掘形付近は他の遺構掘形や撹乱で狭い部分が残るのみでそこに他の遺構も切り合っていることから正確な遺構掘形は確認できていないと判断される。当初の掘形は、他の竪穴建物の事例から正方形に近い掘形であったとみられる。北辺の東寄りに作り付けカマドが残る。燃焼部掘形から外へ延びる煙道まで残り他の遺構に比べると良好な状態を示している。カマドを構成していた白粘土等の残欠は出土していない。床面では硬化面等の広がりはなく、主柱穴等

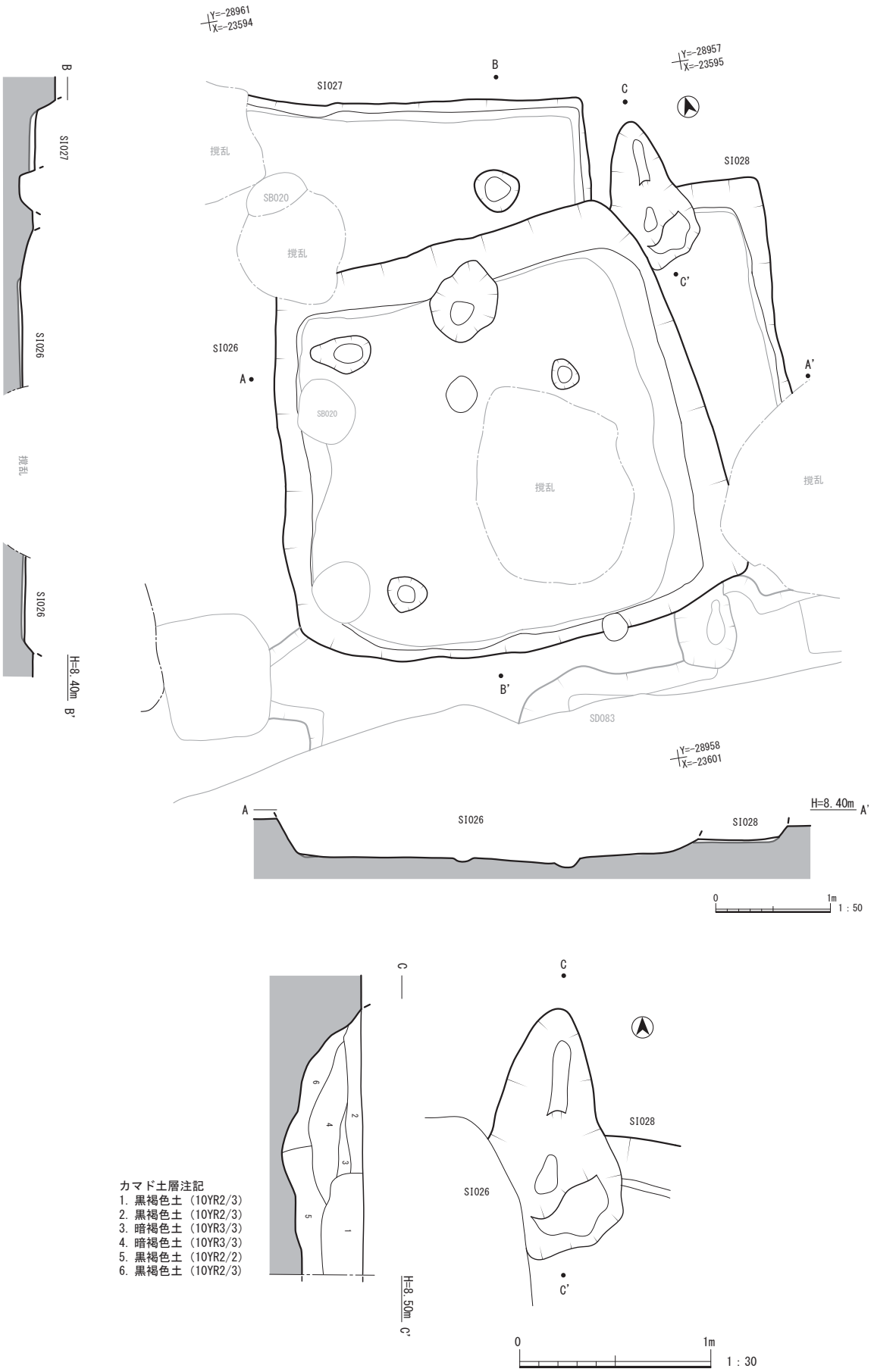


Fig.58　竪穴建物 SI026・SI027・SI028 実測図

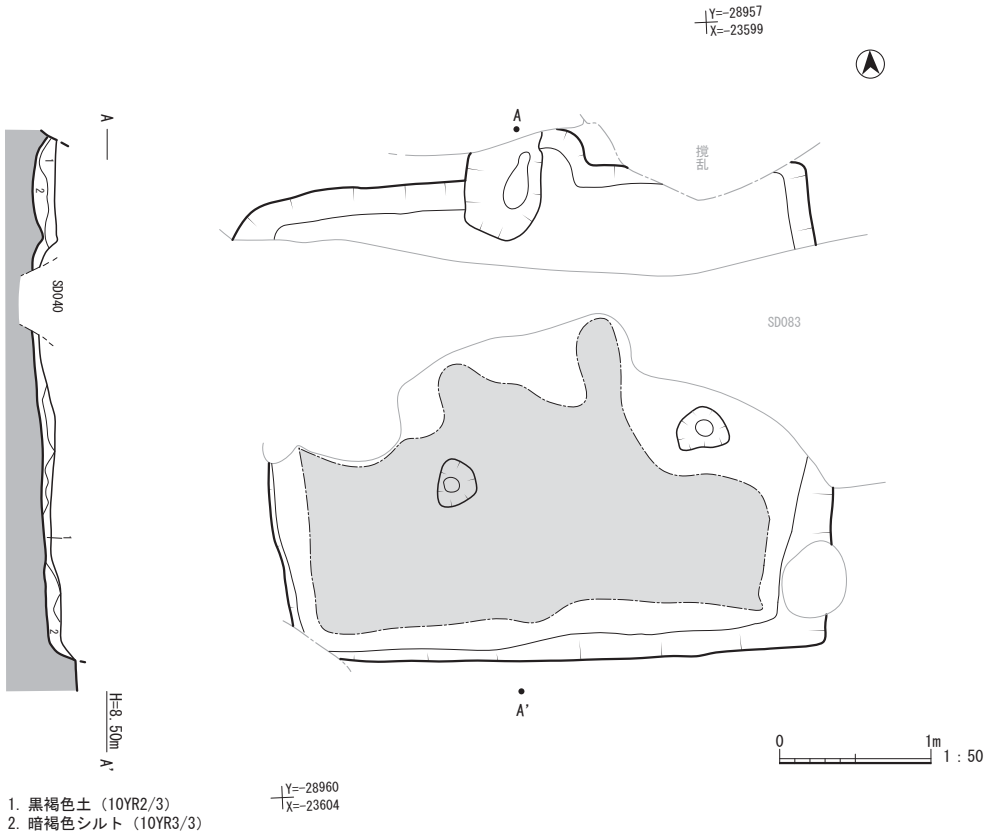


Fig.59　竪穴建物 SI032 実測図

も確認できていない。規模は不明。

竪穴建物 SI032（Fig.59）遺構中央を東西に後世の溝により切られる。隅丸方形建物で土層の観察から放棄後に自然堆積によって埋没したと考えられる。北辺中央に作り付けカマドの掘形のみを残す。周辺にはカマド残欠等は残らない。床面には南側を中心に硬化面が発達し、溝掘削の影響を受ける付近まで広がる。硬化面が遺構下端近くまで及んでおり、遺構内の利用を考えるうえで重要な事例となりうる。主柱穴は中心付近に２基検出していることから、切られている範囲内に２基あったことが想定され、４本柱建物であったみられる。規模は南北約 3.5m、東西約 3.8m を測り、主軸は作り付けカマド中心をとおる線を基軸とすると N-2°-W を示している。

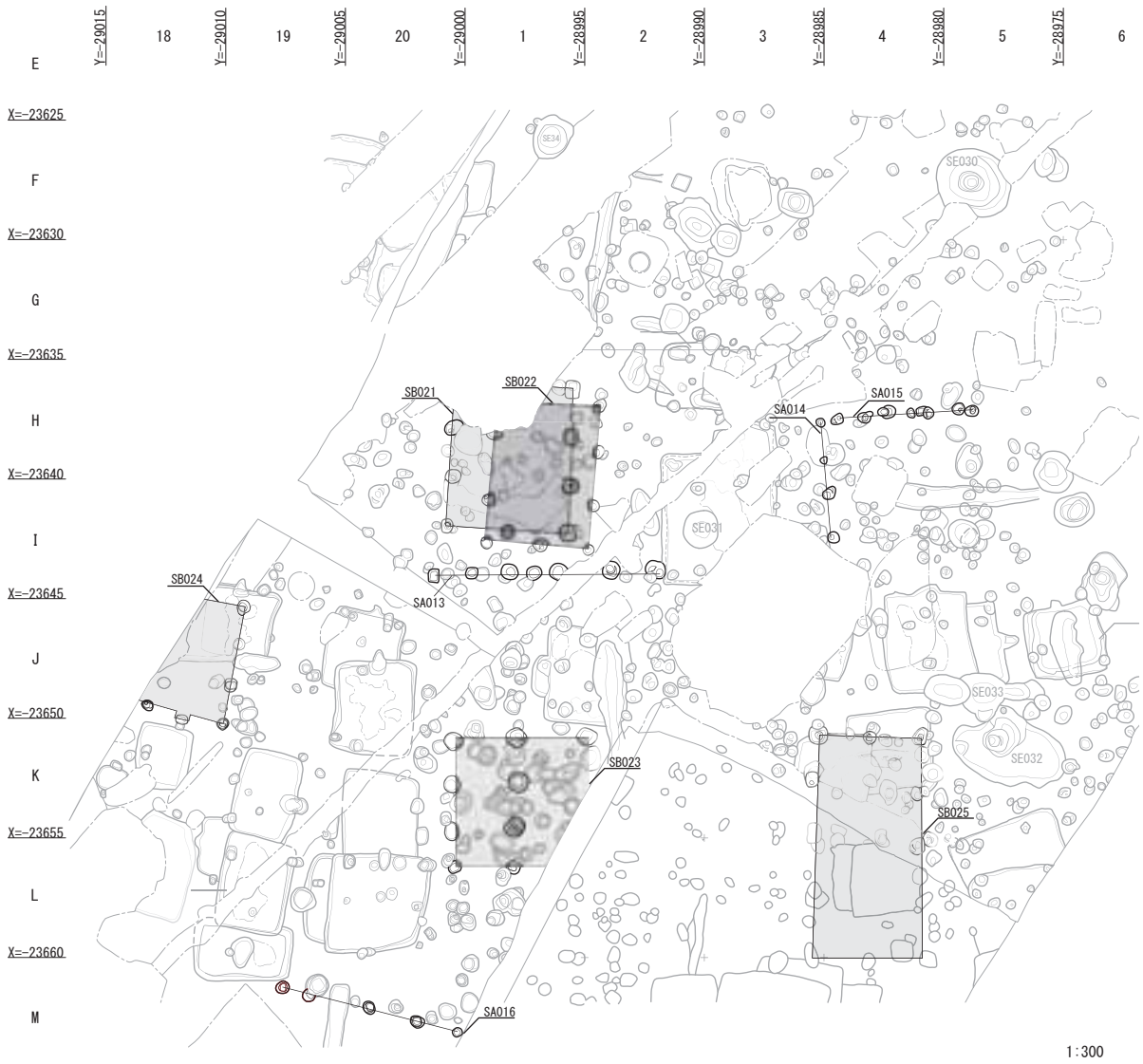


Fig.60　柵列 SA013~SA016、掘立柱建物 SB021~SB025 遺構配置図

ここで報告する調査区には、調査委託を実施した調査区を含んでいる。発掘調査自体の民間調査委託は熊本県としては初めての事例であったことから、受託し調査を実施した大成エンジニアリング株式会社へは常時、隣接する調査区を担当していた県担当が監督し、慎重に助言・指導をおこなったにも関わらず、受託業者は熊本県の土に慣れていないこと、主任調査員・調査員の不慣れ、実測担当者の技量不足、これまで業者が受託してきた地域との調査手法の違い等から、熊本県における最低限度の記録保存の措置が不十分であった。業務委託は調査のみであったため、整理・報告書作成は熊本県が実施した。

柵列 SA013（Fig.60）掘立柱建物 SB021・SB022 の南に平行に立地し検出した柵列。おそらく、同掘立柱建物に伴う柵列であった可能性が高い。全長約 9.5m で柱穴間はおおそよ 1.0m から 2.0m を測る。本遺構でも柱穴間の狭い部分もあることから建て直しの可能性もある。掘形平面形は円形で、ここで報告している柵列 SA014・SA015 に比べると規模は大きい。

柵列 SA014（Fig.60）柱穴の密集する一角で検出した柵列。概観すると掘立柱建物の一辺のようにもみえるが掘立柱建物としては不完全であるため、柵列として報告する。全長 4.9m で３間からなり、柱穴間は約 70 ～ 80 ㎝を測る。柱穴平面は削平を受けているものもあるが、おおよそ円形の掘形となる。柱痕は検出できていない。

柵列 SA015（Fig.60）柵列 SA004 に隣接し確認した柵列。検出した状況等は柵列 SA004 と同じである。全長約 2.8m、５間を想定できるが、途中に接する柱間もあることから建て直しの可能性も高い。柱穴間は約 40

cmから 50 cmを測るが一定しない部分もある。

柵列 SA016（Fig.60）5 基の柱穴が並び約 7.6m（約 26 尺）の規模をもつ柵列。すぐ北に掘立柱建物 SB023 が位置している。

掘立柱建物 SB021（Fig.61）掘立柱建物 SB022 と軸を同じくし、建て替えに寄る切り合いを示している掘立柱建物。柱穴の切り合い関係はないため遺構の新旧は不明。規模は一部を撹乱により削平されているためはっきりとは断言できないが、検出できている範囲検討すると梁行 2 間×桁行 3 間、約 4.9m × 5.9m（約 16 尺× 20 尺）を測り床面積は約 28 ㎡である。主軸は N-4° -E を示す。また、柱穴平面形は長軸側に長方形掘形を持つものが多いが、なかには円形の掘形を持つものもある。しかし、それら円形掘形を有する遺構は中間端から下端にかけては方形掘形を示している。西側の柱列にはすべて遺構底面に板状石を配する。

掘立柱建物 SB022（Fig.62）先述した掘立柱建物 SB021 との間で建て替えを想定される掘立柱建物。一部を撹乱により乱されるため柱列すべて検出できてはいない。規模は梁行 2 間×桁行 3 間、約 4.2m × 5.8m（約 15 尺× 20 尺）と掘立柱建物 SB021 とほぼ同規模で、床面積は約 24 ㎡を測る。主軸は N-5° -E を示し掘立柱建物 SB021 にくらべやや東へ軸を振る。柱穴平面形は掘立柱建物 SB021 では方形掘形を有していたものもあったが、円形掘形を主体とし中間端から下端まで含め方形掘形を示しているものはない。東側柱列の P8 では遺構底面にやや厚めの礫を配している。

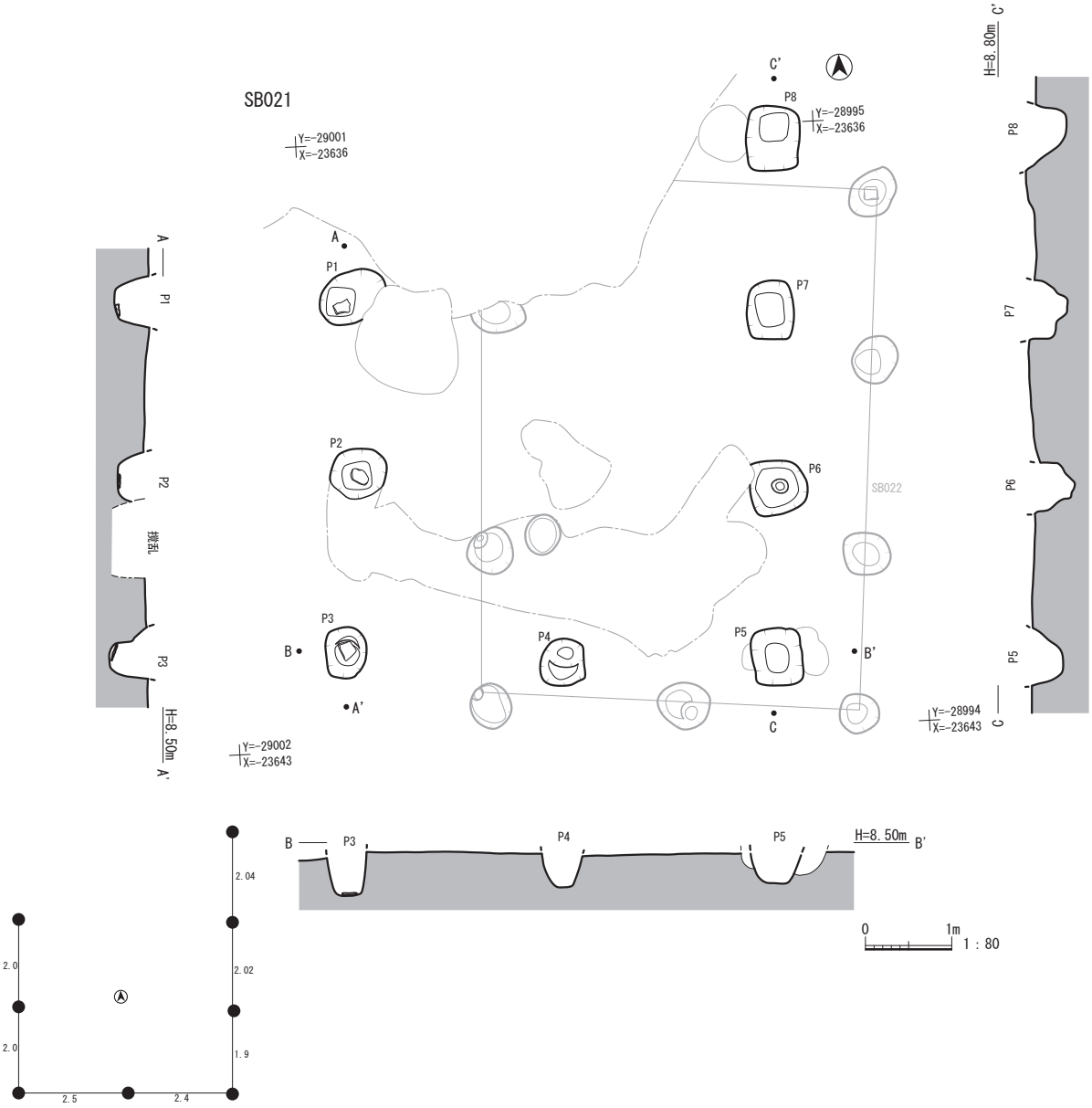


Fig.61　掘立柱建物 SB021 実測図

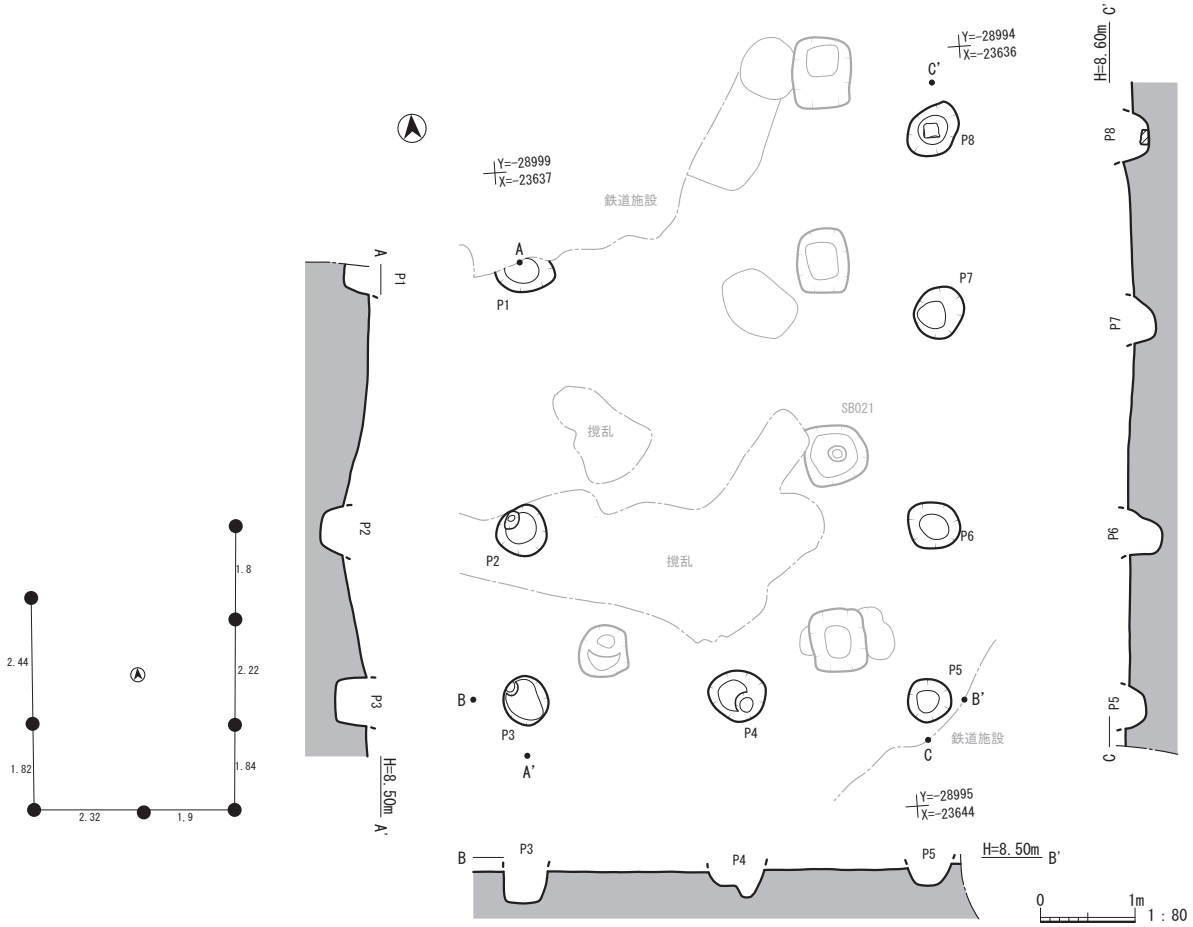
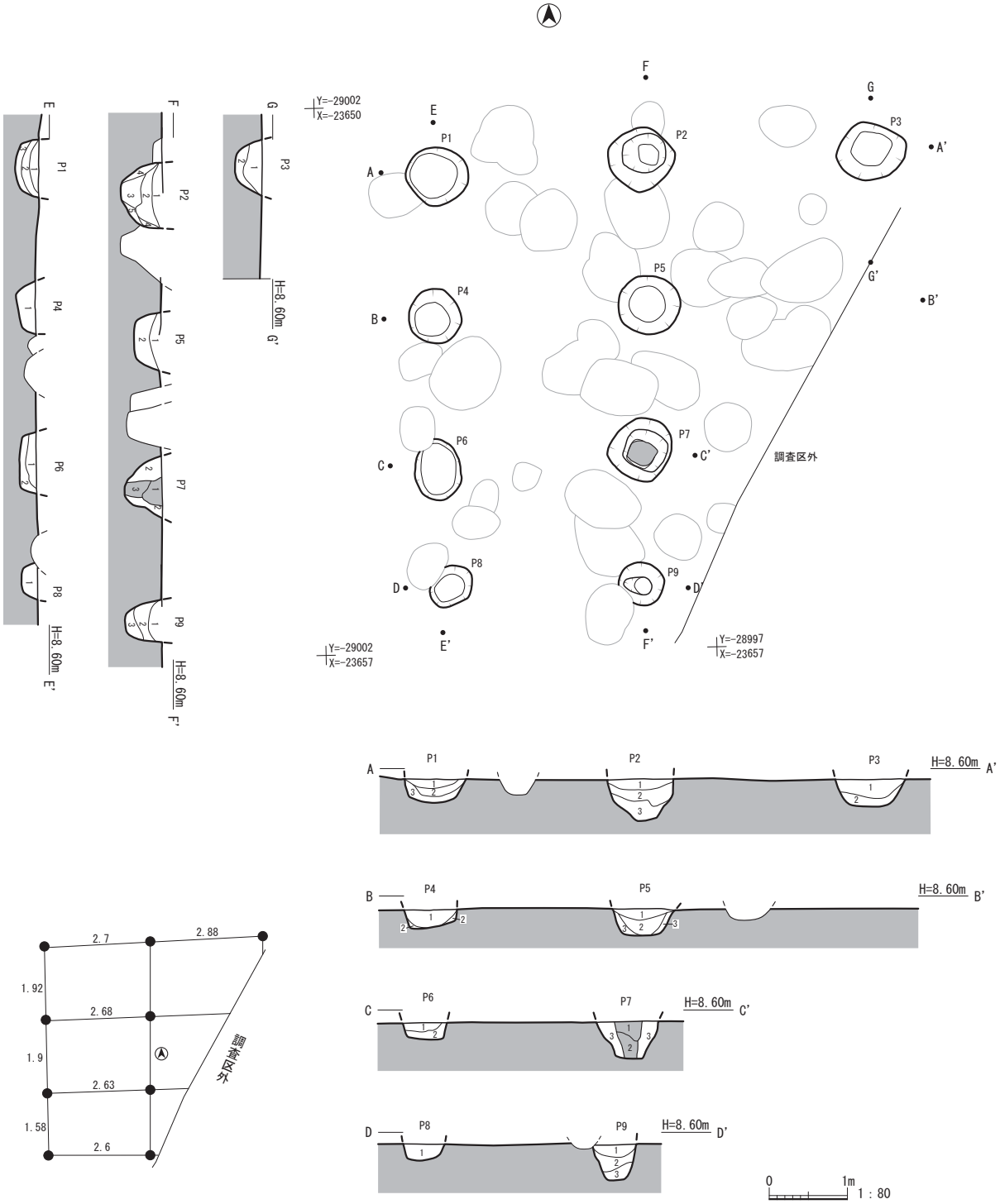


Fig.62　掘立柱建物 SB022 実測図

掘立柱建物 SB023（Fig.63）鉛汚染土に接し遺構の約 1/5 が未調査の掘立柱建物。側柱の他に中間にも柱を配することから総柱建物である。梁行 2 間×桁行 3 間であるが南側の列が他の柱間よりも狭いこと、東西の柱穴間が南北軸のものと比べ広いことから平面形は正方形に近い。柱穴形状はほぼ円形であるが P7、P2、P3 などに本来は隅丸方形をしていたとみられる柱穴も存在する。大半の柱穴土層断面では水平堆積による柱穴が見られることから、廃絶時には抜き取ったのち埋戻しをしていた可能性が高い。規模は、南北が約 5.4m（約 18 尺）、東西が約 5.6m（約 18.5 尺）を測る。主軸は南北方向を主軸として捉えると、N-1°-E を示す。

掘立柱建物 SB024（Fig.64）調査区の端に位置し、西側柱列部は未調査である。柱穴遺構平面は円形をしているが、方形の掘形を有するもの（P4）があることからすべて当初は方形の掘形であった可能性が高い。規模は梁行 3.3m ×桁行 4.9m（約 11 尺× 18 尺）を測り、N-9°-E を示す。同じ位置で検出された竪穴建物との切り合い関係は竪穴建物→掘立柱建物である。

掘立柱建物 SB025（Fig.64）竪穴建物と重複して検出した掘立柱建物。調査区南側約 1/3 は鉛汚染土にかかり上端のみの検出で留め掘削はしていない。北側 2/3 のみは下端まで掘削し調査を実施した。規模は梁行 2 間×桁行 4 間、約 4.2m × 8.4m（14 尺× 28 尺）を測る。主軸は N-3°-E を示す。柱穴平面形は P1 のみ上端、下端とも隅丸方形で検出した。他の柱穴も削平を受けていなければ、隅丸方形の掘形を有していたと見られる。遺構北辺となる P1 ～ P5 では下端に柱座による小柱穴が残る。



(P1)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/1）
3. 黒褐色土（10YR3/3）

(P2)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/2）
5. 黒褐色土（10YR2/2）

(P3)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/1）

(P4)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 暗褐色土（10YR3/3）

(P5)
1. 黒褐色土（10YR2/3）
2. 黒褐色土（10YR2/3）
3. 黒褐色土（10YR2/3）

(P6)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

(P7)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）

(P8)
1. 黒褐色土（10YR3/2）

(P9)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（2.5YR3/2）
3. 黒褐色土（10YR3/2）

Fig.63　掘立柱建物 SB023 実測図

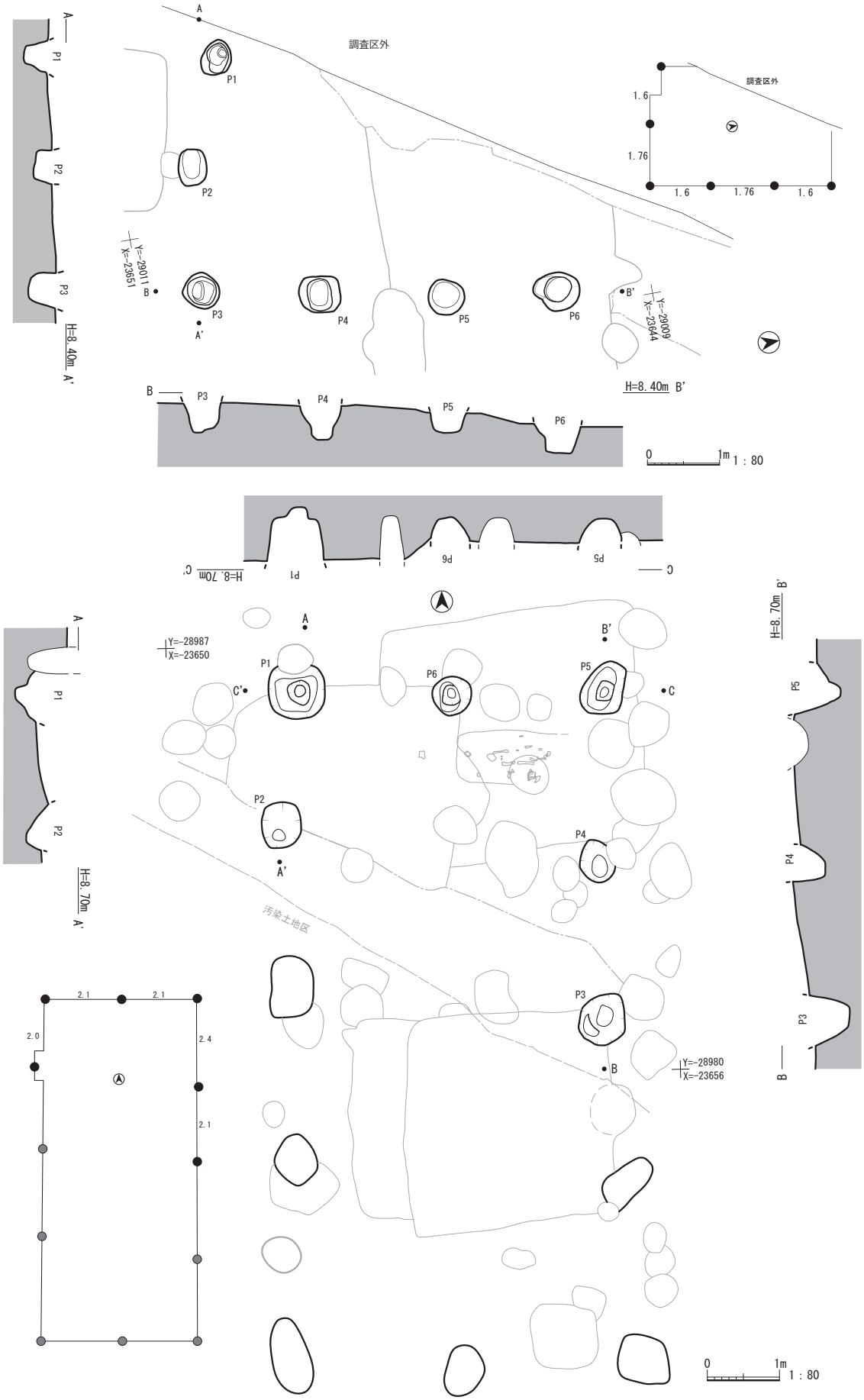


Fig.64　掘立柱建物 SB024（上）・SB025（下）実測図

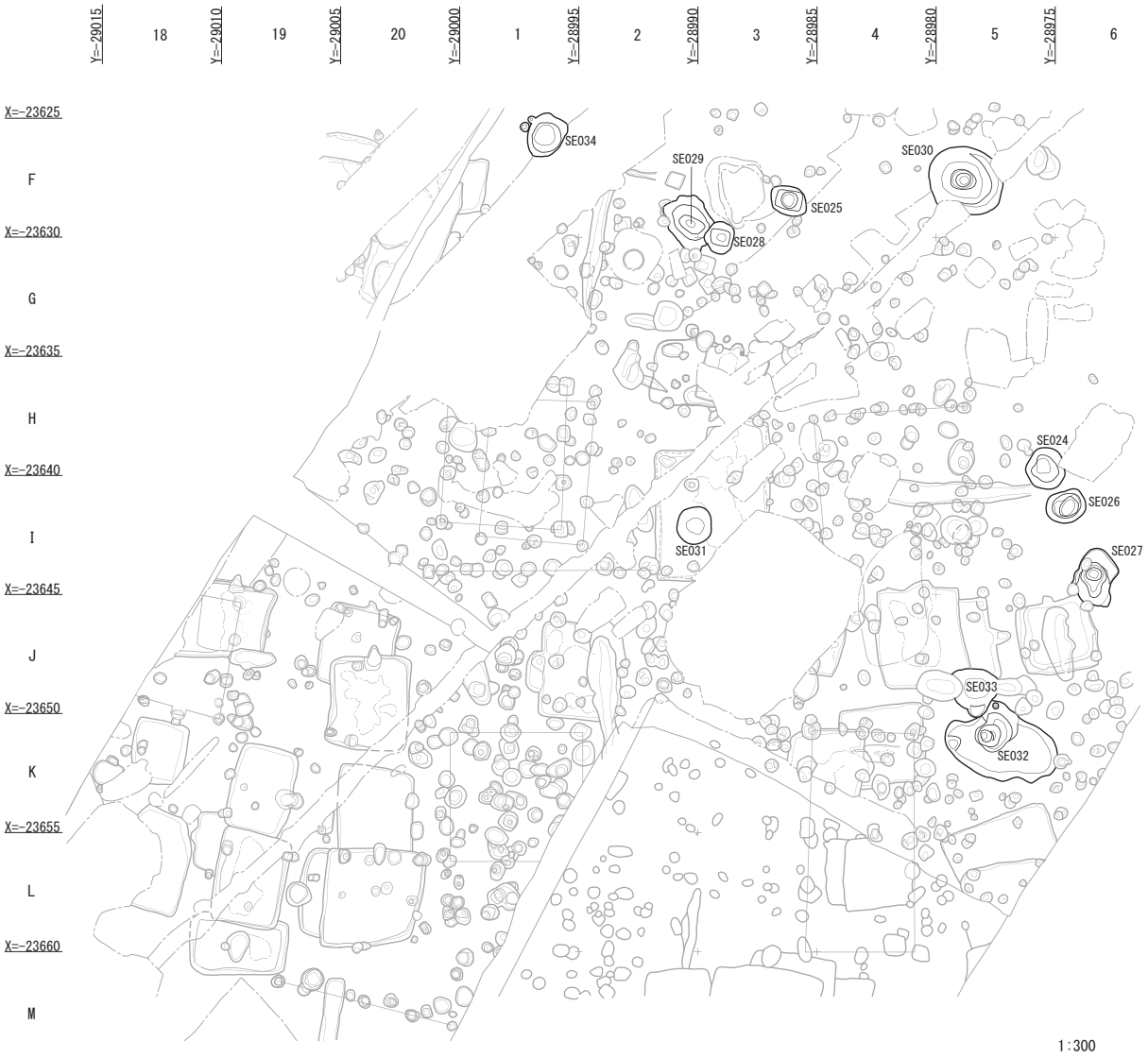


Fig.65　井戸 SE024~SE034 遺構配置図

井戸 SE024（Fig.66）隣接して２基の井戸が並び、検出した遺構で両遺構の間隔は約 40 ㎝である。平面形はやや歪みのある円形で、遺構の一角が撹乱により削平を受けている。遺構掘形上部は脆弱な層にあたるためやや崩れており掘削当初より崩落が広がっているようである。中間端として認識した線は明確な掘形の変化があるところではなく層の分かれ目である。中間端より下層では掘形がよく残っており垂直な掘削である。遺構規模は平面で直径約 1.7m、中間端付近で約 1.0m、下端で 60 ㎝、深度は約 2.5m を測る。周囲からは井戸屋形等を構成する柱穴は検出されていない。埋土中からは古代の土師器高杯が出土している。

井戸 SE025（Fig.65）溝 SD096・SD097・SD100 からなる方形区画と想定した内部から出土した井戸。平面形は楕円形をしていたことから当初は長径に土層を設定し調査を進めたが、途中から井戸であると判断した遺構。上端は東西に主軸を持ち楕円形であるが中間端の時点では長方形の掘形となり下端では円形と形を整える。上端長径で 1.7m、中間端長径 1.1m、短径 1.0m、下端は径 70 ㎝を測る。上端掘形からすると３段の掘形を示す。埋土中からは古代の土器が出土している。

井戸 SE026（Fig.66）先述した井戸 SE024 に隣接し検出した井戸。平面は楕円形で緩やかな土坑状の掘形の後、方形掘形が掘削され、そのなかに井戸本体の掘削が及んでいる。規模は検出面となる上端で約 1.7m、２段面掘形で 1.1m、下端で 50 ㎝、深度は約 2.2m を測る。２段目の掘形部までは土層が確認でき、廃絶後の自然堆積による土砂の流れ込みを観察することができた。埋土からは土師器甕の口縁から体部までの部位が出土している。

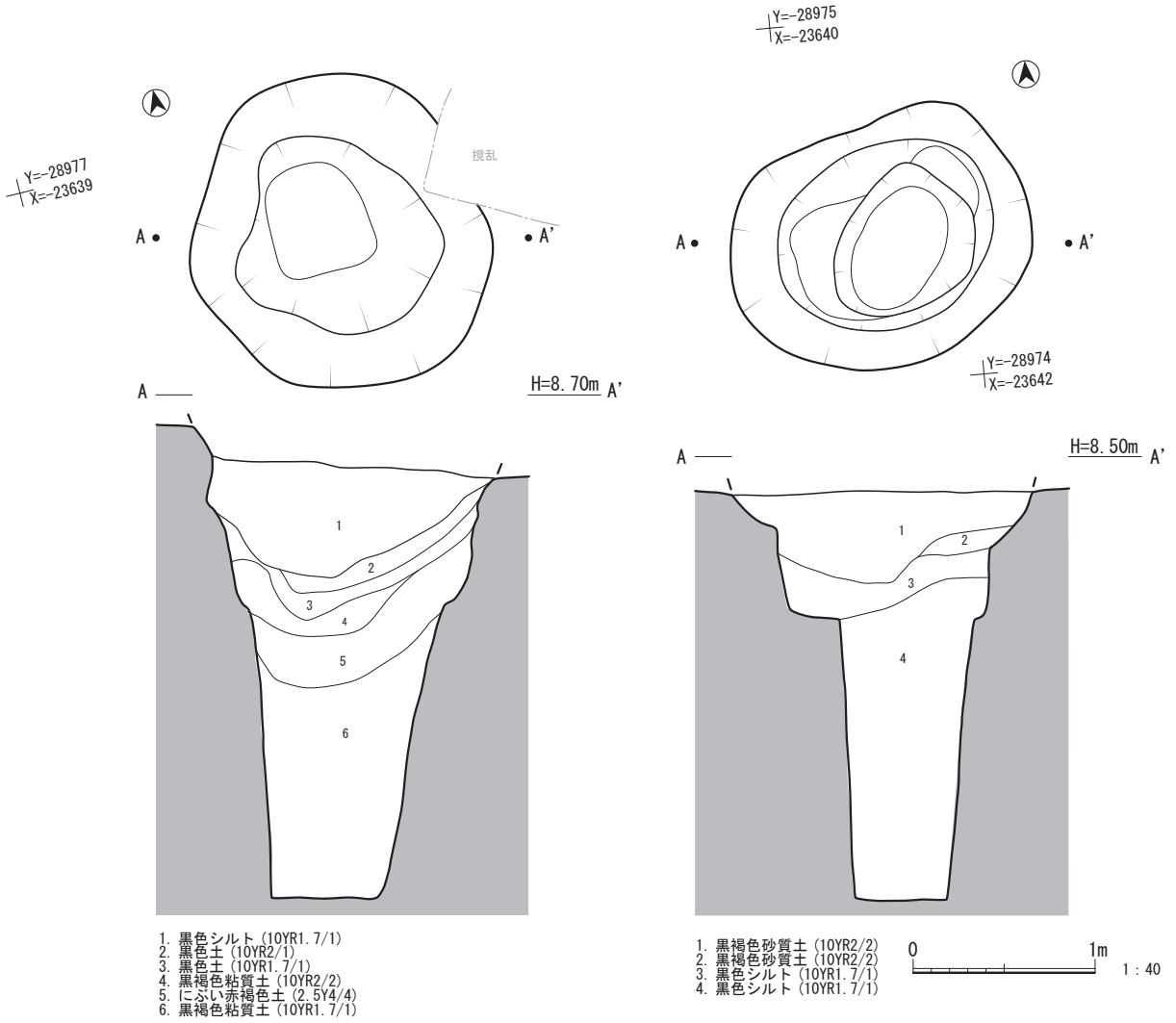


Fig.66　井戸 SE024（左）・SE026（右）実測図

井戸 SE027（Fig.67）南北に広がる土坑状の掘形を持ち、中心部付近に井戸本体を置く。北側に浅くステップを置き、南側では 4 段の中間端を形成しながら底面へと続く。確認できた限りの土層では、1 層あたりの層が厚く、東西側から流れ落ちている痕跡を示す。壁面の崩落が見られたことから底面まで完掘はしていない。規模は検出した上端で約 2.4m、深度は約 1.6m、掘削した最深部での径は約 40 ㎝を測る。埋土中からは須恵器壺などとともに、製塩土器片が出土している。

井戸 SE031（Fig.67）深さからすると、土坑とも考えられたが掘削翌日には自然と水が染み出し溜まっていたことから井戸として報告する。検出した平面形は円形で底面直上付近で中間端を持ち、中間端以降は垂直に落ち底面へ至る。底面は東に向かいやや傾く。土層は自然堆積による埋没を確認できる他の遺構と比べるとやや 1 層あたりが厚いが交互堆積を見せていることから自然堆積の可能性もある。規模は径約 1.6m、深度は約 1.3m、底面径は 70 ㎝を測る。

井戸 SE028・SE029(Fig.68)2 基の井戸が切り合い検出した遺構。切り合いの関係は井戸 SE029 → SE028 となる。先行する井戸 SE029 は不定形な掘形上端であるが、中間端以下は当初は方形であったことを窺わせるやや崩れかかった楕円形となっている。中間端は 2 段に及び下端は楕円形となる。遺構掘形上端は一部井戸 SE028 に切られるが長径約 2.3m、短径部で約 1.7m を測る。掘形途中に 2 段の緩やかな中間端を持つが、1 段目では

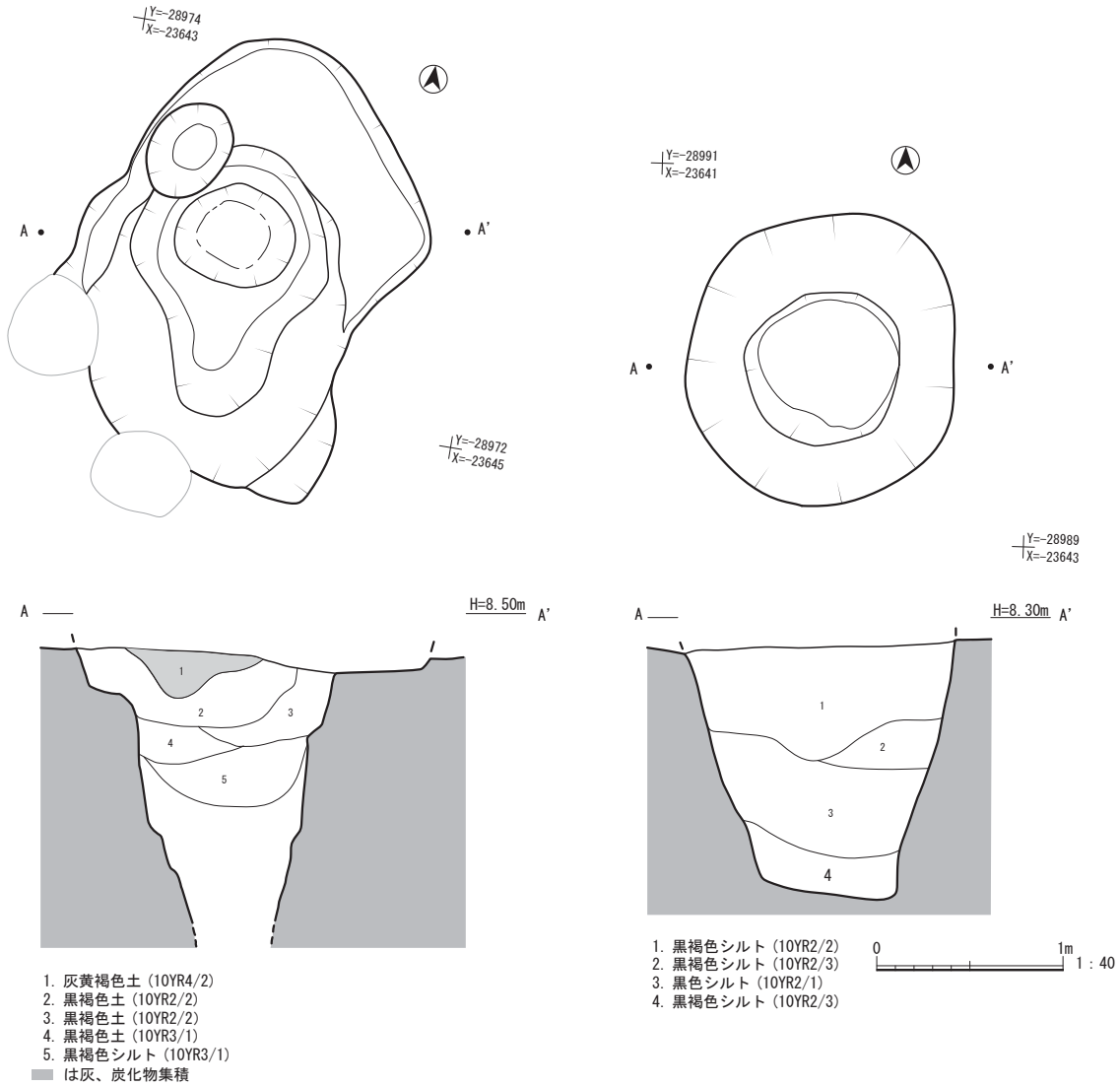


Fig.67　井戸 SE027（左）・SE031（右）実測図

狭いながらも平場を形成していた可能性が高い。遺構深度は約 1.4m である。埋土の基本土質は検出面となっている褐色土の上層の黒色土層が基本埋土となることから上層にあたる黒色土からの掘り込みであるとされることから、当初の掘り込み面は現在の深度より約 30 cmから 50 cm深かったとみられる。遺構埋土中からは 8 世紀後半から 9 世紀初頭にかけての遺物が多数出土していることから、9 世紀初頭期の井戸である。

井戸 SE030（Fig.65）調査区のほぼ中央部に位置しており遺構南北側両端を鉄道遺構により削平を受けている。平面形状は東西方向にやや広がる円形をしており、東側から 2 段、東側からは 1 段のステップを持つ。井戸本体掘り込み部は円形で、下端よりやや上部で一度狭くなり、底面へと続く。底面はフラットである。埋土中からは 8 世紀末から 9 世紀初頭の土師杯、須恵器高台付杯、盤、壺等が出土している。規模は、検出時上端で約 3.3m、井戸本体掘形上端で 1m、底部で 40 cm、深度は約 3.3m を測る。

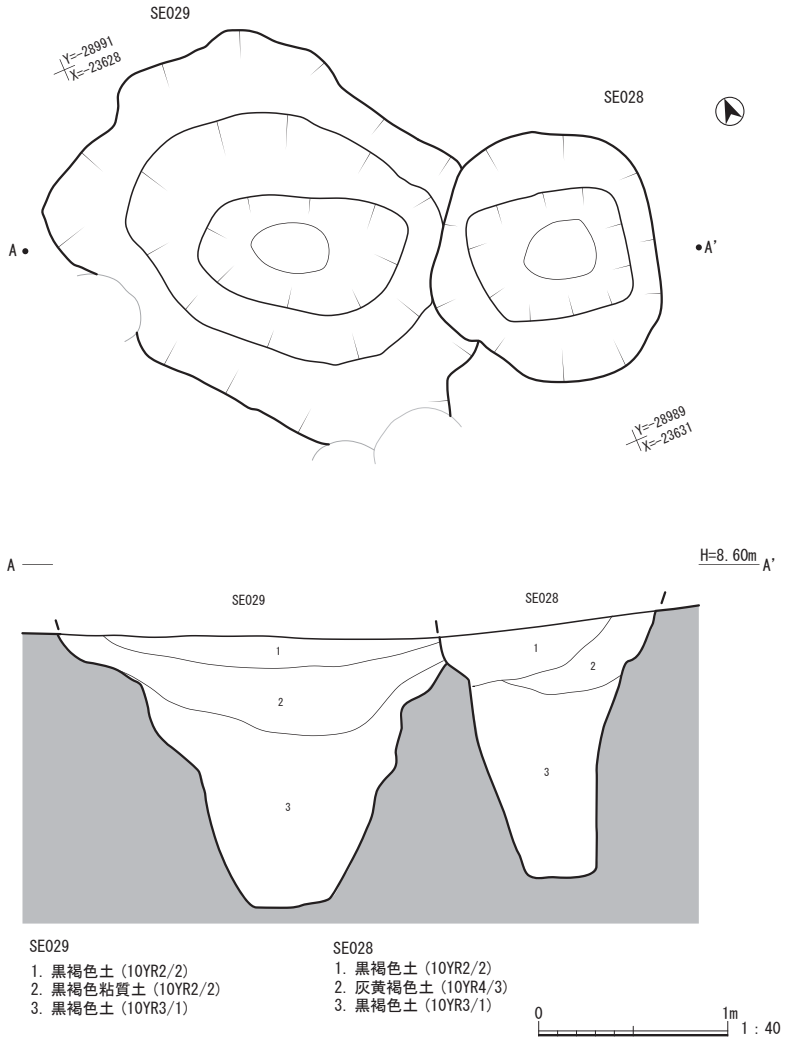


Fig.68　井戸 SE028・SE029 実測図

井戸 SE032（Fig.69）検出時には大量の土師器杯が出土しており、廃棄土坑かとも考えられたが遺構検出を実施した結果、見えてきたのは長楕円形の掘形を持つ井戸であった。浅い土坑状の範囲は東西に広く、大量に出土している土師杯群はこの掘形埋土中に含まれている。

土師器の出土状況は、小片となっていない大部分の個体が一部に割れは見られるもののほぼ個体を保っており破損した事による廃棄とは考えられない状態を示している。また、出土状態には規則性はないが、小破片ほど周囲に飛び散っていることから、関係品として使用後に投げ込まれた可能性もある。さらに、土器には赤色の顔料が塗布されたものが多く、日常雑器としての道具でもないことから、井戸廃絶時の祭祀行為の跡とも考えられる。井戸本体掘形の長軸両端には、各 1 基の柱穴があることから、井戸屋形の存在が想定される。遺構の規模は長径約 5.4m、中心部の最大径部で約 3.2m、中心部の井戸本体部で径 1.5m、土坑深度 10 ㎝、土坑底面から井戸底面までの深度 1.8m、底面径 45 ㎝を測る。

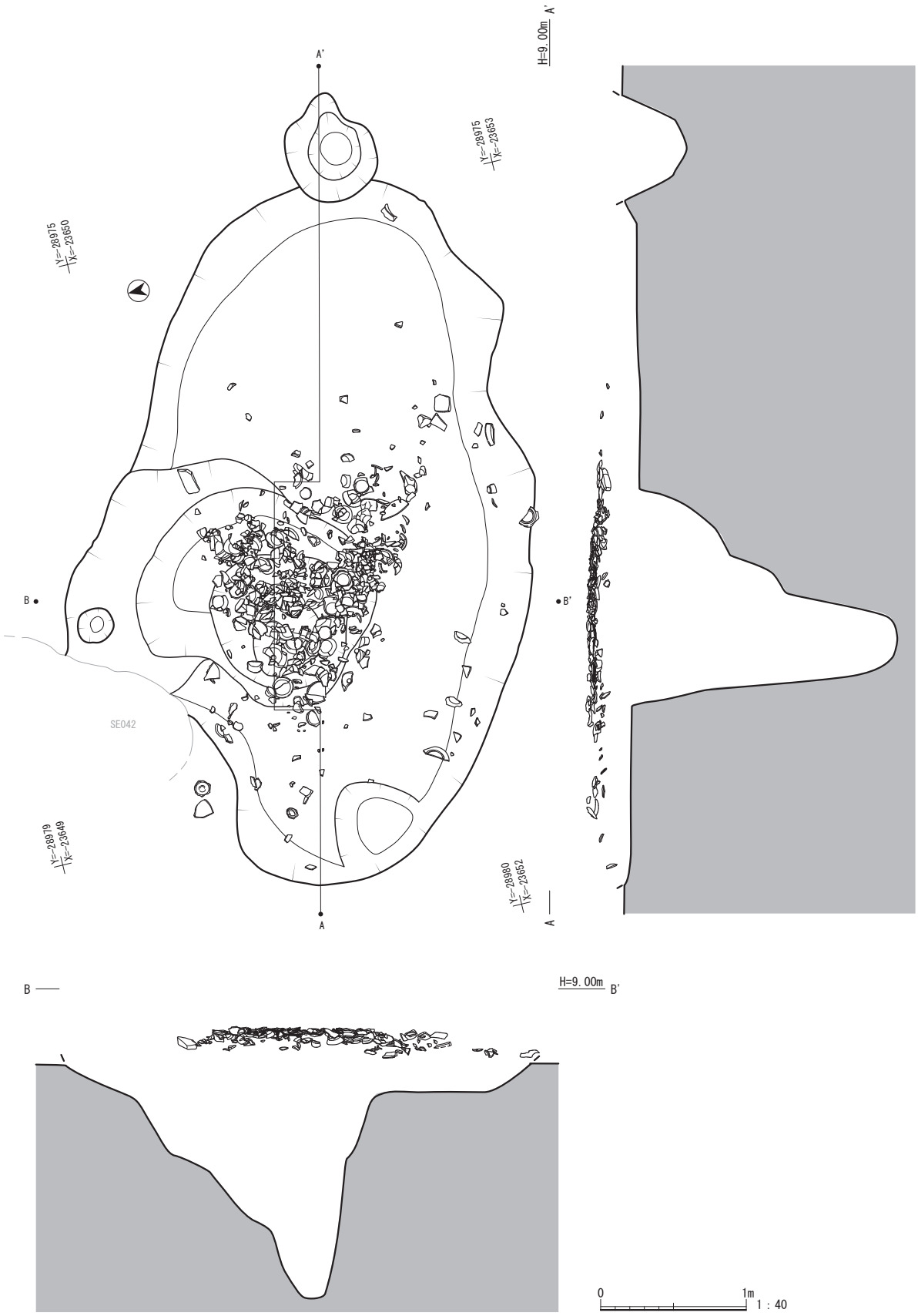


Fig.69　井戸 SE032 実測図

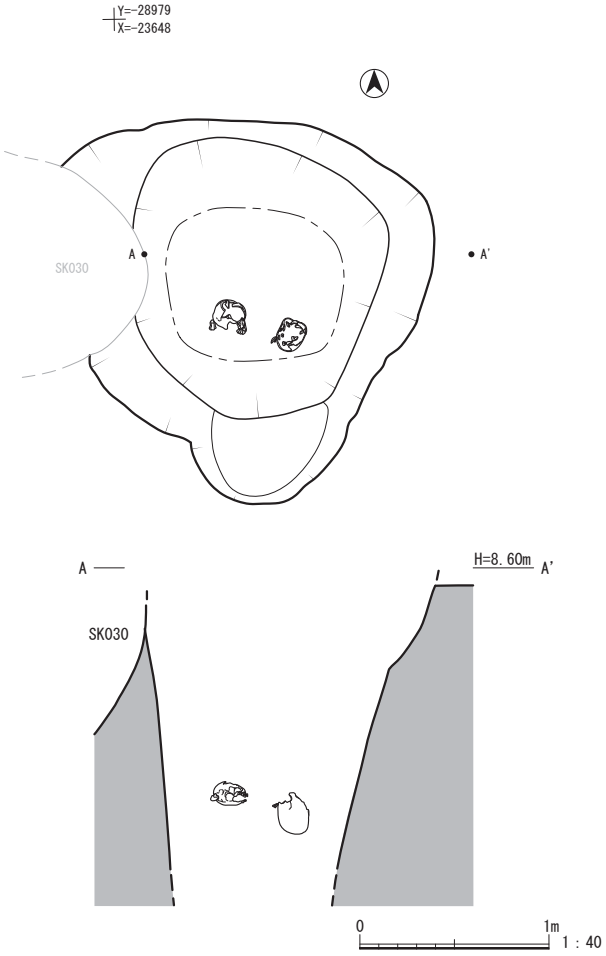


Fig.70　井戸 SE033 実測図

井戸 SE033（Fig.70）複雑に遺構が切り合う場所で土坑に切られ検出した井戸。調査開始時には他の井戸とは違いやや明るめの土が入っていたことから、土坑が切り合う区域であるとみて調査を実施していたが、他の井戸同様に中間端となる変化点を検出したこと、その後、垂直に落ち始めたことから井戸であると判断し調査を実施した遺構。中間端から下へ調査を進めていた時点で人骨が出土したことから調査を止め、松下孝幸氏に調査依頼し取り上げ作業を実施していただいた。出土した人骨は頭骨のみ２体分であり胴体部の出土はなかった。図面中、左側で出土した頭骨は北を向き、右側頭部を上面に置いた状態で出土し、右側で出土した頭骨は頸部を上に向け顔面は北を向いた状態で出土しており、出土状態に規則性はみられない。井戸上からの投げ込みの状態を示している出土状況であると判断する。遺構は周囲の土層が脆弱であるため約 1.5m 以上の掘削は実施していない。規模は上端で幅約 1.5m 以上（土坑による切り合いのため不明）、中間端付近で 1.2m、頭骨を検出したレベルで 1.0m、深度は約 1.6m（未完掘）である。埋土からは土師器杯、土師器高台付皿が出土している。

井戸 SE034（Fig.65）調査区の一部を鉄道施設により深く掘削され検出した井戸。上端北辺に接する小柱穴は井戸屋形を構成する柱穴の一つと見られるが、対となる南東側が大きく削平されていることから確認はできない。井戸は検出面で上端径が約 1.8m、緩やかな勾配を示しながら 50 ㎝掘削後に、垂直に角度を変え下端へと続く。検出面からの深度は 2.1m、下端径で 90 ㎝を測る。

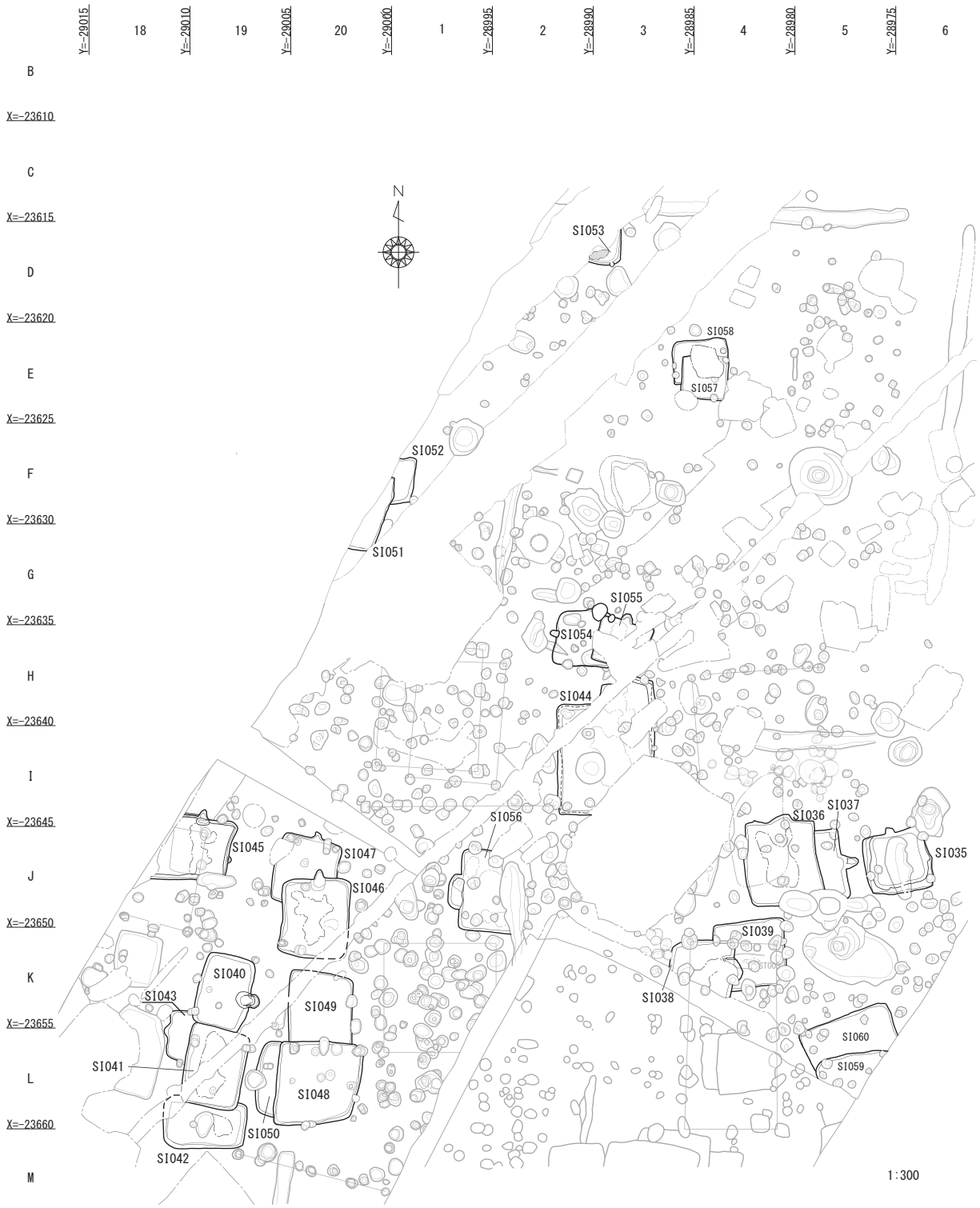


Fig.71　竪穴建物 SI035~SI060 遺構配置図

竪穴建物 SI035（Fig.71）北辺中央に作り付けカマド煙道部張り出しを持つ。しかし、燃焼部や炉体等の痕跡は確認できていない。遺構は平面形が正方形をしており、内部に浅い方形掘り込みである掘形を持つ。調査時に床面を掘り過ぎていたようで、掘形まで露出させていた。よって、硬化面等は確認できていない。主柱穴は掘形時点でも検出することはできなかった。埋土中からは、日常雑器とぼしき壺、甕、鍋、杯、蓋類の破片が出土している。規模は、南北約 3.3m（作り付けカマド煙道部長含む）、東西約 3.3m を測り、主軸は N-11°-W を示している。

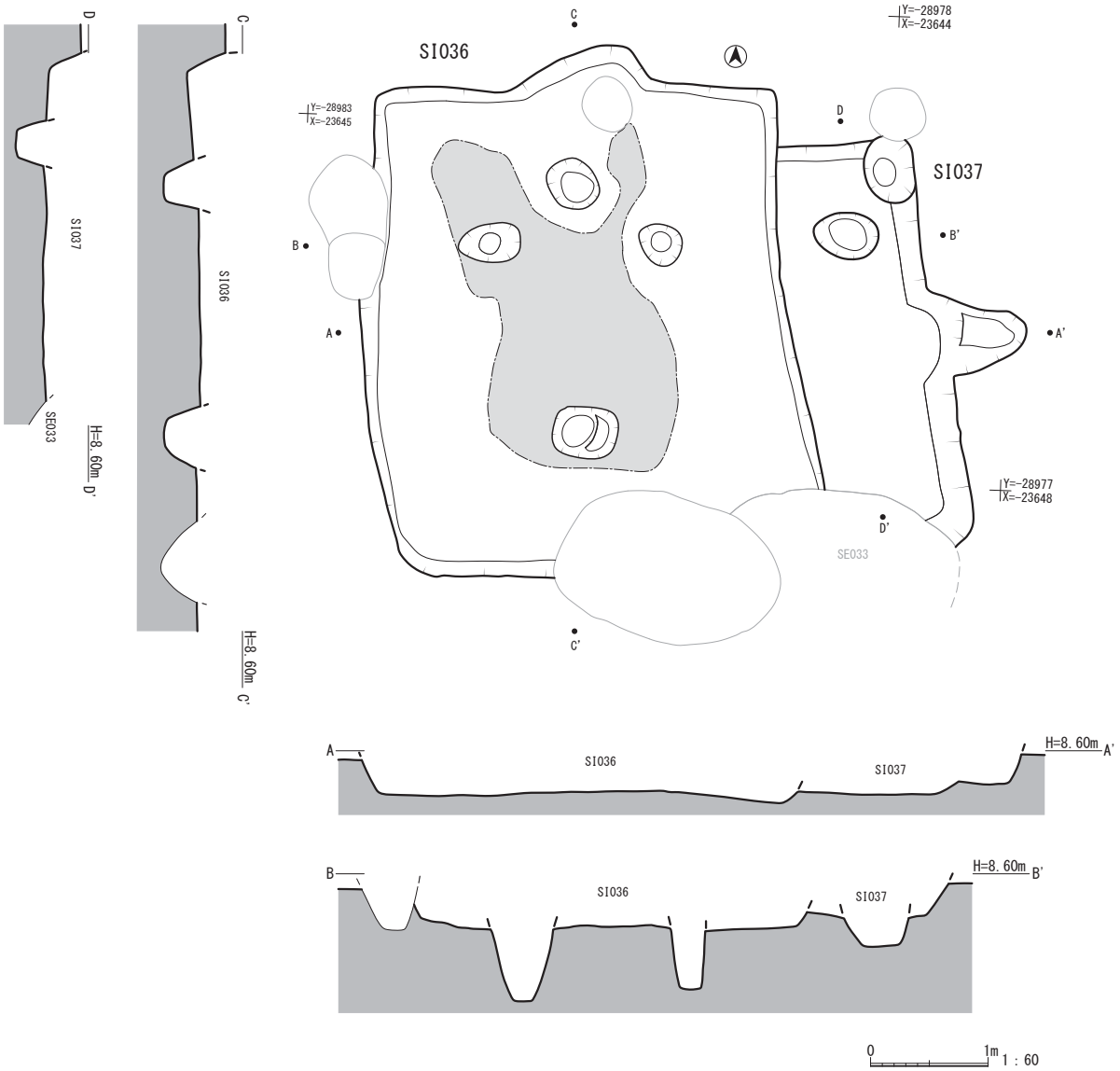


Fig.72　竪穴建物 SI036・SI037 実測図

竪穴建物 SI036・SI037（Fig.72）作り付けカマドをほぼ 90°振り重複し検出した竪穴建物。竪穴建物 SI081 は北辺中央に作り付けカマド煙道部張り出しを持ち、切り合いの新しい竪穴建物である。カマド部は煙道部張り出しは残るが燃焼部掘形は残っていない。燃焼部掘形部に残る柱穴は後世の遺構で本遺構には関係していない。中央部には硬化面の広がりが確認できるが残りが悪く、硬化面による空間利用推定までは至らない。わずかに、カマド前面でカマド掘り込み及び柱穴を避けるようにU字状に広がっていることから焚口としての空間を想定させる場所となっている。主柱穴はすべて検出しきれていないがカマド前面に 2 基検出していること、カマド前面に 1 基、それに対をなすように南側壁近くに 1 基検出していることから変則的ではあるが、これらが屋根を支えていた柱穴である可能性が高い。規模は、南北約 4.5m（作り付けカマド煙道部長含む）、東西約 3.7m を測り、主軸は N-2°-W を示している。

竪穴建物 SI037 は東辺中央に作り付けカマド煙道部張り出しを持ち検出している。カマド燃焼部はわずかに下端の線が変化することから推測されれるが、炉体を示す痕跡、物証は残っていない。全体の規模は不明であるが、カマドがある東辺のみは一辺約 2.0m を測ることができる。遺構内施設である硬化面、主柱穴等は確認できていない。

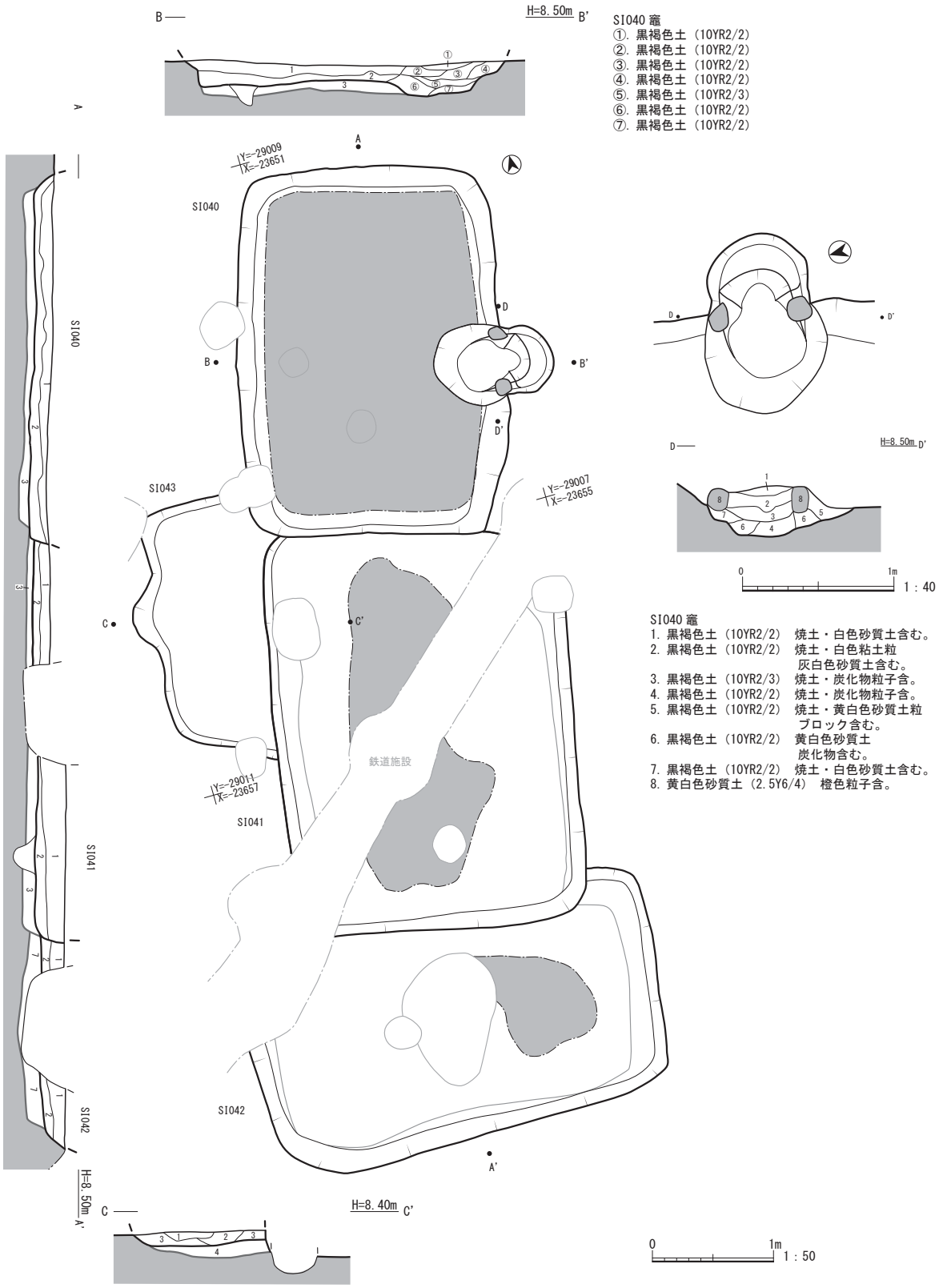


Fig.73　竪穴建物 SI040~SI043 実測図

竪穴建物 SI038・SI039（Fig.71）２基の切り合いからなる竪穴建物群。竪穴建物 SI038 は東に作り付けカマド煙道部張り出しを持ち、北側に炉体袖の一部と見られる白色粘土の基底部が残る。しかし、燃焼部があったとみられる範囲には焼土等の痕跡はなかった。遺構の規模は主軸側から示すと東西約 3.7m（作り付けカマド煙道部長含む）、南北は調査区外に出るため、2.75m 以上を測る。主軸は N-94°　-E を示している。
竪穴建物 SI039 平面形はほぼ正方形で作り付けカマドの痕跡はない。遺構内には硬化面、主柱穴等の施設は確認されなかったが、わずかに貼り床面下に掘形を確認することができた。
竪穴建物 SI040・SI041・SI042・SI043（Fig.73）長方形で小型の竪穴建物の切り合いによる一群。切り合いの関係は（旧）竪穴建物 SI043・SI042 → SI041 → SI040（新）である。切り合いの最も新しい竪穴建物 SI040 は長軸となる東壁に作り付けカマドを残す。袖部に砂岩による基礎をおき周囲に白色粘土を張り付けた跡を残す。燃焼部掘形及び２段整形による煙道部など本遺跡検出作り付けカマドのなかではよく姿を残す。規模は竪穴建物 SI040 が南北約 3.6m、東西約 2.6m で主軸は N-12°　-E、竪穴建物 SI041 は南北約 3.9m、東西約 3.0m で主軸は N-9°　-E、竪穴建物 SI043 は遺構大半が切り合いの下にあたることから規模は不明であり、主軸は作り付けカマド煙道部張り出しが西に付くことからおおよそ N-83°　-W であろう。竪穴建物 SI042 は南北約 2.3m、東西約 4.1m を測り主軸は N-84°　-W を示す。
竪穴建物 SI044（Fig.71）この周辺で検出した遺構のなかで最も規模の大きな竪穴建物。北東隅に約 1.0m × 2.8m の方形張り出しをもつ。南東隅を撹乱により掘削されているが全体規模を把握することはできた。主柱穴は撹乱部を除き３本検出し、その内部から張り出し部に向かい硬化面の広がりを見て取れる。硬化面は貼床上部にあり、遺構下端の一回り内側から掘り込まれている掘形は浅い。規模は南北約 6.6m（うち張り出し部 1.0m）、東西は約 4.8m を測り、主軸は N-1°　-W を示す。

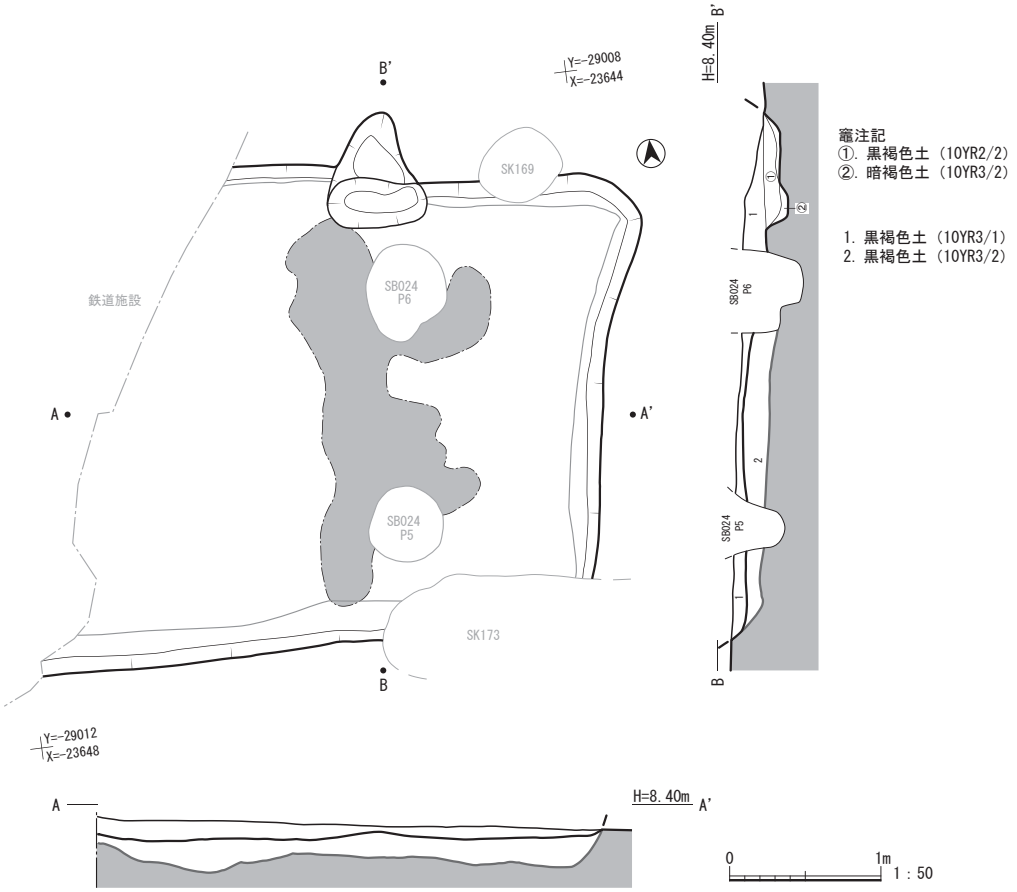
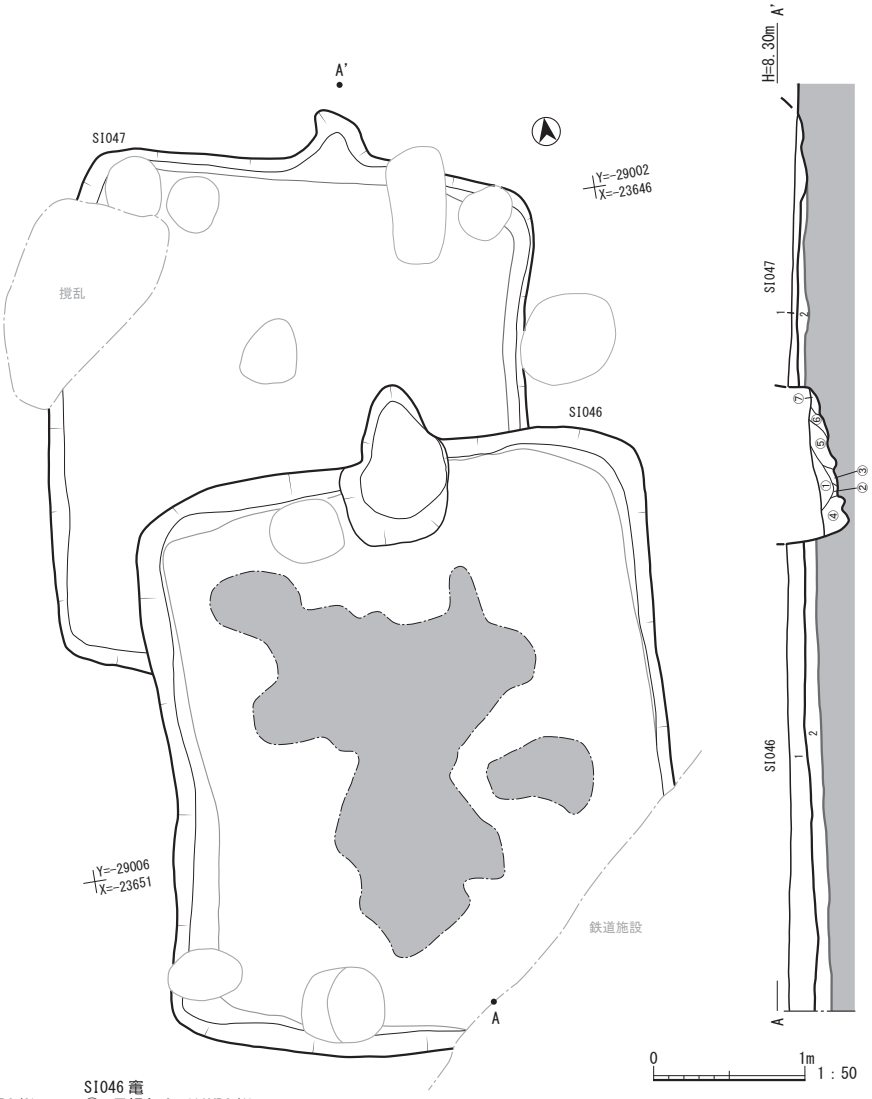


Fig.74　竪穴建物 SI045 実測図



SI046
1. 黒褐色土（2.5YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

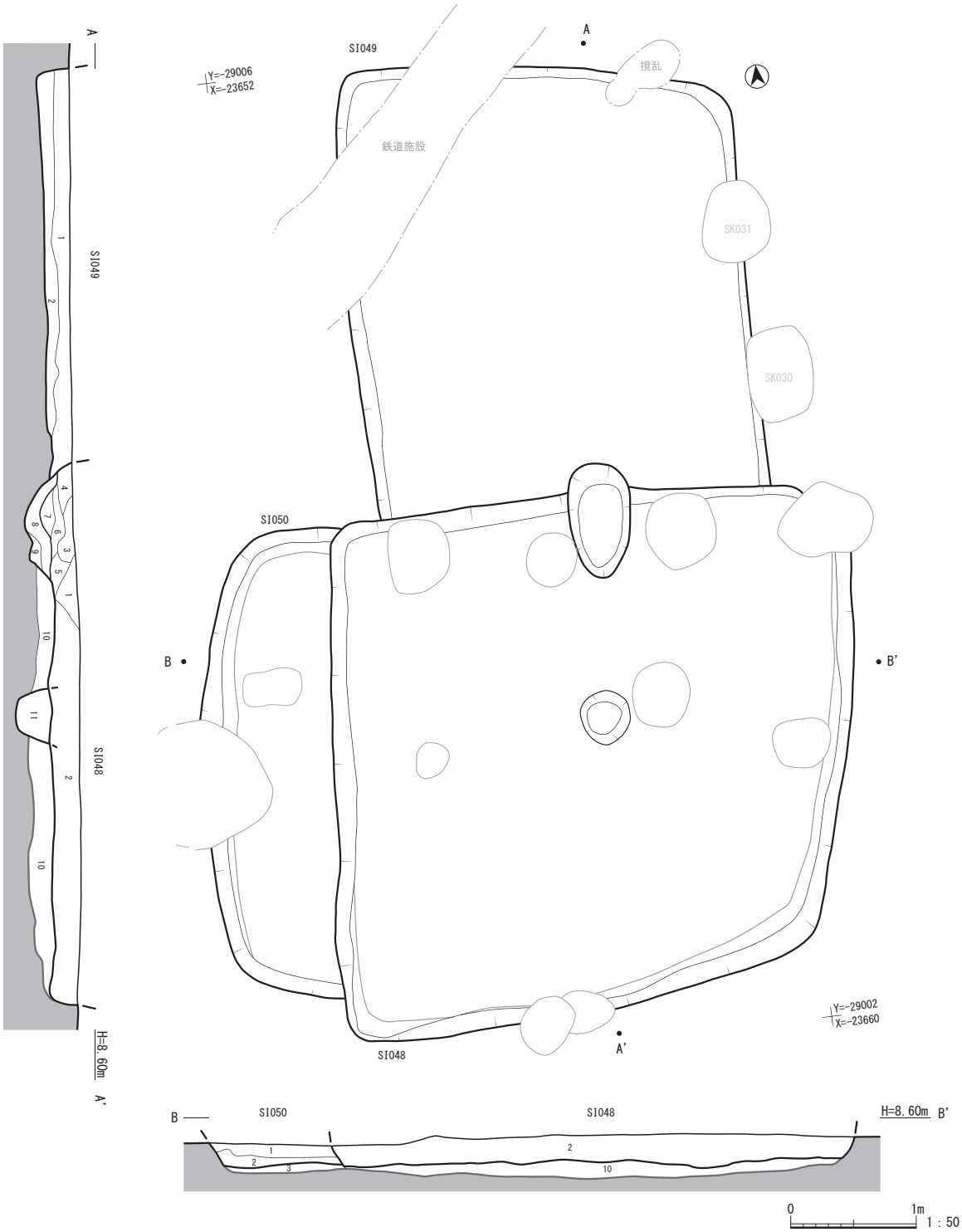
SI047
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

SI046 竈
①. 黒褐色土（10YR3/1）
②. 黒褐色土（2.5YR3/1）
③. 黒褐色土（10YR3/1）
④. 黒褐色土（10YR3/1）
⑤. 黒褐色土（10YR3/2）
⑥. 黒褐色土（10YR3/1）
⑦. 黒褐色土（2.5YR3/2）

Fig.75　竪穴建物 SI046・SI047 実測図

竪穴建物 SI045（Fig.74）掘立柱建物 SB024 柱穴が上部から掘り込まれ検出した竪穴建物。遺構西側を約 1/3 ほど鉄道施設により掘削され消滅し全体規模を把握することはできない。遺構北壁中央からやや西に寄った位置に作り付けカマドの掘形のみが残る。遺構規模は南北に約 3.5m（カマド煙道張り出し 40cm を含む）、東西に約 3.5m 以上の東西に長い形をする。遺構中央に硬化面が残るが当初の形状をしているものとは考えられない。調査時に剥がした可能性がある。カマド中心を軸とすると主軸は N-9°-E を示している。

竪穴建物 SI046・SI047（Fig.75）2 軒の切り合いからなる竪穴建物。2 基とも北辺中央に作り付けカマドを持つ。竪穴建物 SI046 は規模は遺構中央に硬化面の広がりをみるが主柱穴は確認できていない。床面は貼床であり、床面下端内側から掘り込む。カマド周辺には本体に伴う部材は残らない。規模は南北約 4.4m（カマド煙道部約 50cm を含む）、東西約 3.3m を測り、主軸は N-4°-E を示す。竪穴建物 SI047 は北にずれ竪穴建物 SI046 に切られる。作り付けカマドは丁寧に部材が取り除かれ煙道部張り出しのみ残る。床面には硬化面の広がりはなく、主柱穴等の遺構も検出できていない。規模は南北約 3.6m 東西約 3.2m を測り、主軸は N-11°-E を示す。



SI048
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）
3. 黒褐色土（2.5YR3/2）
4. 黒褐色土（10YR3/2）
5. 黒褐色土（10YR3/2）
6. 黒褐色土（10YR3/2）
7. 黒褐色土（2.5YR3/2）
8. 黒褐色土（10YR3/1）
9. 黒褐色土（2.5YR3/2）
10. 黒褐色土（10YR3/1）
11. 黒褐色土（2.5YR3/1）

SI049
1. 黒褐色土（2.5YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

SI050
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/1）
3. 黒褐色土（10YR3/2）

Fig.76　竪穴建物 SI048~SI050 実測図

竪穴建物SI048・SI049・SI050（Fig.76）３軒の切り合いからなる竪穴建物群。切り合いの関係は最も新しい竪穴建物SI048以外は、切り部が重複していることから新旧は分からない。
竪穴建物SI048は方形掘形で北辺中央に作り付けカマドの掘形が残る。南東隅はやや内に入り他の隅よりも角度が大きく不定形となる。床面では硬化面等の痕跡は残っておらず主柱穴も確認できていない。床面相当面下端の内側から掘形掘り込みが見られ、遺構下端と掘形上端が重なるところもある。遺構規模は約4.1m四方であるが南東隅のみ狭い。埋土の基本土質は検出面となる褐色土層の上層の黒色土を主体としていることから、当初の掘り込み面は現在のレベルよりも約30㎝～50㎝上層であったとみられる。遺構埋土中からは８世紀後半から９世紀初頭にかけての遺物が多数出土していることから、９世紀初頭期の遺構である。
竪穴建物SI050は遺構の大半を竪穴建物SI048と重複しており西側掘形一辺のみしか検出できていない。わずかに残る面において、遺構床面想定面上では硬化面等の遺構内施設は確認されていない。しかし、遺構下端線上から遺構掘形が始まり浅くはあるが掘形を持つ。検出された範囲で規模を計測すると一辺3.8mを測る。
竪穴建物SI049は南北に長軸を持つ長方形の平面形である。竪穴建物SI048・SI050の平面形と違い長方形をなしていることから異質な感じを受ける。遺構は竪穴建物SI048南辺の一部を切られているのみで遺構の大半は残るが、遺構内の床面では硬化面等の遺構内施設は検出されず、主柱穴も検出できていない。床面相当面から遺構掘形が残り、南に行くに従い掘形部は深くなる。埋土中より８世紀後半の遺物が多数出土している。

発掘調査風景（奥に熊本駅５番ホーム（現在は撤去））

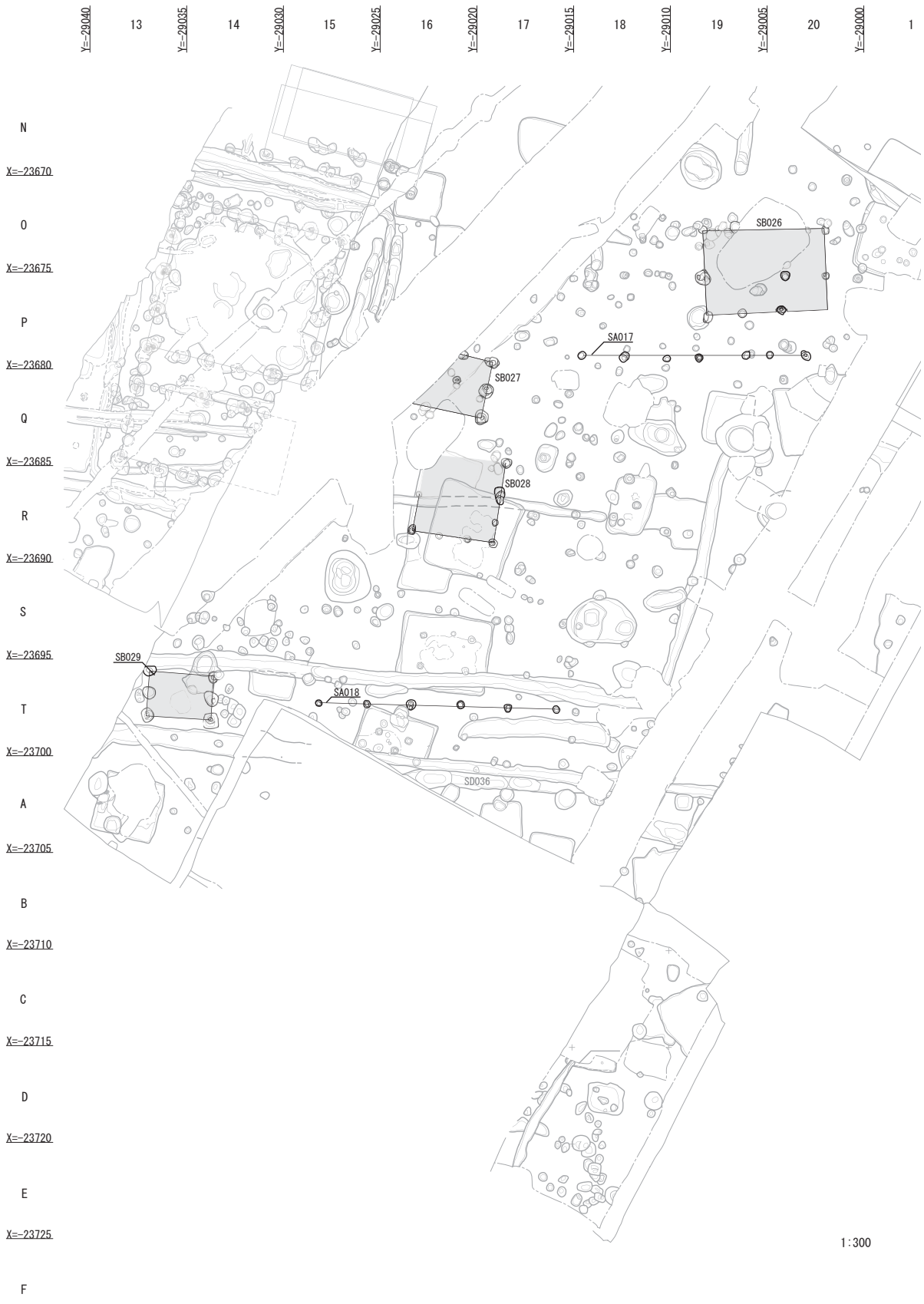


Fig.77　柵列 SA017・SA018、掘立柱建物 SB026~SB029 遺構配置図

柵列 SA017（Fig.77）全長 11.9m（約 39 尺）を測り、7 基の柱穴からなる柵列。柱穴間距離は 1.1m から 2.1 mとややバラつきがあるが、2m（約 7 尺）を測る柱穴間が 3 箇所あり、当時の距離感を残しているものとみられる。各柱穴とも柱痕を残し、一部には根固めの層を観察することもできる。埋土の基本土質は、遺構検出面となっている褐色土層の上層にあたる黒色土を主体としていることから、遺構の掘り込みレベルは少なくとも 30 ㎝以上高かったものと考えられる。柱穴平面形はほぼ円形で方形掘形を有するものはない。P2・P5・P7 では小柱穴が重なっており、掘形か若しくは建て直しの際に一部、掘りなおされた部分であると考えられる。本柵列は掘立柱建物 SB026 の南に主軸を同じくし並ぶこと、西に掘立柱建物 SB027 が同様に、軸を同じくして並ぶことからこれらの建物と同時に存在していた可能性が高い。

柵列 SA018（Fig.77）全長約 11m（約 37 尺）を測り、6 基の柱穴からなる柵列。柱穴間距離は 1.9m ～ 2.1m とほぼ均一で、約 7 尺前後を測る。他の柵列でも見られるが、柱穴間距離はおおよそ 2.1m（約 7 尺）を基本として掘削されているものと見られる。層の基本土質は遺構検出面となっている褐色土層の上層にあたる黒色土を主体としていることから、本遺構周辺でも遺構の掘り込みレベルは少なくとも 30 ㎝以上高かったと考えられる。柱穴平面形は、現時点での平面形は円形に近いが、わずかに方形と観察できる柱穴（P4・P5・P6）があること、中間端で方形と観察されるもの(P3･P4･P5)があることから本来の掘り込み面では方形掘形であった可能性が高い。北に軸をほぼ同じくし平行して存在する溝 SD036 があることから、溝と柵列が同時に供用されていた可能性が高い。

掘立柱建物 SB026（Fig.78）長軸を東西にもち柵列 SA017 を伴う掘立柱建物。側柱内側に柱穴（P5）を有することから総柱建物であるとみられる。梁行２間×桁行３間で 4.5m × 6.3m（約 15 尺× 21 尺）を測り、主軸は N-88°-E を示す。

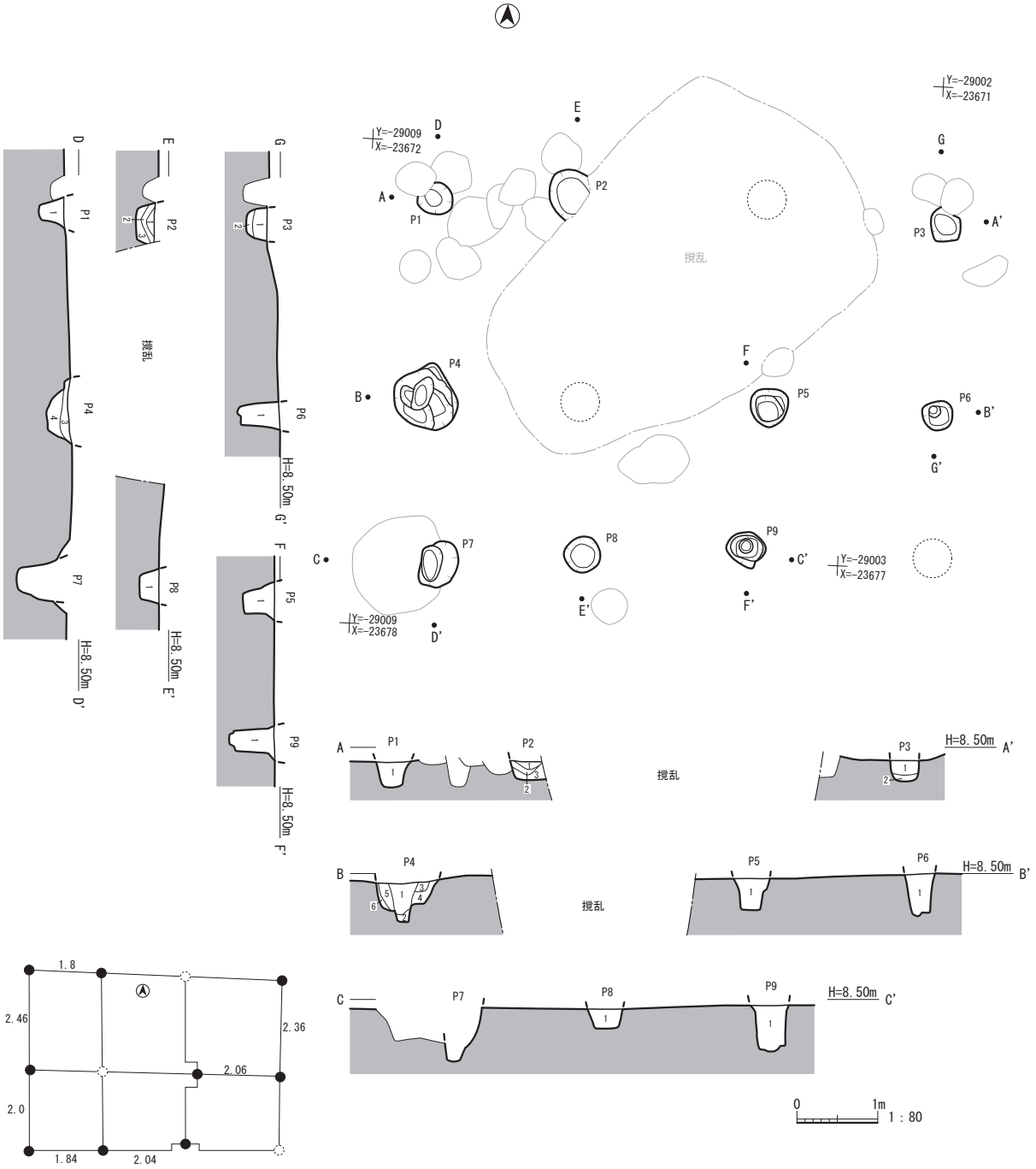
柱穴平面形は円形であるがややいびつな形状をしており、大幅な削平を受けた結果とみられる。

掘立柱建物 SB027（Fig.79）検出遺構の約半分が鉄道遺構により削平された遺構。規模は２間× ３間以上であろう。梁行東列に並ぶ三基の柱穴は直径が約 70 ㎝と他の掘立柱建物の柱穴規模よりも大きなもので中間端から下端にかけての掘形も方形をなすなど、しっかりしたものとなっている。柱穴 P3 が側柱内部で検出されていることから総柱建物となる可能性が高い。土層断面には柱痕が残るもの（P1、P4)、抜き取り痕の可能性があるもの（P2、P6）がある。梁行側の柱穴間はそれぞれ 1.4m、1.56m の間隔で総計 2.96m（約 10 尺)、東西は確認される距離間でそれぞれ、1.5m、1.64m（約５尺）を測る。主軸は東西側にあり N-11°-W を示す。

掘立柱建物 SB028（Fig.80）竪穴建物と重複し検出した掘立柱建物。柱穴１基あたりの大きさは小さく隣接する掘立柱建物 SB027 と比べると小柱穴により構成される。柱間もやや狭く南側桁行では 1.4m 間隔に並ぶ。柱穴平面形は P2 が隅丸方形の掘形をしている事から、本遺構においても方形掘形であった可能性が高い。規模は桁行３間×梁行３間以上である。南側桁行 4.2m（約 14 尺）を測り、主軸は N-9°-E を示す。桁行規模は不明。

掘立柱建物 SB029 (Fig.80) 熊本市第 28 次調査の際に村落内寺院と指摘されている SB01 の南に位置する遺構。遺構の一部を溝 SD023 に切られ方形及び円形掘り込みによる柱穴列により構成される。梁行１間×桁行３間で主軸は A-A’、C-C’を長軸とした場合に N-4°-E を示す。遺構規模は 3 基・2 間で構成する主軸長で約 2.3m（約 9 尺)、2 基・1 間で構成する梁行長で約 3.2m を測る。各柱穴は周辺の柱穴群とグラベルと掘削深度も深く下端まで端正な掘形となっている。中でも P4 では中間に段を有し下端では硬化している柱座を確認するまで至っている。P3・P5・P6 でも下端付近で小規模な掘り込みがあることから硬化した面は確認できていないが柱座である可能性が高い。

P1・P6 の北側に位置する柱穴列を切り検出している溝 SD023 は熊本市調査で 14 世紀頃遺構と推測されているが、溝埋土から後に混入したとみられる二彩托（9 世紀～ 10 世紀）が出土している。



(P1)
1. 黒褐色土（10YR3/2）

(P2)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 暗褐色土（10YR3/3）

(P3)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/1）

(P4)
1. 黒褐色土（7.5YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR3/1）
3. 黒褐色土（10YR3/2）
4. 黒褐色土（10YR3/2）
5. 黒褐色土（10YR3/1）

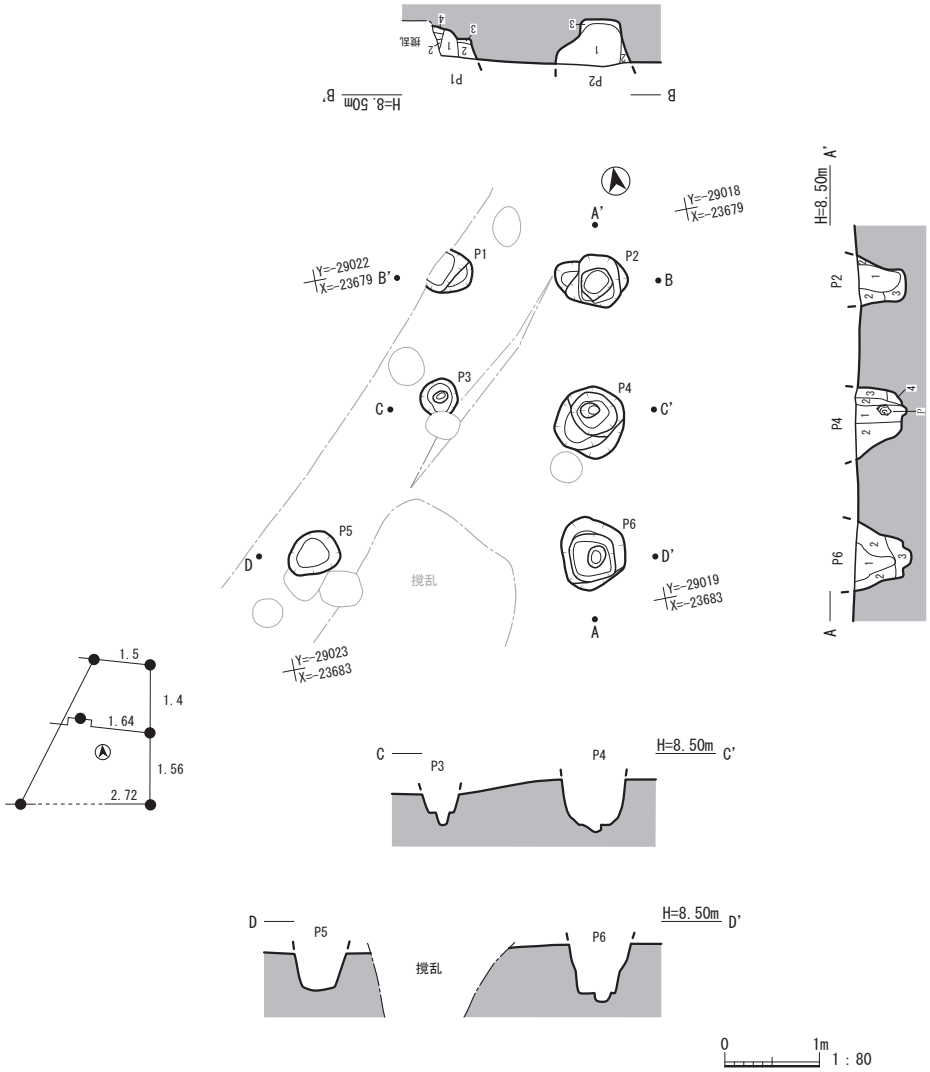
(P5)
1. 黒褐色土（10YR3/2）

(P6)
1. 黒褐色土（10YR3/2）

(P8)
1. 黒褐色土（10YR2/2）

(P9)
1. 黒褐色土（10YR3/1）

Fig.78　掘立柱建物 SB026 実測図



(P1)
1. 黒褐色土（10YR3/1）
2. 黒褐色土（10YR3/2）
3. 黒褐色土（10YR3/2）

(P2)
1. 黒褐色土（10YR2/3）
2. 黒褐色土（10YR2/3）
3. 黄褐色砂質土（2.5YR3/2）
4. 黒褐色土（10YR2/2）

(P3)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）

(P4)
1. 黒褐色土（10YR2/3）
2. 黒褐色土（10YR2/1）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/1）

Fig.79　掘立柱建物 SB027 実測図

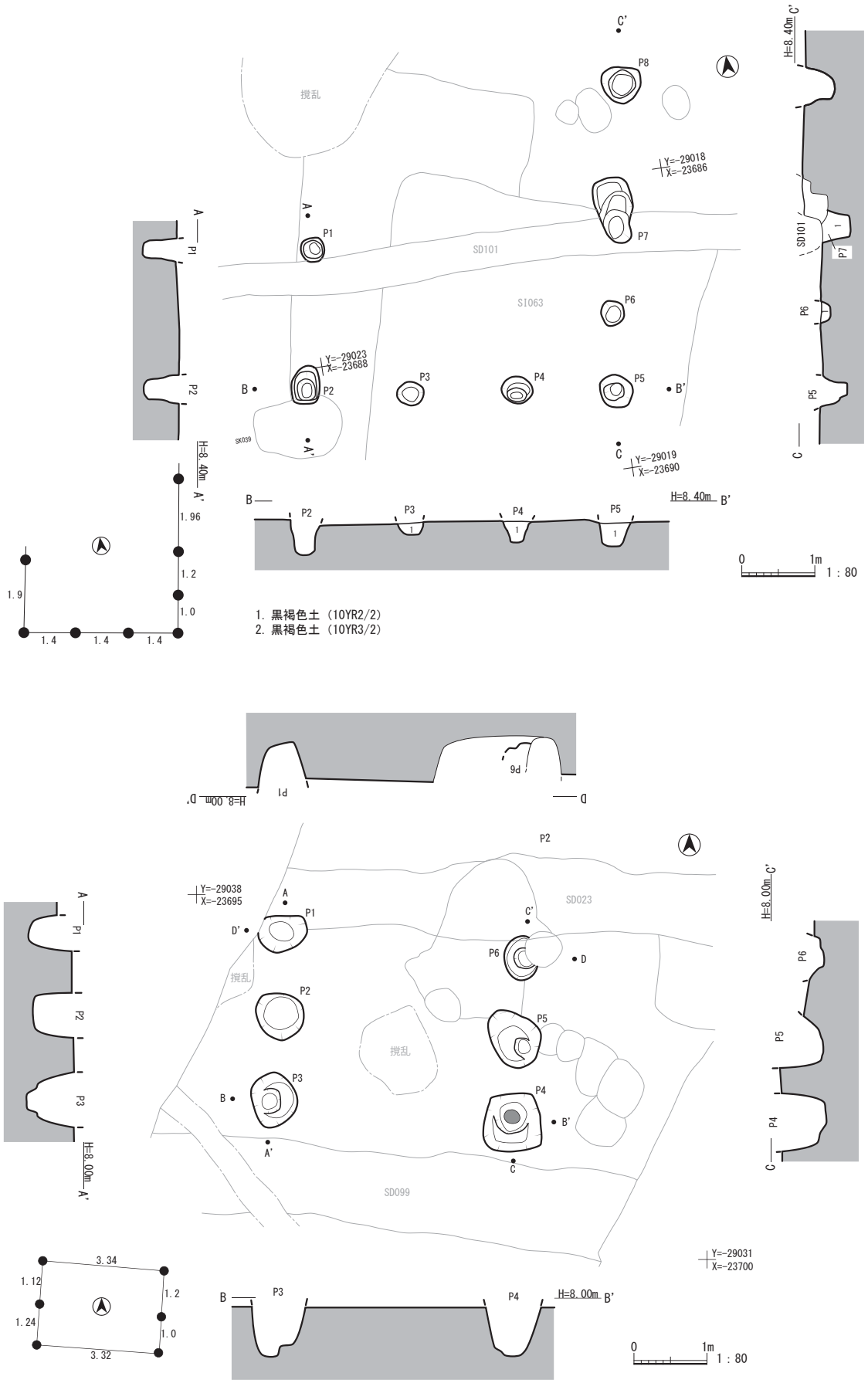


Fig.80　掘立柱建物 SB028（上）・SB029（下）実測図

Fig.81　井戸 SE035~SE041 遺構配置図

井戸 SE035（Fig.82）掘立柱建物 SB026 の北に位置する井戸。平面形は円形であるが、中間端付近で掘削面が脆弱であるためかやや乱れる。井戸本体となる中間端下で SE041 と同様に８字状に掘られる。上端径は約 2.1m 中間端付近で径 1.3m、井戸本体の掘形部で 1m を測る。調査は検出面から 1.4m にまで達したが、壁面の崩落が予想されたため途中で止めた。

井戸 SE036（Fig.83）長楕円形の平面をもち検出された井戸。中央に井戸本体となる掘形をおき東西に段上の緩やかな傾斜をもつ。井戸へ降りていく際の段があったことが予想される。平面上端長径部で約 3.1m、約 2.7m、中間端付近で 70 ㎝を測り、最終的に 2.1m まで掘削した。このレベルで地下水が湧出しこれ以上の掘削は困難となる。井戸本体部は径 80 ㎝の円形で垂直に掘削される。

井戸 SE037（Fig.84）楕円形の掘形をもち、緩やかな傾斜をしながら井戸本体の掘形へと移る。井戸は土坑 SK187 の上部から掘り込まれ遺構の端に SK187 の一角が残る。規模はおおよそ南北に約 2.4m、東西に 2.8m、井戸本体掘形は径 1.3m の円形となる。深度は 1.5m まで掘削し湧水のため調査を止めた。

井戸 SE038（Fig.84）掘形上端から井戸本体部にかけ鉄道施設による掘削で全体形は把握できていない。おそらくは楕円形の上端であったと考えられる。井戸本体掘形は長径で 1.0m で、掘削は最終的に 1.8m にまで及んだ。

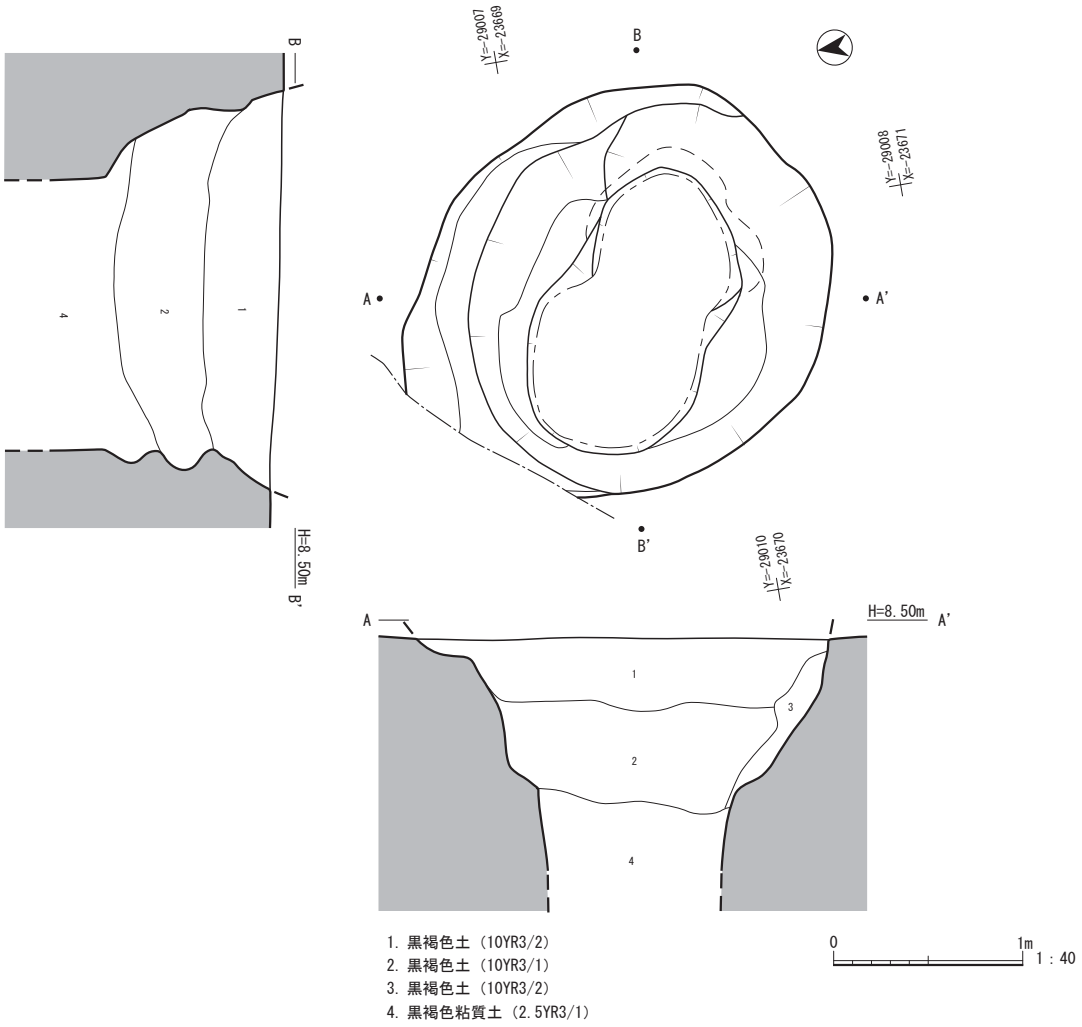


Fig.82　井戸 SE035 実測図

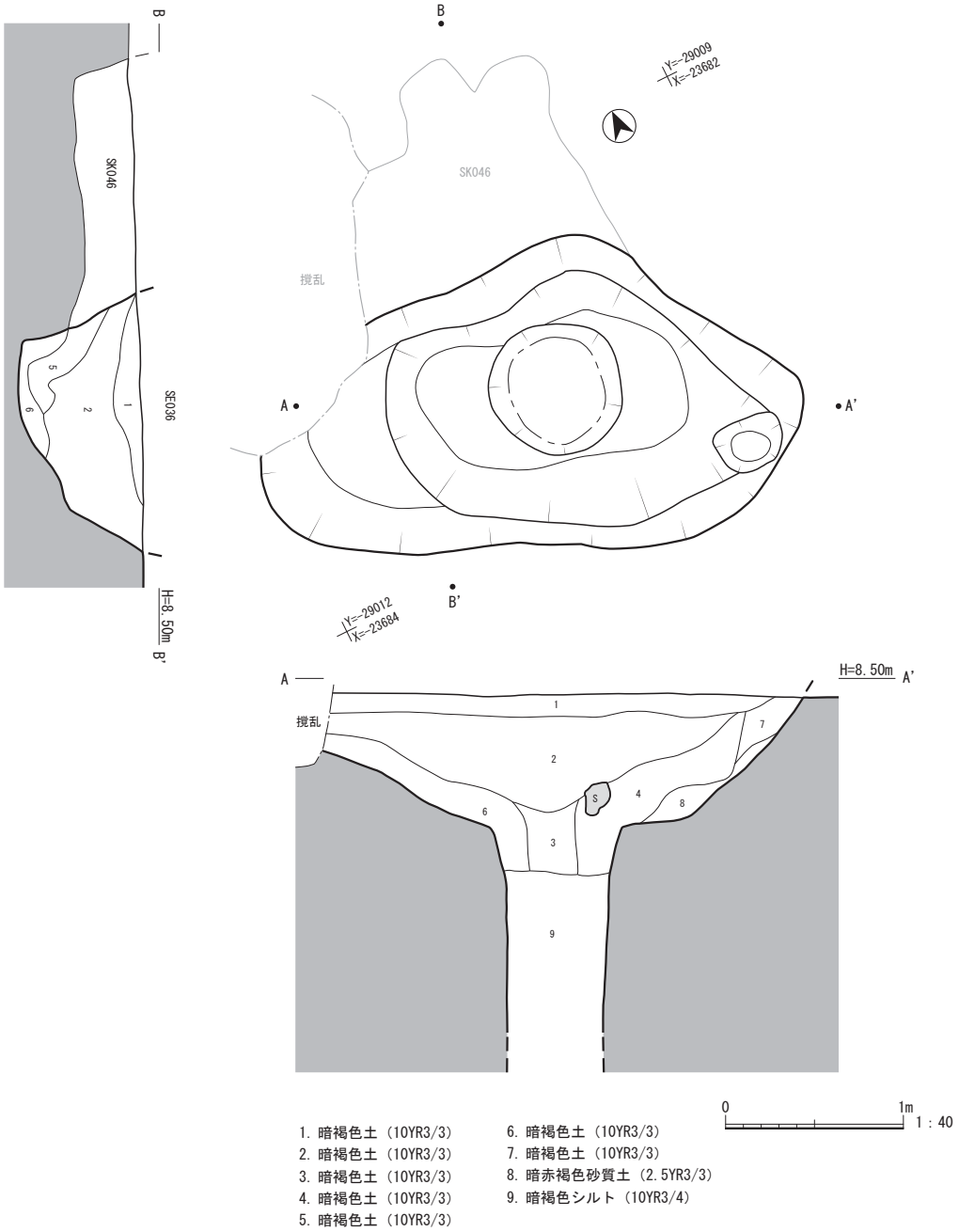


Fig.83　井戸 SE036 実測図

井戸 SE039（Fig.85）井戸 SE036 の南に位置し上端に土坑状掘形を持たない井戸。平面上端は 90cm を測り、一見土坑として調査を進めていたら深度が深くなり井戸となった。断面における１層がわずかに横に広がる広がる。本体はやや下方に向かいすぼまりながら遺構底面へと伸び底面に至る。下端では径 40 cmを測る。

井戸 SE040（Fig.85）周囲を鉛汚染土範囲に囲まれ、部分的に残された調査区に位置する井戸。平面形は円形で直径約 90 cm、遺構深度約 1.7m を測る。遺構底面は他の井戸と違いＵ字状で平坦面は有していない。

井戸 SE041（Fig.85）（市）村落内寺院とされる遺構の全面東に位置する井戸。平面上端で楕円形掘形を示し、中間端で８字状の掘形へと変化する。井戸本体は掘り返された結果、このような形状となったものと考えられる。中央には径が 50 cmから 70 cmの礫が３個入る。礫の下層からは水が染み出してきており井戸であったことが予想される。礫の下方は壁面が脆いことから掘削はしていない。土層の断面観察では１～５層まで埋まったのち一時的に掘り返された可能性がある。規模は上端で長径約 2.7m、掘削深度は約 1.7m に及んだ。

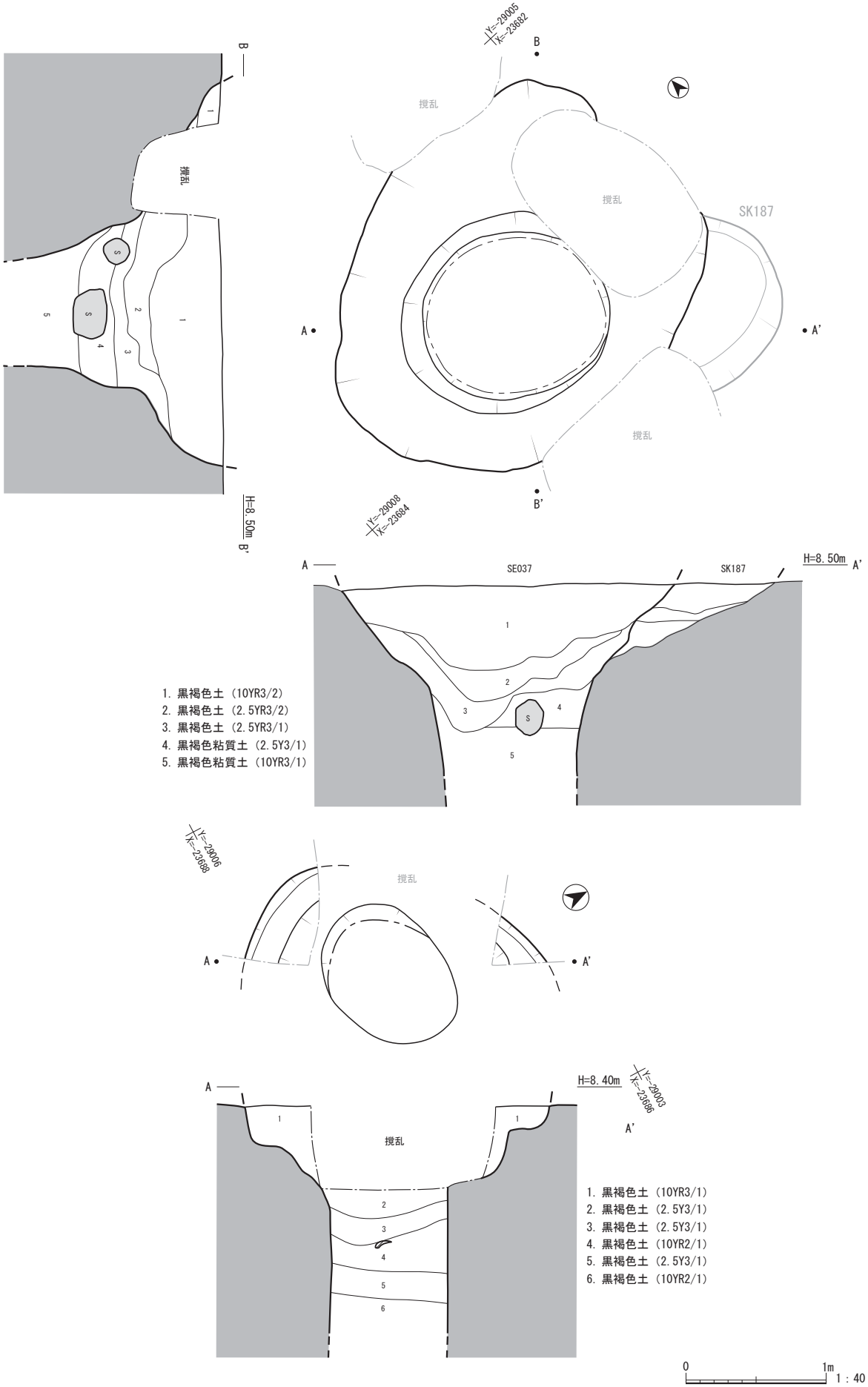


Fig.84　井戸 SE037（上）・SE038（下）実測図

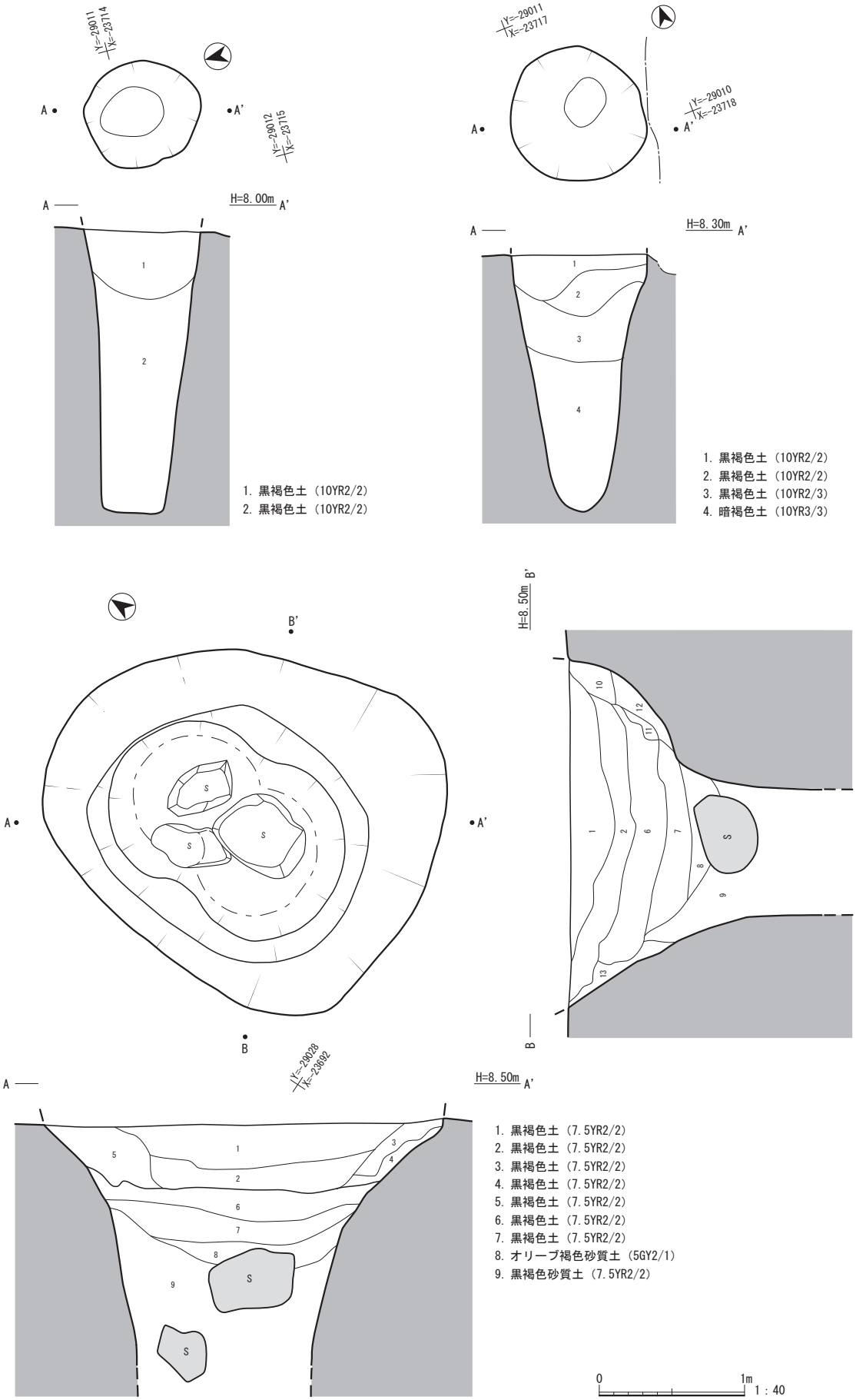


Fig.85　井戸 SE039（左上）・SE040（右上）・SE041（下）実測図

Fig.86　竪穴建物遺構配置図

竪穴建物 SI061（Fig.87）熊本市教育委員会調査の「村落内寺院跡」北に位置する SB04 の柱穴が遺構内に掘り込まれた竪穴建物。北西隅は鉄道施設に伴う掘削により消滅する。平面形は南北にやや長く長方形で、南北約 2.6m、東西 2.4m を測る。南東隅に作り付けカマドの煙道状の掘形が残る。床面下には貼床があり掘形部が残る。

竪穴建物 SI062（Fig.87）他の竪穴建物と比べ小規模であることから土坑とも考えられたが、東辺中心に作り付けカマドが敷設されていること、下端中央付近に硬化面がわずかに残されていることから、これまでに報告してきた竪穴建物とやや用途に関しては違いがあるかもしれないが、竪穴建物として報告する。

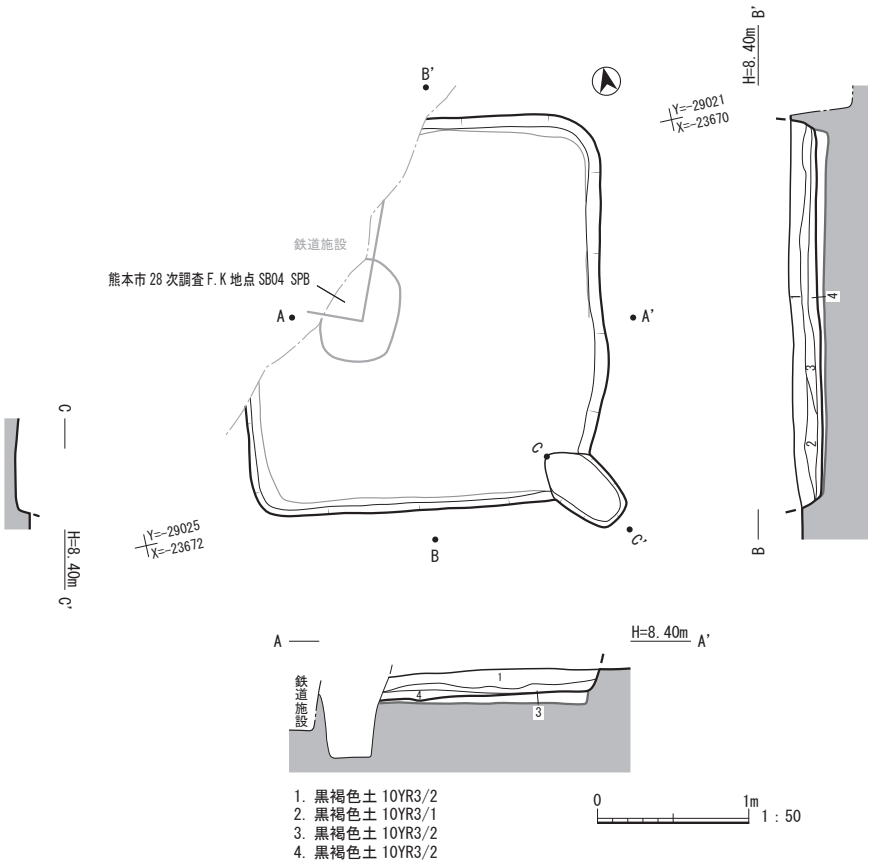
規模はカマドが敷設されている東西約 2.5m（カマド煙道部掘り込みを含む）、南北約 3.1m、深度は約 20 ㎝を測る。遺構埋土は黒褐色土を主体としていることから、現遺構検出面である褐色土層の上層に当たる黒色土層からの掘り込みであることが窺える。このことから当初の遺構深度は約 50 ㎝以上あったことが窺える。掘形は硬化面を検出した中心部から東側でわずかに確認できたが、そのレベルにおいても主柱穴等の遺構は検出されていない。

竪穴建物 SI063（Fig.88）正方形に近い形状で検出した竪穴建物。遺構はいずれの角もほぼ直角で他に例のある隅丸方形建物とは角度に違いを見せる。遺構上層からは掘立柱建物 SB028、溝 SD101 が切っているが、本遺構自体は土坑 SK203 を切っており、明確な切り合いによる時代差を示している。遺構規模は南北約 4.5m、東西約 4.3m を測る。遺構深度は現状で約 25 ㎝から 30 ㎝で、埋土の主体をなす埋土が黒褐色土で検出面としている褐色層上層の土であることから、遺構深度は少なくとも約 50 ㎝以上の掘り込みがあったことが窺える。遺構床面には中央付近に硬化面が南北に広がった状態で残る。しかし、残存状態は悪く遺構内空間利用を想定できるまでには至っていない。床面下には掘形を最深部で約５㎝の深さで確認した。主柱穴等は掘形面まで掘り下げたのちも確認できていない。

竪穴建物 SI064（Fig.89）本遺跡のなかでは稀にみる残りの良さを保つ竪穴建物である。端正な方形竪穴建物で隅は丁寧に直角に掘り込まれる。床面下端の内側から貼床が施された掘形となる。掘形底面は下層の砂岩質の層に達しているため凸凹な面となる。床面上には主柱穴が４本と支柱と見られる小柱穴が１基確認される。硬化面は４本の一部を巻き込みながら柱内部空間に達する。主柱穴は遺構平面が方形掘形で中間端を持ち、下端へと至る。竪穴建物の柱穴としては方形掘形を持つなどここでも他とは違う作りとなっている。規模は、南北約 4.1m、東西約 4.6m を測る。

竪穴建物 SI065（Fig.90）遺構の約半分が調査区の外へと延び検出した遺構。東西に延びる溝によりさらに切られる。本遺構も竪穴建物 SI064 と似た作りで肩を張る隅をもち、方形の掘形を持つ主柱穴により構成される。北辺には作り付けカマド跡が中央に大きな掘形をもち残る。燃焼面、煙道部とも掘形でしか確認できていない。床面には硬化面が広がるがカマド周辺にまでは広がっておらず、貼床直下は約 10 ㎝の深さをもち掘形底面に至る。規模は全体が分かる東西で約 3.9m、南北は 2.57m 以上（作り付けカマド煙道部掘形まで含む）を測り、主軸はカマド中心をとおる軸線上で N-19°-N を示す。

竪穴建物 SI066（Fig.90）遺構の真上に大きな撹乱が掘り込まれ遺構中心部の詳細は確認することはできていない。西側中央部に作り付けカマドが煙道部張り出し並びに炉体袖部を残し良好な状態で検出できた。また、南辺中央にも煙道張り出しと見られる部分が見られ、作り替えの可能性がある。主柱穴は撹乱により消滅している。硬化面はカマド部の対となる東側壁際下まで広がり、ほぼ遺構の中央部に広がっていたものと考えられる。規模は東西約 3.6m（作り付けカマド煙道部掘形含む）、南北約 3.2m を測り、カマド中心部をとおる軸線を主軸とすると N-72°-W を示す。



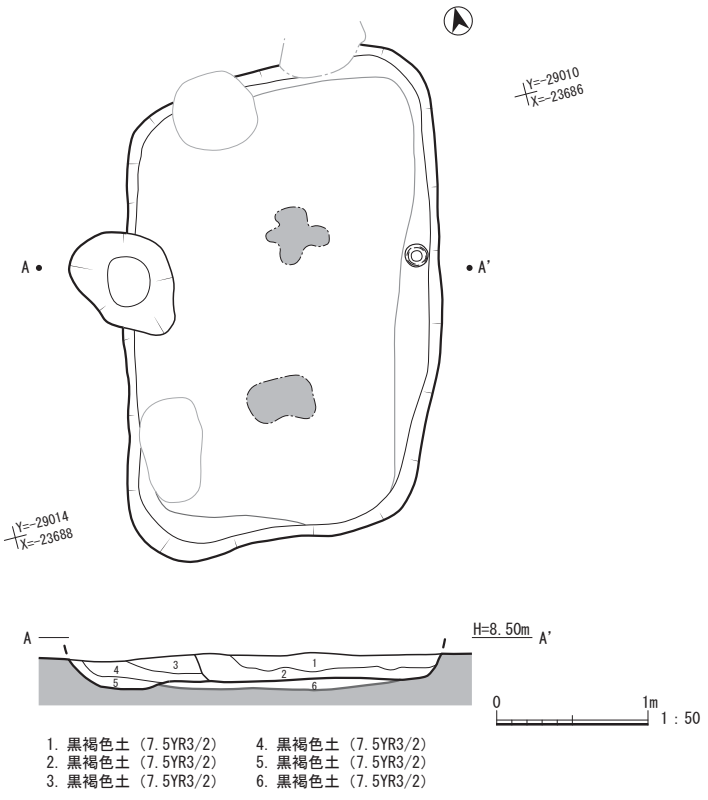
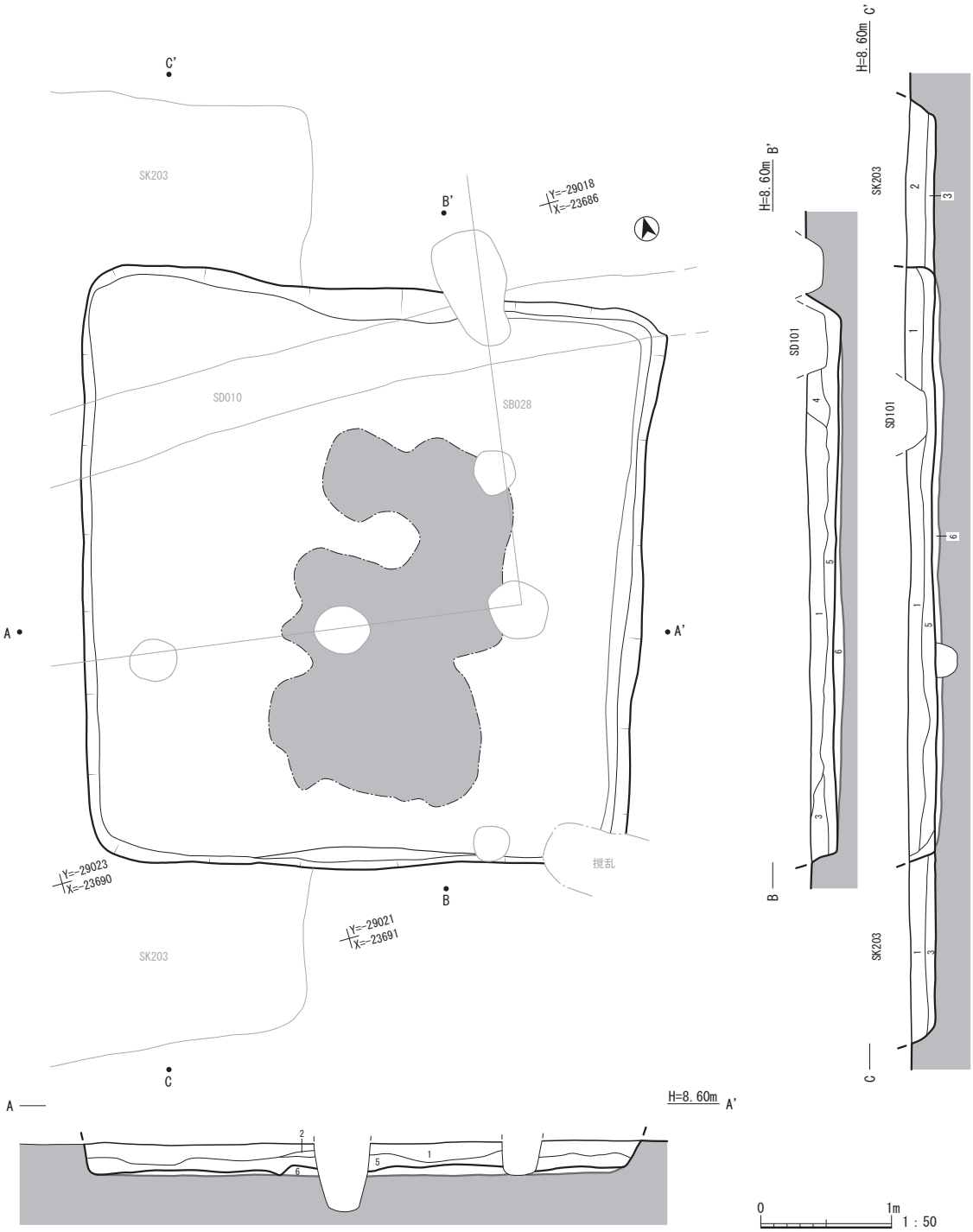


Fig.87　竪穴建物 SI061（上）・SI062（下）実測図



土層注記
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/2）
5. 黒褐色土（10YR2/2）
6. 黄褐色土（2.5Y5/1）

Fig.88　竪穴建物 SI063 実測図

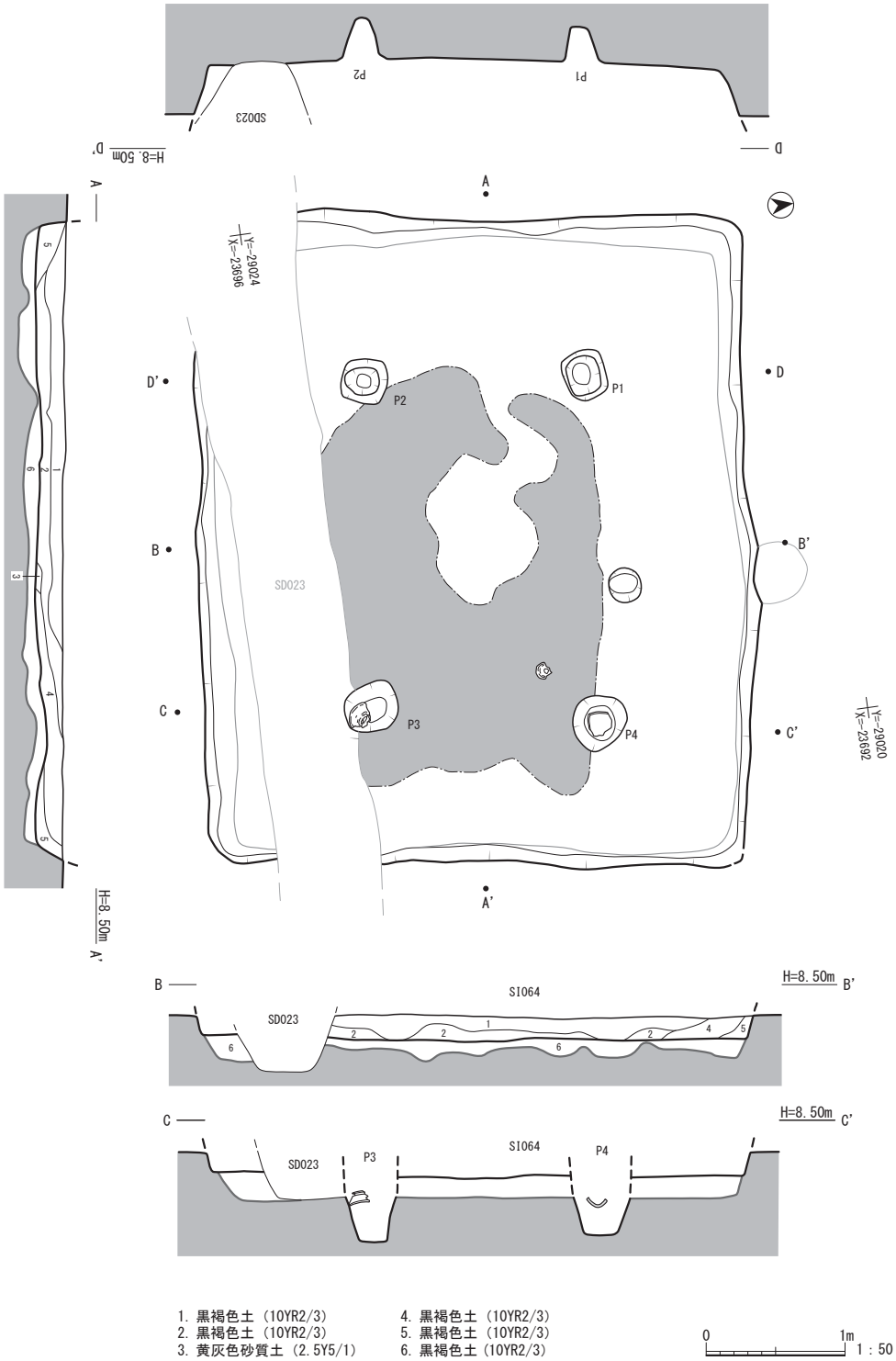


Fig.89　竪穴建物 SI064 実測図

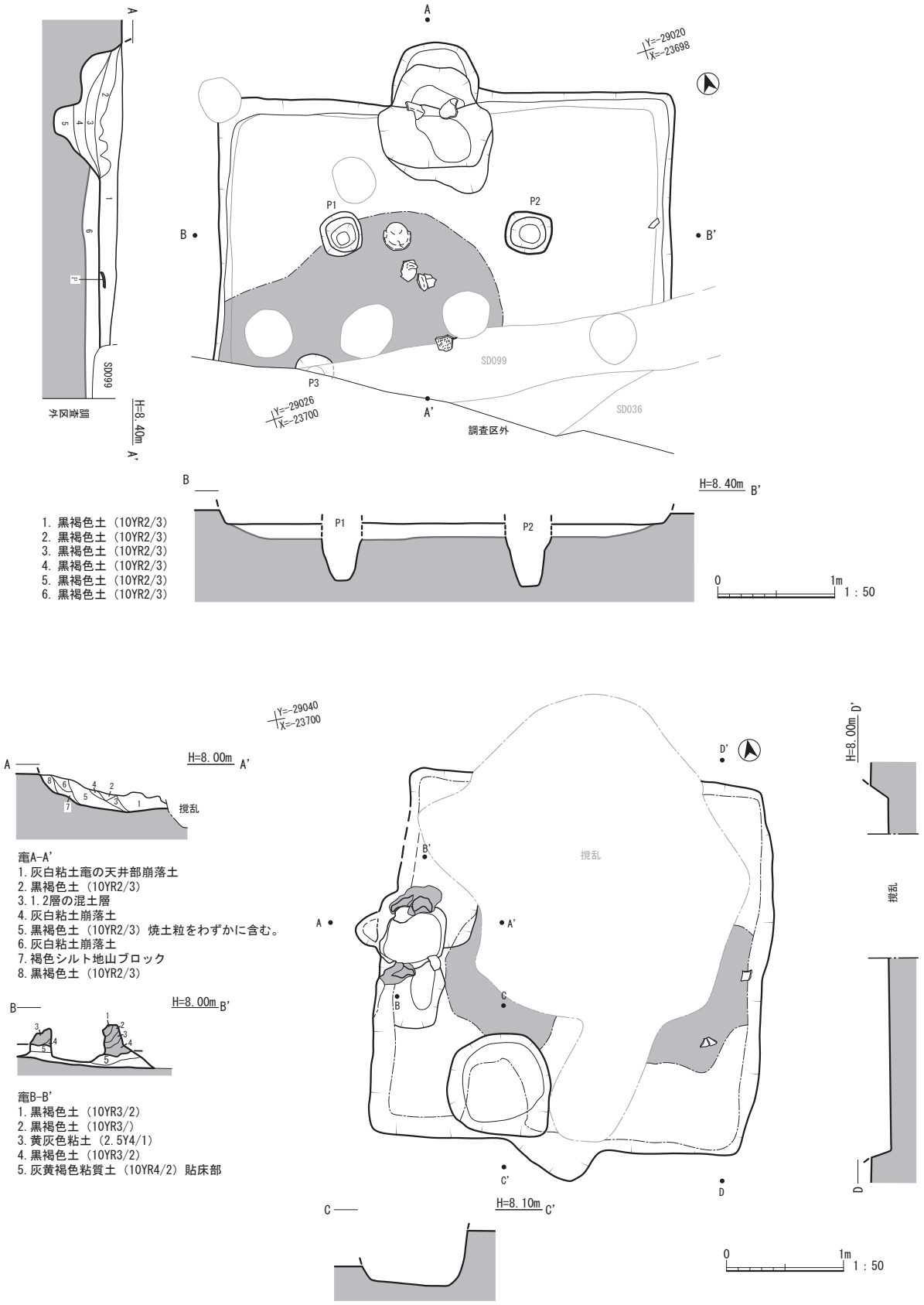


Fig.90　竪穴建物 SI065（上）・SI066（下）実測図

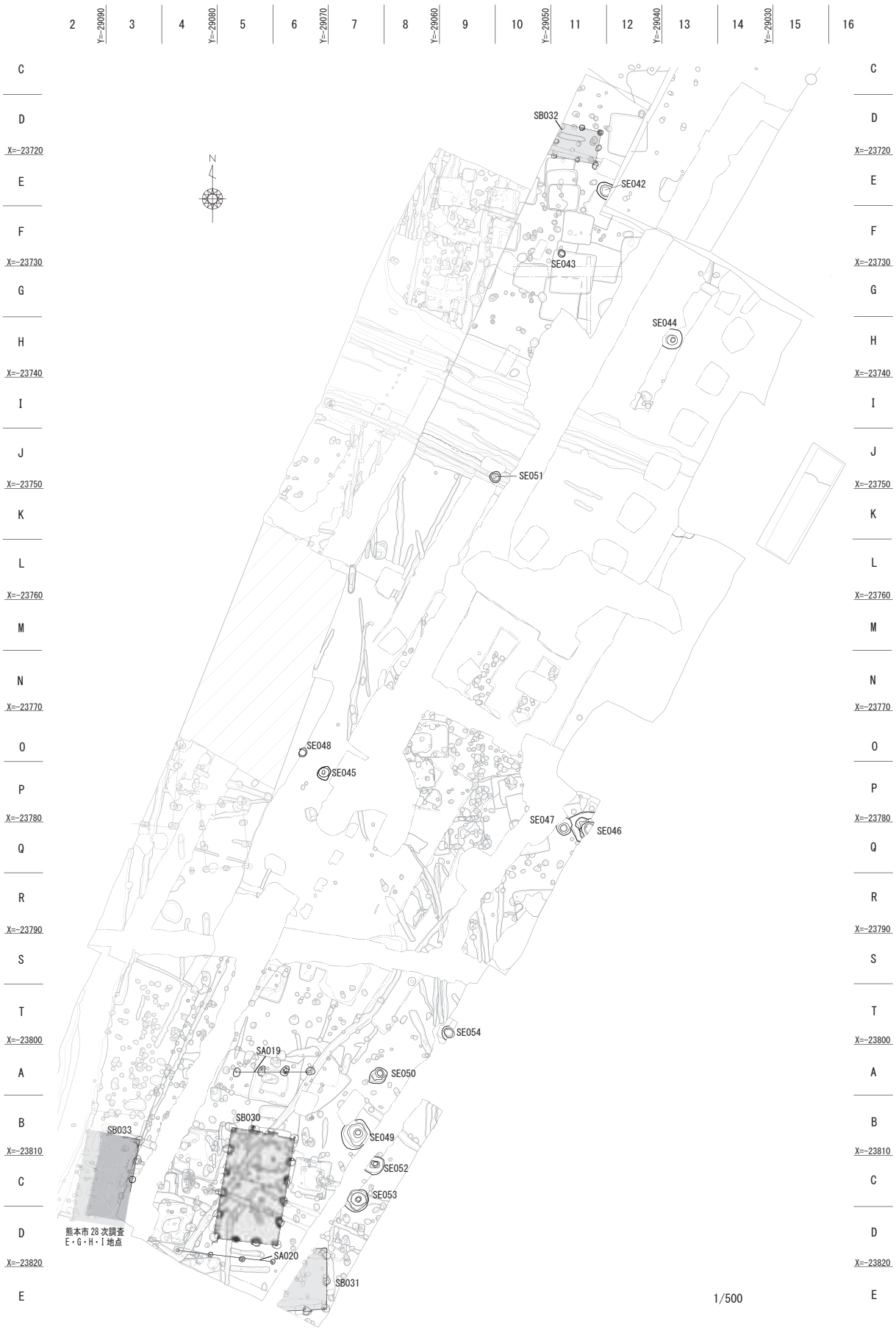


Fig.91　柵列 SA019・SA020、掘立柱建物 SB030~SB033、井戸 SE042~SE053 遺構配置図

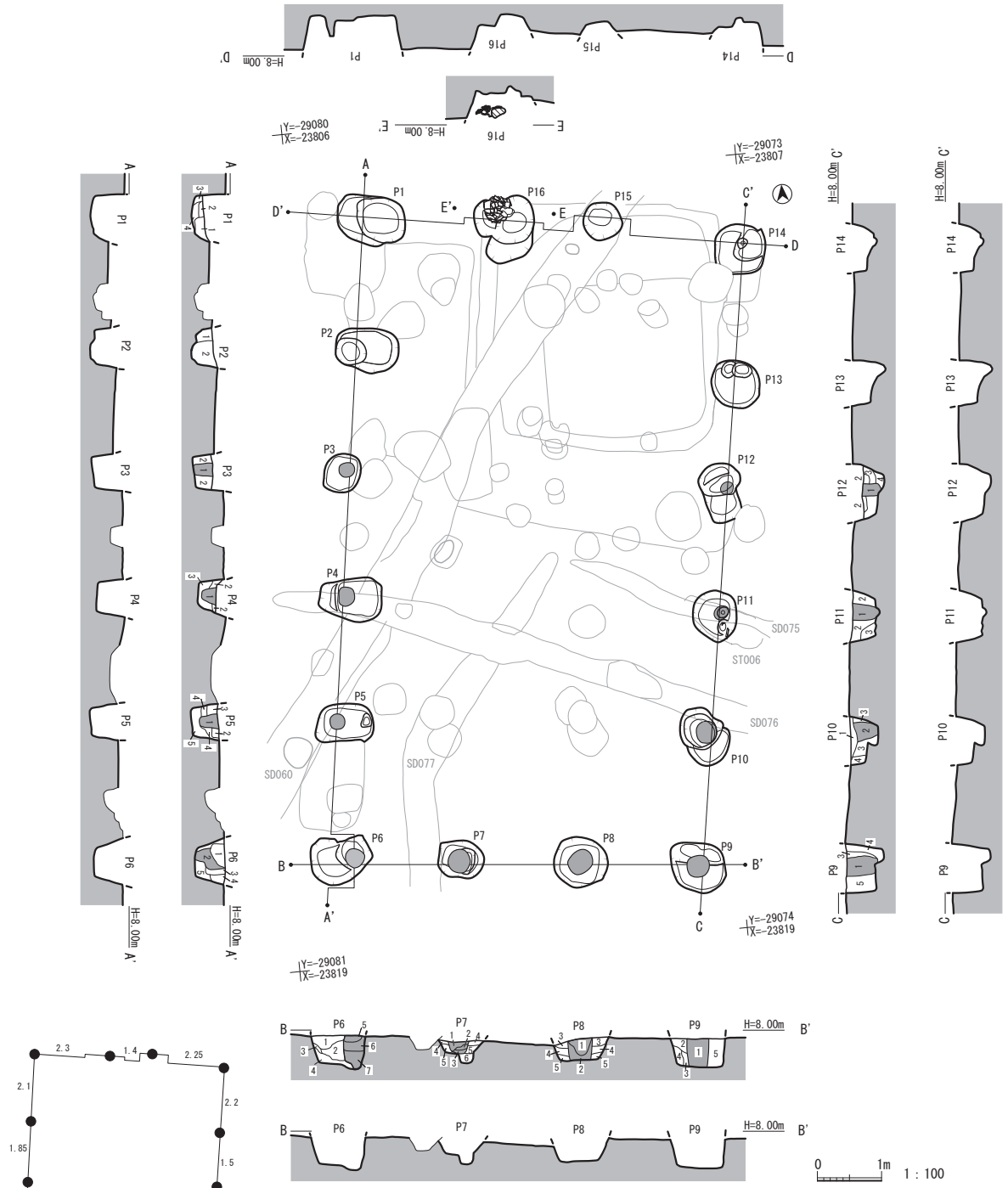
この地域では、熊本県で調査を実施した範囲と、調査を委託し大成エンジニアリング㈱が調査を実施した範囲が一部混在する。以下に報告する遺構のうち掘立柱建物 SB032、井戸 SE042・SE043、竪穴建物 SI075 から SI084 までは大成エンジニアリング㈱が調査を実施し、他の遺構は県が調査を実施している。

掘立柱建物 SB030（Fig.92）本遺跡中で最も大きな掘立柱建物。南北 6 基･5 間、東西 4 基･3 間からなる。梁行 3 間・約 5.9m（約 20 尺）、桁行 6 間・約 9.8m（約 33 尺）で、掘立柱内部の面積は約 57 ㎡を測る。各柱穴は大半が方形掘形を持つが一部に円形もしくは楕円形掘形を見せているものや中間端・下端付近で方形のものもあることから、当初は方形か隅丸方形掘形であった可能性が高い。柱穴の埋土の主体となる黒褐色土は検出層となってる褐色土層上層の黒色土からの土であることから、遺構掘削深度は現在のレベルより約 50 ㎝近く上であったと考えられる。

本遺構を中心に周辺の遺構を概観すると、柵列 SA019、SA020 が遺構を挟んで南北側に位置していることが見て取れる。柵列 SA020 は掘立柱建物 SB030 南側に梁行に沿って平行に位置し、柵列 SA019 も北側に沿い検出配置され、位置関係からおそらく、当初から SB030 に伴う柵列として設置されたものと考えられる。

掘立柱建物 SB031（Fig.93）遺構の二方向が調査区外、西側一方が鉄道施設により切られている掘立柱建物。鉄道施設を介して熊本市調査箇所とも接する。遺構は南北に 3 基・2 間、東西に 2 基・1 間でしか検出できていないが、主軸がほぼ南北軸にあたり、これに類する掘立柱建物が存在することから本来は梁行 2 間、桁行 3 間からなる掘立柱建物であったころが窺える。各個の柱穴掘り込みは現況では隅丸方形から円形に近いが、掘削時の掘形は中間端や下端のあり方から方形掘形であった可能性が高い。本遺構に伴う柱穴は周辺の柱穴に比べ径は大きく下端までの掘形はしっかりとしている。遺構規模は残存状況では 3 基・2 間間南北約 4.9m（約 16.5 尺）、2 基・1 間間東西約 1.8m（約 6 尺）を測る。

掘立柱建物 SB032（Fig.94）東西方向に主軸を有し検出した掘立柱建物。調査区の際で検出していることから全体を検出したものではないため、調査時に検出した 2 間× 2 間の規模が当初からだったのかは分からない。柱穴平面形は丸みを帯びるものも見られるが中間端では方形をしていることから、本来は上端でも方形の掘形をしていたものとみられる。現状での規模は東西に 3.84m（約 13 尺）、南北 2.92m（約 10 尺）を測る。柱穴間は南北間より東西間約 40 ㎝から 50 ㎝長い。



(P1)
1. 黒褐色土（10YR2/3）
2. 黒褐色土（10YR3/2）
3. 黒褐色土（10YR3/1）
4. 褐灰色粘質土（10YR4/1）

(P2)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

(P3)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR3/2）

(P4)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/3）
3. 灰黄褐色ブロック（10YR4/2）

(P5)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/3）
3. 暗褐色土（10YR3/3）
4. 黒褐色土（10YR3/2）
5. 黒色土（10YR2/1）

(P6)
1. 黒褐色土（10YR2/3）
2. 黒褐色粘質土（10YR2/2）
3. にぶい褐色シルトブロック（10YR4/3）
4. 灰黄褐色シルトブロック（10YR4/2）
5. 黒褐色土（10YR3/2）
6. 黒褐色粘質土（10YR3/1）
7. 褐灰色シルトブロック（10YR4/1）

(P7)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. にぶい黄褐色シルトブロック（10YR1/2）
4. 暗褐色土（10YR2/3）
5. 黒褐色粘質土（10YR2/3）
6. 灰黄褐色シルトブロック（10YR4/2）

(P8)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. にぶい黄褐色シルトブロック（10YR1/2）
4. 暗褐色土（10YR2/3）
5. 黒褐色粘質土（10YR2/3）

(P9)
1. 黒色土（10YR2/1）
2. 黒褐色土（10YR3/2）
3. 黒褐色土（10YR3/1）
4. 黒褐色土（10YR3/2）
5. 黒褐色土（10YR2/3）

(P10)
1. 黒褐色粘質土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/3）

(P11)
1. 黒褐色粘質土（10YR2/2）
2. 黒褐色粘質土（10YR2/2）
3. 黒褐色粘質土（10YR2/2）

(P12)
1. 黒褐色土（10YR3/3）
2. 黒褐色土（10YR3/1）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 灰黄褐色シルトブロック（10YR4/2）

Fig.92　掘立柱建物 SB030 実測図

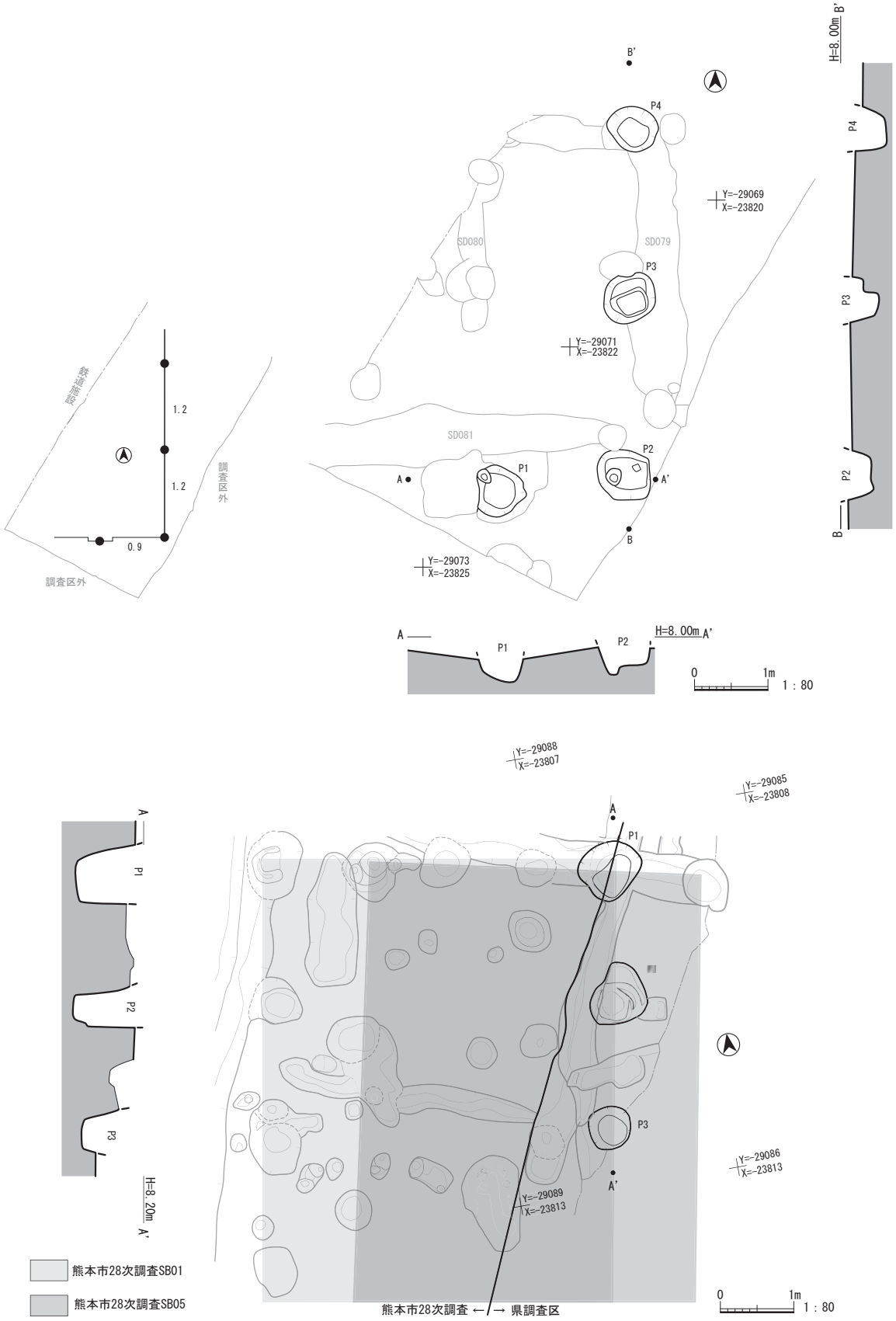
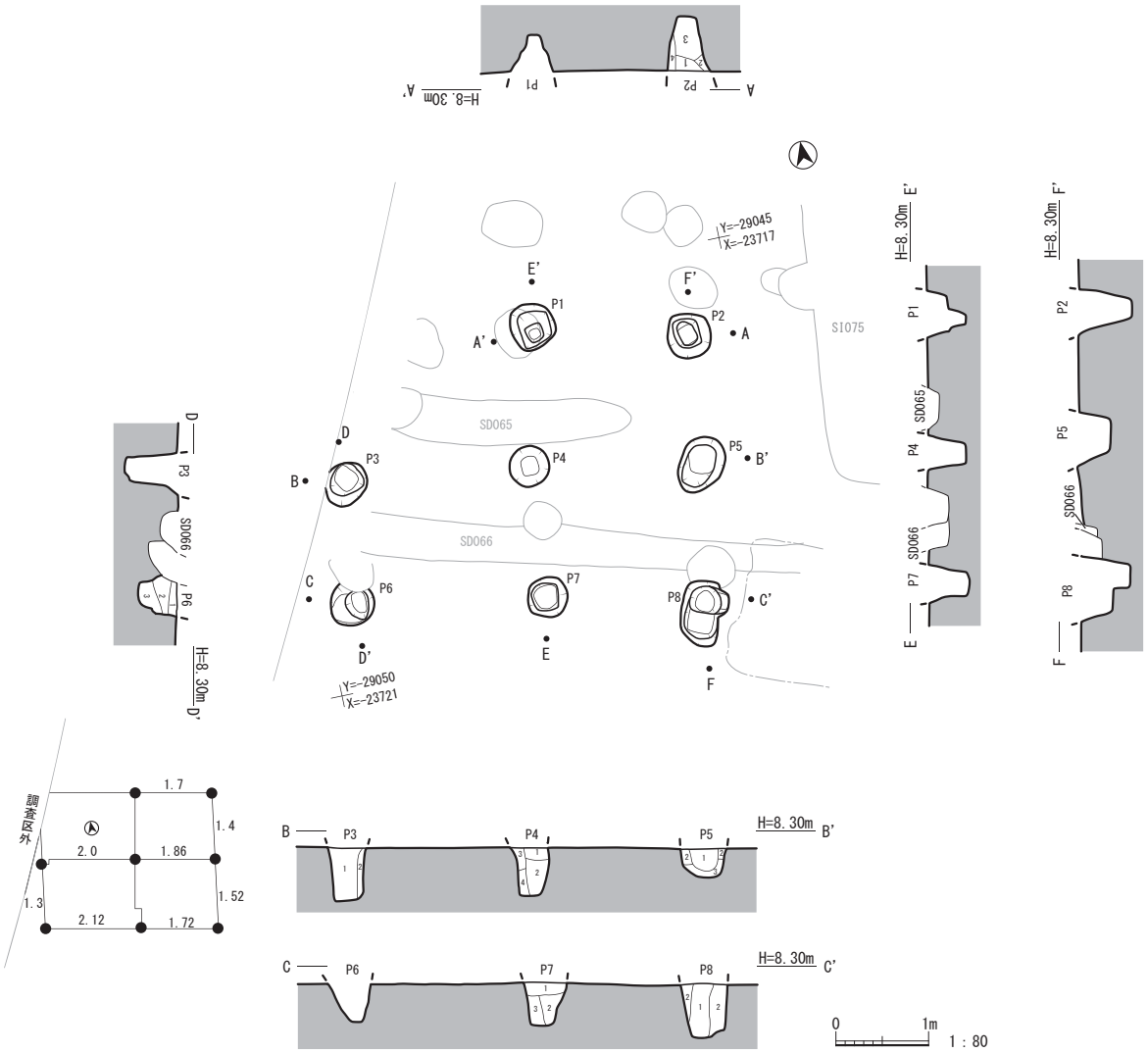


Fig.93　掘立柱建物 SB031（上）・SB033（下）実測図



(P2)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 灰オリーブ色シルト（5YR5/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/2）

(P3)
1. 黒褐色土（10YR2/2）。
2. 黒褐色土（10YR2/2）

(P4)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）
4. 黒褐色土（10YR2/2）
5. 黒褐色土（10YR2/2）

(P5)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 灰オリーブ色シルト（5YR5/2）

(P6)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）

(P7)
1. 黒褐色土（10YR3/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）
3. 黒褐色土（10YR2/2）

(（P8)
1. 黒褐色土（10YR2/2）
2. 黒褐色土（10YR2/2）

Fig.94　掘立柱建物 SB032 実測図

掘立柱建物 SB033（市 SB01）・市 SB05（Fig.93）熊本市調査の G 地点 125B・C・D- ２・３Grid で検出されている市 SB01 の東側柱列のうち３基にあたる。遺構の大半が熊本市側に位置することから熊本市報告書中記載を参考にすると桁行４間以上、梁行２間の南北棟と推定される。柱穴掘形は１基あたりの掘形が径約 80 ㎝と大きく掘立柱建物 SB030 と規模は変わらない。主軸は N-10°　-E で掘立柱建物 SB030 と平行に立つ建物といえよう。

井戸 SE042（Fig.95）竪穴建物群が検出されているなかで検出した井戸。基本的に、竪穴建物→井戸の切り合いを示す。本遺構は、平面形は円形で柱間に段を有し、その後垂直に底面へと延びる。壁面の崩落の危険性があったことから下端までは至っていない。遺構掘形は、中間端以降は緩やかな隅丸方形掘形へと変化している。規模は平面断面部で約 1.5m、掘削深度は 1.8m を測る。

井戸 SE043（Fig.99）竪穴建物 SI081 の遺構上から掘り込まれている井戸。削平率が大きいためか上端付近にある土坑状の掘形は残っていない。平面形はほぼ円形で中間端を上端より約 80 ㎝下に持ち、深度 1.6m まで掘削している。上端幅は約 70 ㎝で底面（下端）幅は約 40 ㎝を測る。

井戸 SE044（Fig.96）新幹線工事が始まるまでレンガ作りの機関車倉庫が建てられていた場所にあたり、機関車台車点検のためのピットが深く掘り込まれていた場所である。そのため、周辺にくらべ全体に掘り下げられ遺構の残りは悪い。本遺構を検出した部分も周囲が削平され、かろうじて井戸、墓、柱穴を確認するに止まった。本遺構は井戸屋形など関連する柱穴等は確認されていない。規模は、掘形上端南北側で約 1.8m、中間端までの深度 60 ㎝、底部までの深度が 2.2m、底部径 50 ㎝を測る。

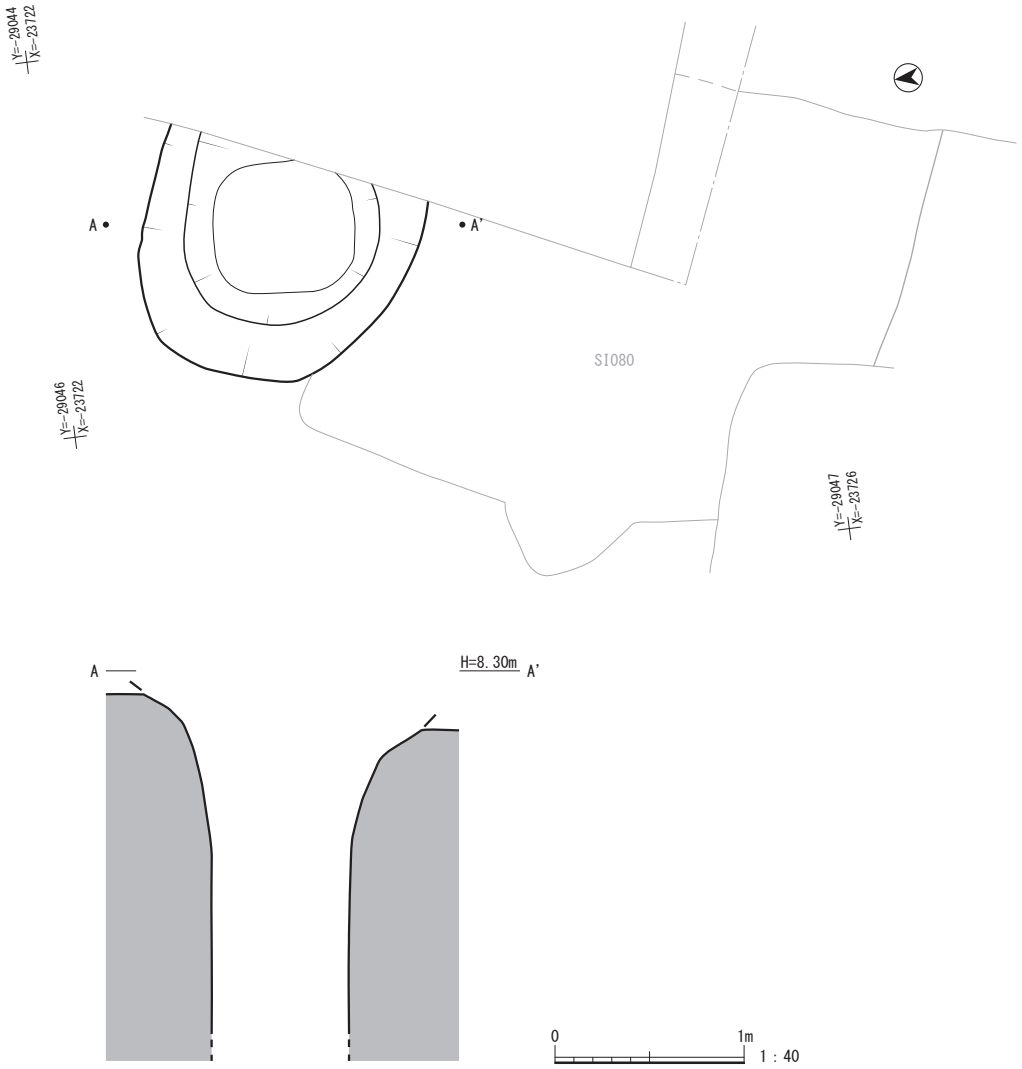


Fig.95　井戸 SE042 実測図

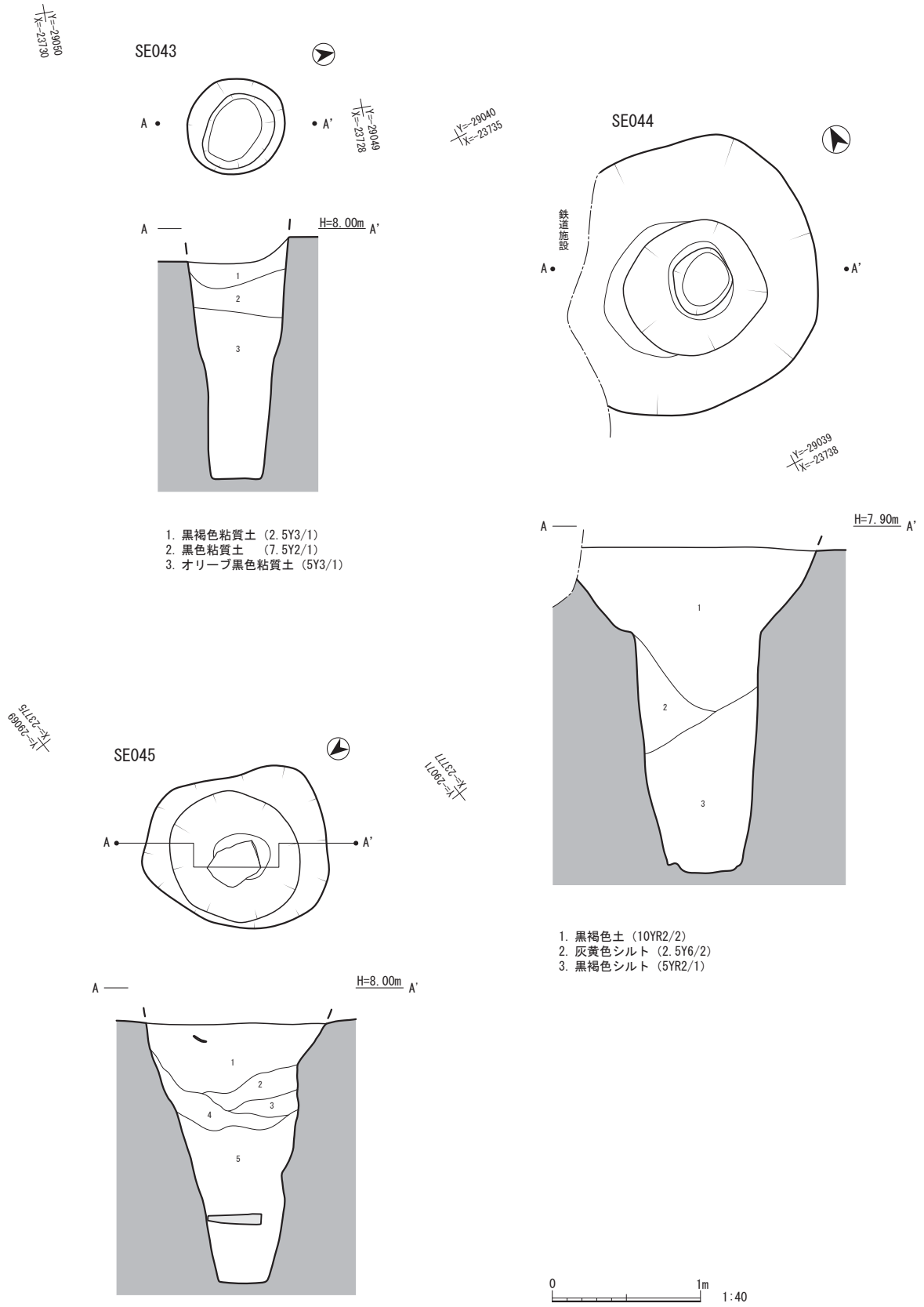


Fig.96　井戸 SE043・SE044・SE045 実測図

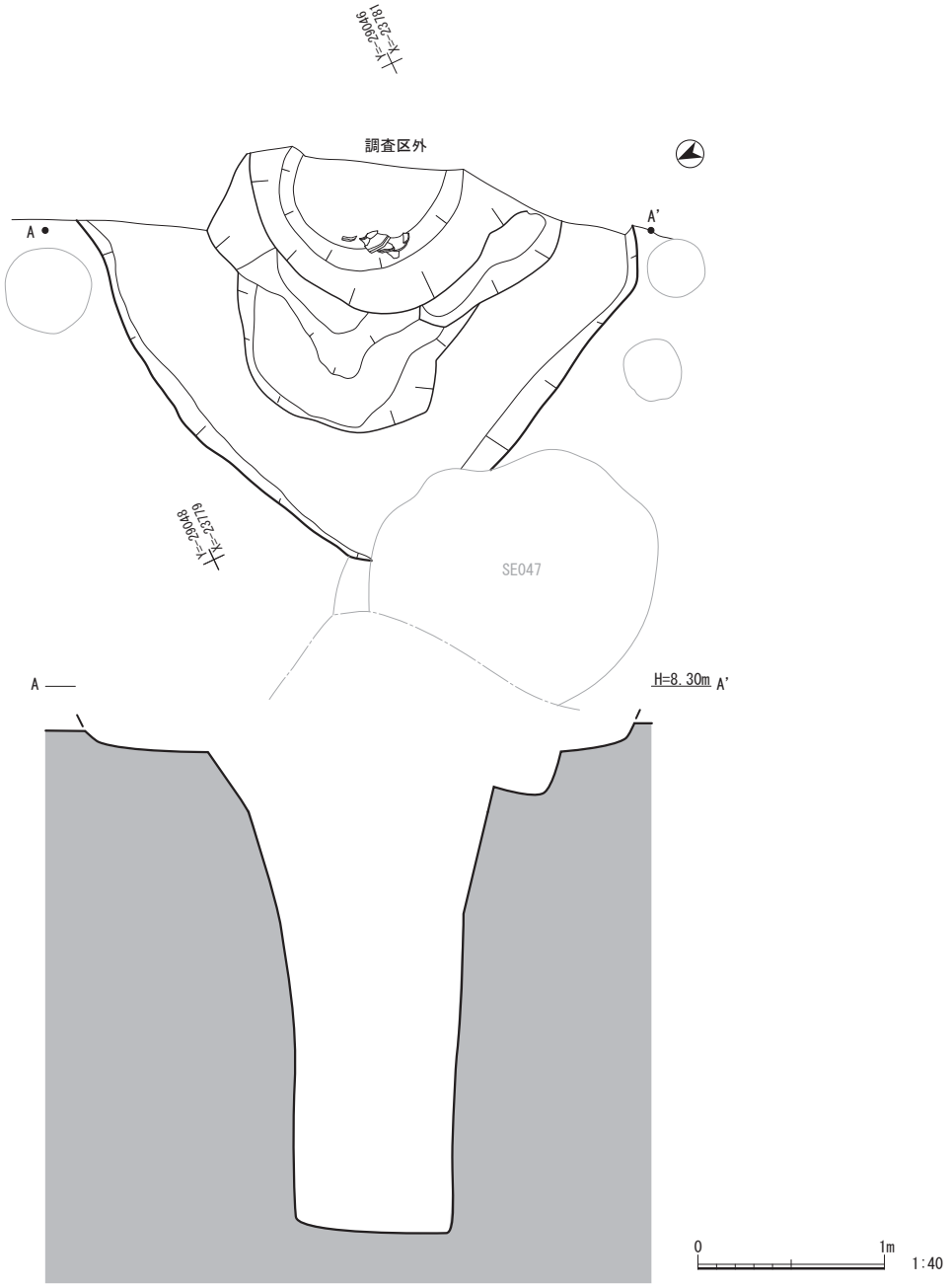


Fig.97　井戸 SE046 実測図

井戸 SE045（Fig.96）市調査箇所に近く井戸 SE048 と並び検出した井戸。平面形は不整形な円形で検出面から約 30 ㎝下で中間端を持つ。平面径は最大で約 1.3m、総深度 1.7m、下端径は 35 ㎝を測る。検出面から約 1.3m の底面に近い埋土中より板状の石が水平に置かれた状態で出土している。大きさは径 40 ㎝、厚さ 8 ㎝から 10 ㎝を測る。板状石の意味するところは分からないが、水平を保っていることから井戸廃棄時に入ったものと考えられる。

井戸 SE046（Fig.97）検出した範囲では、方形掘形をもち中央にやや不定形ながらも井戸本体を持つ井戸。西側約半分が調査区に広がる。中心部の井戸本体は円形をしており、その外縁部のみがいびつな形状をする。本体埋土上面には土師器杯、須恵器高台付杯、黒色土器 a 類等が出土していることから 9 世紀中ごろの遺構であろう。

井戸 SE047（Fig.98）竪穴建物群に隣接し、井戸 SE046 と隣接する井戸。平面はほぼ円形で鉄道施設により一部が削平される。平面形は楕円形で、中間端から底部にかけて円形となる。土層断面からは、浅い方から

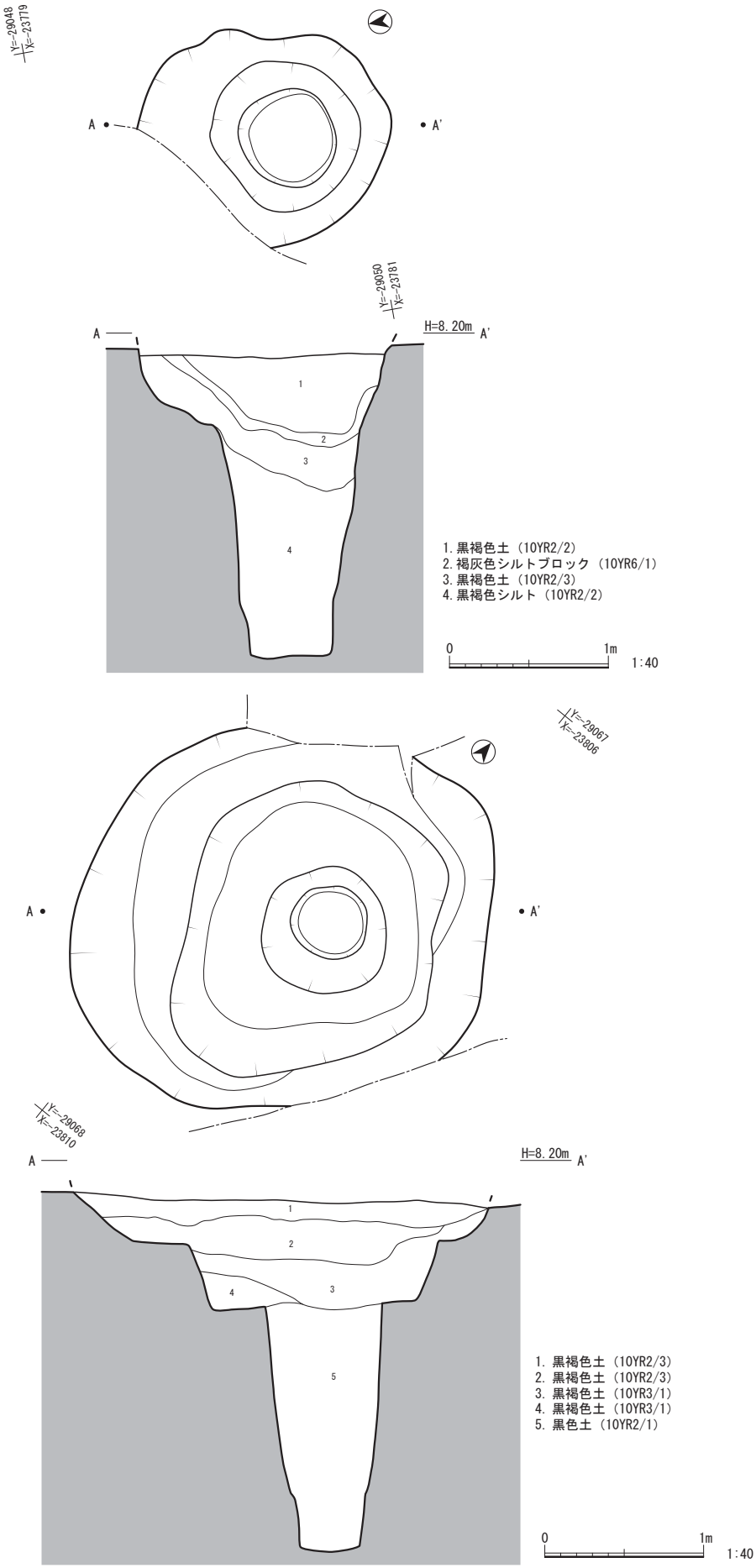


Fig.98　井戸 SE047（上）・SE049（下）実測図

深い方へと土砂の流れ込みがみられることから、放棄されたのち自然堆積による埋没過程を辿っていることが窺える。規模は上端長径で約 1.6m、中間端までの深度 60 ㎝、中間端径は 90 ㎝、総深度は 1.9m、下端径は 50 ㎝を測る。井戸本体部としては大きい部類に入る井戸であろう。

井戸 SE048　小規模であり下端までは到達できなかったことから個別図としては図示していない。調査区の際に位置し、上端が市調査区に入る。

井戸 SE049（Fig.98）2 段の掘形をもつ井戸。平面形は不整形ではあるが、中間端で隅丸方形気味となり井戸掘形で円形となる。掘形段は井戸掘形を巡り丁寧な作りとなる。上部から 1 段目（上端）径は約 2.6m、2 段目上端で 1.60m、2 段目掘形下端で 1.3m を測る。また、1 段目掘形深度は約 30 ㎝、2 段目掘形は 40 ㎝、で井戸底面までの総深度は約 2.2m を測る。井戸底面から約 30 ㎝上でややくびれる。

井戸 SE050（Fig.99）南側に 2 段の掘形を持ち検出した井戸。北側壁は角度が変わる変化点をもつが段は有していない。規模は上端長径で約 1.7m、掘形深度は 1 段目約 40 ㎝、２段目 40 ㎝、井戸本体 1.3m、総深度約 2.1 ｍを測る。

井戸 SE051（Fig.99）先に記述した近世溝により上部を掘削され検出した井戸。円形で中間端から下端まで円形の掘形をもつ。規模は平面で約 1.0m、中間端までの深度は 40 ㎝、総深度は 1.7m、底面径は 20 ㎝を測る。

井戸 SE052（Fig.100）楕円形の平面形で東西に長軸をおく。井戸掘形は上端から垂直に掘り込まれ約 70 ㎝の深さで 1 段からなる。井戸本体の掘形は長軸方向に長方形をしており、底面で不整形な円形となる。井戸本体部の深度は 1.7m で掘形までいれて総深度は約 2.4m を測る。

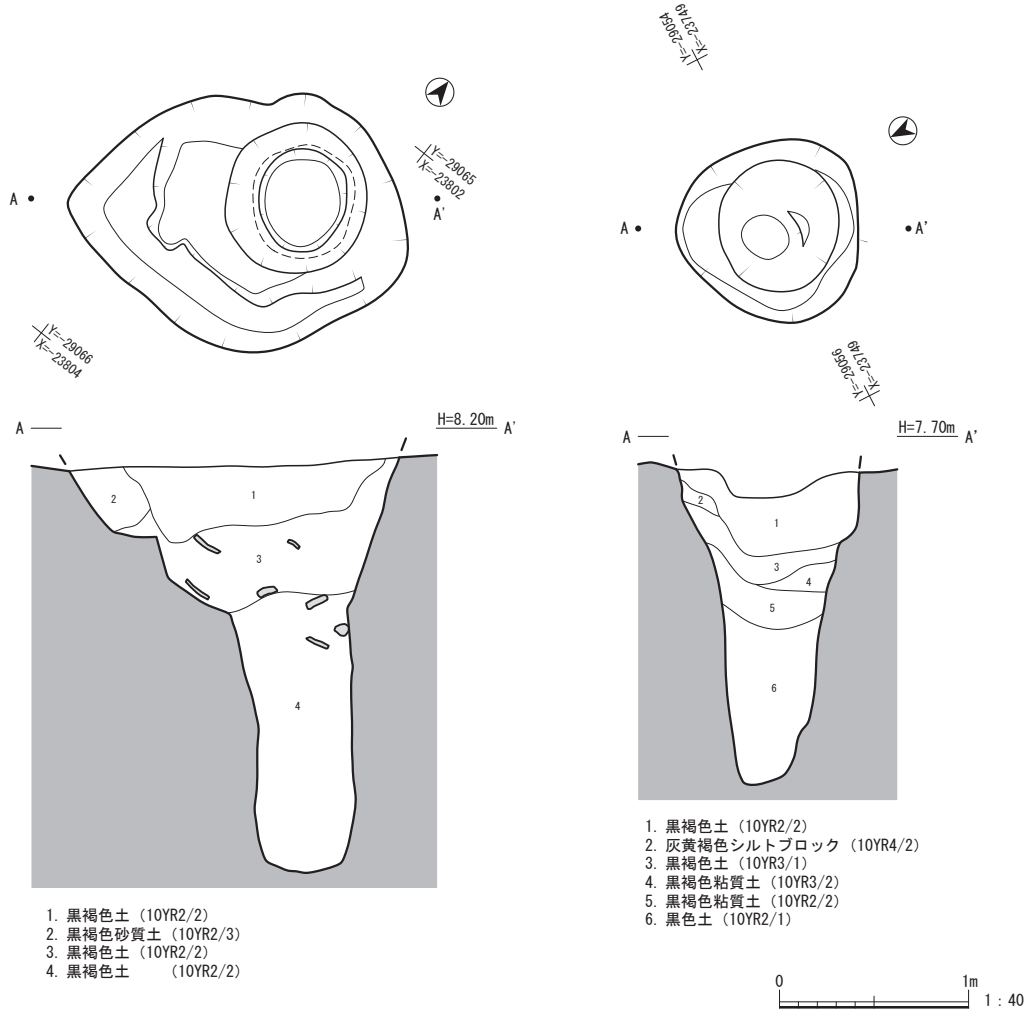


Fig.99　井戸 SE050（左）・SE051（右）実測図

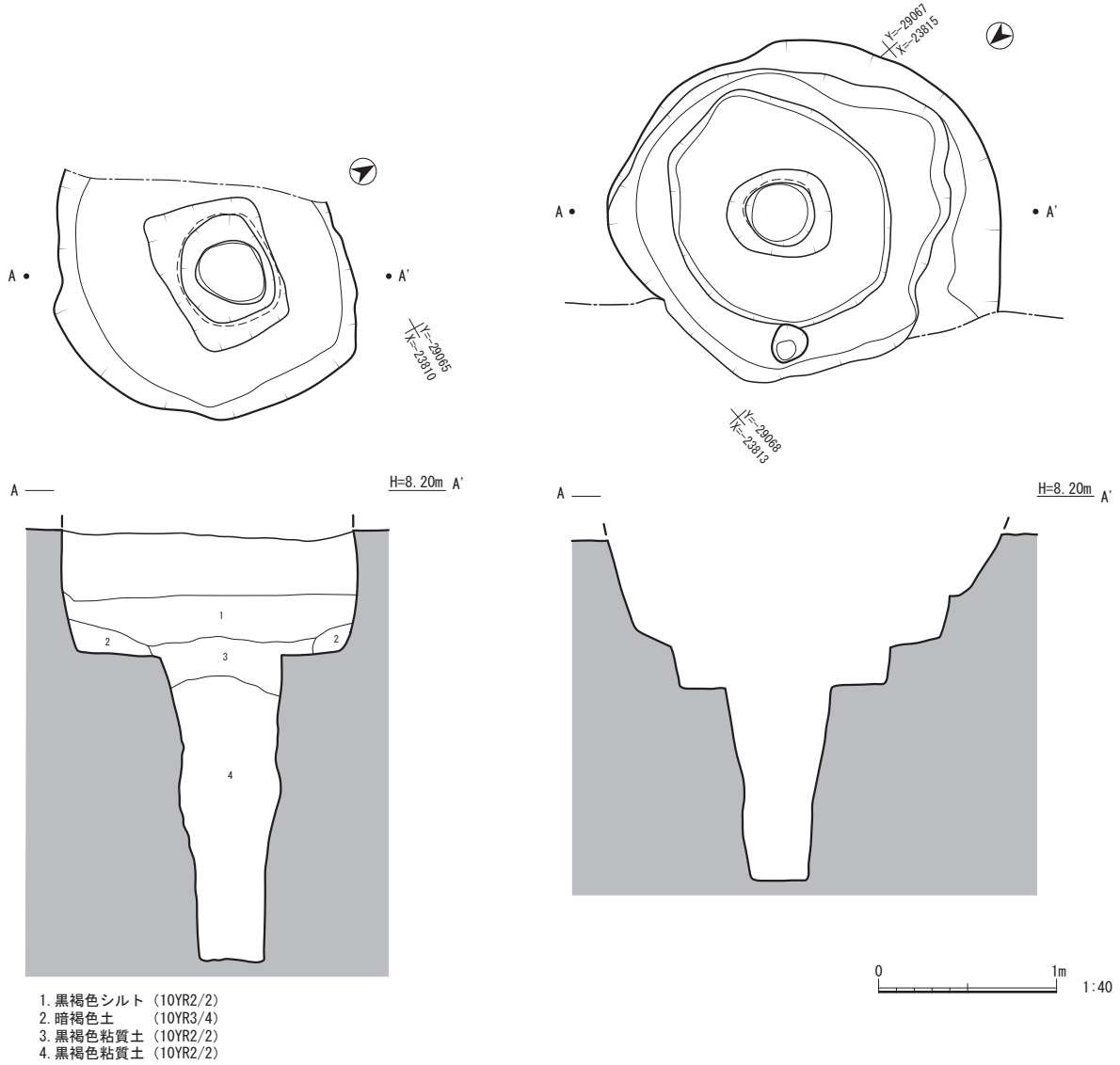


Fig.100　井戸 SE052（左）・SE053（右）実測図

井戸 SE053（Fig.100）井戸の作りのなかでもっとも丁寧な掘形を持つ井戸。溝 SD025 を切る状態で検出している。井戸本体は３段の掘形からなり中心の井戸本体へといたる。上端径は約 2.2m、１段目下端 1.9m、２段目下端 1.5m、３段目下端 1.1m、１段あたりの深度は約 20 cmから 30 cm、井戸本体は上端径 60 cm、底面 30 cm、総深度約 1.9m を測る。１段目平坦部に柱穴痕が１基検出でき、井戸屋形を構成していた柱の一部である可能性もある。

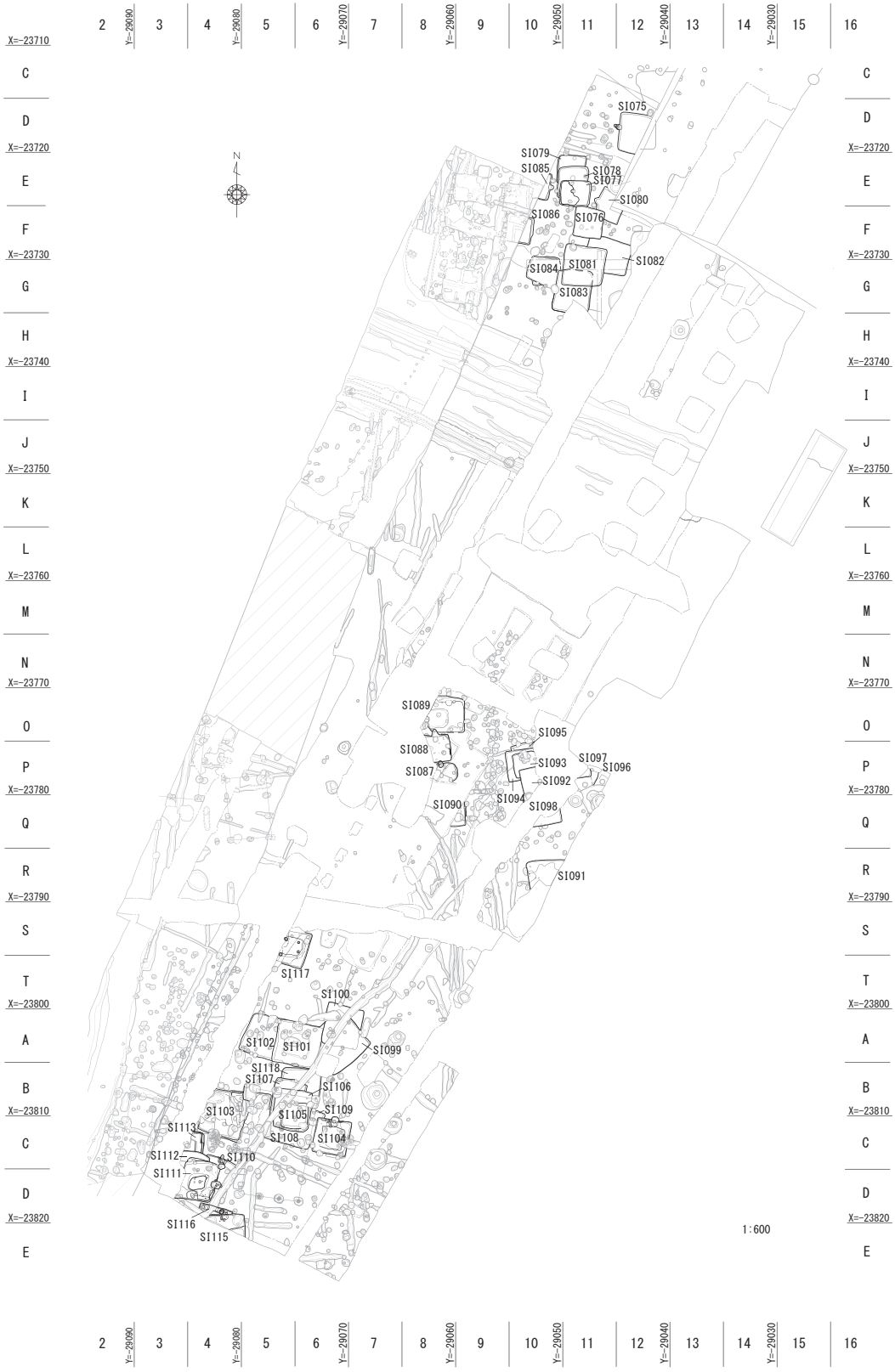


Fig.101　竪穴建物 SI075~SI118 遺構配置図

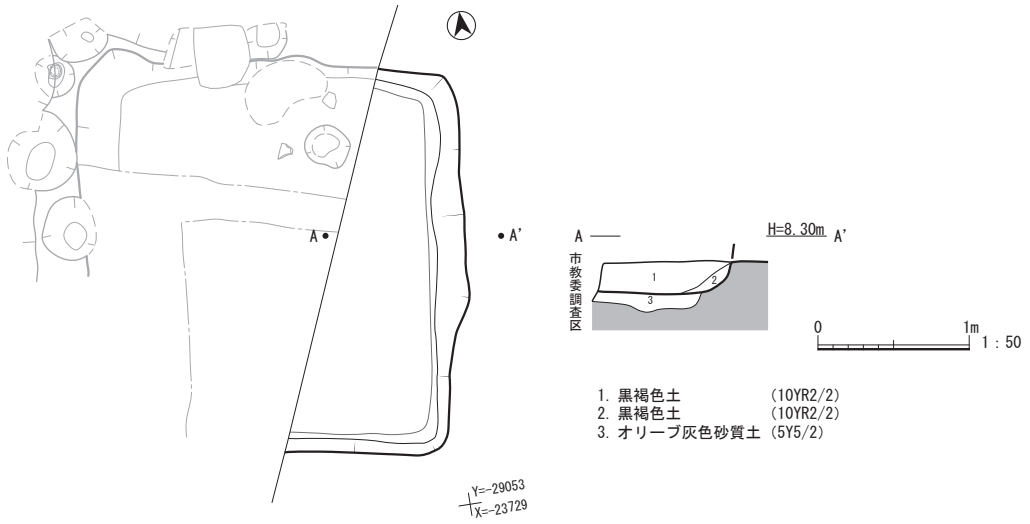


Fig.102　竪穴建物 SI086 実測図

竪穴建物 SI082（Fig.101）2 軒の竪穴建物に切られ検出した遺構。規模は長軸となる東西に約 4.2m、南北 3.2m を測る。主軸は長軸となる軸をもとに設定すると N-75°　-E を測る。

竪穴建物 SI084（Fig.101）遺構の中心にトレンチを設定しているため、遺構内の詳細が消滅している部分がある。主柱穴、硬化面等は検出されていない。平面形はやや不整形であり上端両端が平行には検出できておらず、竪穴建物と報告するには所見が乏しい感は否めない。しかし、規模が南北約 2.8m、東西約 2.9m と周辺で検出されている小型の竪穴建物に近いことから竪穴建物として報告するのが適当と判断した。主軸は長軸となる軸からみると N-82°　-E を示す。

竪穴建物 SI086（Fig.102）熊本市調査のなかで一部を検出・調査された竪穴建物。全体面積の約 1/3 が当調査区内にあたる。遺構内には柱穴群が多数上部から掘り込まれており、遺構上端の検出を難しくしている。作り付けカマドは熊本市調査区側にある。貼床下からは一回り小さな掘り込みで掘形が検出された。

竪穴建物 SI087・SI088・SI089（Fig.103）いずれの遺構も遺構北辺中央に作り付けカマド掘形を残す。竪穴建物 SI087 はカマド煙道部先端で竪穴建物 SI088 を切ることから、竪穴建物 SI087 → SI088 の時期差を示している。平面形は東西に広く長方形で当遺跡中で他には例をみない形をしている。カマド掘形わきには炉体の一部であるとみられる白粘土の一部が残る。規模は南北約 2.1m（推定）、東西約 2.2m（推定）を測る。遺構内には主柱穴、硬化面等は検出していない。竪穴建物 SI088 は竪穴建物 SI087 よりも規模が大きく、平面形は正方形となる。北辺中央に作り付けカマド煙道部掘形が延び、前面に燃焼部掘形を持つ。壁際立ち上がり部には一部に周壁が残る。遺構の左右に柱穴を配するが、主柱穴または本遺構に伴うものかは分からない。規模は南北約 3.1m（作り付けカマド煙道部掘形を含む）、東西約 2.4m（推定）を測る。主軸は２基とも N-10°　-W を示す。竪穴建物 SI089 は東西に長径を持つ竪穴建物。平面形は東側２角は方形、西側は１角は削平を受け消滅しているが１角は隅丸方形となる。方形ではあるがややいびつな感じを受ける。床面には硬化面が発達し遺構下端直下まで及ぶ。柱穴は硬化面上で検出したものを図示したが、主柱穴を構成するような柱穴は確認できていない。北側壁際に灰の集中区を確認した。焼土は粒状に残るが大半は削平されたかのように薄い。硬化面下には貼床部が存在し、剥いで掘形のみにすると壁沿いに周溝が巡ることが判明した。しかし、その用途は不明である。

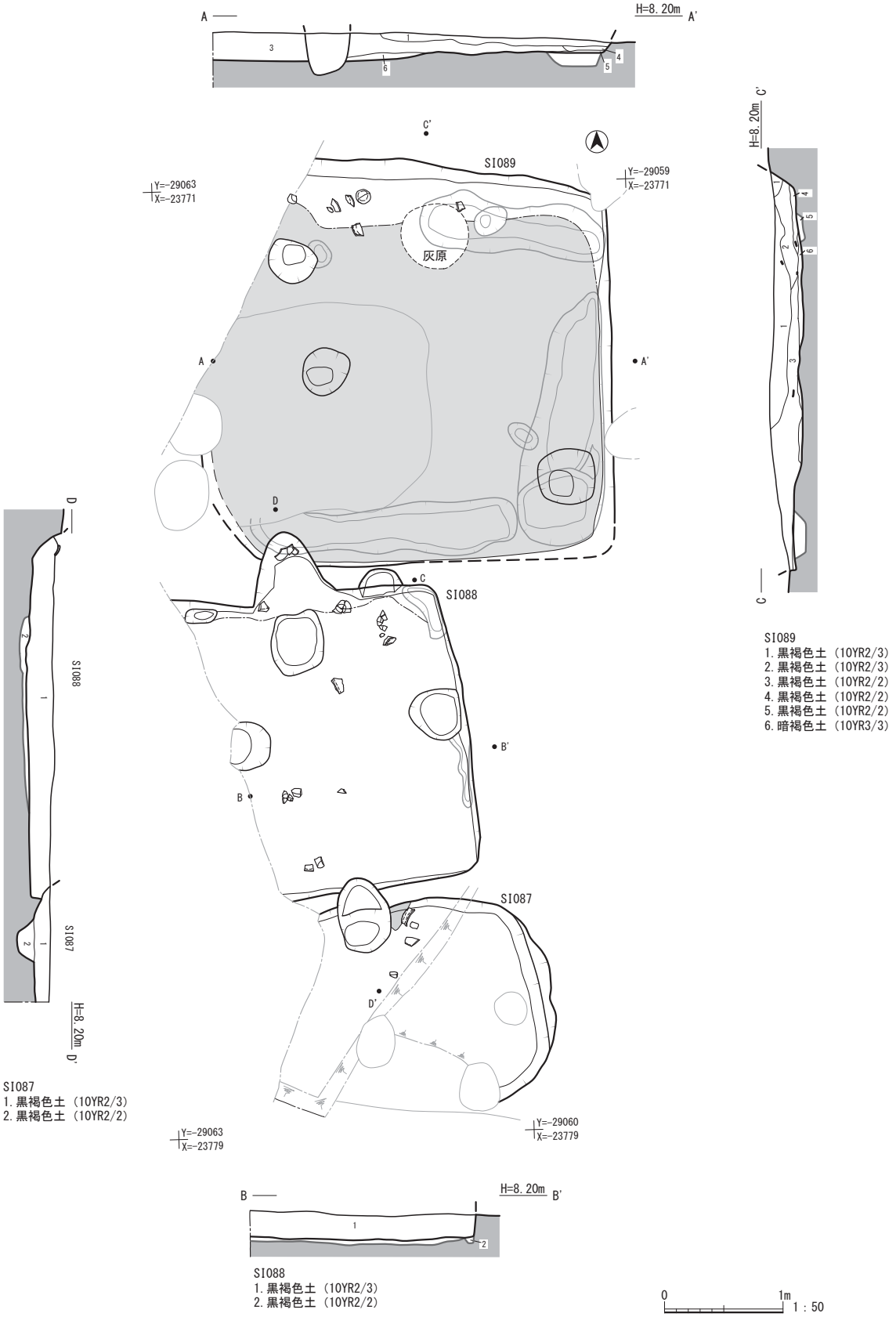


Fig.103　竪穴建物 SI087・SI088・SI089 実測図

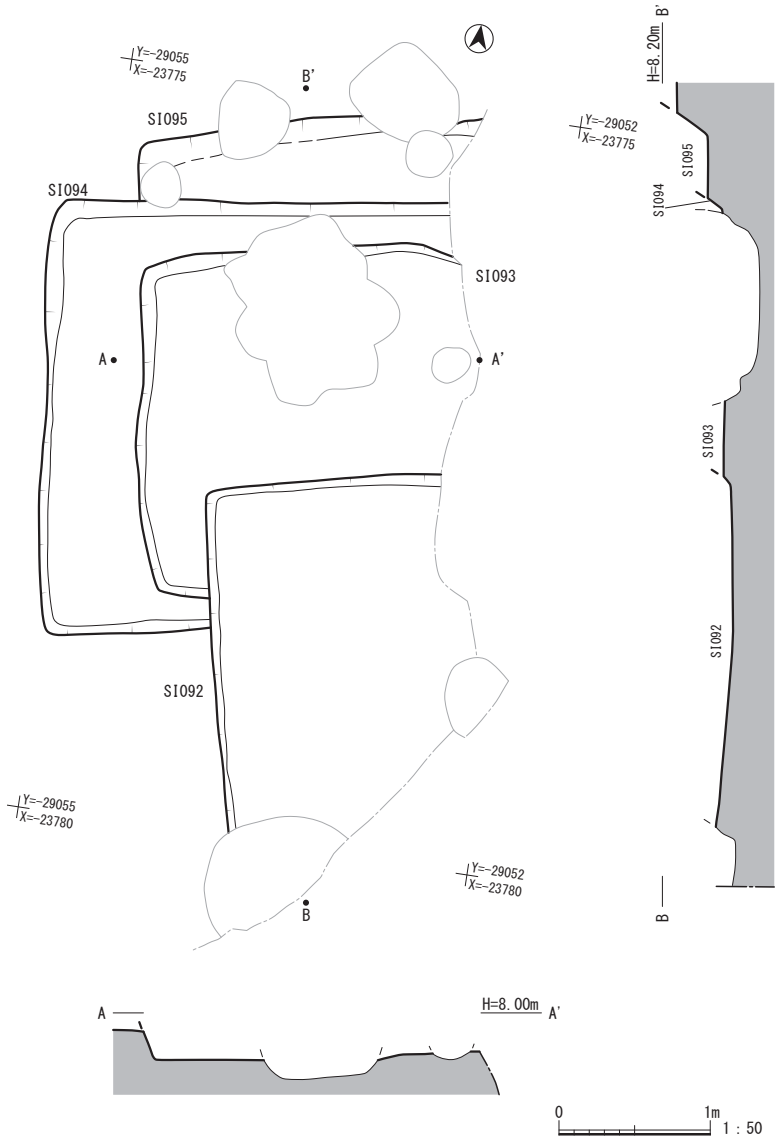


Fig.104　竪穴建物 SI092~SI095 実測図

竪穴建物 SI092・SI093・SI094・SI095（Fig.104）４軒の竪穴建物の切り合いからなる遺構群。遺構規模、掘形の特徴から竪穴建物 SI092 → SI093 → SI094 → SI095 の連続性を見ることができよう。すべて規模をみることはできないが、竪穴建物 SI093 の南北で約 2.28m、竪穴建物 SI094 の同じく南北で約 2.86m を測る。作り付けカマド、主柱穴、硬化面等の住居内遺構はいずれにおいても検出していない。

竪穴建物 SI101・SI102（Fig.105）２軒の竪穴建物が寄り添い切り合う遺構。竪穴建物 SI101 は遺構北辺中央に作り付けカマドの掘形を円形に残す。煙道部は削平のため残らない。南辺中央には階段状のステップが一段残り硬化面等は確認できていないが、入口であった可能性が高い。主柱穴は小柱穴４基（うち１基は上部からの攪乱で消滅）からなるものとみられる。遺構規模は南北約 4.1m、東西約 4.2m を測り、主軸は N-13°-E を示している。貼床下からは掘形を検出しており、中心部が高く周辺部にかけて溝状の掘り込みとなっている。竪穴建物 SI102 は東側 1/3 が切られるとともに、溝、土坑等の後世の掘り込みが多いことから詳細は分からないところが多い。主柱穴は南壁に沿い２基検出しているが他は未検出である。作り付けカマドは土坑 SK211 により切られ残っていない。床面は掘形はない。

竪穴建物 SI104（Fig.106）端正な掘形をもち検出した竪穴建物。四隅は角が立ち丸みを帯びない。主柱穴は小柱穴が４基遺構中心部に並び、その内部に硬化面がカマド前面から両サイドに向かって発達する。北辺中

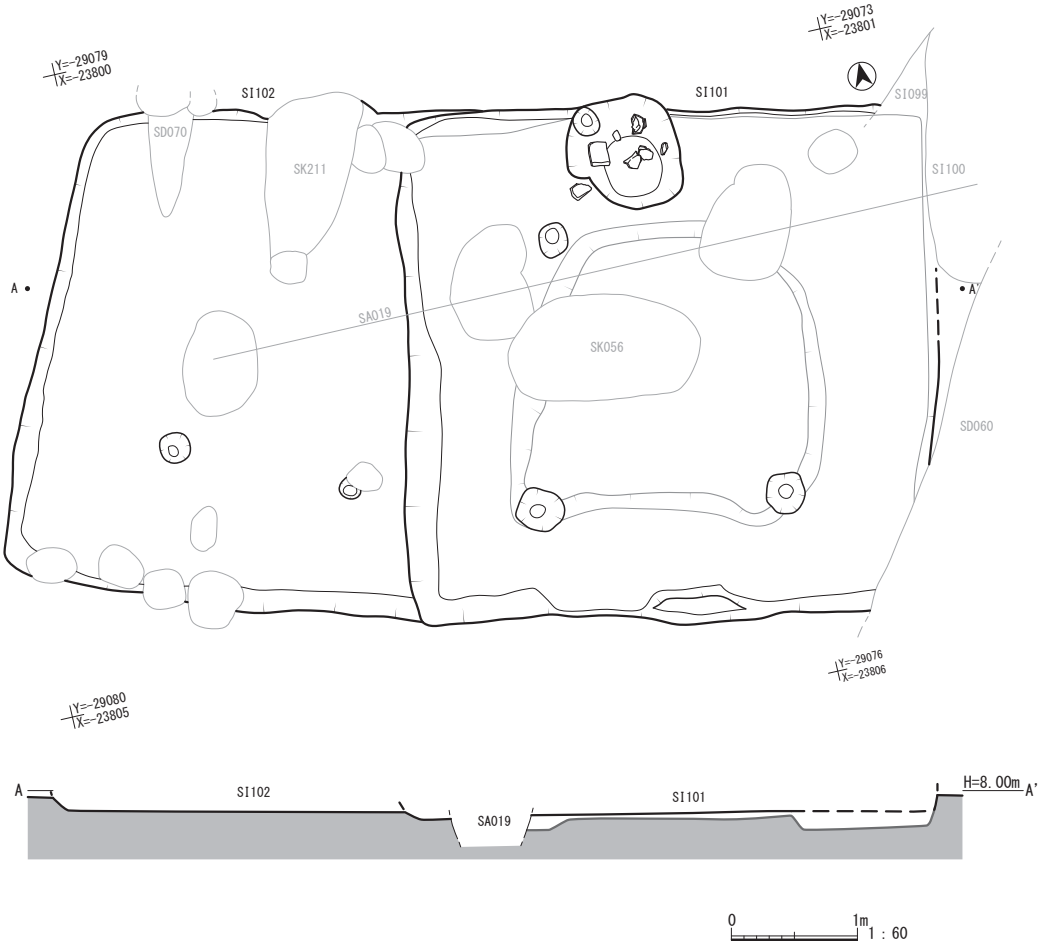


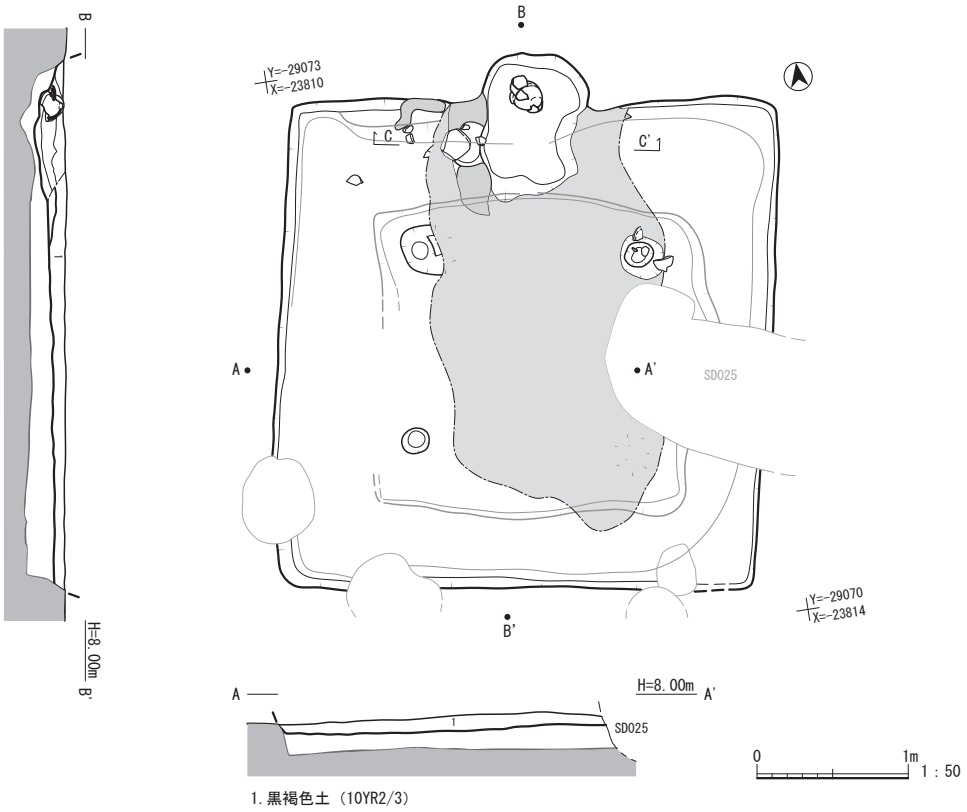
Fig.105　竪穴建物 SI101・SI102 実測図

央に作り付けカマドが作られるが、炉体に関する部分は基底部となる両袖部のみである。あとは、周囲に炉体に使われていたとみられる白粘土塊と土坑状の掘形のみである。掘形中央には小型の甕が 1 個横倒しの状態で検出している。貼床下の掘形はわずかに中央部が高く壁に向かいやや下がる。

竪穴建物 SI111・SI112・SI113・SI114（Fig.107）４軒の切り合いからなり検出した竪穴建物群。規模を確認できるのは最も新しい竪穴建物 SI111 のみである。遺構の新旧関係は、竪穴建物 SI111 → SI112 → SI114 → SI113 である。竪穴建物 SI111 は東壁中央に作り付けカマドをもち、向かって右側に棚状の平坦な高まりがある。床面には遺構中心部からカマド前面にかけて硬化面が発達しており、住居内の人の動きが分かる遺構となっている。規模は東西約 3.8m（作り付けカマド煙道部掘形を含む）、南北約 3.9m を測り、主軸を N-82°　-W に示す。

竪穴建物 SI114 は北辺中央に作り付けカマドをもつ。炉体があった範囲にはカマド基部となる白粘土の広がりがカマドの痕跡を残す。遺構プラン外に煙道部掘形を短く残す。規模は南北約 4.2m（作り付けカマド煙道部掘形を含む）を測る。

竪穴建物 SI113 はここでは最も古い遺構となる。切り合いにより残存状況は 1/4 以下で遺構としての詳細は分からない。唯一観察できるのは貼床があること、また、貼床下に中央部から壁際に向かい周溝状に掘形を巡らせていることのみである。この例は他の遺構にもあることから竪穴建物の掘形を考えるうえで重要な資料となろう。



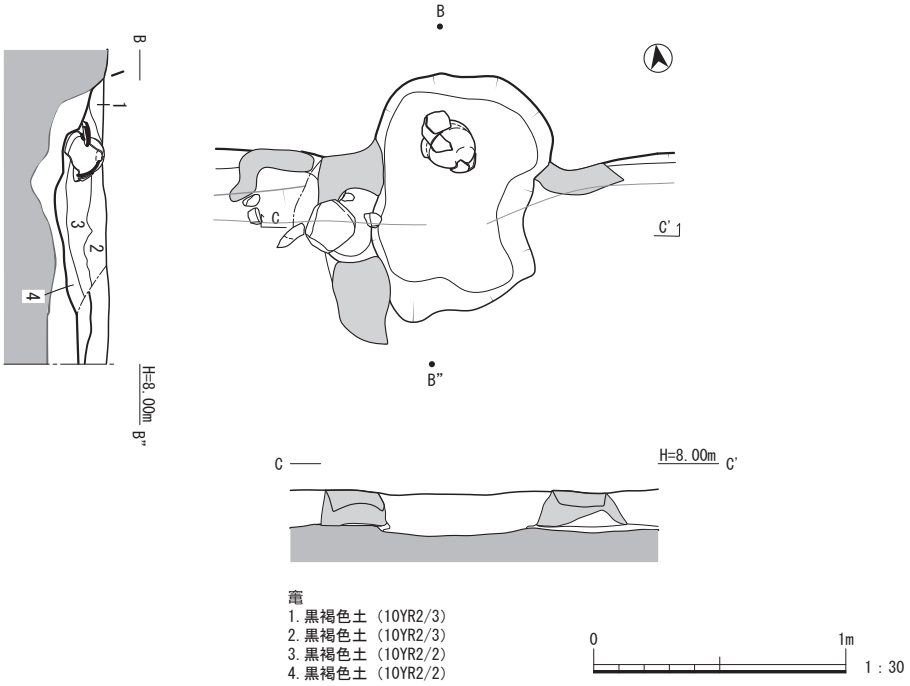


Fig.106　竪穴建物 SI104 実測図

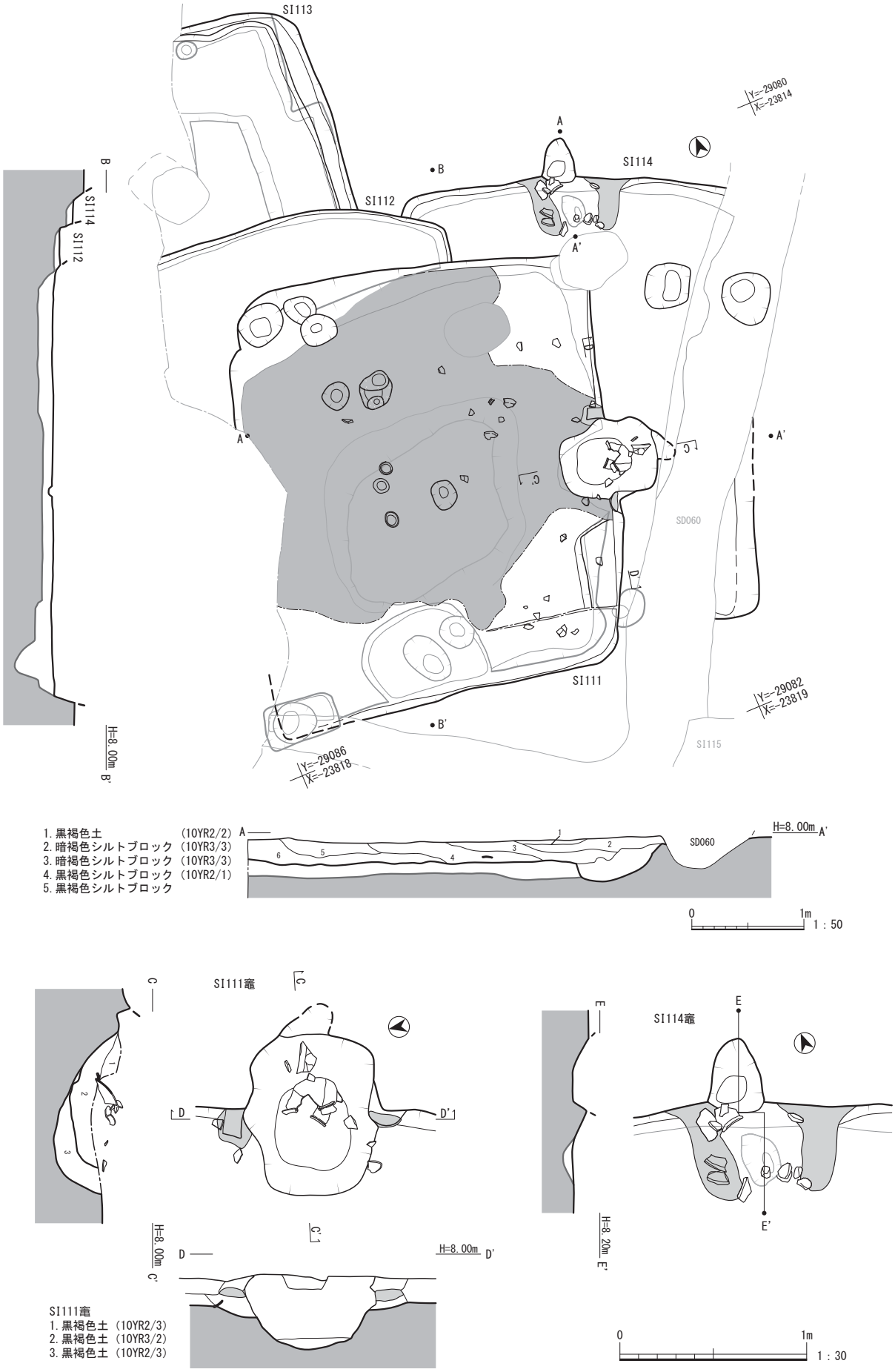


Fig.107　竪穴建物 SI111~SI114 実測図

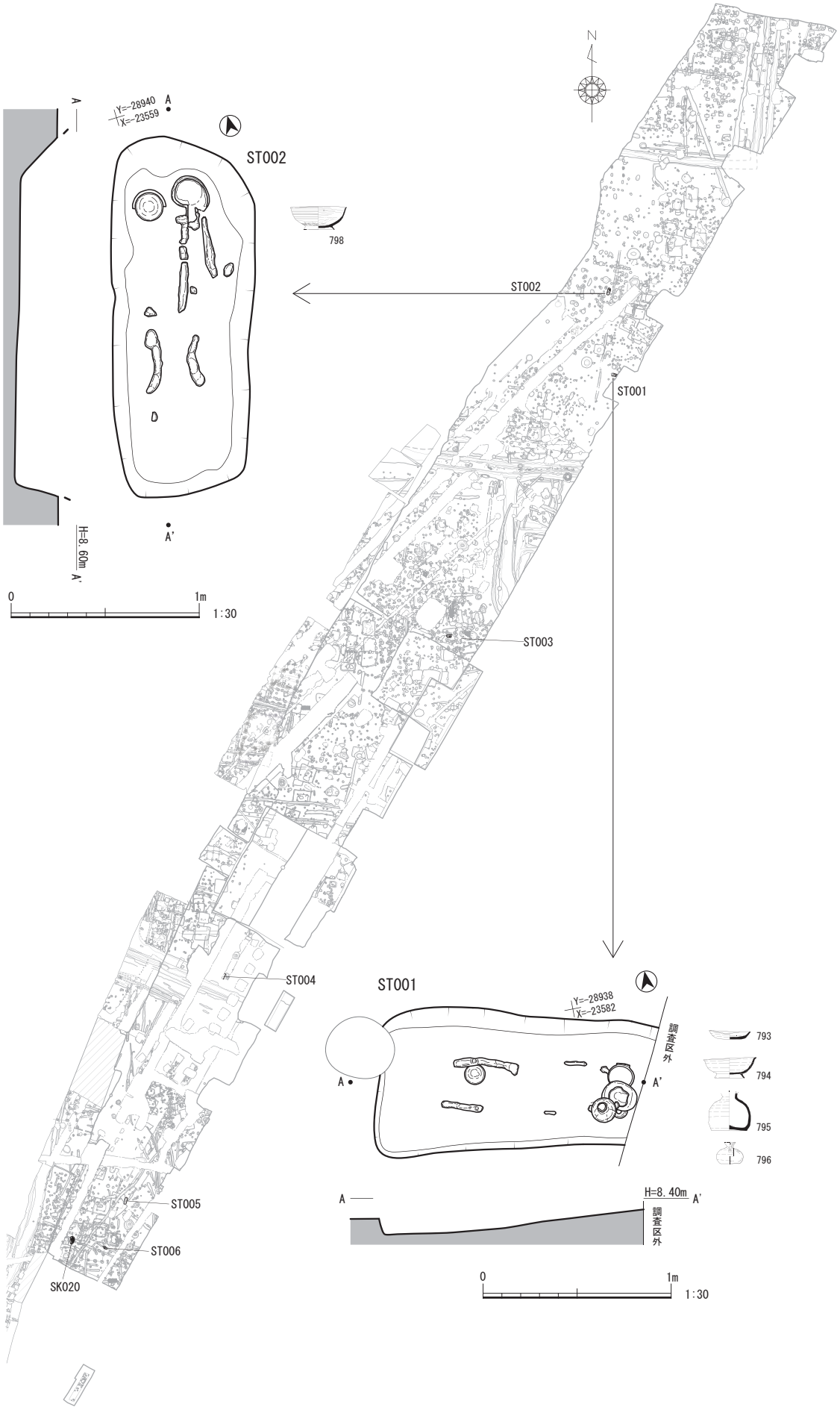


Fig.108　墓 ST001~ST006、土坑 SK020 遺構配置図

墓ST001（Fig.108）全長約1.4m中央付近幅約70㎝で、一部が調査区外に延び検出した土坑墓。遺構の中心に人の大腿骨が見え始めたことから墓と認識した。頭部にあたる部分に供献土器が置かれていた。人骨は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に調査を依頼している。

遺構深度が浅くしか検出できていないため、土層の確認はできていないが人骨と供献土器の置かれている状況から直葬による土坑墓であると見られる。主軸は供献土器が置かれている方向にN-80°-Eを測る。

墓ST002（Fig.108）掘立柱建物SB015から掘立柱建物SB017を検出したなかで検出した土坑墓。全長約1.9m、中心付近の幅約75㎝を測り、頭部付近で掘形がややゆがむ。主軸はN-16°-Eを測る。人骨は残りの状態が悪くスポンジ状になっていた。頭部は北に置き横を向く。上部が削平されているため側頭部が削れた状態である。頭部横には供献土器の研磨土師器が1点置かれた状態で出土している。

墓ST003（Fig.109）竪穴建物SI039の埋没後に掘りこまれた土坑墓。包含層を一部削平した時点で、人骨出土があったことから検出へとつながった。東側が切れているのは、遺構確認作業中に気が付かず掘り下げてしまったため消失してしまったからである。遺構埋土は黒褐色土を主体とし、遺構下端は古代の遺構検出面としている褐色土層中にまで及ぶ。残存部で1.5mを測り、出土している人骨は大腿部付近とされ伸展葬と見られる。このことから当初は墓坑が約1.8m前後はあったものと考えられる。人骨に混じり古代の土器片が数点出土しているが副葬されたものではない。人骨の取り上げ及び実測は、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼して調査・ご指導を頂き、本報告書中で人骨の分析、報告まで頂いている。（人骨に関する詳細は第4章参照）

墓ST005（Fig.110）周辺の竪穴建物を切り検出した墓。長楕円形で両サイドの掘形は垂直に掘り込まれる。検出時に木棺痕跡に注視し調査をおこなったが確認できていない。おそらく、土壙墓である可能性が高い。土層断面の状態からも木棺痕跡を示すものは検出されていない。頭位は北東部に位置することが調査段階で確認することができている。出土遺物は古代後期と見られる土師器杯が墓壙中よりやや南側、遺体安置の状況からは腰の部分に、黒色土器a類で体部が丸みを帯びる椀が頭部東側から出土している。規模は南北約1.9m、東西約60㎝を測り、主軸はN-14°-Eを示している。

墓ST006（Fig.110）遺構の中心を溝SD075が縦断する。残りの遺構埋土中から人骨片が出土している。人骨の残りは悪く、大腿骨は埋葬状態を保っているが、脛骨、上腕骨等は散乱していた。（松下氏所見）

頭位は南東方向におく。規模は、東西（長軸）約1.35m、南北約50㎝を測り、主軸はN-51°-Wを示す。

墓ST007・ST008 本調査において遺構の確認は出来ていないが、自然科学分析資料によれば人骨出土の報告がある。（詳細は第4章参照）

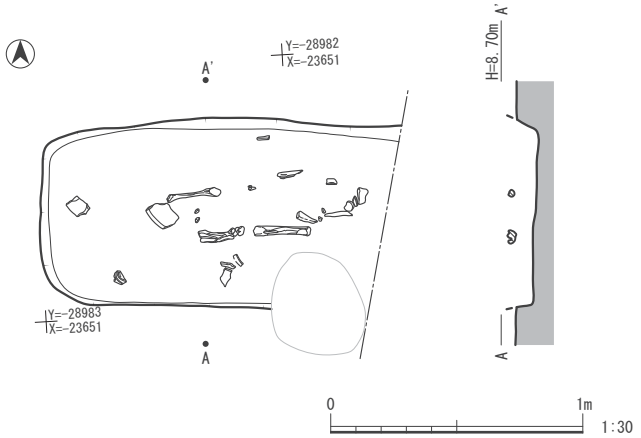
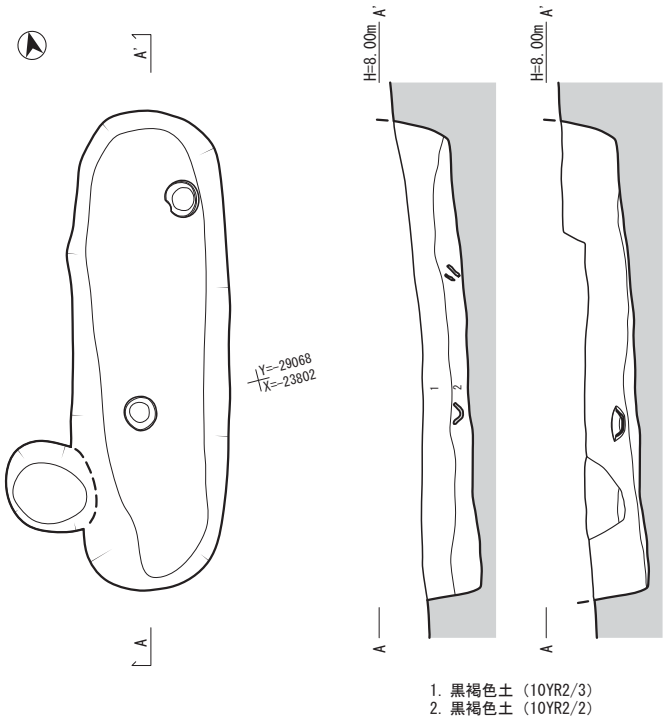


Fig.109　墓ST003実測図



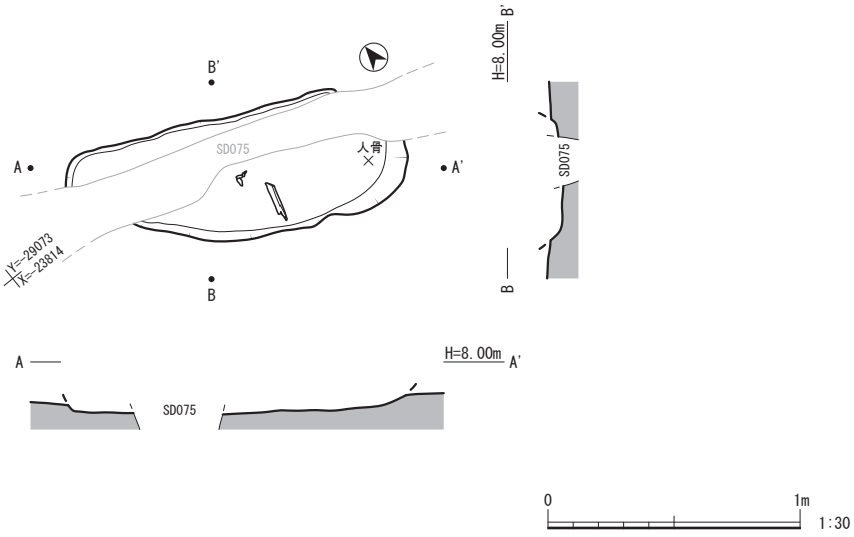


Fig.110　墓 ST005（上）・ST006（下）実測図

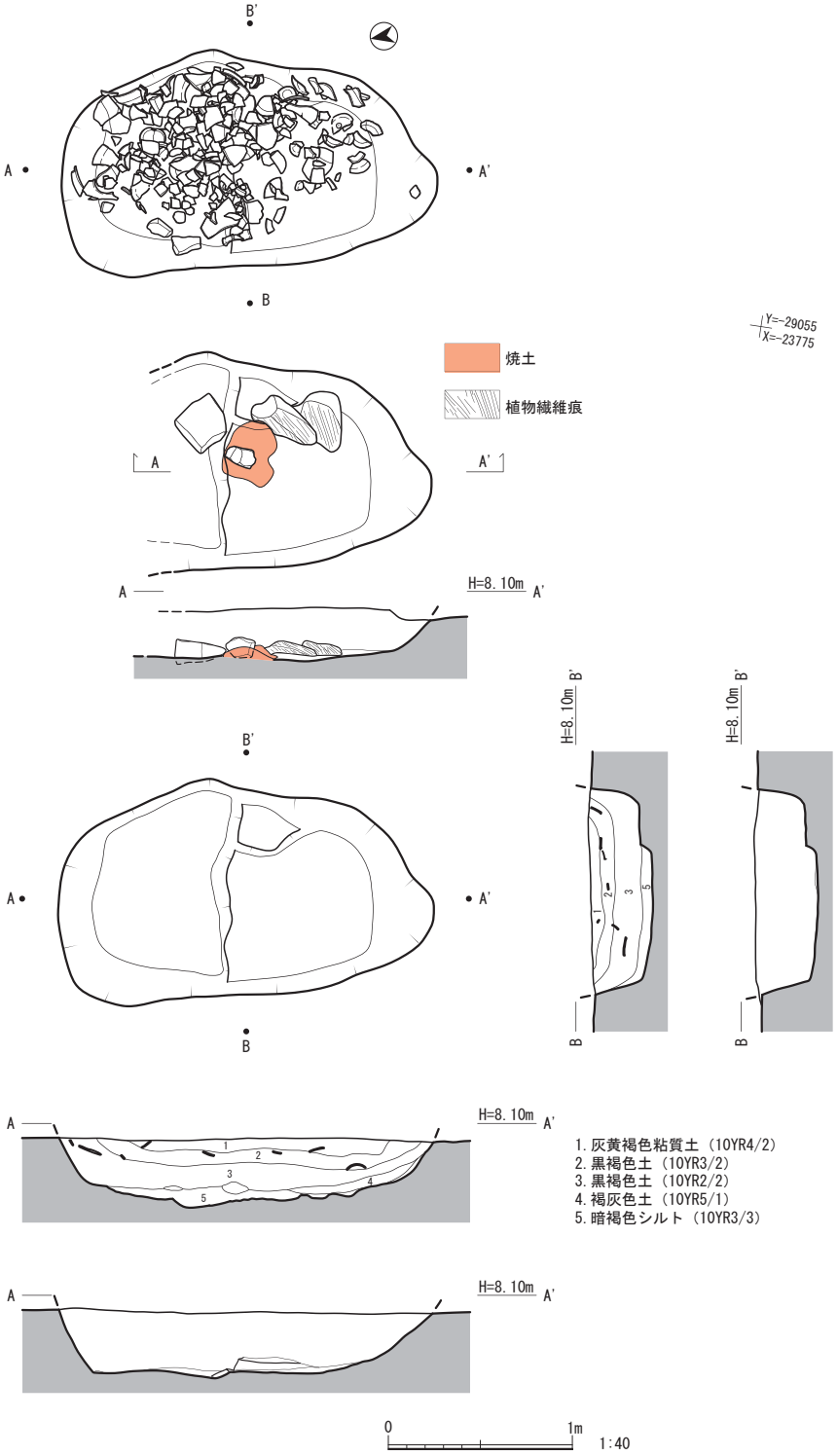


Fig.111　土坑 SK020 実測図

土坑 SK020（Fig.111）竪穴建物群よりも新しく上部から掘り込まれている土坑。南北方向に軸を置き検出している。遺構内には検出時から遺物が多数出土しており基底にまで及んでいる。基底部では焼土が塊をなし、その周囲には植物繊維痕が敷かれた状態で検出された。植物痕跡は筵状に編まれているものかは観察できていない。

防空壕 SX002（Fig.112）調査中に撹乱かと思われるような新しい土がはいった状態で検出されたため、途中まで調査を放棄していた遺構であるが、周辺遺構の精査を繰り返すうちに柱穴も伴ってきたため調査を実施した。長軸約 3.5m、中心付近幅約 1.0m、主軸は N-87° -W を測る。東側から内部に向かい 3 段の階段状に掘り込まれ 3 段目となる下端の規模は 2.3m × 0.9m となり、中心に側壁部と天井部を支える柱が 4 本ある。熊本市内での調査例は多いようである。

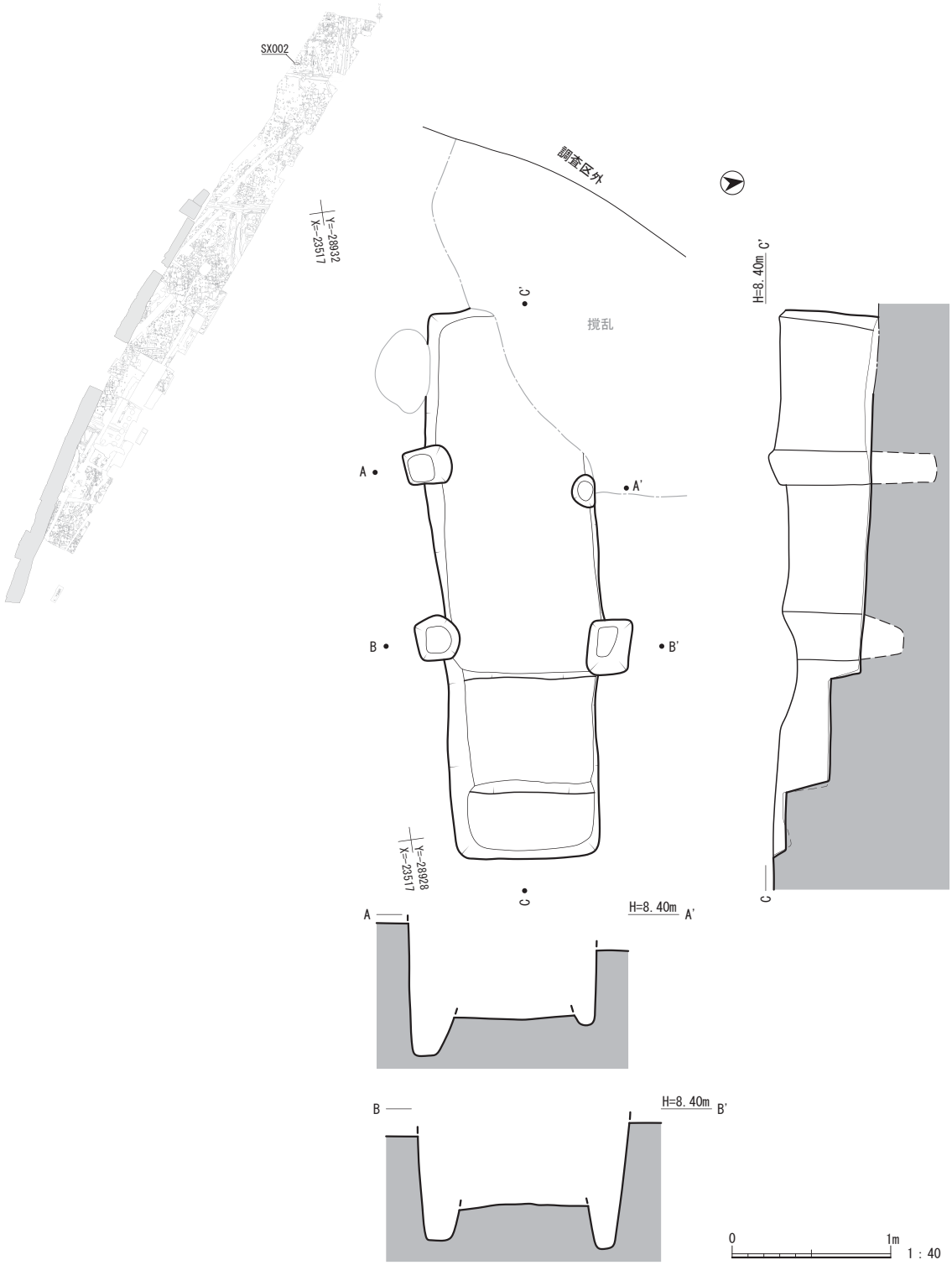


Fig.112　防空壕 SX002 実測図

3　第 14 次調査

調査機関　　熊本県教育委員会
調査期間　　平成 22 年 7 月 20 日～ 8 月 2 日
調査総括　　熊本県教育庁文化課　文化財調査第一係　文化財調査第一係長　村崎孝宏
調査担当者　　〃　　参事　　長谷部善一
整理期間　　平成 23 年度　二本木遺跡群（春日地区）第 6 次調査分と同時に整理を実施
整理担当者　教育庁文化課　参事　　長谷部善一
　　〃　　非常勤職員　稲葉貴子
　　〃　　〃　　唐木ひとみ
調査支援業務　4 級基準点測量及びメッシュ杭設置業務、遺構実測業務　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
※　調査日誌は同録第 6 次調査日誌掲載後に収録

1　調査の概要

平成 23 年 3 月 12 日に全線開業した九州新幹線は熊本駅から新大阪駅間を 2 時間 59 分、熊本駅から博多駅間を 33 分で結ぶなど人的交流、経済的交流を深める機会をもたらした。

今回、鉄道・運輸機構の「非常用電源装置設置に伴う排煙装置」取り付け工事は、当初設置されていた非常用電源容量を大幅に増加させ、安定した新幹線運行を行うために必要な工事内容であった。調査面積は協議した結果、台座の設置面積部として東西 2 m、南北 10 mとした。

この調査依頼を受け、当初予算に含まれていないものであったが、双方協議のうえ整理を受託している予算のなかで契約書を読み替え、調査を実施することとした。調査に係る経費により年度途中に予算が不足した場合は鉄道・運輸機構と２月補正で増額変更契約とすることで合意したことを踏まえ、当初予算のなかで調査に係る費用を積算し、整理費の残額を調査にあてるように県内部で措置した。調査は開業している新幹線本線「新熊本駅」高架下とＪＲ九州熊本駅営業線とに挟まれた場所にあたることから、調査依頼の事前準備として鉄道・運輸機構担当者側でＪＲ九州工事部門と隣接工事協議を実施し、調査スペースの安全を確保したのち双方作業内容を確認の上、ＪＲ営業線隣接工事範囲とはしないこととし調査に着手した。

2　遺構各説

調査は重機を用い表土となる部分を掘削の後、当該調査区周辺での調査事例を参考に進めた。表土とする土層は大半が明治期に熊本駅を新設する際に万日山を掘削し埋めた土で 2 mほど整地された状態で入っていた。調査に着手したレベルは標高約 8 mからで、やや粘質を帯びる黒褐色土層（4 層）からとした。本層は粘質が強く、上層は厚さ質とも非常に安定していた。この層は後に判明するが、この時点では遺物包含層として遺物を取り上げながら掘り下げを急いだ。5 層、6 層に至り出土する遺物の破片も大きくなり安定した状態での出土状態となってきたが、黒褐色土を主体とする埋土が想定されたことで明確に遺構を検出できる状態ではなかったことから、下層にあたる 7 層上層（にぶい黄褐色土）まで下げ遺構検出をおこなった。

遺構検出の結果、柱穴を主体とする遺構を 28 基検出した。しかし、調査面積が狭小であることから掘立柱建物等の遺構に関連する柱穴とは確認できていない。検出面は南に向かいレベル差約 5 ㎝を測り南に傾斜している。

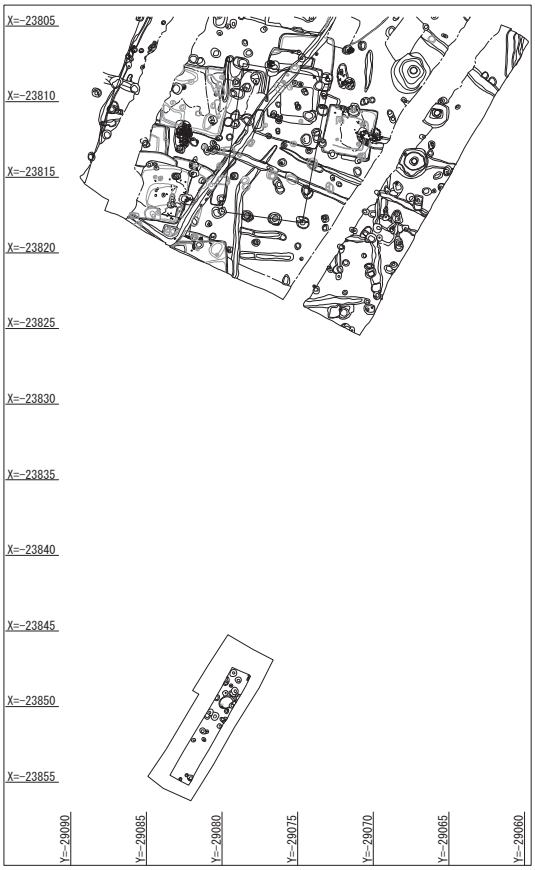
3　出土遺物

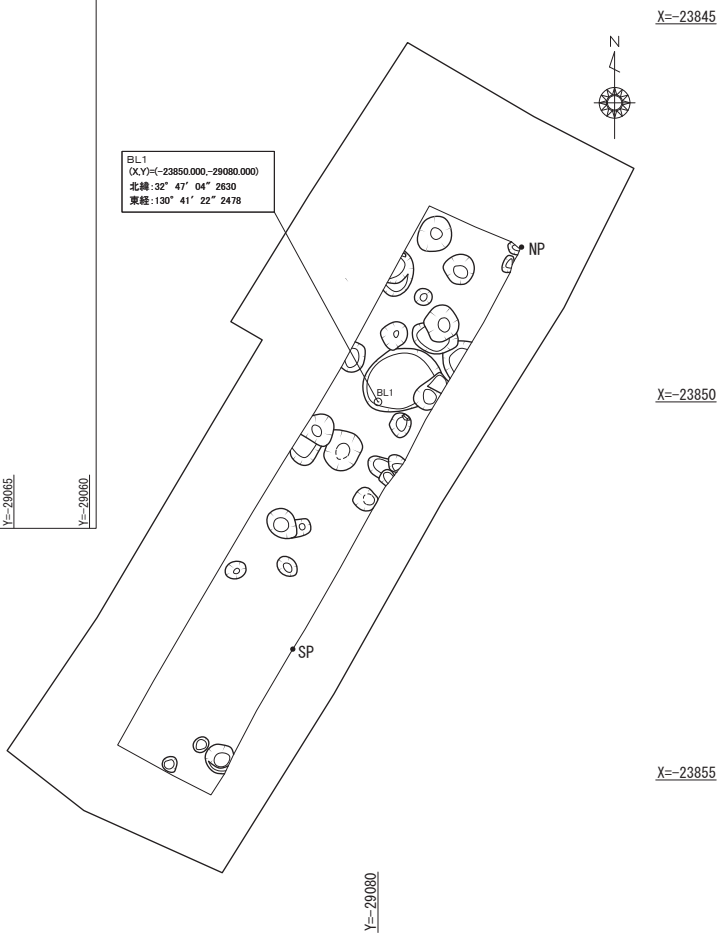
主な出土遺物は 6 層から出土したものである。出土遺物は須恵器蓋、杯、獣脚硯脚部、土師器片を始めとするものであった。図示できるものは少ないことから 3 点のみ実測し掲載している。

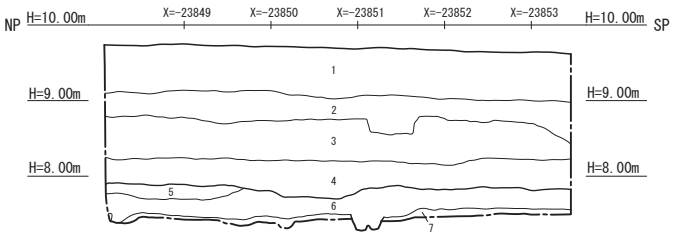
4　まとめ

調査に着手した時点で周辺の調査事例をもとに遺物包含層として扱った 4 層は調査を進めるに従い、単純な遺物包含層ではないと判断するに至った。この付近では土地の傾斜が北側より緩い傾斜をもち始めるにも関わらず遺構密度が変わらないこと、小礫・砂を混土した粘質土を敷き詰めることで安定面を作り出していることから、この層を整地層として捉えると、これまでにない不利な地形上における遺構の広がりも説明することができよう。

調査では遺構検出面を 7 層上面としたが、遺構埋土の状態は 4 ～ 6 層の土が混土していることからもこれを裏付ける事例となっている。南に位置する田崎地区周辺までは沖積地が迫ってきていることから、緩やかな傾斜を続けながらも高い密度の状態で遺構が広がっていることを窺わせる。







1. 現地表、バラスを敷設した整地層
2. 黒色砂質土（10YR1.7/1）
3. 風化安山岩で構成された万日山を削り出した土砂を敷設した層
4. 黒褐色土（10YR3/2）φ数mmの子礫、岩化物と橙色粒を含む
5. 黒褐色土（10YR2/3）φ数mmの子礫を含む
6. 黒褐色土（10YR2/2）φ数mmの橙色・白色粒、子礫・炭化物粘土塊を含む
7. にぶい黄褐色土（10YR4/3）φ数mmの子礫を含む

Fig.113　二本木遺跡群第 14 次調査区遺構・土層実測図

コラム３　旧熊本駅出土の遺物

酒瓶

上段　「鳥井酒店」、下段「徳永酒店」銘入り酒瓶。近世遺跡を調査するとさまざまな店名入りの酒瓶が出土します。口縁口唇部の肥厚状態・形状の違い、高台調整等の違いから別の窯元へ各酒店から発注されたようです。記されている数字は「辰」「申」などの年号を表す文字とともに、顧客へ貸し出した番号であると考えられます。

第４章　自然科学分析調査報告

二本木遺跡群（春日地区第６次調査）出土の古代人骨
はじめに
所見
Ⅰ．人骨の埋葬姿勢と形質
Ⅱ．井戸跡から出土した人骨について
要約

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

二本木遺跡群（春日地区第６次調査）における自然科学分析
動物遺存体同定
土器付着物の蛍光Ｘ線分析

株式会社　古環境研究所

熊本市二本木遺跡群（春日地区第６次調査）出土の古代人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、古代人骨、平安時代、井戸跡、カラベリー結節、臼旁結節

はじめに

熊本市春日三丁目に所在する二本木遺跡群（春日地区第６次調査）の発掘調査が新幹線建設工事に伴っておこなわれたが、2005 年（平成 17 年）度と 2006 年（平成 18 年）度の発掘調査で、合計 11 体の人骨が出土した。２体は井戸跡（SE033）から、１体は溝から（SD067）、残りの８体は墓坑から出土した。この 11 体の人骨は後述しているとおり、古代（平安時代）に属する人骨であるが、古代人骨の出土は全国的に少なく、本例は貴重な資料である。

新幹線工事と熊本駅周辺整備事業に伴う発掘調査によって、二本木遺跡群から古代に属する古人骨の出土例が増加している。

03 年（平成 15 年）度に熊本市教育委員会が調査をおこなった二本木遺跡群の第 18 次調査区から古代に属する人骨が１体出土した（松下、2005）。この人骨は溝から出土した四肢骨の骨片にすぎなかった。06 年（平成 18 年）度におこなわれた第 28 次調査においても古代末の人骨が２体が出土したが、これは大腿骨片と歯のみであった（松下・他、2008）。熊本県教育委員会が実施した 08 年（平成 20 年）度の合同庁舎跡における発掘調査では 10 世紀後半の人骨が出土している。また、08 年度の二本木遺跡群（さつま荘跡）における発掘調査でも 10 世紀代の人骨が検出されているが、この人骨は古代人骨としては珍しく保存状態が良好で、特筆すべきは、この男性被葬者の推定身長が 164.97cm（Pearson 式）の高身長であること、大腿骨には縄文前期人なみの柱状性（骨体中央断面示数 125.93〔右〕、145.83〔左〕）が認められたことである。古代人骨の保存状態は一般的に悪いものが多く、形質所見を明らかにすることができるものはきわめて少ないので、このような特徴が古代人の時代的特徴であるのかはまだ明確ではない。

08 年度におこなわれた二本木遺跡群第 40 次調査区 F 地点からは、頭を甕に入れ、おそらくは両足も左右別々に甕に入れていたものと推測される、10 世紀末～ 11 世紀に属する人骨が出土している。また、同じ年に二本木遺跡群第 41 次調査区からは 11 世紀頃の古代末に属する人骨が１体出土している。この人骨は長頭型であり、低顔で、歯槽性突顎を示す男性骨であった。

09 年度におこなわれた二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区の発掘調査では、１区から古代と中世に属する人骨が合計４体、３区からは古代に属する人骨が１体出土しており、10 年度には二本木遺跡群春日地区第 13 次調査区４区から古代の人骨が１体出土した。また、09 年度におこなわれた二本木遺跡群第 50 次調査区でも古代人骨２体が出土している（松下・他、2011）。

その他に、2005 年（平成 17 年）度には、大江遺跡群第 97 次調査区から９世紀後半の男性人骨（松下、2007b）が、古町遺跡第５次調査区では 10 世紀初頭に属する男性人骨が多くの副葬品（土師器など）を伴って出土したが、ともに保存状態は著しく悪いものであった（2007）。

09 年度におこなわれた新屋敷遺跡からも８世紀から９世紀にかけての人骨が１体出土している。

* Masami MATSUSHITA、** Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

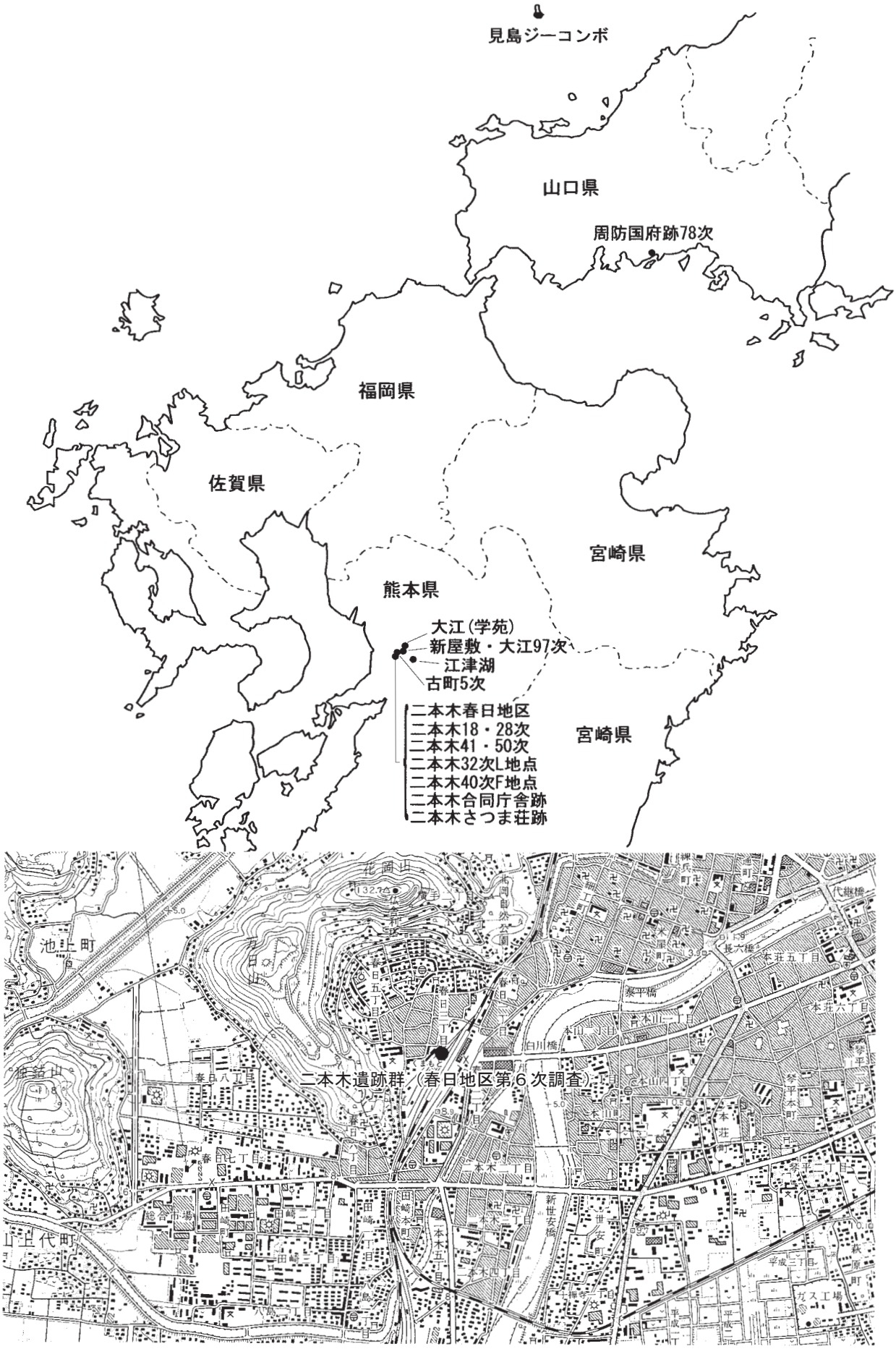


図１　遺跡の位置（1/25,000）

(Fig.1 Location of place of sixth excavantion, the Kasuga area of the Nihongi sites, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

この古代人骨は、超短頭型で、大腿骨には強い柱状性が、脛骨には扁平性が認められ、高身長であるという注目すべき特徴が認められた。また、大江（学苑）遺跡群（松下、2006）と江津湖遺跡群では平安時代の火葬骨が出土している。

今回出土した 11 体の人骨の保存状態はかならずしも良好なものではないが、現場でできる限りの観察をおこない、計測や観察に耐えられた人骨については、人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資　料

表１　資料数（Table 1. Number of materials）

成　人			幼小児	合　計
男性	女性	不明		
5	1	3	2	1 1

2005 年度と 2006 年度の発掘調査で検出された人骨は表１に示すとおり、合計 11 体である。各人骨の性別・年齢は表２に示した。これらの人骨は考古学所見から９世紀～ 11 世紀の平安時代（古代）に属する人骨と推定されている。

計測方法は、Martin-Saller（1957）によった。年齢区分は表３のとおりである。

表２　出土人骨一覧（Table 2.　List of skeletons）

人骨番号		性別	年齢	時　　代	頭位	埋葬姿勢
ST001		男性	熟年	平安（11 世紀）	東	仰臥
ST002		男性	不明	平安（11 世紀）	北東	仰臥
ST003		女性	不明	平安（9~10 世紀）		不明
ST004		不明	不明	平安（9~10 世紀）		不明
ST005		不明	不明	平安（9 世紀後半）	北東	不明
ST006		男性	不明	平安（9 世紀後半）	北東	不明
ST007		不明	不明	平安（9 世紀後半）		不明
ST008		－	幼児	平安（9 世紀後半）		仰臥
SD167		男性	不明	平安（9 世紀後半）		不明
SE033	No.1	男性	壮年	平安（12 世紀）		井戸跡中
SE033	No.2	－	小児	平安（12 世紀）		井戸跡中

表３　出

年齢区分		年　　齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～ 15 歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳（40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳（60 歳未満）
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

Ⅰ　人骨の埋葬姿勢と形質

ST001（男性・熟年）

埋葬遺構は木棺と考えられている。埋葬姿勢は仰臥。頭位は東。肘関節の状態は前腕の骨が残っていなかったので、不明である。また、膝関節も脛骨が残存していなかったので、不明である。従って姿勢と膝関節の状態からは仰臥伸展葬であろう。

残存していたのは頭蓋、下顎骨の一部、左右の上腕骨、左右の大腿骨であるが、左側の上腕骨は少量の骨粉状態であった。ラムダ縫合の観察ができたが、内板は癒合し、外板は縫合が明瞭である。大腿骨体は大きく、骨体横径を現場で計測したところ、右側は約 32mm、左側は約 30mm あった。

性別は、大腿骨体の径が大きいことから、男性と推定した。年齢はラムダ縫合の癒合状態から熟年と思われる。

副葬品は須恵器、緑釉陶器、土師器が頭蓋の両側から検出され、土師皿の一部が右側大腿骨体の下になるような状態で土師皿が 1 枚検出された。その他に鉄製の紡錘車が 1 点、頭蓋近くで出土した。

ST002（男性・年齢不明）

埋葬遺構は木棺と考えられている。埋葬姿勢は仰臥。頭位北東。肘関節の状態は前腕の骨が残っていなかったので、不明である。膝関節は両側とも伸展状態だったと考えられる。残存していたのは、頭蓋、下顎骨、左側上腕骨、左右の大腿骨、右側の脛骨である。左側上腕骨はほとんど骨粉状態で、右側脛骨は骨体のごく一部のみである。下顎には歯が釘植しており、左側の第一、第二大臼歯の咬耗はかなり強い。大腿骨体の径は大きく、右側大腿骨の横径は 31mm であった。

性別は、大腿骨体の径が大きいことから、男性と推定した。

墓坑は大きく、長径は約 190cm、短径は約 72cm である。

頭蓋の下には小さな窪みが存在し、中から銅製品と骨片が検出された。骨片は頭蓋の一部ではなく、指骨か中手骨の一部と思われ、銅製品に接してた部分は緑色に変色していた。頭蓋の下から銅製品や四肢骨片が検出された例を、寡聞にしていまだ知らない。

ST003（女性・年齢不明）

現場で実見していない。実測図をみても埋葬姿勢を明らかにすることができない。残存していたのは左側大腿骨体と左右不明の前腕の骨の一部にすぎない。大腿骨体は形を残しているが、計測できない。観察によれば、径は小さく、粗線の発達はみられない。

大腿骨体の径が小さいことから、性別を女性と推定した。年齢は不明である。

ST004（性別・年齢不明）

本例も現場で実見していない。実測図をみても埋葬姿勢を明らかにすることができない。残存していたのは、頭蓋、左右不明の大腿骨、左側尺骨である。頭蓋は左側側頭骨の観察ができた。乳様突起は小さく、外耳道には骨腫は認められない。粗線の様態は不明である。残存量が少ないので、性別を明らかにできない。年齢も不明である。

ST005（性別・年齢不明）

埋葬遺構は土壙墓。残存していたのは頭蓋と遊離歯のみ。頭位は北東。歯は頭蓋の南西側で検出さ

れた。四肢骨が残存していないので、埋葬姿勢は不明である。肘関節と膝関節の様態も不明であるが、墓坑の長さが約 190cm もあることから、おそらく膝関節は伸展状態だったと思われる。黒色土器の碗が 1 個とやや大きい土師器が 1 個副葬されていた。前者は頭蓋の北東部に、後者は下半身の位置から検出された。

残存していた遊離歯冠の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 ／ ／ 5 4 ／ 2 1	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。また、歯冠サイズは小さい。性別、年齢は不明である。

ST006 人骨（男性・年齢不明）

埋葬遺構は土壙であろう。左右の大腿骨体、左右不明の脛骨と上腕骨体および腓骨体を現場で確認した。大腿骨は埋葬状態を保っていたが、脛骨、上腕骨などは散乱状態で出土した。頭位は北東と思われる。埋葬姿勢は仰臥と思われるが、肘関節と膝関節の様態は不明である。大腿骨体の径はやや大きい。このことから、性別を男性と推定した。

本人骨は後述している ST008 と隣接して検出された。本来 ST008 の人骨があるべき位置から本被葬者の上腕骨が検出されたことから、この 2 体は埋葬された後に両者が一緒に攪乱を受けたものと思われる。

ST007 人骨（性別・年齢不明）

埋葬遺構は土壙であろう。残存していたのは遊離歯冠 1 個と下顎骨体の一部で、保存状態はかなり悪い。埋葬姿勢は不明である。残存していた歯冠は上顎左側第一大臼歯の歯冠である。咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱いことから、未成人の可能性もある。性別、年齢は不明である。

ST008 人骨（幼児）

ST006 人骨の東に隣接して出土した。埋葬遺構は土壙であろう。検出されたのは左側の肋骨の一部のみであるが、埋葬状態を保った状態で検出された。埋葬姿勢は仰臥であるが、肘関節と膝関節の様態は不明である。肋骨の大きさから被葬者は幼児である。

SD067 人骨（男性・性別不明）

この人骨は ST005 の北東にあり、この土壙墓に隣接している溝から検出された。人骨はこの溝が埋まった後に墓坑が作られたようである。埋葬遺構は土壙であろう。残存していたのは左右不明の大腿骨体の一部に過ぎないが、その径はやや大きい。おそらく頭は北東にあったものと思われる。埋葬姿勢は不明である。性別は大腿骨体の径がやや大きいことから、男性と推定した。

SE033　No.1（男性・壮年）

井戸跡（SE033）から 2 体の頭蓋が検出された。そのうちの 1 体である。

１．頭蓋

残存していたのは図２に示すとおり、主に脳頭蓋である。眉間の隆起はやや強く、前頭結節の発達や前頭鱗の膨隆はみられない。外後頭隆起はやや突出している。乳様突起は小さい。両側の外耳道の観察ができたが、骨腫は存在しない。三主縫合の観察ができたが、これらは内外両板はともに開離している。計測はほとんどできないが、脳頭蓋の径は小さい。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が 172mm、頭蓋最大幅は 129mm で、頭蓋長幅示数は 75.00 となり、頭型は長頭に近い中頭型である。頭蓋水平周は計測できないが、脳頭蓋の径は小さい。

２．歯

上顎骨には一部歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

８ ７ ６ ５ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ５ ６ ７ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。なお、歯の径はやや大きい。

３．性別・年齢

眉間の隆起が強いこと、外後頭隆起も発達していること、脳頭蓋の径は小さいものの歯の径が大きいことなどから、性別を男性と推定した。年齢は三主縫合が内外両板とも開離していることから壮年と思われる。

SE033　No.2（小児）

頭蓋冠と下顎骨が残存していたが、その他に第一および第二頸椎の一部も残存していた。頭蓋壁はかなり薄い。三主縫合の観察ができたが、ともに内外両板は開離している。前頭鱗は丸い。左側外耳道が観察できたが、骨腫はみられない。下顎体の高径は低い。

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

８ ７ ６ ５ ／ ／ ２ ／	／ ／ ／ ／ ５ ／ ７ ／
／ ７ ６ ／ ／ ３ ／ ／	／ ２ ／ ４ ５ ６ ／ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

なお、上顎右側大臼歯にはカラベリー結節が、上顎左側第一大臼歯には臼旁結節が認められる。

咬耗度は Broca の１度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。根尖孔がまだ開存しており、歯根尖の形成状態は本例がまだ未成人であることを物語っている。歯根形成状態から、本例は 15 歳程度の小児と推測される。

Ⅱ　井戸跡から出土した人骨について

二本木遺跡群ではこれまでに井戸跡から人骨が検出されている。１例目は二本木遺跡群第 27 次調査区（2006 年調査）から１個の中世人頭蓋が検出された（松下、2007）。２例目は 2006 年に出土した本例（古代）である。３例目は二本木遺跡群合同庁舎跡（2006 年調査）から出土した１個の中世人頭蓋で、４例目は二本木遺跡群第 35 次調査区（2008 年調査）から井戸跡の埋土から２個の中世人頭蓋が出土した。５例目は二本木遺跡群第 47 次調査区Ｈ地点（2009 年調査）で検出された保存不良の中世人頭蓋（１個）である。本例以外はいずれも中世人骨で、古代の例は本例のみである。

現場で出土状況を実見していないので、詳細は不明である。検出されたのは２個の頭蓋である。２個とも保存状態が決していい方ではないので、殺傷痕などの有無を確認することができない。ただ、

No.2（小児）は頭蓋の他に、第一、第二頸椎の歯突起部（第一頸椎は歯突起窩、第二頸椎は歯突起）が残存していた。この上部頸椎の一部が頭蓋とともに検出されたということは、完全に骨になった状態の時にこの井戸跡に持ち込まれたのではなく、まだ軟部組織（筋、靭帯、結合組織）が残存しており、頭蓋には上部頸椎が付いた状態の時に持ち込まれたことを物語っている。井戸跡から出土する頭蓋の例数が増加していることから、偶然に井戸跡に頭蓋が入り込んだ可能性は低くなり、意図的に頭部だけをこの井戸跡に収めたようである。二本木界隈には当時埋葬されないで放置された死体があった光景を思い描く必要があるのかもしれない。

要　約

熊本市春日三丁目に所在する二本木遺跡群（春日地区第６次調査）の発掘調査で平安時代の人骨が出土した。人骨の保存状態はあまりよくはなかったが、人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

１．2005 年（平成 17 年）度と 2006 年（平成 18 年）度の発掘調査で、合計 11 体（男：５、女：１、不明：３、幼小児：２）の人骨が出土した。この人骨は９世紀～ 11 世紀の平安時代（古代）に属する人骨と推測されている。

２．11体のうち２体は井戸跡から検出された。

３．頭蓋の保存状態は悪く、頭形も顔面の形態も明らかにはできなかったが、男性１例についてが脳頭蓋の計測が可能で、頭蓋最大長 172mm、頭蓋最大幅 129mm、頭蓋長幅示数は 75.00 となり、頭型は長頭に近い中頭型である。

４．１例（SE033 No.2）にカラベリー結節、臼旁結節がみられた。

５．井戸跡から２個の頭蓋（男性、小児）が検出された。出土状況の詳細は不明であるが、保存状態は悪く、受傷痕などは確認できない。１個の頭蓋には下顎骨と第一、第二頸椎の一部が伴っていることから、まだ軟部組織が残っている状態で井戸跡に持ち込まれている。二本木界隈の当時の死体処理の一端がうかがえる。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会の皆様に感謝致します。

≪参考文献≫

1. Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag，Stuttugart：429-597.
2. 松下孝幸・他、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋　蔵文化財調査報告 73）：32-36.
3. 松下孝幸、1985：山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学　構内遺跡調査研究年報Ⅳ：83-90.
4. 松下孝幸、2005：熊本市二本木遺跡群第 18 次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群Ⅰ－第 18 次調査区発掘　調査報告書－：41-46.
5. 松下孝幸、2006：熊本市大江（学苑）遺跡群出土の平安時代火葬骨。大江遺跡群Ⅱ（熊本県文化財調査報告第 231　　集）：80-84.
6. 松下孝幸、2007a：熊本市古町遺跡第５次調査区出土の平安時代人骨。熊本市埋蔵文化財調査年報第９号：148-152.
7. 松下孝幸、2007b：熊本市大江遺跡群第 97 次調査区出土の平安時代人骨。大江遺跡群Ⅵ（－第 97 次・

第 106 次調　査区発掘報告書－）：114-117.
8. 松下孝幸・他、2008：熊本市二本木遺跡群第 28 次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群Ⅴ〔二本木　遺跡群第 28 次調査区（E~I・K・L・P 地点）発掘調査報告書〕〔熊本駅西土地区画整理事業にともなう発掘調査報告（２）〕　：178-183.
9. 松下孝幸・他、2011：熊本市二本木遺跡群第 41 次調査区出土の古代人骨。二本木遺跡群ⅩⅡ－二本木遺跡群第 41　次調査区発掘調査報告書－：127-135.
10. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群 41 次調査区出土の古代人骨。（投稿中）
11. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎）出土の古代・中世人骨。（投稿中）
12. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群 40 次調査区Ｆ地点出土の古代・中世人骨。（投稿中）
13. 松下孝幸・他、熊本市新屋敷遺跡出土の古代人骨。（投稿中）
14. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区出土の古代・中世人骨。（投稿中）
15. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区３区出土の古代人骨。（投稿中）
16. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 13 次調査区４区出土の古代人骨。（投稿中）
17. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎２区）出土の古代・中世人骨。（投稿中）

表４　脳頭蓋(mm)(Calvaria)

		二本木春日6次 SE042-No.1 男性
1.	頭蓋最大長	172
8.	頭蓋最大幅	129
17.	バジオン・ブレグマ高	−
8/1	頭蓋長幅示数	75.00
17/1	頭蓋長高示数	−
17/8	頭蓋幅高示数	−
1+8+17/3	頭蓋モズルス	−
5.	頭蓋底長	−
9.	最小前頭幅	−
10.	最大前頭幅	−
11.	両耳幅	113
12.	最大後頭幅	103
13.	乳突幅	−
7.	大後頭孔長	−
16.	大後頭孔幅	−
16/7	大後頭示数	−
23.	頭蓋水平周	−
24.	横弧長	305
25.	正中矢状弧長	355
26.	正中矢状前頭弧長	119
27.	正中矢状頭頂弧長	132
28.	正中矢状後頭弧長	104
29.	正中矢状前頭弦長	105
30.	正中矢状頭頂弦長	116
31.	正中矢状後頭弦長	89
29/26	矢状前頭示数	88.24
30/27	矢状頭頂示数	87.88
31/28	矢状後頭示数	85.58

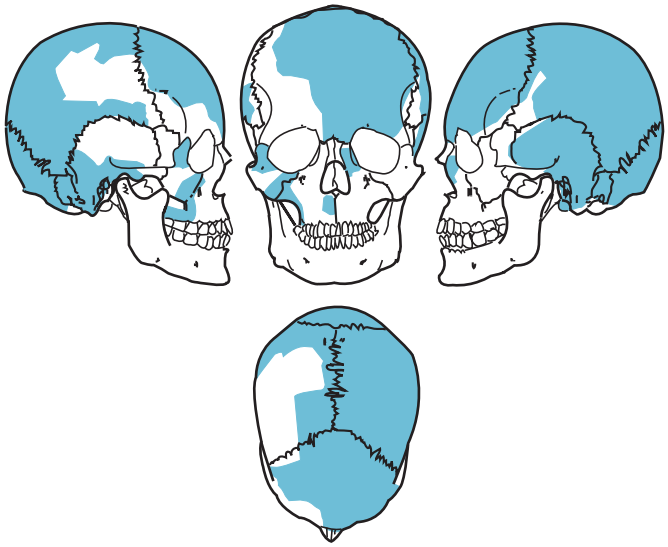
表５　下顎骨(mm、度)(Mandibula)

		二本木春日6次 SE042-No.2 女性
65	下顎関節突起幅	−
65(1).	下顎筋突起幅	−
66	下顎角幅	−
67	前下顎幅	−
68	下顎長	−
68(1).	下顎長	−
69	オトガイ高	−
69(1).	下顎体高(右)	−
	(左)	27
69(2).	下顎体高(右)	−
	(左)	23
70	枝高(右)	−
	(左)	−
70(1).	前枝高(右)	−
	(左)	−
70(2).	最小枝高(右)	−
	(左)	−
70(3).	下顎切痕高(右)	−
	(左)	−
71(1).	下顎切痕幅(右)	−
	(左)	−
71	枝幅(右)	−
	(左)	−
71a.	最小枝幅(右)	−
	(左)	−
79	下顎枝角(右)	−
	(左)	−
66/65	下顎幅示数	−
68/65	幅長示数	−
68(1)/65	幅長示数(右)	−
69(2)/69	下顎高示数(右)	−
	(左)	−
71/70	下顎枝示数(右)	−
	(左)	−
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	−
	(左)	−
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	−
	(左)	−

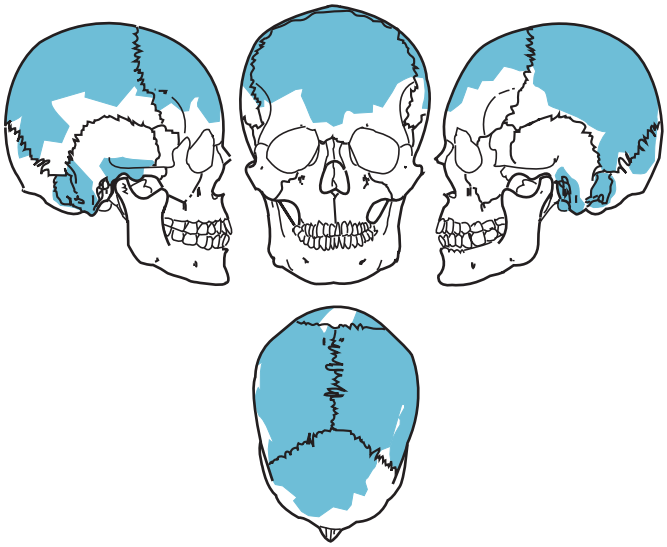
表６　形態小変異(Non-metoric crania variants)

		二本木春日6次 SE042-No.1 男性		二本木春日6次 SE042-No.2 女性	
		右	左	右	左
1.	Medial palatine canal(内側口蓋管)	/	/	/	/
2.	Pterygospinous foramen(翼棘孔)	/	/	/	/
3.	Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	/	/	/	/
4.	Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	/	/	/	/
5.	Condylar canal absent(顆間欠如)	/	/	/	/
6.	Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(＞1㎜)(フシュケ孔、鼓室骨裂孔)	−	−	/	−
7.	Jugular foramen bridging	/	/	/	/
8.	Precondylar tubercle	/	/	/	/
9.	Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	/	−	/	/
10.	Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	/	/	/	/
11.	Zygo-facial foramen absent	/	/	/	/
12.	Aural exostosis(外耳道骨腫)	−	−	/	−
13.	Metopism(前頭縫合)	−		−	
14.	Os incae(インカ骨)	−		/	
15.	Ossicle at the lambda(ラムダ小骨)	−		/	
16.	Parietal notch bone(頭頂切痕骨)	−	−	/	/
17.	Transverse zygomatic suture(＞5㎜)	/	/	/	/
18.	Asterionic ossicle	−	−	/	/
19.	Occipitomastoid ossicle	/	−	/	/
20.	Epipteric ossicle	/	−	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/	/	/
22.	Biasterionic suture(＞10㎜)	/	/	/	/
23.	Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	/	/	/
24.	Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	/	/	/	−
25.	Mandibular torus(下顎隆起)	/	/	/	−
26.	滑車上孔(上腕骨)	/	/	/	/

〔 present :＋ , absent : − , unobservale : / 〕



二本木遺跡群（春日地区第6次調査）SE033 NO.1(男性・壮年)



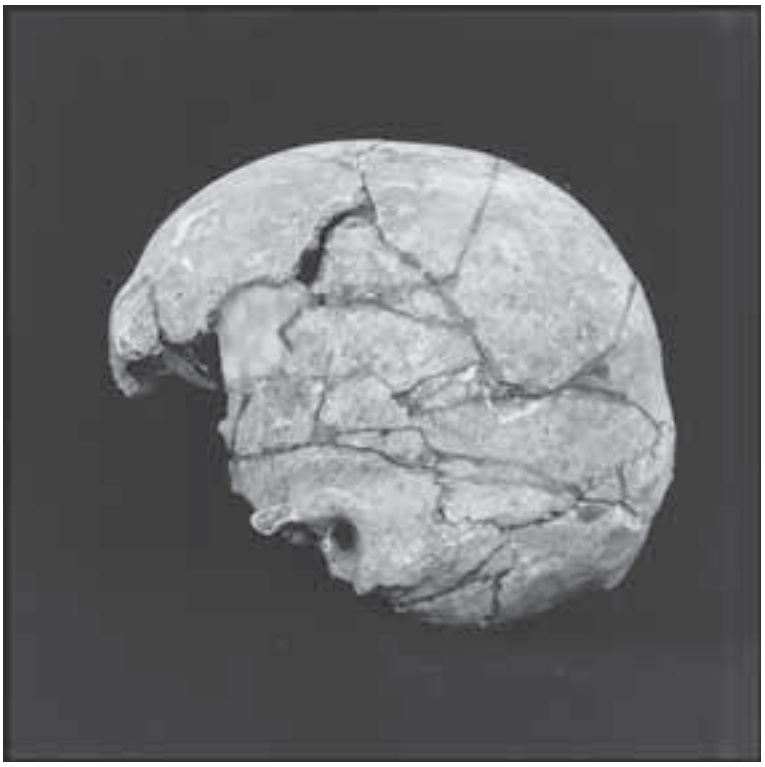
二本木遺跡群（春日地区第6次調査）SE033 NO.2(小児)

図２　人骨の残存図(アミかけ部分)

(Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

頭蓋上面 (Superior view of the skull)

頭蓋正面 (Frontal view of the skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)
二本木 SE033 No.1 (男性・壮年)
(The Nihongi SE-42 No.1, mature young adult mele)

頭蓋側面（Lateral view of the skull）
二本木 SE033 No.1（男性・壮年）
（The Nihongi SE-42 No.1, mature young adult mele）

熊本県教育庁文化課：二本木遺跡群（春日地区）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．二本木遺跡群（春日地区）における動物遺存体同定

１．はじめに

日本列島は一般的に火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態に恵まれない。そのため遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的であるが、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されつつある。二本木遺跡群の動物遺存体も、湿地環境にある遺構などから出土しており、保存状態に恵まれたものと考えられる。

２．試料

試料は、SE011（９世紀初頭）、SI044 内 SP904（９世紀初頭）、SE005（９世紀）、SE009（10 ～ 11 世紀）、SD100（15 ～ 16 世紀）、SF001（15 ～ 16 世紀）から出土した計 538 点（破片を含む）の動物遺存体である（表１、表２）。

３．方法

試料を肉眼で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を対比して同定を行った。

４．結果

動物遺存体の同定結果を表１に示し、主要な分類群の写真を示す。動物の種類や部位が同定できたのは、ウマ 46 点、ウシ 15 点、ウシとウマの判別ができないもの 20 点、ニホンジカ６点、イノシシあるいはブタ４点の計 91 点である。なお、破片数の算定は、接合しないものでも同一の骨とわかるものは１点とし、遊離歯のうち同一個体のものは１点と数えた。

哺乳綱　Mammalia
　奇蹄目　Perissodactyla
　　ウマ科　Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　*Bos taurus*
　　シカ科　Cervidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*
　　イノシシ科　Suidae
　　イノシシ / ブタ　*Sus scrofa*

５．種類別の特徴

（１）ウマ

９世紀初頭の井戸 SE011 から１個体分のほぼ全身の骨格部位が出土している。下顎骨は小片となったものが１点、椎骨２点、肋骨２点が出土している。肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、第３中手骨、寛骨、大腿骨、膝蓋骨、脛骨、中足骨、距骨は左右一対が、踵骨は右側だけが出土している。なお、右の第３中手骨は第４中手骨が癒合した状態で出土している。このほか前肢と後肢の判別できない指骨が９点出土しており、その内訳は基節骨（左２、右１）３点、中節骨（左右不明３）３点、末節骨（左右不明３）３点である。また、手根骨、足根骨では、中間手根骨（左１）、第３手根骨（左１、右１）、中心足根骨（左１）が出土している。さらに、顎骨から遊離した状態の上顎切歯（右 1）、上顎臼歯（左６右 6）、下顎切歯（右１）、下顎臼歯（左５、右６）、上下左右の分からない切歯が１点、計 26 点が出土している（表４）。

西中川編（1991）による年齢推定式によると、臼歯の計測結果からこのウマは８～ 14 歳の壮齢の個体と考えられる。犬歯は出土しておらず、雌雄は不明である。最も保存状態が良い脛骨（左）は最大長 329.6mm であり、林田・山内（1957）の体高推定式を用いると、体高 129cm という値が得られ、日本に在来の御崎馬（体高 130cm 程度）などの中型馬に相当する。以上のように一個体分のウマの骨が出土しているが、これら以外にウシあるいはウマと同定した肋骨が 13 点あり、これらも同一個体のウマである可能性が高い。

このほか、９世紀の井戸 SE005 から、橈骨（左）が１点、15 ～ 16 世紀の道路 SF001 から脛骨（右）、中足骨（左）が１点ずつ出土している。この中足骨の骨幹部外側には、刃物によって上方から下方に向かって削いだような痕跡がみられる。

（２）ウシ

９世紀の竪穴住居 SI044 内の小穴 SP904 から、遊離歯が７点出土している。このほかにウシあるいはウマと同定した遊離歯１点もウシである可能性が高い。15 ～ 16 世紀の溝状遺構 SD100 から橈骨・尺骨（右）、中手骨（右）、中足骨（左）、基節骨（左右不明）、距骨（左）、踵骨（左）、中心足根骨（左）・第四足根骨（左）が１点ずつ、計８点が出土している。踵骨、中心足根骨、第四足根骨は解剖学的に正位置を保っており、距骨もあわせて同一個体のものである。また、重複する部位がなく、全て同一個体の可能性もある。

（３）ウシ／ウマ

９世紀初頭の井戸 SE011 から肋骨が 13 点出土しており、上述のようにウマの可能性が高い。９世紀の竪穴住居 SI044 内の小穴 SP904 から遊離歯１点が出土しており、上述のようにウシの可能性がある。15 ～ 16 世紀の溝状遺構 SD100 から上腕骨、大腿骨、そして部位不明のものがあわせて６点出土している。大きさからウシあるいはウマの四肢骨と判別できるものが大部分であるが、保存状態が不良で部位を特定ができないものも含まれる。同遺構ではウシだけが出土しており、これらの四肢骨も同一個体のウシである可能性があるが同定には至らなかった。

（４）ニホンジカ

10 ～ 11 世紀の井戸 SE009 から頭蓋骨が１点、遊離歯 15 点、計 16 点が出土している。頭蓋骨は、右側の角突起直下の前位部に異なる３方向から鋭利な刃物を叩きつけた痕跡と後部に割り取った痕跡が見られる。このことから枝角を頭部から外すときに、まず刃物で叩き、最後は折りとったと考えられる。遊離歯は上・下顎臼歯 15 点（うち乳歯３点）が出土しており、成獣と幼獣の２個体が見られる。これらの他にニホンジカと思われる下顎骨の小片６点が出土しており、いずれも接合できないが、同一個体のものと思われる（表６）。15 ～ 16 世紀の溝状遺構 SD025 から、下顎骨から遊離した第一あるいは第二後臼歯（右）が１点出土している。

（5）イノシシ／ブタ

弥生時代以降の遺跡から出土するイノシシにはブタが含まれている可能性があり（西本，1991）、骨の形態から野生のイノシシと家畜化したブタを区別することは困難である。10 ～ 11 世紀の井戸 SE009 から、下顎骨 1 点、その下顎骨から遊離した切歯 2 点（左右不明）と臼歯 9 点（左 4 、右 3 、左右不明 2 ）計 11 点出土している（表 6 ）。また、橈骨（左）、尺骨（左）、脛骨（左）が 1 点ずつ出土しており、橈骨は近位部に叩き切られた痕跡が見られる。下顎骨は第三後臼歯が萌出しており、著しい咬耗は見られず、林良（1977）が分類した咬耗段階では生後 43 ～ 44 カ月に相当する。また、下顎犬歯の歯槽が大きく開口していることから、オスと推測される。さらに、下顎骨の第一後臼歯直下の舌側には、鋭利な刃物による切傷が見られる。

6．考察

二本木遺跡群は、古代の飽田に位置する肥後国府の推定地であり、第 18 次調査では 9 世紀後半の SD001 からウマの寛骨、SD044 から頭部を除いたほぼ一体分のウシの骨が出土している（西中川，2005）。第 34 次調査では 8 世紀末から 9 世紀にかけて複数の遺構からウマ、ウシを含む動物遺存体が出土しており、公の施設において伝令、駅馬、物資の搬入などのためにウマ、ウシを多用したことが想定されている（沖田，2009）。

今回の調査では、古代の遺構からウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ / ブタが、中世の遺構からウシ、ウマ、シカが出土している。古代ではウマがまとまって出土しているのに対して、中世では断片的な部位の出土にとどまる。一方、ウシは中世の遺構で同一個体と考えられる四肢骨が出土している。牛馬は人を乗せ、物資の輸送、農耕などに使役されるほか、祭祀･儀礼の犠牲にもなり、死後はほとんどの場合が解体され、皮、肉、骨、角、蹄、内臓などが利用されるということが近年の考古学、文献史学、民俗学の成果として明らかにされている（松井，2005 など）。

注目されるのは、 9 世紀の井戸 SE011 からウマの全身骨格がほぼ揃った状態で出土していることである。このウマは体高 129cm と推定され、日本在来馬の中では中型馬に相当する。体高推定に用いた脛骨は、古代の遺跡から出土したものと比較すると、最大長（GL）に対して骨幹幅（SD）がやや細く、華奢な印象を受ける（表 3 ）。このウマの全身骨格が正位置を保持した状態であったのか明らかでないことや解体痕が見られないことから、解体されずに井戸に投棄された可能性と、解体後に投棄された可能性の両方が考えられる。

古代ではウマのほぼ全身骨格が出土したのに対して、ウシは部分的な出土にとどまることから、解体され、皮や肉を取りはずした後に投棄されたことが想定される。狩猟で捕獲した成獣のニホンジカの頭蓋骨は、製品の素材に適した枝角を切り取ったものである。ニホンジカには解体痕が見られないが、枝角の利用のほか、肉が食用になったことが想定される。また、イノシシ / ブタの下顎骨や橈骨には傷が見られることから、解体されて食用になったと考えられる。

7．まとめ

二本木遺跡群（春日地区）では、古代から中世にかけての遺構から動物遺存体が出土しており、ウマ、ウシ、ニホンジカ、イノシシ / ブタが同定された。古代のウマは井戸からほぼ全身の骨格部位が出土している。ウシは遊離歯が出土しており、ウシやウマは役畜として人の移動や物資の運搬、祭祀における供物に利用され、その死後は食肉、皮革、骨角製品の素材などに利用されたことが想定される。イノシシ / ブタは食用に供され、ニホンジカは食用以外に鹿角が利用されたと考えられる。注目されるのは、井戸 SE011 から 1 個体分のウマの骨が出土したことであり、古代のウマの利用を考える上で貴重な資料である。今後、このウマの利用について、出土状況や共伴遺物とあわせて検討する必要があろう。なお、今回の動物遺存体同定にあたっては、小舟みなみ氏（京都大学人間・環境学研究科）および丸山真史氏（奈良文化財研究所・客員研究員）の協力を得た。

文献

沖田絵麻（2009）熊本市二本木遺跡群第 34 次調査出土の動物遺存体．二本木遺跡群 IX―二本木遺跡群第 34 次調査区発掘調査報告書―．熊本市教育委員会，p.145-149.

西中川駿編（1991a）遺跡出土の牛・馬の骨の形態計測学的研究．古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成２年度文部科学省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告．鹿児島大学農学部獣医学科，p.18-41.

西中川駿編（1991b）遺跡出土骨同定のための基礎的研究 – とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較 –．古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成２年度文部科学省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告．鹿児島大学農学部獣医学科，p.164-188.

西中川駿（2005）熊本市二本木遺跡群（18 次調査）出土のウシ、ウマの遺体．二本木遺跡群 I―第 18 次調査区発掘調査報告書―．熊本市教育委員会，p.47-50.

西本豊弘（1991）弥生時代のブタについて．国立歴史民俗博物館研究報告第 36 集．国立歴史民俗博物館，p.175-194.

林田重幸・山内忠平（1957）馬における骨長より体高の推定法．鹿児島大学農学部学術報告第６号．鹿児島大学農学部，p.146-156.

林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂（1977）日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定．日本獣醫學雑誌．vol.39 No.2．社団法人日本獣医学会，p.165-174.

松井章（2005）考古学から見た動物と日本人の歴史．周縁文化と身分制．脇田晴子、マーチン・コルカット、平雅行共編．思文閣出版，p.187-239.

Driesch, Angela von den（1976）A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES.　Peabody Museum of archaeology and Ethnology Harvard University.

Wilson,Bob Grigson, Caroline and Payne,Sebastian（1982）Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites BAR British Series109.

表１　出土動物遺存体一覧

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
	1	SE011	哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎I3		右			1	No.1	
	2		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎I3		右			1	No.2	
	3		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎/下顎I2		-			1	No.3	
	4		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P3		右			1	No.4	
	5		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P4		右			1	No.5	
	6		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎M1		右			1	No.6	
	7		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎M3		右			1	No.7	
	8		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎M2		左			1	No.8	
	9		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P2		左			1	No.9	
	10		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P3		左			1	No.10	
	11		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎M3		左			1	No.11	
	12		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P2		右			1	No.12	
	13		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎M2		右			1	No.13	
	14		哺乳類	ウマ	遊離歯	下顎P4		左			1	No.14	
	15		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P2		右			1	No.15	
	16		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M2		左			1	No.16	
	17		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M3	歯冠	左			1	No.17	
	18		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P4		右			1	No.18	
	19		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M1		左			1	No.19	
	20		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P2	ほぼ歯冠のみ	左			1	No.20	
	21		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M3	ほぼ歯冠のみ	右			1	No.21	
	22		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M1		右			1	No.22	
	23		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P4		左			1	No.23	
	24		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎M2		右			1	No.24	
	25		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P3		左			1	No.25	
	26		哺乳類	ウマ	遊離歯	上顎P3		右			1	No.26	
	27	SE011	哺乳類	ウマ	上腕骨	遠位		左		fused	1		
	28		哺乳類	ウマ	上腕骨	近位、遠位		右		fused	1		骨幹は欠損
	29		哺乳類	ウマ	橈骨+尺骨			左		fused	1		尺骨近位と橈骨近位内側欠損
	30		哺乳類	ウマ	橈骨	近位		右		fused	1		
	31		哺乳類	ウマ	尺骨	近位		右		fused	1		
	32		哺乳類	ウマ	第３中手骨			左		fused	1		遠位に欠損があるが、ほぼ完存
	33		哺乳類	ウマ	第４中手骨			左		fused	1		
	34		哺乳類	ウマ	第３+４中手骨			右		fused	1		共に完存
	35		哺乳類	ウマ	大腿骨			左		fused	1		骨頭欠損
	36		哺乳類	ウマ	大腿骨	近位、遠位と骨幹の一部		右		fused	1		
	37		哺乳類	ウマ	脛骨			左		fused	1		完存
	38		哺乳類	ウマ	脛骨			右		fused	1		完存
	39		哺乳類	ウマ	中足骨			左		fused	1		完存
	40		哺乳類	ウマ	中足骨			右		fused	1		ほぼ完存
	41		哺乳類	ウマ	膝蓋骨			左			1		遠位側が残存、風化が著しい
	42		哺乳類	ウマ	膝蓋骨			右			1		内側に欠損あり
	43		哺乳類	ウマ	踵骨			右			1		近位端が欠損
	44		哺乳類	ウマ	距骨			左			1		風化はみられるが、ほぼ完存
	45		哺乳類	ウマ	距骨			右			1		風化はみられるが、ほぼ完存
	46		哺乳類	ウマ	基節骨			左		fused	1		前肢、近位外側が欠損

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
	47		哺乳類	ウマ	基節骨			左		fused	1		後肢、遠位欠損、近位外側も僅かに欠損
	48		哺乳類	ウマ	基節骨			右		fused	1		後肢、遠位欠損、近位の縁辺部が少しずつ欠損
	49		哺乳類	ウマ	中節骨			－		fused	1		
	50		哺乳類	ウマ	中節骨			－		fused	1		風化が著しい
	51		哺乳類	ウマ	中節骨	遠位		－		fused	1		
	52		哺乳類	ウマ	末節骨			－		fused	1		前肢、縁辺部に所々欠損あり
	53		哺乳類	ウマ	末節骨			－		fused	1		後肢、縁辺部に所々欠損あり
	54		哺乳類	ウマ	末節骨			－		fused	1		前肢後肢不明、関節面を中心とする厚い部分のみ残存
	55		哺乳類	ウマ	中間手根骨			左			1		完存
	56		哺乳類	ウマ	第３手根骨			左			1		完存
	57		哺乳類	ウマ	第３手根骨	前方		右			1		
	58		哺乳類	ウマ	中心足根骨			左			1		完存
	59		哺乳類	ウマ	腰椎	右半分		－			1		
	60		哺乳類	ウマ	椎体			－			1		
	61		哺乳類	ウマ	肋骨	近位から中位		左			1		近位端欠損
	62		哺乳類	ウマ	肋骨	近位から中位		右			1		近位端欠損
	63		哺乳類	ウシ/ウマ	肋骨	全て骨幹		－			1？		13点
	64		哺乳類	大型哺乳類	肋骨	全て骨幹		－					8点
	65	SE011	哺乳類	ウマ？	仙骨	棘突起		－					
	66		哺乳類	ウマ	寛骨	前方部分の寛骨臼から腸骨体まで		左			1		
	67		哺乳類	ウマ	寛骨	腸骨体		右			1		
	68		哺乳類	ウマ	下顎骨	C～P1間の下顎体		－			1		
	69		哺乳類	不明				－					破片
	70		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、扁平骨、密度の高い海綿骨あり
	72		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	73		哺乳類	不明				－					破片、密度の高い海綿骨あり
	74		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	75		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片
	77		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片
	78		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、径が大きい
	79		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	80		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	81		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片
	82		哺乳類	大型哺乳類	寛骨？			－					破片、扁平骨、密度の高い海綿骨あり
	84		哺乳類	ウマ？	末節骨？			－					破片、密度の高い海綿骨あり
	85		哺乳類	不明				－					破片
	86		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
	87		哺乳類	不明				－					破片、関節面あり、密度の高い海綿骨あり
	88		哺乳類	不明				－					破片
	89		哺乳類	不明				－					破片
	90		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	91		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、密度の高い海綿骨あり、扁平骨
	92		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、海綿骨あり
	93		哺乳類	不明				－					破片
	94		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片
	95		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片
	96		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	97		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり、長管骨
	98		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり、長管骨
	100		哺乳類	不明				－					破片
	102		哺乳類	不明				－					破片
	103		哺乳類	不明				－					破片、密度の高い海綿骨あり
	104		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、密度の高い海綿骨あり
	105		哺乳類	大型哺乳類	四肢骨	骨幹		－					破片、海綿骨あり
	106		哺乳類	大型哺乳類	肋骨？			－					破片、海綿骨あり
	107	SE011	哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	108		哺乳類	不明	下顎？			－					破片
	109		哺乳類	ウマ	肩甲骨	関節窩		右			1		破片
	110		哺乳類	ウマ	肩甲骨	関節窩	関節上結節側	左			1		破片
	111		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	112		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	113		哺乳類	大型哺乳類	不明			－					破片、海綿骨あり、厚い、長管骨？
	114		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	115		哺乳類	不明				－					破片、密度の高い海綿骨あり
	116		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	117		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	118		哺乳類	不明				－					破片、密度の高い海綿骨あり
	119		哺乳類	不明				－					破片、わずかに海綿骨あり
	120		哺乳類	不明				－					破片
	121		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	122		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	123		哺乳類	不明				－					破片、海綿骨あり
	124		哺乳類	不明				－					破片、わずかに海綿骨あり
	125		哺乳類	不明				－					破片
	126		哺乳類	大型哺乳類	寛骨？	腸骨？		－					破片、扁平骨、密度の高い海綿骨あり
	1		哺乳類	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	舌側のエナメル質	－					破片
	2	SI044内、SP904	哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯		－					
	3		哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯		－					

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
	4	SI044内、SP904	哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯	頬側のエナメル質	－					破片
	5		哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯	エナメル質	－					破片
	6		哺乳類	ウシ/ウマ	遊離歯	臼歯	エナメル質	－					破片
	7		哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯	頬側のエナメル質	－					破片
	8		哺乳類	大型哺乳類	遊離歯	臼歯	エナメル質	－					破片
	9		哺乳類	ウシ	遊離歯	臼歯	頬側のエナメル質	－					破片
	10		哺乳類	大型哺乳類	遊離歯		エナメル質	－					破片
	11		哺乳類	不明	遊離歯		エナメル質	－					破片
	12		哺乳類	大型哺乳類	遊離歯	臼歯	エナメル質	－					破片
	13		哺乳類	大型哺乳類	遊離歯		エナメル質	－					破片
	14		哺乳類	不明	遊離歯		エナメル質	－					破片
	1	SE005	哺乳類	ウマ	橈骨	遠位		左		fused			前方一部欠損
1	1	SE009	哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎P4		左		b-d	2		
1	2		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎M2	前腹	左		d-e	2		
1	3		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎M3		左		b-c	2		
1	4		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎P2		右			2		
1	5		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎P3		右			2		
1	6		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎M1/2	後腹	右			2		
1	7		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎切歯		－			2		破片
1	8		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎切歯		－			2		破片
1	9		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎M1/2		－			2		破片
1	10		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎M1/2		－			2		破片
1	11		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎P2		左			3		
1	12		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎P3		左			3		
1	13		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎P4		左			3		
1	14		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎M1		左			3		
1	15		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎M2		左			3		
1	16		哺乳類	シカ	遊離歯	上顎M3		左			3		
1	17		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎P4		左			3		
1	18		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎M1		左			3		
1	19		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎M2		左			3		
1	20		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎M3		左			3		
1	21		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎P4		右			3		
1	22		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎M2		右			3		前方咬合面に僅かな欠損
1	23		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎dp3		左			3		
1	24		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎dp2		右			3		
1	25		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎dp3		右			3		
1	26		哺乳類	イノシシ/ブタ	遊離歯	下顎P2	歯冠	－			2		破片
1	27		哺乳類	シカ？	遊離歯	臼歯？	歯冠	－					破片
1	28		哺乳類	不明	遊離歯	歯冠		－					破片

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
1	29	SE009	哺乳類	不明	遊離歯			－					破片
1	30		哺乳類	不明	遊離歯			－					破片
1	31		哺乳類	不明	遊離歯	歯冠		－					破片
1	32		哺乳類	不明	遊離歯	歯根		－					破片
1	33		哺乳類	不明	遊離歯			－					破片
1	34		哺乳類	不明	不明			－					破片
1	35		哺乳類	不明	不明			－					破片、密度の高い海綿骨あり
1	36		哺乳類	不明	不明			－					破片、密度の高い海綿骨あり
1	37		哺乳類	不明	不明			－					
1	38		哺乳類	不明	不明			－					
2	1	SE009	哺乳類	イノシシ/ブタ	尺骨	骨幹近位側前方、骨幹遠位側		左			2	エ、シ、テ	
2	2		哺乳類	イノシシ/ブタ	橈骨	近位		左	切断	fused	2	コ	近位前方やや外側から骨幹中位後方に向かって斜めに切断されている。
2	3		哺乳類	イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体	左：I(xx)、右：(xxx x xxxP4 x)	－		b(P4より)	2	ア	破片
2	4		哺乳類	イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体	P(xx)	左			2	セ	
2	5		哺乳類	イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体	P2(xx)	左			2		P3は後方、P4は前方のみ歯槽骨が残存。
2	6		哺乳類	イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体	M(xxx)	左	切傷		2	ソ	M1の歯槽骨は舌側後方、M3の歯槽骨は前方のみ残存。M1歯槽骨直下の舌側から前方にかけて、鋭利な刃物によってつけられた傷がある。
2	7		哺乳類	イノシシ/ブタ	下顎骨	下顎体	(xM3)	右		a-b(M3より)	2	タ	M3は完全に萌出
2	8		哺乳類	イノシシ/ブタ	脛骨	中位から遠位前方		左			2	カ、ス	
2	9		哺乳類	シカ	頭蓋骨	前頭骨、頭頂骨、左角坐骨		－	切断（叩き）		3	イ、ウ、オ、ケ、サ、二、ヌ、ハ、マ	オス、角坐骨下方を前位３方向から鋭利な刃物で叩き切っている。途中から折りとったためか、後方には割れた跡が残る。
2	10		哺乳類	シカ	下顎骨	下顎枝		－			3	ツ	
2	11		哺乳類	シカ	下顎骨	後方の腹縁		－			3	ナ	
2	12		哺乳類	シカ?	上顎骨	歯槽骨		－			3	ノ	破片
2	13		哺乳類	シカ	下顎骨	下顎体		－			3	チ	破片
2	14		哺乳類	シカ	下顎骨	下顎体		－			3	ハ	破片
2	15		哺乳類	シカ	下顎骨	下顎体		－			3		破片
2	16		哺乳類	シカ	下顎骨	下顎体		－			3		破片
2	17		哺乳類	不明	頭蓋骨	脳頭蓋		－				キ	破片
2	18		哺乳類	不明	頭蓋骨？			－				ク	破片
2	19		哺乳類	不明	頭蓋骨	脳頭蓋		－					破片
2	20		哺乳類	不明				－				ト	破片
2	21		哺乳類	不明				－				ヒ	破片

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
2	22		哺乳類	不明				－				へ	破片
2	23		哺乳類	不明				－				ネ	破片
2	24		哺乳類	中・大型哺乳類	臼歯	エナメル質		－					破片
2	25	SE009	哺乳類	不明				－					破片9点
2	26		哺乳類	不明	頭蓋骨？			－					破片5点
2	27		哺乳類	不明				－					破片32点、海綿骨あり
2	28		哺乳類	不明				－					破片259点
	1		哺乳類	ウシ/ウマ	大腿骨	遠位後方		左			4？	No. 1	大きさからウシか？
	2		哺乳類	ウシ/ウマ	大腿骨	遠位		－			4？	No. 1b	破片
	3		哺乳類	不明				－				No. 1c	破片
	4		哺乳類	不明				－				No. 1d	破片
	5		哺乳類	不明				－				No. 1g	破片
	6		哺乳類	不明				－				No. 1h	破片
	7		哺乳類	不明				－				No. 1i	破片
	8		哺乳類	不明				－				No. 1j	破片
	9		哺乳類	不明				－				No. 1k	破片
	10		哺乳類	ウシ/ウマ	上腕骨	骨幹～遠位		－		fused	4？	No. 2	
	11		哺乳類	ウシ/ウマ	大腿骨	遠位		－		fused	4？	No. 3	
	12		哺乳類	ウシ	脛骨			左		fused	4	No. 4	
	13		哺乳類	ウシ/ウマ	四肢骨	骨幹		－			4？	No. 5	
	14		哺乳類	ウシ	踵骨			左			4	No. 6	近位端欠損
	15	SD100	哺乳類	ウシ	中心足根骨+第四足根骨			左			4	No. 6	完存
	16		哺乳類	ウシ	距骨			左			4	No. 7	踵骨との関節面が風化により磨滅
	17		哺乳類	ウシ	中足骨	近位から中位		左			4	No. 8	
	18		哺乳類	ウシ	基節骨	後方と側面の一部		－			4	No. 9	
	19		哺乳類	ウシ/ウマ	不明			－			4？	No. 10	かなり大きい
	20		哺乳類	ウシ	橈骨+尺骨	骨幹		右			4	No. 11	橈骨は近位内側が一部残存。
	21		哺乳類	不明				－				No. 12	破片
	22		哺乳類	ウシ	中手骨	近位前方		右			4	No. 13	
	23		哺乳類	ウシ？	基節骨？	遠位関節面？		－		fused			
	24		哺乳類	不明	関節面？			－					破片
	25		哺乳類	不明				－					密度の高い海綿骨あり
	26		哺乳類	不明				－					36点
1		SF001	哺乳類	ウマ	中足骨			左	削ぎ跡？	fused			近位が欠損。骨幹外側面に刃物で削いだ跡がみられる。
2	1		哺乳類	ウマ	脛骨	遠位		右		fused			
2	2		哺乳類	シカ	遊離歯	下顎M1/2		右					歯根が僅かに欠損
2	3	SF001	哺乳類	ウシ/ウマ?	脛骨？	遠位内果？		左？					破片
2	4		哺乳類	不明	頭蓋骨？	上顎骨？		－					破片
2	5		哺乳類	不明	頭蓋骨？			－					破片

袋No.	遺物別No.	遺構名	大分類	小分類	部位１	部位２	部位３	左右	加工	成長	同一個体	取上げ	備考
3		SF001	哺乳類	大型哺乳類				－					５点、同一骨か？
4	1	SF001	哺乳類	不明				－					破片
4	2		哺乳類	不明				－					破片
4	3		哺乳類	不明				－					破片
4	4		哺乳類	不明				－					破片
4	5		哺乳類	不明				－					破片
4	6		哺乳類	不明				－					破片
4	7		哺乳類	不明				－					破片
5	1	SF001	哺乳類	不明				－					破片
5	2		哺乳類	不明				－					破片
6	1	SF001	哺乳類	不明				－					破片
6	2		哺乳類	不明				－					破片
6	3		哺乳類	ウマ？	中足骨？	近位後方？		左？					破片
6	4		哺乳類	不明				－					破片

・同一個体―数字は同一個体を示す。

表２　遺構年代と最小個体数

	時期	ウマ	ウシ	イノシシ／ブタ	ニホンジカ	計
SE011	９世紀初頭	1				1
SI044 内、SP904	９世紀初頭		1			1
SE005	９世紀	1				1
SE009	10 ～ 11 世紀			1	2（成１、幼１）	3
SD100	15 ～ 16 世紀		1			1
SF001	15 ～ 16 世紀	1			1	2
計		3	2	1	3	9

（註）別遺構は別個体とし、重複する部位がなければ同一個体として数えた。

表３　ウマ　脛骨計測値の比較

		SE011 脛骨（左）	1	2	3	4
遺跡名		二本木遺跡	藤原京跡	須和田遺跡	白幡前遺跡	平安京跡
時期		平安（９世紀初）	奈良	奈良	平安	平安
所在地		熊本	奈良	千葉	千葉	京都
計測値（mm）	GL	329.6	323.2	321.2	308.6	295.1
	Ll	301.4	－	－	－	－
	Bp	81.2	87.1	86.9	86.5	－
	SD	33.1	36.4	33.3	34.4	42.2
	Bd	60.9	64.8	65.8		69
	Dd	37.8	38.9	42.1	38.3	－
推定体高（cm）		129	126	125	118	110

（註）１～４は西中川（1991a）のデータをもとに作成。

表４　ウマ遊離歯計測表

SE011

	左						右				
	部位名	遺構別 No.	年齢	計測値 長	幅	高	遺構別 No.	年齢	計測値 長	幅	高
上顎	I3						1	－	－	－	－
	P2	20	9 ～ 10 歳	34.2	22.9	31.2	15	8 ～ 9 歳	35.0	24.0	32.6
	P3	25	11 ～ 12 歳	26.6	26.2	33.1	26	10 ～ 11 歳	26.6	25.0	35.8
	P4	23	10 ～ 11 歳	26.7	25.1	37.5	18	11 ～ 12 歳	26.6	26.2	34.8
	M1	19	10 ～ 11 歳	22.2	22.4	32.4	22	11 ～ 12 歳	23.5	23.1	34.5
	M2	16	11 ～ 12 歳	22.5	23.0	32.6	24	11 ～ 12 歳	22.2	22.2	34.2
	M3	17	15 歳より若い	27.1	20.3	(25.53)	21	11 ～ 12 歳	26.6	20.3	32.7
下顎	I3						2	－	－	－	－
	P2	9	9 ～ 10 歳	30.4	14.2	29.0	12	9 ～ 10 歳	30.5	13.3	30.0
	P3	10	11 ～ 12 歳	25.3	13.6	29.6	4	11 ～ 12 歳	25.7	15.9	29.6
	P4	14	10 ～ 11 歳	25.0	13.9	36.2	5	10 ～ 11 歳	24.9	15.4	35.2
	M1						6	11 ～ 12 歳	22.5	13.2	34.0
	M2	8	13 ～ 14 歳	22.8	13.8	32.2	13	12 ～ 13 歳	24.2	12.1	36.0
	M3	11	10 ～ 11 歳	30.1	11.7	36.1	7	10 ～ 11 歳	31.2	11.2	37.7
上 / 下顎 左右不明	I2	3	－	－	－	－					

計測値（mm）

表５　ウマ臼歯列長計測表

SE011

	計測部位	左	右
上顎	臼歯列長	154.0	157.5
	前臼歯列長	86.3	80.5
	後臼歯列長	71.3	75.7
下顎	臼歯列長	－	156.0
	前臼歯列長	80.9	87.4
	後臼歯列長	－	71.8

計測値（mm）

（註）遊離歯を並べて計測。

表６　歯の計測値表

SF001

	遺構別 No.	部位	左右	成長	長	幅
シカ	2	下顎 M1/2	右		15.9	7.9

SE009

	袋 No.	遺構別 No.	部位	左右	成長	長	幅
イノシシ / ブタ	1	1	下顎 P4	左	b-d	14.5	8.5
	1	2	下顎 M2 前腹	左	d-e	－	13.0
	1	3	下顎 M3	左	b-c	34.4	15.1
	1	4	下顎 P2	右	－	11.0	4.7
	1	5	下顎 P3	右	－	13.3	6.3
	2	3	下顎 P4	右	b	14.81	8.5
	1	6	下顎 M1/2 後腹	右	－	－	12.9
	2	7	下顎 M3	右	a-b	33.52	15.0
シカ	1	11	上顎 P2	左		10.4	10.7
	1	12	上顎 P3	左		11.4	11.6
	1	13	上顎 P4	左		10.5	13.1
	1	14	上顎 M1	左		16.4	15.3
	1	15	上顎 M2	左		18.3	16.4
	1	16	上顎 M3	左		17.9	16.3
	1	17	下顎 P4	左		12.8	8.0
	1	18	下顎 M1	左		15.9	9.7
	1	19	下顎 M2	左		18.8	10.7
	1	20	下顎 M3	左		23.2	10.8
	1	21	下顎 P4	右		13.1	7.9
	1	22	下顎 M2	右		18.5	10.7
	1	23	下顎 dp3	左	幼	11.7	6.6
	1	24	下顎 dp2	右	幼	8.1	5.3
	1	25	下顎 dp3	右	幼	11.7	6.6

（註）“ ※ ” 以外は遊離歯　　計測値（mm）

（註）イノシシ / ブタの「成長」は Wilson(1982) を利用。

表７　歯の計測値表

SE011　ウマ

	左	右
上腕骨		
BT	62.3	-
橈骨		
Bp	-	66.9
Li	300.7	-
SD	32.3	-
Bd	66.0	-
尺骨		
DPA	-	52.4
SDO	-	42.1
大腿骨		
GLC	339.3	-
SD	31.0	-
Bd	74.8	-
脛骨		
GL	329.6	326.4
LI	301.4	296.6
Bp	81.2	80.0
SD	33.1	33.2
Bd	60.9	61.3
Dd	37.8	37.9
推定体高（cm）	129	127
第３中手骨		
GL	-	201.2
GLI	198.8	198.0
LI	195.6	191.9
Bp	37.9	42.9
SD	27.3	26.8
Bd	-	39.8
推定体高（cm）	-	122
膝蓋骨		
GL	-	56.0
中足骨		
GL	239.8	-
GLI	238.2	-
LI	234.7	-
Bp	44.0	45.0
CD	25.6	25.4
Bd	38.7	38.3
推定体高（cm）	119	-
踵骨		
GB		47.0
距骨		
GH	50.3	50.3
LmT	50.6	50.4
GB	52.9	52.7
BFd	46.4	46.0
基節骨	前肢	
GL	73.4	
Dp	33.5	
SD	27.8	
BFd	34.5	
Bd	38.7	
推定体高（cm）	119	

	左	右
基節骨	後肢	
Bp	45.9	-
BFp	38.5	-
SD	25.9	25.5
中節骨	（前後左右不明）	
GL	40.6	-
Bp	42.8	40.9
BFp	35.3	-
Dp	26.0	-
SD	36.7	-
Bd	38.2	-
推定体高（cm）	118	-
末節骨	前肢	後肢
BF	42.0	40.4
LF	27.3	23.1
HP	34.5	29.9
Ld	41.7	-
末節骨	（前後左右不明）	
LF	21.9	

SF001　ウマ

袋 No.	遺構別 No.		左	右
1		中足骨		
		CD	26.6	
		Bd	40.1	
2	1	脛骨		
		Bd		65.7
		Dd		38.7

SE009　イノシシ / ブタ

袋 No.	遺構別 No.		左
2	2	橈骨	
		Bp	32.8
		Dp	23.0

SD100　ウシ

遺構別 No.		左
12	脛骨	-
14	踵骨	-
15	中心足根骨＋第四足根骨	
	GB	53.0
16	距骨	
	GLm	55.6
	Dl	31.7
	GLl	62.2
17	中足骨	
	Bp	43.5
	Dp	41.3

計測値（mm）

ウマの上顎臼歯（左）

ウマの下顎臼歯（左）

ウマの上顎臼歯（右）

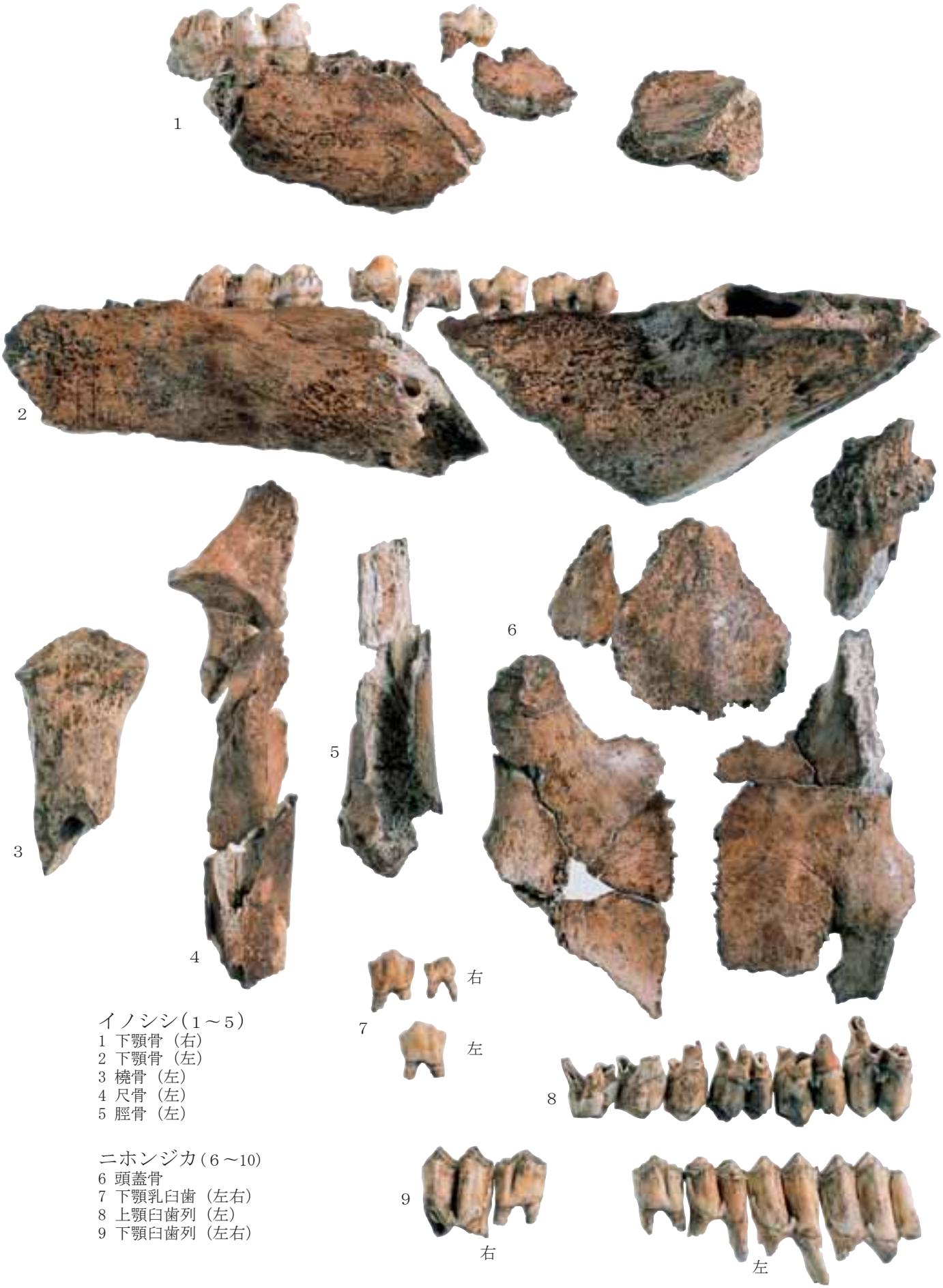
ウマの下顎臼歯（右）

ウマ

1 大腿骨（右）
2 脛骨（右）
3 踵骨（右）
4 距骨（右）
5 中足骨（右）
6 大腿骨（左）
7 脛骨（左）
8 距骨（左）
9 中足骨（左）
10 橈骨・尺骨（左）
11 上腕骨（右）
12 橈骨（右）
13 上腕骨（右）
14 尺骨（右）
15 上腕骨（左）
16 中手骨（右）
17 基節骨（右）
18 中節骨（左右不明）
19 末節骨（左右不明）
20 中手骨（左）
21 基節骨（左）
22 中節骨（左右不明）
23 末節骨（左右不明）

ウシ

1 橈骨・尺骨（左）
2 大腿骨（左右不明）
3 橈骨・尺骨（右）
4 上腕骨（左右不明）
5 距骨（左）
6 中足骨（左）
7 踵骨・足根骨（左）



イノシシ（1～5）
1 下顎骨（右）
2 下顎骨（左）
3 橈骨（左）
4 尺骨（左）
5 脛骨（左）

ニホンジカ（6～10）
6 頭蓋骨
7 下顎乳臼歯（左右）
8 上顎臼歯列（左）
9 下顎臼歯列（左右）

Ⅱ．二本木遺跡群（春日地区）における土器付着物の蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

２．試料

分析試料は、C 区 SK047 から出土した９世紀の土師器の内面に付着した金属質の物質（№１、№２）である。試料の写真を図１、図２に示す。

３．方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製分析顕微鏡，XGT-5000Type Ⅱ）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による定量分析を行った。まず最初に元素マッピング分析を行い、主要元素のマッピング図を基に輝度の高い箇所を５ヶ所選んでポイント分析を行った。測定条件は、測定時間 3000 秒、ビーム径 100 μ m、電圧 50kV、試料室内真空である。なお、今回は非破壊分析のため試料表面の研磨を行っていないことから、定量分析結果の数値は必ずしも正確なものとはいえない。

４．分析結果

図１と図２に分析ポイントを示した元素マッピング図およびポイント分析により得られたスペクトルを示し、表８に各試料・各ポイントにおける各元素の定量分析結果（wt％）を示す。

土器胎土に多く含まれるケイ素や鉄などの元素を除くと、№１では主に銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）が検出され、ニッケル（Ni）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、金（Au）、ビスマス（Bi）も認められた。№２では主に銅（Cu）、鉛（Pb）、ヒ素（As）が検出され、ニッケル（Ni）、亜鉛（Zn）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）も認められた。

５．考察

土師器の内面に付着した金属質の物質（№１、№２）について蛍光Ｘ線分析を行った。その結果、№１は銅、スズ、鉛、ヒ素、№２は銅、鉛、ヒ素を主体とした元素組成であり、いずれも銅合金に由来するものと考えられる。なお、№２はスズが検出されないなど元素組成に差異があることから、№１とは材質が異なっている可能性が考えられる。その他の微量元素については、鉱石から分離できなかった不純物の可能性が考えられる。

表８　土器付着物の蛍光Ｘ線分析結果

（wt％）

No.	ポイント	Cu	Sn	Pb	As	Ni	Zn	Ag	Sb	Au	Bi
1	a	96.85	0.44	—	0.55	—	—	1.55	—	0.35	0.26
	b	97.12	0.41	0.23	1.45	—	—	0.58	0.14	—	0.07
	c	81.29	9.43	7.07	1.76	0.11	—	—	0.26	—	0.08
	d	72.89	5.42	15.25	5.68	—	—	—	0.76	—	—
	e	68.60	18.99	7.05	4.79	0.12	—	—	0.34	—	0.11
2	a	98.40	—	0.96	0.63	—	—	—	—	—	—
	b	96.02	—	1.54	1.45	—	0.11	0.66	0.15	—	0.07
	c	95.32	—	2.39	1.83	0.03	0.14	—	0.22	—	0.07
	d	82.68	—	6.51	10.39	—	0.43	—	—	—	—
	e	2.71	—	—	95.45	1.11	0.73	—	—	—	—

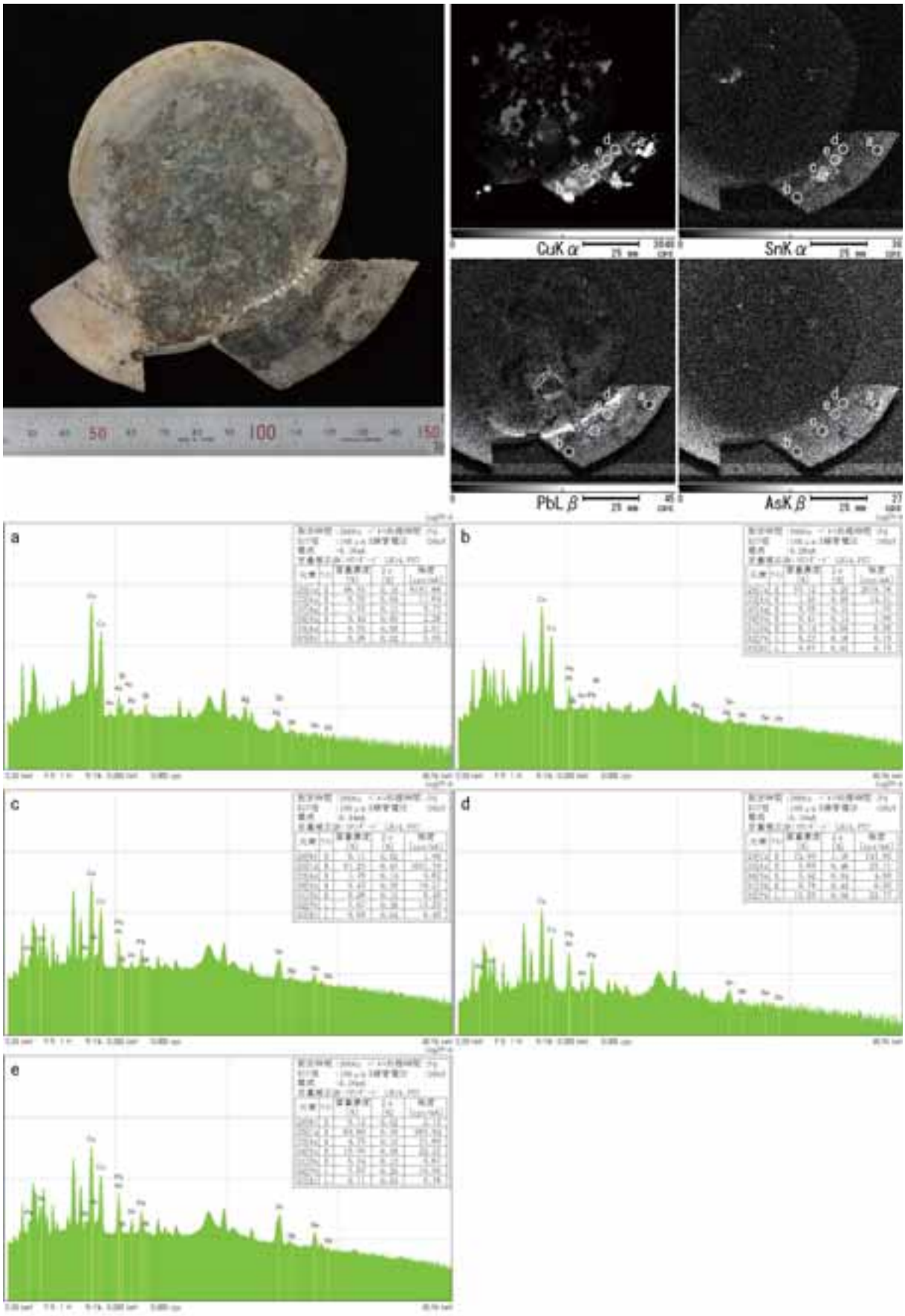


図１　№１の元素マッピング図およびポイント分析スペクトル

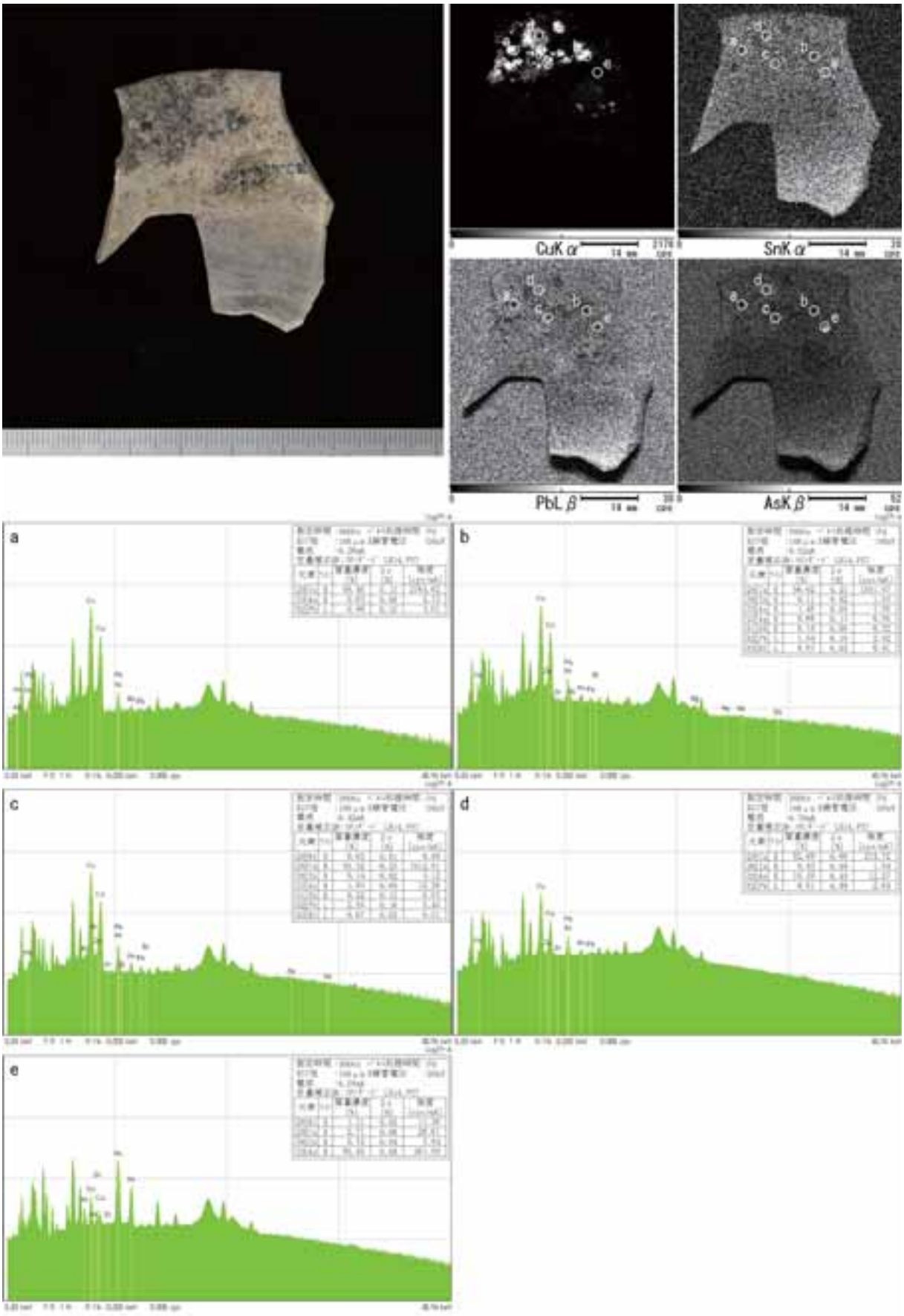


図２　№.２の元素マッピング図およびポイント分析スペクトル

第５章　調査の成果

今回調査した遺構群は年代別に遺構配置図を図示すると次の通りとなる。年代は古代Ⅰ（８世紀中葉）、古代Ⅱ（８世紀後半９世紀初頭）、中世Ⅰ（12世紀前半）、中世Ⅱ（16世紀前半）、近現代のおおよそ５時期に分けることができる。

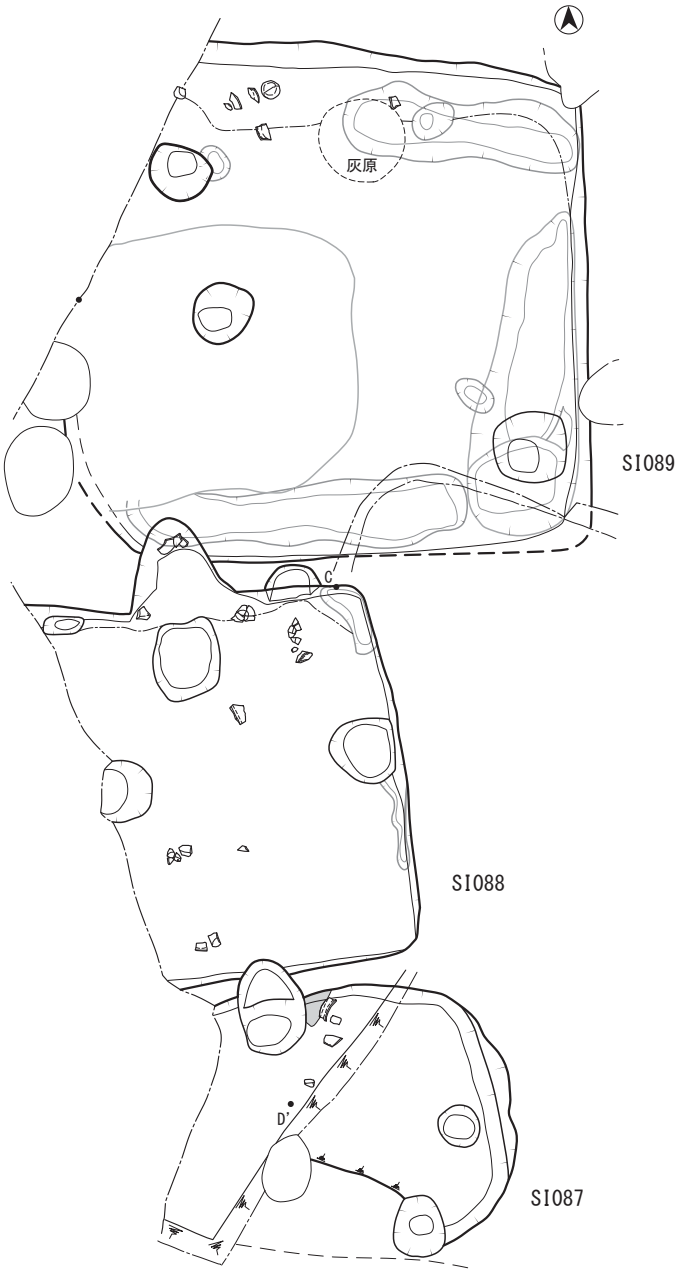
１　遺構の変遷古代Ⅰの時期は、竪穴建物を中心とする集落が調査区全域にわたり分布する。竪穴建物の１軒あたりの切り合いの詳細をみると２軒から４軒程度の切り合いからなる。また、竪穴建物のあり方をみると、８世紀中葉の遺構掘形は一辺が約４ｍ前後の規模を持つが、８世紀後半に入ると小型化し住居跡としての用途は失われつつあるものとみられる。竪穴建物の掘形にまで、気を遣い周溝を巡らせていたものが作り付けカマドを有するだけの２ｍ×1.5ｍ程度の遺構へと変化してくる。これは、下図の例だけではなく切り合いのある竪穴建物遺構には多少なりともこのような変化をみることができる。また、切り合う竪穴建物の掘形を観察すると掘形のバリエーションを切り合うグループ毎に違いがあることも確認される。

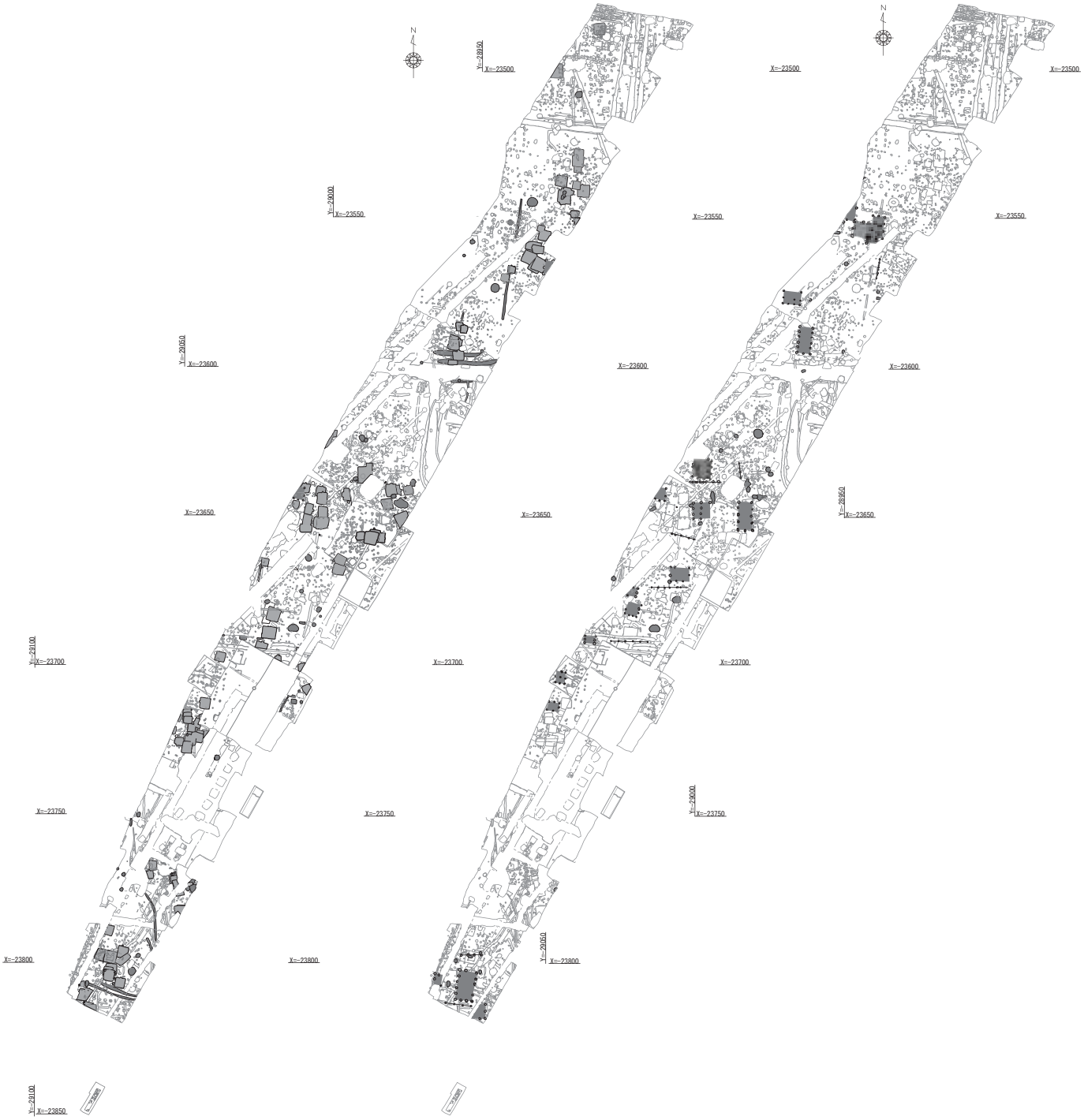
隅丸方形のコーナーを継承するSI013・SI014、直角なコーナー部を踏襲するSI093・SI094・SI103 調査方形掘形を踏襲するSI012・SI013・SI016など掘削手法に特徴を有するものがグループを作っている事例が見受けられる。それぞれに、出土遺物の年代を検討すると時期差が見受けられるかもしれないが、出土遺物の少なさからここでは大まかなくくりのなかで捉えることとする。

集落の景観としては、竪穴建物間に井戸を検出していることから、井戸を中心に竪穴建物がその周りに配されているという状況がここの集落では一般的であったようである。竪穴建物の切り合いが１ヶ所に留まった切り合いを呈することから、この段階において集落内の土地利用に強い規則性があったことも窺える。建替えに伴い前の建物を埋め戻して一部が切り合う状態で建て直しているものが大半であることから、遺構廃絶にあたってそれまでの生活道具一式、作り付けカマド等は基本的に撤去され竪穴建物内に掃き清められたものとみられる。調査の結果、遺構内出土遺物が極端に少ないこと、作り付けカマドがほぼ痕跡すら残していない事例が多いことからこのような推測を加える。

古代Ⅱ（８世紀後半～９世紀初頭）の時期は、本遺跡群において、官衙的様相を持ち始める時期にあたる。掘立柱建物を中心とする遺構群が竪穴建物に変わり調査区全域に広がってくる。

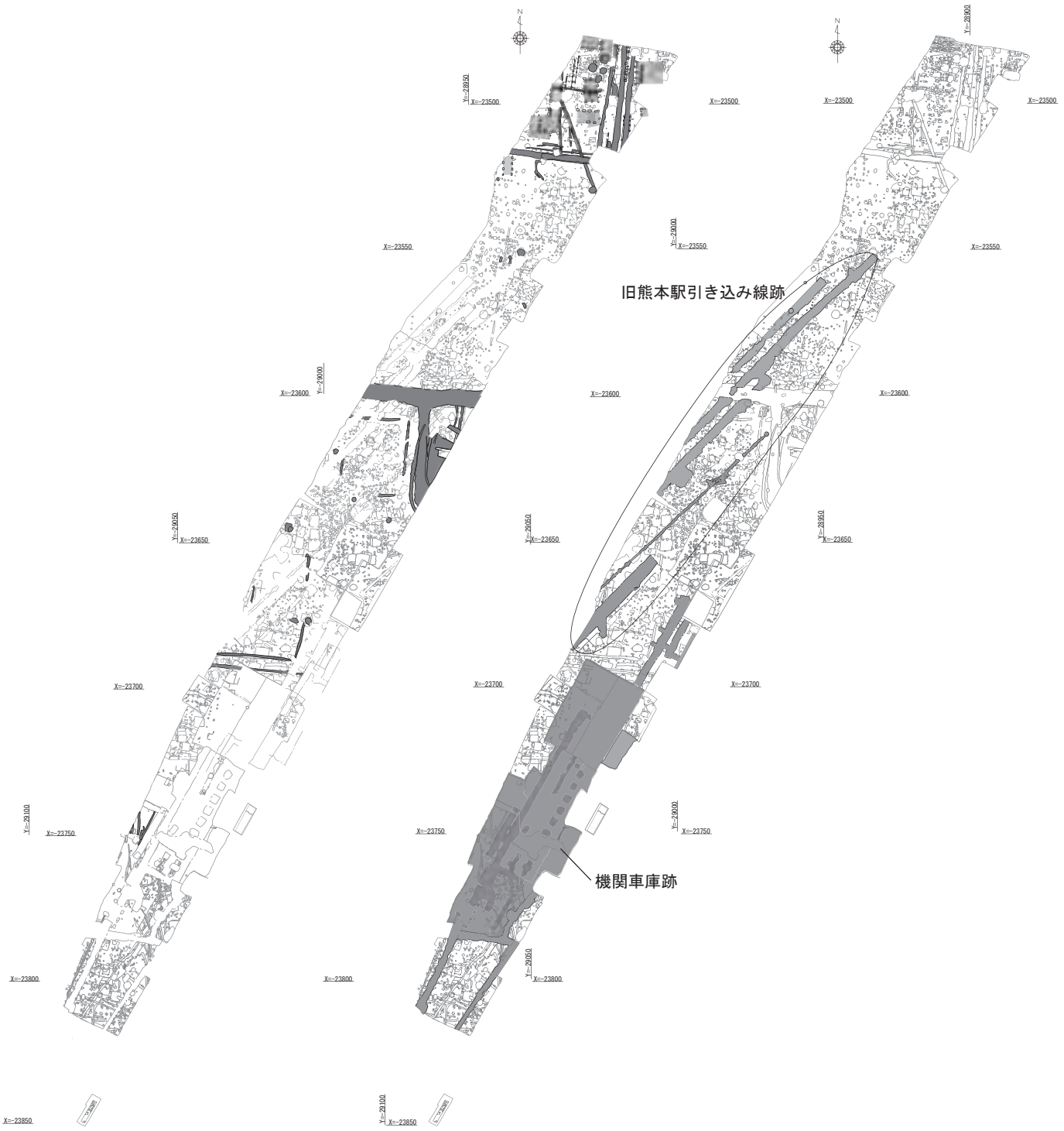
掘立柱建物の配置は、竪穴建物同様に調査区全域に渡り今回の調査区内に於いては規則性を持つ配置状況をしているヶ所はない。しかし、柵列との組み合わせとによる掘立柱建物等もあることから、計画的な土地利用を前提とし、掘立柱建物が配置され





ていたことも窺える。今後周囲の遺構図を統合した時点で再検討を要する問題のひとつである。しかし、調査区南端に位置する掘立柱建物 SB030（３間×５間）では南北に柵列を配する建物を確認している。当遺跡のなかでは比較的大型の掘立柱建物であり周辺に伸びるとみられる掘立柱建物もあることから、接した位置に掘立柱建物が配されていた可能性もある。

全体を通してみると本調査区の掘立柱建物は建築時の制約のなかで主軸方向、柱穴規模等により幾パターンかの配置状況を確認することができた。まず、主軸を南北におくものと東西に主軸をおくものとに大別され、南北に主軸を置くものの中では東にやや軸を振るものとがあり、真北に軸をおくものが本調査区では第１期掘立柱建物群（８世紀後半）で、北東に軸を振るもの、東西に軸をおくものの２パターンの掘立柱建物が第



12 世紀～16 世紀　　近・現代 鉄道遺構群

S=1/2000

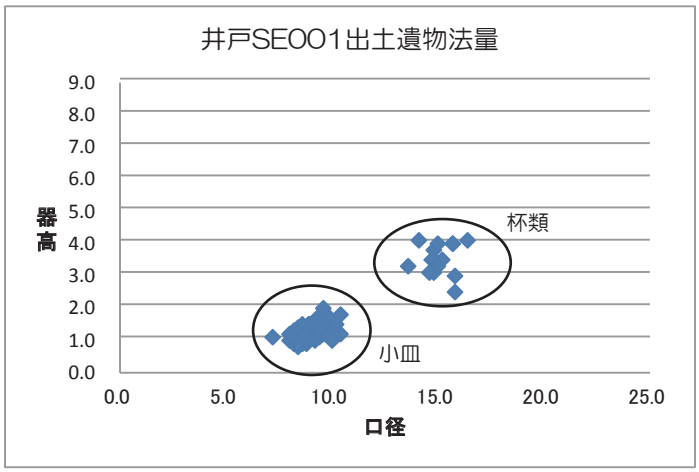
２期掘立柱建物群（９世紀中葉）と考えられる。また､柱の設置状況においても。板状石の礎盤を有するもの、素掘りのうえ底面を粘土質の土で固めたもの２種に分けることができた。数が多いのは後者で検出した遺構の大半はこれにあたる。掘立柱建物の規模は、２間×３間が一般的で最も数が多く、次いで１間×２間の小規模なものまで見ることができる。

掘立柱建物のあり方として、同じ二本木遺跡群のなかでも熊本市調査第 13 次調査区で８世紀中葉創建の古代官衙遺構とみられる掘立柱建物群があり、８間×８間の総柱建物など当調査区検出遺構とは比較にならないほど大規模な遺構が検出されている。春日地区第８次調査（県）でも総柱建物建物を検出するなど本遺跡の中心範囲は本調査区と白川との間に広がる地域にあたるようである。

16 世紀においては調査区北端において一辺の長さが 35 m以上の方形区画に囲まれた居館と考えられる一角を確認している。検出した溝は白川に面する東側で３条、南側では１条の溝に囲まれ北側に広がる平坦面に向かって延びている。周辺の土地の調査事例により延長上の規模を確定できるとその規模から施設の性格を類推することができよう。方形区画の内部には、６棟の掘立柱建物と井戸、内部で区画する小規模な溝が検出された。井戸出土遺物などから遺構の年代を判断すると方形区画の時期と同じく 16 世紀代の遺構群であることが判明した。北側に向かっては小字名に「春日屋敷」という地名も残ることから大規模な中世居館跡の存在を予感させる遺構である。

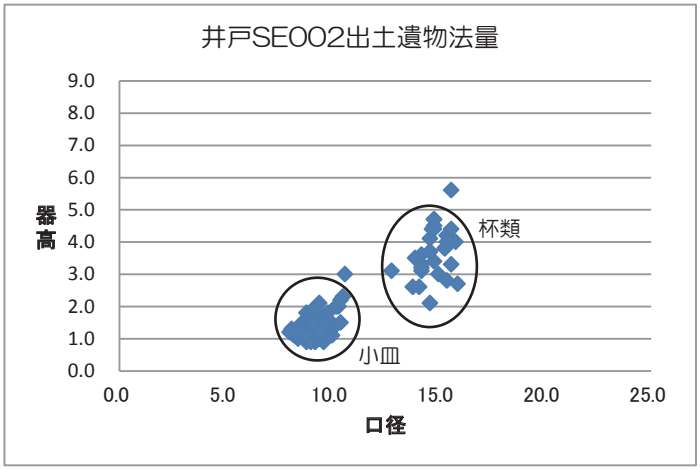
調査区の中ほどに道路状遺構として SF001 を確認してる。この道路状遺構はほぼ東西方向に伸び、調査区を横断している。西側調査区外では、現在の市道に重複し現代にまで土地区画を引き継いでいるのが分かった。道路状遺構からは輸入染付椀、皿類の出土がみられることから 15 世紀から 16 世紀の時期を想定できる。

近・現代においては、明治 24 年に熊本駅が設置された後に周辺にはさまざまな鉄道施設群が作られていくこととなる。遺構配置図としてあらわした図は、機関車庫を始め転車台、給水塔等戦前までの鉄道遺構を始め戦後拡幅された引き込み線、台車点検・洗浄のためのピットを有した線などが追加されている。これらは、新幹線建設事業によりすべて失われている。

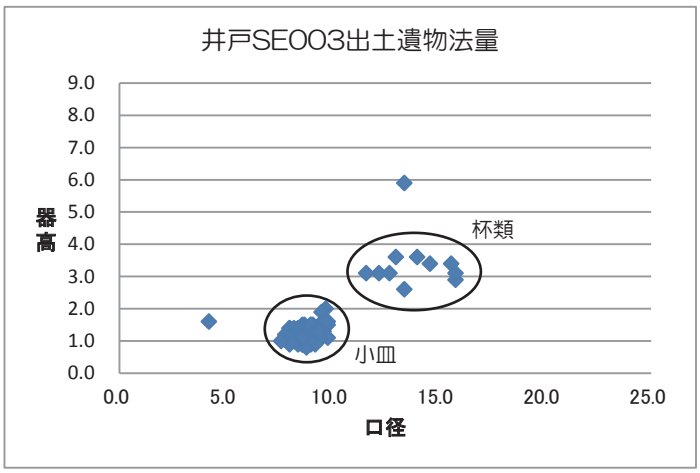


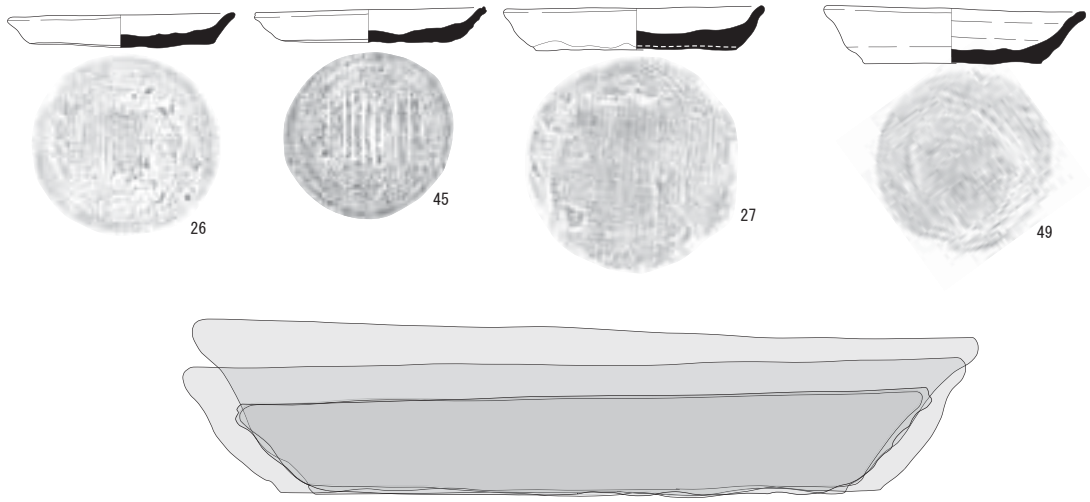
２　出土遺物について

当調査区からは井戸、土坑、墓から多くの遺物が一括性の高い資料として出土している。左記に掲載している土師器皿、杯類の法量分布図などはその一括性の高さから分類できた証拠ともなろう。この時期の法量による分類はこれまでにも数多くなされているためここでは詳細に触れないが、今後二本木遺跡群出土の遺物を検討する際には必要な資料となることは明白である。

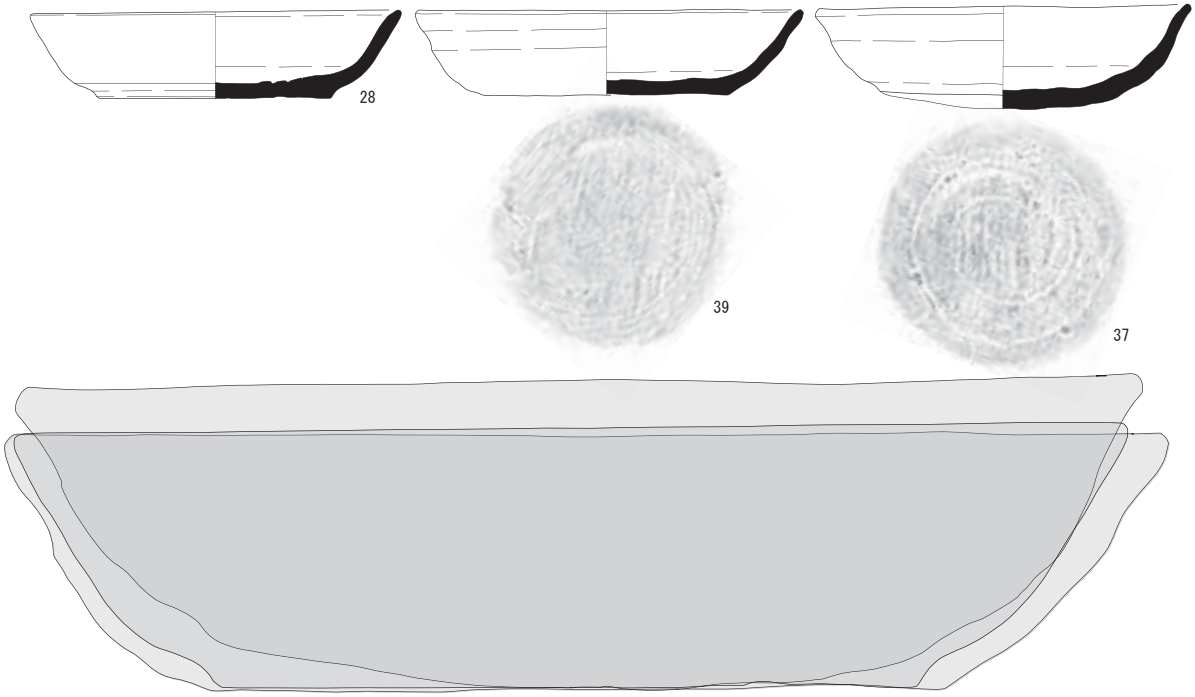


この法量分布図をもとに次ページではデータを作成した遺物の基本形を示している。12 世紀代の土師皿・杯類であるが規格性は高くほぼ同形の皿が数十枚の単位で出土してることは注目される。土器調整はヘラ切り後、板状圧痕を有するものが割合的には多いが、一部には糸切り後板目圧痕なども入っている。杯類底部について、底部整形の違いにより平底、丸底の違いがあるものも含まれる。全体数が少ないことから当初から丸底を意識した形であったかは分からない。このことから、この時期の土





井戸 SE001 出土遺物及び実物大模式図



井戸 SE002 出土遺物及び実物大模式図

器形状のについて、1/1 で模式図を掲載しているので、大きさを実感して頂きたい。

その他に注目される遺物は墓からの出土遺物がある。墓 ST001 からは在地形の土師皿に研磨土師器、二次的に被熱した緑釉陶器水滴、須恵質陶器壺、鉄製紡錘車など 10 世紀の一括資料がある。(Fig. 168) 墓 ST002、墓 ST005 出土遺物についても、同時期の遺物とみられることから、墓が作られる 10 世紀には一時的に集落としての機能から葬送の場へと土地利用の転換が行われていたと考えられる。

等遺跡からの出土遺物のなかで最も古い時期の遺物は、縄文晩期後半期の土器の一群がある。(Fig. 182) 調査の過程で縄文晩期の土器が出土することは認識していたが遺構を確認するまでには至らなかった。出土している遺物も小片であり当地において廃棄されたものと考えるよりは周辺からの流入の遺物であると考えられる。

このことから、二本木遺跡群のなかで当該調査区で示した調査結果は、特異なものはなくこれまでに報告されてきた遺跡のあり方と一致するものであった。

引用・参考文献

白井克也『筑紫出土の獣脚硯』九州考古学第 79 号 2004
佐藤　信『古代の地方官衙と社会』日本史リブレット８　山川出版
網田龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会 1994
美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会 1994

古代の土器研究会 『古代の土器１　都城の土器集成』1992
古代の土器研究会『古代の土器研究』平安時代の緑釉陶器 - 生産地の様相を中心に - 第７回シンポジウム 2003 年 11 月 22 日・23 日
中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ｘ』1994
奈良文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成Ⅲ』史料第 59 冊
日本国有鉄道熊本鉄道管理局 『線路は続くよどこまでも』熊本鉄道管理局記念誌　昭和 62 年３月 31 日
熊本市立熊本博物館『西海道と肥後国 - 出土品からみた古代のくまもと -』平成 23 年度企画展 九州新幹線全線開業記念事業

熊本市教育委員会「二本木遺跡群第３次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報第１号』1995
熊本市教育委員会「二本木遺跡群第１次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 - 平 13・14 年度 -』2003
熊本市教育委員会「二本木遺跡群第２次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集 - 平 13・14 年度 -』2003
熊本市教育委員会『Ｉ - 第 18 次調査区発掘調査報告書 -』2005
熊本市教育委員会「二本木遺跡群第 21 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報第８号』2006
熊本市教育委員会「二本木遺跡群第 22 次調査区」『熊本市埋蔵文化財調査年報第９号』2007
熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ』二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書 2007
熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅲ』二本木遺跡群第 26 次調査区発掘調査報告書 2007
熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅳ - 二本木遺跡群第 27 次調査区発掘調査報告書 -』2007
熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅴ』二本木遺跡群第 28 次調査区（Ｅ～Ｉ・Ｋ・Ｌ・Ｐ地点）発掘調査報告書 2008
熊本市教育委員会『二本木遺跡群ＸⅤ』二本木遺跡群第 40 次調査区（Ｅ・Ｎ地点）、第 47 次調査区（Ｅ・Ｆ・Ｊ地点）発掘調査報告書 2011

熊本県教育委員会『二本木遺跡群』熊本県文化財調査報告第 174 集 1999
熊本県教育委員会『祇園遺跡』熊本県文化財調査報告第 188 集 2000
熊本県教育委員会『古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡』熊本県文化財調査第 216 集 2003
熊本県教育委員会『上ノ郷遺跡』熊本県文化財調査報告第 239 号 2007
熊本県教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ』熊本県文化財調査第 243 号 2008
熊本県教育委員会『二本木遺跡群Ⅲ』二本木遺跡群春日地区第８次　熊本県文化財調査第 256 集 2010
熊本県教育委員会『花岡山・万日山遺跡群、新馬借遺跡、北島遺跡群、万楽寺遺跡』熊本県文化財調査報告第 266 集 2010

古代の瓦　－二本木遺跡群（春日地区）出土瓦について－

944 ～ 946 は軒先瓦。軒先瓦は、熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ*』の分類に準じている。

944 は軒丸瓦 11 類か。945 は軒平瓦 8A 類で二重の隆起線で唐草門を表現した小型の軒丸瓦。本資料で下外区が段状をなすことが分かる。外区のうち内区との境界の段には隆起線が認められる。平瓦との接合は包み込み技法。946 は初出の軒平瓦。内区文様は左から右へ流れる偏行唐草文を二重の隆起線で表現している。外区は内向きの陽隆鋸歯文で平瓦との接合は包み込み技法。顎部の段が不安定である。947 は小型の丸瓦か。厚みが薄く復元径も小さい。948 は行基式丸瓦。側縁部は面取りと風化のため、破面・裁面は不明瞭。949 は凸面に格子目タタキが施されている。950 は凹面に布目の綴じ合わせがみられる。951 は玉縁式。凸面は丁寧なナデが施されている。凹面の布目も目が細かい。953 は粘土紐痕跡が明瞭。３㎝程度の幅が認められる。凸面は丁寧なナデ。側縁の凸面側にわずかに破面が認められる。952 も同様に粘土紐の痕跡が明瞭。幅は 3.5 ～ 4.5 ㎝。947 も同様。959 は凹面に縄目タタキが認められる。中世以降の可能性がある。957 は玉縁部分。凹面には明赤褐色粘土の付着が認められる。植物繊維の痕跡も認められ、使用時の葺材粘土の可能性がある。954 は比較的厚い瓦。焼成温度のためか器面の亀裂が激しい。側縁の凸面側に破面が認められる。凹面の布目は非常に粗い。958 は丸瓦の端部。端部に平行した面取りが施されている。956 は玉縁部分。体部と玉縁部で縄目タタキの方向に差異が認められる。本資料では凹面側に破面が認められる。

960 ～ 962 は SE056 から出土した一括性の高い資料である。960 は完形復元可能な玉縁式の丸瓦。凸面は縄目タタキ後丁寧にナデ調整を施している。凹面は糸切り痕と、粘土板の合わせ目が認められる。側縁には凸面側にわずかに破面が認められる。961 も玉縁式。玉縁部との段差が丸みを帯びる。凹面の段差も緩やか。玉縁部の段差は、粘土を補足している。不明瞭だが、粘土紐の痕跡が認められる。962 は平瓦。側縁が鈍角をなすこと、凸面の縄目タタキが側縁と平行していること、凹面の糸切り痕が本資料内で完結している可能性が高いこと、模骨痕が認められないことから、一枚作りで制作されたものと判断している。凹面には布の綴じ合わせが認められる。963 は凹面に模骨の痕跡が認められる。明瞭ではないが粘土紐の痕跡も認められるため、粘土紐桶巻き作りで制作された瓦と判断できる。964 は側縁から 60 度ほど傾いた方向に縄目タタキが認められる。965 は凹面の糸切り痕が明瞭な平瓦。凸面に赤褐色の付着物が認められる。963・966 は完形復元可能な平瓦。962 と同様で一枚作りで制作された可能性が高い。967 は平瓦と判断している。狭端が丸みを帯びている。凹面に粘土の接合線が認められるが、粘土紐の方向としては不自然である。968 は平瓦か。端部に向かって急激に薄くなっている。２次焼成を受けている。969 は平瓦の広端部。側縁も広端にも面取りが施されている。瓦の厚みが中央から側縁に向かって薄くなっている。凹面に不明瞭だが糸切り痕が認められる。模骨の痕跡もなく、一枚作りの可能性が高い。また、凹面に布目の痕跡が認められ、制作過程で凹型台が使用されたようである。970 も中央と端部で厚みが異なる平瓦である。糸切り痕は不明瞭。971 は平瓦狭端部。凸面は端縁に並行する縄目タタキ。凹面には糸切り痕が明瞭である。側縁端部はほぼ直角で、面取りが施されているようである。狭端面も面取りが施されている。972 も平瓦狭端側か。狭端部が風化しており明瞭ではない。凹面に糸切り痕跡が認められることと、側縁に破面・裁面が認められることから、粘土板桶巻き作りで制作された可能性が高い。模骨の痕跡は不明瞭である。976 は復元円弧は小さいが、いびつな平瓦であろう。凹凸面に糸切り痕が明瞭である。側縁には面取りが施されている。973 は凹面にナデが施されている。凸面には縄目タタキと格子目タタキが認められ、さらに布目痕が認められる。側縁は面取りが施され鋭角をなす。面取り時の調整が凸面側の端まで及び、格子目タタキを切っていることから、凸面タタキ後に側縁を仕上げたものと考えられる。981 は平瓦の小片。凹面に棒状のタタキ痕が認められる。979 は平瓦の小片。凹面に模骨の痕跡が認められる。974 は平瓦狭端側端部か。凹面の布目に狭端に並行したナデ消しが数条認められる。糸切り痕がわずかに認められる。975 は平瓦狭端部。明瞭な糸切り痕が認められる。凹面に、何らかの工具の端部と思われる圧痕が認められる。977 は平瓦。中央部と端部で厚さの差が認められる。凹凸面ともに糸切り痕が認められ、側縁が鈍角をなすことから、一枚作りの可能性がある瓦である。980 は凹面に模骨の痕跡が明瞭な平瓦。982 は熨斗瓦。３辺に明瞭な切断面がある。983 も熨斗瓦か。３辺に明瞭な切断面があるが、端部に広狭の差がある。凹面には明瞭な模骨痕が認められる。984・985 はいわゆる瓦玉。984 は凹面に葉脈状の文様を施したタタキが認められる。復元円弧からは平瓦の可能性が高い。凹面に粘土板の閉じ合わせ目状の痕跡が認められる。

熊本市文化振興課　文化財保護主事　金田一精

* 熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ』二本木遺跡群第 13 次調査区発掘調査報告書　2007

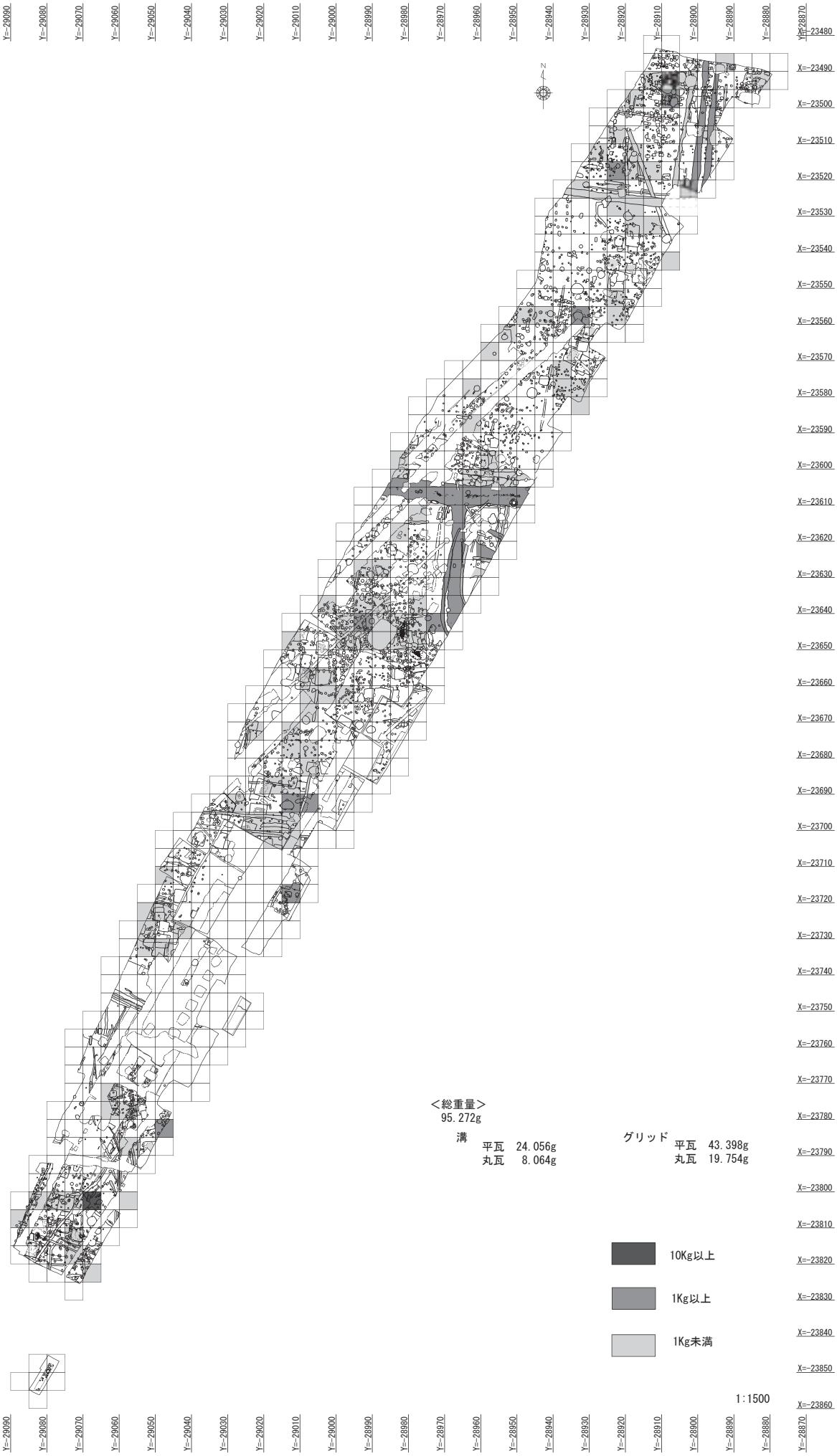


Fig.114　調査区出土（瓦）分布図

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
1	116	41	SA001	土師器	杯	(11.6)	(8.1)	–	3.6	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
2		34	SD001	土師器	杯	12.5	7.6	–	3.5	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
3			SD001	土師器	杯	12.1	7.3	–	3.8	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	石英．雲母．赤色酸化粒
4			SD001	土師器	杯	12.6	8.1	–	3.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
5			SD001	土師器	杯	11.9	7.8	–	3.1	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
6		–	SD001	土師器	杯	–	–	–	(0.5)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
7		34 84	SD001	土師器	杯	(13.2)	(10.2)	–	4.2	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
8		34	SD001	土師器	杯	(16.0)	(10.0)	–	3.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石 雲母．砂粒．赤色酸化粒
9			SD001	黒色土器	杯	(16.0)	7.8	–	7.0	黒 7.5YR2/1 灰黄 2.5Y7/2	黒 7.5YR2/1	長石．石英
10			SD001	土師器	三足土器	–	–	–	11.1	橙 5YR6/6	–	長石．石英．角閃石．雲母
11			SD001	須恵器	杯	(14.1)	(9.9)	–	4.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
12			SD001	須恵器	杯	(15.1)	–	–	4.9	にぶい黄橙 10YR6/4	灰白 10YR7/1	角閃石．砂粒
17	117		SD001	瓦質土器	すり鉢	(34.4)	(15.6)	–	14.2	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	長石．黒色粒
18			SD001	瓦質土器	すり鉢	(32.6)	(13.0)	–	14.3	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y6/1	長石．石英
22	118	35	SD004	土師器	小皿	(8.1)	(6.0)	–	1.6	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
23		–	SD005	土師器	杯	–	–	–	(0.8)	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．雲母．赤色酸化粒
24		36	SE001	土師器	小皿	9.1	7.4	–	1.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
25			SE001	土師器	小皿	8.9	7.6	–	1.5	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．赤色酸化粒
26			SE001	土師器	小皿	9.0	7.3	–	1.4	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．砂粒
27			SE001	土師器	小皿	10.4	8.0	–	1.8	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英．雲母．砂粒 赤色酸化粒
28			SE001	土師器	杯	14.7	9.2	–	3.5	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石．白色粒．黒色粒
29			SE001	土師器	杯	14.8	10.8	–	3.5	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．赤色酸化粒
30			SE001	土師器	杯	15.0	10.5	–	4.0	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 7.5YR7/3	角閃石．赤色酸化粒
31			SE001	土師器	高杯	–	–	–	(4.5)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒．黒色粒．小石粒
32			SE001	土師器	椀	(15.5)	(6.6)	–	5.5	橙 5YR7/6	灰褐 7.5YR4/2	微砂粒．黒色粒
33			SE001	黒色土器	杯	16.8	7.4	–	5.5	黒 N2/	黒 N2/	長石．雲母
36		37	SE002	土師器	杯	14.8	9.8	–	4.3	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
37			SE002	土師器	杯	15.0	9.4	–	4.3	浅黄橙 10YR8/4	橙 5YR6/8	角閃石．雲母 . 赤色酸化粒
38			SE002	土師器	杯	14.1	9.6	–	3.6	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR7/6	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
39			SE002	土師器	杯	15.4	9.8	–	3.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母 . 赤色酸化粒
40			SE002	土師器	杯	15.0	10.5	–	4.1	浅黄橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石 . 砂粒．赤色酸化粒
41			SE002	土師器	杯	15.0	9.1	–	3.5	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
42	119		SE002	土師器	小皿	9.8	7.5	–	1.6	にぶい橙 7.5Y7/4	にぶい橙 7.5Y7/4	砂粒．赤色酸化粒
43			SE002	土師器	小皿	9.4	7.6	–	1.5	明黄褐 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．長石 . 赤色酸化粒
44			SE002	土師器	小皿	9.4	7.2	–	2.1	白灰 10YR8/2	白灰 10YR8/2	長石．雲母
45			SE002	土師器	小皿	9.1	7.2	–	1.4	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．砂粒
46			SE002	土師器	小皿	8.8	6.9	–	1.8	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	角閃石 . 雲母．赤色酸化粒
47			SE002	土師器	小皿	8.8	7.3	–	1.5	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	長石．角閃石
48			SE002	土師器	小皿	9.6	6.8	–	1.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．砂粒．赤色酸化粒
49			SE002	土師器	小皿	10.5	7.1	–	2.3	浅黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR7/4	雲母 . 砂粒．赤色酸化粒
50			SE002	土師器	小皿	10.3	7.9	–	2.0	にぶい橙 7.5Y7/4	にぶい橙 7.5Y7/4	角閃石 . 砂粒．赤色酸化粒
51			SE002	土師器	小皿	9.1	6.6	–	1.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．細粒
52			SE002	黒色土器	小皿	(10.6)	(6.4)	–	1.5	黒 7.5YR2/1	黒 7.5YR2/1	長石
53			SE002	黒色土器	小皿	(10.0)	(6.4)	–	1.4	黒 7.5YR2/1	黒 N2/	長石．赤色酸化粒
54			SE002	黒色土器	小皿	(10.4)	(8.0)	–	1.6	黒 N2/	黒 N2/	長石．赤色酸化粒
55			SE002	黒色土器	小皿	(9.0)	(6.9)	–	1.7	黒 7.5Y2/1	黒 N2/	長石．角閃石
56			SE002	土師器	椀	(15.6)	7.0	–	5.6	明赤褐 (2.5Y5/8)	灰黄 (2.5Y6/2)	長石．角閃石．褐色粒
57			SE002	土師器	托	10.3	–	–	2.3	にぶい橙 5YR7/4	明褐灰 7.5YR7/2	長石．角閃石．赤色酸化粒
61	120	38	SE003	土師器	小皿	9.7	7.4	–	2.0	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石．雲母．砂粒
62			SE003	土師器	小皿	9.8	8.4	–	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．赤色酸化粒
63			SE003	土師器	小皿	9.5	7.2	–	1.1	浅黄橙 10YR8/3	橙 5YR6/6	長石．雲母
64			SE003	土師器	小皿	9.5	7.1	–	1.2	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	石英．雲母
65			SE003	土師器	小皿	8.0	7.2	–	1.4	浅黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母
66			SE003	土師器	小皿	9.0	7.2	–	1.3	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．赤色酸化粒
67			SE003	土師器	杯	(12.2)	7.2	–	3.1	赤褐 2.5YR4/8	灰黄褐 10YR6/2	長石．赤色酸化粒
68			SE003	土師器	杯	14.6	10.6	–	3.4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	微砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内器面に油煙付着	1
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	粘土巻き上げ痕跡	2
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　油煙顕著	3
横ナデ	横ナデ	手持ちヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　油煙顕著　簾状圧痕	4
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　油煙顕著　板状圧痕	5
–	–	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）　内底面赤彩	6
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）	7
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	8
ヘラ磨き．横ナデ	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（黒色土器ｂ類）高台が二重　内面ヘラ記号	9
ケズリ．ハケ目	–	–	–	三足土器（脚部）	10
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	赤焼け	11
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	12
ハケ目後ナデ	ハケ目後櫛描きすり目	ナデ	–		17
ナデ．指頭圧痕	櫛描きすり目	ナデ	–	片口	18
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	内底面一部煤付着	22
–	–	–	–	（墨書）内外面赤彩	23
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	24
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕　粘土巻き上げより剥離	25
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内器面から外底面煤付着	26
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕 糸切りが雑な為、粘土塊が厚く底径がわかりずらい	27
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	回転ヘラケズリ		28
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	糸切り	回転ヘラケズリ		29
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	ナデ	外器面煤付着	30
横ナデ．ナデ	横ナデ	–	ナデ	穿孔　外器面下部に指頭圧痕	31
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）	32
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ．ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器ｂ類	33
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕	36
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	37
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外底面の同じ位置に二次的に火熱をうけている 板状圧痕	38
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	（灯明杯）内外面煤付着　少量の油煙付着	39
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		40
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕	41
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	42
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（灯明皿）内外面油煙付着　板状圧痕	43
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕　内外面黒斑	44
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	45
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		46
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕　ヘラ切りによる粘土塊	47
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	糸切りの際、杯部にも糸切りの痕跡	48
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	外底面一部から内面口縁部に煤付着	49
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	50
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	ナデ	（灯明皿）　油煙付着	51
ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ切り	ヘラ磨き	黒色土器ｂ類　内外面にヘラ記号	52
横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	ナデ後ヘラ磨き	ヘラ磨き	黒色土器ｂ類	53
横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	ヘラケズリ	ヘラ磨き	黒色土器ｂ類	54
ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	黒色土器ｂ類	55
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）口縁部黒斑	56
横ナデ	横ナデ	横ナデ	–		57
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外底面中央はヘラ切り調整雑の為、歪みあり	61
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	糸切り雑な為底部の厚みが左右 2~3mm 違う 板状圧痕	62
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面全体、外面一部に赤彩を残す、朱墨入れの可能性あり 板状圧痕	63
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	64
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外底面調整後に粘土を張り付けたような痕跡あり ヘラ切り後未調整の為底面が雑である	65
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕	66
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）油煙顕著　内外面赤彩	67
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕	68

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
69	120	38	SE003	土師器	椀	(13.4)	(7.6)	–	5.9	浅黄橙 7.5YR8/3	明赤褐 2.5YR5/6	長石．微砂粒
70			SE003	黒色土器	椀	15.8	5.7	–	5.8	にぶい黄橙 10YR6/4	黒 2.5Y2/1	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
73		39	SE004	土師器	小皿	9.0	7.6	–	1.1	にぶい橙 7.5YR7/4	明黄褐 10YR6/6	角閃石．雲母 . 赤色酸化粒
74			SE004	土師器	小皿	8.8	7.3	–	1.3	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/6	石英．雲母
75			SE004	土師器	小皿	8.9	7.3	–	1.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母
76			SE004	土師器	小皿	10.3	7.9	–	1.9	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母 . 赤色酸化粒
77			SE004	土師器	小皿	(9.2)	(6.8)	–	1.6	灰白 10YR7/1	にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石 . 雲母．細粒
78			SE004	土師器	杯	(13.0)	(9.9)	–	3.4	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母
79			SE004	土師器	杯	15.8	8.8	–	3.7	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
80			SE004	土師器	杯	14.8	10.0	–	3.8	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄褐 10YR6/2	長石．雲母
81			SE004	土師器	杯	14.9	8.3	–	3.8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
82			SE004	土師器	杯	15.1	9.5	–	3.8	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄褐 10YR6/2	雲母
83			SE004	土師器	托	10.3	6.0	–	2.3	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母
84	121	46	SE005	土師器	杯	(12.8)	(8.0)	–	2.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	砂粒．赤色酸化粒
85			SE005	須恵器	蓋	(16.4)	–	–	(1.8)	黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	長石
88	122	40	SK001	土師器	小皿	10.0	7.4	–	1.8	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．赤色酸化粒
89			SK001	土師器	小皿	9.6	7.6	–	1.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
90			SK001	土師器	小皿	10.0	8.5	–	1.6	浅黄橙 7.5YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
91			SK001	土師器	杯	(15.2)	–	–	4.2	灰黄 2.5Y8/3	灰黄褐 10YR6/2	長石．石英
92			SK002	土師器	椀	11.4	6.3	–	4.3	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	石英．雲母．赤色酸化粒
93			SK003	土師器	杯	(9.8)	6.2	–	2.9	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい褐 7.5YR6/3	角閃石．砂粒
94			SK003	土師器	杯	15.0	10.1	–	3.5	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母
95			SK005	土師器	杯	16.5	8.8	–	4.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	微砂粒．赤色酸化粒
96		–	SK005	土師器	鉢	(16.8)	–	–	5.9	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄 2.5Y7/2	長石
97		40・88	SK005	須恵器	皿	13.9	11.7	–	1.8	灰黄 2.5Y6/2	灰 5Y6/1	微細粒
98		41	SK006	土師器	杯	(13.8)	9.8	–	4.0	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
99			SK006	土師器	杯	(14.8)	–	–	4.5	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石
100			SK006	土師器	杯	(15.1)	(11.2)	–	3.5	にぶい赤褐 2.5YR5/3	明赤褐 2.5YR5/8	長石．赤色酸化粒
101			SK006	須恵器	蓋	(19.8)	–	–	3.0	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	長石．石英
103	123		67-S-3	土師器	小皿	7.8	4.4	–	1.6	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	砂粒
104			81-C-14	土師器	小皿	9.5	6.7	–	1.5	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．角閃石。雲母 砂粒．赤色酸化粒
105			67-S-3	土師器	皿	11.2	6.7	–	3.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石
106			81-B-18	土師器	杯	(9.5)	7.7	–	2.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母
107		–	66-S-19	土師器	杯	13.3	10.5	–	4.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．赤色酸化粒
108		–	81-C-18	土師器	杯	–	–	–	0.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
109		–	66-T-19	土師器	椀	(12.6)	–	–	4.5	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
110		41	81-G-18	土師器	椀	14.7	8.4	–	6.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母
111			81-C-17	須恵器	杯	15.0	9.4	–	5.9	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	長石．雲母．砂粒
112			81-G-18	須恵器	杯	10.0	6.7	–	4.3	灰白 5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	長石
113			81-D-17	須恵器	杯	12.4	8.6	–	4.3	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．雲母
114			81-G-18	須恵器	杯	12.7	7.9	–	4.1	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y6/2	長石．雲母
115	124		SA011	土師器	皿	(15.7)	(13.0)	–	1.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石
116		–	SA013	土師器	皿	(20.3)	(12.6)	–	2.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
117		–	SA013	須恵器	杯	(10.8)	(6.0)	–	3.8	灰 7.5Y5/1	灰 10YR5/1	微砂粒
118		–	SA013	須恵器	杯	(13.2)	(7.3)	–	5.6	黄灰 2.5Y6/1	灰 5Y5/1	長石．角閃石．微砂粒
119		–	SA019	須恵器	椀	–	9.7	–	(5.7)	灰 N5/	灰 5Y5/1	微細な雲母．砂粒
120		–	SA019	須恵器	甕	(21.0)	–	–	(6.8)	灰 N6/	赤褐 (10YR4/3)	微細な砂粒
121		41	SB019	土師器	鉢	(10.8)	–	–	5.5	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	長石．雲母 . 赤色酸化粒
122		–	SB020	土師器	皿	(14.0)	(9.6)	–	1.2	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母
123		–	SB020	土師器	皿	(24.1)	(14.8)	–	5.4	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	長石．石英．赤色酸化粒
124		42	SB020	土師器	鉢	26.5	–	–	7.8	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
125		–	SB021	土師器	皿	(12.0)	(6.2)	–	1.7	明黄褐 10YR7/3	明黄褐 10YR7/3	雲母．赤色酸化粒
126		42	SB023	土師器	杯	13.6	6.9	–	3.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
127			SB023	土師器	椀	13.4	7.6	–	5.5	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英．赤色酸化粒
128		–	SB023	土師器	椀	(13.6)	(7.4)	–	6.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母．角閃石
129		–	SB023	須恵器	杯	(12.3)	(7.8)	–	3.8	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	雲母．微砂粒
131		–	SB027	土師器	杯	–	9.7	–	(4.4)	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR7/8	長石．赤色酸化粒
132		–	SB030	須恵器	蓋	(16.0)	–	–	(1.7)	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	長石．微細な砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（高台付椀）内外面赤彩	69
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ．ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器ａ類	70
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外底面は成形後に粘土を張り付けたものか？板状圧痕	73
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕により一部突起している	74
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	外底面のヘラ切り後の調整が雑　板状圧痕	75
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外器面赤彩 板状圧痕	76
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ		77
横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ヘラナデ	（灯明杯）内外器面油煙顕著	78
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	板状圧痕　杯部に糸切り痕	79
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕　外底面に調整後、再度粘土張り付けた痕跡	80
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	外器面に調整後再度粘土貼り付け	81
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕　ヘラ切りによる粘土塊	82
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明托）	83
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		84
ナデ．横ナデ	ナデ	–	–	内面重ね焼	85
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		88
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		89
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	90
横ナデ	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨きの痕跡はあるが摩耗がひどい為不明瞭	91
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（高台付椀）（灯明椀）内外面赤彩　巻き上げ痕あり	92
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）油煙付着	93
横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ナデ．ヘラ磨き	内器面ヘラによる暗文	94
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		95
ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	–	–		96
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（転用硯）内面に使用痕あり　歪みあり	97
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		98
横ナデ	横ナデ	–	ナデ	内外面赤彩	99
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	100
ナデ．回転ヘラケズリ 横ナデ	ナデ	–	–	内外面、口縁部に重ね焼き痕跡あり	101
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	（灯明皿）油煙付着	103
横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ	砂粒を多く含むため器面が粗い	104
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	105
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面赤彩	106
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		107
–	–	–	–	外底面墨書　内面赤彩	108
横ナデ	横ナデ	–	–	外器面墨書	109
横ナデ　ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	横ナデ　ヘラ磨き	横ナデ　ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）　内外面赤彩　内器面は内黒の技法を用い残りはヘラ磨きの後に赤彩を施している	110
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	ナデ	胴部墨付着	111
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		112
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		113
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後工具ナデ	ナデ		114
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	115
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		116
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	（高台付杯）	117
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	118
横ナデ	横ナデ．ナデ	–	ナデ	（高台付椀）	119
横ナデ．格子目タタキ	横ナデ．同心円当て具痕 後横ナデ	–	–	口縁部内器面～外器面自然釉	120
横ナデ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	外器面煤付着	121
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	内外面赤彩　内面煤付着	122
横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラケズリ	回転ヘラ磨き	（高台付皿）　内外面赤彩	123
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	ハケ目	ヘラケズリ		124
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	125
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	外底面圧痕	126
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）内外面赤彩	127
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）	128
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		129
横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）内外面赤彩	131
横ナデ．横ナデ後ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	–	–		132

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
133	124	42	SB030	須恵器	甕	(42.4)	–	–	(16.7)	暗黄灰 2.5Y5/2	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．砂粒
134		–	SB031	須恵器	椀	–	8.4	–	4.7	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	微細な砂粒
135	125	43	SD018	須恵器	杯	13.0	8.6	–	4.0	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	雲母．赤色酸化粒
136			SD019	土師器	杯	(12.3)	7.9	–	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．砂粒
137			SD019	土師器	杯	(13.2)	7.7	–	3.4	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	微砂粒
138			SD019	土師器	皿	(13.8)	8.0	–	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒
139			SD019	須恵器	杯	(14.0)	(10.7)	–	4.1	灰白 N7/	灰白 N7/	白色粒
140			SD019	須恵器	高杯	(22.4)	–	–	(2.8)	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y4/1	長石．雲母．砂粒
141			SD019	須恵器	椀	13.8	9.0	–	5.9	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．雲母
142			SD020	土師器	杯	(13.7)	(9.0)	–	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
143		–	SD021	土師器	杯	(14.3)	(8.6)	–	3.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
144		44	SD021	土師器	杯	14.0	(8.3)	–	3.5	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
145			SD021	須恵器	蓋	(14.2)	–	–	(2.1)	青灰 5B5/1	青灰 5B5/1	長石
146		44・88	SD021	須恵器	硯	(19.7)	(18.3)	–	2.9	灰 7.5Y5/1	灰 5Y5/1	微砂粒
147		–	SD022	須恵器	杯	(15.0)	(8.8)	–	6.3	黄灰 2.5Y6/1	灰黄褐 10YR5/2	長石
148		–	SD082	土師器	杯	(14.8)	(10.1)	–	3.9	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
149		–	SD082	須恵器	杯	(13.3)	(8.3)	–	4.5	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y6/2	長石
150		–	SD083	土師器	杯	(8.2)	(6.0)	–	2.5	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	長石．角閃石．雲母
151		44	SD083	土師器	皿	(10.1)	(7.6)	–	1.9	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	石英．雲母．赤色酸化粒
152		–	SD083	土師器	皿	(16.4)	(13.7)	–	1.8	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	長石．雲母．赤色酸化粒
153		–	SD083	土師器	杯	(13.2)	(7.4)	–	3.0	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母．赤色酸化粒
154		44	SD083	須恵器	蓋	(12.0)	–	–	1.8	灰 N5/	灰 10Y5/1	長石．石英．雲母
155			SD083	須恵器	椀	(15.3)	9.5	–	6.2	灰 N5/	オリーブ灰 2.5GY6/1	長石．角閃石
156		–	SD089	黒色土器	深鉢	(20.8)	–	–	(6.4)	明灰黄 2.5Y5/2	黒 N2/	長石．石英 . 雲母
157		–	SD089	土師器	甕	(27.6)	–	(27.0)	(20.0)	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
158	126	44	SD023	土師器	小皿	9.1	6.0	–	2.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	赤色酸化粒
159			SD023	土師器	杯	(11.8)	(7.4)	–	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
160			SD023	土師器	杯	(13.3)	(9.4)	–	3.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
161			SD023	土師器	杯	(12.9)	8.3	–	3.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤色酸化粒．黒色粒
162		44・88	SD023	須恵器	硯	–	–	–	(2.2)	灰 N5/	灰 7.5Y5/1	長石．雲母．微砂粒
164		–	SD024	土師器	杯	(14.8)	(10.4)	–	3.1	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	白色粒．黒色粒
165		–	SD026	土師器	杯	(14.2)	(9.4)	–	3.1	にぶい橙 7.5YR7/3	赤褐 10YR5/6	長石．雲母
166		–	SD026	土師器	杯	(14.7)	(10.2)	–	3.7	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英．角閃石
167		–	SD026	土師器	杯	(14.6)	(10.0)	–	3.4	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．微細な砂粒
168		–	SD027	須恵器	甕	(25.8)	–	–	(6.1)	灰 N5/	灰 N5/	長石．角閃石 微細な白石砂粒
169		84	SD028	土師器	椀	–	9.7	–	(5.4)	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
170		45	SD025	土師器	杯	13.2	9.1	–	3.3	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．砂粒．赤色酸化粒
171			SD025	土師器	杯	13.5	9.1	–	3.2	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 2.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
172			SD025	土師器	杯	13.1	8.4	–	3.2	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
173			SD025	土師器	杯	13.2	8.9	–	2.7	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英
174			SD025	須恵器	蓋	(17.2)	–	–	(2.1)	灰白 5Y7/1	灰 5Y6/1	長石．石英
175			SD025	須恵器	蓋	(16.4)	–	–	(2.9)	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	白色粒．黒色粒
176			SD025	須恵器	杯	12.0	8.1	–	3.7	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	白色粒
177			SD025	須恵器	杯	12.2	4.4	–	(3.5)	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	長石．石英
178			SD025	須恵器	杯	12.1	7.0	–	2.9	灰 N6/	灰 N5/	微細な砂粒
179			SD025	須恵器	杯	(14.8)	9.8	–	4.3	灰 N6/	灰 N6/	角閃石．砂粒
180			SD025	須恵器	壺	(10.2)	–	(10.0)	23.0	灰白 5Y5/1	灰白 5Y5/1	微細な砂粒
181		–	SD029	須恵器	杯	13.1	7.4	–	4.2	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	微細な雲母
182	127	43	SD092	土師器	小皿	6.0	4.8	–	1.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．砂粒．赤色酸化粒
183		84	SD093	土師器	杯	(11.2)	(7.4)	–	3.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
185		44	SD094	土師器	小皿	7.9	5.2	–	1.3	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	雲母．赤色酸化粒
189		–	SD095	土師器	小皿	7.4	5.3	–	1.9	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
190		–	SD095	土師器	杯	(10.9)	(6.4)	–	3.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
191		–	SD095	土師器	杯	–	(8.2)	–	(1.4)	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
201		46	SD099	土師器	杯	12.4	6.6	–	3.3	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ．横ナデ後ナデ 格子目タタキ	横ナデ．横ナデ後ナデ 同心円文当て具痕	–	–	頸部内器面～外器面自然釉	133
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（高台付椀）	134
横ナデ	横ナデ	ヘラ磨き	横ナデ	（墨書）　赤焼け土器	135
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	136
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内器面油煙	137
横ナデ．ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	（高台付皿）　外面赤彩	138
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	(高台付杯)	139
回転ヘラ削り．横ナデ	横ナデ	–	–	（杯部）	140
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕	141
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		142
横ナデ．回転磨き	横ナデ．回転磨き	回転ヘラケズリ	回転磨き		143
横ナデ．回転ヘラケズリ 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	ヘラ切り後ヘラケズリ	横ナデ後回転ヘラ磨き	（灯明杯）内外面赤彩	144
横ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ	–	–	口縁部外面～体部内面中位にかけて自然釉　焼き歪み　径不確実	145
横ナデ	横ナデ	手持ちヘラケズリ	横ナデ．ナデ	円面硯　9 脚　脚部剥離	146
横ナデ	横ナデ	（自然釉のため不明）	ナデ	外器面自然釉	147
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	148
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ	ナデ	(高台付杯)	149
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	150
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ		151
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	内外面赤彩	152
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	153
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–	内面重ね焼き痕　つまみ欠損	154
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ 横ナデ	横ナデ	(高台付椀)　宇城産	155
ヘラ磨き	ヘラ磨き	–	–	黒色土器 a 類　鉄鉢模倣土器（仏具）	156
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ ハケ目	–	–		157
横ナデ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り	ナデ	焼き歪み	158
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　内面油煙	159
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	外底面工具痕　内外面赤彩	160
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	161
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	ナデ	円面硯	162
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	164
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	165
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	166
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	167
横ナデ	横ナデ	–	–	口縁部外面ヘラ記号	168
横ナデ	横ナデ	ヘラ削り後横ナデ	ナデ	（墨書）（高台付椀）　内外面赤彩	169
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	170
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		171
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	172
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内底面ヘラ書き	173
横ナデ． 回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	–	–	つまみ欠損	174
横ナデ． 回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	–	–		175
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		176
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	外底面ヘラ書き	177
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		178
横ナデ	横ナデ	ナデ？	横ナデ後ナデ	（高台付杯）板状圧痕	179
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	調整確認不可	口縁部内器面～外器面、内底面自然釉	180
横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内器面鉄付着	181
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ		182
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）　内外面赤彩	183
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ	(灯明皿)　口縁内、外面油煙付着	185
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ		189
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ		190
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）　内外面赤彩	191
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　口縁部油煙	201

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
202	128	47	SE007	土師器	杯	(13.0)	(9.1)	–	3.1	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/3	長石．赤色酸化粒
203			SE007	土師器	杯	13.5	7.2	–	3.3	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
204			SE007	土師器	杯	(16.0)	(9.3)	–	3.8	橙 2.5Y6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英
205			SE007	土師器	杯	14.0	8.3	–	3.4	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母．赤色酸化粒
206			SE007	土師器	小型甕	(16.4)	–	–	15.7	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	長石．石英
208			SE007	須恵器	蓋	16.2	–	–	2.0	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．砂粒
209			SE007	須恵器	蓋	16.8	–	–	2.2	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	石英
210		88	SE007	須恵器	蓋	–	–	–	(0.9)	灰 7.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．砂粒
211		47	SE007	須恵器	杯	(13.1)	(9.0)	–	3.8	黄灰 2.5Y4/1	褐灰 10YR4/1	長石．雲母
212			SE007	須恵器	杯	12.7	8.1	–	4.1	灰 N5/	灰 N5/	長石．石英．黒色粒
213		–	SE007	須恵器	杯	(12.4)	(9.0)	–	4.2	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．石英
214		47	SE007	須恵器	杯	(12.8)	7.2	–	5.0	灰 N5/	灰 7.5Y5/1	白色粒
215			SE007	須恵器	甕	(23.0)	–	–	(7.0)	灰オリーブ 7.5Y4/2	灰 N4/	長石．黒色粒
216		–	SE007	須恵器	甕	(25.6)	–	–	(10.8)	灰 7.5YR4/1	黄灰 2.5Y4/1	長石．石英．赤色酸化粒
217		47	SE007	須恵器	長頸壺	(16.9)	–	–	(18.8)	暗灰 N3/	灰 N5/	微砂粒
218	129	46	SE008	土師器	杯	(13.7)	9.8	–	3.7	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/2	長石．雲母 . 赤色酸化粒
219			SE008	土師器	杯	16.4	9.6	–	4.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母 . 赤色酸化粒
220			SE008	土師器	椀	(18.5)	10.0	–	9.3	にぶい橙 5 YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英
221			SE008	須恵器	杯	–	(9.0)	–	(1.5)	灰 N6/	灰 N6/	長石．石英．雲母
222		48	SE009	土師器	皿	15.0	9.8	–	2.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
223			SE009	土師器	杯	10.8	6.0	–	3.0	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	微細粒
224			SE009	黒色土器	椀	(15.0)	–	–	(6.0)	にぶい黄橙 10YR6/3	黒 N2/	長石．赤色酸化粒
225			SE009	土師器	托	12.8	6.9	–	3.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母
226			SE009	須恵器	杯	(16.0)	(9.0)		6.1	褐灰 10YR4/1	橙 7.5YR7/6	砂粒
227		46	SE010	土師器	杯	(14.5)	(10.9)	–	3.7	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	石英．雲母．赤色酸化粒
229			SE012	土師器	杯	16.0	8.6	–	4.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．角閃石．雲母
230		48	SE013	土師器	杯	13.4	9.8	–	2.8	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR/4	長石．黒色粒．赤色酸化粒
231			SE013	土師器	杯	(14.3)	10.3	–	4.1	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．赤色酸化粒
232			SE013	土師器	杯	14.7	10.4	–	4.5	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
233			SE013	土師器	杯	13.6	9.1	–	4.2	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 2.5YR6/8	微砂粒
234			SE013	土師器	甑	(28.9)	–	–	(15.4)	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．黒色粒
235			SE013	須恵器	杯	15.3	10.0	–	4.3	灰 5 Y6/1	灰 5 Y6/1	長石．石英．黒色粒
236	130	–	SE017	土師器	杯	(14.0)	(7.6)	–	3.4	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/4	長石
237		–	SE017	土師器	杯	(14.4)	(9.0)	–	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黒色粒．赤色酸化粒
238		49	SE017	土師器	杯	(13.5)	(7.4)	–	3.3	橙 5YR6/6	赤橙 10YR6/6	長石．雲母
239			SE017	土師器	杯	13.5	7.4	–	3.1	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母
240		–	SE017	土師器	杯	(12.0)	(8.8)	–	3.6	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/8	長石．雲母．赤色酸化粒
241		–	SE017	土師器	杯	(11.8)	(8.0)	–	3.6	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
242		49	SE017	土師器	杯	(14.8)	(9.0)	–	5.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．微砂粒
243			SE017	土師器	皿	15.1	12 0	–	1.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．石英．雲母
244			SE017	土師器	甕	(27.0)	–	–	(9.5)	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母
245			SE017	土師器	甕	(23.6)	–	(23.8)	(12.9)	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
246			SE017	須恵器	杯	13.2	8.1	–	4.3	灰 7.5Y5/1	灰 N5/	雲母．微砂粒
247			SE017	須恵器	盤	(18.7)	(13.4)	–	3.0	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	微砂粒
248		–	SE018	土師器	小皿	(9.7)	(8.7)	–	1.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
249		49	SE018	土師器	杯	12.8	9.2	–	3.7	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
250		–	SE018	土師器	杯	(13.8)	(8.0)	–	3.5	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
251		–	SE018	土師器	甕	(24.6)	–	(22.4)	(10.2)	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
252		49	SE018	土師器	壺	(11.8)	–	(23.0)	(19.4)	にぶい橙 7.5YR7/4	明赤褐 2.5YR5/6	長石．赤色酸化粒
253			SE018	土師器	燭台	5.7	4.5	–	7.7	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．雲母
254			SE018	須恵器	杯	14.4	10.8	–	4.1	灰白 N7/	暗灰黄 2.5Y5/2	長石．雲母
255		–	SE018	須恵器	杯	(11.0)	(7.1)	–	3.6	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	長石．雲母
256		49	SE018	須恵器	杯	12.5	9.3	–	4.2	灰 N5/	灰 N5/	長石．黒色粒
257	131	50	SE019	土師器	椀	(11.9)	(6.7)	–	6.3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
258		10・50 88	SE019	須恵器	硯	残長 (7.7)	残幅 (9.8)	–	(2.9)	灰 N6/	にぶい赤褐 5YR5/3	長石．黒色粒
259		50	SE020	土師器	杯	12.0	6.6	–	5.1	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR7/6	長石．赤褐色粒
260			SE020	土師器	杯	15.8	8.3	–	3.7	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩　煤付着	202
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	ナデ	ナデ	廃棄後に火を受けたような煤が内外面に付着	203
回転ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	外器面煤付着	204
横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	(灯明杯）内外面煤付着　全体に赤彩	205
ナデ．ヘラケズリ	ナデ．ヘラケズリ	ナデ．ヘラケズリ	ヘラケズリ	胴部の内外面油煙、二次的に火熱を受けている	206
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–		208
横ナデ．ナデ	ナデ	–	–	赤焼け土器	209
ナデ	ナデ	–	–	(転用硯）　内面に使用による磨きあり	210
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ 横ナデ	ナデ	（高台付杯）焼きムラ	211
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	(高台付杯）外器面自然釉	212
横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	213
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	(高台付杯）	214
横ナデ．描き目	同心円文	–	–	外器面自然釉	215
格子目叩き後平行叩き	同心円文	–	–		216
横ナデ 格子目タタキ後ナデ	横ナデ	–	–	（高台付壺）	217
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	218
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩　口縁端部の一部煤付着	219
横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	(高台付椀) 顔料を溶かす為に使用した土器　顔料付着	220
横ナデ	–	横ナデ	横ナデ	（転用硯）（高台付杯）　貼付け高台　外底面朱墨付着	221
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩　外底面一部赤彩なし	222
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	(灯明皿) 板状圧痕　　内外器面油煙顕著	223
横ナデ	ヘラ磨き	ナデ	ナデ	（高台付椀）高台剥離　黒色土器 a 類	224
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩　穿孔あり　外底面油煙付着	225
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	（高台付杯）貼付高台	226
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		227
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	229
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		230
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内器面黒斑	231
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（高台付杯）貼付高台　内外面赤彩（外底面のみ少量）	232
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（高台付杯）内外面赤彩	233
横ナデ．ナデ．ハケ目	ヘラケズリ	–	–		234
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	235
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き		236
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り 回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き		237
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	（灯明杯）外面口縁部に油煙	238
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラ磨き	外底部にヘラ記号　内外面に赤彩	239
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面に赤彩	240
横ナデ．ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面の一部に赤彩　内面に煤付着	241
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）　内外面に赤彩	242
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	外底面を除き赤彩　口縁部に煤付着	243
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外面に黒斑あり	244
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		245
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（高台付杯）	246
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	ナデ	（高台付盤）　焼き歪み	247
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面に赤彩	248
横ナデ	横ナデ	手持ちヘラケズリ	横ナデ	外面に煤付着　杯部の一部を打ち欠いている	249
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き		250
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	–	–		251
横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付壺）　高台部は剥離	252
横ナデ．ナデ．ケズリ	横ナデ	ケズリ．ナデ	ナデ．指頭圧痕	内外面に煤付着	253
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後工具ナデ	横ナデ	内外面に自然釉	254
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	横ナデ	（高台付杯）	255
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付杯）　焼き歪み	256
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）	257
ケズリ	ケズリ．ナデ	ケズリ	ケズリ	（風字硯）　仕切りより右側に朱墨付着	258
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		259
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	板状圧痕　内外面赤彩　内器面に工具痕	260

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
261	131	50	SE020	土師器	甕	(15.7)	–	(21.7)	(13.2)	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母
262			SE024	土師器	脚付鉢	14.4	7.8	–	7.7	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
263			SE025	須恵器	蓋	(11.1)	–	–	3.3	にぶい赤褐 2.5YR5/4	橙 5YR6/6	長石．石英 . 砂粒
264			SE025	須恵器	杯	(14.6)	8.5	–	4.3	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	長石．石英 . 砂粒
265		51	SE026	土師器	甕	(19.8)	–	(18.4)	(18.9)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
266			SE026	土師器	甕	25.4	–	(24.2)	(10.2)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
267			SE026	土師器	壺	(21.6)	–		(11.0)	赤褐 2.5YR4/6	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．石英
268	132	–	SE027	土師器	杯	(13.7)	(9.4)	–	2.8	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	長石．石英．角閃石．雲母
269		–	SE027	土師器	杯	(13.2)	–	–	(4.3)	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
270		–	SE027	須恵器	壺	–	(11.2)	(24.5)	(11.9)	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	長石．黒色粒
271		51	SE027	須恵器	壺	–	6.4	16.4	(14.0)	灰 N6/	灰 N6/	長石．石英．黒色粒
273		–	SE028	土師器	杯	–	(10.0)	–	1.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	角閃石．赤色酸化粒
274		–	SE028	土師器	甕	(23.8)	–	(20.2)	(8.9)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英．角閃石．雲母
275		51	SE028	土師器	甕	(27.4)	–	(25.5)	(9.9)	灰黄褐 10YR6/2	橙 5YR7/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
276			SE028	須恵器	蓋	(15.7)	–	–	(2.3)	灰黄 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y6/1	長石．雲母
277			SE028	須恵器	杯	(13.3)	(8.0)	–	3.7	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
278		–	SE028	須恵器	杯	(16.5)	(9.8)	–	5.8	灰黄 2.5Y6/2	灰白 2.5Y7/1	長石．砂粒
279		–	SE028	須恵器	杯	–	(9.0)	–	(4.7)	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	長石．雲母．砂粒
280		–	SE028	須恵器	壺	–	(11.2)	–	(6.3)	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．雲母．砂粒
281		–	SE028	須恵器	壺	–	12.0	–	(12.1)	褐灰 10YR6/1	黄灰 2.5Y4/1	長石．砂粒
282	133	51	SE028	須恵器	甕	(21.2)	–	–	(10.3)	黄灰 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y8/3	細砂粒．黒色粒
283			SE028	須恵器	甕	(21.0)	–	–	(6.3)	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	長石
284		–	SE028	須恵器	甕	–	–	–	(7.5)	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．石英．雲母
285		–	SE028	須恵器	甕	(19.8)	–	–	(8.9)	黄灰 2.5Y5/1	にぶい赤褐 2.5YR5/4	長石．石英
286		51	SE028	須恵器	甕	–	–	–	(9.5)	灰黄褐 10YR5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	長石．石英．黒色粒
287			SE028	須恵器	甕	(18.1)	–	–	(9.6)	褐灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．石英．黒色粒
288			SE028	須恵器	甕	(24.6)	–	–	(9.5)	黄灰 2.5Y4/1	暗灰 N3/	長石．石英
289			SE028	須恵器	甕	(45.9)	–	–	(13.3)	暗赤 10YR3/4	暗赤褐 2.5YR3/3	黒褐色粒
290	134	52	SE029	土師器	杯	13.6	8.4	–	3.1	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母
291			SE029	土師器	杯	13.8	8.6	–	3.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
292			SE029	土師器	杯	13.8	8.8	–	2.8	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	長石．雲母
293			SE029	土師器	杯	13.4	8.3	–	3.0	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英 . 雲母
294			SE029	土師器	杯	(14.3)	8.8	–	3.2	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英
295			SE029	土師器	杯	13.5	8.9	–	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
296			SE029	土師器	杯	(14.8)	(9.9)	–	4.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母
297		–	SE029	土師器	杯	(15.5)	11.1	–	4.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．角閃石．砂粒
298		52	SE029	土師器	杯	9.1	6.4	–	3.7	明赤褐 2.5YR5/8	橙 2.5YR6/8	雲母．微砂粒
299			SE029	土師器	鉢	(6.6)	6.2	–	5.9	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/4	長石．石英．雲母
300		–	SE029	土師器	片口鉢	(24.8)	–	–	(11.3)	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
301		52	SE029	土師器	竈	–	–	–	(7.7)	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	長石．石英．赤色酸化粒
302			SE029	須恵器	皿	(18.3)	(15.6)	–	2.1	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	雲母．微細粒
303			SE029	須恵器	杯	13.1	7.7	–	4.7	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．角閃石．雲母
304			SE029	須恵器	杯	(13.8)	(8.6)	–	4.6	にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄 2.5Y6/4	雲母．微細粒
305			SE029	須恵器	杯	15.5	9.6	–	5.7	褐灰 10YR6/1	灰 5Y6/1	長石．微砂粒
306			SE029	土師器	蓋	(17.5)	–	–	4.1	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	長石．石英．角閃石
307			SE029	須恵器	蓋	(22.4)	–	–	(4.3)	灰 5Y6/1	灰白 5Y7/1	角閃石．微砂粒
308			SE029	須恵器	壺	–	10.7	19.0	(11.9)	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y4/1	長石．白色粒
309	135	–	SE030	土師器	皿	(15.4)	(12.5)	–	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母
310		53	SE030	土師器	杯	14.0	8.0	–	4.0	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．角閃石．雲母
311			SE030	土師器	杯	12.2	6.3	–	3.1	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．雲母
312			SE030	土師器	椀	13.6	7.8	–	5.7	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．赤色酸化粒
313		–	SE030	土師器	椀	–	7.9	–	(2.4)	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	内外面赤彩　内外面に黒斑	261
ナデ	ヘラ磨き	ヘラケズリ．ナデ	ナデ	口縁内部に煤付着	262
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	擬宝珠つまみ　外器面に自然釉　内器面に工具痕	263
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	回転ヘラ切り．ナデ 横ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付杯）内面指頭痕	264
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	–	–		265
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．指頭圧痕 ヘラケズリ	–	–	口縁内部に黒斑あり	266
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	口縁内器面から外器面赤彩	267
横ナデ	横ナデ	手持ちヘラケズリ	ナデ		268
横ナデ	横ナデ	–	–		269
横ナデ．工具ナデ	横ナデ．工具ナデ	横ナデ．工具ナデ	横ナデ．工具ナデ		270
横ナデ．平行叩き	横ナデ．同心円文	横ナデ．平行叩き	横ナデ．同心円文		271
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	ナデ	（墨書）　板状圧痕	273
ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	–	–		274
ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	–	–	内器面の黒褐色は破面もみられる為、煮炊きによるものと思われる	275
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ	–	–		276
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		277
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（高台付杯）　内外面煤付着	278
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	279
横ナデ 回転ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ	ナデ	（高台付壺）	280
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ．ヘラケズリ	ナデ	ナデ	（高台付壺）　外底面に爪形状圧痕	281
横ナデ．格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		282
横ナデ．ハケ目 格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		283
横ナデ	横ナデ	–	–		284
横ナデ．格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		285
横ナデ．格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		286
横ナデ．描き目 格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		287
横ナデ．ハケ目 格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–	自然釉	288
横ナデ．ハケ目 格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–	頸部外器面ハケによる波状文	289
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	（灯明杯）　内外面油煙	290
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	ヘラ切り後 回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	（灯明杯）内外面赤彩 口縁部油煙　内外底部ヘラ記号	291
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	（灯明杯）　内外面赤彩　口縁内外面に油煙	292
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	ヘラ切り後 回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	内外面赤彩	293
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	ヘラ切り後 回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き		294
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ後ナデ	口縁外器面部一部煤付着	295
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		296
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外底面に磨き	297
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		298
ヘラ磨き．ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り．ヘラ磨き	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	299
ハケ目後ヘラ磨き	ケズリ後ヘラ磨き	–	–		300
横ナデ．ナデ．ケズリ	ナデ	–	–		301
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		302
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	303
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	304
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	305
回転ヘラケズリ．ナデ 回転ヘラ切り．横ナデ	横ナデ．ナデ	–	–	輪状つまみ　内外面赤彩、天井内部に煤付着	306
横ナデ	横ナデ	横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	つまみ剥離　内面に煤付着	307
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ	ナデ	ナデ		308
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	309
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩　外底面は再度粘土を張り付けた痕跡あり	310
横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ．ヘラ磨き	内外面赤彩	311
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）　内外面赤彩	312
横ナデ	–	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付椀）　高台を残し打ち欠いてある	313

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
314	135	–	SE030	黒色土器	杯	(15.2)	(7.6)	–	6.6	橙 7.5YR7/6	黒 N2/	長石．角閃石．雲母
315		–	SE030	土師器	鉢	(20.8)	–	–	(6.2)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
316		–	SE030	須恵器	横瓶	(11.0)	–	–	(5.1)	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	雲母．砂粒
317		53	SE030	須恵器	椀	15.0	8.2	–	8.0	灰白 10YR7/1	灰 N5/	長石．角閃石．雲母
318			SE030	須恵器	皿	(18.2)	(12.5)	–	3.7	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	雲母．砂粒
319			SE030	須恵器	甕	(18.8)	–	(34.8)	(21.6)	褐灰 7.5YR5/1	橙 7.5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
320			SE031	土師器	杯	(12.6)	(7.8)	–	3.8	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
321			SE031	土師器	壺	–	(26.6)		(11.4)	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
323	136	9・54	SE032	土師器	皿	15.6	10.5		1.8	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．微砂粒
324			SE032	土師器	皿	16.0	12.0		2.7	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．砂粒
325			SE032	土師器	小皿	10.4	8.1		2.5	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 5YR7/6	長石．石英
326			SE032	土師器	杯	9.8	4.5		3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
327			SE032	土師器	杯	12.8	8.3		3.0	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
328			SE032	土師器	杯	13.1	7.8		3.0	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母
329			SE032	土師器	杯	(13.8)	(8.8)		3.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．微砂粒
330			SE032	土師器	杯	(14.2)	(8.2)		3.8	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8	長石．雲母
331			SE032	土師器	杯	13.2	8.7		4.0	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母
332			SE032	土師器	杯	13.6	8.9		3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母
333			SE032	土師器	杯	(13.4)	8.5		2.9	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/6	長石
334			SE032	土師器	杯	12.8	8.2		2.5	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
335			SE032	土師器	杯	(13.6)	(10.4)		2.8	橙 5YR6/6	にぶい橙 5YR6/4	雲母．微砂粒
336			SE032	土師器	杯	12.8	8.6		3.9	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	長石．雲母
337			SE032	土師器	杯	12.6	7.6		3.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母 . 微砂粒
338			SE032	土師器	杯	(15.4)	(9.0)		3.7	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
339			SE032	土師器	杯	(15.2)	(9.4)		3.3	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．微砂粒
340			SE032	土師器	杯	12.6	7.7		3.1	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
341			SE032	土師器	杯	(14.4)	(8.4)		3.0	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 5YR6/4	長石．雲母．砂粒
342			SE032	土師器	杯	16.0	9.0		4.0	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 5YR6/4	雲母．微砂粒
343			SE032	土師器	杯	12.5	8.0		3.0	橙 5YR7/6	橙 5YR6/8	長石．雲母
344			SE032	土師器	杯	12.8	7.7		3.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石
345			SE032	土師器	杯	12.0	7.8		3.0	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	雲母．微砂粒
346			SE032	土師器	杯	14.0	8.4		2.7	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR6/6	長石．砂粒
347			SE032	土師器	杯	14.4	8.3		2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
348			SE032	土師器	杯	13.8	10.0		3.2	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	長石．砂粒
349	137	9・54	SE032	土師器	蓋	(15.0)			2.9	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	雲母．微砂粒
350			SE032	土師器	蓋	15.7			3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	雲母．微砂粒
351			SE032	土師器	蓋	17.4			3.4	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．微砂粒
352		9 54 85	SE032	土師器	杯	13.4	8.9		3.1	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
353			SE032	土師器	杯	(13.3)	9.0		3.3	にぶい橙 7.5YR7/3	明褐灰 7.5YR7/2	長石．雲母
354		9・54	SE032	土師器	杯	(13.2)	(7.8)		2.9	明褐灰 7.5YR7/2	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
355			SE032	土師器	杯	(13.8)	(9.2)		2.5	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
356			SE032	土師器	托	(18.0)	(12.2)		4.4	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	雲母．微砂粒
357			SE032	土師器	椀	16.0	7.3		6.5	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	長石．雲母
358			SE032	土師器	椀	15.4	8.4		6.8	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．微砂粒
359			SE032	土師器	椀	(18.4)	9.5		8.5	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．微砂粒
360			SE032	土師器	鉢	(23.8)	(12.8)		11.7	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石
361			SE032	土師器	甕	(24.0)	–	–	(8.7)	にぶい橙 7.5YR7/3	明褐灰 7.5YR7/2	長石．石英．雲母
362			SE032	土師器	甕	(15.6)	–	–	(4.7)	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR7/4	石英．雲母．砂粒
363			SE032	須恵器	蓋	15.8			2.9	灰 N6/	褐 10YR6/1	長石．石英．砂粒
364			SE032	須恵器	皿	(20.0)	(16.0)		2.5	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	砂粒
365			SE032	須恵器	杯	(12.6)	(8.0)		2.9	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	石英．雲母．砂粒
366			SE032	須恵器	杯	(13.2)	(8.4)		3.0	灰 N6/	灰 N6/	雲母．微砂粒
367			SE032	須恵器	杯	(12.2)	(7.4)		3.9	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石．砂粒
368	138	53	SE033	土師器	小皿	9.9	7.7	–	1.2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
369			SE033	土師器	小皿	9.8	8.1	–	1.8	にぶい橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
370			SE033	土師器	杯	(13.9)	(9.9)	–	3.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
371			SE033	黒色土器	椀	–	7.4	–	(2.6)	暗灰 N3/	暗灰 N3/	長石．雲母
372			SE033	須恵器	杯	(11.6)	7.4	–	3.8	灰 N6/	灰 N5/	微砂粒
373	139	–	SE034	土師器	小皿	9.2	7.3	–	1.9	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒

	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
	横ナデ．ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	横ナデ．ヘラ磨き	横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	黒色土器ａ類（高台付杯）内器面は手持ちヘラ磨き	314
	横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	－	－	内外面煤付着	315
	横ナデ．平行叩き	横ナデ．同心円文	－	－		316
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（高台付椀）	317
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラケズリ	（高台付皿）　内器面から外器面にかけて自然釉	318
	横ナデ．格子目叩き ハケ目	横ナデ．同心円文 平行叩き	－	－		319
	横ナデ．ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	ナデ	内外面赤彩	320
	横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	ナデ．ハケ目	－	（台付壺）	321
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	底部に組織痕あり	323
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ．ヘラ記号	内底面、口縁部に重ね焼き痕あり	324
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	底部に砂粒付着	325
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	326
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	外底部に組織痕あり	327
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		328
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		329
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外底面の一部を除き内外面赤彩　外器面に籾痕あり	330
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ		331
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	（灯明杯）口縁部に煤付着　内外面赤彩	332
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩	333
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		334
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外底面の一部を除き内外面赤彩	335
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩　内面に籾痕あり	336
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩　外底部に組織痕あり	337
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	338
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	339
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	340
	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		341
	回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		342
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ．ナデ	外底面の一部を除き内外面赤彩	343
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	344
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	345
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外底部を除いて全体赤彩	346
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		347
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	外底面の一部を除き内外面赤彩	348
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	内外面赤彩	349
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	内外面赤彩　外面一部に還元焔あり	350
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	内外面赤彩　外面一部に還元焔あり	351
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外底面に墨書　内外面赤彩	352
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外底面に墨書　外底面の一部を除き内外面赤彩	353
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外底面に墨書　外底面の一部を除き内外面赤彩	354
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外底面に墨書　外底面の一部を除き内外面赤彩	355
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	横ナデ	内外面に赤彩	356
	横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付椀）内外面赤彩	357
	横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付椀）	358
	横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付椀）外底面の一部を除き内外面赤彩	359
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	360
	横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	－	－		361
	横ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	－	－	口縁内部に工具痕　内外面煤付着	362
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	黒斑あり	363
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ		364
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		365
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	366
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ		367
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		368
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	369
	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	370
	ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	ヘラ磨き	回転ヘラ切り．ナデ	ヘラ磨き	黒色土器ｂ類	371
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	外底面に工具痕	372
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	373

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
374	139	–	SE034	土師器	小皿	8.7	6.8	–	1.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．赤色酸化粒
375		–	SE034	土師器	小皿	9.2	7.1	–	1.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．砂粒
376		–	SE034	土師器	小皿	9.0	7.3	–	1.5	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母．赤色酸化粒
380	140	55	SE035	土師器	杯	10.1	8.0	–	2.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．雲母．赤色酸化粒
381			SE035	土師器	杯	10.2	7.7	–	2.7	橙 5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	石英．雲母．赤色酸化粒
382			SE035	土師器	杯	10.6	6.9	–	2.8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
383			SE035	土師器	杯	11.4	7.3	–	3.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
384		–	SE035	土師器	不明	–	(5.5)	–	(0.5)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
385		–	SE035	土師器	杯	12.9	8.3	–	3.1	橙 7.5YR7/6	明赤褐 2.5YR5/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
386		55	SE035	土師器	杯	15.2	10.4	–	3.8	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．赤色酸化粒
387		–	SE035	黒色土器	杯	–	6.1	–	(3.1)	橙 5YR7/8	黒 N2/	長石．石英．赤色酸化粒
388		55	SE035	土師器	燭台	–	–	–	(7.6)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
389		–	SE035	須恵器	杯	(12.8)	(5.9)	–	3.4	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	長石．雲母
390		–	SE035	須恵器	蓋	(14.2)	–	–	(2.3)	灰白 5Y7/1	灰 5Y5/1	雲母．赤色酸化粒
391		–	SE035	須恵器	蓋	(14.6)	–	–	(2.9)	灰 5Y6/1	灰 7.5Y6/1	長石
392		–	SE035	須恵器	鉢	(21.2)	–	–	(7.4)	灰 N5/	灰 N5/	白色砂粒
393		55	SE035	須恵器	甕	(23.7)	–	44.0	(34.8)	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y4/1	白色粒．黒色粒
396	141		SE036	土師器	小皿	9.8	7.2	–	2.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
397		–	SE036	土師器	杯	(13.4)	(8.2)	–	(3.3)	明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/8	長石．石英．赤色酸化粒
398		55	SE036	土師器	杯	13.6	7.2	–	3.3	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
399		–	SE036	土師器	杯	(17.8)	(11.0)	–	3.4	橙 2.5YR7/8	赤 10R5/6	長石．石英．赤色酸化粒
400		55	SE036	須恵器	高杯	(21.4)	–	–	(3.2)	黄灰 2.5Y6/1	褐灰 10YR6/1	白色粒．黒色粒 赤色酸化粒
401			SE037	土師器	小皿	8.7	7.4	–	1.0	橙 7.5YR7/6	黄橙 10YR8/6	石英．角閃石．赤色酸化粒
402			SE037	土師器	小皿	8.3	6.5	–	1.1	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．角閃石
403			SE037	土師器	皿	15.5	12.8	–	1.6	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．白色粒．赤色酸化粒
404		–	SE037	土師器	杯	(10.8)	(9.6)	–	3.5	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．赤色酸化粒
405		–	SE037	土師器	杯	(13.4)	(8.5)	–	2.7	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石
406		55	SE037	黒色土器	椀	(16.2)	(6.3)	–	5.5	灰 N5/	黄灰 2.5Y5/1	長石
408		–	SE038	須恵器	杯	(12.4)	(7.2)	–	3.9	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石
409		–	SE038	須恵器	杯	(13.0)	(7.9)	–	4.7	灰 N6/	灰 5Y6/1	白色粒．黒色粒
410		56	SE038	須恵器	杯	(16.4)	9.8	–	6.2	灰白 N7/	灰白 N7/	砂粒
411		–	SE039	土師器	甕	(33.7)	–	–	(9.2)	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/6	長石．角閃石．褐色粒
412		56	SE039	須恵器	平瓶	–	–	17.4	(9.3)	灰白 N8/	灰 N4/	長石．角閃石
413		–	SE040	須恵器	蓋	(15.5)	–	–	(1.9)	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	白色粒
414		–	SE040	須恵器	蓋	(15.6)	–	–	2.1	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	白色粒．黒色粒
415		–	SE040	須恵器	杯	(12.3)	(7.8)	–	3.7	にぶい黄 2.5Y6/3	黄灰 2.5Y6/2	白色粒
416	142	56	SE042	土師器	杯	13.8	8.9	–	3.4	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	長石．石英
417		–	SE042	土師器	杯	16.6	10.5	–	4.2	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
418		56	SE042	須恵器	蓋	(15.6)	–	–	(2.0)	灰白 5Y7/1	灰 5Y6/1	微細な砂粒
419			SE042	須恵器	杯	(13.7)	–	–	(3.3)	灰 N5/0	灰 N5/0	長石．黒色粒
420		57	SE043	土師器	鉢	(16.8)	–	–	6.6	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．角閃石．雲母
421			SE043	土師器	鉢	(22.8)	–	(20.8)	(16.9)	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石．石英
422			SE043	土師器	甕	(15.3)	–	–	15.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．石英．角閃石．雲母
423			SE043	土師器	甕	(20.4)	–	(22.0)	(26.9)	明赤褐 2.5YR5/8	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．赤色酸化粒
424		56	SE044	土師器	杯	(12.7)	7.6	–	4.1	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
425			SE044	土師器	杯	(14.0)	(11.2)	–	4.4	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
426			SE044	土師器	杯	(15.2)	(12.0)	–	3.5	橙 5YR6/6	赤褐 2.5YR4/8	長石．石英
427			SE044	土師器	杯	(14.8)	10.4	–	4.0	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
429		–	SE045	土師器	杯	(14.6)	6.6	–	4.7	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
430	143	58	SE046	土師器	杯	12.1	7.7	–	3.6	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	糸切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	374
横ナデ	横ナデ	糸切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	375
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	376
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明杯）口縁部に油煙、煤付着	380
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明杯）口縁部に油煙付着	381
横ナデ．回転ヘラケズリ後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明杯）口縁部に油煙付着　外底面に粘土塊付着	382
横ナデ．回転ヘラケズリ後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）板状圧痕　口縁部に油煙付着	383
–	–	ヘラ切り	横ナデ	内底面に刻書	384
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		385
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	386
横ナデ．回転ヘラケズリ	ヘラ磨き	ヘラ切り	ヘラ磨き	黒色土器ａ類	387
横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ．横ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　内面煤付着	388
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕	389
横ナデ ヘラ切り後横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	–	–		390
ヘラ切り．ヘラケズリ 横ナデ	横ナデ	–	–	（転用硯）内器面研磨痕	391
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–		392
横ナデ．ナデ 格子目タタキ後カキメ	横ナデ．当て具痕 同心円文当て具痕	–	–	口縁部内外器面自然釉	393
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（灯明皿）口縁部に油煙　径不確実	396
横ナデ．磨き	磨き	ケズリ後ナデ	磨き		397
横ナデ．回転ヘラケズリ後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　外底面にハケメ状の工具痕	398
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		399
横ナデ．回転ヘラケズリ後横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	–	–	杯部　外面に自然釉　脚部欠損	400
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ		401
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ．ナデ		402
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ後ナデ		403
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ		404
横ナデ．回転磨き ケズリ後回転磨き	横ナデ 横ナデ後回転磨き	ケズリ後回転磨き	横ナデ後回転磨き	（灯明杯）内外器面に油煙	405
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ．ナデ	ヘラ磨き後ナデ	（高台付椀）黒色土器ｂ類	406
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		408
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り．横ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付杯）	409
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	410
横ナデ．平行タタキ 格子目タタキ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	口縁内器面に黒斑	411
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ		412
横ナデ ヘラケズリ後ナデ	横ナデ．ナデ	–	–		413
横ナデ ヘラケズリ後ナデ	横ナデ．ナデ	–	–		414
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	415
横ナデ．回転ヘラケズリ． 回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	ヘラ切り	ナデ．回転ヘラ磨き		416
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		417
横ナデ．ナデ	横ナデ	–	–		418
横ナデ． 回転ヘケズリ後横ナデ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		419
横ナデ．工具ナデ． ケズリ	横ナデ．工具ナデ	ケズリ	工具ナデ	内外面赤彩	420
横ナデ．ハケメ後ナデ． ハケメ	ケズリ後ナデ	ハケメ	ケズリ後ナデ		421
横ナデ．ハケメ． 工具ナデ	横ナデ．ケズリ	ハケメ	ケズリ	底部黒斑あり	422
横ナデ．ハケメ．ハケメ 後ナデ	横ナデ．ケズリ	ハケメ後ナデ	ケズリ	口縁～頸部内外面赤彩　胴部中位～底部にかけて黒斑	423
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		424
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	焼き歪み	425
ヘラ磨き （摩耗の為不明瞭）	ヘラ磨き （摩耗の為不明瞭）	ケズリ後ナデ	ヘラ磨き （摩耗の為不明瞭）	口縁部外面から内底面にかけて赤彩	426
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	外底面に指頭痕	427
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内器面に付着物	429
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		430

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
431	143	58	SE046	土師器	杯	12.0	7.7	–	3.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．雲母
432			SE046	土師器	椀	13.7	8.5	–	5.4	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．赤色酸化粒
433			SE046	土師器	椀	13.2	7.0	–	5.9	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	角閃石．雲母．白色砂粒 赤色酸化粒
434			SE046	土師器	椀	14.4	8.4	–	7.3	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英
435			SE046	土師器	椀	14.4	7.2	–	7.4	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英
436			SE046	黒色土器	椀	12.4	6.6	–	5.4	にぶい橙 7.5YR7/4	暗灰 N3/	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
437			SE046	黒色土器	椀	(12.2)	6.1	–	4.8	橙 5YR7/6	黒 2.5Y2/1	角閃石．雲母
438			SE046	土師器	甕	(20.6)	–	(20.2)	(12.7)	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	長石．石英．赤色酸化粒
439			SE046	土師器	甕	28.0	–	27.0	24.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR7/4	長石．石英
440			SE046	須恵器	杯	13.0	7.1	–	4.0	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/2	雲母．微細な砂粒
441			SE046	須恵器	杯	12.5	6.7	–	3.7	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	白色砂粒．黒色粒子
442			SE046	須恵器	杯	(13.7)	(8.2)	–	4.3	灰 7.5Y6/1	灰 10Y6/1	長石．雲母
443			SE046	須恵器	椀	(12.8)	6.8	–	6.3	灰 N5/	灰 N5/	微細な砂粒
444			SE046	須恵器	椀	(12.1)	7.2	–	6.1	灰 N5/	灰 N5/	微細な砂粒
445			SE046	須恵器	鉢	(16.0)	(8.0)	–	8.1	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．石英．雲母
446	144	59	SE047	土師器	皿	(16.3)	(15.8)	–	2.8	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石
447			SE047	土師器	杯	(14.0)	9.2	–	4.2	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
448			SE047	須恵器	杯	(13.0)	(10.2)	–	3.7	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	雲母．砂粒
449		–	SE048	土師器	甕	(17.4)	–	–	(11.1)	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．石英．雲母
450		88	SE048	須恵器	蓋	(16.2)	–	–	(1.1)	灰 N5/	灰 N5/	長石．石英
451		–	SE048	須恵器	杯	(18.0)	–	–	(5.1)	オリーブ黒 5Y3/1	灰 5Y5/1	長石．石英
452		59	SE049	土師器	杯	(10.0)	–	–	3.6	にぶい黄褐 10YR5/3	灰白 2.5Y7/1	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
453			SE049	土師器	杯	(15.0)	7.6	–	4.5	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．赤色酸化粒
454			SE049	土師器	杯	16.5	9.5	–	4.5	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．角閃石．雲母
455			SE049	土師器	杯	(17.5)	(15.5)	–	4.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
456			SE049	須恵器	杯	(15.0)	(11.1)	–	4.5	灰 5Y5/1	灰黄 2.5Y6/2	長石．石英
457			SE049	須恵器	甕	(21.6)	–	–	(6.0)	暗灰 N3/	灰 N4/	長石．石英．黒色粒
459		–	SE050	黒色土器	杯	(11.6)	–	–	3.5	にぶい黄橙 10YR6/4	黒N 2/	長石．角閃石
460		–	SE050	須恵器	甕	(43.6)	–	–	(11.9)	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	長石．白色粒．黒色粒
461	145	60	SI003	須恵器	杯	(13.2)	8.6	–	3.9	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6	微細粒
462			SI006	土師器	甕	(14.2)	–	(14.0)	12.9	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	長石．石英
463			SI006	須恵器	杯	(12.6)	(9.7)	–	4.1	灰 N5/	灰 10YR4/1	雲母
464			SI004	土師器	杯	(11.5)	(8.1)	–	4.9	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	砂粒
465			SI004	土師器	杯	(13.7)	(9.2)	–	4.0	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母
466			SI004	土師器	杯	(16.1)	(13.0)	–	3.1	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	白色粒．赤色酸化粒
467		61	SI015	須恵器	杯	(13.7)	9.2	–	4.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	雲母
468		60	SI007	土師器	杯	(13.0)	(8.9)	–	4.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微細粒
469			SI007	須恵器	蓋	(15.1)	–	–	2.0	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y6/1	微細粒
470		61	SI017	土師器	小皿	8.7	6.9	–	1.6	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
471			SI017	土師器	小皿	9.5	7.6	–	1.6	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
472			SI017	土師器	杯	15.9	10.7	–	4.1	淡黄 2.5Y8/3	灰黄 2.5Y7/2	角閃石．微細粒
473		59	SI002	土師器	杯	(14.9)	(10.2)	–	(4.2)	にぶい橙 7.7YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
474		60	SI018	土師器	甕	(18.0)	8.8	–	14.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
475			SI018	須恵器	杯	13.8	10.1	–	3.6	橙 2.5Y6/8	橙 2.5Y6/8	長石．石英．雲母
476			SI018	須恵器	深鉢	(21.4)	(13.7)	–	23.4	灰 5 Y5/1	黄褐 2.5Y5/4	長石．石英
477			SI019	須恵器	蓋	17.0	–	–	2.7	黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y7/1	砂粒
478	146	61	SI023	土師器	深鉢	(23.8)	(15.5)	–	18.3	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
479		–	SI024	須恵器	蓋	14.5	–	–	1.4	灰 N6/0	灰 N6/0	長石．石英．黒色粒
480		61	SI026	土師器	杯	13.4	8.2	–	3.5	にぶい黄橙 5YR7/4	にぶい黄橙 5YR7/4	長石．赤色酸化粒
481			SI026	須恵器	蓋	(17.0)	–	–	4.2	にぶい黄橙 7.5YR6/4	暗灰黄 2.5Y5/2	長石
482			SI026	須恵器	杯	(16.4)	(8.9)	–	5.6	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	長石
483		–	SI035	土師器	蓋	(17.2)	–	–	(1.8)	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
484		61	SI035	土師器	杯	(13.2)	8.0	–	3.1	にぶい橙 5YR6/4	橙 2.5YR6/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
485			SI035	土師器	杯	(13.6)	9.6	–	2.9	明赤褐 5YR5/6	赤褐 5YR4/6	長石．角閃石

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面に油煙	431
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付椀）内外面赤彩　板状圧痕	432
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）内外面赤彩	433
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）	434
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）内外面赤彩	435
横ナデ 回転ヘラケズリ	ヘラ磨き	工具痕 （静止ヘラ切り）	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器ａ類、外底面放射状のハケ状工具痕	436
横ナデ	ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器ａ類	437
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ後横ナデ． ケズリ後ナデ	－	－	外面煤付着	438
横ナデ．ハケメ． ハケメ後ナデ	横ナデ．ケズリ．ケズリ 後ナデ	ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ	内外面煤付着　胴部中位に穿孔（外側からの打撃）	439
横ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	440
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	口縁部内外器面油煙	441
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付杯）	442
横ナデ	横ナデ	工具痕 （静止ヘラ切り）	ナデ	（高台付椀）外底面工具痕（時計回り）	443
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）	444
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		445
横ナデ	ナデ	ヘラ切り後ケズリ	ナデ		446
磨耗のため調整不明	磨耗のため調整不明	磨耗のため調整不明	磨耗のため調整不明		447
横ナデ	横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	（高台付杯）	448
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ後ナデ	－	－		449
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	－	－	つまみ欠損	450
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付杯）高台剥離	451
横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	横ナデ	底部に黒斑	452
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		453
横ナデ	横ナデ	ケズリ	ナデ	内外面赤彩、外底面黒斑	454
横ナデ	ヘラ磨き	ヘラケズリ	ヘラ磨き		455
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	（高台付杯）	456
横ナデ．タタキ	横ナデ．ナデ	－	－	口縁部外面自然釉	457
ヘラ磨き	ヘラ磨き	－	－	黒色土器ａ類	459
横ナデ 格子目タタキ後横ナデ	横ナデ．同心円文当て具 痕．横ナデ	－	－		460
横ナデ	横ナデ	ナデ後ヘラ磨き	横ナデ	赤焼け土器	461
横ナデ　ハケ目　ナデ	横ナデ　ヘラケズリ	ハケ目．ナデ	ヘラケズリ		462
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（高台付杯）外面自然釉　口縁部を打ち欠いた形跡あり	463
横ナデ	横ナデ後ナデ	ナデ	横ナデ後ナデ		464
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	ナデ	廃棄後に煤が付着	465
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		466
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	赤焼け土器	467
横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	468
横ナデ．手持ちヘラ削り	横ナデ．ナデ	－	－		469
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		470
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	471
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	472
横ナデ後ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	口縁端部煤付着	473
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	ハケ目	ヘラケズリ	内器面黒斑　外器面赤彩	474
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		475
叩き後横ナデ	同心円文．横ナデ	叩き後ナデ	ナデ	（高台付深鉢）把手付　胴部に二条の沈線を廻る	476
横ナデ ヘラケズリ後ナデ	ナデ	－	－	焼き歪み	477
ヘラ磨き．横ナデ ナデ．指頭圧痕	横ナデ．ヘラ磨き	ナデ	－	（把手付深鉢）胴部に三条の沈線を廻る 内器面黒斑　外器面赤彩	478
横ナデ．ナデ	ナデ	－	－		479
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	外底面ヘラ記号	480
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	－	－	荒尾産	481
横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	482
横ナデ．回転ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	横ナデ．指頭圧痕	－	－	焼成は堅緻で胎土は須恵器の胎土であるが酸化焼成	483
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面油煙	484
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ナデ		485

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
486		61	SI035	土師器	鉢	26.7	–	–	7.9	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．角閃石．赤色酸化粒
487		–	SI035	土師器	甕	(31.4)	–	(26.2)	(9.0)	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	長石．角閃石 雲母．赤色酸化粒
488	146	61	SI035	須恵器	蓋	(17.4)	–	–	1.7	灰 (N5/)	灰 (N5/)	砂粒
489		–	SI035	須恵器	甕	(19.0)	–	–	(7.7)	灰 (N5/)	暗灰 (N3/)	長石．石英
490		–	SI035	須恵器	甕	(21.0)	–	–	(7.8)	灰黄 2.5Y6/2	灰 5Y6/1	長石．黒色粒
491		–	SI036	土師器	蓋	(18.2)	–	–	(2.6)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．石英．雲母
492		–	SI036	土師器	杯	(13.3)	8.0	–	2.8	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR5/4	微砂粒
493			SI036	土師器	杯	(16.0)	(10.6)	–	4.1	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	長石．赤色酸化粒
494			SI036	土師器	椀	14.0	6.4	–	4.8	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
495		63	SI036	土師器	杯	19.0	12.0	–	6.2	橙 2.5YR6/6	明赤褐 7.5YR5/8	長石．角閃石
496			SI038	土師器	鉢	(19.4)	(9.6)	–	11.0	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．赤色酸化粒
497			SI038	須恵器	杯	15.4	8.6	–	4.1	灰黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/3	赤色酸化粒
498			SI038	須恵器	壺	(13.0)	–	(20.8)	(9.2)	暗褐 10YR3/4	暗褐 10YR3/4	長石．石英
499	147	–	SI039	土師器	甕	(15.8)	–	(14.8)	(6.1)	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母
500		–	SI040	土師器	杯	(15.0)	(10.2)	–	3.8	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．石英．赤色酸化粒
501		–	SI040	土師器	椀	–	7.5	–	(4.2)	明赤褐 5YR5/6	赤 10R4/6	長石．石英
502		–	SI040	土師器	鉢	(27.8)	–	–	(6.4)	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
503			SI042	土師器	皿	16.4	14.4	–	2.3	にぶい橙 7.5YR6/4	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．赤色酸化粒
504			SI042	土師器	杯	14.0	10.2	–	3.3	橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/3	雲母．赤色酸化粒
505		65	SI042	土師器	杯	(13.7)	(10.6)	–	3.5	にぶい橙 5YR7/4	橙 5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
506			SI042	土師器	鉢	(26.8)	–	–	(8.2)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
507			SI042	須恵器	蓋	(12.1)	–	–	2.3	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	雲母．砂粒
509			SI044	土師器	蓋	(16.8)	–	–	(2.1)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	微砂粒．雲母
510			SI044	土師器	蓋	(14.8)	–	–	(1.9)	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．赤色酸化粒
511			SI044	土師器	皿	15.7	13.4	–	1.5	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	長石．石英．雲母
512			SI044	土師器	杯	13.5	9.1	–	3.8	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．雲母
513		62	SI044	土師器	杯	13.6	7.9	–	3.0	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英．雲母
514			SI044	土師器	杯	(16.6)	9.3	–	4.2	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．雲母．赤色酸化粒
515	148		SI044	土師器	皿	(23.3)	13.4	–	5.1	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	長石．雲母．赤色酸化粒
516			SI044	土師器	鉢	(25.0)	–	–	10.8	にぶい黄橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 7.5YR7/3	長石．石英．雲母
517		–	SI044	土師器	鉢	(31.2)	–	–	(11.7)	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英
518		–	SI044	須恵器	杯	(12.3)	7.4	–	3.6	灰 N5/	灰 N5/	角閃石
519		–	SI044	須恵器	杯	(9.0)	(4.8)	–	3.9	灰 N5/	灰 N5/	石英
520		62	SI044	須恵器	杯	(11.2)	8.5	–	4.2	灰白 10YR8/1	灰 5Y6/1	長石．雲母
521			SI044	須恵器	盤	(26.0)	(21.6)	–	3.6	灰 N5/	暗緑灰 7.5GY4/1	角閃石
522		–	SI044	須恵器	壺	(14.6)	–	(20.6)	(10.3)	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y6/2	砂粒
524		–	SI045	須恵器	杯	(15.5)	(9.0)	–	5.6	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	長石．石英
525		–	SI045	須恵器	高杯	–	(9.5)	–	(5.4)	明赤褐 2.5YR3/4	暗赤褐 5YR3/4	白色粒
526		–	SI046	土師器	杯	14.4	10.1	–	4.4	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
527		–	SI046	須恵器	杯	(14.9)	(12.1)	–	3.9	灰黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/3	雲母．白色砂粒
528		88	SI047	須恵器	杯	(13.6)	(10.2)	–	3.8	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	長石．石英
529		63	SI048	土師器	蓋	(15.2)	–	–	3.4	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英．赤色酸化粒
530		–	SI048	土師器	杯	(15.2)	(10.2)	–	2.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	石英．雲母．赤色酸化粒
531		–	SI048	土師器	杯	(12.8)	(4.8)	–	(3.6)	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
532		63	SI048	土師器	杯	(13.2)	(9.6)	–	3.8	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英
533		–	SI048	須恵器	蓋	(12.7)	–	–	(1.7)	褐灰 7.5YR6/1	橙 2.5YR6/8	角閃石．雲母
534		–	SI048	須恵器	蓋	(14.1)	–	–	2.3	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/2	砂粒
535	149	63	SI048	須恵器	蓋	12.5	–	–	2.0	灰 5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	砂粒
536			SI048	須恵器	蓋	17.2	–	–	3.4	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	砂粒
537		–	SI048	須恵器	蓋	(23.4)	–	–	(2.1)	灰 N5/	褐灰 10YR5/1	長石．砂粒
538			SI048	須恵器	皿	14.9	12.5	–	2.0	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石．石英
539		63	SI048	須恵器	杯	13.8	10.5	–	4.2	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
540			SI048	須恵器	杯	(17.1)	(13.5)	–	6.2	にぶい赤褐 5YR5/3	橙 7.5YR6/6	砂粒
541		–	SI048	須恵器	杯	(14.0)	(7.6)	–	4.4	灰 N6/	灰 5Y6/1	角閃石．微砂粒
542		–	SI048	須恵器	杯	(14.1)	(9.5)	–	4.3	暗灰黄 2.5Y4/2	暗灰黄 2.5Y5/2	微砂粒
543		–	SI048	須恵器	杯	(14.7)	(9.0)	–	5.9	灰白 10YR7/1	灰白 10YR8/1	角閃石．雲母．砂粒
544		–	SI048	須恵器	短頸壺	(11.6)	–	–	(5.5)	灰 N6/	灰白 N7/	白色砂粒
545		–	SI048	須恵器	短頸壺	(13.0)	–	–	9.3	灰 N4/	灰 N6/	砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ．ナデ	ナデ．ヘラケズリ	ナデ	ナデ		486
ナデ．ハケ目	ナデ．ヘラケズリ	–	–		487
横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ	–	–		488
横ナデ．格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		489
横ナデ．描き目 格子目叩き	横ナデ．同心円文	–	–		490
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	つまみ部剥離	491
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラ磨き	（灯明杯）内底部油煙	492
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	内外面赤彩	493
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）（灯明椀）　外面に油煙	494
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	（高台付杯）　内外面赤彩	495
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラケズリ．ナデ	ナデ		496
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ナデ	焼き歪み	497
横ナデ．平行叩き	横ナデ．同心円文	–	–		498
ナデ．ハケ目	ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	–	–	外面煤付着	499
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		500
横ナデ	ヘラ磨き	横ナデ．ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）内面赤彩	501
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外器面煤付着	502
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		503
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明杯）内外面赤彩 (摩耗のため不明瞭)　内器面油煙	504
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ？	外器面赤彩　径不確実	505
横ナデ．ヘラケズリ ハケ目	横ナデ	–	–		506
横ナデ . 回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	口縁部内外面自然釉	507
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ	–	–	内外面赤彩　内外器面油煙	509
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	–	–	内外面赤彩	510
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	511
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	内外面赤彩	512
横ナデ 回転ヘラ磨き	横ナデ 回転ヘラ磨き	ヘラ切り後 回転ヘラ磨き	横ナデ 回転ヘラ磨き		513
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	内外面赤彩	514
横ナデ．ヘラケズリ ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（高台付皿）　内外面赤彩	515
横ナデ．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	外面煤付着	516
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外面煤付着	517
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	焼き歪み	518
横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	自然釉	519
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後横ナデ	ナデ	（高台付杯）	520
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ		521
横ナデ．格子目叩き	横ナデ	–	–		522
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ヘラ切り	横ナデ	（高台付杯）	524
横ナデ	–	横ナデ．ナデ	ナデ	（脚部）外器面、内底面自然釉　赤焼け	525
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	焼成不良	526
横ナデ	横ナデ	横ナデ．回転ヘラ切り	ナデ	（高台付杯）	527
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ヘラ切り	横ナデ	（高台付杯）	528
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	内外面赤彩	529
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	内器面黒斑	530
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	–	–		531
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ		532
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–	天井部自然釉	533
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	（転用硯）輪状つまみ	534
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	擬宝珠つまみ　外器面自然釉	535
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	–	–	つまみ　口縁端部のみ色調が異なる	536
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–	内外面自然釉	537
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		538
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	ナデ	内底面にヘラ記号　板状圧痕	539
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ	（高台付杯）	540
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（高台付杯）	541
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	（高台付杯）	542
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（高台付杯）	543
横ナデ	横ナデ	–	–	頸部外面自然釉	544
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–	肩部外面自然釉	545

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
548	150	–	SI049	土師器	鉢	–	–	–	(6.8)	浅黄橙 7.5YR8/4	黒褐 2.5Y3/1	長石．角閃石．雲母
549		–	SI049	土師器	甕	–	–	(30.5)	(29.3)	赤褐 5YR4/6	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．角閃石．雲母
550		–	SI049	須恵器	杯	(9.9)	(7.2)	–	4.2	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	白色粒．黒色粒
551		–	SI051	土師器	皿	(15.2)	(13.7)	–	1.6	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母
552		–	SI051	土師器	杯	(14.3)	(10.0)	–	3.1	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
553		65	SI051	土師器	杯	13.3	9.1	–	3.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
554			SI051	土師器	甕	(29.2)	–	–	(11.5)	にぶい橙 7.5YR7/3	浅黄橙 7.5YR8/3	長石．石英
555		–	SI051	須恵器	杯	(13.0)	(7.1)	–	4.0	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	角閃石．小石
556		65	SI052	須恵器	蓋	14.4	–	–	2.8	灰 N5/	黄灰 2.5Y5/1	微砂粒
557		65・88	SI052	須恵器	杯	(13.8)	(11.9)	–	2.5	灰白 5Y7/1	灰 5Y6/1	微砂粒
558	151	–	SI053	須恵器	蓋	(15.4)	–	–	(1.5)	灰 5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．黒色粒
559		65	SI054	土師器	杯	(14.4)	(10.5)	–	3.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母
560		64	SI056	土師器	杯	12.2	8.3	–	3.3	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
561			SI056	土師器	杯	12.0	7.2	–	3.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
562			SI056	土師器	杯	13.1	8.1	–	3.6	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	角閃石．雲母．小石
563			SI056	土師器	杯	(16.2)	(9.0)	–	4.1	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/6	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
564			SI056	土師器	椀	(13.2)	7.1	–	6.6	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
565			SI056	土師器	甕	(28.0)	–	(27.5)	(11.9)	にぶい黄橙 10YR7/3	灰褐 7.5YR4/2	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
566			SI056	須恵器	蓋	14.6	–	–	1.3	灰白 10Y7/1	灰白 7.5Y7/2	角閃石．砂粒
567			SI056	須恵器	皿	13.0	7.9	–	2.6	灰白 N7/	灰 7.5Y6/1	長石
568		–	SI061	土師器	杯	(13.8)	(8.4)	–	2.9	橙 2.5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
569		64	SI062	土師器	杯	13.7	6.8	–	3.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
570		–	SI062	土師器	杯	(13.2)	(6.5)	–	3.6	橙 5YR7/8	橙 5YR7/6	雲母．赤色酸化粒
571		–	SI062	土師器	杯	(11.2)	(7.4)	–	3.9	橙 5YR7/8	橙 5YR6/6	石英．雲母．微砂粒
572		64	SI062	土師器	杯	(10.6)	(6.6)	–	4.5	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．角閃石
573		64・88	SI062	須恵器	蓋	15.1	–	–	(1.6)	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石．石英．黒色粒
574		64	SI062	須恵器	皿	(19.0)	(11.0)	–	4.4	にぶい橙 5YR6/4	にぶい赤褐 5YR5/3	黒色粒．灰色粒
575		–	SI063	土師器	杯	(13.6)	(7.3)	–	3.3	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	長石．石英．角閃石．雲母
576		65	SI063	土師器	杯	(14.4)	11.3	–	3.2	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	角閃石．雲母．赤色酸化粒
577		–	SI063	土師器	鉢	(20.6)	(10.2)	–	10.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母．赤色酸化粒
578	152	66	SI064	土師器	皿	(19.0)	(17.0)	–	3.4	にぶい黄橙 10YR6/3	暗褐 10YR3/3	石英．角閃石．赤色酸化粒
579			SI064	土師器	椀	14.5	(8.6)	–	8.2	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．赤色酸化粒
580		–	SI064	土師器	鉢	(34.4)	–	–	(12.5)	橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
581		66	SI064	須恵器	高杯	–	(8.4)	–	(3.5)	灰 5Y4/1	オリーブ黒 5Y3/1	白色粒．黒色粒
582			SI065	土師器	甕	(22.0)	–	18.4	17.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
583		–	SI065	土師器	甑	–	–	–	17.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
584		–	SI066	土師器	杯	(14.3)	8.6	–	3.9	明赤褐 5YR5/6	橙 2.5YR6/8	長石．石英
585		–	SI066	土師器	鉢	(28.6)	–	–	(8.0)	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR5/2	長石．小石粒．赤色酸化粒
586		–	SI066	土師器	甕	(20.8)	–	–	(18.9)	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．雲母．赤色酸化粒
587	153	–	SI067	土師器	甕	(17.2)	–	–	(8.4)	橙 5YR6/6	にぶい黄褐 5YR5/4	雲母．小石．赤色酸化粒
588		–	SI067	土師器	甕	(22.4)	–	–	(8.2)	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	長石．石英．赤色酸化粒
589		–	SI067	須恵器	杯	13.2	–	–	4.6	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y6/1	雲母．微細な砂粒
590		–	SI067	須恵器	壺	–	(12.2)	–	(6.3)	オリーブ黒 7.5Y3/1	灰色 7.5Y4/1	長石．1 ～ 2mm の砂粒
591		–	SI068	土師器	杯	(14.2)	(11.2)	–	3.5	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
592		–	SI068	土師器	甕	(21.5)	–	–	(9.2)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい褐 7.5YR5/3	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
593		–	SI069	土師器	甕	(28.4)	–	(31.2)	(25.5)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．角閃石
594		–	SI069	土師器	甕	(28.0)	–	–	(11.2)	浅黄橙 7.5YR8/3	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．雲母 砂粒．赤色酸化粒
595		–	SI069	須恵器	杯	(14.2)	(8.2)	–	4.0	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄 2.5Y6/2	砂粒
596		66	SI070	土師器	小皿	10.2	5.7	–	1.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．砂粒
597			SI070	土師器	小皿	10.4	8.0	–	1.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
598			SI070	土師器	杯	13.4	(8.8)	–	3.7	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
599			SI071	須恵器	蓋	14.4	–	–	3.3	黄橙 7.5YR7/8	にぶい橙 7.5YR6/4	黒褐色粒．砂粒
600	154	–	SI075	須恵器	杯	(13.5)	7.7	–	5.0	灰 N4/	灰 N7/	長石．雲母
601		–	SI076	土師器	甕	(25.7)	–	–	(10.1)	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．角閃石

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
ヘラ磨き．ハケ目	ヘラ磨き	–	–	（片口鉢）	548
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外器面に赤彩	549
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）内外面に自然釉、焼き歪み	550
横ナデ	横ナデ．ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	内外面赤彩　２ヶ所穿孔	551
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	外底面ヘラ記号	552
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り 工具ナデ	横ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　内底部は剥離　口縁部煤付着	553
横ナデ．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	（把手付甕）外面煤付着	554
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ		555
横ナデ	ナデ	–	–	口縁部重ね焼きの痕跡あり　自然釉　宇城産	556
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（転用硯）	557
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–	つまみ欠損　口縁部に自然釉	558
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	559
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	外底部工具痕　口縁部に油煙付着 内外面赤彩 (摩耗のため正確な範囲不明)	560
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	内外面赤彩	561
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り ヘラケズリ	横ナデ		562
横ナデ 回転ヘラ磨き	横ナデ 回転ヘラ磨き	回転ヘラミガキ	横ナデ 回転ヘラミガキ		563
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	（高台付椀）	564
ナデ．ヘラケズリ ハケ目	ナデ．ヘラケズリ	–	–		565
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	外器面指頭痕	566
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	板状圧痕	567
横ナデ	ナデ後回転ヘラ磨き	ヘラ切り．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	（灯明杯）口縁部油煙　内外底部煤付着	568
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		569
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	ヘラ切り後横ナデ 後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	（灯明杯）	570
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		571
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		572
ヘラ切り . 横ナデ	横ナデ．ナデ	–	–	（転用硯）内面に研磨痕　墨付着　つまみ欠損	573
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ．ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	（高台付皿）	574
横ナデ．回転ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	（灯明杯）口縁内外面に油煙付着	575
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　口縁部油煙	576
回転ヘラ削り	ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面煤付着　被熱している　摩耗のため調整不明瞭	577
ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラケズリ後ヘラ磨き	ヘラ磨き		578
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	（高台付椀）	579
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		580
横ナデ	–	ナデ	ナデ	（脚部）外器面、外底面に自然釉　粘土継ぎ目が３層	581
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	ハケ目	ヘラケズリ		582
ヘラケズリ．工具ナデ ハケメ後ナデ	ヘラケズリ	–	–	内外面煤付着	583
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ		584
横ナデ．ナデ．工具ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		585
横ナデ．ハケメ後ナデ	横ナデ．ケズリ後ナデ	–	–	外器面黒斑　頸部外面に煤付着	586
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		587
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		588
横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）内底面にヘラ書き　内外面に自然釉	589
横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ	横ナデ	–		590
横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ	（灯明杯）口縁部に油煙　摩滅のため調整不明瞭	591
横ナデ．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		592
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	黒斑あり	593
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		594
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後横ナデ	横ナデ後ナデ		595
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明皿）口縁部に油煙	596
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外底面にヘラ切り離し時の粘土塊付着	597
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		598
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	輪状つまみ　焼成不良	599
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	600
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	–	–		601

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
602	154	–	SI082	土師器	椀	(14.6)	8.8	–	5.8	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．赤色酸化粒
603		–	SI083	土師器	杯	(13.9)	8.7	–	3.0	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母．角閃石
604		–	SI083	須恵器	杯	(14.2)	(9.4)	–	4.3	褐灰 10YR6/1	にぶい赤褐 5YR5/4	長石．石英．角閃石．雲母 黒色粒
605		–	SI083	須恵器	杯	–	8.0	–	(4.8)	灰 10Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石．雲母
606		10・88	SI083	須恵器	杯	–	(8.0)	–	(1.3)	灰 N5/	灰 N5/	白色粒
607		–	SI088	土師器	杯	13.2	8.0	–	3.4	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．角閃石．雲母
608		–	SI088	土師器	甕	(25.6)	–	–	(7.6)	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英．雲母
609		–	SI088	土師器	甕	(29.0)	–	–	(7.5)	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
610		–	SI088	須恵器	蓋	(15.4)	–	–	2.3	灰 5Y5/1	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英
611		67	SI089	土師器	蓋	16.5	–	–	3.6	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
612			SI089	土師器	小皿	10.1	7.7	–	2.4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
613			SI089	土師器	杯	12.8	8.5	–	3.0	橙 2.5YR6/8	橙 5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
614			SI089	土師器	杯	(12.6)	–	8.8	2.6	明赤褐 2.5YR5/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英
615			SI089	土師器	杯	13.7	8.9	–	3.1	にぶい橙 5YR7/3	にぶい橙 5YR7/4	長石．赤色酸化粒
616			SI089	土師器	杯	(13.4)	–	–	4.6	にぶい黄橙 10YR6/3	褐 7.5YR4/6	長石．石英．雲母
617			SI089	黒色土器	杯	(16.6)	(6.8)	–	(4.0)	橙 7.5YR6/6	黒 N2/	長石．石英
618	155	–	SI090	須恵器	皿	(17.4)	14.4	–	2.3	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	長石．石英
619		67	SI091	土師器	杯	(14.0)	(8.6)	–	3.0	淡赤橙 2.5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	長石．雲母
620			SI091	土師器	甕	18.0	–	16.6	15.0	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英．角閃石
621			SI091	土師器	甕	(26.6)	–	–	(9.5)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	石英．角閃石．赤色酸化粒
622		66	SI100	黒色土器	椀	14.9	7.25	–	6.1	黒 N2/	黒 N2/	白色砂粒．雲母
623		–	SI100	土師器	鉢	(28.6)	–	–	(9.9)	明褐 7.5YR5/8	褐 7.5YR4/4	長石．石英．雲母
624		68	SI101	土師器	甕	(15.2)	–	(14.8)	15.3	にぶい赤橙 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	石英．角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
625		67	SI103	土師器	杯	(13.5)	(9.0)	–	3.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母．赤色酸化粒
626			SI103	土師器	甕	(20.6)	–	(19.2)	(17.0)	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
627			SI103	土師器	甕	(22.6)	–	–	(9.9)	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	長石．石英
628	156	68	SI104	土師器	甕	18.6	–	16.7	15.0	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
629		–	SI105	土師器	甕	(25.2)	–	–	(13.0)	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	長石．石英．角閃石
630		–	SI105	土師器	甕	(19.8)	–	(26.0)	(25.8)	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．角閃石．砂粒 赤色酸化粒
631		–	SI105	土師器	甕	(21.8)	–	(20.4)	(22.9)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
632		68	SI111	土師器	小皿	11.1	6.1	–	2.2	明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	長石．石英
633			SI111	土師器	杯	13.3	7.9	–	4.1	橙 7.5YR6/6	橙 5YR7/8	長石．石英．角閃石 赤色酸化粒
634			SI111	土師器	杯	14.2	(8.3)	–	5.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母．角閃石
635			SI111	土師器	甕	23.2	–	26.5	(31.6)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母．砂粒
636		–	SI114	土師器	甕	(21.1)	–	–	(8.7)	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英．角閃石．雲母
637		–	SI116	土師器	杯	13.2	9.5	–	2.8	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．角閃石．白色粒
638		–	SI116	土師器	杯	13.0	8.6	–	3.3	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．雲母．赤色酸化粒
639	157	–	SK020	土師器	蓋	19.6	–	–	2.4	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	白色砂粒．雲母 赤色酸化粒
640		–	SK020	土師器	杯	–	(10.5)	–	(1.1)	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	長石．雲母．赤色酸化粒
641		69	SK020	土師器	杯	13.5	9.0	–	3.1	橙 2.5YR6/8	にぶい褐 7.5YR5/4	長石．石英
642		69・85	SK020	土師器	杯	13.4	8.4	–	3.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母．赤色酸化粒
643		69	SK020	土師器	杯	13.6	8.3	–	3.3	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	長石．雲母
644			SK020	土師器	杯	13.8	9.0	–	3.1	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．石英
645		–	SK020	土師器	甕	(29.6)	–	–	(12.6)	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	長石．石英．角閃石．雲母
646		–	SK020	土師器	甑	(33.1)	–	–	(11.3)	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 2.5YR6/6	長石．角閃石．白色粒
647		69	SK020	土師器	竈	–	–	–	(13.2)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．石英．黒色粒 赤色酸化粒
648			SK020	須恵器	蓋	15.5	–	–	3.4	灰 5Y6/1	灰 N5/	白色砂粒．黒色粒子
649		–	SK020	須恵器	杯	(12.8)	(7.2)	–	4.0	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．石英．雲母
650		69	SK020	須恵器	杯	12.0	7.0	–	4.2	灰黄褐 10YR5/1	灰褐 7.5YR5/2	長石．石英
651			SK020	須恵器	杯	(12.2)	7.0		4.4	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	長石．石英

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ	ナデ	（高台付椀）	602
横ナデ．回転ヘラケズリ 後横ナデ	横ナデ 横ナデ後ヘラ磨き	ヘラ切り後横ナデ	横ナデ後ヘラ磨き	（灯明杯）内外面油煙	603
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ		604
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	605
横ナデ	－	ヘラ切り	ナデ	（高台付杯）外底部に朱墨付着	606
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	607
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ハケメ ケズリ後ナデ	－	－	頸～胴部内面に煤付着	608
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	－	－	外面に煤付着	609
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	－	－	輪状つまみ	610
横ナデ	横ナデ．ナデ	－	－	擬宝珠つまみ	611
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明皿）内器面に油煙	612
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面油煙．赤彩	613
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		614
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内面赤彩	615
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	外底面にヘラ書き	616
横ナデ	ヘラ磨き (不明瞭)	摩耗の為調整不明	ヘラ磨き (不明瞭)	黒色土器 a 類	617
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		618
横ナデ	横ナデ．横ナデ後ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	619
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	ハケメ	ケズリ	内外面煤付着	620
横ナデ．ハケメ ハケメ後横ナデ	横ナデ．ケズリ	－	－		621
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器 b 類	622
横ナデ．ハケメ ハケメ後ナデ	横ナデ ヘラケズリ後ナデ	－	－	内外面煤付着	623
横ナデ．ナデ	横ナデ ヘラケズリ後ナデ	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	内器面一部指頭痕．工具痕	624
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		625
横ナデ．ハケメ後ナデ	横ナデ．ヘラケズリ ヘラケズリ後ナデ	－	－	部分的に煤付着　２次焼成	626
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	－	－	外器面に工具痕	627
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	ハケメ	ケズリ	内外面煤付着	628
横ナデ．ハケメ ハケメ後横ナデ	横ナデ．ケズリ	－	－	外器面煤付着	629
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ヘラケズリ	－	－	外器面赤彩	630
横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ ヘラケズリ	－	－	黒斑	631
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（灯明皿）板状圧痕　内外面油煙	632
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		633
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	634
横ナデ．横ナデ後ハケメ ハケメ	横ナデ．ヘラケズリ	－	－	口縁やや焼き歪み	635
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ヘラケズリ	－	－	口縁部内外面煤付着	636
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	637
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）　内外面赤彩	638
横ナデ． 横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	－	－	口縁部焼き歪み　つまみ欠損	639
横ナデ	－	ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）　内外面赤彩	640
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	黒斑	641
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）　内外面赤彩	642
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（墨書）　外器面煤付着	643
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		644
横ナデ．ハケメ ハケメ後横ナデ	横ナデ．ケズリ後ナデ	－	－	内外面煤付着	645
横ナデ．ナデ．ハケメ	ハケメ．ケズリ	－	－		646
ナデ	ナデ．ヘラケズリ	－	－	内外面指頭痕　焚口の鍔部に煤付着	647
横ナデ． ヘラ切り後横ナデ	横ナデ．ナデ	－	－		648
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	口縁部歪み	649
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ後ナデ	外底面に圧痕	650
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		651

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
652	157	69	SK020	須恵器	椀	12.8	7.5	–	6.3	灰 N6/	灰 N6/	長石．雲母
653	158	–	SK020	須恵器	甕	(23.1)	–	–	(14.7)	灰 5Y5/1	灰 N5/	長石．石英．黒色粒
654		–	SK020	須恵器	甕	(22.0)	–	–	(15.2)	灰白 5Y5/1	灰白 5Y5/1	雲母．微細な砂粒
655		69	SK020	須恵器	壺	–	(13.8)	–	(25.7)	灰 N4/	灰 N4/	長石．石英
656		10 68・69	SK020	須恵器	壺	(13.8)	(18.4)	(34.8)	32.6	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	微細な砂粒
657		69	SK020	須恵器	甕	18.4	–	(40.0)	(32.8)	灰 N5/	灰赤 2.5YR4/2	白色粒．黒色粒
658	159	68	SK021	土師器	杯	13.6	9.4	–	2.9	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
659			SK021	須恵器	鉢	(24.4)	(18.1)	–	7.6	褐灰 10YR6/1	灰 N5/	長石．石英．雲母．砂粒
660		40	SK022	土師器	椀	(15.9)	(9.5)	–	5.8	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
661			SK023	須恵器	杯	(13.6)	(9.1)	–	4.1	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/8	長石
662			SK024	須恵器	杯	(13.8)	(8.5)	–	3.8	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y6/1	細砂粒
663		70	SK025	土師器	杯	11.7	7.1	–	3.4	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母
664			SK025	須恵器	壺	–	–	(26.0)	(27.7)	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR6/1	長石．石英
665			SK026	土師器	杯	(13.9)	(10.2)	–	2.8	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母．赤色酸化粒
666			SK026	土師器	皿	16.5	13.7	–	1.7	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母
667		–	SK026	須恵器	蓋	(11.9)	–	–	(2.1)	灰白 10YR7/4	灰 5Y4/1	長石．雲母
668		–	SK026	須恵器	杯	–	(7.8)	–	(1.7)	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．角閃石．雲母
669		70	SK026	須恵器	皿	(18.0)	(10.0)	–	4.3	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	雲母
670		–	SK027	須恵器	鉢	(33.0)	–		(7.4)	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	雲母．白色粒．黒色粒
671	160	70	SK028	土師器	蓋	(17.5)	–	–	(2.7)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	黒色粒．赤色酸化粒
672			SK028	土師器	皿	15.4	13.5	–	1.3	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
673			SK028	土師器	皿	(16.0)	13.4	–	1.1	にぶい橙 2.5YR6/4	にぶい橙 2.5YR6/4	長石．赤色酸化粒
674			SK028	土師器	皿	(15.5)	(11.8)	–	1.4	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．赤色酸化粒
675			SK028	土師器	杯	(13.3)	8.5	–	3.2	にぶい橙 7.5YR7/3	橙 2.5YR6/8	石英．赤色酸化粒
676			SK028	土師器	杯	13.8	9.5	–	2.9	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	長石．雲母．赤色酸化粒
677			SK028	土師器	杯	16.8	9.0	–	4.6	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
678		–	SK029	土師器	皿	(15.8)	(13.8)	–	1.5	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．赤色酸化粒
679		–	SK029	須恵器	蓋	(17.8)	–	–	(3.4)	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 5Y6/1	長石
680		71	SK030	土師器	杯	13.1	8.5	–	3.1	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．角閃石．雲母
681			SK030	土師器	椀	14.0	–	–	(6.7)	橙 5YR6/8	橙 7.5YR7/6	長石．石英．雲母
682		–	SK030	土師器	鉢	(28.4)	–	–	(7.3)	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR5/1	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
683		–	SK030	土師器	甕	(19.2)	–	(17.4)	(7.8)	にぶい褐 7.5YR5/3	橙 5YR 6/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
684		71	SK030	須恵器	蓋	16.6	–	–	1.8	灰 N5/	灰 5Y6/1	微細な雲母
685		–	SK031	土師器	甕	(19.2)	–	(17.4)	(7.5)	にぶい橙 5YR 7/4	にぶい褐 2.5YR6/4	長石．石英．角閃石．雲母
686		–	SK031	須恵器	深鉢	(18.9)	–	–	(10.2)	黄灰 2.5YR6/1	灰白 2.5YR7/1	雲母
687		72	SK032	土師器	小皿	11.2	8.4	–	1.9	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
688			SK032	土師器	杯	11.9	7.9	–	3.2	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
689			SK032	土師器	皿	13.2	6.8	–	2.5	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
690			SK032	土師器	皿	13.4	8.0	–	2.7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母
691			SK032	土師器	托	13.0	6.5	–	3.6	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母
692			SK032	土師器	托	12.9	7.1	–	3.8	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母
693	161	–	SK032	土師器	杯	(12.6)	(8.6)	–	3.0	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
694		–	SK032	土師器	杯	–	(7.2)	–	(1.8)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
695		72	SK032	土師器	皿	15.5	9.7	–	3.1	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
696			SK032	土師器	椀	13.5	8.0	–	6.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母
697		–	SK032	黒色土器	椀	(14.2)	–	–	(5.0)	橙 7.5YR7/6	黒 N2/	長石．雲母．赤色酸化粒
698		–	SK032	土師器	鉢	(12.3)	–	–	8.0	橙 7.5YR7/6	橙 5YR 6/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
699		72	SK032	土師器	甕	(27.8)	–	(25.4)	(15.4)	明褐 7.5YR5/6	赤褐 5YR4/8	長石．石英．赤色酸化粒
700			SK032	土師器	竈	26.0	–	27.8	(15.0)	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	長石．角閃石．雲母
701		–	SK032	須恵器	杯	(12.0)	(7.8)	–	3.7	灰 N6/	灰白 10YR7/1	微砂粒
702		–	SK032	須恵器	鉢	(17.6)	(12.1)	–	5.2	灰白 10YR7/1	灰褐 7.5YR6/2	微砂粒
703		–	SK032	須恵器	壺	–	8.5	13.6	(12.6)	灰 N5/	灰 5Y4/1	長石
704	162	71	SK033	須恵器	蓋	12.4	–	–	2.6	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	白色砂粒．黒色粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）	652
横ナデ．平行タタキ タタキ後横ナデ	横ナデ．ナデ 同心円文当て具痕	－	－		653
横ナデ 格子目タタキ後カキメ	横ナデ．同心円当て具痕 後横ナデ	－	－		654
横ナデ．タタキ後横ナデ． ケズリ後横ナデ	横ナデ	ナデ	観察不可		655
横ナデ．平行タタキ後 ナデ（一部カキメ）	当て具痕．横ナデ． ナデ	横ナデ	ナデ		656
横ナデ．格子目タタキ後 横ナデ（一部カキメ）	横ナデ．同心円文当て具 痕．平行当て具痕	－	－	頸部内器面に工具痕	657
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面赤彩　口縁の内外面に油煙	658
横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	外底部に爪形状圧痕	659
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	660
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	赤焼け土器	661
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	662
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		663
ハケ目 平行叩き後横ナデ	ナデ　同心円文 横ナデ	－	－	把手付	664
横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ナデ		665
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内器面赤彩	666
横ナデ．ヘラケズリ	ナデ	－	－	つまみ剥離　自然釉	667
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外底面ヘラ記号	668
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	横ナデ．ナデ	ナデ	（高台付皿）	669
横ナデ．格子目叩き	横ナデ．平行叩き	－	－		670
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	－	－	内外面赤彩	671
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	672
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	673
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	674
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	ヘラ切り．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	（灯明杯）内外面赤彩　口縁外部油煙	675
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面油煙	676
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き		677
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	内外面赤彩	678
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	つまみ部剥離	679
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	内外面赤彩　外底面に回転ヘラ切り時の粘土塊付着	680
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．横ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）	681
横ナデ．ハケ目 指頭圧痕	横ナデ．ヘラケズリ	－	－		682
横ナデ．工具ナデ 描き目状もハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	－	－		683
横ナデ 回転ヘラケズリ．ナデ	ナデ	－	－	外器面に工具痕	684
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	－	－		685
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	－	－		686
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		687
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	688
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	底部粘土塊	689
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	690
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	内外面赤彩	691
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　高台に煤付着	692
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩　板状圧痕	693
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）	694
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面煤付着	695
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）　外底面を除き赤彩	696
横ナデ	横ナデ．ヘラ磨き	－	－	（墨書）黒色土器ａ類　　九州系Ⅵ類	697
横ナデ　ハケ目	横ナデ	ナデ．指頭圧痕	ナデ		698
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	－	－		699
横ナデ．ハケ目 指頭圧痕	横ナデ．ヘラケズリ 指頭圧痕	－	－	内外面煤付着	700
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	宇城産	701
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ	横ナデ	高台付鉢　荒尾産	702
横ナデ	横ナデ	ヘラケズリ	ナデ		703
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	重ね焼きの痕跡	704

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
705	162	71	SK034	土師器	杯	13.5	9.9	–	3.6	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．黒色粒
706		74	SK035	須恵器	杯	(11.4)	(8.0)	–	3.5	暗灰 N3/	灰 N4/	長石．石英
707		71	SK036	土師器	深鉢	(23.5)	12.2	–	13.5	明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
709		–	SK038	土師器	皿	–	(15.0)	–	(0.5)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒
710		–	SK038	土師器	杯	(13.0)	(8.5)	–	2.8	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	黒色粒．赤色酸化粒
711		73	SK039	土師器	杯	12.7	6.9	–	4.1	橙 5YR7/8	橙 2.5YR7/8	長石．赤色酸化粒
712			SK039	土師器	杯	12.6	7.0	–	3.8	明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	白色砂粒．雲母
713			SK039	土師器	杯	12.5	7.9	–	3.3	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8	長石．角閃石．赤色酸化粒
714			SK039	土師器	杯	12.0	6.5	–	3.7	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英
715			SK039	土師器	杯	12.2	7.0	–	3.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
716			SK039	土師器	杯	12.5	7.2	–	3.5	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
717			SK039	土師器	皿	12.5	8.8	–	2.5	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石
718			SK039	土師器	杯	12.4	7.1	–	3.6	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英
719			SK039	土師器	托	13.8	8.6	–	4.2	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
720			SK039	土師器	杯	12.2	8.4	–	5.1	橙 2.5YR7/8	橙 2.5YR7/8	長石．赤色酸化粒
721			SK039	須恵器	杯	12.9	(7.8)	–	4.5	灰 N5/	灰 5Y5/1	長石．石英
722	163	74	SK040	土師器	甕	27.5	–	(25.2)	(23.0)	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	角閃石．白色粒
723			SK041	土師器	杯	(14.2)	(8.8)	–	4.0	橙 5YR7/6	橙 2.5YR7/6	石英．砂粒．赤色酸化粒
724		–	SK041	土師器	甕	(18.2)	–	–	(7.2)	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
725		74	SK041	須恵器	杯	(13.8)	(9.7)	–	4.2	青灰 5PB6/1	黄灰 2.5Y6/1	白色砂粒
726		–	SK042	土師器	甕	(25.0)	–	–	(6.2)	橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
727		–	SK042	土師器	甕	(25.0)	–	–	(6.8)	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．砂粒 赤色酸化粒
728		74	SK042	須恵器	杯	13.0	9.7	–	4.4	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
729			SK042	須恵器	杯	(13.6)	(9.2)	–	4.6	灰白 N7/	にぶい橙 5YR6/4	長石．黒色粒
730		77	SK043	須恵器	蓋	(15.7)	–	–	3.9	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	長石．石英
731			SK043	須恵器	皿	(17.6)	(12.0)	–	2.3	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石．石英．角閃石
732			SK044	須恵器	蓋	(19.0)	–	–	3.7	にぶい橙 2.5YR6/4	黄橙 10YR8/6	黒色粒
733			SK044	須恵器	杯	17.8	10.9	–	5.7	灰 N4/	灰 5Y5/1	長石．石英
736	164	75	SK047	土師器	皿	13.2	7.6	–	2.5	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
737			SK047	土師器	杯	11.7	6.8	–	3.1	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．角閃石．雲母
738			SK047	土師器	杯	11.9	7.5	–	3.3	にぶい褐 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/4	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
739			SK047	土師器	杯	12.3	7.4	–	3.4	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
740			SK047	土師器	杯	12.6	7.9	–	3.9	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
741			SK047	土師器	托	(13.3)	8.0	–	2.8	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．赤色酸化粒
742			SK047	土師器	托	(14.4)	8.4	–	3.8	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
743			SK047	土師器	椀	(14.2)	8.4	–	6.4	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英．雲母．角閃石 赤色酸化粒
744			SK047	土師器	椀	13.1	8.0	–	6.0	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒
745			SK047	土師器	椀	13.6	7.0	–	5.9	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒
746			SK047	黒色土器	椀	12.9	6.7	–	5.3	にぶい黄橙 10YR7/3	黒 N2/	雲母．砂粒．赤色酸化粒
747			SK047	黒色土器	椀	(12.6)	6.6	–	4.9	橙 7.5YR7/6	黒 2.5Y2/1	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
748		–	SK047	土師器	壺	(25.8)	–	–	(8.9)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
749		75	SK047	須恵器	蓋	(19.6)	–	–	3.5	灰 10Y5/1	灰 5Y5/1	雲母．赤色酸化粒
750		10・75	SK047	須恵器	杯	12.4	7.4	–	3.1	褐灰 10YR5/1	白灰 10YR7/1	長石．微砂粒
751		75	SK047	須恵器	杯	12.1	7.3	–	3.2	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	雲母．赤色酸化粒
752			SK047	須恵器	杯	12.2	6.9	–	4.0	灰 N6/	灰 N6/	角閃石．雲母
753	165	76	SK048	土師器	小皿	(10.1)	7.8	–	2.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母
754			SK048	土師器	杯	10.6	7.5	–	2.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	白色粒．雲母．赤色酸化粒
755		–	SK048	土師器	杯	–	(8.1)	–	(2.1)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
756		–	SK049	土師器	杯	(12.4)	8.7	–	3.3	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英．赤色酸化粒
757		–	SK049	土師器	杯	(12.6)	(7.0)	–	3.5	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
758		76	SK050	土師器	杯	(13.4)	8.4	–	3.2	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
759			SK050	土師器	杯	(12.8)	7.9	–	2.9	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒
760			SK050	土師器	杯	13.7	9.7	–	3.6	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母
761			SK050	土師器	杯	(12.4)	7.6	–	3.2	にぶい黄橙 10YR7/3	明赤褐 2.5YR5/6	角閃石．雲母
762			SK050	土師器	杯	(13.8)	9.2	–	3.1	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		705
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）外器面に自然釉	706
横ナデ．ケズリ	横ナデ．ナデ	ナデ	ナデ		707
–	–	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（墨書）	709
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（墨書）	710
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕　内外面赤彩	711
横ナデ	横ナデ．回転ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	ナデ．回転ヘラ磨き	（灯明杯）内器面に油煙．外底面に黒斑	712
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外器面油煙	713
横ナデ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外器面油煙、赤彩．板状圧痕	714
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外器面油煙	715
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面油煙、赤彩	716
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	板状圧痕　内外面赤彩	717
横ナデ	ヘラ磨き（摩耗）	ヘラ切り後ナデ	ヘラ磨き（摩耗）	板状圧痕	718
横ナデ	磨き	横ナデ．ヘラ切り後ナデ	磨き	内外面赤彩	719
横ナデ	横ナデ	横ナデ．ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）板状圧痕　内面外器面赤彩	720
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ		721
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外面煤付着	722
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	板状圧痕	723
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		724
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）口縁部、高台畳付部に重ね焼きの痕跡	725
横ナデ ヘラケズリ後ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	口縁部煤付着	726
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外器面煤付着　内器面工具痕	727
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面煤付着	728
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（高台付杯）外面に自然釉	729
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	擬宝珠つまみ	730
横ナデ．ケズリ	横ナデ	回転ヘラケズリ	ナデ		731
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	輪状つまみ	732
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）	733
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（灯明皿）内外器面に油煙	736
横ナデ ヘラケズリ後横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	737
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後横ナデ	横ナデ		738
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	739
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	板状圧痕．内外面赤彩	740
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕　内外面赤彩	741
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	横ナデ．工具痕	ナデ	内面外器面赤彩．外底面にヘラ状工具痕	742
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付椀）外面に黒斑．内外面赤彩．内底部に顔料	743
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外器面に荒い赤彩	744
横ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	横ナデ ヘラ切り後ナデ	（高台付椀）内外面赤彩	745
横ナデ	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（高台付椀）黒色土器ａ類	746
横ナデ	ヘラ磨き（摩耗）	横ナデ．ナデ	ヘラ磨き（摩耗）	（高台付椀）黒色土器ａ類	747
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ヘラケズリ	–	–		748
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	–	–	輪状つまみ．外器面に自然釉	749
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内面に青銅色付着物あり	750
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		751
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕	752
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（灯明皿）内外面油煙	753
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（灯明杯）内外面油煙顕著	754
横ナデ．回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	ヘラ切り．ヘラ磨き	ナデ．回転ヘラ磨き	（墨書）	755
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）内外面赤彩．内外器面に油煙	756
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩．内外器面に油煙	757
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	758
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（灯明杯）内外器面赤彩．口縁部に油煙付着 外底面に放射状の組織痕	759
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	焼き歪み　内外面赤彩	760
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩	761
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後回転ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後回転ヘラ磨き	内外面赤彩	762

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
763	165	76	SK050	土師器	杯	(12.7)	5.8	–	3.4	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
764		74	SK051	土師器	杯	13.4	9.0	–	3.9	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/8	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
765		–	SK052	土師器	甕	(21.0)	–	(22.0)	(13.2)	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/3	長石．石英．角閃石
766		76	SK053	土師器	蓋	(17.2)	–	–	2.8	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母．白色粒
767			SK053	土師器	杯	(15.4)	(9.4)	–	3.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
768			SK053	土師器	杯	13.2	8.5	–	3.1	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母
769			SK053	土師器	杯	13.0	7.9	–	3.6	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母．微細な砂粒 赤色酸化粒
770			SK053	土師器	小皿	(10.1)	(7.6)	–	2.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英．赤色酸化粒
771		–	SK054	土師器	皿	(15.6)	(13.0)	–	1.8	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石．雲母．白色粒
772		–	SK054	土師器	杯	(16.2)	(9.1)	–	3.9	赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	長石．石英
773		–	SK054	土師器	甕	(27.4)	–	(25.0)	(13.0)	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
774		–	SK054	須恵器	杯	(12.8)	(7.9)	–	6.3	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	長石
775	166	77	SK055	須恵器	椀	(14.1)	(9.2)	–	5.8	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	雲母．白色粒
776			SK055	須恵器	椀	(13.6)	(8.8)	–	8.1	灰 5Y4/1	灰 5Y5/1	長石
777		78	SK056	土師器	杯	13.2	10.5	–	3.5	灰 5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．石英
778			SK056	土師器	杯	14.0	10.4	–	3.4	橙 7.5YR6/7	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
779			SK056	土師器	杯	13.8	9.5	–	3.2	橙 2.5YR6/6	橙 5YR7/6	長石．雲母．赤色酸化粒
780			SK056	土師器	杯	13.2	9.3	–	3.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	白色砂粒．雲母 赤色酸化粒
781			SK056	土師器	杯	13.4	7.7	–	3.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
782			SK056	須恵器	杯	15.6	(9.2)	–	5.9	灰 5Y5/1	灰白 5Y7/1	長石．石英
783		–	SK057	土師器	杯	15.6	10.4	–	4.4	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	白色砂粒．雲母 赤色酸化粒
784		78	SK058	土師器	杯	13.4	8.3	–	3.4	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6	長石．石英
785			SK058	土師器	杯	15.4	11.1	–	3.8	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	長石．石英．角閃石
786			SK058	須恵器	蓋	17.1	–	–	3.3	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石．石英
787			SK058	須恵器	鉢	(23.1)	(12.4)	–	15.7	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	長石．石英
788	167	76	SK059	土師器	小皿	7.1	5.6	–	1.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
789			SK059	土師器	小皿	6.9	5.3	–	1.7	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	角閃石．赤色酸化粒
790			SK059	土師器	杯	12.8	7.8	–	3.5	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	砂粒
791			SK059	土師器	杯	12.4	7.7	–	3.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．赤色酸化粒
792		77	SK060	土師器	杯	12.2	7.7	–	3.1	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．石英．赤色酸化粒
793	168	12・79	ST001	土師器	皿	11.0	7.5	–	2.4	にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．角閃石．雲母
794			ST001	土師器	椀	14.0	8.0	–	5.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
795			ST001	須恵器	壺	–	9.4	11.2	(10.2)	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR4/1	長石
798		12・80	ST002	土師器	椀	15.0	8.1	–	6.2	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	石英．雲母
799		80	ST005	土師器	杯	12.2	7.5	–	3.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母．角閃石
800			ST005	黒色土器	椀	15.2	8.5		6.7	黒 N1.5/	黒 N1.5/	長石．石英．角閃石
801	169	82	SX003	土師器	杯	12.8	9.0	–	3.7	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
802			SX003	土師器	杯	13.3	8.4	–	3.6	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	角閃石．雲母．赤色酸化粒
803			SX003	土師器	杯	13.4	8.5	–	3.2	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英
804			SX003	土師器	杯	13.6	9.0	–	3.0	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
805		–	SX003	土師器	椀	(17.4)	(10.0)	–	8.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
806		82	SX003	土師器	椀	15.3	9.1	–	6.5	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	石英．角閃石．雲母
807			SX003	須恵器	椀	(12.5)	(7.4)	–	4.7	灰 5Y5/1	灰 5Y4/1	雲母
808		81	SX004	土師器	杯	13.5	9.0	–	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
809			SX004	土師器	杯	12.3	8.0	–	2.7	浅黄橙 10YR8/3	橙 7.5YR7/6	長石．角閃石．雲母
810			SX004	土師器	鉢	11.6	8.5	8.5	5.1	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	長石．石英．雲母 . 輝石
811			SX004	土師器	椀	14.2	(8.2)	–	6.5	にぶい橙 5YR 7/4	橙 5YR7/6	雲母 . 赤色酸化粒
812			SX004	土師器	椀	(17.6)	(9.0)	–	8.0	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	長石 . 角閃石 . 赤色酸化粒
813			SX004	土師器	皿	15.8	13.0	–	1.3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母
814			SX004	土師器	皿	(16.0)	12.5	–	2.2	明赤褐 2.5Y5/6	明赤褐 2.5YR5/6	赤色酸化粒
815			SX004	土師器	鉢	(30.1)	–	–	(8.7)	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR7/4	長石 . 角閃石 . 赤色酸化粒
816			SX004	土師器	甕	(17.5)	–	(15.2)	(9.5)	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石．石英．赤色酸化粒
817	170	81・85	SX004	土師器	杯	12.6	7.9	–	3.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
818			SX004	土師器	杯	12.2	7.4	–	3.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
819		81	SX004	土師器	杯	13.0	8.0	–	2.7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り．工具痕	ナデ	内外面赤彩．外底面に粘土巻き上げ痕	763
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		764
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ケズリ	–	–		765
横ナデ．回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	–	–	つまみ．内外面赤彩	766
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		767
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り工具痕	ナデ	外底面に放射状の工具痕．板状圧痕	768
横ナデ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）　焼き歪み	769
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明皿）内外面油煙	770
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明皿）	771
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		772
横ナデ．ハケメ	横ナデ．ケズリ	–	–		773
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）	774
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付椀）	775
横ナデ	横ナデ	横ナデ	ナデ	（高台付椀）	776
ヘラ磨き	ヘラ磨き	ケズリ	ヘラ磨き	（灯明杯）内外面油煙	777
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		778
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（灯明杯）内外面赤彩	779
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		780
ヘラケズリ後磨き	ヘラ磨き (摩耗)	ヘラ切り後ナデ	ヘラ磨き (摩耗)	内外面赤彩．内器面にヘラ記号	781
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（高台付杯）	782
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後横ナデ	横ナデ	外底面に板状圧痕	783
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		784
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（灯明杯）内外面赤彩	785
横ナデ	横ナデ．ナデ	–	–		786
横ナデ．ケズリ後ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		787
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		788
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		789
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ	焼き歪み	790
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		791
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		792
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	焼き歪み	793
横ナデ	横ナデ	ナデ．横ナデ	ナデ	外面の一部に煤付着	794
横ナデ	横ナデ	糸切り	回転ヘラケズリ	胴部から外底面にかけて煤付着	795
回転ヘラケズリ ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	（研磨土師器）（墨書）	798
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	鉄分付着の為観察不可		799
横ナデ後ヘラ磨き ケズリ	ヘラ磨き (摩耗)	横ナデ．ヘラ切り	ヘラ磨き (摩耗)	（高台付椀）黒色土器 a 類	800
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ		801
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	板状圧痕．内外面赤彩	802
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ	外底面に放射状の工具痕	803
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	804
横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．回転ヘラ磨き	横ナデ．ナデ	横ナデ．回転ヘラ磨き	（高台付椀）	805
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．横ナデ	横ナデ	(高台付椀) 内外面赤彩	806
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	ナデ	(高台付椀)	807
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面に赤彩	808
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	（灯明杯）　内外面口縁部に油煙	809
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り . ナデ	横ナデ . ナデ	外器面に粘土	810
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り . ナデ	横ナデ	(高台付椀) 内外面赤彩	811
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り . 横ナデ	横ナデ	(高台付椀) 内外面赤彩　磨耗	812
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩　口縁外部に煤付着	813
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り . ナデ	横ナデ	焼き歪み	814
横ナデ．ハケ目．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	ハケ目．ナデ	ヘラケズリ	内口縁部、外底面に煤付着	815
横ナデ．ナデ	横ナデ．ヘラケズリ	–	–	外面に煤付着	816
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	817
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	818
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	819

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
820	170	81	SX004	土師器	杯	(14.0)	(9.4)	–	2.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
821			SX004	土師器	杯	(12.4)	(6.6)	–	2.8	明褐灰 7.5YR7/2	明褐灰 7.5YR7/2	長石．石英．雲母
822		81・85	SX004	須恵器	椀	14.4	8.5	–	5.4	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	雲母．砂粒
823		81	SX004	土師器	杯	(13.8)	(10.0)	–	2.9	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．角閃石．赤色酸化粒
824		–	SX004	土師器	杯	(14.0)	(8.0)	–	2.3	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．赤色酸化粒
825		–	SX004	須恵器	杯	12.1	7.1	–	4.2	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	角閃石．雲母
826		–	SX004	須恵器	杯	13.0	8.1	–	3.5	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	雲母
827		–	SX004	須恵器	杯	12.7	7.5	–	3.6	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y5/1	雲母
828		–	SX004	須恵器	椀	(18.5)	9.0	–	9.3	灰 5Y6/1	灰 N5/	角閃石
829		–	SX004	須恵器	蓋	15.9	–	–	3.8	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	雲母
830		–	SX004	須恵器	蓋	15.5	–	–	3.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
831		–	SX004	須恵器	蓋	12.0	–	–	1.8	灰 10Y4/1	灰 N4/	長石．雲母
832		–	SX004	須恵器	蓋	(14.8)	–	–	1.9	灰 N4/	灰 N5/	長石
833		–	SX004	須恵器	蓋	(17.9)	–	–	1.9	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	白色粒．黒色粒
835	171	83	SF001	土師器	杯	(11.3)	6.4	–	3.1	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6	角閃石．赤色酸化粒
836		–	SF001	黒色土器	鉢	(19.2)	–	–	(6.7)	灰黄 2.5Y6/2	黒 N2/	長石．雲母
837		83	SF001	須恵質	坩堝	–	–	–	(5.5)	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	白色粒
861	173	–	調査区	土師器	蓋	(19.2)	–	–	(1.9)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．石英．雲母 赤色酸化粒
862		–	81-M-12	土師器	杯	(12.5)	7.0	–	3.9	にぶいき橙 10YR7/3	にぶいき橙 10YR7/3	赤色酸化物
863		–	81-T-11	土師器	杯	(13.0)	8.9	–	3.0	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5 YR5/4	長石．赤色酸化粒
864		–	96-K-9	土師器	杯	(13.2)	(7.4)	–	3.4	橙 2.5YR6/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英
865		–	調査区	土師器	杯	(13.8)	(7.9)	–	3.1	明赤褐 2.5YR5/8	明赤褐 2.5YR5/8	長石．石英．赤色酸化粒
866		–	67-R-2	土師器	杯	(14.5)	7.7	–	3.5	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．赤色酸化粒
867		83	95-K-19	土師器	椀	(14.5)	7.8	–	6.1	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母．赤色酸化粒
868		–	67-S-2	黒色土器	杯	(11.0)	(10.0)	–	3.8	灰褐色 7.5YR4/2	黒褐 2.5Y3/1	長石．雲母
869		83	96-D-9	黒色土器	杯	(13.6)	6.7	–	4.3	橙 7.5YR6/6	黒 N2/	長石．石英
870			調査区	土師器	盤	(28.0)	(18.2)	–	5.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母
871			調査区	土師器	三足盤	(12.2)	–	–	(3.8)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．赤色酸化粒
872		84	95-S-19	土師器	三足土器	(17.0)	(9.9)	–	(6.7)	にぶい黄褐 10YR7/4	にぶい黄褐 10YR7/4	長石．雲母
873		83	81-Q-8	土師器	不明	–	–	–	(3.2)	にぶい黄橙 10YR6/3	–	長石．石英．雲母．角閃石 赤色酸化粒
874		–	95-M-19	土師器	甕	(29.8)	–	(27.0)	(21.3)	浅黄橙 10YR8/4	灰黄褐 10YR6/2	長石．石英．角閃石．雲母
875	174	86	調査区	土師器	皿	(15.6)	(13.0)	–	1.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
876			調査区	土師器	杯	(11.3)	(7.6)	–	2.9	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/3	雲母
877		–	66-S-18	土師器	杯	12.7	8.5	–	3.0	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	長石．雲母．赤色酸化粒
878		85	96-J-4	土師器	杯	(12.8)	(8.4)	–	2.6	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．石英．雲母
879		–	96-J-4	土師器	杯	(12.2)	8.6	–	3.2	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．赤色酸化粒
880		–	95-M-20	土師器	杯	(13.8)	(6.6)	–	2.8	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
881		–	調査区	土師器	杯	(15.3)	(9.3)	–	3.7	にぶい橙 7.5YR7/4	明赤褐 5YR5/6	長石．石英．赤色酸化粒
882		86	調査区	土師器	杯	–	(8.0)	–	2.2	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母．赤色酸化粒
883		–	96-I-4	土師器	杯	–	(8.0)	–	(2.7)	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石．角閃石．雲母 赤色酸化粒
884		–	81-G-18	土師器	杯	13.0	9.1	–	3.0	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．角閃石．雲母
885		86	81-G-18	土師器	杯	13.2	8.9	–	3 .0	にぶい黄橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 7.5YR7/3	長石．雲母．赤色酸化粒
886		–	調査区	土師器	杯	–	(10.4)	–	1.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
887		87	81-O-13	土師器	杯	–	7.0	–	2.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
888		–	81-F-15	土師器	杯	–	(7.0)	–	1.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母
889		–	調査区	土師器	杯	–	(8.4)	–	1.0	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	長石．赤色酸化粒
890		–	調査区	土師器	杯	–	(7.0)	–	(0.7)	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母
891		–	調査区	土師器	不明	–	–	–	(2.7)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．角閃石．雲母
892		–	調査区	土師器	杯	–	(8.0)	–	1.6	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．石英．角閃石．雲母
893	175	87	調査区	土師器	杯	–	–	–	(0.9)	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．赤色酸化粒
894		–	110-G-10	土師器	杯	–	8.1	–	(1.2)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
895		–	調査区	土師器	杯	–	–	–	(1.3)	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石．石英．赤色酸化粒
896	176	–	81-K-14	須恵器	蓋	14.5	–	–	3.6	オリーブ褐 2.5Y4/3	暗灰黄 2.5Y4/2	雲母．砂粒
897		88	81-I-16	須恵器	蓋	(14.2)	–	–	1.1	灰 N5/	灰 N5/	長石．雲母
898		–	81-L-13	須恵器	杯	13.1	9.0	–	4.0	灰 N7/	灰 N7/	長石
899		–	96-I-2	須恵器	横瓶	(13.0)	–	–	(14.5)	灰白 5Y7/1	灰白 5Y8/1	黒砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ．工具ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	820
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	821
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）（高台付椀）　板状圧痕	822
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）内外面赤彩	823
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	ナデ	（墨書）内外面赤彩	824
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	焼きムラあり　内底面に籾跡	825
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	ナデ	内外器面に工具痕　板状圧痕	826
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	粘土のふくらみ　板状圧痕	827
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り．横ナデ	横ナデ．ナデ	(高台付椀)	828
横ナデ	横ナデ	－	－	重ね焼き痕あり	829
横ナデ．ヘラ切り後ナデ	横ナデ	－	－	内外面赤彩	830
横ナデ．ナデ	横ナデ．ナデ	－	－		831
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	－	－		832
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	重ね焼き痕あり	833
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	糸切り	横ナデ		835
ヘラ磨き	ヘラ磨き	－	－	黒色土器 a 類	836
ナデ	ナデ	－	－	外面に付着物あり	837
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	－	－	穿孔 2 ヶ所	861
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り．工具痕	ナデ		862
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	863
横ナデ．回転ヘラケズリ	回転ヘラ磨き	ヘラ切り後ナデ	回転ヘラ磨き		864
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	内外面赤彩	865
横ナデ．ヘラ磨き 回転ヘラケズリ	回転ヘラ磨き	ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	内器面赤彩	866
ヘラ磨き	ヘラ磨き	横ナデ	ヘラ磨き	内外面の口縁部赤彩	867
ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	ヘラ磨き	黒色土器 a 類	868
横ナデ	ヘラ磨き	ナデ	ヘラ磨き	黒色土器 a 類	869
横ナデ．ハケ目	横ナデ	回転ヘラ切り．工具ナデ	ナデ	（高台付皿）内外面赤彩　内面に煤	870
横ナデ　指ナデ	横ナデ	ヘラ切り　指ナデ	－	板状圧痕	871
横ナデ．ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り．ナデ	横ナデ．ナデ	脚部の残存高 (7.4 ㎝)	872
ナデ	－	－	－	幅 3.2cm、厚 0.9cm．籾殻、藁状圧痕	873
横ナデ．ハケ目	横ナデ．ハケ目 ヘラケズリ	－	－	外器面煤付着	874
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）　線刻　内外面赤彩	875
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（墨書）	876
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ		（墨書）	877
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）内外面赤彩	878
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）	879
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）　内外面赤彩　板状圧痕	880
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	（墨書）	881
横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	回転ヘラケズリ	横ナデ後ヘラ磨き	（墨書）　内外面赤彩	882
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	（墨書）	883
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（墨書）　内外面赤彩	884
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）外底面に墨書　内外面赤彩	885
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）外底面に墨書　内外面赤彩	886
－	－	横ナデ	横ナデ後ナデ	（墨書）（高台付杯）外底面に墨書　内外面赤彩	887
－	－	横ナデ	横ナデ	（墨書）外底面に墨書	888
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（墨書）外底面に墨書	889
－	－	ヘラ切り	横ナデ	（墨書）墨書土器	890
ハケ目	ヘラケズリ	－	－	（墨書）墨書土器	891
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（墨書）（報告書第 235 集 37 区に類似遺物あり）　赤彩	892
－	－	ナデ	ナデ	（刻書）	893
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	（刻書）	894
－	－	ナデ	ナデ	（刻書）	895
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	－	－	焼き歪み　自然釉付着	896
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	－	－	（転用硯）内器面に使用痕あり	897
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		898
横ナデ．平行叩き ハケ目	横ナデ．同心円文	－	－		899

Tab.20　出土遺物（緑釉）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		調整		備考
						口径	底径	器高	釉	胎土	外底面	内底面	
130	124	12・93	SB026	奈良三彩	小型火舎	–	–	(3.5)	軍服の緑 C177 山吹色 C61 くすんだクリーム色 C147	淡いクリーム色 C100	施釉	–	
163	126		SD023	二彩	托	6.6	4.1	(2.1)	瑠璃色の濃緑 C182 萌黄色 C183	かもしか色 C106	施釉	施釉	
192	127		SD095	緑釉陶器	皿	–	(4.4)	1.4	オリーブ色 C179	かもしか色 C106	施釉	–	
377	139		SE034	緑釉陶器	皿	–	(6.8)	(1.1)	黄金色 C148	くすんだクリーム色 C147	施釉	施釉	
796	168	12 79 93	ST001	緑釉陶器	壺	3.0	5.0	5.6	不明	鉛の白 C162	ヘラ切り	横ナデ	最大胴径：7.1cm 全体に火熱をうけて色調が不明
834	170	12・93	SX004	緑釉陶器	皿	(14.0)	(6.5)	2.2	新芽色 C137		施釉	施釉	
838	171		SF001	緑釉陶器	不明	–	–	(0.9)	オリーブ色 C179	灰白 C144	施釉	施釉	内外底面とも一部釉剥離

Tab.21　出土遺物（陶磁器）観察表－①

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		調整		分類	時期	備考
						口径	底径	器高	釉	胎土	外底面	内底面			
13	116	93	SD001	青磁	椀	(15.8)	–	(5.3)	萌黄色 C183	灰白 C144	–	–	A 雷文帯文	14c～16c	内外面にヘラ片彫りで雷文 草花文
14			SD001	青磁	椀	–	5.5	(3.8)	大豆の緑 C172	鉛の灰色 C211	削り出し高台	施釉	—	14c～16c	見込みに印文（草花） 畳付以外は施釉
15		35	SD001	青磁	椀	(15.4)	5.8	7.3	白茶 C107	ベージュ C109	削り出し高台	施釉	–	–	見込みに印文
16		95	SD001	白磁	皿	(13.4)	(6.3)	3.0	銀灰色 C143	雪灰 C282	削り出し高台	施釉	Ⅲ -2 類	12c 後半～13c	見込みに蛇の目状に釉掻き取り ケズリ出し高台 (高台付皿)
19	117	35	SD001	陶器	甕	(35.2)	–	(51.8)	赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	—	—	—	13 c 末～14 c 初頭	備前の大甕　最大胴径 (62.6 ㎝)
20	118		SD002	青磁	椀	(14.0)	–	7.3	萌黄色 C183	灰白 C144	削り出し高台	施釉	A 雷文帯文	14c～16c	内器面に草花文　外器面に雷文 見込みに目痕　外底面一部に釉溜り
21		95	SD003	白磁	皿	10.3	5.5	2.9	鉛の灰色 C211	薄白茶 C103	施釉	施釉	–	–	口縁部を釉掻き取り
34		94	SE001	白磁	皿	12.5	–	(3.8)	灰白 C144	雪灰 C282	–	–	Ⅱ類	11c 後半～12c	体部下半まで施釉あり
35			SE001	白磁	椀	(15.6)	–	2.1	枯芽色 C157	灰白 C144	–	–	Ⅳ類	12c 後半	玉縁はやや小ぶり
58	119		SE002	白磁	皿	(11.8)	–	(2.9)	灰白 C144	亜鉛華の白 C164	–	–	Ⅲ -2		施釉は体部下半まで
71	120		SE003	白磁	椀	–	–	(3.3)	灰白 C144	鉛の白 C162	–	–	Ⅳ類	15c	玉縁はやや大ぶり
72			SE003	白磁	椀	11.8	–	(4.0)	薄白茶 C103	貝の白 C163	–	–	Ⅴ -2a	11c 後半～12c 前半	
86	121		SE006	白磁	皿	(10.9)	(4.6)	3.1	灰白 C144	亜鉛華の白 C164	削り出し高台	–	Ⅱ -1	11c 後半～12c	内面に釉溜り 高台は畳付まで釉剥ぎ取り
87			SE006	白磁	椀	(14.9)	–	(4.8)	灰白 C144	灰白 C144	–	–	Ⅳ -2	12c 後半	玉縁はやや小ぶり 釉は体部中位まで施釉
184	127		SD093	白磁	鉢	(19.6)	–	(4.6)	鉛灰色 C211	亜鉛華の白 C164	–	–	–	–	口縁は輪花
193			SD095	白磁	四耳壺	10.0	–	(5.1)	銀灰色 C143	-	–	–	–	–	口縁部から頸部まで
194		95	SD095	白磁	椀	–	(7.0)	(3.9)	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	削り出し高台	施釉	V-1a	11c 後半～12c	
195			SD095	染付	椀	–	-	(2.2)	月白色 C209	貝の白 C163	–	–	–	15c～16c	景徳鎮系染付
196			SD095	染付	椀	–	(5.1)	(3.0)	月白色 C209	貝の白 C163	–	–	Ⅲ類	15c～16c	景徳鎮系染付 底部は饅頭心
197		94	SD096	青磁	椀	–	6.5	(3.1)	瓦の鼠茶 C293	灰白 C144	目跡	施釉 目跡	Ⅱ -2	8c 末～10c	越州窯系青磁
198		10 46	SD097	青磁	椀	(15.2)	–	(4.4)	新芽色 C137	薄桜色 C101	–	–	Ⅰ -3	—	越州窯系青磁
199		94	SD098	白磁	椀	–	–	(3.5)	海老の殻の灰色 C 214	薄桜色 C101	–	–	Ⅳ類	12c 後半	内器面に別個体の溶着痕あり やや大ぶりの玉縁
200			SD098	白磁	椀	(14.2)	–	(2.6)	月白色 C209	貝の白 C163	–	–	Ⅳ類	12c 後半	やや大ぶりの玉縁
378	139		SE034	白磁	椀	(14.2)	–	(4.4)	海老の殻の灰色 C 214	貝の白 C163	–	–	Ⅱ類	11c 後半～12c	№.134 と類似
379			SE034	白磁	椀	(13.8)	–	(5.5)	薄白茶 C103 栗色 C127	藍白 C 281 灰白 C 144	–	–	Ⅱ類	11c 後半～12c	口縁端部は短く外反
839	171	82	SF001	青磁	椀	(14.2)	–	(2.2)	海老の殻の灰色 C 214	鼠色 C292	–	–	–	–	口縁端部外反
840			SF001	青磁	椀	–	–	(4.3)	海老の殻の灰色 C 214	鼠色 C292	–	–	–	–	口縁端部外反
841			SF001	青磁	椀	–	–	(2.3)	灰緑 C176	鼠色 C292	–	–	B 細連弁文（鎬文）	14c～16c	
842			SF001	青磁	椀	–	–	(3.2)	冬の緑 C190	藍白 C281	–	–	B 細連弁文（鎬文）	14c～16c	外器面に蓮弁文
843			SF001	白磁	皿	–	–	1.5	雪灰 C282	鉛の白 C162	–	施釉	–	–	底部施釉なし
844			SF001	白磁	皿	(8.2)	(5.4)	1.2	月白色 C209	灰白 C144	施釉	施釉	–	–	口縁端部口禿げ
845			SF001	白磁	椀	–	–	(2.7)	亜鉛華の白 C164	鉛の白 C162	–	–	–	–	口縁端部玉縁状口縁
846			SF001	白磁	椀	–	(5.2)	(1.5)	亜鉛華の白 C164	鉛の白 C162	削り出し高台	施釉	–	15c	内底面に文様あり
847			SF001	染付	椀	(9.6)	–	(2.3)	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	–	–	–	–	景徳鎮系染付
848			SF001	染付	椀	(11.4)	–	(3.2)	薄い灰緑 C201	鉛の白 C162	–	–	–	–	景徳鎮系染付

Tab.22　出土遺物（陶磁器）観察表－②

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		調整		分類	時期	備考
						口径	底径	器高	釉	胎土	外底面	内底面			
849	171	82	SF001	染付	椀	(12.8)	–	(2.2)	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	–	–	Ⅲ Ⅱ類	15c 後半～16c	景徳鎮系染付
850			SF001	染付	Ⅲ	–	–	2.6	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	–	–	Ⅲ Ⅱ類	15c 後半～16c	景徳鎮系染付 畳付は釉の掻き取り
851			SF001	染付	Ⅲ	(11.4)	(5.6)	2.3	月白色 C209	鉛の白 C162	–	–	Ⅲ Ⅱ b 類	15c 後半～16c	景徳鎮系染付 畳付は釉の掻き取り
852			SF001	染付	椀	–	–	(2.3)	月白色 C209	貝の白 C163	–	–	–	–	景徳鎮系染付
853			SF001	染付	椀	–	–	(3.0)	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	–	–	–	15c 後半～16c	景徳鎮系染付
854			SF001	染付	椀	–	–	(3.3)	鉛灰色 C211	灰白 C144	–	–	Ⅲ Ⅲ類	15c～16c	景徳鎮系染付 口縁がやや内湾
855			SF001	染付	Ⅲ	–	–	(0.8)	月白色 C209	亜鉛華の白 C164	–	–	–	15c 後半～16c	景徳鎮系染付　口縁端部口禿げ
856	172	93	調査区	青磁	椀	(17.8)	–	(3.4)	淡い灰緑 C194	薄白茶 C103	–	–			
857			調査区	青磁	香炉	–	–	(1.9)	すずかけの樹の色 C216	薄白茶 C103	施釉	施釉	–	–	
858		94	調査区	青磁	椀	–	(10.0)	(3.1)	白茶 C135	白茶 C107	削り出し高台	施釉	Ⅰ -2	10c 後半～11c	見込みに目跡あり
859		95	調査区	白磁	Ⅲ	(10.2)	4.7	2.9	銀灰色 C143	鉛の灰色 C211	削り出し高台	—	Ⅲ - 1	–	見込み蛇の目釉掻き
860			調査区	染付	椀	–	(5.6)	(1.5)	雪の灰白 C282	亜鉛華の白 C164	施釉	施釉	Ⅲ類	15c～16c	体部は饅頭心 文様（釉）深い藍 C261

Tab.23　出土遺物（製塩土器）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土	調整				備考
						口径	底径	器高	外面	内面		外器面	内器面	外底面	内底面	
207	128	91	SE007	土師器	製塩土器	(8.3)	–	8.4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	長石．石英 雲母．黒色粒	ナデ 指頭圧痕	指頭圧痕	–	–	
272	132		SE027	土師器	製塩土器	–	–	(5.4)	灰黄褐 10YR5/2	灰褐 7.5YR4/2	長石．黒色粒	ナデ	ナデ	–	–	
394	140		SE035	土師器	製塩土器	–	–	(3.5)	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．角閃石 雲母	ナデ	ナデ	–	–	
428	142		SE044	土師器	製塩土器	(8.0)	–	(7.0)	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母	ナデ 指頭圧痕	ナデ 工具痕	–	–	
458	144		SE049	土師器	製塩土器	–	–	(6.0)	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英 角閃石 赤色酸化粒	ナデ 指頭圧痕	ナデ 籾殻圧痕	–	–	
523	148		SI044	土師器	製塩土器	–	–	(3.9)	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 2.5YR6/6	角閃石．雲母 赤色酸化粒	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	–	–	
546	149		SI048	土師器	製塩土器	–	–	(3.6)	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	長石．赤色酸化粒	ナデ	ナデ	–	–	
547			SI048	土師器	製塩土器	–	–	(3.3)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8	赤色酸化粒	ナデ	布目痕	–	–	
708	162		SK037	土師器	製塩土器	–	–	(5.5)	灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y6/1	長石．角閃石 雲母	ナデ	ナデ	–	–	
900	177		調査区	土師器	製塩土器	8.6	–	8.5	浅黄 2.5Y7/3	にぶい橙 5YR6/4	長石．石英 雲母．角閃石	ナデ 指頭圧痕	ナデ 工具痕	ナデ 指頭圧痕	ナデ 工具痕	
901			調査区	土師器	製塩土器	–	–	(4.3)	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．赤色酸化粒	ナデ 指頭圧痕	ヘラ削り ナデ	–	–	
902			調査区	土師器	製塩土器	–	–	4.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．赤色酸化粒 砂粒	ナデ 指頭圧痕	ナデ 工具痕	–	–	

Tab.24　出土遺物（鉄製品）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	器種	法量				備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
797	168	12・90	ST001	紡錘車	2.3	(孔径) 4.5	0.2	12.3	
905	178	13 90	SK142	錠前	8.3	1.7	(高さ) 3.9	31.7	牡金具Ｂ群１類（弦受け部 4.1cm)(施錠部 4.2cm) 先端に木片付着
906		90	SK020	鍵	11.0	1.8	–	27.3	先端に木片付着
907			SI026	紡錘車	–	(孔径) 4.0	0.2	11.7	最大軸径 0.6cm。軸部は殆ど欠損
908			SI044	紡錘車	5.4	(孔径) 4.1	0.4	24	最大軸径 0.7cm
909			調査区	不明	9.3	1.0	–	29.7	木片付着
910			SD002	釣針	6.8	3.1	0.4	6.5	
911			SE002	馬具	6.4	1.8	0.9	19.9	
912			SE013	刀子	9.1	2.4	0.4	15.9	

Tab.25　出土遺物（銅製品）観察表

遺物番号	PL No.	遺構番号	器種	法量				備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
986	13・91	南３層	鈴帯金具	3.0	2.2	0.6	2.3	革紐の留具
987		SI090	鈴帯金具	3.1	1.3	0.5	5.3	帯金具
988		SD102	不明	4.3	0.3	0.3	2.1	
989		SB030	鈴帯金具	3.0	1.6	0.2	3.4	革紐の留具
990		SI056	留金具	0.9	1.0	(軸径)　0.3	0.4	
991		SI056	留金具	0.9	0.8	(軸径)　0.2	0.3	
992		ST002	不明	5.1	1.3	0.1	1.0	

Tab.26　出土遺物（鞴の羽口）観察表

遺物番号	Fig. No.	PL. No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	調整		備考
						口径	器高	外面	内面		外器面	内器面	
59	119	87	SE002	土製品	鞴の羽口	–	(4.7)	灰 5Y5/1	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英 角閃石	ヘラケズリ	ナデ	
60			SE002	土製品	鞴の羽口	–	(4.2)	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英	ヘラケズリ	ナデ	
903	177		95-J-5	土製品	鞴の羽口	–	(9.2)	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	長石	工具ナデ	ナデ	外径（6.8）cm　孔径 (3.4)cm 装着角度 10°

Tab.27　出土遺物（土製品）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調	胎土	調整	備考
						最大長	最大幅	最大厚	器高				
186	127	44	SD094	陶器（転用）	円盤状製品	3.0	3.6	0.9	–	栗皮色 C133 狐色 C75	–	横ナデ．擦り目	施釉
187			SD094	須恵器（転用）	円盤状製品	3.8	4.2	0.8	–	灰白 N7/ にぶい黄橙 10YR6/3	–	格子目タタキ 当て具痕．横ナデ	同心円文　自然釉
188			SD094	陶器（転用）	円盤状製品	3.9	4.2	0.9	–	薄白茶 C103	–	–	施釉
395	140	55	SE035	土製品	土錘	4.9	3.5	1.4	–	橙 5YR7/6	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒	ナデ．指頭圧痕 工具痕．ケズリ	
904	177	13・87	調査区	土製品	土馬	6.2	(2.0)	–	(4.4)	にぶい橙 7.5YR7/4	砂粒	ナデ	
921	181	92	調査区	土製品	土馬	9.7	4.2	–	(5.7)	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英 角閃石．雲母	ナデ	木葉猿系
922			調査区	土師器	土人形	4.4	2.5	1.9	–	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．赤色酸化粒	ナデ	蝉
923			調査区	土師器	土人形	5.9	3.0	3.0	–	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．白色粒	ナデ	頭部

Tab.28　出土遺物（縄文土器）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）		色調		胎土	調整		備考
						口径	器高	外面	内面		外器面	内器面	
924	182	96	SK114	縄文土器	浅鉢	–	(3.3)	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄 2.5Y6/3	長石．角閃石	磨き	磨き	口縁部に沈線あり
925			SK047	縄文土器	鉢	–	(2.2)	黒褐 10YR3/2	にぶい黄褐 10YR5/3	長石．石英．角閃石	磨き	磨き．横ナデ	口縁部外器面に沈線あり
926			調査区	縄文土器	浅鉢	–	(4.5)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3	長石．赤色酸化粒	磨き	磨き	外器面に沈線あり
927			調査区	縄文土器	深鉢	–	(2.6)	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	長石．石英	磨き	磨き	穿孔 2 箇所あり
928			SI108	縄文土器	浅鉢	–	(6.3)	にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．石英．角閃石	磨き	磨き後ナデ	
929			SI056	縄文土器	深鉢	–	(5.2)	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	角閃石．赤色酸化粒	ナデ	条痕	
930			調査区	縄文土器	鉢	–	(5.1)	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石．角閃石	ナデ	磨き	外器面に凹線文あり
931			81-C-17	縄文土器	深鉢	–	(4.1)	褐 7.5YR4/3	にぶい赤褐 5YR5/4	長石．石英．角閃石	ナデ	ナデ．磨き	外器面に沈線あり
932			SI100	縄文土器	深鉢	–	(4.1)	黒褐 10YR3/1	にぶい黄褐 10YR5/4	長石．角閃石	条痕	ナデ	
933			SK047	縄文土器	深鉢	–	(4.1)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒	条痕、ナデ	ナデ	口縁部内器面に沈線あり
934			96-J-2	縄文土器	深鉢	(18)	(5.5)	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	石英．角閃石	ナデ．施文	ナデ	
935			SX004	縄文土器	深鉢	–	(4.6)	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR5/3	長石．石英	条痕	ナデ．横ナデ	
936			SI063	縄文土器	鉢	–	(2.5)	にぶい黄橙 10YR6/4	暗灰黄 2.5Y5/2	長石．石英	条痕	ナデ	

Tab.29　出土遺物（石製品）観察表

遺物番号	Fig No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量				色調	石材	備考
						全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
102	122	–	SK004	軽石	不明	5.9	5.2	2.6	15.4	灰黄 2.5Y7/2	凝灰岩	
228	129	–	SE011	滑石製品	分銅	4.9	3.4	2.4	62	褐灰 5YR6/1	滑石	ケズリ調整
322	135	–	SE031	滑石製品	石鍋	5.7	8.0	3.3	221	黄灰 2.5Y6/1　黒 2.5Y2/1	滑石	ケズリ調整
407	141	–	SE037	滑石製品	不明	8.2	3.7	1.4	65	灰 5Y4/1	滑石	
508	147	–	SI042	滑石製品	浮き	4.2	4.2	1.9	10	灰白 2.5Y8/1	軽石	
734	163	13・77	SK045	滑石製品	不明	4.7	–	2.1	61.5	灰褐 5YR6/2	滑石	人面様彫りこみあり
735			SK046	滑石製品	石鍋	(9.1)	(5.7)	（器高）(2.0)	105	灰 5Y6/1	滑石	蚤状工具による器面調整
913	179	92	調査区	滑石製品	石鍋	16.8	8.3	1.8	820	褐灰 7.5YR4/1　灰白 5Y7/2	滑石	
914			SE054	滑石製品	石鍋	(底径)(17.8)	(残存高)4.3	–	146	黒色 N2/　灰色 N4/	滑石	
915			調査区	滑石製品	石鍋	3.2	4.4	1.5	34	灰褐 5YR6/2	滑石	
916	180		調査区	滑石製品	紡錘車	2.7	3.2	1.7	20	灰白 10YR7/1	滑石	
917			調査区	石製品	紡錘車	4.3	4.3	1.9	520	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂岩	側面に加工痕あり
918			SE013	石製品	紡錘車	5	5	1.7	72	にぶい黄 2.5Y6/4	砂岩	
919			SK048	石製品	砥石	11	11.5	8.4	1483	にぶい黄 2.5Y6/3	砂岩	
920			SK051	石製品	砥石	12.5	8.8	10.1	1279	浅黄 2.5Y7/3	砂岩	
937	182	96	調査区	石製品	打製石斧	(14)	7.2	2.5	378.4	–	安山岩	刃部残存
938			調査区	石製品	打製石斧	(7.5)	6.2	2.3	150	–	安山岩	
939			SD023	石製品	敲石	11.4	5.8	4.1	317	暗灰黄 2.5Y5/2	安山岩	
940			SX004	石製品	石皿	8.4	7.7	2.1	166	黄灰 2.5Y5/1	安山岩	完形
941		–	調査区	石製品	石皿	8	(9.8)	2.5	284	暗灰黄 2.5Y5/2	安山岩	
942		–	SK176	石製品	不明	8.8	2.9	0.7	26.6	灰 10Y5/1	片岩	
943		–	SI091	黒曜石	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.2	黒 N2/	黒曜石	

Tab.30　出土遺物（瓦）観察表

遺物番号	Fig. No	PL. No	遺構番号	種類	法量			色調		胎土	備考
					最大長 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	外面	内面		
944	183	97	SD 083	軒丸瓦	(4.9)	1.5	25	灰白色 5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	砂粒．黒色粒	軒丸 11 類
945			SD095	軒平瓦	(4.0)	3.7	118	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	白色砂粒 黒色砂粒	軒平 8 A 類　包み込み技法
946			SK 047	軒平瓦	(13.7)	4.7	734	灰黄褐 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．砂粒	包み込み技法 二重唐草文の上下に鋸歯文 普通は天星地水の文様、二本木では初めて 8 ～ 9C 前半
947		–	SD001	丸瓦	(8.9)	1.6	95	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR6/1	長石．石英	
948		–	SD002	丸瓦	(11.2)	1.6	220	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y5/1	長石．石英 赤色酸化粒	行基丸瓦
949		97	SE002	軒丸瓦	(4.3)	2.0	45	灰 N5/	灰 N4/	長石	行基瓦　凸面格子目叩き
950		–	SD042	丸瓦	(10.3)	1.7	200	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/3	長石	
951		100	SE031	丸瓦	(16.9)	2.7	547	灰黄 2.5Y7/2	橙 5YR6/6	角閃石 赤色酸化粒	凹面拓本
952	184	–	SK006	丸瓦	(10.5)	1.5	252	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英 赤色酸化粒	
953		–	SE050	丸瓦	(19.7)	1.9	586	灰黄褐 10YR6/2	灰黄 2.5YR6/2	砂粒	
954		–	SE004	丸瓦	(14.2)	3.3	695	灰オリーブ 5Y5/2	灰オリーブ 5Y5/2	長石．石英	
955		–	110-S 南	丸瓦	(7.7)	1.4	116	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	白色砂粒	行基丸瓦
956		–	110-E-10	丸瓦	(12.0)	2.5	541	灰 N5/	灰 N4/	白色砂粒 . 小石	縄目叩き
957		–	81-C-17	丸瓦	(10.8)	1.5	402	灰黄 2.5Y6/2	褐灰 10YR6/1	長石 赤色酸化粒	
958		–	SP427	丸瓦	(8.2)	1.8	412	橙 5YR8/8	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英	大きめの行基瓦
959		–	SD042	丸瓦	(10.1)	2.2	231	黄灰 2.5Y5/1	灰 5Y5/1	砂粒 赤色酸化粒	凹面に縄目叩きがあるのは珍しい
960	185	98	SE050	丸瓦	36.1	1.9	1700	明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	砂粒	凸面縄目叩き
961			SE050	丸瓦	(36.2)	3.3	1310	オリーブ灰 2.5GY5/1	緑灰色 10G5/1	長石 赤色酸化粒	
962	186	99	SE050	平瓦	(30.2)	3.2	2787	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	砂粒．小石	３辺が残っている　一枚作り
963		–	SE007	平瓦	(11.5)	2.3	533	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	長石 . 輝石 赤色酸化粒	桶巻き粘土紐作り　裁面、破面（側面の割面）が明瞭
964		–	SE011	平瓦	(9.4)	2.0	204	黒褐 2.5Y4/1	暗灰黄 2.5Y5/2	長石．輝石	
965		–	SE002	平瓦	(8.3)	1.8	173	明褐灰 7.5YR7/2	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．石英	凹面糸切り　凸面に顔料が付着 一枚作り平瓦（桶巻きでない可能性大） 叩き目が同方向
966	187	99	SE050	平瓦	(35.6)	2.5	2451	灰 7.5Y5/1	灰 5Y6/1	砂粒	
967		–	SE011	平瓦	(10.9)	2.1	198	黒褐 10YR3/1	にぶい黄橙 10YR6/3	長石．輝石	凹面全体にスス付着
968		–	SE011	平瓦	(10.7)	2.9	306	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR5/1	長石	二次調整
969	188	–	SE026	平瓦	(19.0)	2.2	1054	灰 N4/	灰 N5/	砂粒．小石	一枚作り 側面、側端共に面取り
970		–	96-I-2	平瓦	(26.5)	2.3	1112	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	砂粒	一枚作りの可能性　凸面に糸切りの痕跡有り
971	189	–	SE050	平瓦	(12.6)	3.1	825	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	砂粒	
972		–	SE050	平瓦	(15.9)	2.6	721	灰 N5/	灰 N4/	角閃石	
973		–	SE026	平瓦	(15.2)	2.2	849	灰 N5/	灰 N5/	長石．石英 赤色酸化粒	一枚作り　凸形台と凹形台の上で作った可能性あり 凸面に格子目叩き、縄目叩き
974	190	–	SE046	平瓦	(16.6)	2.3	797	灰 N4/	灰 7.5Y5/1	石英．角閃石 雲母	
975		–	SE050	平瓦	(23.1)	2.4	1101	青灰 10BG5/1	青灰 10BG5/1	小石	
976		–	SR050	平瓦	(23.0)	1.8	673	灰 N4/	灰 N4/	砂粒．小石	
977		–	SE050	平瓦	(19.8)	2.4	661	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	角閃石．砂粒	
978	191	97	SE003	平瓦	(13.8)	2.2	462	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR5/3	長石 赤色酸化粒	凸面に葉脈状圧痕有り
979		–	SE050	平瓦	(14.2)	9.4	277	灰 N4/	灰 N4/	砂粒	
980		–	SE050	平瓦	(11.1)	2.0	225	にぶい橙 2.5YR7/3	にぶい橙 2.5YR7/3	赤色酸化粒	
981		–	SD095	平瓦	(6.9)	2.0	140	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．砂粒	
982	192	100	SD001	熨斗瓦	(13.0)	2.3	381	白灰 10YR8/2	白灰 10YR8/2	長石．石英	左上に糸切り痕あり　古代　凸面側から実測
983			95-S-19	熨斗瓦	(18.2)	2.3	594	黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y7/2	砂粒	
984			SD095	瓦玉	7.7	2.4	169	灰 5Y5/1	にぶい橙 7.5YR6/4	角閃石 赤色酸化粒	瓦玉（メンコ状製品）
985			SD097	瓦玉	8.9	2.7	178	灰黄褐 10Yr5/2	灰黄褐 10Yr5/2	赤色酸化粒	瓦玉

遺物番号	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土
					口径	底径	残存高	外面	内面	
1000	34	SD001	土師器	杯	12.0	7.9	2.9	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1001		SD001	土師器	杯	12.6	7.6	3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
1002		SD001	土師器	杯	12.7	7.7	3.1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母
1003	35	SD002	土師器	杯	12.1	7.6	3.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1004		SD002	土師器	蓋	18.2	–	3.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石 . 雲母 . 赤色酸化粒
1005		SD005	土師器	碗	(10.8)	(6.0)	4.9	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母 . 微細粒
1006	36	SE001	土師器	小皿	9.9	7.2	1.7	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1007		SE001	土師器	小皿	8.8	7.5	1.3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．砂粒
1008		SE001	土師器	小皿	9.6	8.0	1.4	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石．砂粒
1009		SE001	土師器	小皿	9.0	7.1	1.5	橙 5YR7/6	橙 2.5YR6/6	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1010		SE001	土師器	小皿	9.0	7.6	1.3	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石．赤色酸化粒
1011		SE001	土師器	小皿	9.3	7.6	1.5	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．赤色酸化粒
1012		SE001	土師器	小皿	8.9	6.7	1.2	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
1013		SE001	土師器	小皿	9.0	7.2	1.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1014		SE001	土師器	小皿	9.2	7.5	1.4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．赤色酸化粒
1015		SE001	土師器	小皿	9.6	8.0	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1016		SE001	土師器	小皿	9.3	7.4	1.7	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	角閃石．赤色酸化粒
1017		SE001	土師器	小皿	8.9	7.0	1.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1018		SE001	土師器	小皿	10.1	7.6	1.3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1019		SE001	土師器	杯	15.7	9.6	4.0	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1020		SE001	土師器	杯	14.1	9.6	4.1	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1021		SE001	土師器	杯	14.8	9.3	3.8	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/4	角閃石．赤色酸化粒
1022	37	SE002	土師器	小皿	9.4	7.4	1.2	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	石英．赤色酸化粒
1023		SE002	土師器	小皿	9.2	7.0	1.1	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．砂粒．赤色酸化粒
1024		SE002	土師器	小皿	9.9	8.2	1.3	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1025		SE002	土師器	小皿	9	7.2	1.5	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1026		SE002	土師器	小皿	9.3	7.3	1.4	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1027		SE002	土師器	小皿	9.5	7.6	1.5	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	角閃石．赤色酸化粒
1028		SE002	土師器	小皿	9.2	7.6	1.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1029		SE002	土師器	小皿	9.2	7.0	1.4	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR6/6	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1030		SE002	土師器	小皿	9.6	7.6	1.3	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	雲母．赤色酸化粒
1031		SE002	土師器	小皿	9.8	8.0	1.5	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1032		SE002	土師器	小皿	9.3	6.9	1.2	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1033		SE002	土師器	小皿	9.6	7.6	1.4	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	石英．角閃石 . 赤色酸化粒
1034		SE002	土師器	小皿	8.7	7.5	1.3	明黄褐 10YR 7/6	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母
1035		SE002	土師器	小皿	9.1	7.3	1.5	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	角閃石．赤色酸化粒
1036		SE002	土師器	小皿	9.1	7.4	1.3	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	長石．雲母．赤色酸化粒
1037		SE002	土師器	小皿	8.7	7.3	1.1	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．角閃石．赤色酸化粒
1038		SE002	土師器	小皿	9.4	7.3	1.5	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR 7/6	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1039		SE002	土師器	小皿	9.6	7.0	1.7	黄橙 7.5YR7/8	橙 5YR6/6	長石．雲母．赤色酸化粒
1040		SE002	土師器	小皿	8.9	6.8	1.5	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR 7/6	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1041		SE002	土師器	小皿	9.4	7.3	1.4	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1042		SE002	土師器	小皿	9.5	7.6	1.3	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1043		SE002	土師器	小皿	9.1	6.7	1.9	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1044		SE002	土師器	小皿	9.5	7.8	1.6	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR 7/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1045		SE002	土師器	小皿	9.4	7.3	1.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．角閃石．雲母
1046		SE002	土師器	小皿	9.5	7.4	1.5	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1047		SE002	土師器	小皿	9.7	7.5	1.4	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．赤色酸化粒
1048		SE002	土師器	小皿	9.6	7.3	1.5	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1049		SE002	土師器	小皿	8.8	6.8	1.6	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1050		SE002	土師器	小皿	10.2	8.0	2.0	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
1051		SE002	土師器	小皿	9.1	7.7	1.2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR5/4	角閃石．赤色酸化粒
1052		SE002	土師器	小皿	9.2	7.3	1.6	にぶい橙 7.5YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/4	石英．角閃石．赤色酸化粒
1053		SE002	土師器	杯	14.6	9.8	4.1	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1054		SE002	土師器	杯	14.7	9.6	4.4	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．角閃石．雲母 赤色酸化粒
1055		SE002	土師器	杯	14.9	10.1	4.2	浅黄橙 10YR8/3	橙 7.5YR7/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1056		SE002	土師器	杯	12.7	7.9	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
1057		SE002	土師器	杯	15.8	9.2	4.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1058		SE002	土師器	杯	14.8	10.0	4.7	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．砂粒．赤色酸化粒
1059		SE002	土師器	杯	15.3	10.6	3.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1060		SE002	土師器	杯	14.6	9.9	3.7	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/3	角閃石．砂粒
1061		SE002	土師器	杯	15.4	9.9	4.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英、角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
1062		SE002	土師器	杯	15.3	9.3	4.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	石英．角閃石．雲母．砂粒 赤色酸化粒
1063		SE002	土師器	杯	14.8	9.6	3.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1064		SE002	土師器	杯	14.8	9.6	4.5	橙 7.5 Y R 7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1065	38	SE003	土師器	小皿	8.5	7.2	1.4	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	砂粒．赤色酸化粒
1066		SE003	土師器	小皿	8.9	7.3	1.3	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1067		SE003	土師器	小皿	9.3	7.1	1.2	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	砂粒．赤色酸化粒
1068		SE003	土師器	小皿	9.4	7.6	1.4	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	砂粒．赤色酸化粒
1069		SE003	土師器	小皿	8.7	7.1	1.2	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR 7/6	砂粒．赤色酸化粒
1070		SE003	土師器	小皿	9.0	7.0	1.1	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．砂粒．赤色酸化粒
1071		SE003	土師器	小皿	8.7	7.4	1.5	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1072		SE003	土師器	小皿	9.5	7.4	1.5	明黄褐 10YR 7/6	明黄褐 10YR 7/6	長石．角閃石．赤色酸化粒
1073		SE003	土師器	小皿	9.5	7.7	1.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒

	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1000
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外底面を除く全面に赤彩	1001
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（灯明杯）（油煙が少量、口縁部に付着） 内外面赤彩	1002
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1003
	横ナデ	横ナデ	ー	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　宝珠つまみ	1004
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面一部煤付着　板状圧痕	1005
	横ナデ	横ナデ	糸きり	横ナデ後ヘラ状工具による横ナデ	（灯明皿）	1006
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1007
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1008
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1009
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	板状圧痕	1010
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1011
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1012
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内面口縁端部から内底面にかけてスス付着　板状圧痕	1013
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1014
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	粘土巻上げ痕（一部剥離）	1015
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	焼き歪み	1016
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1017
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	粘土巻上げ痕	1018
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1019
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後 ヘラ状工具による横ナデ	板状圧痕	1020
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1021
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1022
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	板状圧痕	1023
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面一部スス付着　　外底面一部スス付着　板状圧痕	1024
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1025
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	二次的に火熱をうけている　板状圧痕	1026
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1027
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	（灯明皿）　　板状圧痕	1028
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	板状圧痕	1029
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1030
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	回転ナデ後指調整	内外面ほぼ全体にスス付着　　板状圧痕	1031
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面ほぼ全体スス付着　　板状圧痕	1032
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1033
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1034
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	外面一部に焼きむら	1035
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面ほぼ全体にスス付着　　板状圧痕	1036
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	板状圧痕	1037
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ		1038
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1039
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面一部にスス付着　　板状圧痕	1040
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	広範囲に二次的火熱をうけている	1041
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切後ナデ	ナデ	板状圧痕	1042
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内面スス付着　　板状圧痕	1043
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1044
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕	1045
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1046
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1047
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内面から外面の口縁の一部にスス付着	1048
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面にスス付着	1049
	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	板状圧痕	1050
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	1051
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1052
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1053
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1054
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1055
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1056
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面全体にスス付着	1057
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	1058
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1059
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	1060
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1061
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1062
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1063
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　　板状圧痕	1064
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1065
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1066
	横ナデ	横ナデ	糸切り	ナデ		1067
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外面器～外底面にスス付着　板状圧痕	1068
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1069
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1070
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1071
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1072
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内・外面にスス付着　板状圧痕	1073

遺物番号	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土
					口径	底径	残存高	外面	内面	
1074	38	SE003	土師器	小皿	8.4	6.5	1.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．砂粒
1075		SE003	土師器	小皿	8.7	7.1	1.1	黄橙 7.5YR8/8	黄橙 7.5YR8/8	角閃石．雲母
1076		SE003	土師器	小皿	8.4	6.8	1.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1077		SE003	土師器	小皿	9.1	6.9	1.3	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母．砂粒
1078		SE003	土師器	小皿	9.1	7.2	1.5	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．赤色酸化粒
1079		SE003	土師器	小皿	9.7	7.7	1.5	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	長石．角閃石 . 雲母．赤色酸化粒
1080		SE003	土師器	小皿	9.6	8.4	1.3	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．赤色酸化粒
1081		SE003	土師器	小皿	8.9	7.2	1.3	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1082		SE003	須恵器	小皿	9.7	7.8	1.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	砂粒
1083		SE003	土師器	杯	15.8	11.3	2.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	砂粒．赤色酸化粒
1084		SE003	土師器	杯	14.8	10.5	3.2	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．砂粒
1085	39	SE004	土師器	小皿	9.8	8.2	1.4	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR6/4	角閃石．雲母．砂粒
1086		SE004	土師器	小皿	9.3	7.5	1.3	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1087		SE004	土師器	小皿	9.0	7.2	1.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1088		SE004	土師器	小皿	8.9	6.9	1.4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母
1089		SE004	土師器	小皿	9.4	7.4	1.2	明褐灰 7.5YR7/2	にぶい褐 7.5YR6/3	雲母．赤色酸化粒
1090		SE004	土師器	小皿	11.0	8.6	1.8	にぶい黄褐 10YR5/4	明黄褐 10YR6/6	雲母．赤色酸化粒
1091		SE004	土師器	小皿	8.5	6.9	1.2	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．赤色酸化粒
1092		SE004	土師器	小皿	9.0	7.4	1.3	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母
1093		SE004	土師器	小皿	9.8	6.8	1.8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	砂粒．赤色酸化粒
1094		SE004	土師器	小皿	9.4	6.2	1.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
1095		SE004	土師器	小皿	9.5	6.4	2.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．砂粒．赤色酸化粒
1096		SE004	土師器	小皿	9.7	7.0	1.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石
1097		SE004	土師器	小皿	9.8	7.8	1.2	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR6/3	砂粒．赤色酸化粒
1098		SE004	土師器	杯	13.1	8.1	3.3	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1099	40	SK001	土師器	杯	13.0	7.9	3.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/5	石英．雲母．砂粒
1100	46	SD025	土師器	杯	12.8	8.5	2.9	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1101		SD025	土師器	杯	13.8	9.0	3.1	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1102		SD025	土師器	杯	13.3	8.0	3.2	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1103		SD025	土師器	杯	13.1	9.9	3.0	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1104		SD025	土師器	杯	13.1	8.2	3.2	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．石英．角閃石 雲母．赤色酸化粒
1105	47	SE007	土師器	杯	13.0	8.7	3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1106		SE007	土師器	杯	13.2	7.9	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．石英．角閃石．赤色酸化粒
1107		SE007	土師器	杯	17.6	10.4	5.0	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	雲母
1108		SE007	須恵器	杯	12.9	8.2	4.8	灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y6/1	長石．角閃石．雲母
1109		SE007	須恵器	杯	12.4	6.8	4.6	灰 N5/	灰 N5/	角閃石
1110		SE007	須恵器	蓋	16.4	–	2.2	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR6/1	角閃石．雲母
1111		SE007	須恵器	蓋	14.8	–	1.9	灰白 10YR8/1	灰白 10YR7/1	砂粒
1112		SE007	須恵器	長頸壺	-	–	14.1	にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄褐 10YR4/3	砂粒
1113	48	SE013	土師器	杯	13.7	9.6	4.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．赤色酸化粒
1114	49	SE017	土師器	杯	13.4	8.6	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母
1115		SE017	須恵器	杯	12.9	7.7	4.2	灰 10Y4/1	暗灰黄 2.5Y4/2	微砂粒
1116		SE018	土師器	杯	13.5	9.0	3.5	明黄褐 5YR7/6	橙 5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1117		SE018	土師器	杯	13.6	8.1	3.9	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1118	51	SE028	土師器	椀	14.2	9.0	6.1	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1119	52	SE028	須恵器	杯	(13.8)	(9.6)	3.2	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	石英．砂粒
1120		SE029	土師器	杯	13.5	10.4	3.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母．赤色酸化粒
1121		SE029	須恵器	杯	9.0	6.0	3.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．赤色酸化粒
1122	53	SE030	土師器	杯	13.3	7.9	3.9	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母
1123		SE030	土師器	杯	11.2	7.5	2.9	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/8	雲母．微砂粒
1124		SE033	土師器	小皿	9.1	7.2	1.6	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1125	54	SE032	土師器	杯	13.0	8.3	3.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/3	長石．雲母
1126		SE032	土師器	杯	12.2	8.0	2.9	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母．微砂粒
1127		SE032	土師器	杯	12.9	8.7	3.0	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1128		SE032	土師器	杯	12.9	9.0	3.3	明赤褐 5YR5/6	にぶい橙 5YR6/3	長石．雲母．微砂粒
1129		SE032	土師器	杯	(13.0)	(8.0)	2.9	赤橙 10YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石．雲母．微砂粒
1130		SE032	土師器	杯	(12.8)	(7.8)	3.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1131		SE032	土師器	杯	(14.0)	8.7	2.8	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1132		SE032	土師器	杯	(12.4)	7.9	2.9	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1133		SE032	土師器	杯	13.3	7.9	2.8	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	長石
1134		SE032	土師器	杯	13.0	8.5	3.0	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	長石．雲母
1135		SE032	土師器	杯	12.6	8.0	3.2	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	長石．雲母
1136		SE032	土師器	杯	13.0	8.1	3.1	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	長石．雲母．微砂粒
1137		SE032	土師器	杯	12.4	9.1	3.1	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	雲母．微砂粒
1138		SE032	土師器	杯	13.0	8.3	2.9	橙 7 .5YR6/6	橙 7 .5YR7/6	長石．雲母
1139		SE032	土師器	杯	13.4	7.9	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒
1140		SE032	土師器	杯	(12.8)	(8.0)	3.0	橙 7 .5YR7/6	橙 7 .5YR7/6	雲母．微砂粒
1141		SE032	土師器	杯	12.8	8.6	3.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1142		SE032	土師器	杯	12.4	8.8	2.9	橙 7 .5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1143		SE032	土師器	杯	12.8	8.9	2.8	橙 7 .5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1144		SE032	土師器	杯	12.4	8.5	2.7	橙 7 .5YR7/6	橙 7 .5YR7/6	長石．雲母．微砂粒
1145		SE032	土師器	杯	13.6	8.0	2.8	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
1146		SE032	土師器	杯	12.5	6.7	3.2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．微砂粒
1147		SE032	土師器	杯	12.4	7.5	3.2	明褐灰 7 .5YR7/2	明褐灰 7 .5YR7/2	雲母．微砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面の一部にスス付着	1074
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1075
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	ヘラ切り後は未調整で粘土の塊	1076
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1077
横ナデ	横ナデ	ヘラ切後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1078
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1079
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1080
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	1081
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ナデ		1082
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ヘラ状工具によるナデ	板状圧痕	1083
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ後ヘラ状工具によるナデ	板状圧痕	1084
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1085
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	（灯明皿）　内面口縁端部油煙　板状圧痕	1086
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外器面に切り込みあり	1087
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1088
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	歪みあり　　板状圧痕	1089
横ナデ	横ナデ後ヘラミガキ	ヘラ切り後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ		1090
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内、外面にスス付着　板状圧痕	1091
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	口縁部から外底面にかけて黒斑	1092
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1093
横ナデ	横ナデ	糸きり	ナデ	側面に糸切り痕跡	1094
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1095
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1096
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1097
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1098
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内器面～内底面にかけて黒斑	1099
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1100
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外面の口縁部に赤彩	1101
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1102
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内面一部スス付着　内外面赤彩　　板状圧痕	1103
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	内外面赤彩　　外底面線刻	1104
横ナデ後回転ヘラミガキ	横ナデ後回転ヘラミガキ	ナデ後回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ	横ナデ後回転ヘラミガキ	内外面赤彩	1105
横ナデ後回転ヘラミガキ回転ヘラケズリ	横ナデ	ナデ後回転ヘラミガキ	ナデ後回転ヘラミガキ	内外面赤彩	1106
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1107
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1108
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	粘土巻上げによる剥離痕	1109
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ．ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1110
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	－	－	外面口縁部に重ね焼き痕	1111
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	同心円文	楕円状当て具痕	高台剥離	1112
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	摩滅　　内外面一部スス付着	1113
横ナデ	横ナデ	回転によるヘラケズリ	ナデ	内外面赤彩	1114
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	（高台付杯）	1115
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1116
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1117
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	外面赤彩	1118
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	赤焼け	1119
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1120
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後回転によるヘラケズリ	内外面赤彩	1121
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1122
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1123
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1124
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩（外底面除く）	1125
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1126
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内器面赤彩　組織痕	1127
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1128
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1129
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1130
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1131
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1132
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1133
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	外面砂付着	1134
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　内面外底面一部の黒斑	1135
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（外底面除く）	1136
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	焼き歪み	1137
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1138
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（外底面を除く）	1139
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1140
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	組織痕	1141
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	組織痕	1142
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	組織痕	1143
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	組織痕	1144
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（外底面徐く）	1145
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	焼き歪み　内外面赤彩（外底面除く）　組織痕	1146
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	組織痕	1147

遺物番号	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土
					口径	底径	残存高	外面	内面	
1148		SE032	土師器	杯	(13.0)	7.7	2.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．微砂粒
1149		SE032	土師器	杯	(13.4)	8.1	2.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母．微砂粒
1150		SE032	土師器	杯	13.6	8.4	3.1	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/4	雲母．微砂粒
1151		SE032	土師器	杯	13.4	9.0	3.1	黄橙 7.5YR7/8	橙 7.5YR6/6	雲母．微砂粒
1152		SE032	土師器	杯	(13.2)	(9.4)	3.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1153		SE032	土師器	杯	(13.4)	(9.0)	2.8	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR 6/3	長石．微砂粒
1154		SE032	土師器	杯	12.8	8.1	2.9	黄橙 10YR8/8	黄橙 10YR8/8	微砂粒
1155		SE032	土師器	杯	(12.8)	(8.4)	2.9	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．微砂粒
1156		SE032	土師器	杯	(12.8)	(8.4)	3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．雲母．微砂粒
1157		SE032	土師器	杯	(13.4)	(8.6)	3.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1158		SE032	土師器	杯	12.6	7.7	3.6	にぶい橙 5YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1159		SE032	土師器	杯	(14.4)	(9.2)	3.1	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
1160		SE032	土師器	杯	(13.2)	(9.0)	3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	雲母．微砂粒
1161		SE032	土師器	杯	(14.0)	(8.4)	2.4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母、微砂粒
1162		SE032	土師器	杯	(12.8)	(8.3)	2.8	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR7/4	長石．雲母．微砂粒
1163		SE032	土師器	杯	(13.0)	(8.8)	3.2	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．微砂粒
1164		SE032	土師器	杯	(12.8)	(8.1)	2.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母、微砂粒
1165		SE032	土師器	杯	(13.5)	(8.4)	2.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．雲母
1166		SE032	土師器	杯	(12.4)	(7.8)	2.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．微砂粒
1167		SE032	土師器	杯	(12.4)	(7.7)	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1168		SE032	土師器	杯	(12.3)	(8.4)	3.3	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	雲母．微砂粒
1169		SE032	土師器	杯	(13.6)	(9.3)	3.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1170		SE032	土師器	杯	(12.0)	(7.8)	3	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1171		SE032	土師器	杯	12.8	8.7	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒
1172	54	SE032	土師器	杯	(12.6)	7.4	3.1	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒．砂粒
1173		SE032	土師器	杯	12.2	8.2	3.1	橙 2.5YR6/8	橙 5YR6/8	長石．雲母．微砂粒
1174		SE032	土師器	杯	(13.2)	(9.0)	2.6	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1175		SE032	土師器	杯	(13.1)	(9.2)	2.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1176		SE032	土師器	杯	(13.0)	(9.0)	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．微砂粒
1177		SE032	土師器	杯	(13.2)	(9.2)	2	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．砂粒
1178		SE032	土師器	杯	(14.0)	(7.8)	2.9	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．砂粒
1179		SE032	土師器	杯	(12.4)	(8.8)	2.2	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石
1180		SE032	土師器	蓋	16.1	—	3.1	橙 2.5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1181		SE032	土師器	蓋	(14.6)	—	3.5	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	雲母．微砂粒
1182		SE032	土師器	蓋	(15.4)	—	2.9	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	雲母．微砂粒
1183		SE032	土師器	皿	(16.6)	(11.6)	1.5	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．雲母．微砂粒
1184		SE032	土師器	皿	(15.8)	(12.8)	2.6	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石．雲母
1185		SE032	土師器	皿	17.0	13.3	2.9	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	長石．雲母．微砂粒
1186		SE032	土師器	皿	17.1	11.3	1.6	橙 2.5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1187		SE032	土師器	皿	(16.0)	(11.8)	2	にぶい橙 5YR7/4	橙 2.5YR6/6	雲母．微砂粒
1188		SE032	土師器	皿	(16.2)	(12.0)	2.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1189		SE032	土師器	皿	(18.4)	(13.8)	2.5	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石
1190		SE032	土師器	盤	(24.6)	—	1.9	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．微砂粒
1191		SE032	土師器	椀	(15.6)	(8.1)	6.6	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	長石．雲母
1192		SE032	須恵器	蓋	(14.8)	—	2.4	褐 10YR6/1	褐 10YR6/1	長石．微砂粒
1193		SE032	須恵器	杯	—	(10.4)	1.7	青灰 5BG5/1	緑灰 10GY5/1	長石．砂粒
1194		SE032	須恵器	杯	—	(7.0)	3.1	暗青灰 10BG3/1	青灰 5BG3/1	微砂粒
1195		SE032	須恵器	杯	(12.2)	(8.0)	3.5	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石．砂粒
1196		SE032	須恵器	杯	(12.2)	(8.0)	3.5	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	雲母．砂粒
1197		SE032	須恵器	高杯	—	12.0	10.5	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	長石．微砂粒．砂粒
1198		SE035	土師器	小皿	10	7.5	2.2	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．石英．雲母 微砂粒．赤色酸化粒
1199		SE035	土師器	小皿	11.5	7.9	2.7	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．石英．雲母 微砂粒．赤色酸化粒
1200		SE035	土師器	小皿	10.7	6.8	2.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1201	55	SE035	土師器	小皿	9.9	7.6	2.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．雲母．赤色酸化粒
1202		SE035	土師器	小皿	10.4	7.2	2.6	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．雲母．赤色酸化粒
1203		SE035	土師器	杯	13.2	8.1	3.7	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母．微砂粒
1204		SE035	土師器	杯	13.2	8.1	3.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石．石英．赤色酸化粒
1205		SE035	土師器	杯	12.9	8.3	3.5	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石．微砂粒．赤色酸化粒
1206		SE046	土師器	杯	12.3	7.2	3.3	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	長石．雲母．微砂粒
1207		SE046	土師器	杯	12.6	8.1	3.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．石英．雲母
1208		SE046	土師器	杯	12.2	6.9	3.6	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石．角閃石．微砂粒
1209		SE046	土師器	杯	12.2	6.9	3.8	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．微砂粒．赤色酸化粒
1210		SE046	土師器	杯	12.6	7.4	3.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒
1211		SE046	土師器	杯	11.7	7.3	3.3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母
1212		SE046	土師器	杯	12.7	7.7	3.5	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	長石．雲母．赤色酸化粒
1213	58	SE046	土師器	杯	12.2	7.4	3.7	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	長石．微砂粒．赤色酸化粒
1214		SE046	須恵器	杯	12.8	7.3	3.5	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	雲母．微砂粒
1215		SE046	土師器	杯	12.7	6.7	3.7	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	長石、微砂粒．雲母
1216		SE046	土師器	椀	12.7	7	5.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	長石．雲母．赤色酸化粒
1217		SE046	土師器	椀	13.2	7.1	6.6	明黄褐 10YR 7/6	明黄褐 10YR 7/6	雲母．微砂粒
1218		SE046	土師器	椀	12.4	7.1	5.9	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	雲母．微砂粒
1219		SE046	土師器	椀	15.3	8.1	7.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．砂粒
1220		SE046	土師器	椀	13.8	6.7	5.2	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．角閃石．赤色酸化粒
1221	62	SI044	土師器	杯	(13)	8.6	3.5	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒
1222	64	SI056	土師器	杯	14.1	9.2	4	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．雲母．赤色酸化粒
1223		SI056	土師器	杯	(13.4)	7.1	3.6	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．赤色酸化粒
1224	68	SK007	土師器	蓋	18.0	—	3.3	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母．赤色酸化粒

Tab.33　出土遺物観察表（写真のみ）－③

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	組織痕　内外面赤彩	1148
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（外底面除く）　組織痕　板状圧痕	1149
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　内底面モミ痕	1150
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1151
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1152
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩 (内底面除く）	1153
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　組織痕	1154
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1155
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1156
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1157
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1158
横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ		1159
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　組織痕	1160
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	外面赤彩	1161
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1162
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　組織痕	1163
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1164
横ナデ	横ナデ	横ナデ後ナデ	横ナデ	内外面赤彩（底面除く）	1165
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1166
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（底面除く）	1167
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（底面除く）	1168
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1169
横ナデ	横ナデ	―	横ナデ	組織痕	1170
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1171
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　組織痕	1172
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1173
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1174
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	組織痕（ワラ）	1175
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	組織痕	1176
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1177
回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き		1178
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1179
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	―	―	内外面赤彩　外面の一部還元焔	1180
横ナデ．横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	―	―	内外面赤彩	1181
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	―	―	内外面赤彩、つまみ部分ヘラ記号	1182
横ナデ後ナデ	横ナデ後ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	焼き歪み	1183
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	焼き歪み　内外面赤彩（外底面除く）	1184
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1185
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（外面中心部除く）	1186
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1187
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1188
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	1189
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	（高台付盤）　内外面赤彩	1190
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	(高台付椀）　内外面赤彩	1191
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ後ナデ	―	―		1192
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	(高台付杯）　組織痕	1193
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1194
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	組織痕	1195
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ		1196
横ナデ	横ナデ	―	―	（脚部）（荒尾産）	1197
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	(灯明皿) 口縁端部、内外面に油煙付着	1198
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	(灯明皿) 口縁内外に油煙付着	1199
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	(灯明皿) 口縁端部内外に油煙付着	1200
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	(灯明皿) 口縁端部内面に油煙付着	1201
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	(灯明皿) 口縁端部内面に油煙付着	1202
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　底部を打ちかいている	1203
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	底部を打ちかいている	1204
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1205
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1206
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1207
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1208
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	1209
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩 (外底面を除く)　板状圧痕	1210
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩 (外底面を除く)	1211
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	板状圧痕	1212
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1213
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1214
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1215
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	1216
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	1217
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1218
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ	内外面赤彩	1219
ヘラ調整による横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1220
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1221
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1222
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1223
横ナデ．ナデ	横ナデ	―	―	内外面赤彩	1224

遺物番号	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土
					口径	底径	残存高	外面	内面	
1225	71	SK030	土師器	杯	12.8	9.2	3.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母．微砂粒
1226		SK030	土師器	杯	13.5	8.8	3.1	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母
1227	72	SK032	土師器	杯	11.6	8.5	2.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1228		SK032	土師器	杯	(12.6)	6.8	2.9	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．微砂粒．赤色酸化粒
1229		SK032	土師器	杯	(12.6)	8.0	3.1	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	角閃石．赤色酸化粒
1230		SK032	土師器	杯	11.6	7.4	3.2	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	角閃石
1231		SK032	土師器	杯	11.9	7.3	3.4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母．赤色酸化粒
1232		SK032	土師器	杯	13.0	6.5	3.7	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	石英．角閃石．雲母．微砂粒
1233		SK032	土師器	杯	(11.7)	7.1	3.3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	雲母．赤色酸化粒
1234		SK032	土師器	杯	11.8	7.3	3.3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1235		SK032	土師器	杯	12.4	7.6	3.3	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1236		SK032	土師器	杯	12.2	7.1	5.6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1237		SK032	土師器	杯	13.6	7.4	6.5	橙 5YRE6/6	橙 5YR6/6	雲母．赤色酸化粒
1238		SK032	土師器	皿	(12.6)	8.0	2.3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．微砂粒．赤色酸化粒
1239		SK032	土師器	皿	(11.9)	7.4	2.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒．赤色酸化粒
1240		SK032	土師器	皿	12.3	7.3	2.5	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
1241		SK032	土師器	皿	11.5	6.7	2.1	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	石英．雲母．赤色酸化粒
1242		SK032	土師器	皿	12.2	7.9	2.4	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	石英．雲母
1243		SK032	土師器	皿	13.0	7.9	2.4	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．角閃石．雲母 微砂粒．赤色酸化粒
1244		SK032	土師器	托	12.1	7.4	3.5	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1245		SK032	土師器	托	12.0	7.6	3.6	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	角閃石．赤色酸化粒
1246		SK032	土師器	托	13.7	7.9	4.4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1247		SK032	土師器	杯	12.5	6.8	3.8	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石．雲母
1248		SK032	土師器	皿	15.6	13.1	2.0	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
1249	73	SK039	土師器	杯	12.3	7.0	3.1	明黄褐 10YR 7/6	明黄褐 10YR 7/6	角閃石．雲母
1250		SK039	土師器	杯	12.6	7.2	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母
1251		SK039	土師器	杯	12.5	6.6	3.2	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	雲母．赤色酸化粒
1252		SK039	土師器	杯	12.3	7.4	3.2	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．赤色酸化粒
1253		SK039	土師器	杯	12.8	7.0	3.5	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
1254		SK039	土師器	杯	12.5	6.8	3.6	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	長石．雲母
1255		SK039	土師器	杯	12.5	7.3	3.6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1256		SK039	土師器	杯	(12.8)	(7.4)	3.8	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石．雲母．赤色酸化粒
1257		SK039	土師器	杯	(12.6)	6.6	3.9	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1258		SK039	土師器	杯	11.9	7.3	3.4	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母．微砂粒
1259		SK039	土師器	杯	12.8	8.3	3.6	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1260		SK039	土師器	杯	12.4	7.4	3.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	石英．微砂粒
1261		SK039	土師器	杯	12	7.1	3.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．雲母．微砂粒
1262		SK039	土師器	杯	12.6	7.0	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1263		SK039	土師器	杯	12.1	6.6	3.2	浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 10YR8/6	雲母．微砂粒
1264		SK039	土師器	坏	13.6	7.1	3.6	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石．角閃石．雲母 . 赤色酸化粒
1265		SK039	土師器	坏	12.4	7.2	3.4	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/4	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1266	76	SK059	土師器	小皿	7.1	5.5	1.7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．微砂粒
1267		SK059	土師器	小皿	7.0	5.4	1.6	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒．赤色酸化粒
1268	81	SX004	土師器	杯	13.4	9.6	3.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	石英．雲母．砂粒
1269		SX004	土師器	杯	13.8	9.6	3.0	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	角閃石．雲母
1270		SX004	土師器	杯	12.3	7.8	3.3	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	角閃石．雲母
1271		SX004	土師器	杯	14.9	9.0	3.7	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．砂粒
1272		SX004	土師器	杯	(13.2)	(9.3)	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．微砂粒
1273		SX004	土師器	杯	13.8	8.7	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1274		SX004	土師器	杯	13.1	9.6	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
1275		SX004	土師器	杯	(15.3)	(9.4)	3.6	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	石英．角閃石．雲母
1276		SX004	土師器	杯	11.9	7.5	3.1	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1277		SX004	土師器	杯	13.5	8.8	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	石英雲母
1278		SX004	土師器	杯	14.1	10.2	2.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母．微砂粒
1279		SX004	土師器	杯	12.8	8.4	3.5	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	角閃石．雲母
1280		SX004	土師器	杯	11.9	8.0	3.0	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	雲母．砂粒．赤色酸化粒
1281		SX004	土師器	杯	12.3	7.9	3.5	浅黄橙 10YR8/4	橙 7.5YR7/6	雲母．微砂粒．赤色酸化粒
1282		SX004	土師器	杯	12.4	7.5	3.5	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．砂粒
1283		SX004	土師器	杯	13.3	8.5	3.3	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	雲母．微砂粒
1284		SX004	土師器	杯	13.0	8.7	3.2	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	雲母．微砂粒
1285		SX004	土師器	杯	12.2	7.9	2.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．砂粒
1286		SX004	土師器	杯	12.6	8.4	3.3	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	長石．雲母
1287		SX004	土師器	杯	14.8	9.5	3.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．砂粒
1288		SX004	土師器	杯	12.8	7.6	3.1	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	角閃石．微砂粒．赤色酸化粒
1289		SX004	土師器	杯	12.3	8.4	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石．角閃石．雲母
1290		SX004	土師器	杯	14.9	9.5	4.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．雲母
1291		SX004	土師器	杯	13.1	8.9	3.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	石英．雲母
1292		SX004	土師器	杯	13.7	8.4	3.0	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母
1293		SX004	土師器	杯	(12.2)	8.1	2.9	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母
1294		SX004	土師器	杯	13.9	10.2	3.5	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石．雲母．微砂粒
1295		SX004	土師器	杯	12.6	7.6	3.2	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母
1296		SX004	土師器	杯	13.5	9.4	2.7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
1297		SX004	土師器	杯	16.4	8.6	4.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英．雲母．赤色酸化粒
1298		SX004	土師器	杯	12.5	7.6	3.2	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1299		SX004	土師器	杯	12.2	7.6	3.4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	長石．角閃石．雲母
1300		SX004	土師器	蓋	16.6	-	2.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母．赤色酸化粒
1301		SX004	土師器	皿	16.8	13.2	2.2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	角閃石．雲母
1302		SX004	土師器	皿	16.4	14.6	1.6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微砂粒．赤色酸化粒
1303		SX004	土師器	皿	16.8	12.6	3.4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母．微砂粒

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1225
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩（内外底面除く）	1226
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩（外底面除く）　板状圧痕	1227
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1228
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	1229
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	1230
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	1231
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		1232
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩　工具痕	1233
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩（外底面除く）	1234
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1235
横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ後ナデ	（高台付杯）内外面赤彩（外底面除く）　板状圧痕	1236
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	（高台付杯）内外面赤彩（外底面除く）	1237
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	板状圧痕	1238
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内面赤彩	1239
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1240
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1241
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内面赤彩　外面一部赤彩	1242
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧	1243
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ	内外面赤彩（外底面除く）	1244
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	1245
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩（外底面除く）	1246
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	口縁の内外面にスス付着　板状圧痕	1247
横ナデ後ヘラミガキ	横ナデ後ヘラミガキ	ヘラ切り後ヘラミガキ	横ナデ後ヘラミガキ	内外面赤彩（外底面除く）	1248
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩（内、外底面除く）	1249
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　内面にスス付着	1250
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	1251
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1252
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内外面赤彩	1253
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　油煙付着	1254
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　油煙付着	1255
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	1256
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1257
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1258
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1259
横ナデ	横ナデ後ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	(灯明) 内外面に油煙付着　内外面赤彩　板状圧痕	1260
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	(灯明) 内外面に油煙付着　内外面赤彩　板状圧痕	1261
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	(灯明) 口縁端部に油煙付着	1262
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	(灯明) 内外面に油煙付着　底部を打ちかいている	1263
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1264
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		1265
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		1266
横ナデ	横ナデ	糸切り	横ナデ．ナデ		1267
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面に赤彩	1268
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	板状圧痕	1269
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1270
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	外底面を除く内外面に赤彩	1271
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面に赤彩	1272
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面に赤彩	1273
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面に赤彩	1274
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1275
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ		1276
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	放射状の工具痕	1277
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面に赤彩	1278
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面に赤彩　板状圧痕	1279
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1280
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩痕　板状圧痕	1281
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1282
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	1283
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩痕　板状圧痕	1284
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	板状圧痕	1285
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	放射状の工具痕	1286
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		1287
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1288
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1289
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1290
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1291
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	板状圧痕	1292
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ		1293
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	内外面赤彩	1294
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	板状圧痕	1295
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内外面赤彩	1296
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1297
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩　板状圧痕	1298
横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ		1299
横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	-	-		1300
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ		1301
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	1302
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	外面赤彩の痕跡	1303

遺物番号	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土
					口径	底径	残存高	外面	内面	
1304	81	SX004	土師器	椀	13.8	8.2	5.9	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石．砂粒
1305		SX004	須恵器	蓋	15.6	–	1.7	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y5/1	雲母
1306		SX004	須恵器	杯	13.0	8.6	4.7	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	微砂粒
1307		SX004	須恵器	杯	(13.0)	7.6	4.4	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	雲母．微砂粒
1308		SX004	須恵器	杯	13.5	9.3	3.9	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	角閃石．雲母
1309		SX004	須恵器	杯	(13.0)	9.4	4.2	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	雲母．砂粒
1310		SX004	須恵器	杯	13.7	7.5	4.1	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	長石．石英．雲母
1311		SX004	須恵器	杯	(13.2)	(7.8)	3.2	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	長石．砂粒
1312		SX004	土師器	杯	12.3	8.3	3.1	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石．角閃石．雲母
1313		SX004	須恵器	椀	(13.4)	7.0	4.9	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	長石．石英．雲母
1314	73	SK039	土師器	杯	13.2	7.4	4.8	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英．雲母．微砂粒
1315	82	SX003	土師器	杯	13.4	8.3	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	雲母
1316		SX003	土師器	杯	13.5	8.6	3.0	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石．雲母．砂粒．赤色酸化粒

Tab.36　出土遺物観察表（写真のみ）－⑥

遺物番号	PL No.	遺構番号	種類	法量			色調		胎土	備考
				最大長 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	外面	内面		
1317	100	SD012	平瓦	8.9	2.2	144	にぶい黄橙 10YR7/3		長石．雲母	桶巻き作り
1318		SD012	平瓦	6.5	1.6	77	浅黄橙 10YR8/3		長石．石英．赤色酸化粒	桶巻き作り
1319		SD012	平瓦	6.4	1.8	90	灰黄 2.56/2		長石	桶巻き作り

遺物番号	Fig. No.	PL No.	遺構番号	種別	器種	法量（cm）				色調		胎土
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
1	193	88	調査区	須恵器	獣脚硯	–	–	–	(5.2)	灰 N6/	灰 N6/	白色粒 . 黒色粒
2		–	調査区	須恵器	蓋	(15.6)	–	–	2.3	灰 N5/	灰 5Y4/1	白色粒
3		–	調査区	土師器	杯	(13.6)	(9.8)	–	3.4	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	長石．赤色酸化粒

Tab.35　出土遺物観察表（写真のみ）－⑤

	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内外面赤彩	1304
	横ナデ．回転ヘラケズリ	横ナデ	–	–		1305
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ		1306
	横ナデ	横ナデ	ナデ	横ナデ．ナデ	外底面に重ね焼き	1307
	横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	内底、外底面に重ね焼き	1308
	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ	（高台付杯）	1309
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		1310
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		1311
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ．ナデ		1312
	横ナデ	横ナデ	不明	横ナデ	焼き歪み	1313
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	（高台付杯）内外面赤彩	1314
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内外面赤彩	1315
	横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ．ナデ	内外面赤彩　　内底面にスス付着	1316

Tab.37　第 14 次出土遺物観察表

	調整				備考	遺物番号
	外器面	内器面	外底面	内底面		
	削り．ナデ．刻み	–	–	–	獣脚硯（脚部）	1
	回転ヘラ削り．横ナデ	ナデ	–	–		2
	横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り	横ナデ	外底部にヘラ記号	3

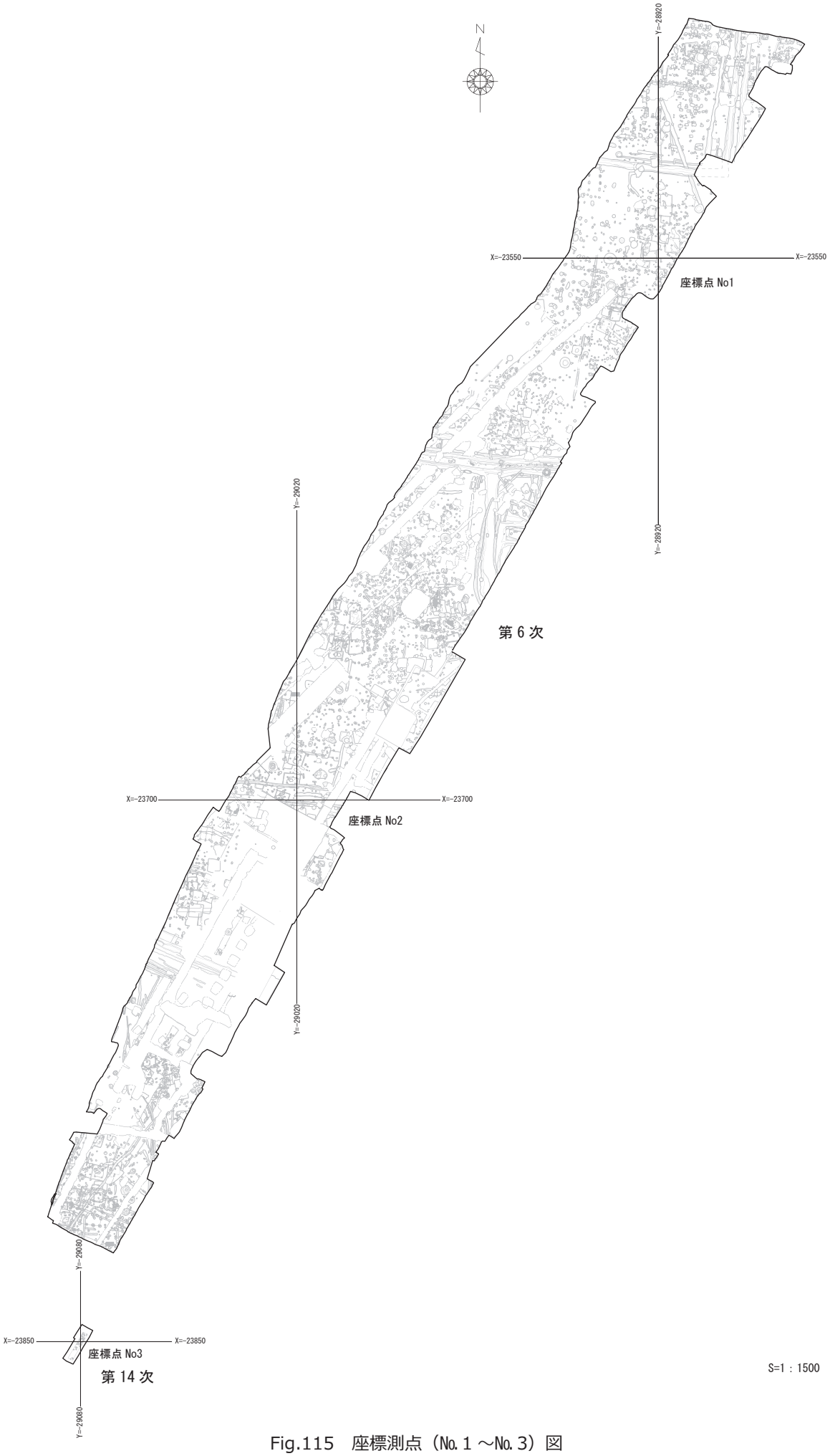


Fig.115　座標測点（No.1 ～No.3）図

報告書抄録

ふりがな	にほんぎいせきぐん（かすがちく）
書名	二本木遺跡群（春日地区）５
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２分冊）
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 271 集
編著者名	長谷部善一
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609　熊本県熊本市水前寺６丁目 18 番１号　℡．096-333-2706
発行年月日	2012 年３月 23 日
資料の保管場所	熊本県文化財資料室　〒 861-4215　熊本市城南町沈目 1677　℡．0964-28-4933

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第６次	熊本市春日３丁目 1015 番地	43 熊本県 201 熊本市	265	№.１ 360503.954	№.１ 1365802.392	20051107 ～ 20061226	12,700 ㎡	九州新幹線 建設工事
				№.２ 360503.954	№.２ 1365802.392			
第 14 次	熊本市春日３丁目	43 熊本県 201 熊本市	265	№.３ 360503.954	№.３ 1365802.392	20100720 ～ 20100802	20 ㎡	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第６次	集落 官衙	古代・中世 近世	竪穴建物、掘立柱建物、井戸、溝、墓、柱穴群	須恵器、土師器、陶器、磁器 瓦、石製品、青銅器、鉄製品	調査区北側の古代から中世にかけて形成された方形区画を持つ居館跡。区画内部に多数の掘立柱建物群を検出。また、古代の建物群を区画する溝内から二彩托、奈良三彩香炉獣脚などが注目される。
第 14 次	集落	古代	柱穴群	須恵器、土師器	

要　約	二本木遺跡群（春日地区）は、熊本市中央を西流する白川・井芹川・坪井川によって形成された緩扇状地上に立地する遺跡である。九州新幹線建設工事「新熊本駅」建設工事に伴い、平成 18 年・19 年度に熊本県教育委員会で発掘調査を実施した。（第６次調査） また、平成 22 年には新幹線開業後の一部非常用電源設備改築工事に伴い第６次調査区隣接地の発掘調査を実施した。（第 14 次調査） 主な検出遺構は第６次調査において８世紀中から後半にかけての竪穴建物群、８世紀後半から９世紀にかけての掘立柱建物群、10 世紀後半の土坑墓、14 世紀後半以降の方形区画内に配される掘立柱建物群がある。 本調査区で検出した８世紀後半から９世紀前半にかけての掘立柱建物群は、現在の熊本駅東側に位置する熊本市教委による第 13 次調査で検出されている大規模な遺構群とは違い、小規模な規格の掘立柱建物群が主となる。 14 世紀後半に位置づける方形区画遺構群は一辺の区画溝が 35 ｍを超え調査区外に延びていることからこの規模をもとに遺構の性格を考えると中世の居館となる可能性が高い。

本書の仕様

●判型　A4 判

●頁数　234 頁

●組版　13 級　MS 明朝体基本

adobe In DesignCS5.5（for Windows）

●印刷　オフセット印刷

●製版　本誌のモノクロ及びカラー写真はすべてスクリーン線数 200 線で製版

●用紙　表紙　上質紙 菊判 125 kg

巻頭カラー　特アート金藤 菊判 93.5 kg

本文 〔本文編〕上質紙 A判 44.5 kg 〔図版編〕ニューVマット A判 70.5 kg

●製本　糸かがり綴じ

●表紙加工　PP（ポリプロピレン）貼り

2012 年 3 月 23 日　印刷
2012 年 3 月 23 日　発行

熊本県文化財調査報告第 271 集
二本木遺跡群（春日地区）5
第 6 次・第 14 次調査
本文編

著作権所有　熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号
発　行　者　熊本県教育委員会
印　刷　者　熊本市出水 5 丁目 11 番 31 号
株式会社　協和印刷

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 271 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 二本木遺跡群（春日地区）
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日